朝来市

加都遗跡 II

〔本文。図版編〕

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ。一

2007年3月

兵庫県徽市委員会

加都遺跡Ⅱ

[本文・図版編]

一 一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 一



表紙:宮ケ田皿地区の住居群



南西上空からみた加都平野



北上空からみた加都平野



南上空からみた宮ヶ田川・新水北地区



北西上空からみた宮ヶ田Ⅲ・新水北地区



南西上空からみた宮ヶ田川地区



宮ヶ田Ⅲ地区の住居跡群



宮ヶ田Ⅲ地区の大畦畔(SSK001)



宮ヶ田Ⅲ地区の道路遺構(SFR001)



新水北地区の大畦畔(SSK1001)





古墳時代中期の土器(宮ヶ田Ⅲ地区)



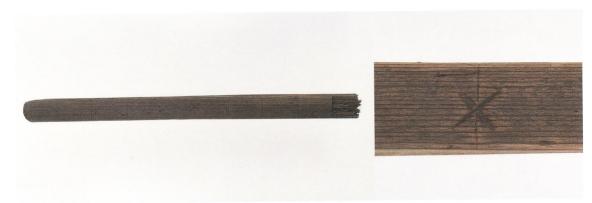
古墳時代後期の土器(宮ヶ田Ⅲ地区)







田下駄W119(新水北地区)



物差しW301(新水北地区)



- 1 本書は、朝来市和田山町加都・市御堂に所在する加都遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、播但連絡道路 (5期) 及び北近畿豊岡自動車道春日和田山道路 II 建設事業に関連する もので、それぞれ兵庫県道路公社、建設省近畿地方建設局豊岡工事事務所(平成13年4月1日以降は、 国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所)の委託を受けて、平成8~10年度に兵庫県教育委員 会が実施したものであり、本書は後者の調査結果を報告するものである。
- 3 出土品整理作業は、平成13~19年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
- 4 遺物写真撮影は、外部委託にて実施した。
- 5 本書の執筆は、本文目次に記したとおり分担し、編集は池田征弘が行った。
- 6 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
- 7 現地調査および整理作業の際には、関係各機関をはじめ、以下の方々から御協力や御教示をいただいた。御芳名を記して深謝の意を表する。

青木哲哉 (立命館大学)・岡本泰典 (岡山県古代吉備文化財センター)・木下 良(古代交通研究会)・木本雅康 (長崎外国語短期大学)・瀬戸谷晧 (豊岡市教育委員会)・高橋美久二 (滋賀県立大学)・谷本 進 (八鹿町教育委員会)・田畑 基 (朝来郡広域行政事務組合)・中久保辰夫 (大阪大学大学院)・中島雄二 (朝来郡広域行政事務組合)・松井敬代 (竹野町教育委員会)・宮本長二郎 (東北芸術工科大学)・宮本 博 (兵庫県立図書館)・山下信一郎 (奈良国立文化財研究所)・吉本昌弘 (龍谷大学)・渡辺晃宏 (奈良国立文化財研究所)

以上敬称略・五十音順・括弧内は当時の所属

凡例

- 1 本書で示す標高値は東京湾平均海水準(T. P.)を基とし、方位は座標北を指す。なお本地域は、 国土座標第・系に属す。経緯度は、世界測地系に基づく表示で、座標値は空中写真測量による測量 成果を、国土地理院が公開するプログラム「TKY 2 JGD」で世界測地系に変換したものである。
- 2 調査区の名称は、第2章以下において、第1図に示すとおり変更する。
- 3 遺物には通し番号を付けている。ただし土製品、木製品、石製品及び玉、金属製品には、その頭に それぞれC、W、S、Mをつけて、土器と区別している。また、付表として遺物の観察表を掲載するが、 本文頁、図版番号、写真図版番号を付したので参照されたい。
- 4 土器の実測図は、種別ごとに以下のように断面の表現を区別している。 土師器・弥生土器:白抜き/須恵器:黒塗り/陶磁器:濃い網掛け/瓦器・黒色土器:薄い網掛け
- 5 本報告にあたり調査時の遺構名称を整理した。ただし、掘立柱建物の柱穴の名称は調査時の呼称である。新旧遺構名の対象は付表1のとおりである。遺構名称はアルファベットによる略号と数字で表記する場合がある。遺構の種類と時期を意味するもので、略号の意味は以下のとおりである。

(種類) SA: 柵 SB: 掘立柱建物 SD: 溝 SF: 道路 SH: 竪穴住居 SK: 土坑 SX: 土壙墓・木棺墓 SP: 柱穴 SR: 旧河道 SS: 畦畔 SW: 芯材 SZ: 井堰

(時期) Y: 弥生時代 K: 古墳時代 R: 律令期 C: 中世

6 土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1992年版 を使用した。

本文目次

第1章	調査の)経過	1
	第1節	本発掘調査の経過と体制	1
		1. 概略······(甲斐昭光·池田征弘) ·····	1
		2. 宮ケ田D地区(甲斐・池田)	3
		3. 宮ケ田C地区(甲斐・池田)	4
		4 . 宮ケ田 D (2)地区(甲斐・池田)	4
		5. 新水北B地区(西口圭介)	4
	第2節	整理作業の経過と体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
第2章	調査の)結果	8
) -	第1節	遺 構	8
	214 = 44	1. 宮ケ田Ⅲ地区(池田征弘)	8
		2. 新水北地区(西口)	42
	第2節	遺 物	67
		1. 土器	67
		(1)縄文時代(池田)	67
		(2) 弥生時代(岸本一宏)	67
		(3) 古墳時代(池田)	71
		(4) 律令期(吉識雅仁)	93
		(5) 中世	94
		2. 土製品	98
		3. 木製品	99
		(1) 木簡/工具/農具/服飾具/食事具/容器/雑具/部材…(吉識)…	99
	•	(2) 文房具/祭祀具(西口)	114
		(3) 建築部材(岸本)	
		4 . 石製品	124
		5. 金属製品(仁尾一人)	124
第3章	自然和	科学的手法による分析	126
· · ·	第1節	and the second s	
	·	1.加都遺跡における樹種同定(株式会社古環境研究所)…	
		2. 加都遺跡出土木製品の樹種(パレオ・ラボ)	
		3.加都遺跡から出土した木製品の樹種 (パリノ・サーヴェイ㈱) …	
	第 2 節	加都遺跡の地形環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	145

第4章 まとめ

第1節	縄文・弥生時代		(池田)	••••••	159
第2節	古墳時代	•••••	(池田)		161
第3節	律令期		(池田)		177
第4節	中世·····		(池田)		181
		参考文献	•••••		191
		付表	•••••		193
		図版			
		報告書抄録			

卷頭図版目次

巻頭図版1

- 1 南西上空からみた加都平野
- 2 北上空からみた加都平野

巻頭図版 2

- 1 南上空からみた宮ケ田Ⅲ・新水北地区
- 2 北西上空からみた宮ケ田Ⅲ・新水北地区

巻頭図版3

- 1 南西上空からみた宮ケ田Ⅲ地区
- 2 宮ケ田Ⅲ地区の住居跡群

巻頭図版 4

- 1 宮ケ田Ⅲ地区の大畦畔 (SSK001)
- 2 宮ケ田Ⅲ地区の道路遺構 (SFR001)

巻頭図版 5

- 1 新水北地区の大畦畔 (SSK1001)
- 2 新水北地区の井堰 (SZK2001)

巻頭図版 6

- 1 古墳時代中期の土器(宮ケ田Ⅲ地区)
- 2 古墳時代後期の土器(宮ケ田Ⅲ地区)

巻頭図版7

- 1 須恵器高杯1019 (宮ケ田Ⅲ地区)
- 2 田下駄W119 (新水北地区)
- 3 物差しW301 (新水北地区)
- 4 蹴放しW324・W326 (新水北地区)

挿図目次

第1章 調査の経過		第4図	宮ヶ田Ⅲ地区地区割り図	8
第1図 本発掘調査位置図(1)	2	第5図	宮ヶ田Ⅲ地区全体図	9
第2図 本発掘調査位置図(2)	3	第6図	宮ヶ田Ⅲ地区集落部平面図・土層図	11
第3図 全体図	7	第7図	宮ヶ田Ⅲ地区水田部平面図	13
		第8図	宮ヶ田Ⅲ地区水田部土層図	14
第2章調査の結果				

第 9 図 水田部分基本土層模式図 42	• •	こおける微地形の分布… 147
第10図 新水北地区土層断面位置図 42		質断面図の位置 148
第11図 新水北地区地区割・サブトレンチ	• •	のトレンチ断面図 149
位置図43		の東壁断面図 151
第12図 AA'土層断面図44	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	トレンチ断面図 152
第13図 BB'土層断面図45		セクション断面図 153
第14図 CC' 土層断面図 46	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	南壁断面図······ 154
第15図 EE' 土層断面図47		ンチ断面図 156
第16図 下層断ち割り土層断面図 48	図10 桜地区の南壁	断面図 157
第17図 第1面遺構配置図51		
第18図 第2面遺構配置図59		
第19図 第3面遺構配置図64	第4章 まとめ	
第20図 第4面遺構配置図65		加都遺跡 160
第21図 新水北地区出土の縄文土器 67		加都遺跡 160
第22図 壺の型式分類71		土器(1) 162
第23図 甕の型式分類72	第31図 古墳時代の	土器 (2) 163
第24図 椀の型式分類72	第32図 古墳時代の	土器 (3) 164
第25図 高杯の型式分類72	第33図 古墳時代の	土器(4)165
第26図 須恵器の型式分類95		土器 (5) 166
第27図 土師器の型式分類 96	第35図 古墳時代の	土器(6) 167
	第36図 古墳時代の	加都遺跡 169
	第37図 宮ケ田地区	の集落変遷(1) 170
第3章 自然科学的手法による分析		の集落変遷(2) 171
第1節 加都遺跡(その1)出土木製品の		変遷175
樹種同定		都遺跡 178
2. 加都遺跡出土木製品の樹種		所面······ 18℃
写真図版:出土木製品・木材組織工学顕	第42図 文字関連の	遺物 180
微鏡写真(1)137	第43図 兵庫県のさ	代交通路 180
写真図版:出土木製品・木材組織工学顕	第44図 中世の土器	} 183
微鏡写真 (2)138	第45図 集落と条里	!地割り 185
3. 加都遺跡出土木製品の樹種	第46図 中世の桜地	<u> 186</u>
図版 1 木材144	第47図 中世の宮ケ	-田地区 187
第2節 加都遺跡の地形環境	第48図 朝来郡の郷	『と荘園 189
図1 調査地区周辺の地形分類図146		

表 目 次

第1章 調査の経過	2. 加都遺跡出土木製品の樹種
第1表 平成10年度調査担当者と	表 1 樹種同定結果一覧 134
請負・委託契約等 1	表 2 器種別にみた樹種の傾向 135
第2表 調査時期一覧 3	3. 加都遺跡出土木製品の樹種
第3表 枠材の柄孔間隔と足板横桟痕跡	表 1 樹種同定結果 139
間隔103	表 2 時代別・器種別木製品の樹種一覧 141
第3章 自然科学的手法による分析	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
第1節 木製品の樹種	第4章 まとめ
1.加都遺跡のおける樹種同定	第4表 古墳時代の竪穴住居跡一覧 174
表1 加都遺跡(その2)における樹	
種同定結果129	
<i>1</i> -1-	±
17	衣

付表 1 遺構名対照表

付表 2 出土遺物観察表

図版目次

図版 1	ウトロサルロの連供(1)	GTTT0 0.4			
	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(1)	SHY001		SHK039	
図版 2	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(2)	SBK002 ·	図版15	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(15)	SHK040
	SBK004		図版16	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(16)	SHK041
図版 3	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(3)	SBK003	図版17	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(17)	SHK042 ·
図版 4	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(4)	SHK029		SHK043	
図版 5	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(5)	SHK029	図版18	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(18)	SHK044
図版 6	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(6)	SHK030	図版19	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(19)	SHK044
図版 7	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(7)	SHK031A	図版20	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(20)	SHK045
図版 8	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(8)	SHK031B	図版21	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(21)	SHK046 ·
図版 9	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(9)	SHK031B ⋅		SHK047	
	SHK032		図版22	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(22)	SHK046 ·
図版10	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(10)	SHK033		SHK047	
図版11	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(11)	SHK034 ·	図版23	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(23)	SHK048 ·
	SHK036			SHK049	
図版12	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(12)	SHK035	図版24	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(24)	SHK050
図版13	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(13)	SHK037 ·	図版25	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(25)	SHK050 ·
	SHK038			SHK051	
図版14	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(14)	SHK038 ⋅	図版26	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(26)	SHK052A

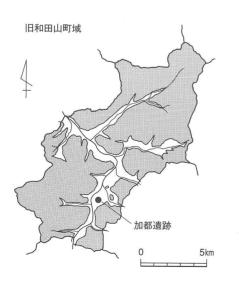
図版27	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(27)	SHK052B	図版58	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(58)	SSK003 ·
図版28	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(28)	SHK053 ·		SSK005 · SSR002	
	SHK055		図版59	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(59)	SSK004
図版29	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(29)	SHK054	図版60	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(60)	SFR001
図版30	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(30)	SHK056	図版61	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(61)	SFR001南部
図版31	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(31)	SHK057	図版62	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(62)	SFR001石敷部
図版32	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(32)	SHK058	図版63	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(63)	SFR001北端部
図版33	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(33)	SHK059	図版64	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(64)	SBC055
図版34	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(34)	SHK060	図版65	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(65)	SBC056
図版35	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(35)	SHK061	図版66	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(66)	SBC057
図版36	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(36)	SHK061	図版67	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(67)	SBC058
図版37	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(37)	SHK062	図版68	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(68)	SBC059
図版38	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(38)	SHK062	図版69	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(69)	SAC004
図版39	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(39)	SHK063 ·	図版70	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(70)	SKC016 ·
	SHK064 · SHK065			SKC017 · SKC018	
図版40	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(40)	SHK066	図版71	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(71)	SKC020
図版41	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(41)	SHK067	図版72	新水北地区の遺構(1)	中世水田面足跡
図版42	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(42)	SHK068	図版73	新水北地区の遺構(2)	SSK1001-
図版43	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(43)	SHK069 ·		SWK1009	
	SHK070		図版74	新水北地区の遺構(3)	SSK1001-
図版44	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(44)	SHK071		SWK1011	
図版45	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(45)	SHK072 ·	図版75	新水北地区の遺構(4)	SSK1001-
	SHK073			SWK1012	
図版46	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(46)	SHK074	図版76	新水北地区の遺構(5)	SSK1002-
図版47	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(47)	SHK075		SWK1001	
図版48	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(48)	SHK076	図版77	新水北地区の遺構(6)	SSK1002-
図版49	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(49)	SHK077 ·		SWK1006	
	SHK078		図版78	新水北地区の遺構(7)	SSK1003 ·
図版50	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(50)	SHK079		SSK2003木組	
図版51	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(51)	SHK080 ·	図版79	新水北地区の遺構(8)	SSK1010-
	SHK081 · SHK082			SWK1014 · SSK1016—	
図版52	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(52)	SHK083	図版80		SSK1012-
図版53	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(53)	SHK084		SWK1013 · SWK1016-	
図版54	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(54)	SHK085	図版81		SRK2001-
図版55	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(55)	SKK012 ·		SZK2001埋没状況	
	SHK013·SHK014·SHK0)15·SHK016	図版82		SZK2001(1)
図版56	宮ケ田Ⅲ地区の遺構(56)	SSK001南部	図版83		SZK2001(2)
図版57	′ 宮ケ田Ⅲ地区の遺構(57)	SSK001北部	図版84	新水北地区の遺構(13)	SZK2001(3)

図版 85	新水北地区の遺構(14) SZK2002・	図版120	0 木製品(10)	」 宮ケ田Ⅲ・新水北地区
	SZK2003	図版12	1 木製品(11)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 86	新水北地区の遺構(15) SHK2001	図版122	2 木製品(12)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 87	弥生時代の土器(1) 宮ケ田Ⅲ地区	図版123	3 木製品(13)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 88	弥生時代の土器(2) 新水北地区	図版124	4 木製品(14)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 89	古墳時代の土器(1) 宮ケ田Ⅲ地区	図版125	木製品 (15)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 90	古墳時代の土器(2) 宮ケ田Ⅲ地区	図版126	木製品(16)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 91	古墳時代の土器(3) 宮ケ田Ⅲ地区	図版127	水製品(17)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 92	古墳時代の土器(4) 宮ケ田Ⅲ地区	図版128	木製品(18)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 93	古墳時代の土器(5) 宮ケ田Ⅲ地区	図版129	木製品(19)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 94	古墳時代の土器(6) 宮ケ田Ⅲ地区	図版130	木製品(20)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 95	古墳時代の土器(7) 宮ケ田Ⅲ地区	図版131	木製品(21)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 96	古墳時代の土器(8) 宮ケ田Ⅲ地区	図版132	木製品(22)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 97	古墳時代の土器(9) 宮ケ田Ⅲ地区	図版133	木製品(23)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 98	古墳時代の土器(10) 宮ケ田Ⅲ地区	図版134	木製品(24)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版 99	古墳時代の土器(11) 宮ケ田Ⅲ地区	図版135	木製品(25)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版100	古墳時代の土器(12) 宮ケ田Ⅲ地区	図版136	木製品(26)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版101	古墳時代の土器(13) 宮ケ田Ⅲ地区	図版137	木製品(27)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版102	古墳時代の土器(14) 宮ケ田Ⅲ地区	図版138	木製品 (28)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版103	古墳時代の土器(15) 宮ケ田Ⅲ地区	図版139	木製品(29)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版104	古墳時代の土器(16) 新水北地区	図版140	木製品(30)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版105	古墳時代の土器(17) 新水北地区	図版141	木製品(31)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版106	古墳時代の土器(18) 新水北地区	図版142	木製品(32)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版107	古墳時代の土器(19) 新水北地区	図版143	木製品(33)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版108	律令期の土器・中世の土器(1)	図版144	木製品(34)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版145	木製品(35)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版109	中世の土器(2) 宮ケ田Ⅲ地区	図版146	木製品(36)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版110	中世の土器(3)・土製品 宮ケ田Ⅲ・	図版147	木製品(37)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
	新水北地区	図版148	木製品(38)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版111	木製品(1) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版149	木製品(39)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版112	木製品(2) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版150	木製品(40)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版113	木製品(3) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版151	木製品(41)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版114	木製品(4) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版152	木製品(42)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版115	木製品(5) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版153	木製品(43)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版116	木製品(6) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版154	木製品(44)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版117	木製品(7) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版155	木製品(45)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版118	木製品(8) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版156	木製品(46)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版119	木製品(9) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版157	木製品(47)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区

図版158	木製品(48)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版170	木製品(60)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版159	木製品(49)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版171	木製品(61)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版160	木製品(50)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版172	木製品(62)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版161	木製品(51)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版173	木製品(63)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版162	木製品(52)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版174	木製品(64)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版163	木製品(53)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版175	木製品(65)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版164	木製品(54)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版176	石製品(1)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版165	木製品(55)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版177	石製品(2)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版166	木製品(56)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版178	石製品(3)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版167	木製品(57)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版179	石製品(4)	宮ケ田Ⅲ地区
図版168	木製品(58)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版180	金属製品(1)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区
図版169	木製品(59)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区	図版181	金属製品(2)	宮ケ田Ⅲ・新水北地区







第1章 調査の経過

第1節 本発掘調査の経過と体制

1. 概略

建設省近畿地方建設局豊岡工事事務所は、山東町柴から和田山町市御堂までの約7.3㎞をむすぶ、一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路II事業を計画した。これは、朝来郡和田山町加都・市御堂において、兵庫県道路公社が計画する地域高規格道路である播但連絡道路北伸部分と和田山インターチェンジ(仮称)において接続し、但馬地方の産業や経済、都市生活機能のさらなる発展のための、広域交通を分担する役割をもつものである。

平成8年度に実施された確認調査の結果、約20万㎡に及ぶ調査対象地域のうち、約55,000㎡の全面調査が必要と判断された。この確認調査の結果をもとに行われた県教育委員会と県道路公社播但連絡道路建設事務所・建設省豊岡工事事務所との協議結果をふまえて、平成9・10年の2年度に、全面調査を実施した(第1図)。今回報告を行うのは平成10年度調査のうち兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所より依頼を受けて実施した山内北B地区の調査(『加都遺跡 I』報告済み)を除く、建設省豊岡工事事務所からの依頼を受けて調査を実施した部分についてである。

その後、本事業の延伸部にあたる一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴い、国道 312号を挟んで西側の部分について平成16・17年度に本発掘調査を実施している(第2図)。

平成 10 年度の調査体制 平成 10 年度の調査体制は以下のとおりである。

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所 長 寺内幸治

副所長 木下 猛(管理事務担当)/ 大村敬通(発掘調査担当)/ 岩本伸之(土木技術担当) 主任調査専門員 輔老拓治・池田正男(調査第2班長兼務)

総務課 課長 岩澤重則 / 主査 若林洋子

企画調整班 調査専門員 山本三郎 / 主査 高瀬一嘉

調査第2班 主査 吉識雅仁・岸本一宏・西口圭介・甲斐昭光 / 技術職員 池田征弘・

仁尾一人 / 臨時職員 戸田真美子 / 研修員 井本有二・松野健児・

佐々木俊彦(調査担当)

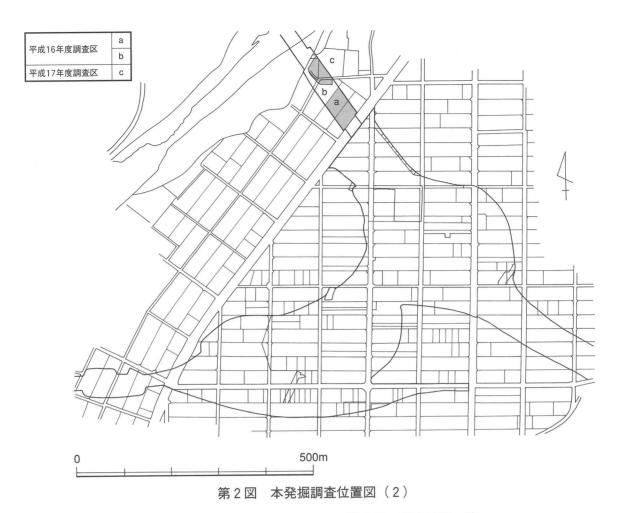
日々雇用 調査補助員 中村真也 / 現場事務員・室内作業員 木村智子・加門美智代・ 足立智美・友前里美・山本 薫・岡本厚子・西本真由美・秋森真由美・天野美千代・ 奥 和美・松岡京子

第1表 平成10年度 調査担当者と請負・委託契約等

地 区	調査担当者	発掘調査工事請負業者	空中写真測量委託業者	
 山内北B	吉識・仁尾・佐々木	株式会社川井組	アジア航測株式会社	
新水北B	岸本・西口・松野	株本建設工業株式会社	アジア航測株式会社	
宮ケ田C・宮ケ田D・宮ケ田D	甲斐・池田・戸田・	株式会社浅沼組神戸支店	ジェクト株式会社・	
(2)	井本	WAY HINIDAH / XA	大阪航空株式会社	



—2**—**



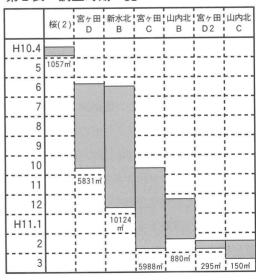
2. 宮ケ田D地区の調査(遺跡調査番号 980071)

調査区に東接するほ場への進入路が調査予定地内に 存在した。この代替えとなる通路の確保が不可能なた め、撤去ができず、最終的に調査区からこれを除外す ることとなった。

また、効率的な調査のためには、調査区を横断する 仮設用水路の撤去および先述の進入路の南北両端部の 付け替えを事前に行う必要があったが、それらの解決 をみないまま、6月10日、調査を開始した。

調査区を6分割し調査をすすめた。さらに遺物の取り上げや、細かい位置の限定をする場合には10m四方の地区割りを使用した。北から南東方向へ調査を進め

第2表 調査時期一覧



る予定であったが、進入路北端の付け替えの対象地(1区)を保留し、2区から調査を開始した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

平成10年6月10日(水) 機械掘削開始。

6月15日(月) 人力掘削開始。

9月22日(火) 台風7号接近、大雨強風波浪警報発令

```
9月28日(月) 調査結果の新聞記者発表
```

10月3日(土) 現地説明会開催、170名の参加を得る。

10月10日(土) 空中写真測量のための撮影、全景写真撮影。

10月21日(水) 工事検査受検。

3. 宮ケ田C地区の調査(遺跡調査番号 980153)

調査対象地は町道市御堂加都線の下(I区)、町道工業団地国道線の下(II区)、II区の南の田地(II区)に分かれる。町道部分については代替え道路の確保が必要なため、先に田地のIII区より調査を開始し、以後 II 区・I 区へと調査を進めた。調査の進捗に伴ってIII区と I・II 区の 2 回に分けて空中写真測量を実施した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

```
平成 10 年 10 月 23 日 (金) Ⅲ区機械掘削開始 (~11 月 5 日)。
```

11月4日(火) Ⅲ区人力掘削開始(~12月22日)。

11月18日(火) Ⅱ区機械掘削開始(~20日)。

11月24日(月) Ⅱ区人力掘削開始(~30日)。

12月2日(水) I区機械掘削開始(~10日)。

12月8日(火) I区人力掘削開始(~16日)。

12月10日(木) I区遺構検出。

平成11年1月5日(火) Ⅱ区遺構検出。

1月15日(金) Ⅲ区空中写真測量のための写真撮影。

2月18日(木) Ⅰ・Ⅱ区空中写真測量のための写真撮影。

4. 宮ケ田D(2)地区の調査(遺跡調査番号980234)

宮ケ田D地区に東接するほ場への進入路として仮設道が設置されていた。この部分については、ほ場への進入の確保や工事工程等との調整の結果、調査を行える期間が短いことからD地区で検出された遺構が仮設道下へ延びている部分5箇所についてのみ調査を実施した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

平成11年2月15日(月) 調査開始。

2月17日(水) 3~5区平板測量。

2月24日(水) 2区平板測量。

2月25日(木) 1区平板測量、調査完了。

5. 新水北B地区の調査(遺跡調査番号 980085)

新水北B地区は、平成8年度の確認調査において、農具を主とした古墳時代の木製品が多量に出土した地点であり、同時代の水田址の存在が推定された地点である。また、平成10年度に調査を実施し、古墳時代中期~後期の住居を多数検出した宮ケ田C・D地区は北西に隣接している。

調査対象範囲の北半部には東西方向に農道が通っている。このため、調査は農道より南側の9204㎡分を先行させ、農道下を含む北側の920㎡については迂回路の整備が整い、農繁期を過ぎた10月中旬より実施した。

調査は、確認調査の結果を踏まえ、現耕土及びほ場整備時の盛土・古代末〜近世にかけての水田土壌 及び洪水砂を機械力によって排除し、それ以下を人力によって掘削・精査を行った。

調査は平成10年5月12日に開始し、平成11年1月29日に終了した。なお、空中写真測量を2回、(第1回 平成10年10月23日 第1面・第2回 平成10年11月14日 第2面)、空中写真撮影を第4面において、平成10年12月4日に実施している。

第2節 整理作業の経過と体制

出土品整理は、発掘調査時に監督員詰所において土器(総数141箱)の水洗作業等の実施から開始した。 本格的な整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて平成13~18年度に行った。

1. 平成13年度の整理作業

遺物の水洗い、ネーミングおよび接合補強を以下の体制で実施した。

整理普及班 菱田淳子(工程管理担当)

整理担当職員 吉識雅仁・岸本一宏・西口圭介・甲斐昭光・池田征弘・仁尾一人・小川弦太 整理技術嘱託員 多賀直子・長谷川洋子・伊東ミネ子・家光和子・川上啓子・小林俊子・衣笠雅美・ 渡辺二三代・江口初美・喜多山好子・眞子ふさ恵・早川亜紀子・中田明美・ 前田千栄子・小寺恵美子・岡井とし子

また、木製品の保存処理を外部機関に委託して実施した。

2. 平成14年度の整理作業

土器・木器の実測を以下の体制で実施した。

整理普及班 菱田淳子(工程管理担当)

整理担当職員 吉識雅仁・岸本一宏・西口圭介・甲斐昭光・池田征弘・仁尾一人・小川弦太整理技術嘱託員 前山三枝子・藤川紀子・加藤裕美・又江立子

3. 平成15年度の整理作業

遺物の復元・木製品の保存処理を以下の体制で実施した。

整理普及班 菱田淳子(工程管理担当) · 中村弘(木製品保存処理担当)

整理担当職員 吉識雅仁・岸本一宏・西口圭介・甲斐昭光・池田征弘・仁尾一人・小川弦太 整理技術嘱託員 吉田優子・眞子ふさ恵・石野照代・中田明美・西野淳子・蔵幾子・大仁克子 また、木製品の樹種鑑定を外部機関に委託して実施した。

4. 平成16年度の整理作業

金属製品の実測、金属製品・木製品の保存処理を以下の体制で実施した。

整理普及班 村上泰樹(工程管理担当)・中村弘(木製品保存処理担当)・

岡本一秀(金属製品処理担当)

整理担当職員 吉識雅仁・岸本一宏・西口圭介・甲斐昭光・池田征弘・仁尾一人・小川弦太整理技術嘱託員 前山三枝子・栗山美奈・大前篤子・三島重美・藤井光代・高橋朋子

5. 平成17年度の整理作業

写真撮影・図面補正・トレースを以下の体制で実施した。

整理普及班 森内秀造(工程管理担当)

整理担当職員 吉識雅仁・岸本一宏・西口圭介・甲斐昭光・池田征弘・仁尾一人・小川弦太

整理技術嘱託員 前山三枝子・岡田美穂

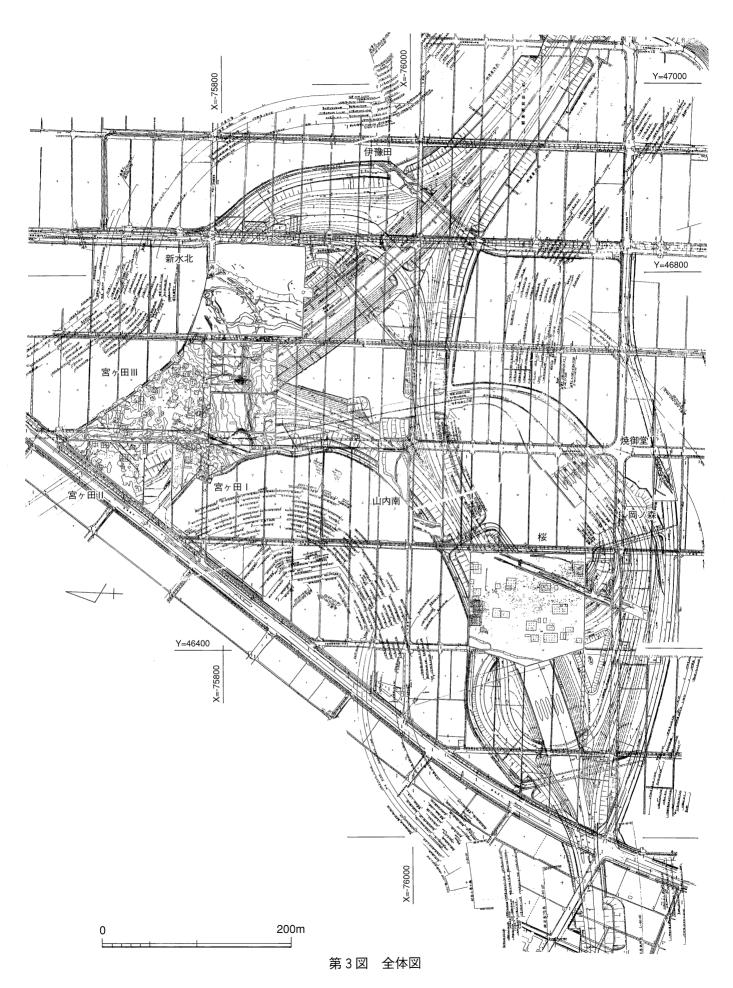
6. 平成18年度の整理作業

原稿執筆・レイアウト・編集作業を以下の体制で実施し、刊行に至った。

整理普及班 森内秀造 (工程管理担当)

整理担当職員 吉識雅仁・岸本一宏・西口圭介・甲斐昭光(兵庫県教育委員会文化財室)・ 池田征弘・仁尾一人(兵庫陶芸美術館)・小川弦太

整理技術嘱託員 前山三枝子・加藤裕美・古谷章子・杉本淳子・増田麻子・友久伸子・ 藤川紀子・豊田貞代・久保昭夫



第2章 調査の結果

第1節 遺構

1. 宮ケ田Ⅲ地区

(1) 概要

位置 宮ケ田Ⅲ地区は、現在の地番にいう加都字宮ケ田824~827、字新水982~984にあたり、宮ケ田 I・Ⅱ地区の東に隣接している。

地形的には、円山川が形成した扇状地上に位置している。調査区の南西方向から扇状地状の微高地が 北へ向かって広がり、東側には旧河道の流れる南北に延びる谷地形がある。調査区は微高地の東端付近 から谷地形から西側へ延びる支谷を含んでいる。

基本層序 旧中州にあたる段丘上の基本層序は、下から順に、中州を構成する礫、黄褐色砂質シルト、 黒褐色砂質シルト、圃場整備前の床土、圃場整備前の耕土、盛り土、圃場整備後の床土、圃場整備後の 耕土となっている。なお、黒褐色砂質シルトは、その下層の黄褐色砂質シルトの土壌化層(主に草本類の腐植によると思われる)である。

遺構の概要 北側の微高地部では弥生時代後期の竪穴住居跡、古墳時代中・後期の集落跡、律令期の 道路遺構、平安時代後期の集落跡が、南側の谷部では、古墳時代後期~中世の水田跡が検出された。水 田は部分的にではあるが土層断面で古墳時代後期・律令期・中世の3層を確認している。

弥生時代後期の竪穴住居跡は、調査区北部で残存状況が悪いものが1棟のみ検出されたのみである。

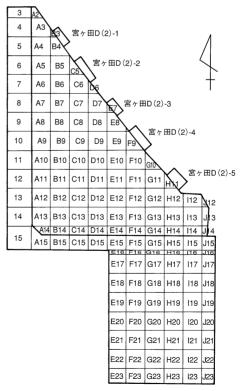
古墳時代中・後期は北部で集落跡や南部で水田が検出された。集落跡では、竪穴住居跡65棟(建て替えを含めて)、掘立柱建物跡 3 棟、土坑などが検出され、宮ケ田 I・II 地区の成果も合わせると長期に継

続した集落の変遷状況を知ることができる。竪穴住居 跡は南の谷部に近い部分で多く検出され、北に行くほ ど散漫になるようである。谷部の水田域では谷を南北 に区切る畦畔や等高線に沿って区切る畦畔が確認され、 土器や木製品が出土している。

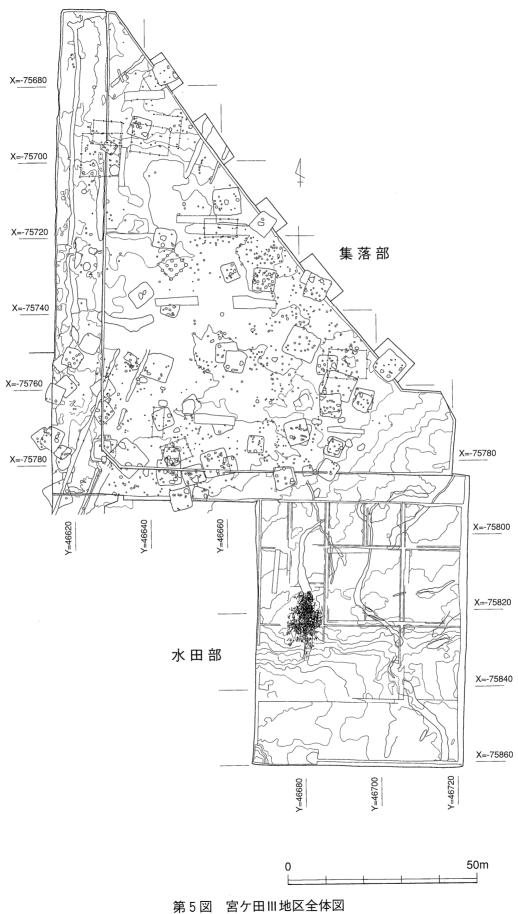
律令期は道路遺構、水田が検出された。道路遺構は宮ケ田 I 地区で検出された遺構に引き続くものである。側溝を両側にもち、条里地割りとは斜交して直線的に延びている。調査区内で一部削平された部分もあるが、延長107mにわたって検出することができた。谷部の水田域では引き続き畦畔が確認され、土器・木製品・木簡などが出土している。畦畔は谷部の南側にまで及んでいることから少なくとも律令期にはそこまで水田が及んでいたようである。

平安時代後期は、掘立柱建物跡 5 棟、柵列、ピット、 土坑、水田などが検出された。

地区割り 調査の工程管理のために、調査区を第4



第4図 宮ケ田Ⅲ地区地区割り図



図のように分割した。宮ケ田D地区部分では遺物の取り上げや、細かい位置の限定を行うために、東西線にアルファベット(A~J)、南北線に数字(2~14)を用いた10m四方の地区割りを使用した。宮ケ田C地区部分でも原則的にはD地区部分の区割りを踏襲し、南北線の数字(15~23)を追加したが、南北方向の農道下部分のみは数字(3~15)のみで区割りを行った。宮ケ田D(2)地区はそれぞれの地区に数字(1~5)を付けて区別した。

(2) 弥生時代の遺構

SHY001 (図版1、写真図版7)

検出状況 B $3 \cdot$ B4 区で検出された。全体に削平された部分が多く、東半の大部分はSHK083に切られている。

形状・規模 平面は長辺5.8m、短辺5.2~5.3m程度の長方形と考えられる。北壁側で最高約15cm残存していた。周壁溝は南半部でのみ検出した。幅は20~30cm程度で、深さは4~8cmである。住居内ではピットを4基検出したが、明瞭な主柱穴は検出していない。

出土遺物 弥生土器甕 (703・704)が西辺床面、弥生土器壺 (702)が埋土より出土している。

(3) 古墳時代の遺構

SBK002 (図版 2、写真図版 7)

検出状況 B13·B14·C13·C14区で検出された。SHK052A·052Bを切っている。

形状・規模 桁行 4 間 (7.0m)、梁行 3 間 (5.3m) の側柱建物である。柱間は桁行が $1.6\sim1.8\text{m}$ 、梁行が $1.7\sim1.8\text{m}$ である。建物の主軸方位は $N71^\circ$ Eである。

柱穴 柱穴の直径は30~40cmのものが多く、検出面よりの深さは20~30cmのものが多い。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SBK003 (図版3、写真図版8)

検出状況 B8·B9·C8·C9区で検出された。

形状・規模 桁行 3 間 (5.3m)、梁行 3 間 (5.1m) の総柱建物である。柱間は桁行が $1.7\sim1.9\text{m}$ 、梁行が $1.6\sim1.8\text{m}$ である。建物の主軸方位は $N46^\circ$ Eである。

柱穴 柱穴の直径は60~80cmのものが多い。柱穴の深さは20~30cmのものが多いが、4隅の柱穴は40 cm程度と深い。

出土遺物 柱穴より須恵器杯蓋 (1000) ・杯身 (1001)、土師器甕 (1002) が出土している。

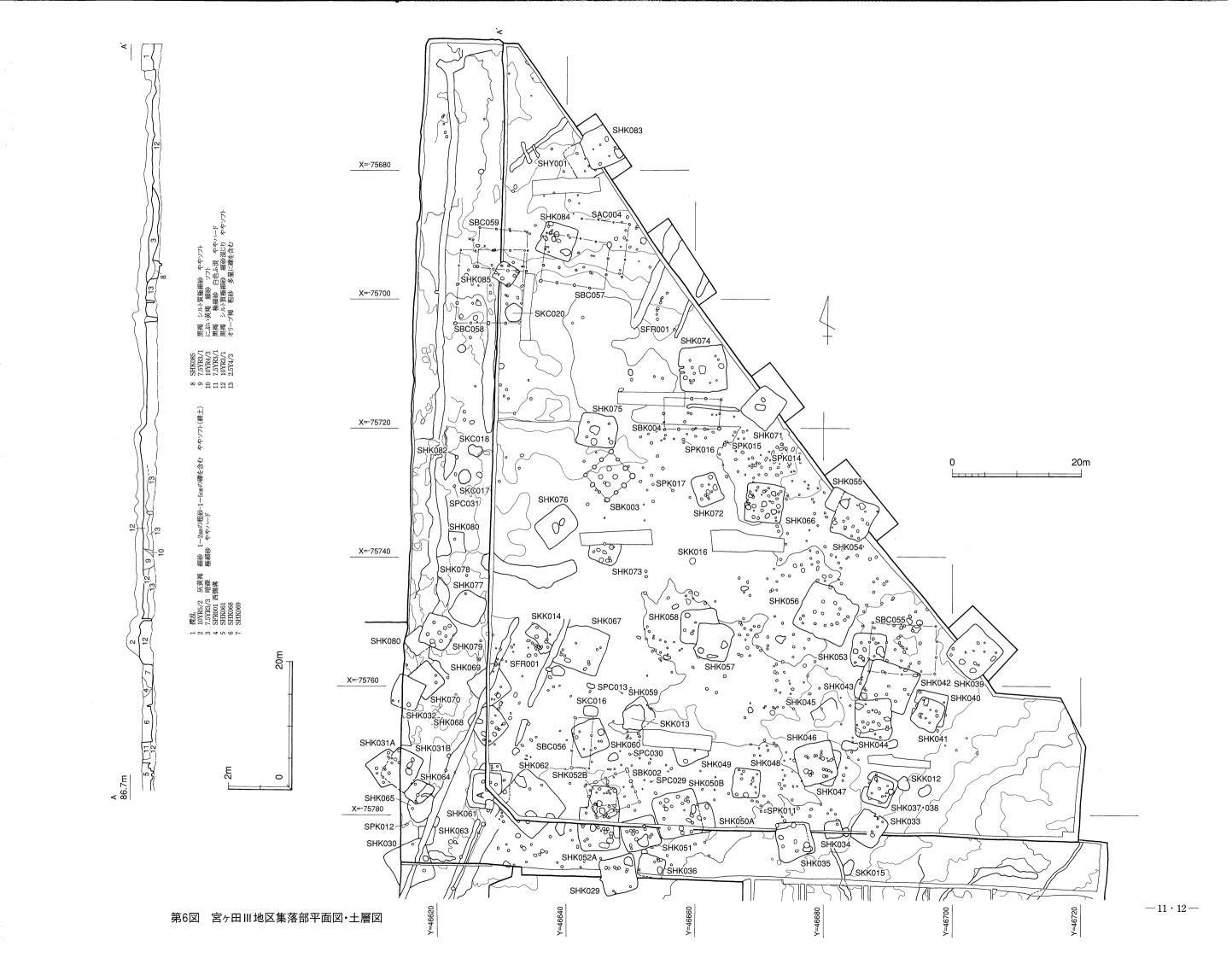
SBK004 (図版 2、写真図版 8)

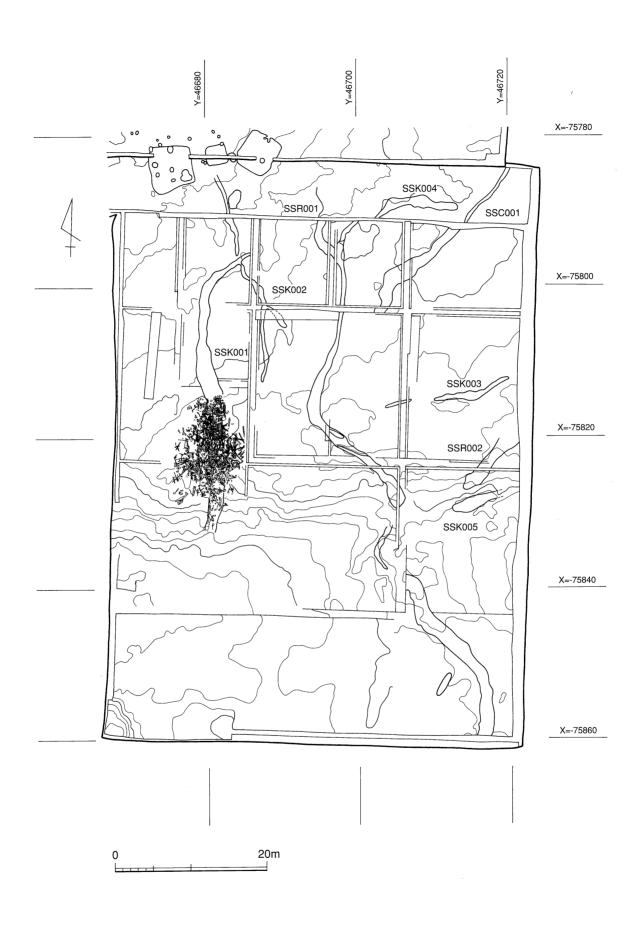
検出状況 C7・C8・D7・D8区で検出された。北西部の柱穴は確認トレンチの掘削により残存していない。

形状・規模 桁行 4 間 (8.3m)、梁行 2 間 (4.5m) の側柱建物である。柱間は桁行が $2.2\sim1.8\text{m}$ 、梁行が2.2mである。建物の主軸方位は $N88^\circ$ Wである。

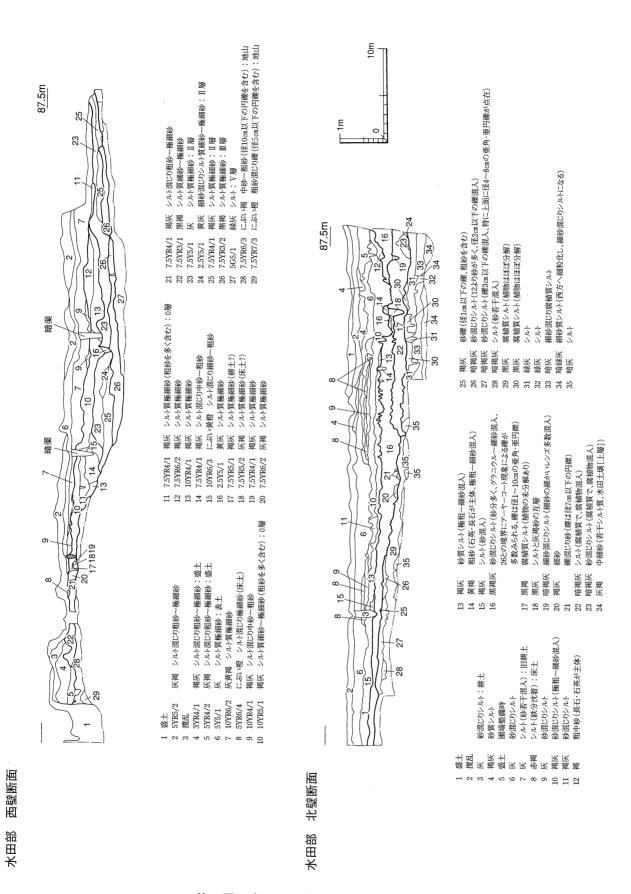
柱穴 柱穴の直径は40cmのものが多く、検出面よりの深さは14~38cmのものが多い。

出土遺物 柱穴より須恵器杯蓋(1003)が出土している。





第7図 宮ケ田Ⅲ地区水田部平面図



第8図 宮ケ田Ⅲ地区水田部土層図

SHK029 (図版 4·5、写真図版 9)

検出状況 B15・C15区及び宮ケ田I区で検出された。宮ケ田I区のSHK002を切っている。埋土は 黒褐色極細〜粗砂混じりシルトで、床面にはかなり多く炭化物が認められた。

形状・規模 短辺5.3m、長辺5.7mの竈をもつ方形竪穴住居跡である。深さは最高約20cm残存していた。南壁下から南西隅部にかけて幅約10cm程度の壁溝が設けられていた。

ピットは10基程度検出したが、明瞭な主柱穴は不明である。

竈は西壁中央に造りつけられている。袖は長さ80cm、高さ10cmほど残存している。焚口には石が立てられている。焚口床面と部分的に袖の内側面が被熱を受けている。煙道は最長で40cmほど屋外に伸ばされている。住居内の床面には被熱を受けた石材が残存しており、竃の構築材の可能性がある。

床面中央にはわずかに焼土が残存しており、炉の可能性が考えられる。

土坑は竃南側、東北隅に設けられている。竃南側の土坑(SK01)は長径70cm、短径55cmの平面不整形で、深さは床面より12 cmである。土師器甕(745)の完形個体が出土している。東北隅の土坑は長径1.4 m、短径1.2mの平面不整形で、深さは床面より10cmである。

出土遺物 床面から土師器高杯 (742)、カマドから土師器壺 (741)、SK01から土師器甕 (745)、埋土から須恵器高杯 (740)、土師器甕 (743、744) が出土している。

SHK030 (図版 6、写真図版10)

検出状況 15 区及び宮ケ田 I 区で検出された。SHK063を切っている。検出面は土壌が還元化しており、検出が非常に困難であったことから、異なった時期に行った調査区間で一部不整合な部分が存在する。

形状・規模 短辺6.2m、長辺6.4mの竈をもつ方形竪穴住居跡である。深さは最高約30cm残存していた。

ピットは4基程度検出したが、南側の2基を主柱穴とする4本柱と推定される。

竈は北壁中央に設けられている。袖は確認することができず、わずかに被熱の痕跡が確認されるのみである。被熱痕の側には径10cm弱の礫があり、支脚として使用された可能性がある。

土坑は東壁際中央に設けられている。長辺94cm、短辺80cmの平面長方形で、深さは床面より24cmである。

出土遺物 床面から土師器高杯 (746) ・土師器甑 (748)、埋土から土師器高杯 (747)、製塩土器が 出土している。

SHK031A(図版7、写真図版10·11)

検出状況 宮ヶ田 I 区で検出され、西北隅は14区にまで延びていると考えられるが、遺構は検出できていない。SHK031Bに切られている。

形状・規模 短辺4.7m、長辺4.9mの方形竪穴住居跡である。深さは最高約40cm残存していた。西壁より50~60cm内側に低い段が認められる、住居の拡張が行われた可能性が考えられる。住居の西南部では床面に炭化材や焼土が認められ、住居が焼失したものと思われる。

ピットは10基程度検出したが、南側の2基を主柱穴とする4本柱と推定される。

土坑は北壁際中央と西北隅に設けられている。北壁際中央の土坑(SK02)は長径56cm、短径50cmの平

面楕円形で、深さは床面より16cmである。土師器高杯の完形個体 (749) が出土している。 出土遺物 床面から土師器鉢 (750)、SK02から土師器高杯 (749) が出土している。

SHK031B (図版8・9、写真図版11)

検出状況 宮ヶ田 I 区及び14区で検出された。検出面は土壌が還元化しており、検出は非常に困難であり、調査も2回に分けて行われたため、現地では住居の形状をよくとらえることができなかった。南半部の埋土上層では礫がまとまって投げ込まれており、土器も比較的多く出土している。SHK031Aを切っている。

形状・規模 短辺4.9m、長辺5.8mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは最高36cm残存していた。 ピットは7基程度検出したが、明瞭な主柱穴は検出できなかった。

竈は北壁中央に設けられている。袖は検出できなかったが、支脚と考えられる長さ11cmの礫が立てられており、その周囲が被熱を受けている。

土坑は西北隅、竃南東側、中央東よりに設けられている。北壁際中央の土坑 (SK01) は長径65cm、短径55cmの平面楕円形で、深さは床面より12cmである。土師器高杯の杯部 (755・756) が出土している。竃南東側の土坑 (SK02) は長径106cm、短径70cmの平面楕円形で、深さは床面より24cmである。中央東よりの土坑 (SK03) は長径108cm、短径98cmの平面楕円形で、深さは床面より22cmである。

出土遺物 SK01から土師器高杯 (755・756)、上層礫群から須恵器高杯 (751)、土師器甕 (752・753、埋土から土師器高杯 (754)、土師器鉢 (757) が出土している。その他、SHK031Aと区別できない状態で出土した土器 (758~764)、砥石 (S 31) がある。

SHK032 (図版 9、写真図版11)

検出状況 宮ケ田 I 区及び13区で検出された。検出面は土壌が還元化しており、検出は非常に困難であった。調査時にはSHK070に切られていると判断したが、出土遺物から見るとSHK070を切っていると考えられる。

形状・規模 短辺4.3m、長辺5.0mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは最高30cm残存していた。 主柱穴は南側の2基を検出し、4本柱と考えられる。

竈は北壁中央に設けられている。被熱痕のみ検出し、袖は検出できなかった。

南東隅では焼土が検出され、土師器高杯(766)が出土している。

出土遺物 床面から土師器高杯 (766)、埋土から土師器甕 (765) が出土している。

SHK033 (図版10、写真図版12)

検出状況 F14・G14・F15・G15区で検出された。

形状・規模 短辺4.6m、長辺5.1mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは最高34cm残存していた。 主柱穴は東側の2基を検出しかできなかったが、4本柱と考えられる。

竈は北壁中央に設けられている。やや広い焼土面はよく焼けており、焼土より壁側に焼土粒を多く含む黒褐色土を積んだ馬蹄形の袖の一部が残存している。焼土の前面には燃料と思われる炭化物が広がっている。

炉は床面中央やや東側に設けられている。直径約40cmの平面円形で、深さは13cmである。内部はよく

焼けている。

出土遺物 床面から土師器高杯 (768・770)、埋土から土師器壺 (767)、土師器高杯 (769)、土師器 甑 (771) が出土している。

SHK034 (図版 11、写真図版 12)

検出状況 F14・F15で検出された。

形状・規模 短辺2.6m、長辺2.7mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは最高10cm残存していた。

ピットは住居内の東北部で1基検出したのみで、主柱穴は不明である。

出土遺物 埋土から土師器壺(772)・甕(773)・高杯(774)などが出土している。

SHK035A(図版12、写真図版12)

検出状況 $E14 \cdot E15 \cdot F14 \cdot F15$ 区で検出された。そのほとんどをSHK035Bに切られているため、 床面が残存しているのは西北部のごくわずかだけである。

形状・規模 短辺4.9m、長辺5.2mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは最高12cm残存していた。

ピットは住居内で3基検出したのみで、主柱穴は不明である。

土坑は北壁中央で検出され、南東隅で検出された土坑もその可能性がある。北壁中央の土坑は長径90 cm、短径75cmの平面楕円形で、深さは床面から14cmである。南東隅で検出された土坑は切れあっているが、SK02がSHK035Aに属すると思われる。平面は長方形気味の楕円形で、長径140cm、短径86cmで、深さは床面より30cm程度であったと推定される。

出土遺物 ほとんどをSHK035Bに切られているため、SHK035Aに明瞭に属する遺物はない。

SHK035B (図版 12、写真図版 12)

検出状況 E14·E15·F14·F15区で検出された。SHK035Bを切る。

形状・規模 1 辺4.8mの竈をもたない方形竪穴住居跡と考えられるが、南辺はややいびつである。深 さは最高25cm残存していた。

西壁側と北東隅部で幅約25cm程度の壁溝が設けられていた。

ピットは住居内で3基検出したのみで、主柱穴は不明である。

中央には長径58cm、短径46cm、深さ10cmの浅い土坑がある。明瞭な焼土や炭などは確認できなかったものの炉の可能性が考えられる。

南東隅で検出された土坑は切れあっているが、SK01がSHK035Bに属すると思われる。直径90cmの平面 円形で、深さは床面から25cmである。

出土遺物 床面から土師器壺 (776)・甕 (778・779)・高杯 (780)、埋土から土師器甕 (777)・高杯 (781・782) が出土している。

SHK036 (図版 11、写真図版 13)

検出状況 C15区で検出された。南辺は調査区南端に側溝を設けたため検出できなかった。

形状・規模 短辺4.1mの竃をもたない方形竪穴住居跡である。炉や土坑の位置からすると長辺は3.2 m程度と推定され、深さは最高10cm残存していた。

ピットは住居内で5基検出したが、主柱穴は不明である。

炉は中央やや東側に設けられている。東西40cm、南北25cmの範囲で被熱を受けている。

東壁際の土坑は長径120cm、短径85cmの平面不整楕円形で、深さは床面より12cmである。

出土遺物 埋土から土師器壺 (783)・高杯 (784)・甑 (785) が出土している。

SHK037 (図版 13、写真図版 13)

検出状況 $F13 \cdot F14 \cdot G13 \cdot G14$ 区で検出された。SHK037は、SHK038を造る時に埋められている。 形状・規模 短辺3.4m、長辺3.5mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高20 cm残存していた。

西壁側と北壁側で幅約20cm程度の壁溝が設けられていた。

主柱穴は4本で、SHK038と共用しているものと思われる。

炉は床面中央に設けられている。長径50 cm、短径35cmの平面楕円形の土坑で、深さは6 cmである。埋土には炭が堆積している。炉の周囲30~90cmの範囲には硬化面が存在している。

北西隅には土坑が造られている。長径55cm、短径40cmの平面楕円形で、深さは床面より11cmである。 出土遺物 埋土から土師器高杯(786)が出土している。

SHK038 (図版 13·14、写真図版 13)

検出状況 $F13 \cdot F14 \cdot G13 \cdot G14$ 区で検出された。SHK038はSHK037を埋め、拡張して造られている。SKK012を切っている。

形状・規模 短辺4.6m、長辺5.1mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高17cm残存していた。

主柱穴は4本で、SHK037と共用しているものと思われる。

竃は西壁中央に設けられている。壁より内側1.5m付近に焼土が認められた。袖はわずかに基盤部分が残存するのみである。袖間の幅は50cm程度である。

炉は床面中央に設けられている。直径50cmの平面円形の土坑で、深さは6cmである。炉内には被熱痕が認められる。

土坑は東壁際中軸線上(SK 01)に設けられている。長径85cm、短径78cmの平面不整楕円形で、深さは床面より20cmである。

住居の南西隅付近で台石が検出されている。

出土遺物 床面から土師器甕 (788)、SK01から須恵器高杯 (787)、埋土から製塩土器 (789) が出土 している。

SHK039 (図版 14、写真図版 14)

検出状況 H11区・宮ケ田D(2)-5区で検出された。

形状・規模 短辺6.5m、長辺7.0mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高30 cm残存していた。

周壁溝は北壁から西壁北半にかけて検出された。西壁側の溝はやや乱れているものの、おおむね幅20 cm程度である。

主柱穴は東側2本を検出したが、4本柱であったと考えられる。

土坑は東壁際中軸線上、南東部、北東部に設けられている。東壁際中軸線上の土坑は長径95cm、短径80cmの平面方形気味の楕円形で、深さは床面より30cmである。南東部の土坑は長径100cm、短径70cmの平面不整楕円形で、深さは床面より10cmである。北東部の土坑は長径100cm、短径50cmの平面不整楕円形で、深さは床面より7.5cmである。

硬化面は住居の中央やや北よりに位置している。長さ1.9m、幅0.8mの範囲で、住居跡中央のピットを北側から取り巻くように検出された。

出土遺物 埋土から土師器壺 (790)・高杯 (791・792) が出土している。

SHK040 (図版 15、写真図版 14)

には炭が散らばっていた。

検出状況 G12・H12区で検出された。SHK041を切っている。

形状・規模 1辺5.1mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高10cm残存していた。

主柱穴は3基検出したが、4本柱と考えられる。深さは西北が36cm、西南が27cm、東南が39cmである。 電は西壁中央に設けられている。壁より内側20~85cmの範囲で焼土が認められた。袖はわずかに基盤 部分が残存するのみで、盛り土の部分は残存していなかった。袖間の幅は45cm程度である。焼土の前面

炉は床面中央やや東よりに設けられている。焼土は東西30cm、南北20cmの範囲に広がっており、中央がわずか2cm程度くぼんでいる。

土坑は西北隅、西北主柱穴東側、西南主柱穴西側に設けられている。西北主柱穴東側と西南主柱穴西側の土坑はこの住居に伴うものかどうかは分からない。西北隅の土坑は長径58cm、短径42cmの平面楕円形で、深さは床面より14cmである。西北主柱穴東側の土坑は長径115cm、短径65cmの平面楕円形で、深さは床面より26cmである。西南主柱穴西側の土坑は長径60cm、短径34cmの平面楕円形で、深さは床面より28cmである。

出土遺物 埋土から須恵器杯蓋(793)、土師器甕(794)が出土している。

SHK041 (図版 16、写真図版 14)

検出状況 G12・H12区で検出された。SHK040に切られている。

形状・規模 長辺4.8m、短辺4.1mの竃をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高15 cm残存していた。

周壁溝は北壁の一部とその他3方の大部分で検出された。北壁の溝の幅は35cm程度であるが、その他の部分では幅50~70cmと広く検出されている。住居が拡張され溝が掘り直された結果によるものと考えられる。

主柱穴は6基検出した。当初2本柱のものが4本柱に建て替えられたものと考えられる。

炉は床面中央に設けられている。直径35cmの範囲に焼土が広がっている。

出土遺物 埋土から土師器高杯(795・796)・椀(797)・製塩土器(798)が出土している。

SHK042 (図版 17、写真図版14)

検出状況 F11・F12・G11・G12区で検出された。SHK043を切っている。

形状・規模 短辺6.9m、長辺7.2mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高23cm残存していた。

主柱穴は南東と西北の2基検出したが、4本柱と考えられる。

竈は西壁中央に設けられている。壁より内側40cm付近で焼土が認められたのみである。

土坑は西南隅、東北隅に設けられている。西南隅の土坑は長径110cm、短径90cmの平面不整形で、深さは床面より7cmである。東北隅の土坑は長径115cm、短径65cmの平面楕円形で、深さは床面より26cmである。西南主柱穴西側の土坑は長径75cm、短径50cmの平面楕円形で、深さは床面より8cmである。

出土遺物 埋土から須恵器杯蓋 (799~801)・杯身 (802~804)・壺蓋 (805)、土師器壺 (806)、管状 土錘 (C11) が出土している。

SHK043 (図版 17、写真図版 14)

検出状況 $F11 \cdot F12 \cdot G11 \cdot G12$ 区で検出された。SHK042に切られ、西端部が残存するのみである。 形状・規模 1 辺6.4mの竈をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高13cm残存していた。

主柱穴は南側の2基を検出したが、4本柱と考えられる。深さは西南が53cm、東南が26cmである。

電は西壁中央に設けられている。壁より内側30cm付近で焼土が認められ、袖は基盤部分の地山がわずかに盛り上がるのみである。袖間の幅は28cmである。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SHK044 (図版 18·19、写真図版 15)

検出状況 F12・G12 区で検出された。SHK042に切られる。

形状・規模 竈をもたない方形竪穴住居跡で、南側に拡張が行われている。拡張前をSH044A、拡張後をSH044Bとする。SH044Aは短辺4.8m、長辺5.6m、SH044Bは短辺5.6m、長辺6.1m、深さは検出面より最高13cm残存していた。

周壁溝はほぼ全周している。SH044Aの南壁側は幅 $15 \mathrm{cm}$ 、その他では幅 $30 \mathrm{cm} \sim 40 \mathrm{cm}$ 程度である。

SH044Aの主柱穴は2本柱、SH044Bの主柱穴は4本柱と考えられる。

床面では炉と考えられる焼土面が2ヶ所で認められた。柱位置のとの関係からすれば、東北部の焼土がSH044Aに、南部中央の焼土がSH044Bに属すると思われる。

土坑はSH044Aの西北隅(SK01)、SH044Bの西南隅(SK 02)、SH044Bの東壁際中軸線上(SK 03)に設けられている。SK01は長径130cm、短径110cmの西側に膨らんだ楕円形で、深さは床面より42cmである。SK02は長径120cm、短径95cmの平面不整楕円形で、深さは床面より11cmである。SK03は長径102cm、短径70cmの平面楕円形で、深さは床面より30cmである。その他、SK03の周りと中央付近とは不整形の浅い窪みとなっている。

SH044Bの埋土中には東南部と一部SK03上にかけて集中的に土器を多く含んだ焼土が認められたが、直接この住居が火を受けたものではないようである。

出土遺物 SK03から土師器壺 (810)、埋没時の焼土に伴って土師器甕 (809)・高杯 (812・813・815)、埋土から須恵器杯身 (807) ・壺 (808)、土師器壺 (811)・高杯 (814)、鳥形土製品 (C19)、縦櫛 (W

240) が出土している。

SHK045 (図版 20、写真図版 15)

検出状況 F12区で検出された。全体的に削平が大きく、南部はほとんど残存していない。

形状・規模 東西4.2mの竈をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高6cmしか残存していない。

ピットは1基のみ検出したが、主柱穴は不明である。

竈は北壁中央に設けられている。壁より内側50cm付近で焼土が認められるのみである。

炉は北壁より内側2.5mの中軸線上で検出された。径30cm程度の焼土面が広がっている。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SHK046 (図版 21 · 22、写真図版 16)

検出状況 E13・F13区で検出された。SHK047を切る。

形状・規模 短辺5.9m、長辺6.3mの竈をもつ方形竪穴住居跡である。深さは当初検出面より最高35 cmであったものが、床面を埋めて20cmと浅くされている。

主柱穴は 4 本柱 2 組を検出した。内側の組と外側の組に分かれる。下層床面からの深さは内側の組が $7\sim24$ cm、外側の組が $7\sim27$ cmである。

電は西壁中央に設けられている。南側の袖は住居掘削時のサブトレンチ設定により損壊してしまっている。残存する袖の高さは5cm程度であるが、焼土を多く含むシルト質極細砂を崩した状態になっており、形状はあまりよく分からない。

炉は上層床面と下層床面のそれぞれほぼ中央で検出された上層床面の炉は直径30cm、深さ10cmの浅い土坑で、その内面とその南側30cm程度が被熱を受けている。炉の周囲の長さ1.8m、幅1.2mの範囲と東側に少し離れた長さ0.8mの範囲では炭を多く含む層が広がっていた。下層床面の炉は東西30cm、南北20cmの範囲で焼土が認められた。

土坑は竃南側 (SK01) で検出された。SK01は直径80cmの平面円形で、深さは床面より26cmである。

出土遺物 床面から須恵器甕 (825) が出土している。埋土から須恵器杯蓋 (816~821)・杯身 (822・823)・高杯 (824)、砥石 (S32) が出土している。埋土からの出土遺物にはSHK047のものが含まれている可能性がある。

SHK047 (図版 21 · 22、写真図版 16)

検出状況 E13・F13区で検出された。SHK046に東南隅・東北隅を除く大部分を切られている。

形状・規模 長辺5.6mの方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高30cmである。

主柱穴は東西にずれて重なる 4 本柱 2 組を検出した。下層床面からの深さは西側の組が $10\sim21\,\mathrm{cm}$ 、東側の組が $13\sim24\,\mathrm{cm}$ である。

出土遺物 確実にSHK047に属する良好な遺物は出土していない。

SHK048 (図版 23、写真図版 16)

検出状況 D13·D14·E13·E14区で検出された。

形状・規模 短辺4.2m、長辺4.4mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高12 cmである。

ピットは住居内で11基検出したが、主柱穴は不明瞭である。

炉は床面中央で検出した。直径20cm、深さ4cmの浅い土坑で、その内面とその南側25cm程度が被熱を受けていた。

土坑 (SK01) は南壁際中軸線上で検出された。直径70cmの平面不整円形で、深さは床面より10cmである。

出土遺物 SK01から土師器甕(826・827)が出土している。

SHK049 (図版 23、写真図版 17)

検出状況 C13・D13区で検出された。北部を確認トレンチに切られている。

形状・規模 長辺5.0mの方形竪穴住居跡である。確認トレンチとの位置関係から短辺は3.2~3.5m程度と推定される。深さは検出面より最高25cmである。

ピットは住居内で1基検出したが、主柱穴は不明瞭である。このピットの深さは18cmである。

土坑 (SK01) は南西隅で検出された。直径70cmの平面不整円形で、深さは床面より40cmである。

出土遺物 床面から滑石製紡錘車(S33)、埋土から土師器高杯(828)が出土している。

SHK050A (図版 24 · 25、写真図版 17)

検出状況 C14・C15・D14・D15区で検出された。調査時には確認できなかったが、SHK050Bに切られていると考えられる。

形状・規模 短辺4.6mの竃をもたない方形竪穴住居跡である。主柱穴の位置関係から長辺は5.9m程度と推定される。深さは検出面より最高25cmである。

主柱穴は2本である。このピットの深さは15~20cmである。

土坑は北東隅 (SK01) で検出された。長径85cm、短径60cmの平面楕円形で、深さは床面より24cmである。

出土遺物 SK01から土師器壺 (829)、床面から土師器高杯 (831)、埋土から土師器高杯 (830) が出 土している。

SHK050B (図版 24 · 25、写真図版 17)

検出状況 $C14 \cdot C15 \cdot D14 \cdot D15$ 区で検出された。調査時には確認できなかったが、西半部をSHK 050Aに切られていると考えられる。

形状・規模 短辺6.8m、長辺6.9mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高30cmである。

主柱穴は4本柱である。深さは床面より20~37cmである。

竃は西壁中央やや北よりに設けられている。袖はまったく残存しておらず、西壁より内側1mに支脚として使われたと考えられる伏せた土師器高杯が置かれ、高杯より東側を取り巻くように焼土が残存していた。竃南側の壁際には竃を崩したときに生じた焼土が残存していた。

床面中央付近には焼土が4箇所残存していた。そのうち最も東側に位置するものは、深さ3cmの浅い

窪みで、確実に炉と考えられる。

土坑は東壁際中軸線上 (SK02) に設けられている。長径150cm、短径70cmの平面楕円形で、深さは床面より15cmである。

出土遺物 竃から土師器高杯 (838)、SK02から土師器甕 (837)、床面から須恵器高杯 (832)・腺 (835)、 土師器甕 (836)、埋土から須恵器高杯 (833・834)、土師器高杯 (540)・製塩土器 (841)・甑 (842) が出土している。

SHK051 (図版 25、写真図版 18)

検出状況 C14・C15区で検出された。

形状・規模 短辺4.9m、長辺5.6mの竃をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高17 cmである。

周壁溝は全周している。幅は $15\sim30$ cm、深さは $2\sim3$ cm程度である。

主柱穴は2本検出したが、4本柱と推定される。柱の深さは床面より東北が20cm、西南が13cmである。 炉は床面中央に設けられている。直径40cm、深さ3cmの浅い土坑で、底部北半と南側の縁が焼けている。

土坑は南壁際中軸線上 (SK01) で検出された。長径200cm、短径170cmの平面不整形であるが、東北部に突出した部分は主柱穴を含んでいるかもしれない。深さは床面より24cmである。

出土遺物 SK01から土師器高杯 (847・849)、床面から土師器壺 (845)、埋土から土師器壺 (843・844)・甕 (846)・高杯 (848) が出土している。

SHK052A (図版 26、写真図版 18)

検出状況 B14·B15·C14·C15区で検出された。SHK052Bを切り、SBK002に切られている。

形状・規模 短辺6.3m、長辺6.8mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高10cmである。

ピットは住居内で17基検出されたが、主柱穴は不明瞭である。

竃は西壁中央に設けられている。袖はわずかに基底部の地山が残存するのみで、袖間の幅は $45 \, \mathrm{cm}$ である。西壁より内側 $1.0 \, \mathrm{m}$ には焼土が認められ、 $70 \, \mathrm{cm}$ には支脚として使われたと考えられる伏せた土師器高杯(851)が置かれていた。

土坑は東壁際中軸線上 (SK01)・竃横 (SK02)・竃前 (SK03)・東南部 (SK04) などに設けられている。SK01は長辺推定約 $2\,\mathrm{m}$ 、短辺90 cm の平面隅丸長方形で、深さは床面より $13\,\mathrm{cm}$ である。SK02は径 $80\,\mathrm{cm}$ の土坑で、北半を側溝で切られている。深さは床面より $12\,\mathrm{cm}$ である。SK03は長径 $110\,\mathrm{cm}$ 、短径 $90\,\mathrm{cm}$ の平面不整形で、深さは床面より $17\,\mathrm{cm}$ である。SK04は長径 $160\,\mathrm{cm}$ 、短径 $80\,\mathrm{cm}$ の平面楕円形で、深さは床面より $20\,\mathrm{cm}$ である。

出土遺物 電から土師器高杯 (851)、床面から須恵器杯身 (850)、土師器高杯 (852・853) が出土している。

SHK052B (図版 27、写真図版 19)

検出状況 B13·B14·C13·C14区で検出された。SHK052A·SBK002に切られている。

形状・規模 東西4.0mの竈をもつ方形竪穴住居跡である。主柱穴と壁の位置関係から南北も4mと考えられる。深さは検出面より最高19cmである。

主柱穴は4本である。深さは14~51cmである。

竈は北壁中央に設けられている。右袖はサブトレンチにより外側を削られているものの高さ10cm程度 残存し、右袖の先端部には石が用いられている。左袖はほとんど残存しておらず、焼土のみが確認でき るのみである。袖間の幅は30cmである。北壁より内側50cmには支脚として利用されたと考えられる石が 残存している。

土坑は南壁際中軸線上(SK01)・北東隅(SK03)に設けられている。SK01は長辺推定 $90 \, \mathrm{cm}$ 、短辺 $80 \, \mathrm{cm}$ の平面長方形で、深さは床面より $18 \, \mathrm{cm}$ である。SK03は直径 $60 \, \mathrm{cm}$ の平面円形で、深さは床面より $20 \, \mathrm{cm}$ である。

出土遺物 SK03から土師器高杯 (855・856)、埋土から土師器甕 (854) が出土している。

SHK053 (図版 28、写真図版 19)

検出状況 F11・G11区で検出された。南東隅をSHK042・043に切られる。

形状・規模 短辺5.1m、長辺5.2mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高19 cmである。

周壁溝は北壁と東壁の一部の除き、ほとんどの部分で検出された。おおむね幅は30cm程度である。

主柱穴は4本である。深さは36~21cmである。

炉は床面中央やや東よりに設けられている。わずかに焼面が確認されるのみである。

土坑は東壁際中軸線上(SK01)・西壁際中軸線上(SK02)に設けられている。SK01は長径170cm、短径110cmの平面不整形で、深さは床面より20cmである。SK02は一辺70cmの平面方形で、深さは床面より20cmである。

出土遺物 SK01から土師器甕 (858)、埋土から土師器甕 (857)・壺 (859) が出土している。

SHK054 (図版 29、写真図版 20)

検出状況 $\mathbf{F}9 \cdot \mathbf{E}\mathbf{F}\mathbf{B}\mathbf{D}$ (2) $-4\mathbf{E}\mathbf{D}\mathbf{D}$ で検出された。調査時には十分確認できなかったが、 $\mathbf{S}\mathbf{H}\mathbf{K}\mathbf{D}\mathbf{D}\mathbf{E}\mathbf{D}$ 切ているものと思われる。

形状・規模 短辺5.8m、長辺6.0mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高20cmである。

主柱穴は東部で2基検出されたが、4本柱と考えられる。

電は西壁中央に設けられている。西壁より内側20cmに支脚として利用されたと考えられる伏せた高杯 (863) が残存していた。この高杯の前面には焼土が広がっている。西壁より内側90cmの位置には立石が 残存していた。竃の袖口の立石と考えられる。

土坑は竃の南側に設けられている。長径70cm、短径60cmの平面楕円形で、床面からの深さは19cmである。

出土遺物 竃から土師器高杯 (863)、床面から土師器甕 (861)・高杯 (862)、埋土から須恵器杯蓋 (860)、土師器高杯 (864) が出土している。

SHK055 (図版 28、写真図版 20)

形状・規模 短辺3.4mの竃をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高24cmである。

周壁溝は西壁で検出された。おおむね幅は30cm程度である。

ピットは住居内で1基検出されたのみで、主柱穴は不明である。

床面中央やや東よりには長1.5m、幅1.4m、深さ7cmの浅い土坑がある。その中央はさらに窪んでおり、炭・焼土などは確認していないが炉の可能性も考えられる。

出土遺物 埋土から土師器壺 (865)・高杯 (866) が出土している。

SHK056 (図版 30、写真図版 21)

検出状況 E10·E11·F10·F11区で検出された。

形状・規模 短辺7.2m、長辺8.5mの竈をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高14cmである。

主柱穴は西部と西北の3基を検出したが、4本柱と考えられる。深さは床面より12~19cmである。

電は西壁中央に設けられている。ほとんど残存しておらず、焼土の混じった土が散らばっていたのみである。

出土遺物 埋土から須恵器杯身 (867)、土師器甕 (868) が出土している。

SHK057 (図版 31、写真図版 22)

検出状況 D11区で検出された。北東部をSHK058に切られている。

形状・規模 短辺5.3m、長辺5.6mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高35cmである。

周壁溝は南壁中央付近のみで検出された。幅は40cm程度である。

土坑は西南隅 (SK01) と東壁際中軸線上 (SK02) に設けられている。SK01は長径90cm、短径80cmの平面方形気味の楕円形で、床面よりの深さは40cmである。SK01は底辺125cm、高さ90cmの平面2等辺三角形で、床面よりの深さは20cmである。

出土遺物 埋土から土師器甕 (869・870)・壺 (871)・高杯 (872~874)、敲石 (S26) が出土している。

SHK058 (図版 32、写真図版 21)

検出状況 D11区で検出された。SHK057を切っている。南東部のSH057の埋土を掘り込んで造られた部分については、中央の炉の部分を除いて住居の輪郭・床面の状況などを十分確認することはできなかった。

形状・規模 短辺5.1m、長辺5.4mの竈をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高20cmである。

ピットは住居内で4基検出されたが、主柱穴は不明瞭である。

竃は西壁中央に設けられている。西壁より内側50cmに支脚として利用されたと考えられる伏せた高杯

(880) が残存していた。この高杯の前面には焼土が広がっている。

炉は床面中央に設けられている。掘り込みはもたず、焼土が広がっている。

土坑は西北隅 (SK01) に設けられている。SK01は長径80cm、短径70cmの平面方形気味の楕円形で、床面からの深さは20cmである。

出土遺物 竃から土師器高杯 (880)、床面から土師器甕 (877)・高杯 (879・881)、埋土から土師器 高杯 (878)・椀 (882) が出土している。

SHK059 (図版 33、写真図版 22)

検出状況 C12区で検出された。南半部のほとんどはSKK013に切られ、北東部は削平により残存していない。

形状・規模 竈をもつ方形竪穴住居跡で、竈の位置からすると1辺4m程度と考えられる。深さは検出面より最高13cmである。

住居跡に属するピットは検出されていない。

竃は北壁中央に設けられている。北壁より内側30cmに支脚として利用されたと考えられる礫が立てられていた。袖の長さは壁より50cm、袖間の幅は50cmである。支脚の前面は強く焼け、袖部の盛土も部分的に焼けている。

出土遺物 床面から土師器甕 (883)、埋土から土師器高杯 (884) が出土している。

SHK060 (図版 34、写真図版 23)

検出状況 B12・13区で検出された。

形状・規模 短辺5.0m、長辺5.1mの竃をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高25 cmである。

周壁溝は北壁と西壁で一部検出されなかった部分があるが、ほぼ全周している。幅は30cm程度である。 住居内でピットは3基検出したが、明瞭な主柱穴は存在しない。

土坑は東壁際中軸線上 (SK03) と西壁際 (SK02) に設けられている。SK02は長径60cm、短径55cmの平面不整楕円形で、床面よりの深さは43cmである。SK03は一辺68cmの平面方形で、床面よりの深さは12cmである。

床面中央付近では炭がまとまって検出されており、炉が存在した可能性がある。

硬化面は床面中央付近の炭の西側とSK03の西側で検出された。

床面中央には短辺1.6m、長辺2.4mの大きな浅い窪み(SK01)があるが、黄色土で埋められており、住居使用時には埋められていたと考えられる。

出土遺物 床面から土師器壺 (886) ・高杯 (887~890)、埋土から須恵器杯蓋 (885) が出土している。

SHK061 (図版 35・36、写真図版 23)

検出状況 $14 \cdot 15 \cdot A13 \cdot A14 \cdot A15$ 区で検出された。北側中央から南東部にかけて宮ケ田 $C \cdot D$ 地区の境界の側溝が通り、南東部をSHK062と土坑に切られている。 $A \sim E$ の5 段階に分かれ、4 回の建て替えが考えられる。 $B \sim E$ よりやや北側にずれるA、大きく拡張された $B \cdot C$ 、 $B \cdot C$ の西よりに縮小された

D·Eの大きく3段階に分かれる。

形状・規模 A~Eとも竃をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面よりAが10cm程度、その他は最高23cmである。規模はAが短辺3.2m、長辺3.6m、Bが短辺5.2m、長辺5.6m、Cが短辺6.0m、長辺6.2m、Dが短辺3.6m、長辺3.9m、Eが短辺4.5m、長辺4.9mである。

周壁溝はいずれの住居跡もほぼ全周しているものと思われる。

主柱穴は住居内でピットは7基検出されたが、明瞭な主柱穴は検出できていない。

床面では焼土が3ヶ所とD・Eの中心で浅い土坑(SK04)が検出されている。炉の可能性が考えられる。 土坑はCの東壁際中軸線上(SK01)とAの南壁際中軸線上(SK03)に設けられている。SK01は長辺70cm、 短辺58cmの平面長方形で、床面よりの深さは14cmである。SK01は長辺49cm、短辺43cmの平面不整形で、 床面よりの深さは27cmである。

出土遺物 Eの周壁溝から土師器甕 (892)、床面から土師器甕 (891)、埋土から土師器高杯 (893) が 出土している。

SHK062 (図版 37·38、写真図版 24)

検出状況 A13・A14・A15・B13・B14・B15区で検出された。東北部から南部にかけて宮ケ田C・ D地区の境界の側溝が通っている。SHK061を切っているが、SHK061上に当たる部分は竈を除いて十分 に検出できなかった。

形状・規模 短辺7.6m、長辺8.6mの竈をもつ方形竪穴住居跡で、当遺跡中最大の住居跡である。深 さは検出面より5cm程度である。

主柱穴は4本柱で、深さは15cm程度である。

電は北壁中央に設けられている。左袖のみわずかに残存しており、高さは5cm程度である。北壁より内側60cmに焼土が残存している。竃の上には竃を崩した時に生じた焼土が7cm程度の厚さで残っており、その上に須恵器杯身が2個置かれていた。住居廃絶時の祭祀行為と考えられる。

炉は床面中央に設けられている。直径30cmの範囲が焼けており、中央が5cm程度くぼんでいる。

土坑は 電東側 (SK01)、南西主柱穴内側 (SK02)、南壁際中軸線上やや東より (SK03) に設けられている。SK01は長径2.2m、短径1.4mの不整長楕円形の範囲が浅く窪んでいる。その南よりの部分が長径100cm、短径80cmの平面楕円形の部分が深く窪み、床面よりの深さは30cmである。SK02は長径1.7mの平面不整楕円形で、深さは床面より36cmである。SK03は直径1.3mの平面円形で、深さは床面より52cmである。

出土遺物 電から須恵器杯身 (897・900)、床面から土師器甕 (905)、埋土から須恵器杯蓋 (894)・ 杯身 (895・896・898・899・901)、土師器壺 (902・904)・甕 (903) が出土している。

SHK063 (図版 39)

検出状況 15区で検出された。SHK030に切られている。土壌が還元していたため、検出は困難であり、屋内施設も確認できなかった。

形状・規模 短辺2.4m、長辺2.7mで、平面はややいびつな長方形である。深さは検出面より最高10cmである。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SHK064 (図版 39、写真図版 24)

検出状況 14・15区で検出された。SHK065を切っている。土壌が還元していたため、検出は困難で、 竪穴住居かどうかも不明確である。

形状・規模 短辺3.1m、長辺3.5mで、平面はややいびつな隅丸長方形である。深さは検出面より最高25cmである。

ピットを3基検出したが、明瞭な主柱穴は検出していない。

土坑は住居内の東半部 (SK01) で検出されている。平面は不整形で、大きく南北に分かれている。深さは床面より10cmである。

出土遺物 SK01より須恵器壺 (906)、土師器甕 (907) が出土している。

SHK065 (図版 39)

検出状況 14・15区で検出された。SHK064に切られている。土壌が還元していたため、検出は困難で、竪穴住居かどうかも不明確である。

形状・規模 短辺3.8m、長辺4.7mで、平面はかなりいびつな隅丸長方形である。深さは検出面より 最高10cmである。

ピットを1基検出したが、明瞭な主柱穴は検出していない。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SHK066 (図版 40、写真図版 25)

検出状況 D9·E9区で検出された。

形状・規模 短辺5.9m、長辺6.0mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高23cmである。

周壁溝は西壁の南半とその他3方の中央部で検出された。幅は30cm程度である。

主柱穴は4本柱で、床面からの深さは西側の2本が10cm前後であるが、東側の2本は35cm前後と深い。 竃は西壁中央に設けられている。袖は右袖で長さ70cm、高さ10cmほど残存している。袖間の幅は30cm である。西壁より40cm内側には支脚として使われたと考えられる土師器高杯(915)が伏せて置かれている。

炉は床面中央に設けられている。直径90~80cm、深さ10cm弱の浅い土坑の中央が焼けている。

土坑は竃南側(SK01)、西壁際中軸線上(SK02)に設けられている。SK01は長径90cm、短径70cmの平面楕円形で、床面からの深さは20cmである。SK02は直径60cmの不整円形で、床面からの深さは20cmである。

出土遺物 竃から土師器高杯 (915)、埋土から須恵器杯蓋 (908)・杯身 (909)、土師器壺 (910)・甕 (911・912)・高杯 (913・914)・甑 (916)、砥石 (\$30) が出土している。

SHK067 (図版 41、写真図版 25)

検出状況 B11・12区で検出された。

形状・規模 短辺5.9m、長辺6.0mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高14cmで

あるが、検出面が礫の多い層であったため、貼り床部分の土をやや深く掘りすぎており、本来の床面は 検出面とほぼ同じくらいの高さであったと思われる。

主柱穴は南側の2本を検出したが、4本柱であったと考えられる。床面からの深さは20cm前後である。 竃は西壁中央に設けられている。完全に壊されており、わずかに焼土が散布するのみである。

炉は床面中央に設けられている。2ヶ所の焼土塊を確認することができた。

出土遺物 埋土から須恵器杯身(917)、土師器甕(918・919)が出土している。

SHK068 (図版 42、写真図版 26)

検出状況 13・14・A12・A13区で検出された。住居跡中央を南北にかけて宮ケ田C・D地区の境界の側溝に切られている。

形状・規模 短辺5.0m、長辺5.2mの竃をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高23cm である。

周壁溝は東壁でのみ検出された。おおむね幅は30cm程度である。

ピットは住居跡内で8基検出したが、主柱穴は不明瞭である。

土坑は南壁際中軸線上 (SK01)、北西部 (SK02) に設けられている。SK01は直径65cmの平面不整円形で、床面からの深さは17cmである。SK02は長径1.6m、短径70cmの平面長楕円形で、南端のみ1段深く下がっている。

床面南部では棰状の炭化材が残存していた。

出土遺物 SK01から土師器甕 (920)、埋土から土師器高杯 (921・922) が出土している。

SHK069 (図版 43、写真図版 26)

検出状況 13・A12区で検出された。住居跡中央を南北にかけて宮ケ田C・D地区の境界の側溝とSFR 001の東側溝に切られている。

形状・規模 短辺5.3m、長辺5.4mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高28cm である。

周壁溝は断続的ではあるものの四壁とも検出された。おおむね幅は30~40cm程度である。

ピットは住居跡内で6基検出したが、主柱穴は不明瞭である。

土坑は南壁際中軸線上 (SK01) に設けられている。SK01は長径70cm、短径50cmの平面不整楕円形で、 床面よりの深さは24cmである。

床面中央から南部にかけて硬化面が検出されている。

出土遺物 ピットから土師器高杯(923)が出土している。

SHK070 (図版 43、写真図版 27)

検出状況 12区で検出された。SHK032に切られている。

形状・規模 短辺4.3m、長辺4.4mの篭をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高6cm である。

ピットは住居跡内で1基検出したが、主柱穴は不明瞭である。

住居内の東北部では棰状の炭化材がわずかに残存し、床面も被熱を受けている。

出土遺物 埋土から土師器壺(924)が出土している。

SHK071 (図版 44、写真図版 27)

形状・規模 短辺4.9m、長辺5.5mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高6cm である。

住居内でピットは検出していない。

土坑は住居の中央付近(SK01)で検出した。SK01は長径150cm、短径85cmで、東部がやや深く窪んでおり、床面からの深さは15cmである。位置的に炉の可能性が考えられるが、埋土には焼土や炭は含まれていなかった。

出土遺物 埋土から土師器甕 (925・926)・壺 (927・928)・高杯 (929~931)、土製紡錘車 (C12)が出土している。

SHK072 (図版 45、写真図版 28)

検出状況 D9区で検出された。

形状・規模 短辺3.9m、長辺4.7mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高33cm である。

周壁溝は北西隅のみで検出された。幅は30cm程度である。

ピットは住居内で8基検出したが、主柱穴は不明瞭である。断面Cにかかるピット2基が主柱穴の可能性があり、やや南側に偏るが2本柱と考えられる。

土坑は中央付近 (SK01)、東壁際中軸線上 (SK02)、北東隅 (SK03) で検出した。SK01は長辺65cm、短辺50cmの平面長方形で、床面からの深さは7cmと浅い。SK02は長径90cm、短径65cmの平面楕円形で、床面からの深さは13cmである。SK03は直径60cmの平面円形で、床面からの深さは16cmである。

炉は主柱穴間の中央に設けられていた。わずかに焼土が残存していた。

中央付近の床面には硬化面が、東部では炭化材が残存していた。硬化面は主柱穴の間からSK02の間にかけて広がっている。

出土遺物 SK02から土師器甕 (933) ・高杯 (941・948)、南側主柱穴から土師器甕 (932)、床面から土師器壺 (935~937) ・高杯 (940・942・944)、埋土から土師器甕 (934)・壺 (938・939)・高杯 (943・945~947) が出土している。

SHK073 (図版 45、写真図版 29)

検出状況 B10区で検出された。北半を確認トレンチに切られている。

形状・規模 東西4.6mの竃をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高25cmである。

ピットは住居内で9基検出したが、主柱穴は不明瞭である。

住居内の東北部で検出された土坑(SK01)中には石が立てられている。SK01は直径60cmで、床面からの深さは10cmと浅い。石は上部が折れているが、残りの部分はやや離れた床面上に残存していた。石は断面が長方形で、2面が被熱を受けていた。長さは接合すれば60cmである。竃の焚き口に架けられた石材のようである。

出土遺物 埋土から須恵器杯蓋 (949)、土師器高杯 (950・951)・甕 (952) が出土している。

SHK074 (図版 46、写真図版 29)

検出状況 C7·D7区で検出された。

形状・規模 短辺7.0m、長辺7.3mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高13cmである。

周壁溝は北、東、南の3方の壁際で、一部断続部があるものの検出された。おおむね幅は30cm程度である。

主柱穴は4本柱である。深さは床面より20cm程度である。

電は西壁中央に設けられている。袖は西壁より80cmの長さで、高さは6cm残存していた。袖間の幅は65cmである。西壁より内側60cmに支脚として利用されたと考えられる伏せた高杯(962)が残存していた。

炉は床面中央に設けられている。長辺110cm、短辺90cmの長方形の浅い掘り込み(SK02)をもち、わずかに焼土粒の散布が認められる。

土坑は竃南側 (SK01) と東壁際中軸線上 (SK03) に設けられている。SK01は直径55cmの平面方形気味の円形で、床面からの深さは16cmである。SK03は一辺65cmの平面方形で、床面からの深さは18cmである。

竈の前面からSK02の間には硬化面が広がっていた。

住居内の東北隅には直径10~20cm程度の礫がかためて置かれていた。

SK03の北側には台石が残存していた。

出土遺物 竃から土師器高杯 (962)、SK03より土師器壺 (956)・甕 (957)・高杯 (960)、床面から 須恵器高杯 (955)、土師器甕 (958)・高杯 (961)、埋土から須恵器杯蓋 (953)・高杯 (954)、土師器 甕 (959)・高杯 (963~965) が出土している。

SHK075 (図版 47、写真図版 30)

検出状況 B8区で検出された。

形状・規模 短辺5.1m、長辺5.9mの竃をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高10cmである。

主柱穴は4本柱である。ただし、深さは床面より7㎝と浅く、不明瞭である。

土坑は南壁際中軸線上(SK01)、中央付近(SK02)、南東隅(SK03)で検出した。SK01は長径100cm、短径84cmの平面楕円形で、床面からの深さは25cmである。SK02は長径100cm、短径85cmの平面不整楕円形で、床面からの深さは22cmである。SK03は直径65cmの平面円形で、床面からの深さは6cmである。

中央付近のSK02の南側ではわずかながら硬化面が認められた。

北部中央付近の床面では台石が残存していた。

出土遺物 SK01から土師器壺 (970)、SK02から土師器高杯 (972)、SK03から土師器壺 (968・971)・ 高杯 (973)・器台 (975)、床面から土師器壺 (967)・高杯 (974)、埋土から土師器壺 (966・969) が 出土している。 SHK076 (図版 48、写真図版 30)

検出状況 A9·A10·B9·B10区で検出された。

形状・規模 短辺4.5m、長辺6.1mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高12cm である。

周壁溝は南壁で一部断絶があるものの、四方の壁際で検出された。おおむね幅は30cm程度である。 ピットは住居内で検出していない。

土坑は中央付近(SK01)、中央東より(SK02)で検出した。SK01は長径1.7m、短径1.0mcmの平面不整楕円形で、床面からの深さは5cmと浅い。中央に位置する浅い土坑であり、炉の可能性があるが、炭・焼土などは確認していない。SK02は長径120cm、短径75cmの平面楕円形で、床面からの深さは10cmである。

出土遺物 埋土から須恵器杯蓋 (976)、土師器高杯 (977) が出土している。

SHK077 (図版 49)

検出状況 11・12区で検出された。遺構面は削平が大きく、ほとんど床面のみしか残存していない。 形状・規模 短辺4.7m、長辺5.0mの竃をもたない方形竪穴住居跡である。壁面は残存しておらず、 貼り床に相当する土が残存するのみであった。

ピットや土坑などの屋内施設は検出していない。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SHK078 (図版 49)

検出状況 11・12区で検出された。東部は圃場整備前の用水路によって、壊されており、遺構面も削 平が大きく、ほとんど床面のみしか残存していない。

形状・規模 貼り床に相当する土が残存するのみで、形状もはっきりしない。

出土遺物 埋土から土師器高杯 (978) が出土している。

SHK079 (図版 50、写真図版 31)

検出状況 12区で検出された。SHK080を切る。

形状・規模 1辺4.9mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高11cmである。

主柱穴は4本柱である。深さは床面より20~30cm程度である。

竃は北壁中央に設けられている。袖は西壁より60cmの長さで、ハの字形を呈している。高さは10cm残存し、袖間の幅は40cmである。

土坑は南壁際中軸線上(SK01)、中央付近(SK02)に設けられている。SK01は長径80cm、短径70cmのおむすび形で、床面からの深さは20cmである。SK02は直径60cmの平面円形で、床面からの深さは10cmである。炉の可能性があるが、炭・焼土などは確認していない。

西北部と東南部では棰状の炭化材が残存し、竃の南側に焼土が散布していた。

出土遺物 埋土から須恵器杯蓋 (979)・杯身 (980)、土師器甕 (981)・甑 (982)、鉄滓 (**M**58) が出 土している。 SHK080 (図版 51)

検出状況 12区で検出された。全体的に圃場整備前の用水路による削平が大きく、北東部はSH079に切られている。

形状・規模 短辺3.4m、長辺3.6mの方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高13cmである。 ピットや土坑などの屋内施設は検出していない。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SHK081 (図版 51)

検出状況 9・10区で検出された。西部を圃場整備前の用水路により大きく削平され、東北部の一部 しか残存していない。

形状・規模 方形竪穴住居跡で、深さは検出面より最高4cmである。

ピットや土坑などの屋内施設は検出していない。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SHK082 (図版 51)

検出状況 11区で検出された。全体的に削平が大きく、西部は大きく圃場整備前の用水路により大きく切られている。

形状・規模 竈をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高3cmである。

主柱穴は1基検出した。深さは床面より17cmである。

竈は東壁中央に設けられている。袖は残存しておらず、焼土がわずかに壁よりはみ出して残存している。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SHK083 (図版 52、写真図版 31)

検出状況 $B3 \cdot B4 \cdot 宮ヶ田D(2) - 1$ 区で検出された。東端は調査区外に延びている。

形状・規模 南北 6 mの竈をもたない方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高50cmである。北部の床面はテラス状に1 段高くなっている。

ピットは住居内で4基検出したが、主柱穴は不明瞭である。

炉は床面中央付近に設けられている。長径120cm、短径80cmの範囲で焼土粒が認められた。

土坑は南東部 (SK01) に設けられている。SK01は南北1.7mで、北端部が溝状に深くなっている。

住居の特異な構造や羽口の出土から鍛冶遺構の可能性も考えられるが、埋土中には鉄滓や鍛造剥片は 含まれていなかった。

出土遺物 埋土から土師器壺 (983)・甕 (984)・手づくね土器 (985)・高杯 (986)・甑 (987)、羽口 (C13~C18)、砥石 (S29) が出土している。羽口は焼土や炭などと共に埋土の上層から出土している。

SHK084 (図版 53、写真図版 32)

検出状況 A5・B5区で検出された。

形状・規模 短辺5.2m、長辺5.4mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高26cmである。

主柱穴は4本柱である。深さは床面より12~18cm程度である。

電は西壁中央に設けられている。電は破壊されており、支脚として使われた土師器高杯 (997) が西壁より内側40cmの所に伏せられていた。竃の下には構築以前に浅い土坑は掘り込まれていた。

炉は竃の前面に設けられている。長径45cm、短径30cmの範囲で焼土面が広がっている。焼土の北側の SK03は長径90cm、短径55cm、深さ14cmの土坑で、床面に一部に焼土が見られ、埋土にも炭を含んでいる。

土坑は北西隅 (SK01)、中央付近 (SK02・05)、南東部 (SK04) に設けられている。SK01は長辺68cm、短辺56cmの平面長方形で、床面からの深さは21cmである。SK02は直径50cmの平面円形で、床面からの深さは14cmである。住居の中央に位置しているが、埋土には炭・焼土などは含まれていなかった。SK05は長径80cm、短辺70cmの平面不整形で、床面からの深さは20cmである。SK04は長径165cm、短径110cmの平面不整形で、床面からの深さは18cmである。

竃の前面から床面中央部にかけては硬化面が広がっていた。

出土遺物 竈から土師器高杯 (997)、SK01から土師器甕 (994)、床面から須恵器杯蓋 (988)、土師器甕 (991・992) ・高杯 (995・996)、埋土から須恵器杯蓋 (989)、土師器甕 (990・993) が出土している。

SHK085 (図版 54、写真図版 33)

検出状況 6 · 7 · **A** 5 · **A** 6**区**で検出された。

形状・規模 短辺3.0m、長辺3.4mの竃をもつ方形竪穴住居跡である。深さは検出面より最高18cmである。

ピットは住居内で5基検出されたが、主柱穴は不明瞭である。

竃は西壁中央に設けられている。袖は残存していないが、支脚として使われた土師器高杯 (999) が西壁より内側70㎝の所に伏せられていた。竃の前面は焼けている。

土坑は北東隅(SK01)、南壁中軸線上(SK02)に設けられている。SK01は長径53cm、短辺35cmの平面 楕円形で、床面からの深さは13cmである。SK02は長径62cm、短辺50cmの平面楕円形で、床面からの深さは24cmである。

出土遺物 竃から土師器高杯(999)、床面から土師器甕(998)が出土している。

SPK011

検出状況 E14区で検出された。

形状・規模 直径25cmのピットである。深さは検出面より19cmである。

出土遺物 埋土から須恵器杯蓋 (1004) が出土している。

SPK012

検出状況 15区で検出された。

形状・規模 直径30cmのピットである。

出土遺物 埋土から刀子 (M52) が出土している。

SPK013

検出状況 C12区で検出された。

形状・規模 直径20cmのピットである。深さは検出面より13cmである。

出土遺物 埋土から土師器甕(1005)が出土している。

SPK014

検出状況 E8区で検出された。

形状・規模 直径50cmのピットである。深さは検出面より9cmである。

出土遺物 埋土から土師器高杯(1006)が出土している。

SPK015

検出状況 D8区で検出された。

形状・規模 直径40cmのピットである。深さは検出面より9cmである。

出土遺物 埋土から土師器甕(1007)が出土している。

SPK016

検出状況 D8区で検出された。

形状・規模 直径35cmのピットである。深さは検出面より18cmである。

出土遺物 埋土から土師器高杯(1008)が出土している。

SPK017

検出状況 C9区で検出された。

形状・規模 直径40cmのピットである。深さは検出面より13cmである。

出土遺物 埋土から土師器高杯(1009)が出土している。

SKK012 (図版 55)

検出状況 G13区で検出された。SHK038に切られる。

形状・規模 短辺1.7m、長辺2.0mの台形状の土坑である。深さは検出面より最高10cmである。 埋土の上面に被熱を受けた部分が認められる。

出土遺物 埋土から土師器高杯(1010)が出土している。

SKK013 (図版 55)

検出状況 C12区で検出された。SHK059を切る。

形状・規模 短辺3.4m、長辺3.8mの不整方形の土坑である。深さは検出面より最高38cmである。

出土遺物 埋土から須恵器杯蓋 (1011)、土師器甕 (1012) が出土している。

SKK014 (図版 55)

検出状況 A11区で検出された。

形状・規模 短辺2.0m、長辺4.6mの不整形の土坑である。深さは検出面より最高9cmである。

出土遺物 埋土から土師器甕(1013)が出土している。

SKK015 (図版 55)

検出状況 F15区で検出された。

形状・規模 短辺2.4m、長辺2.5mの楕円形の土坑である。深さは検出面より最高5cmである。

出土遺物 床面から土師器甕(1014・1015)が出土している。

SKK016 (図版 55)

検出状況 D10区で検出された。

形状・規模 短辺0.9m、長辺1.0mの楕円形の土坑である。深さは検出面より最高22cmである。

出土遺物 埋土から土師器甕 (1016) ・椀 (1017) が出土している。

SKK001 (図版 56·57、写真図版 34)

検出状況 F17~20区で検出された。

形状・規模 水田部の中央を東西に横切る谷を南北に塞ぐように設けられた水田の畦である。北端は等高線に沿うように東側に彎曲している。検出された長さは75mを測る。畦の本体は周りの土とほとんど変わらず、わずかに粗砂を多く含んでいる程度の違いしかない。谷部を除けば土の盛り上がりもほとんどなく、木材や礫の集中していることによって確認することができる。

南端部の微高地への取り付き部分では矢板を打ち込んで、畦本体を補強している。谷を南北に渡る部分では、杭が約200本打ち込まれ、杭の間に畦の向きに沿って木材が入れられたり、径50cm以下の礫が置かれている。高さは20cm程度残存している。谷の北側の部分では径30cm以下の礫を用いている。

谷部での上面の幅は $2 \sim 3$ m程度と広く、単に畦という以上に、通路としても利用されていたと考えられる。

出土遺物 遺物は主として谷部の畦中及びその周囲より出土している。土器には須恵器杯蓋 (1018)・高杯 (1019)、土師器甕 (1020・1021)・壺 (1022)・高杯 (1023・1024) があり、木器には木簡 (W101)、田下駄枠 (W130)、田船 (W212)、蓋板 (W219)、槽 (W239)、部材 (W290・294)、扉板等 (W315・W320)、楣? (W330)、梁木? (W358)、桁材 (W359・W365・W367)、束柱 (W371)、垂木等 (W315・W320)、建築部材 (W391~W394・W396・W397・W401・W427・W430) がある。土器は古墳時代のもののみであるが、木器には木簡が含まれており、律令期までこの畦が使われたことことを示している。

SSK002 (第7図、写真図版35)

検出状況 F15~F17·G17·G18区で検出された。

形状・規模 谷の北側を等高線に対して垂直に区切る水田の畦である。検出された長さは55mで、幅は50cm程度である。畦の本体は周りの土とほとんど変わらず、わずかに粗砂を多く含んでいる程度の違いしかない。南部は2又に分かれたようになっているが、作り替えによるものと考えたい。

出土遺物 明瞭に遺構に伴って遺物は出土していない。

SSK003 (図版 58、写真図版 35)

検出状況 H19·I19·J18·J19区で検出された。

形状・規模 谷中央部の最も低い部分に設けられた水田の畦である。検出された長さは17m、列状に 杭が打たれ、それに沿って板材が置かれている。その周囲にわずかに粗砂を多く含んでいる土が残存し ている。新水北地区のSSK1017に続くものと考えられる。

出土遺物 扉板等 (W322)、壁板 (W335) が出土している。

SSK004 (図版 59、写真図版 35)

検出状況 H15~H17·I15区で検出された。

形状・規模 谷北側で等高線に対して平行に設けられた水田の畦である。検出された長さは18mで、径40cm以下の礫が列状に並び、SSK001と同様に畦の本体は周りの土とほとんど変わらず、わずかに粗砂を多く含んでいる程度の違いしかない。

出土遺物 明瞭に遺構に伴って遺物は出土していない。

SSK005 (図版 58)

検出状況 I20・I20区で検出された。

形状・規模 谷南側で等高線と平行に設けられた水田の畦である。SSK003とも向きを同じくしている。 検出された長さは6.5mで、2列に杭が打たれ、それに沿ってわずかに粗砂を多く含んでいる土が残存し ている。新水北地区のSSK1018に続くものと考えられる。

出土遺物 明瞭に遺構に伴って遺物は出土していない。

(4) 律令期の遺構

SFR001 (図版 60~63、写真図版 37~40)

検出状況 桜地区と宮ケ田 I 地区で検出された道路と一連の道路遺構である。検出された部分は南北に分かれ、標高の高い中央部は削平により残存していない。南側は宮ケ田 I 地区で検出した部分から引き続き、北側は調査区外へ延びている。南側の部分は $A11 \cdot A12 \cdot A13 \cdot A14 \cdot A15 \cdot B11 \cdot 13 \sim 15$ 区で、北側の部分は $C5 \cdot C6 \cdot D6 \cdot$ 宮ケ田D(2) - 1区で検出された。 $SHK030 \cdot 061 \cdot 063 \cdot 065 \cdot 067 \cdot 068 \cdot 069$ を切っている。SHK062との切れ合い部分は側溝や攪乱などあり、十分に確認はしていないが、道路がSH062を切っていると考えられる。

形状・規模 主軸方位はN 22° Eを取っている、宮ケ田 \blacksquare 地区で検出された延長は107mであるが、中央部の45mは削平にされている。宮ケ田 \blacksquare 地区で検出された分と合わせれば延長153mに及んでいる。

南部 南端部では宮ヶ田 I 地区と同様に第 1 次道路とそれを縮小した第 2 次道路を東側の側溝の造り替えで確認することができたが、攪乱と調査区境の側溝で損壊されている部分から北側では東側側溝は 1 条のみであり、作り替えは確認することはできなかった。側溝の心々間距離は作り替えの確認できた部分では第 1 次道路が $7.8 \sim 8.7 \,\mathrm{m}$ 、第 2 次道路は $6.6 \sim 6.9 \,\mathrm{m}$ で、その他の部分では $7.0 \sim 7.5 \,\mathrm{m}$ である。路面幅は第 1 次道路で $6.9 \sim 7.0 \,\mathrm{m}$ 、第 2 次道路で $6.0 \,\mathrm{m}$ 、その他の部分で $6.0 \sim 6.7 \,\mathrm{m}$ である。

西側側溝は幅 $50\sim150$ cmであるが、深さは $20\sim30$ cmである。断面形状は北側では逆台形状を呈するが、南側では断面逆三角状を呈している。埋土には礫をあまり含んでいない。第1次道路東側側溝は幅 $1.9\sim2.4$ mで、深さは20cmである。西肩より60cmの所が一番深くなり、断面形状は逆三角形を呈している。埋没の過程で西よりの部分に窪みが残っていたようで、その部分に礫が堆積している。第2次道路東側溝は幅 $60\sim90$ cmで、深さは15cm程度で、断面形状はゆるいU字形である。埋土には礫が含まれていた。北側の東側溝は幅 $80\sim110$ cm、深さ $15\sim25$ cmで、断面は逆台形を呈している。埋土には非常に多くの礫が含まれている。

路面は南端部の石敷きが残っている部分以外は削平され残存していない。路面中央部はほぼ平坦であるが、両端90cmは外側に向かって緩く傾斜している。路面には礫が敷かれている。中央部では径2~10 cmの礫が用いられ、東端の傾斜部では径20cmまでのやや大きい礫が用いられている。路面の中央と西寄りの部分では幅30cm程度、深さ10cm弱の溝が部分的に認められる。轍の可能性がある。

路面下の盛土は西側側溝と第2次道路東側側溝の間に成されている。すでに宮ケ田 I 地区の谷部を渡りきっているが、20cm弱の厚さで積まれていた。北側の東側溝でも礫が検出されていることから、少なくともこの辺りまでは盛土がなされた可能性がある。

北部 東西両側溝とも検出されたのは各 1 条のみで、路面は削平されている。溝心々間距離は6.5 ~ 7.0 m、路面幅は5.3 ~ 5.7 mである。西側側溝は幅1.2 ~ 1.5 mの部分が多い。深さは最も深い部分で25 cm 程度である。東側側溝は幅0.6 ~ 1.0 cm で、深さは最も深い部分で 7 cm 程度である。

出土遺物 南部の路面礫敷き直上より須恵器円面硯 (1117)、東側側溝から古墳時代の須恵器杯身 (1026) ・鉄鏃 (M51) が出土している。

SSR001 (第7図、写真図版 36)

検出状況 G15~G19·H17~H21·I20~I22·J22·J23区で検出された。

形状・規模 谷を南北に横断し、谷の両側を等高線に対して平行に設けられた水田の畦である。蛇行しながら北からやや東側に向かって延びている。検出された長さは75mで、幅は40cm~3.0mである。H 20区付近では比較的よく残っており、15cmほどの高さが残存している。畦本体は粗砂を多く含んでいるシルト質土が残存しているのみであるが、古墳時代の畦に比べて砂がやや多いようである。

出土遺物 H19区の畦直上で須恵器杯A(1118)、G18区畦直上で田下駄枠(W133)・田下駄足板(W 178)が出土している。

SSR002 (図版 58)

検出状況 I20·J19·J20区で検出された。

形状・規模 谷の北側を等高線に対して平行に区切る水田の畦である。検出された長さは10mで、東側は調査区外へ延びている。幅は1.3~2.1m程度である。畦本体は粗砂を多く含んでいるシルト質土が残存しているのみで、高さはほとんど残っていない。

出土遺物 畦直上で蓋板(W211)が出土している。

(5)中世の遺構

SBC055 (第64図、写真図版 41)

検出状況 F11·F12·G11·G12区で検出された。

形状・規模 規模は桁行 3 間 (7.6m)、梁行 4 間 (10.3m) である。平面形状は変則的な 3 面庇付き建物である。桁行 2 間 (5.6m)、梁行 2 間 (5.0m) の主屋の南側に柱間 2.0mの狭い庇が付き、加えて東西に柱間 2.6mの庇を出している。庇の柱筋は通らず、四隅の柱が内側に依っている。建物の方位はN 3°Wである。

柱穴 柱穴の掘方は円形である。直径は20~50cmで、深さは20~45cmである。

出土遺物 柱穴からは須恵器・土師器の細片しか出土していない。

SBC056 (第65図、写真図版 41)

検出状況 F11·F12·G11·G12区で検出された。

形状・規模 桁行 3 間 (7.7m)、梁行 1 間 (2.9m) の側柱建物である。建物の方位はN 5 $^{\circ}$ Eである。建物の北側には方位を同じくするSKC 016 が位置している。

柱穴 柱穴の掘方は円形である。直径は20~50cmで、深さは30~46cmである。P378、P385の掘方内とP393の柱根抜き取り穴内には礫が入れられていた。

出土遺物 P393から土師器碗 (1128)・鍋 (1130)、P394から須恵器碗 (1127)、土師器底部 (1129) が出土している。

SBC057 (第66図)

検出状況 A5·A6·B5·B6区で検出された。

形状・規模 桁行 4 間 $(9.9 \,\mathrm{m})$ 、梁行 3 間 $(7.3 \,\mathrm{m})$ の総柱建物である。東端の柱間が狭い。建物の方位はN 7 $^{\circ}$ Eである。

柱穴 柱穴の掘方は円形である。直径は $20\sim50$ cmで、深さは $20\sim46$ cmである。P94の掘方内には礫が入れられている。

出土遺物 P83から須恵器碗(1131)が出土している。

SBC058 (第67図、写真図版 41)

検出状況 6·7·A5·A6区で検出された。

形状・規模 桁行 4 間(11.3 m)、梁行 4 間(10 m)の総柱建物である。東西と北端の柱間が狭い。建物の方位はN 3 ° Eである。建物の南東隅にはSKC020が位置している。建物の南東隅の柱が検出されていないため、建物内にあたるかどうかは判然としない。

柱穴 柱穴の掘方は円形である。直径は $20\sim50$ cmで、深さは $12\sim48$ cmである。P94の掘方内には礫が入れられている。P064では平らな石が礎板状に用いられている。 $P920\cdot1014\cdot1019\cdot1021\cdot1043\cdot1044\cdot1134$ では柱根抜き取り後に石が入れられている。

出土遺物 P63から須恵器碗(1132)、P64から土師器小皿(1136)、P113から土師器碗(1133)・底部(1134)、P1017から土師器小皿(1135)・圫(1137)が出土している。

SBC059 (第68図)

検出状況 6·A5区で検出された。

形状・規模 桁行 3 間(7.7m)、梁行 2 間(6.3m)の側柱建物である。建物の方位はN 5 $^{\circ}$ Eである。柱穴 柱穴の掘方は円形である。直径は $25\sim45$ cmで、深さは $20\sim32$ cmである。

出土遺物 P1131から土師器小皿 (1138) が出土している。

SAC004 (第69図)

検出状況 B5区で検出された。SBC057の東北に位置し、方位を同じくしている。

形状・規模 南北 3 間 (8.3 m)、東西 2 間 (7.4 m) のL字形の柵列である。方位はN 7° Eである。

柱穴 柱穴の掘方は円形である。直径は25~15cmで、深さは8~32cmである。

出土遺物 P103から土師器圫 (1139) が出土している。

SPC029

検出状況 C13区で検出された。

形状・規模 直径30cmのピットである。深さは検出面より8cmである。

出土遺物 埋土から石臼(S34)が出土している。

SPC030

検出状況 C13区で検出された。

形状・規模 直径40cmのピットである。深さは検出面より18cmである。

出土遺物 埋土から土師器皿 (1140) が出土している。

SPC031

検出状況 10区で検出された。

形状・規模 直径40cmのピットである。深さは検出面より18cmである。

出土遺物 埋土から土師器碗(1141)が出土している。

SKC016 (図版 70)

検出状況 B12区で検出された。SBC056の北側に位置し、方位を同じくしている。

形状・規模 長辺2.1m、短辺1.5mの長方形の土坑である。深さは検出面より30cmである。

出土遺物 遺物は出土していない。

SKC017 (図版 70、写真図版 42)

検出状況 10区で検出された。

形状・規模 長径2.2m、短辺1.8mの楕円形の土坑である。深さは検出面より18cmである。埋没の途中で火が焚かれたようで、その直上の土層から土器が出土している。

SKC018 (図版 70、写真図版 42·43)

検出状況 9区で検出された。

形状・規模 長径2.2m、短辺2.0mの楕円形の土坑である。深さは検出面より8cmである。

出土遺物 床面から土師器碗(1148・1149)が出土している。

SKC020 (図版 71、写真図版 44)

検出状況 A6区で検出された。SBC058の南東部に位置している。

形状・規模 長径2.8m、短辺2.5mの楕円形の土坑である。深さは検出面より32cmである。上面には 礫が入れられている。

出土遺物 埋土から須恵器碗(1150~1153)・小碗(1154・1155)、土師器碗(1156)・圫(1157~1159)・小皿(1160~1167)・鍋(1168)、黒色土器碗(1169)、石材(S35)が出土している。

(6) 小結

弥生時代、古墳時代、律令期、中世の遺構が検出された。

弥牛時代 後期の竪穴住居跡が1棟検出されたのみである。

古墳時代 - 古墳時代中・後期は北部で集落跡や南部で水田が検出された。宮ケ田 I・II 地区で検出された集落跡と一連のもので、水田も新水北地区で検出された畦畔と連続したものがある。広範囲に広がる 集落域と水田域を確認することができ、長期に継続した集落の変遷状況を知ることができる。

律令期 律令期は道路遺構、水田が検出された。検出された道路遺構は宮ケ田 I 地区で検出された遺構に引き続くもので、「但馬道」と仮称される古代の官道と考えられている。宮ケ田 I 地区に比べて路面の礫敷きが比較的良く残存している。谷部の水田域では古墳時代に引き続き畦畔が確認され、木簡が出土していることが注目される。

中世 掘立柱建物 5 棟、柵列、ピット、土坑、水田などが検出された。建物跡の時期は12世紀を中心とする。宮ヶ田 I · II 地区で検出されたものを含めて、桜地区で検出された建物跡より規模が小さく、標準的な規模の建物が散漫に建ち並んでいるようである。

2. 新水北地区

(1) 概要

位置 新水北地区は旧朝来郡和田山町加都字新 水に位置する。

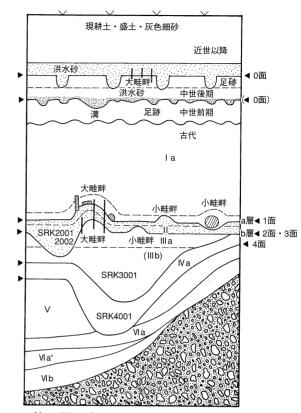
インターチェンジの予定地を含む加都平野全体は、円山川が形成した扇状地上に位置している。 新水北地区は、そのうち完新世段丘の微高地から 旧河道にかけての部分にあたり、調査区の東半部 は微高地上、西半部は旧河道が埋没した低湿地に あたっている。

調査区の東半部を占める微高地は、扇状地の旧中洲上にあたる部分である。旧中州は砂礫で主に構成されており、現況では西の旧河道に対して2m近くの比高差をもっている。旧中州はほ場整備にともなって著しく削平を受けており、調査区の南端において古墳時代中期の竪穴住居跡1棟(第2面)を検出した以外には明確な遺構を検出することはできなかった。

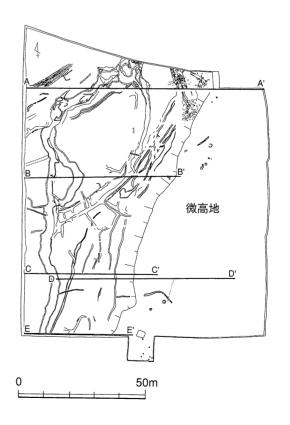
これに対し、西半部は円山川本流もしくはそれと同程度の規模の分流が埋没し、低湿地化した旧河道跡部分にあたる。調査の対象となった遺構は、旧河道跡が洪水砂によって埋没していく過程で順次営まれた水田遺構を主としている。

基本層序 西半部では江戸時代後期以前の堆積 が良好に残っている。局地的に残存するものも含 めた堆積の概略は以下の通りである。

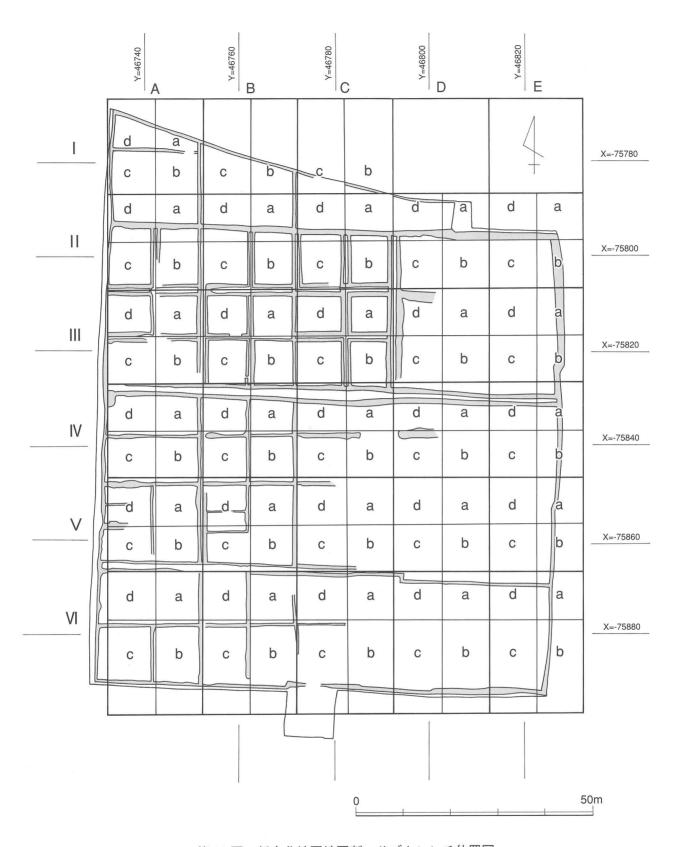
- ①近現代の水田+壌
- ②江戸時代後期の洪水砂
- ③江戸時代水田土壌
- ④江戸時代初期の洪水砂
- ⑤中世後期~中世末期(16世紀末)前後の水田 土壌
- ⑥中世前期の洪水砂
- ⑦中世前期の水田土壌
- ⑧6世紀前半~9世紀の水田土壌 [Ia層]
- ⑨5世紀後半の水田土壌〔Ⅱa層〕及びその母層 である洪水砂〔Ⅱb層〕
- ⑩5世紀前半を中心とする水田土壌 (Ⅲa層)



第9図 水田部分基本土層模式図

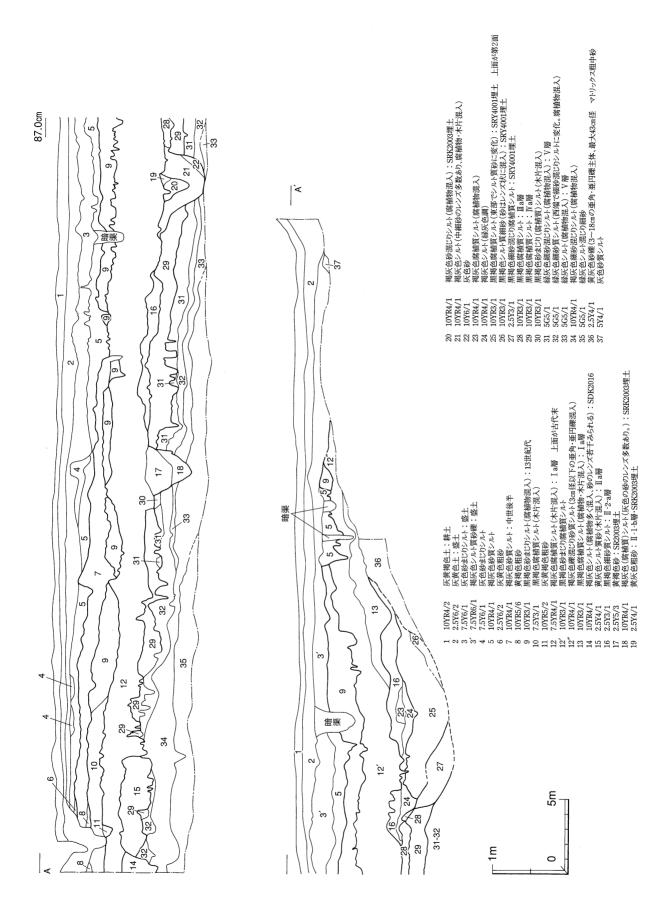


第10回 新水北地区土層断面位置図

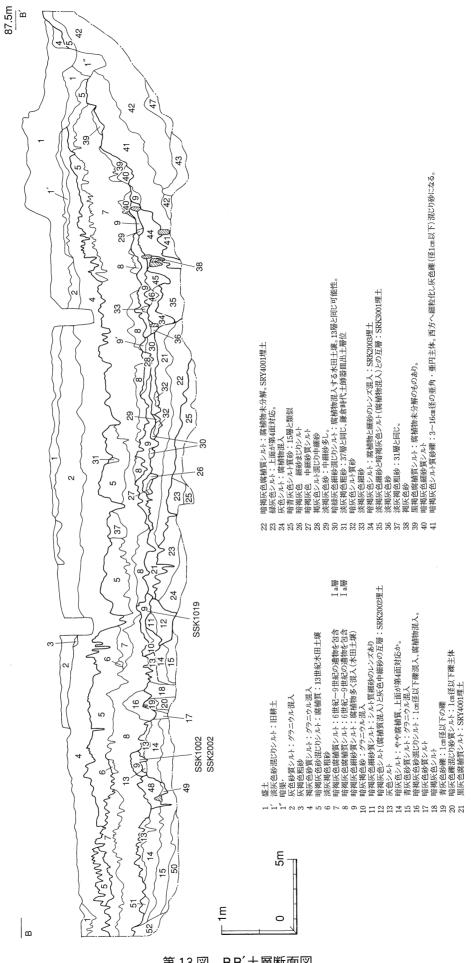


第11図 新水北地区地区割・サブトレンチ位置図

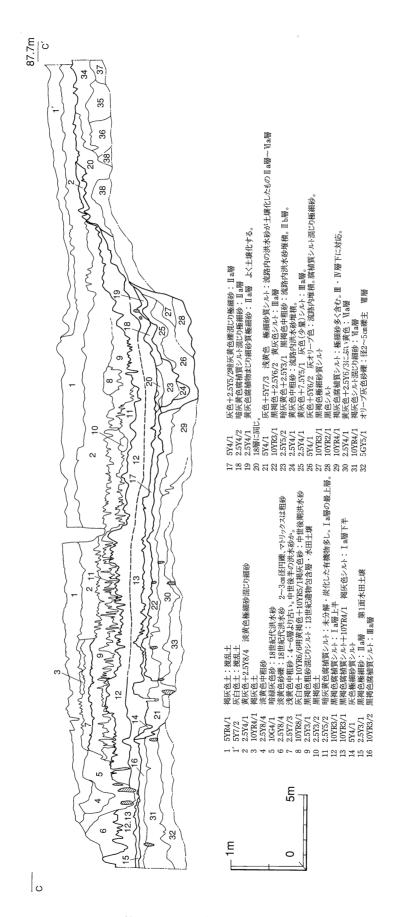
- ⑪4世紀代に対応する土壌〔Ⅲ・Ⅳ層間〕
- ⑩弥生時代前期~後期に対応する土壌 [Wa層]
- ③弥生時代以前の堆積と考えられ、旧河道を埋めるシルト〔V・Ⅵ層〕



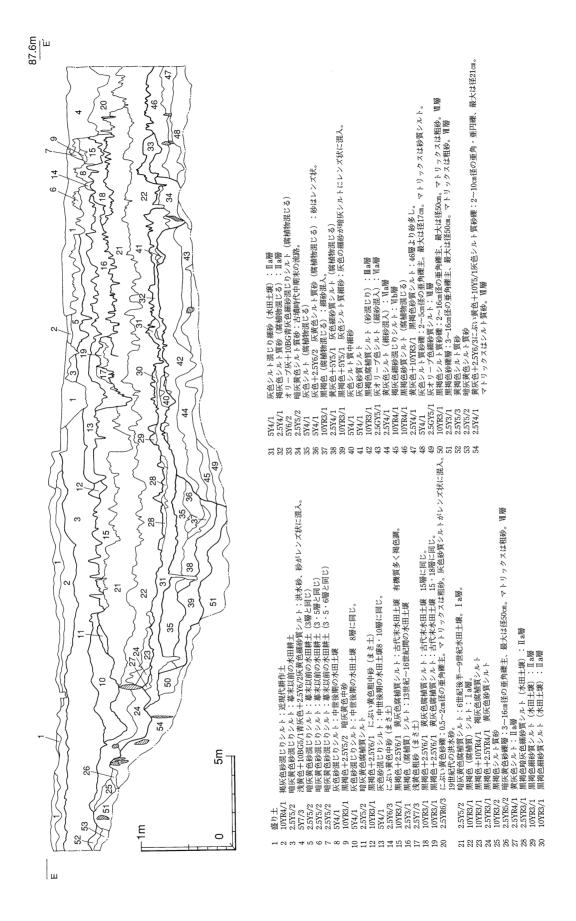
第12図 AA′土層断面図



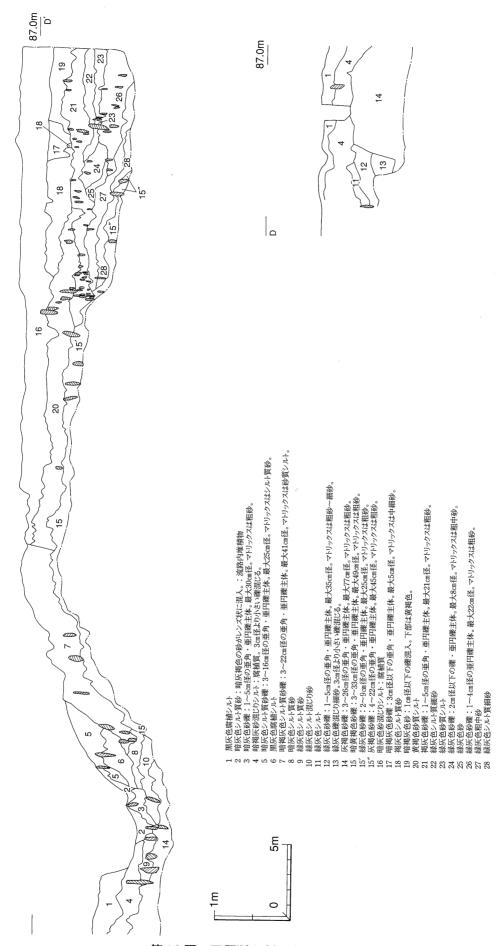
BB′土層断面図 第13図



第14図 CC'土層断面図



第15図 EE'土層断面図



第16図 下層断ち割り土層断面図

⑩旧河道の基盤・東半の微高地を形成する礫層〔Ⅷ層〕

地区割り 調査の工程上調査区北半部を東西に走る農道を境に南側をA~C地区とし、農道を含めた北半部をD地区として、調査に入った。第2面以降、A~D地区がすべて開いたため、南北方向に北から20m単位で、IからII区、東西方向に西から同じく20m単位で、A~E区を設定し、更に内部を10m単位で時計周りにa~d区に4分割した。IA A 区・IB d区と表示している。

遺構の概要 調査区の東半部を占める微高地上はほ場整備によって削平され、調査区の南端で古墳時 代中期の竪穴住居跡 1 棟(第 2 面)を検出した以外には明確な遺構を検出することはできなかった。

遺構の大半は低湿地化した旧河道跡部分にあたる西半部より検出している。古墳時代後期を中心とした水田遺構(畦畔)・水路・井堰、古墳時代前期(第3面)・弥生時代前期~後期(第4面)の旧河道を検出している。

調査区東半部の遺構面の概要 前述したとおり、調査区東半部は微高地上にあたり、後世の水田造成に伴う削平を著しく受けている。このため、明確な遺構としては竪穴住居跡 1 棟(SHK2001)以外にはなく、調査区の南東端部分に中世前期の遺物包含層が若干遺存していたのみである。

調査区西半部の各遺構面の概要 ①層~②層は基本的には機械力によって除去したが、⑦層の中世前期の水田については一部人力によって精査を実施した。また、⑤層に対応する大畦畔の杭列を一部精査している(SSC0001)。

⑧層~⑩層上面までは人力による掘削を行い、平面精査を実施している。また、一部⑬ V 層上面まで掘削を行い、遺構検出を実施している。

⑩層・⑪層については西半部ではサブトレンチによる断面観察をおこない、河道立ち上がりから東半部上面については⑭層(Ⅷ層)面上で精査を実施した。

この結果、西半部では⑨Ⅱ層上面、⑩Ⅲa層上面、⑪層上面、⑫Ⅳa層上面の計4面において遺構を検出し、精査をおこなった。この内、⑨Ⅱ層上面、⑪Ⅲa層上面では水田遺構を検出。⑪層上面、⑫Ⅳa層上面では遺物を含む自然流路を検出している。以下、各面ごとに概略を述べておく。

(2) 第0面一第1面よりも上層の遺構

一部で中世前期及び後期と考えられる水田面の精査を実施している。これを0面としておく。

中世前期の水田面は標高約86.4m、⑦層上面に広がり⑥層の洪水砂によって埋没している。面上からは人・牛・鳥等の足跡が洪水砂に埋没した状態で検出された(図版 72)。⑥層の洪水砂は砂中の花崗岩からみて東方を流れる黒川から供給されたものであろう。

また、洪水砂及び水田土壌中からは土師器皿・須恵器碗・土鍋等の破片が出土している。いずれも12~13世紀にかけてのものである。

中世後期の水田面は詳らかではないが、中世前期の水田面の直上に洪水砂を挟んで部分的に検出されている。0面として検出した水田面は基本的には中世前期であるが、一部に中世後期の洪水砂が被覆した状態の部分がある。

SSC0001

検出状況 調査区南半において、角杭を打ち込んだ東西方向に伸びる大畦畔が検出されている。

埋土より、京都系土師器皿片が出土しており、中世後期(15世紀から16世紀)に営まれた水田に伴う ものと認識している。 形状・規模 大畦畔の規模は基底部の幅約1.2m・高さ約0.3m以上、方位をN84°Wに取る。 出土遺物 京都系土師器皿片が出土している。

(3)第1面 ⑨川層上面の概要

第1面上に厚く被覆する® I a層――褐色腐植質シルトには6世紀後半~9世紀代の遺物が含まれており微細な土層観察では7世紀後半・9世紀代の水田面が分層可能な堆積である。

第1面はIa層下から検出された水田跡である。基本的には第2面を埋没させる洪水砂IIb層を再度耕作したものを水田耕土として使用している(IIa層)。

第1面では検出できた遺構の殆どは大小水田畦畔である。それ以外には大畦畔SSK1003とSSK1008が接する地点より集石遺構SXK1003が検出されている。

水田区画一大畦畔と小畦畔 検出された水田畦畔は、下層において明確になる旧地形一微高地と旧河道・低湿地の影響を受けているものと、地形に直交する大畦畔、各大畦畔から分岐した小畦畔、また、それ以外にも部分的に残存する小畦畔を検出している。

地形の影響を受ける大畦畔はA~Cの3群で、主に微高地の縁辺を南北に走る大畦畔A群(SSK1004・SSK1006・SSK1008・SSK1013)、旧河道SRK2001の肩部に沿って低湿地を南北から北東へと走る大畦畔B群(SSK1002・SSK1015・SSK1023)、両者を結び北東へ走る大畦畔C群(SSK1001・SSK1010a)で、地形に直交する大畦畔はA~Cの3群を結ぶあるいは更に調査区外へと伸び、その多くは北西方向に走っている大畦畔D群(SSK1003・SSK1007・SSK1009・SSK1010b・SSK1012・SSK1016・SSK1017・SSK1018)である。

大畦畔 大きく水田区画を限る畦畔で、長い区間直線的に続くことが多く、大畦畔との交点において のみ屈曲をみせている。

構造は、概して杭・矢板を打ち込み、多量の板材・角材等を芯材・側材として使用している。これらの杭・矢板・板材・角材の大半は何らかの構造材・農具の再利用をもって充てられており、倉庫に使用された扉材などが含まれている。

個別の詳細は後述するが、規模は、幅は大まかには、約1.5m前後を測り、残存するシルト質の土盛りの高さは約10cm、高さは打ち込まれた杭の高さから当初は40cm以上あったものと考えられる。

大畦畔はその規模・構造から長期間の使用を意図した畦畔と考えられる。

小畦畔 長く直線的に続くことはなく、長くとも10m程度で蛇行・屈曲をみせている。これは小畦畔によって区画された水田1枚から2枚ごとに区画が連続していない状況を示している。

小畦畔の規模は幅約30㎝前後を測るものが多い。部分的に杭をうち、角材・棒・杭などを芯材として 使用している。また、局所的には加工した板材を転用し、側材として使用している部分も存在する。

しかし、小畦畔の大半は水田土壌(シルト)を盛り上げただけの簡易なもので、盛り上げられた畦畔部分の下に攪乱されずに残された洪水砂Ⅱb層が帯状に検出できることによって小畦畔の存在が認識出来た部分が多い。高さについては不明な点が多い。

小畦畔は大畦畔の大きな区画の中を更に細分する意図をもって造られた畦畔と考えられ、その構造規模から短期間の使用を意図した畦畔と考えられる。

大畦畔A群(SSK1004·SSK1006 SSK1008·SSK1013)

検出状況 微高地の縁辺を南北に走る大畦畔である。SSK1004・SSK1006、SSK1008・SSK1013の大



第17図 第1面遺構配置図

きく2条が該当する。これらの大畦畔は調査区内の東半部に存在する微高地の縁辺に営まれており、調査区の南西端から北東端に亘ってほぼ全域で検出されている。1条の総延長は約100mである。

現状での微高地上との比高差は微高地寄りを走るSSK1004・SSK1006において約 $1\,\mathrm{m}$ 、下層の旧河道 SRK3001沿いに走るSSK1008・SSK1013では約 $1.2\,\mathrm{m}$ である。 $2\,\mathrm{m}$ 条の大畦畔は約 $4\,\mathrm{m}$ の間隔をおいて作られており、同時期に使用されていた可能性が高い。

SSK1004 · SSK1006 (第17図)

形状・規模 大畦畔の規模はSSK1004では幅約1.5m・残存高約0.2m、SSK1006では幅約1.5m・残存高約5cmを測る。SSK1004・SSK1006では畦畔の芯材として纏まった板材・角材の使用はなく、部分的に角材を使用するほか、円礫を集中的に使用している部分が認められる。

出土遺物 SSK1004では田下駄横桟 (W134~W136・W141)、建築部材 (W389)、SSK1006では直柄 横鍬 (W105)、部材 (W278) が出土している。

SSK1008 · SSK1013 (第17図、写真図版 56)

大畦畔の規模はSSK1008では幅約0.6m・残存高約0.15m、SSK1013では幅約1.5m・残存高約0.2mを測る。ともに畦畔の芯材として纏まった板材・角材の使用はなく、部分的に角材を使用するほか、円礫の使用についても少ない。

出土遺物 建築部材 (W421・W431) が出土している。

大畦畔B群 (SSK1002 · SSK1015 · SSK1023)

検出状況 埋没した旧河道SRK2001の肩部に沿って低湿地を南北から北東へと走る大畦畔である。 SSK1002・SSK1015・SSK1023が該当する。

B群の大畦畔は基本的には埋没したSRK2001の肩部に沿って営まれたSSK1002を中心とするもので、SSK1023は位置から推測して、SSK1002と同一のものであろう。

SSK1015はSSK1002と並行して南側に営まれた畦畔と理解でき、その間をいくつかの直交する畦畔によって区切られていたものと考えられる。

SSK1002 · SSK1023 (図版 76 · 77、写真図版 59~62)

形状・規模 埋没したSRK2001の右肩部に沿って営まれた大畦畔である。規模は幅約 $1 \sim 2 \, \text{m}$ ・残存 高約 $0.3 \, \text{m}$ 、検出総延長約80mを測る。調査区の中央部において大畦畔SSK1001と接続する。

この畦畔は、後述する第2面の水田面形成時に、河道SRK2001の右肩部に沿って営まれた大畦畔SSK 2002が元となって造られたものである。洪水による第2面埋没後、SSK2002の隆起を復旧し、再度使用したもので、その際に旧畦畔上もしくは畦畔上に堆積した洪水砂上に杭・矢板を打ち込み、多量の板材・角材・河原石を芯材・側材として使用し、大畦畔を再構築したものと考えられる。

特に木組みが顕著であったSSK1002内木組SWK1001・SWK1006について図示した。

SWK1006 幅約1.5m・高さ約0.2mの台形の畦畔SSK2002上中央に芯材を置き、両肩部に矢板・角杭

を打ち込み土留めとしている。芯材には板材・角材のほか伐採された自然木・河原石などが検出できた。 水田面側の畦畔肩部は崩壊が激しく詳らかではないが、幅20cm前後・長さ1.5m前後の板材を立てかけ 角杭を打ち込んでいる。また、旧河道面側においても同様の板材が立てられ杭及び矢板によって固定さ れている状況が観察された。また、旧河道側畦畔裾部には20cmから30cm程度の河原石が多量に検出され ており、洪水砂上にある脆弱な旧河道側畦畔側面の補強に使用したものと考えられる。

出土遺物 SSK1002より部材 (W268)、建築部材 (W327・W408)、SWK1001より壁板 (W353)、SWK1006より扉板 (W316)、建築部材 (W407・W425・W428・W442・W443) が出土している。

大畦畔C群(SSK1001·SSK1010a)

検出状況 大畦畔A群とB群を結び北東へ走る大畦畔である。SSK1001・SSK1010aが該当する。

C群の大畦畔は基本的にはSSK1001を中心とするもので、SSK1010aはSSK1001と並行して北側に営まれた畦畔と理解でき、その間を幾本かの直交する畦畔によって区切られていたものと考えられる。

SSK1001 (図版 73~75、写真図版 56~58)

形状・規模 南端は、調査区の中央部においてSSK1002と接続し、北端はSSK1003と接続する大畦畔である。規模は幅約1.5m前後・残存高約0.2m前後、検出総延長約80mを測る。

この畦畔は、後述する第2面の水田面形成時に営まれた大畦畔SSK2001が元となって造られたものである。洪水による第2面埋没後、SSK2001の隆起を復旧し、再度使用したもので、その際に旧畦畔上もしくは畦畔上に堆積した洪水砂上に杭・矢板を打ち込み、多量の板材・角材・河原石を芯材・側材として使用し、大畦畔を再構築したものと考えられる。

特に木組みが顕著であったSSK1001内木組SWK1009・SWK1011・SWK1012について図示した。

SWK1009 調査区北端において検出している。幅約 $1.1 \text{m} \cdot$ 高さ約0.2 mの台形の畦畔SSK2001上中央には芯材として、矢板材、建築部材として使用されていた一辺 $10 \text{cm} \cdot 2 \text{m}$ 程度の角材が使用され、間から人頭大の河原石が多量に検出されている。芯材の両側には一辺10 cm程度の角杭が打ち込まれている。

SWK1011 幅約1.5m・高さ約0.1mの台形の畦畔SSK2002上中央に芯材を置き、両側に角杭を打ち込み土留めとしている。SWK1009と異なり、SWK1011部分では、芯材には板材を平置きとし1列に並べている。河原石の使用も認められない。板材のなかには倉庫に使用された扉材(W314)が含まれており、大畦畔構築時期を推測する資料である。

SWK1012 幅約1.5m・高さ約0.15mの台形の畦畔旧SSK2002上中央に若干の芯材を置き、両肩部近くに角材をおき矢板・角杭を打ち込み土留めとしている。芯材には若干の20cm程度の河原石、板材が遺存しているが、全体に少なく、構築当初の状況は詳らかではない。

肩部の角材は建築部材を再利用したものが含まれ、枘孔が確認できるものが含まれている。また一部には、幅20cm前後・長さ2m前後の板材を立てかけ角杭を打ち込んでいる部分も存在する。

出土遺物 SSK1001より曲柄鍬(W112)、部材(W281)、扉板等の建築部材(W314・W323・W329・W342・W349・W369・W380・W395・W411・W412・W415・W418・W419・W420・W434・W435・W436・W444・W445)、SWK1009より建築部材(W405)、SWK1011より部材(W291)、壁板(W340)、SWK1012より建築部材(W388)などが出土している。

SSK1010a(第17図、写真図版62)

形状・規模 南端はSSK1019と接続し、北半はSSK1009と接続し更に北東へ伸びる大畦畔である。規模は幅約1.0m~1.3m・残存高約0.1m、検出総延長約32mを測る。

この畦畔は、後述する第2面の水田面形成時に営まれた大畦畔SSK2010が元となって造られたものである。畦畔の南半延長13m分はほぼ東西方向に走り(SSK1010b D群)、それに対して北半部は北東へと向きを変えてSSK1001と並行する(SSK1010a C群)。この畦畔は、後述する第2面の水田面形成時に営まれた大畦畔SSK2010が元となって造られたもので、走向についてもSSK2010を踏襲している。洪水によってSSK2010が埋没した後、その隆起を復旧し、再度使用したもので、その際に旧畦畔上もしくは畦畔上に堆積した洪水砂上に杭・矢板を打ち込み、多量の板材・角材・河原石を芯材・側材として使用し、大畦畔を再構築したものと考えられる。

特に木組みが顕著であった部分は 2 箇所存在した(SWK1014・SWK1015)。そのうちSWK1014について図示した。

SWK1014 幅約1.3m・高さ約0.1mの台形の畦畔SSK2010上に芯材を置き、部分的に角杭を打ち込み補強している。SWK1012と異なり、矢板、板材による土留めはなく、芯材に板材・棒状の材を集め、平置きしている。河原石の使用も認められない。また、SWK1011と異なり規則性をもって列状に並べる作業は行っていない。現状では芯材は局所的に確認される。

出土遺物 SWK1014より曲柄鍬 (W114)、田下駄足板 (W189)、扉板等 (W321) が出土している。

大畦畔D群

検出状況 地形に並行して営まれたA~C群の大畦畔に対して、地形に対して直交し、A~C群の大畦畔を結ぶあるいは直交するもしくは調査区外へと伸びる畦畔である。その多くは北西方向に走る。SSK1003・SSK1007・SSK1009・SSK1010b・SSK1012・SSK1016・SSK1017・SSK1018が該当する。

SSK1003 (SSK2003) (図版 78、写真図版 63)

形状・規模 SSK1001・SSK1008が合流し、北北西に伸びる大畦畔である。規模は幅約4.5m・残存高約30cm、検出総延長約14mを測る。

この畦畔は、後述する第2面の水田面形成時に営まれた大畦畔SSK2003が元となって造られたものである。洪水による第2面埋没後、SSK2003の隆起を復旧し、再度使用したもので、その際に旧畦畔上もしくは畦畔上に堆積した洪水砂上に杭・矢板を打ち込み、多量の板材・角材・河原石を芯材・側材として使用し、大畦畔を再構築したものと考えられるが、厳密に新旧の畦畔を識別して調査することは不可能であった。

SSK1003の具体的な構造としては、かまぼこ形の畦畔旧SSK2003上に若干の田下駄・建築部材・板材・角材・自然木などの木片を投入し芯材とし、両肩部近くには角材・板材をおき角杭を打ち込み土留めとしている。芯材には若干の20cm程度の河原石も使用されているが、全体に少ない。

土留めに使用された用材は、西側面では幅20cm前後・長さ1.5m前後の板材が多く使用されており、角 杭を打ち込んで固定している。東側面では径10cm前後・長さ1.5m前後の丸太材や角材が多く使用されて いる。角材には建築部材を再利用したものが含まれ、枘孔が確認できるものが含まれている。

出土遺物 須恵器杯蓋 (1078)、土師器高杯 (1079)・甕 (1080)、田下駄足板 (W189)、蹴放し (W324)、棟木? (W355)、桁材 (W366)、梯子 (W385)、建築部材 (W398) が出土している。

SSK1007 (第17図)

形状・規模 SSK1006より北西に派生する大畦畔である。SSK1003との間に水田区画を造りだしている。幅約 $1 \, \mathrm{m} \cdot$ 高さ約 $0.1 \, \mathrm{m}$ を測る。

出土遺物 田下駄足板(W174)、棟木?(W354)が出土している。

SSK1009 (第17図)

形状・規模 $SSK1010a \cdot SSK1001 \cdot SSK1008 \cdot SSK1004 \cdot SSK1011$ と直交し北西へ伸びる大畦畔である。規模は検出長16m、幅約1.3m・高さ約0.2mを測る。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SSK1010b (図版 79)

形状・規模 SSK1010は南端がSSK1019と接続し、北半はSSK1009と接続し更に北東へ伸びる大畦畔である。規模は幅約1m・残存高約0.25m、検出総延長約13mを測る。この畦畔の南半はほぼ東西方向に走る。

特に木組みが顕著であったSWK1014について図示している。

SWK1014 幅約1.3m・高さ約0.1mの台形の畦畔旧SSK2010上に芯材を置き、部分的に角杭を打ち込み補強している。SWK1012と異なり、矢板、板材による土留めはなく、芯材に板材・棒状の材を集め、平置きしている。河原石の使用も認められない。また、SWK1011と異なり規則性をもって列状に並べる作業は行っていない。現状では芯材は局所的に確認される。

出土遺物 SWK1014より曲柄鍬(W114)、田下駄足板(W189)、扉板等(W321)が出土している。 SSK1012 (図版 80)

形状・規模 $SSK1004 \cdot SSK1013 \cdot SSK1008$ と直交し、北西へ伸びるSSK1001に取り付く大畦畔である。この畦畔は、後述する第 2 面の水田面形成時に営まれた大畦畔 $SSK2012 \cdot SSK2013$ が元となって造られたものである。規模は幅約 $1.2m \cdot$ 高さ約0.3mを測る。

特に木組みが顕著であった部分SWK1013について図示した。

SWK1013 規模は、幅約1.5m・高さ約0.2mの台形の畦畔旧SSK2012上に芯材を置き、両肩部に矢板・角杭を打ち込み土留めとしている。芯材には全長1m幅20cm程度の板材、全長50cm程度の角材のほか径40cmを超える河原石などをいれている。

出土遺物 SSK1012より部材 (W299)、SWK1014より蹴放し (W325) が出土している。

SSK1016 (第17図、写真図版60·61)

形状・規模 SSK1002から派生し北へ伸びる大畦畔である。SSK1016は埋没したSRK2001を横断して 新たに造られた大畦畔である。特に木組みが顕著であった部分(SWK1002)を図示した。

SWK1002 SSK1016の畦畔を形作る木組みである。畦畔の規模は、幅約 $1\,\mathrm{m}$ ・高さ約 $0.2\,\mathrm{m}$ のかまぼこ形の土盛り上に芯材を置き、側面には長尺の板材を立てかけ角杭によって固定している。芯材には全長 $3\,\mathrm{m}$ を越える建築部材を使用している。

SWK1002の特徴は木組み・土留めとして、主に南側面に板材による土留めが行われている点にある。幅約30cm・全長2.5mを超える板材が使用されている。これは、SSK1016がSRK2001を横断して構築されたために、洪水砂の堆積が厚く崩れやすい上流側を保護する意図をもって行われたと考えられる。

出土遺物 SWK1002より部材 (W267)、扉板等の建築部材 (W311・W343・W357) が出土している。 SSK1017・SSK1018 (第17図)

形状・規模 ともにSSK1002より西側へ分岐する大畦畔である。SSK1017は幅約1.2m・高さ約5 cm、SSK1018は幅約1.5m・高さ約0.3mを測る。両者の間が大畦畔に囲まれた水田区画と認識できる。この内、SSK1017は、第2面の大畦畔SSK2017が元となって造られたものである。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

小畦畔

検出状況 小畦畔は調査区の南半部を中心に切れ切れに検出されている。大畦畔SSK1004・SSK1013 西側において検出された小畦畔SSK1024・SSK1025・SSK1026では畦畔が直線的に連続せず、水田区画 1枚から2枚ごとに屈曲・蛇行する状況が読み取れた。

水田区画の状況 第1面において検出できた水田区画は多くはない。水田区画は①並行して走る大畦畔の間を直接小畦畔によって区切ったものと、②大畦畔と小畦畔によって区切られたもの、③小畦畔によって区切られたものがある。

- ①並行する大畦畔はA群・B群・C群ともに、3 m前後の間隔をおいて走っており、その間を大畦畔もしくは小畦畔によって区画している状況がある。小区画が確認されたSSK1003では3 m×3 m程度の区画を検出している。
- ②SSK1013では小畦畔によって2辺もしくは3辺を画された水田を検出しているが、その規模は①同様 $3 \text{ m} \times 3 \text{ m} \times 5 \text{ m}$ 前後の規模である。
- ③第1面において検出できた畦畔のうち小畦畔については消失した部分が多く、③の水田区画を明らかにすることは難しい状況である。幅 $2\,\mathrm{m}\sim4\,\mathrm{m}$ 間隔で出現する小畦畔がSSK1021·SSK1024·SSK1026 周辺などで検出されている。①・②と同様に $3\,\mathrm{m}\times3\,\mathrm{m}$ 程度の区画を作り出していた可能性が高い。

SXK1003

検出状況 調査区北東端、SSK1003とSSK1008が接する地点より検出された集石遺構である。微高地と湿地の境に位置する。

形状・規模 長径約1.5m・短径約1mの楕円形を呈する。拳大の河原石が散乱しており、木製品片・種子などが検出されている。本遺構以外にも周辺には同様の集石が見られるが、SXK1003を含め大畦畔の基部である可能性も否めない。

出土遺物 土師器椀(1081)・高杯(1082)が出土している。

第1面の水田遺構についての小結 第2面では主な導水路としてSRK2001・SRK2002・SRK2003、水田区画に伴って巡るものとして溝SDK2001からSDK2017が存在するが、第1面においては調査区内において導水路は検出されていない。第2面における溝の大半は大畦畔に付随しているが、洪水砂によって埋没し、第1面に引き継がれなかったと考えられる。調査区の西側もしくは更に遠方に水路が存在しているものと考えられる。

畦畔に使用された木製品以外の出土遺物は少なく、水田遺構の時期を確定することは難しい。しかし、水田面直上から6世紀前半の遺物が出土していること、芯材に使用されている倉庫の扉材が古墳時代中期に出土例が多いこと、洪水砂Ⅱb層内から出土する遺物に5世紀末~6世紀初頭の須恵器が含まれてい

ることなどから6世紀前半に営まれたものと推測される。

第1面からは地形に沿った畦畔の他、南北方向を指向する畦畔が各所で検出されている。条里型地割りにのる可能性が高く、7世紀代・9世紀代等の畦畔が重複して検出されているものと考えられる。

(4)第2面 ⑩Ⅲa層上面の概要

第2面は第1面の水田を造る契機となった洪水砂によって埋没した水田跡である。大畦畔・小畦畔のほか、畦畔に伴う溝($SDK2001 \sim SDK2017$)、水田へ水を供給する流路($SRK2001 \sim SRK2003$)・井堰($SZK2001 \sim SZK2004$)を検出している。

水田区画-大畦畔と小畦畔・溝 第1面において検出した大畦畔の大半は第2面においても検出している。第2面が埋没した後、余り時間が経たないうちに大畦畔を復旧したためと考えられる。対して小畦畔は第1面の小畦畔とは場所を違えて検出されており、第1面の水田を造る際に元通りには復旧されなかったものと考えられる。

大畦畔は第1面に其の殆どが復旧されている。即ちその形態も、第1面同様に分類できる。

大畦畔A群(SSK2025 b・SSK2013 南半・SSK2026)

検出状況 微高地の縁辺を南北方向に走る畦畔である。第2面においては明確な大畦畔は殆ど検出できなかった。部分的にSSK2025b・SSK2013・SSK2026が検出されている。これらの畦畔は微高地の縁辺を南北方向に走る溝に沿って営まれている。このなかでSSK2013はSSK2012とともに溝SDK2013をはさみ水田区画に沿って屈曲し北東から北西へと向きを変え、SSK2001に取り付いている。

大畦畔B群 (SSK2002 · SSK2015 · SSK2029 · SSK2030)

検出状況 埋没した旧河道SRK2001に沿って低湿地を南北から北東へと走る大畦畔である。

SSK2002 (第18図)

形状・規模 SRK2001肩部に沿って造られ、第 1 面では復旧されSSK1002となる。規模は幅約 1 $m\sim 1.5$ $m\cdot$ 残存高約 0.2 m を測る。 畦畔は切れ切れに検出され全貌は明らかでないが、 SRK2001 に沿って全域に巡っていた可能性は高い。 調査区の中央部において $SSK2001\cdot SSK2028$ と接続する。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SSK2015 a · b (第18図)

形状・規模 SSK2001と並行して南側に営まれた畦畔である。SDK2005の両肩に営まれている。畦畔の幅は40cm \sim 60cmとやや小規模である。第 1 面では畦畔のみ復旧されSSK1015となる。SSK2029・SSK2030はSSK2015と合流し、北へと向きを変える。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

大畦畔C群(SSK2001 · SSK2010 · SSK2028)

検出状況 大畦畔A群とB群を結び北東へ走る大畦畔である。C群の大畦畔は基本的にはSSK2001を中心とするもので、SSK2010・SSK2028はSSK2001と並行して北側に営まれた畦畔と理解できる。幅約 $3\,\mathrm{m}$ ・全長 $4\,\mathrm{m}$ ・深さ約 $0.4\,\mathrm{m}$ の間を幾つかの直交する畦畔によって区切られていたと考えられる。

SSK2001 (第18図)



形状・規模 南端は、SSK2002と接続し、北端はSSK2003と接続する大畦畔である。規模は幅約1.5 m・残存高約0.3m、検出総延長約80mを測る。調査区中央部においてSSK2013・SSK2025が取り付き、SDK2013はSSK2001に沿って北東へと流れるが、流末は不明である。

出土遺物 SDK2013より須恵器杯(1048)、土師器壺(1049)が出土している。

SSK2028 (第18図)

形状・規模 SDK2006に沿って南肩(右肩)部に営まれた畦畔である。規模は幅約1m・残存高約5cm を測る。小畦畔が分枝し、10~15㎡の小区画水田を造り出している。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

大畦畔D群 (SSK2003・SSK2012・SSK2013 北半・SSK2025)

検出状況 地形に並行して営まれた $A\sim C$ 群の大畦畔に対して、地形に対して直交し、 $A\sim C$ 3 群の大畦畔を結ぶあるいは直交するもしくは調査区外へと伸びる畦畔である。その多くは北西方向に走る。

流路(導水路)と溝

検出状況 第2面では、水田への主たる導水路としてSRK2001・SRK2002・SRK2003が検出されている。いずれも調査区の西半部を南から北に流れるものである。

また、水田区画・畦畔に伴って幅50cm~1 mの溝が存在する。大畦畔の大半は旧河道もしくは溝とセットで存在しており、水田区画に伴い屈曲している。微高地の縁辺部では多条の溝が検出されており、これらの大半は畦畔が消失し、畦畔に伴っていた溝だけが残存したものと推定される。溝の形態についても畦畔と同様の視点で分類が可能である。

SRK2001 (第18図、写真図版 73)

形状・規模 調査区西端を流れる旧河道を検出した。調査区内において約70m北流し、北東へと向きを変えて流れる。緩やかに蛇行しており、流路底は浅い皿形となっている。川岸に造られた畦畔以外には人手が加わっていない流路と考えられる。規模は、幅約 $2 \sim 3$ m・深さ約0.6mの規模を測る。

東肩には大畦畔SSK2002 a・bがあり、各所に護岸の板材が検出されている。水路の深さは約 $25\sim40$ m、幅は約2m~4mと一定しておらず、緩やかに蛇行していることから推して自然流路に手を加え水田への導水路に使用したものと考えられる。SRK2001の北端では井堰跡(SZK2001)を検出している。

SRK2001内から出土した遺物より5世紀末~6世紀初頭にかけての時期が与えられ、第2面水田遺構の時期についても大きく前後しない時期と考えられる。

出土遺物 須恵器杯蓋 (1052)・高杯蓋 (1051~1053)・有蓋高杯 (1054)、土師器壺 (1055~1060)・ 甕 (1061~1071) ・高杯 (1072・1073) ・製塩土器 (1074)、土玉 (C20)、農具 (W106・W109・W 110・W115~W117・W139・W142)、方形容器 (W236~W238)、雑具 (W250・W254・W256・W 258・W259)、部材 (W272・W276・W300)、祭祀具 (W304・W306・W308・W309)、建築部材 (W 331・W333・W346~W348・W351・W352・W372・W376・W379・W387・W400・W406・W409・W414・W416・W423・W429・W437・W438・W441)、砥石 (S28) が出土している。

SRK2002 (第18図)

形状・規模 SRK2001から調査区中程において分枝し、円弧を描き、調査区北半において再びSRK2001と合流する部分を指す。この部分はSRK2001の古い流路にあたり、極端に勾曲した部分(SRK2002)が

真直ぐに貫通しSRK2001となったと考えられる。流路底は浅い皿形となっており、幅約 $2\sim3\,\mathrm{m}$ ・深さ約 $0.3\,\mathrm{m}$ の規模を測る。

出土遺物 土師器高杯(1076)、部材(W264)が出土している。

SRK2003 (第18図)

形状・規模 本流路はSRK3001が埋没し、幅を狭めた流路である。弓形の流路底をもった、幅約1~2m・深さ約0.4mの流路痕跡を途切れ途切れに検出している。本流路は調査区北端においてSRK2001 (2002) と合流する。合流点においては井堰の痕跡が検出されている(SZK2002・SZK2003)。

出土遺物 弥生土器鉢 (723)・直口壺 (733)・甕もしくは壺 (734)、田下駄足板 (W198)、物差し (W301) が出土している。物差しは上層より打ち込まれたものである。

井堰

検出状況 井堰はSRK2001・SRK2003において検出されている。

井堰SZK2001は最終的には第2面を埋没させた洪水によってもたらされた考えられる多量の木器・木片によって埋まった状態で検出された(SZK2001 (新)) 。

下流側には用材は殆ど遺存しないが、同様の土坑が 2 箇所(北壁際に顔を出すものを含め 3 箇所)検出され、下流から埋没に伴い順次造り替えられてきたものと推測される($SZK2002 \cdot SZK2003$)。

SRK2001上流においても河床から不定形の土坑状の落ち込みが検出されており、この部分にも井堰が存在していた可能性が考えられるが、構造物の痕跡は確認されなかった(SZK2004)。

SZK2001 (図版 81~84、写真図版 67~70)

形状・規模 SZK2001は長径8m・短径6m・深さ0.7m程度の土坑を穿ち、杭を打ち、SRK2001と直交して横板や丸太材を渡していたと考えられる。古・中・新の3基が検出され、2度の造り替えが確認され、下流から上流に若干位置を違えて構築されている。土坑は造り替えに伴い拡大したと考えられ、個々の規模は判然としない。

SZK2001 (新) 多量の木製品・木片によって埋まった状態で検出された。木製品・木片は井堰が構築された土坑を充満し、更に幅3.5mの流れとなって北東へと押し出されている。これが、SZK2001 (新) 埋没時のSRK2001にあたる。また、幅1mの規模で北へ流れ出している木製品群がある。これは、SZK 2001 (新) によって分水していた地点から溢れ出たものであろう。構造は以下の通りである。

検出した井堰の全長は3.55m・幅約60cm、残存する高さは前面に開く土坑底から約1m、SRK2001と直交して一辺5cm程度の角杭や幅10cm程度の矢板を打ち、幅20cm~30cm・全長2.4m・厚さ2cmの横板を中心に板材を渡している。構造は第1面において検出した大畦畔に類似している。

SZK2001 (中) 径10cm前後の棒杭を斜め(約60°)に打ち込み、基部には、径10cm前後の横木を渡し、20cm前後の河原石を置いている。水圧を受ける前面には一部に扉材などの板材を立てかけている。杭の間には多量の木片・木製品の破片、人頭大の河原石を入れている。

検出した井堰の全長は4.5m・幅約1.5m、残存する高さは前面に開く土坑底から杭の先端までで約1.3mを測る。杭の間にある多量の河原石は土坑底から約45cmの高さに集中しており、実質の上面部にあたる可能性が考えられる。

SZK2001 (古) 径 5 cm前後の棒杭を斜め(約45°)に打ち込み、基部には、径10cm前後の横木を渡し、20cm前後の河原石を置いている。水圧を受ける前面には一部に板材を立てかけている。杭の間には

多量の木片・木製品の破片、人頭大の河原石を入れている。

検出した井堰の全長は4.2m・幅約1.2m、残存する高さは前面に開く土坑底から杭の先端までで約50 cmを測る。杭の間にある多量の河原石と横木は土坑底から約30cmの高さに集中しており、実質の上面部にあたる可能性が考えられる。

出土遺物 SZK2001より土師器壺 (1075)、農具 (W107・W113・W118・W118)、蓋板 (W218)、机 (W251・W260)、部材 (W287)、舟形 (W305)、建築部材 (W336・W339・W350・W364・W402・W413・W433・W440) が出土している。

SZK2002 (図版 85)

形状・規模 SZK2001の下流より検出した。河底より全長約5.5m・幅約3.5m・深さ約50cmを測る不整な長方形の落ち込みを検出した。

土坑北肩はSZK2003との間が幅約1mを測る細い堤状の張り出しとなっている。張り出し部分の周囲からは拳大から人頭大の河原石が検出されている。SZK2001の状況から推して堤状の張り出し部分には横板を渡した井堰が存在した可能性が高いと判断された。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SZK2003 (図版85)

形状・規模 調査区北壁際より検出した。河底より全長約4.5m・幅約3.0m・深さ約50cmを測る不整な三角形の落ち込みを検出した。土坑北肩は壁際との間が幅約50cmを測る細い堤状の張り出しとなっており、北壁際に向けて更に落ち込みが存在することが確認されている。

張り出し部分の周囲からは板材や拳大から人頭大の河原石が検出されている。SZK2001の状況から堤 状の張り出し部分には横板を渡した井堰が存在した可能性が高いと判断された。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

SZK2004 (第18図)

形状・規模 IIAb区においてSRK2001内より幅約 $3\,\mathrm{m}$ ・全長 $4\,\mathrm{m}$ ・深さ約 $0.4\,\mathrm{m}$ と幅約 $1.5\,\mathrm{m}$ ・全長 $2\,\mathrm{m}$ ・深さ約 $0.4\,\mathrm{m}$ の並列する $2\,\mathrm{基}$ の土坑状の落ち込みを検出している。本地点はSRK2001が北東へ向きを変え、小規模な溝が分岐する地点にあたる。

出土遺物 良好な遺物は出土していない。

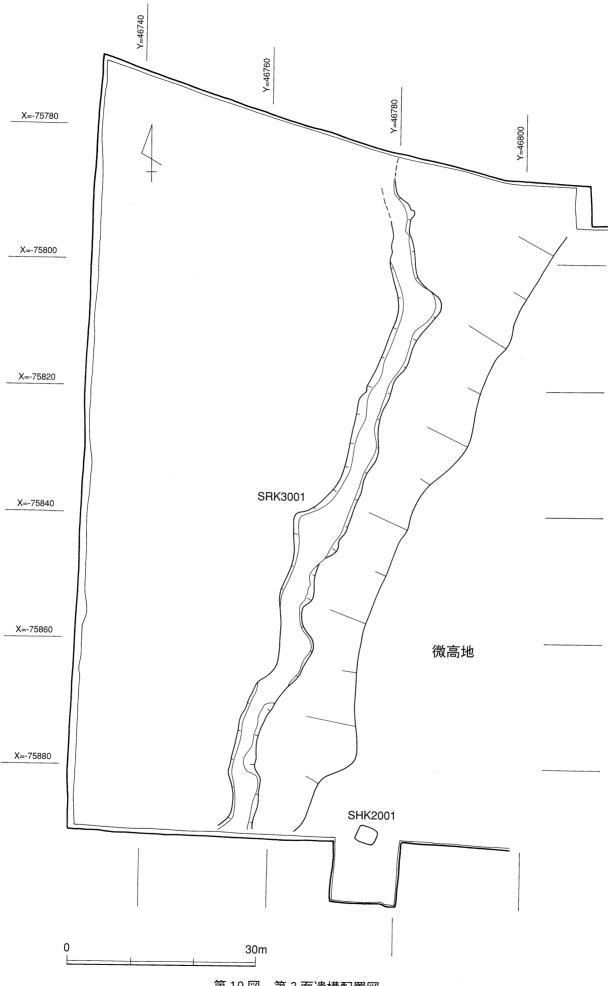
SHK2001 (図版 86、写真図版 71・72)

検出状況 竪穴住居跡は調査区中央南端において検出した。

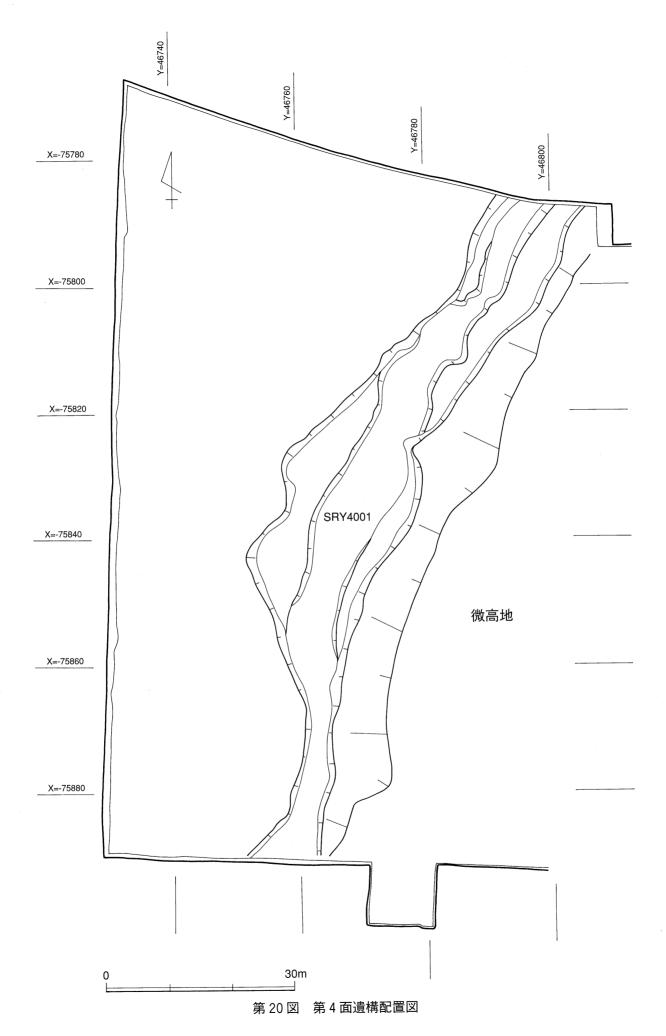
形状・規模 長方形を呈し、長辺をN73°Wにとる。残存する規模は、長辺約2.9m・短辺約2.4m・残存する深さ約0.1mを測る。極めて小さい住居跡である。壁溝は3方に巡るが、柱穴は検出されなかった。壁溝の幅は約8cm、深さは床面から約4cmを測る。

出土遺物 住居跡は焼失しており、屋根材等の炭化材が遺存している。また、床面上からは土師器 甕・壺・鉢のほか人為的に持ち込まれたと考えられる河原石 1 点が出土している。遺物から、住居跡の 時期は 4 世紀中葉と考えられ、第 2 面と第 3 面の中間に位置すると考えられる。

第2面の水田遺構について小結 第2面では主な導水路としてSRK2001・SRK2002・SRK2003、水田 区画に伴って巡るものとして溝SDK2001からSDK2017が存在する。



第19回 第3面遺構配置図



第2面の畦畔には使用された木製品以外の出土遺物は少なく、第2面の水田遺構の時期を確定することは難しい。しかし、旧河道を埋没させた洪水砂IIb層内から出土する遺物や井堰内からの出土土器から5世紀後葉には営まれていたものと推測される。

(5)第3面 ①層上面の概要

自然流路SRK3001以外に第3面に属する遺構は検出できなかった。

SRK3001 (第19図、写真図版74)

検出状況 旧河道の東肩(微高地の西裾部)に沿って南北方向に走る自然流路を検出した。

形状・規模 幅約3~4 m・深さ約0.5 mの規模を測る。蛇行が著しく、人手が加えられたものではない。SRK3001は第2面にいたっても完全には埋没せず、幅をせばめながら、SRK2003として機能し、SRK2001と調査区北端において合流し、井堰SZK2002が造られている。

出土遺物 流路南端を中心に古墳時代前期の土師器高杯や弥生土器無頸壺 (730)・壺 (731) 等が出土 している。

(6)第4面 ⑫IVa層上面の概要

自然流路SRY4001以外に第4面に属する遺構は検出できなかった。

SRY4001 (第20図、写真図版75)

検出状況 旧河道肩部(微高地の西裾部)に沿って南北方向に走る自然流路SRY4001を検出した。

形状・規模 深さは約0.5m ~ 0.8 m、幅は約5m ~ 20 mと一定せず、蛇行する自然流路である。

出土遺物 流路内からは倒木の他、弥生時代前期~後期にかけての土器片(723~729)が出土しており、特に流路底の砂利層からは弥生時代前期の無頸壺片が数点出土している。

(7) 小結

調査の結果、主に古墳時代中期~後期にかけての水田遺構を検出した。その他に鎌倉時代及び戦国期の溝・畦畔・水田面も部分的に調査し、7世紀後半の遺構・遺物、9世紀代の遺物も検出している。出土遺物の大半は木製品であり、大部分は第1・2面の畦畔用材もしくはその遊離材と洪水砂 II b層とともに押し流されてきた木製品群である。

水田の時期は、調査区北西部に隣接する加都遺跡宮ケ田地区住居跡群の時期とほぼ同時期である。微高地上に立地する集落と低湿地に位置する水田がセットで検出できたことで但馬地方における古墳時代の歴史景観の復原の好資料となった。

個々の水田遺構については、小畦畔の遺存状態が悪く水田区画個々の規模については十分な成果は得られなかったが、大畦畔や井堰の構造のデータが得られた。

また、畦畔基部に帯状に残った洪水砂を追うことによって畦畔を確認できることが新水北B地区では可能であったが、とりわけ低湿地での木製品の遺存状態がよい但馬地域では、畦畔の芯材の配置の追跡と併用すれば水田区画を判別することが可能であることが判明した点は成果と言える。

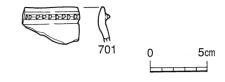
第2節 遺物

1. 土器

(1) 縄文時代

新水北地区 I a層下半~II 層(第 21図、写真図版 79)

701は突帯文土器の口縁である。やや外反して立ち上がる口縁部の直下に刻み目突帯文をもっている。内外面ともナデが施されている。刻み目はD字形で、晩期の船橋式と考えられる。



第21図 新水北地区出土の縄文土器

(2) 弥生時代

SHY001 (図版 87、写真図版 79) 宮ケ田III地区

出土土器は弥生時代後期の3点である。

702・703は体部から「く」の字状に外反する口縁部をもつ甕である。ともに口縁端部は面をもち、わずかに肥厚させている。702の口径は17.8 cm、703は口径27.3 cmの大型甕である。体部の残存率はよくないが、どちらも体部内面は箆削り調整である。702の体部は球形に近くなると思われ、古墳時代に降る可能性がある。

704は長頸壺あるいは直口壺の口縁部であるが、小さな破片のため、口径は不明である。端部下外面には5条の沈線を施している。但馬という地域的特徴からすれば、擬凹線と呼ぶべきかもしれないが、文様のみから判断すると沈線と呼ぶべきものである。

SHK050 (図版 87、写真図版 79) 宮ケ田Ⅲ地区

705に示した壺あるいは甕の肩部破片1点がある。横位の綾杉文が施されているが、櫛先刺突によるものである。時期的には古墳時代に降るものかもしれない。内面は刷毛調整である。

宮ヶ田Ⅲ地区包含層(水田部)(図版87、写真図版79・80)

水田部の包含層出土土器のうち、弥生時代のものはすべて後期の所産である。

706は長頸壺口縁部で、端部先端のみ若干内傾する。内外面とも刷毛調整で、口径は12.0 cmを測る。

707は壺の体部破片であろう。体部最大径は13.0 cmで、外面は縦刷毛、内面は横方向の箆削り調整である。長頸壺の可能性が高いが、706とは別個体である。

708は底部中央に径 5 mmの焼成前穿孔が認められる土器である。器形や調整法では甕の特徴を示しているが、口縁部が長く丸みをもつ点が特異である。外面は縦刷毛、内面は箆削りであり、下半が縦、上半は横方向に施している。体部下半が丸みをもつとともに底部が小さいことから、古墳時代に降る可能性もある器形である。口径9.2 cm、器高12.7 cm、体部最大径9.5 cm、底径2.7 cmを測る小型の土器である。

709は広口壺の上半部である。体部から曲折してやや外傾しながら上方に伸びたのち、大きく外反する口縁部をもつ。端部はわずかに上下に拡張し、外傾ぎみの端面に2条の擬凹線を施す。但馬では古墳時代前期に多く見られる器形であるが、端面に擬凹線を施している点から、後期最終末から古墳時代初頭の可能性が高いと思われる。口径15.8㎝で口縁部内面は箆磨き、体部内面は横刷毛、外面は縦刷毛調整であるが体部のみ箆磨きを加えている。

710は壺体部の破片である。外面に箆描きの細線(複合)鋸歯状の文様を描いている。器壁が薄く外面調整が横刷毛であることから、古墳時代に降る可能性が高いものである。細線鋸歯文は3箇所認められるが、全体が示すものは不明である。

711・712は甕の肩~口縁部片である。711の口縁部は体部から曲折して外上方に短く伸びたのちさらに曲折するが、712は体部から曲折したのち外反する。ともに口縁端部を上下に拡張し、凹線あるいは擬凹線を端面に施している。凹線は712のほうが細くはっきりし、711は幅広くあまい。体部の調整はともに外面縦刷毛、内面横斜め方向の箆削りであるが、斜めの方向が逆になっている。口径は711が17.6cm、712は17.8cmとほぼ同じである。

713は器台口縁部片で、口径22.2㎝を測る。口縁端部は主として上方に拡張し、下方にも広げて大き く幅のある面をつくり出し、9条の擬凹線文を加えている。端部上端はやや角張る。調整は内外面とも 箆磨き調整である。口縁端部の外傾度が大きいため、後期最終末頃の可能性が高いと思われる。

714は高いつまみ部をもつことから、蓋と考えられる。蓋部は外湾する。口径 $11.3\,\mathrm{cm}$ 、器高 $5.1\,\mathrm{cm}$ である。内外面とも刷毛調整で、内面はナデを加えている。

715は把手であるが、横断面が長方形を呈することから、後期前半に遡る可能性が高い。大型甕などの把手と考えられる。

716は脚径12.7 cmの脚台部である。端部は丸く、外面刷毛、体部内面は箆削り、脚部内面はナデ調整である。甕や鉢の脚部と考えられる。

717も脚部であるが、径5.3cmと小さく短い。体部は外面箆磨き、内面刷毛調整であることから、鉢や壺であろう。脚部はナデ調整である。

718は甕と思われる突出気味の底部である。底径7.7㎝を測る。外面刷毛調整、内面はナデ調整のようにもみえる。底面は箆削りを施している。甕であろう。

719は有孔の底部である。中心からやや外れた位置に径 6 \mod の円孔を焼成後に穿っている。甕転用の可能性が高い。底部端はやや不明瞭であるが、径4.3 \mod を測る。

宮ヶ田||地区包含層(図版87、写真図版80)

弥生時代の土器は3点図示したが、すべて後期である。

720は口径17.1 cmの大型長頸壺の口縁部である。外上方に開きながら伸びたのち、外反する口縁部で、端部は上下に拡張し、内傾する端面に 4 条の凹線文を施す。外面は刷毛調整。後期前半の所産であろう。

721は器台口縁部で、口縁端部は下方にのみ拡張する。拡張部外面には 2 条のあまい凹線と 2 個一対の竹管円形浮文を貼り付ける。口縁部を下方にのみ拡張する器台は近畿北部では見かけないものであり、搬入品の可能性がある。色調は 7.5 YR $8/6\sim8/8$ で黄橙色系であり、他の土器と差がある。畿内では後期後半に編年される特徴を有する。口径 17.9 cm で杯部は少し湾曲している。

722は径20.5㎝の脚部であり、4箇所と推定される円形透孔を穿っている。脚端部上側には匙面を呈する部分があり、凹線のようでもある。外面は縦刷毛、内面は横方向の箆削り調整である。裾部は大きく外反し、器台や高杯の脚部であろう。

SRY4001 新水北地区

弥生時代前期(図版88、写真図版81)

新水北地区のSRY4001出土土器のうち、弥生前期のものを2点示した。

723は甕胴部上半であるが、胴部下半および口縁部も欠損している。口縁直下と思われる上部には 6 条の箆描き沈線を $3 \sim 7$ ㎜間隔で施し、下から 4 段目までの沈線間には刺突文を加えているが、下から $1 \cdot 3$ 段目は破片中央より左側にのみ施している。施文前の外面調整は細かい刷毛で、内面はナデである。沈線の本数が多く、加飾気味であることから、前期後半~末と思われる。

724は壺胴部最大径部分の小破片で、2条の突帯を貼り付け、刻みを加えている。10YR 8 / 2 灰白色 ~ 5 / 2 灰黄褐色で、全体的に白っぽい色調である。

弥生時代後期(図版 88、写真図版 80·81)

弥生時代後期の土器を 725~729に図示したが、古墳時代に降るものも含んでいる。

725は図上復元をおこなった甕破片で、口径18.4 cm、最大径18.1 cm、底径6.6 cm、推定高20.9 cmである。体部から「く」字状に曲折した口縁の端部を下方にのみ拡張しているが、端面は無文である。体部外面上半は縦刷毛調整、下半には箆磨きを加えている。体部内面下半は縦方向、上半部では斜め横方向の箆削り調整である。口縁端部を下方にのみ拡張する点でやや異なるが、外面に箆磨きを施している点や内面の箆削りが口縁部境の屈曲部まで及んでいることにより、谷本進氏の但馬V-1様式(谷本1992)に比定できよう。

726は複合口縁壺の口縁部である。直立する筒状の頸部から大きく外反したのち屈曲して外上方に伸びる。端部は下方に少し肥厚させている。口径26.7㎝を測る。残存している頸部下端は体部との境と思われる。なお、筒部は径14.0㎝で、若干外方に膨らむ。古墳時代前期布留式段階の土器である。

727の甕は、球形に近い体部から「く」字形に外反して外上方に直線的に伸びる口縁部を有する。端部は丸い。口径15.8 cm、体部最大径21.4 cmで、体部外面は縦刷毛、内面は縦斜め方向の箆削り調整であるが、内面屈曲部下には斜め刷毛調整が残る。庄内期以降の土器であろう。

728は底径10.5cmの壺または大型甕の底部である。底部はやや突出し、内外面とも刷毛調整である。 後期後半以降のものと思われる。

729は中実・棒状の製品であるが、平面的には楔形に近く、図下方のみ欠失している。残存長は9.9cm である。断面は卵形を呈するが、幅広側の平面片側(平面図の下方)のみ凹面を呈している。何かの把手と考えられるが、直線的であることから、壺・甕・鉢あるいは甑・鍋といったものではないようである。あるいは、杓子形土器の柄部分かもしれない。

SRK3001 (図版 88、写真図版 81) 新水北地区

730は無頸壺の上部である。焼成前の紐通し孔が穿けられている。口縁直下とやや下がった位置に、刻目を加えた突帯を貼り付けている。口径7.8 cmを測り、736・739と同形で、同一個体の可能性もある。 731は刻目を加えた突帯を貼り付けたものである。壺と思われるが、部位がはっきりしない。頸部あ

るいは口縁付近の可能性がある。730とともに前期後半の所産である。

SRK2003 (図版 88、写真図版 80·81) 新水北地区

732は短い脚台がつく鉢で、口径14.0 cmを測る。口縁部は受け口状に屈曲している。内外面とも細かい箆磨き調整を施している。器高7.5 cm、脚部径は5.7 cmを測る。鉢部は浅く外に広がる形であるため、

後期末~庄内期の所産と思われる。

733は口径10.8cmの長頸壺あるいは直口壺で、内外面とも刷毛調整である。口頸部が短く体部も張らないことから、後期後半以降の可能性がある。

734は肩の張る小型甕あるいは壺の体部である。外面は太筋の叩き調整、内面上半には刷毛目が残り、下半は縦方向の箆削りを加えている。胴部最大径14.0 cm、平底の径は5.0 cm、残存高は13.1 cmを測る。形態的には後期初頭に通じる部分もあるが、やや雑なつくりにより時期が降る可能性も考えられる。

新水北地区包含層

弥生時代前期(図版88、写真図版81)

736は $730 \cdot 739$ と同じ無頸壺である。口縁端部直下とその約 5 cm下側に各 1 条の突帯を貼り付け、突帯上部に刻目をめぐらせている。口縁端部は丸いが、破片が小さく口径は不明である。外面は箆磨き調整、内面および口縁部は横ナデ調整である。 \mathbb{I} a層以下からの出土である。

737は逆「L」字形に近い甕口縁部小片である。体部から大きく外反してほぼ横に短く伸びる口縁部である。端部はやや角張るが、三角形に近い。端部には刻み目を加え、口縁部上面には竹管文を施しているが、小片のため竹管文が全周するかどうか不明である。また、現状では体部外面の文様も確認できない。前期後半~末の可能性がある。II a層から出土している。

739は730・736と同じ器形の無頸壺である。730・736は同一個体の可能性があるが、739のみは別個体のようである。体部最大径付近の形態は直立気味で、上半部途中の突帯直下あたりで屈曲して外湾気味に内傾している。体部下半以下は不明であるが、茶釜のような形である。体部最大径は22.4㎝を測る。口径は8.8㎝で、口縁端部は少し肥厚しており端部は丸い。外面口縁部直下とその4㎝下方および胴部中央最大径付近に各1条の突帯を貼り付けている。突帯の断面は三角形で、突帯上部に刻目をめぐらせている。730・736とは口縁端部の形態や突帯の位置の差は若干あるものの、突帯断面形態や刻目を施す点では同一個体とも思えるほど似通っている。内外面の調整は箆磨きを非常に密に施しており、外面には煤とも思える黒褐色のものが薄く付着している。胎土には2㎜前後の砂粒を含んでいるが、粘土自体は精良である。前期の後半段階に編年されよう。 I a層からの出土である。

弥生時代中期(図版 88、写真図版 81)

735は底部であり、外面が刷毛調整であることから、甕である可能性が高い。底径9.8 cmで底部側面から体部へは直線的に移行している。外面は縦刷毛調整、内面は指押さえとナデ調整である。断面観察によれば接合痕が認められ、それによると、筒状の底部端の内側に粘土紐を足して底部周囲の筒を狭くするのと同時に、底部中央にも薄くひき延ばし、最後に円板状の粘土を足して完成しているようである。中期後半より前の所産の可能性がある。IVa層相当の土層から出土している。

弥生時代後期(図版88、写真図版81)

738の甕は口縁端部を上下に大きく拡張し、端面に幅3m程度の凹線を2条施しているが、下方の凹線が深く刻まれている。体部から曲折して外反する口縁部である。口径は14.0cmを測る。体部は上半のみ残存しているが、丸みがある。体部外面は不定方向の刷毛であるが、縦方向を基本としているようである。内面は横方向の箆削りで、口縁部境まで施している。後期末に近い時期と思われ、いわゆるナデ

甕の祖形のようにもみえる。

(3) 古墳時代

古墳時代の土器は、出土量の大半を占める。図化にあたっては、宮ヶ田Ⅲ地区の微高地上で検出された遺構の埋土から出土した一括遺物の比率を多くし、宮ヶ田Ⅲ地区の水田部・新水北地区の谷地形からの出土遺物は全形の分かるものを中心に選別した。

以下に土師器の型式分類を行ったのち、出土遺物の説明を行う。

土師器の型式分類

本報告及び『加都遺跡 I 』に掲載する古墳時代の土師器について、壺形土器、甕形土器、椀形土器、高杯形土器(以下、「形土器」は省略)等に形式分類し、おのおのについて以下のとおり型式を設定し、それに基づいて記述をすすめる。このほか、器台、竈、甑、製塩土器が出土している。このうち製塩土器は、薄手で小形丸底のものに限られる。これは紀淡海峡周辺部における丸底1式(広瀬 1988)に相当する。

壺

壺A 外反あるいは直立する口縁部をもつ壺。以下のように細分する。

壺Aa 口縁部の長さが器高の1/4程度と短いもの。

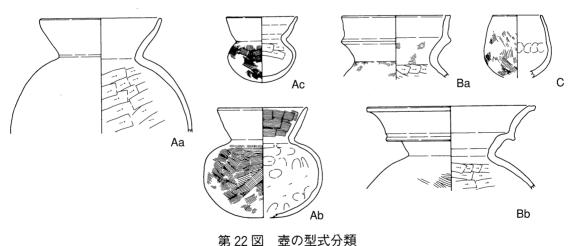
壺Ab 口縁部の長さが器高の1/3以上の比較的長いもの。

壺Ac 壺Abのうち小型のもの。いわゆる小型丸底壺。

壺B 二重口縁をもつ甕。以下のように細分する。

壺Ba 二次口縁が直立するもの。

壺Bb 二次口縁が外反あるいは外傾するもの。



先 22 凶 ・望り至れ力

獲

甕A 直線的あるいは外反する口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめる甕。以下のように細分する。甕Aa 体部から口縁部にかけてなだらかに連続する。

甕Ab 頸部が大きくくびれ、口縁部下端が突出するあるいは稜をもつ。

甕B 内湾する口縁部をもち、口縁端部に内傾あるいは水平な面をもつ甕。以下のように細分する。

甕Ba なだらかに内湾する口縁部をもつ。

甕Bb 内湾する口縁部が端部近くで外反する。

甕Bc 内湾する口縁部が半ば及び端部近くで外反する。

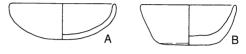


椀

椀A 丸底の椀。

椀B 平底の椀。





第24図 椀の型式分類

高杯A 体部と口縁部の境に明瞭な段をもつ高杯。体部と口縁部の形状により以下のように細分する。

高杯Aa 外反する体部と外反する口縁部をもつ。

高杯Ab 直線的な体部と外反する口縁部をもつ。

高杯Ac 内湾する体部と直線的な口縁部をもつ。

高杯B 体部から口縁部へなだらかに連続する高杯。以下のように細分する。

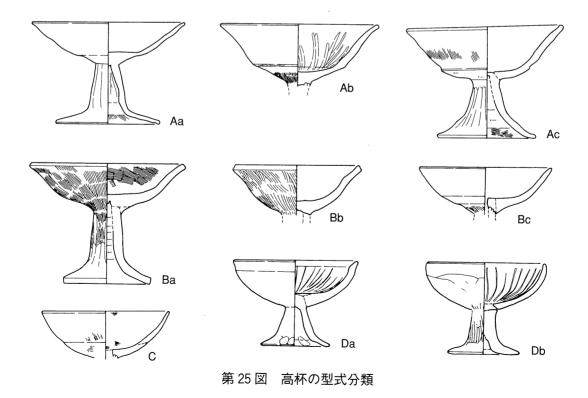
高杯Ba 内湾する体部と外反する口縁部をもつ。外面の調整にハケを多用する。

高杯Bb 外反する体部と直線的な口縁部をもつ。

高杯Bc 外反する体部と内湾する口縁部をもつ。

高杯C 体部と口縁部の境がやや窪む高杯。体部と口縁部はともに内湾する。

高杯D 半球形の体部をもつ高杯。口縁部の形状により以下のように細分する。



高杯Da 短く外反する口縁部をもつ。

高杯Db 直立する口縁部をもつ。体部外面の調整にヘラケズリを多用し、口縁部にヨコナデを行う。 直立する脚柱部と、短く水平にのびる裾部からなる脚部をもつ。

SHK029 (図版 89、写真図版 82) 宮ケ田Ⅲ地区

741は竃、745はSK01、742は床面、740・743・744は埋土から出土したものである。

740は須恵器高杯である。短脚の3方透かしである。

741は土師器壺Acである。体部外面上位にはナデが施され、肩部のやや上付近に爪形の圧痕が付いている。

742は土師器高杯Dbである。杯部の内面は丸く、中実の脚柱部と短く水平にのびる裾部からなる。脚柱部外面はヘラミガキもしくはヘラナデが施され、裾部内面はハケが施されている。口縁部内面はハケが施されている。

743~745は土師器甕Abである。745·746の口縁部は丸みをもっている。745は口縁部の端面に面をもっている。体部外面中位にはススが付着し、底部内面は焦げつきにより黒化している。

SHK030 (図版 89、写真図版 82) 宮ケ田Ⅲ地区

746・748は床面、747は埋土から出土したものである。

746は土師器高杯Dbである。杯部の内底面は平たい。体部は内外面ともナデである。

747は土師器高杯の脚部である。上端に棒による刺突がある。脚柱部の外面はヘラミガキもしくはヘラナデが施されている。内面はナデが施され、裾部にハケ目がわずかに残存している。

748は土師器甑である。平底の面に中央に1つと周囲に4つもしくは5つの蒸気孔を持つと思われる。 外面にはハケ、内面にはナデが施されている。

SHK031 (図版 89、写真図版 82・83) 宮ケ田III地区

SHK031はA・Bの2棟が切れあっている。749はSHK031AのSK02から、750はSHK031Aの床面から 出土している。755・756はSHK031BのSK01から、751~754・757がSHK031Bの上層礫群から出土して いる。758~764はA・B区別できない状態で出土している。

749は土師器高杯Dbである。杯部の内底面は丸みをもつ。脚柱部は中実で、脚裾部内面は円錐形に抉られている。

750は土師器椀Bである。内面から体部外面はナデが、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

751は須恵器高杯である。脚部に3方円形透かしをもっている。

752・753は土師器甕Abである。口縁端部に丸味をもっている。

754は土師器高杯の脚部である。脚部内面はヘラにより抉られている。

755は土師器高杯Cである。杯部内面は摩滅している部分が多いが、わずかにヘラミガキの痕跡が残存している。杯部の口縁部外面はヨコナデで、底部外面はナデである。杯部と脚部の接合部には杯部の見込みから粘土塊が充填されている。

756は土師器高杯Dbである。杯部内面はハケの後ナデが施され、放射状の暗文をもっている。

757は土師器椀Aである。表面はかなり摩滅している。

758は須恵器杯蓋である。天井部のヘラケズリはほぼ全面に施されている。

759は須恵器杯身である。底部外面のヘラケズリは2/3程度で、V字状のヘラ記号が施されている。

760は須恵器無蓋高杯である。波状文の上に2条、下に1条の稜線をもっている。

761は土師器高杯Abである。大型の器形で、口縁部の内外面はヨコナデ、底部の内外面はナデが施されている。

762は土師器高杯Dbである。 756とほぼ同じ器形・調整である。

763・764は土師器高杯の脚部である。 763は裾部が脚部から緩やかにハの字に開いている。 764は中 実の脚部に円盤状の脚部を付けている。裾部内面はハケが施されている。

SHK032 (図版 90、写真図版 83) 宮ケ田川地区

766は床面、765は埋土から出土している。

765は土師器甕Bbである。口縁端部は丸味をもっている。

765は土師器高杯Dbである。杯部の器高はやや深めである。脚部はやや開き気味で、短いと考えられる。外面は摩滅している。

SHK033 (図版 90、写真図版 83) 宮ケ田III地区

768・770は床面、767・769・771は埋土から出土している。

767は土師器壺Abである。口縁部外面はヨコナデが施され、体部外面中位から底部にかけてはハケの後ナデが施されている。

768は土師器高杯Daである。内底面は平坦で、口縁端部は外反している。見込みは粘土塊が充填されているものと思われる。表面は摩滅している。

769は土師器高杯Abである。稜は明瞭に段を持っている。

770は土師器高杯Abである。大型の器形で、稜はやや不明瞭である。見込みは粘土塊で充填されている。表面は摩滅している。

771は土師器甑である。2方に把手をもっている。

SHK034 (図版 90、写真図版 83・84) 宮ケ田III地区

772~775は埋土から出土している。

772は土師器壺Abである。外面はヘラミガキ、内面は下半に板ナデが施され、上半は粘土紐の痕跡をよく残している。

773は土師器甕Aaである。体部は外面にハケ、内面に板ナデが施されている。

774は土師器高杯Dbである。表面は摩滅している。

775は土師器の器形不明品である。焼成は硬質で、把手の接合部が残存している。混入した遺物である可能性が高い。

SHK035 (図版 90、写真図版 84) 宮ケ田III地区

SHK035AはほとんどをSHK035Bに切られているため、SHK035Aに明瞭に属する遺物はない。 776・778~780はSHK035B床面から、 777・781・782はSHK035B埋土から出土したものである。

776は土師器壺Abである。体部は外面にハケ、内面に板ナデが施されている。

777・779は土師器甕Bbである。 777は口縁端部の面があまり明瞭でない。 779は口縁端部の面が上方を向いている。

778は土師器甕Aaである。体部は外面にハケ、内面に板ナデが施されている。

780は土師器高杯Acである。大型で深手の器形である。杯部内面から杯部の外面上半まではヨコナデ、 杯部の外面から脚部にかけてはタテハケが施されている、

781は土師器高杯Dbである。表面は摩滅している。

782は土師器高杯の脚部である。脚柱部は中実で、板ナデが施されている。裾部は円盤状で、底部にはハケが施されている。

SHK036 (図版 91、写真図版 84) 宮ケ田Ⅲ地区

783~785は埋土から出土したものである。

783は土師器壺Acである。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面はケズリが施されている。 784は土師器高杯Dbである。表面はかなり摩滅している。

785は土師器甑である。口縁端部の面は上方を向いている。底部にはわずかに蒸気孔の一部が残存している。多孔タイプの蒸気孔と考えられる。

SHK037 (図版 91、写真図版 84) 宮ケ田III地区

786は埋土から出土したものである。

786は土師器高杯Dbである。杯部の底面は平らである。杯部と脚部の接合は挿入である。

SHK038 (図版 91、写真図版 84) 宮ケ田III地区

788は床面から、787はSK01から、789は埋土から出土したものである。

787は須恵器無蓋高杯である。体部外面には波状文が廻らされ、その上に 2 条の稜線、下に 1 条の凹線をもっている。凹線の下にはC字形の把手が付けられている。脚部は四方透かしで、端部は玉縁状に丸味をもっている。

788は土師器甕Aaである。体部外面はナデが施されている。

789は製塩土器である。内外面ともナデが施されている。焼成は硬質で、砂粒を多く含んでいる。

SHK039 (図版 91、写真図版 85) 宮ケ田Ⅲ地区

790~792は埋土から出土したものである。

790は土師器壺Aaである。外面はかなり摩滅しており、ハケ目が若干残存している。

791・792は土師器高杯の脚部である。 792は4方向の円形透かしをもっている。表面は摩滅している。

SHK040 (図版 91、写真図版 85) 宮ケ田Ⅲ地区

793・794は埋土から出土したものである。

793は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜線は丸味をもっている。

794は土師器甕Baである。口縁部の端面は上方を向いている。

SHK041 (図版 91、写真図版 85) 宮ケ田III地区

795~798は埋土から出土したものである。

795は土師器高杯Dbである。杯部の器高が高い。杯部の脚部との接合部付近にはユビオサエ痕が認められる。脚柱部内の上部に串状工具による刺突をもち、杯部中央には充填粘土が確認できる。杯部と脚部の接合は充填方式と考えられる。

796は土師器高杯の脚部である。脚柱部の内面はヘラによりえぐり取られている。

797は土師器椀Bである。内面は平滑にナデが施され、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

798は製塩土器である。内外面ともナデが施されている。焼成はやや軟質である。

SHK042 (図版 92、写真図版 85) 宮ケ田川地区

799~806は埋土から出土したものである。806はSHK044もしくはSHK053に属する可能性が高い。

799~801は須恵器杯蓋である。口縁部内面に面をもっている。 799は天井部と口縁部の境の稜線は比較的鋭いが、 800・801では稜線は認められない。

802~804は須恵器杯身である。口縁端部に面をもたない。

805は壺蓋である。口縁部端部が外側に反っている。天井部外面の 3 / 4 程度がヘラケズリを施されている。

806は土師器壺Baである。口縁部の端面は上方を向いている。

SHK044 (図版 92、写真図版 85) 宮ケ田Ⅲ地区

810はSK03、 $809 \cdot 812 \cdot 813 \cdot 815$ は埋没時の焼土に伴って、 $807 \cdot 808 \cdot 811 \cdot 814$ は埋土から出土したものである。

807は須恵器杯身である。口縁部は高く立ち上がり、口縁端部に面をもっている。

808は須恵器短頸壺である。口縁部肩部からなだらかに上方を向いている。体部下位から底部にかけてヘラケズリが施されている。おそらく、この住居の上から切り込まれたピットに属する遺物と考えられる。

809は土師器甕Bbである。口縁部の端面は上方を向いている。

810は土師器壺Acである。

811は土師器壺Baである。口縁部外面が凹線状にへこみ、端面は内傾している。

812~814は土師器高杯Abである。812は大型のタイプの高杯である。812・813は杯部の稜線の上に 凹線状のへこみをもっている。813・814の脚部の接合は充填と考えられる。

815は土師器高杯の脚部である。3方の円形透かしをもっている。

SHK046 (図版 92、写真図版 86) 宮ケ田III地区

825は床面、816~824は埋土から出土したものである。埋土からの出土遺物にはSHK047のものが含まれている可能性がある。

816~821は須恵器杯蓋である。816・817・819・820は天井部外面がヘラ切り未調整で、818・821はヘラケズリが施されている。816~820は口縁部内面に面をもたず、821は口縁部内面に面をもっている。822・823は須恵器杯身である。底部外面にヘラケズリが施されている。

824は須恵器高杯である。ハの字に開く低い脚部をもっている。

825は須恵器甕である。口縁端部は外側に巻くように曲げられている。体部外面は平行タタキの後カキ目が施されている。

SHK048 (図版 93、写真図版 86) 宮ケ田III地区

826・827はSK01から出土したものである。

826・827は土師器甕Aaである。826は口縁部の端面が外傾している。827は口縁部の端面が上方を向いている。

SHK049 (図版 93、写真図版 86) 宮ケ田III地区

828は埋土から出土したものである。

828は土師器高杯Acである。脚部に2方向の円形透かしを持っている。脚内面の中央部には棒による 刺突が見られるが、刺突内は粘土が充填されている。脚内面以外の表面は摩滅している。

SHK050 A (図版 93、写真図版 87) 宮ケ田Ⅲ地区

829はSK01、831は床面、830は埋土から出土したものである。

829は土師器壺Acである。頸部のくびれはなだらかである。

830は土師器高杯Baである。脚部の接合は挿入と思われる。

831は土師器高杯Dbである。小型で、高さの低い脚をもつと思われる。

SHK050B (図版 93、写真図版 87) 宮ケ田Ⅲ地区

838は竃、837はSK02、832・835・836は床面、833・834・840~842は埋土から出土したものである。

832~834は須恵器有蓋高杯である。832は3方透かし、834は4方透かしである。

835は須恵器腺である。肩部に2条の凹線とその間に列点文が施されている。底部外面下半は回転へラケズリの後ナデが施されている。

836は土師器甕Bcである。口縁部の端面は上方を向いている。

837は土師器甕Bbである。口縁部の端面は上方を向いている。

838・839は土師器高杯Dbである。838の脚柱部は筒状で、裾部は円盤状である。表面は摩滅している。839の内面は斜め方向のハケの後、丁寧なナデが施され、さらに放射状の暗文が入れられている。外面は手持ちヘラケズリが施されている。

840は土師器高杯の脚部である。脚柱部は中実で、裾部は円盤状である。脚柱部外面にはヘラミガキ、裾部内面にはハケが施されている。

841は製塩土器である。内外面ともナデが施されている。焼成はやや軟質である。

842は土師器甑である。底部は平底で、楕円形の蒸気孔が空けられている。外面はナデ、内面はケズリが施されている。

SHK051 (図版 94、写真図版 88) 宮ケ田III地区

847・849はSK01、845は床面、843・844・846・848は埋土から出土したものである。

843は土師器壺Acである。体部外面にはススが付着している。

844は土師器壺Cである。内面は板ナデが施され、外面はナデが施されているが、ひび割れが著しい。

845は土師器甕Aaである。口縁部の端面は上方を向いている。

846は土師器甕Baである。口縁部の端面は内傾している。

847・848は土師器高杯Bbである。体部外面はヘラケズリが施されている。847の杯部底部の脚部との接合部に竹管状の刺突が残存している。

849は土師器高杯の脚部である。円形の透かしをもっている。

SHK052A (図版 94、写真図版 88) 宮ケ田III地区

851は竃から、850・852・853は床面から出土したものである。

850は須恵器杯身である。口縁端部に上方を向く面をもっている。

851は土師器高杯Dbである。杯部の内面は斜め方向のハケの後、丁寧なナデが施され、さらに放射状の暗文が入れられている。外面は手持ちヘラケズリが施されている。脚柱部の上部は中実である。

852・853は土師器高杯の脚部である。852は中実の脚柱部に円盤状の裾部をもっている。脚柱部の外面にはヘラミガキが施されている。853は筒状の脚柱部に円盤状に開く裾部をもっている。

SHK052B (図版 94、写真図版 88) 宮ケ田III地区

855・856はSK03、854は埋土から出土している。

854は土師器甕Baである。小型の製品で、体部外面はナデが施されている。

855・856は土師器高杯の脚部である。855は中実の脚柱部に円盤状の裾部をもっている。脚柱部外面はヘラナデ後ヨコナデが施されている。裾部内にはハケが施されている。856は円盤状に開く脚裾部である。

SHK053 (図版 94、写真図版 88) 宮ケ田III地区

858はSK01、857・859は埋土から出土している。

857は土師器甕Baである。口縁部の端面は上方を向いている。

858は土師器甕Abである。器高の低い甕である。底部内面にはユビオサエが認められ、体部下半にはススが付着している。

859は土師器壺Acである。頸部はしっかり屈曲している。

SHK054 (図版 94、写真図版 88) 宮ケ田III地区

863は竈、861・862は床面、860・864は埋土から出土している。

860は須恵器杯蓋である。稜は鋭いが、突出はしていない。

861は土師器甕Bbである。口縁部の端面は上方を向いている。

862・863は土師器高杯Baである。杯部が深い器形である。862の外面はナデが施され、内面はヘラ状工具により平滑にナデられている。口縁部はヨコナデが施されている。863の表面は摩滅している。

864は土師器高杯Dbである。内底面に丸味をもっている。内面はハケ目の後、ナデが施され、さらに

放射状暗文が施されている。外面は手持ちヘラケズリが施されている。

SHK055 (図版 95、写真図版 89) 宮ケ田Ⅲ地区

865・866は埋土から出土している。

865は土師器壺Acである。口縁部は直線的に広く開く。器壁は薄く、表面は摩滅している。

866は高杯の脚部である。脚部はハの字形に開いている。表面は摩滅している。

SHK056 (図版 95、写真図版 89) 宮ケ田Ⅲ地区

867・868は埋土から出土している。

867は須恵器杯身である。底部のヘラケズリは残存部分にまでは及んでいない。

868は土師器甕Aaである。表面は摩滅している。

SHK057 (図版 95、写真図版 89) 宮ケ田Ⅲ地区

869~874は埋土から出土している。住居跡の切れ合いがあることから、SHK058の遺物が混入している可能性がある。

869は土師器甕Baである。口縁端部を内側に丸く玉縁状に折り返している。体部外面はタテハケが施されている。

870は土師器甕Abである。

871は土師器壺Baである。口縁部は直線気味に外へ開き、二重口縁部は短く上方へ立ち上がっている。

872は土師器高杯Aaである。稜は鋭く外方へ張り出している。

873・874は土師器高杯の脚部である。873は脚柱部の上部は窪みをもち、ヘラケズリが施されている。脚裾部の内面もヘラケズリが施され、脚裾部の接地面はハケにより平坦にされている。外面はナデが施されている。874は脚柱部が中実で、裾部が円盤状を呈している。脚柱部の外面はヘラミガキが施されている。裾部はヨコナデが施されているが、内面中央部のやや凹んだ面にのみハケ目が残っている。杯部との接合は挿入である。

SHK058 (図版 95、写真図版 89) 宮ケ田Ⅲ地区

880は竃から、877・879・881は床面から、878・882は埋土から出土したものである。875・876は SHK057との切れ合いの部分で出土したものである。

877は土師器甕Abである。

878~880は土師器高杯Dbである。杯部は内底面に丸味をち、脚柱部は中実で、脚裾部は円盤状に開いている。880は内面に放射状の暗文をもっている。

881は土師器高杯Cである。杯部の内底面は平坦で、ハケが施されている。

882は土師器椀Aである。底部外面は手持ちヘラケズリである。

875は須恵器杯蓋である。稜はやや丸味をもつが、突出している。

876は土師器甕Baである。体部は内外面ともナデが施され、内面には指頭痕が認められる。

SHK059 (図版 95、写真図版 89) 宮ケ田Ⅲ地区

883は床面から、884は埋土から出土したものである。

883は土師器甕Baである。口縁部の端面は上方を向いている。

884は土師器高杯の脚部である。脚柱部は中実であるが、下端部にはくぼみをもっている。脚柱部外面はヘラミガキもしくはヘラナデが施されている。脚裾部は円盤状で、裾部内面にはハケ目が施されている。

SHK060 (図版 96、写真図版 90) 宮ケ田III地区

床面から886~890、埋土から885が出土している。

885は須恵器杯蓋である。稜は鋭く突出している。

886は土師器壺Aaである。口縁端部は内側に巻き込むように丸味をもっている。

887は土師器高杯Bcである。杯部は内底面が平坦である。脚柱部は中空で、緩やかに開き、裾部で大きく開いている。裾部内面にはハケが施されている。杯部と脚部の接合は杯部底に直接取り付いている。

888.889は土師器高杯Bbである。杯部は内底面が平坦である。杯部と脚部の接合は挿入で、脚柱部の中心に下方から刺突がなされている。

890は土師器高杯Acである。杯部の稜は段状に突出している。口縁部は端部のみ外反し、端面をもっている。杯部の口縁部内面はヨコハケの後軽くナデが施され、口縁端部にはヨコナデが施されている。さらにその上に放射状の暗文が入れられている。杯部の底部内面はナデが施されている。杯部の口縁部外面はタテハケ後ヨコナデが施されれている。杯部の底部外面は稜の下側にヨコハケが施されたのち、ナデが施されている。脚部は脚柱部が脚裾部に向かって緩やかに広がり、脚裾部の端部は丸味をもっている。脚柱部外面は縦方向のヘラミガキ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。杯部と脚部の接合は挿入である。

SHK061 (図版 96、写真図版 90) 宮ケ田III地区

SHK061Eの周壁溝から892、床面から891、埋土から893が出土している。

891は土師器甕Baである。口縁端部はわずかに内傾する面をもち、口縁の内端縁は内側に突出している。

892は土師器甕Bbである。底部内面には指頭痕が認められる。体部外面にはススが付着し、底部内面にはコゲ付きが認められる。

893は土師器高杯Abである。杯部は器高が低く大きく開いている。稜は鋭くなく、稜の直上がわずかに凹んでいる。口縁部内面はヨコハケの後ヨコナデ、底部内面はヨコハケ後ナデ、口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、底部外面はヨコナデが施されている。杯部と脚部の接合は挿入である。

SHK062 (図版 96、写真図版 90) 宮ケ田III地区

 $897 \cdot 900$ は竈から、905は床面から、 $894 \sim 896 \cdot 898 \cdot 899 \cdot 901 \sim 904$ は埋土から出土したものである。 $897 \cdot 900$ は竈破壊直後に置かれたもので、住居跡の廃絶した時期を示すものと思われる。

894は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の凹線はわずかにへこむ程度である。口縁端部には面をもっていない。

895~901は須恵器杯身である。895は口縁部の端面がほぼ水平である。986は口縁部の端面が内傾す

る凹線状の端面をもっている。897は不明瞭であるがわずかに端面の痕跡を残している。898~901は口縁端部に面をもたない。901は口縁部の立ち上がりが低い。901は底部外面はヘラ切り未調整で、その他はヘラケズリが施されている。

902は土師器壺Baである。一次口縁の外端が稜をなして突出し、口縁部の端面は水平である。

903は土師器甕Bbである。口縁端部は丸味をもっている。

904・905は土師器甕Aaである。905は体部が球形の小型甕である。表面はかなり摩滅しているが、体部外面の調整はナデと思われる。

SHK064 (図版 97、写真図版 91) 宮ケ田Ⅲ地区

906・907はSK01より出土したものである。

906は須恵器壺である。口縁端部は上方に拡張し、端面の下端は突帯状に突出している。頸部に1条の突帯を廻らし、その上下に波状文が入れられている。

907は土師器甕Aaである。口縁部は長く、大きく外反して開いている。端部は丸味をもっている。

SHK066 (図版 97、写真図版 91) 宮ケ田Ⅲ地区

915は竃から、908~914・916は埋土から出土したものである。

908は須恵器杯蓋である。天井部のヘラケズリはほぼ前面に及んでいる。口縁部の端面は内傾し、凹線状である。

909は須恵器杯身である。口縁部の端面は内傾している。

- 910は土師器壺Cである。体部外面はタテハケ、口縁部外面はヨコナデ、内面はナデが施されている。
- 911は土師器甕Aaである。口縁部は長く、大きく外反して開いている。端部は丸味をもっている。
- 912は土師器甕Bbである。口縁端部は明瞭な面をなさず、丸味をもっている。
- 913・914は土師器高杯Daである。底部内面はナデ、口縁部内面下位~口縁部端部外面はヨコナデ、口縁部外面下位~底部はナデが施されている。内面には放射状暗文が入れられている。

915は土師器高杯Dbである。口縁部内面はヨコナデが施され、内面には放射状暗文が入れられている。

916は土師器甑である。口縁部はわずかに開きながら立ち上がり、底部は丸くすぼまっている。蒸気 孔は円孔の周囲に楕円孔を配するものと思われる。体部外面にはタテハケ、体部内面にはヘラケズリが 施されている。

SHK067 (図版 97、写真図版 91) 宮ケ田III地区

917~919は埋土から出土したものである。

917は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりはやや低く、端面は内傾している。

918・919は土師器甕Aaである。 918は口縁端部に丸味をもっている。体部外面はタテハケ後ナデ、体部内面はヨコナデが施されている。

SHK068 (図版 97、写真図版 91) 宮ケ田Ⅲ地区

920はSK01から、921・922は埋土から出土している。

920は土師器甕Baである。口縁端部はあまり明瞭な面をなさず、内側に巻き込むようになっている。

体部外面はタテハケが施されるが、上端のみョコハケが施されている。

921・922は土師器高杯Baである。 921は表面が摩滅しているのかもしれないが、外面にハケ目は認められない。杯部と脚部の接合は挿入である。脚柱内上端には竹管状の刺突がなされている。

SHK069 (図版 98) 宮ケ田Ⅲ地区

923はピットから出土したものである。

923は土師器高杯Cである。体部と口縁部の境が段状に稜をなしている。杯部と脚部の接合は挿入である。表面は摩滅している。

SHK070 (図版 98) 宮ケ田III地区

924は埋土から出土したものである。

924は土師器壺Acである。口縁部は内湾しながら開き、体部は肩が張っている。口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はヘラナデが施されている。

SHK071 (図版 98、写真図版 91) 宮ケ田Ⅲ地区

925~931は埋土から出土したものである。

925・926は土師器甕Aaである。925は口縁部が端部付近で内湾気味になり、端部は丸味をもっている。 体部外面がほとんど摩滅しているため判然としないが、ナデが施されているようである。926は口縁部 が端部付近で内湾気味になり、端部は上方を向く面がやや不明瞭になっている。体部外面にタテハケ後 ヨコハケが施されている。

927・928は土師器壺Acである。927は短く外側に開く口縁をもち、928は上方に長く延びる口縁をもっている。

929は土師器高杯Acである。稜は段状に突出し、口縁は端部付近でやや外反している。端部には面を もっている。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデで、内面には放射状暗文が入れられている。

930は土師器高杯Aaである。杯部の稜は不明瞭である。杯部内面には放射状暗文が入れられている。脚柱部は筒状で、外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが施されている。裾部は外面にタテハケ、内面にヨコナデが施されている。杯部と脚部の接合は接合である。

931は土師器高杯の脚部である。脚柱部から下に向かって開き気味である。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが施されている。裾部はヨコナデが施されている。

SHK072 (図版 98・99、写真図版 92・93) 宮ケ田Ⅲ地区

 $933 \cdot 941 \cdot 948$ はSK02から、932は南側主柱穴から、 $935 \sim 937 \cdot 940 \cdot 942 \cdot 944$ は床面から、 $934 \cdot 938 \cdot 939 \cdot 943 \cdot 945 \sim 947$ は埋土から出土したものである。

932は土師器甕Aaである。口縁部は直線的に外方へ延び、先端は尖り気味である。口縁部はヨコナデ、体部外面はヨコハケもしくは斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部内面は粘土 紐の接合痕をよく残し、所々に指頭圧痕が認められる。体部の下半はススが付着している。

933は土師器甕Baである。口縁端部に水平な面をもっている。体部外面はタテハケ後肩部にのみョコハケ、体部内面は横方向のヘラケズリが施されている。

934は土師器甕Bbである。口縁部の端部は水平で、外縁が外側に突出している。

935・936は土師器壺Aaである。935は口縁が直線的に開き、端部は丸味をもっている。口縁部内面~体部外面上位はヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部下半には大きな黒斑が付いている。936は体部外面にタテハケ後肩部にのみヨコハケ、体部内面は横方向のヘラケズリが施されている。933の調整と共通している。

937~939は土師器壺Acである。937は口縁部と体部の境がなだらかで、口縁部は外反しながら開いている。体部外面上位にナデ、体部内面にヘラナデが施されている。体部下半にススが付着している。938は口縁部と体部の境が明瞭で、口縁部は直線的で、先端部が尖り気味である。体部内面は粘土のひび割れが多く、斜め方向の粘土紐の接合痕が認められる。胎土の色調は赤橙色である。

940・942・943は土師器高杯Abである。口縁端部と脚裾部端部に面をもち、稜の上部が窪んでいる。 杯部は口縁部外面にタテハケ後ナデ、口縁端部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ後ヨコナデ、底 部外面にナデ、底部内面にヨコハケ後ヘラミガキが施されている。脚部は筒状で、脚柱部外面にヘラナ デ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部外面にナデ、脚裾部内面にヨコナデが施されている。杯部と脚部 の接合は充填である。

941は土師器高杯Acである。成形・調整技法は940と基本的の同一であるが、杯部内面にハケの痕跡を残さないのと脚柱部外面にタテハケが施されている点が異なっている。

944・945は土師器高杯Baである。杯部と脚部の接合は充填である。944は口縁端部にわずかながら面をもっている。杯部は外面にタテハケ後口縁部のみョコナデ、口縁部内面にョコナデ、底部内面にナデが施されている。内面には黒斑が付いている。脚部は脚柱部外面にヘラナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部外面にョコナデ、脚裾部内面にョコハケが施されている。945は口縁端部に面をもたず、表面がほとんど摩滅している。

946は土師器高杯Cである。杯部と脚部の接合は充填である。口縁部外面はユビオサエ後縦方向のナデ、 底部外面はヘラケズリ、内面はユビオサエ後ナデが施されている。

947・948は土師器高杯の脚部である。脚裾部端部に面をもっている。947は脚柱部外面にヘラミガキ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部にヨコナデが施されている。948は脚柱部外面にヘラミガキ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部外面にタテハケ後ヨコナデ、脚裾部内面にヨコハケが施されている。

SHK073 (図版 99、写真図版 93) 宮ケ田Ⅲ地区

949~952は埋土から出土したものである。

949は須恵器杯蓋である。天井部は平坦で、口縁端部の内傾する面は沈線状である。

950は土師器高杯Daである。杯部は深く、器壁が厚い。杯部と脚部の接合は挿入である。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、底部外面はタテハケ後ナデ、口縁部内面はヨコナデが施されている。

951は土師器高杯の脚部である。脚柱部は中実である。脚柱部外面はヘラナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部はヨコナデが施されている。

952は土師器甕である。頸部のくびれがなく、桶状の形態である。底部は丸底である。底部内面はナデ、体部内面~口縁部外面はヨコナデ、体部外面は粗いタテハケ、底部外面は粗いナデが施されている。底部外面は赤橙色を呈し、体部外面に若干ススが付着している。内面には焦げ付きなどは確認できない。

SHK074 (図版 99・100、写真図版 93・94) 宮ケ田III地区

962は竃から、 $956\cdot957\cdot960$ はSK03から、 $955\cdot958\cdot961$ は床面から、 $953\cdot954\cdot959\cdot963\sim965$ は埋土から出土したものである。

953は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜線は鋭く突出し、口縁端部に内傾する面をもっている。

954は須恵器杯身である。口縁端部に内傾する面をもっている。

955は須恵器高杯の脚部である。短脚で、3方の長方形透かしをもっている。

956は土師器壺Acである。内面はヨコハケ後ヨコナデ、外面はタテハケ後ヨコナデが施されている。

957は土師器甕Aaである。口縁端部内面に水平の面をもっている。口縁部内面はヨコナデ、口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部内面はヘラケズリ、体部外面は粗い原体のタテハケが施されている。

958は土師器甕Bbである。口縁端部の面はやや外傾している。

959は土師器甕Bcである。口縁端部に丸味をもっている。

960は土師器高杯Bcである。杯部と脚部の接合は挿入である。表面は摩滅している。

961~963は土師器高杯Daである。961は口縁部内面が面状になり、脚裾部端部に面をもっている。杯部は底部内面にナデ、口縁部にヨコナデ、底部外面にタテハケ後ナデが施されている。内面には放射状暗文が入れられている。脚部は脚柱部外面にヘラミガキ、脚裾部はユビオサエが施され、脚柱部内面は曲げしわが見られる。杯部と脚部の接合は挿入である。962・963は961とほぼ同様である。

964・965は土師器高杯Dbである。964は杯部の口縁端部外面~口縁部内面にヨコナデ、底部内面にナデ、底部外面にヘラケズリが施されている。脚部は中実で、脚柱部外面にナデ、脚裾部にヨコナデが施されている。杯部と脚部の接合は接続である。965も964とほぼ同様である。

SHK075 (図版 100、写真図版 94) 宮ケ田III地区

970はSK01から、972はSK02から、968・971はSK03から、967・974は床面から、966・969は埋土から出土したものである。

 $966\sim971$ は土師器壺Acである。 $966\cdot967$ は口縁部がやや長く、 $968\cdot969$ は口縁部が短い。 $970\cdot971$ は口縁部が長く、体部は内外面にナデが施されている。

972は土師器高杯Bbである。口縁端部の先端は尖り気味で、裾端部に面をもっている。杯部は口縁部にヨコナデ、底部外面にタテハケ、底部内面にナデが施されている。脚部は外面にタテハケ後ナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内面に斜め方向のハケ後ナデが施されている。杯部と脚部の接合は充填である。

973・974は土師器高杯Baである。973は口縁端部の先端は尖り気味で、裾端部に面をもっている。杯部は口縁部にヨコナデ、底部外面にタテハケ、底部内面にヨコハケが施されている。脚部は外面にタテハケ後ナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内面に斜め方向のハケ後ナデが施されている。杯部と脚部の接合は充填である。974は口縁端部に面をもっている。口縁部にヨコナデ、底部にナデが施されている。底部外面にはナデを施したときの工具痕が残存している。杯部と脚部の接合は充填である。

975は土師器鼓形器台である。胴部に段をもっていない。口縁端部と裾端部に面をもっている。口縁部外面はタテハケで、端部のみョコハケが施されている。口縁部内面はヘラケズリで、口縁端部のみョコナデが施されている。脚部外面はタテハケ後ョコナデ、脚部内面はヘラケズリ、裾部内面のみョコナ

デが施されている。胴部は内外面ともヨコナデである。

SHK076 (図版 100、写真図版 95) 宮ケ田III地区

976・977は埋土から出土したものである。

976は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の凹線と化しており、口縁端部の内傾する面は線状に痕跡をとどめるのみである。

977は土師器高杯Abである。稜線は段状に突出している。口縁部外面にタテハケ後稜際と端部にヨコハケ、口縁部内面にヨコハケ後ヨコナデ、体部外面にヘラケズリが施されている。内面には放射状暗文が入れられている。

SHK078 (図版 100、写真図版 95) 宮ケ田Ⅲ地区

978は埋土から出土したものである。

978は土師器高杯Dbである。脚部は中実である。表面は摩滅している。

SHK079 (図版 100、写真図版 95) 宮ケ田Ⅲ地区

979~982は埋土から出土したものである。

979は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜は鋭く、口縁の端部にやや内傾する面をもっている。

980は須恵器杯身である。口縁端部に凹線状に内傾する面をもっている。底部内面に同心円当て具痕を残している。

981は土師器甕Abである。口縁部端部は丸味をもっている。

982は土師器甑である。口縁部端部は丸味をもっている。

SHK083 (図版 100、写真図版 95) 宮ケ田III地区

983~987は埋土から出土したものである。

983・984は土師器壺Acである。口縁部は広く直線的に開いている。

985は土師器手づくね土器である。

986は土師器高杯Aaである。杯部と脚部の接合は挿入である。表面はかなり摩滅している。

987は土師器甑である。非常に厚手で、内面に粘土を貼り足している。甑とすれば非常に大型の器形である。

SHK084 (図版 101、写真図版 95) 宮ケ田III地区

997は竃から、994はSK01から、988・991・992・995・996は床面から、989・990・993は埋土から出土したものである。

988・989は須恵器杯蓋である。988は天井部と口縁部の境の稜は鋭く突出し、口縁部内面に内傾する凹線状の面をもっている。989は天井部と口縁部の境の稜は丸味をもち、口縁部内面に内傾する面をもっている。

990は土師器甕Aaである。口縁部は外反し、体部は長胴である。体部外面はヨコハケ後タテハケが施

されている。体部外面にはススが付着している。

991~993は土師器甕Abである。体部は球形である。体部外面にはヨコハケ及び斜め方向のハケが施され、体部内面下半にはユビオサエ痕が残存している。体部下半にはススが付着している。

994は土師器甕Bbである。口縁端部の面は水平で、体部外面はヨコハケ後ナデが施されている。

995~997は土師器高杯Daである。995の脚柱部は中実部分が多い。表面は摩滅している。996は口縁部内面と脚裾部端部に面をもっている。杯部は口縁部にヨコナデ、底部にナデが施されている。内面には放射状暗文が入れられている。脚部は筒状で、外面にナデ、脚柱部内面にヘラナデ、脚裾部内面にユビオサエが施されている。

SHK085 (図版 101、写真図版 96) 宮ケ田III地区

999は竃から、998は床面から出土したものである。

998は土師器甕Abである。口縁部内面~体部外面上端はヨコナデ、体部外面上半はヨコハケ、体部外面下半はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

999は土師器高杯Dbである。杯部は内底面に丸味をもち、内面に放射状暗文が入れられている。脚部は中実で、脚柱部外面にヘラナデ、裾部にヨコナデが施されている。杯部と脚部の接合は挿入である。

SBK003 (図版 102、写真図版 96) 宮ケ田Ⅲ地区

1000はP206、1001はP214、1002はP215から出土したものである。

1000は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜は鋭く突出し、口縁端部の面はわずかに内傾している。

1001は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりはやや低い。

1002は土師器甕Baである。

SBK004 (図版 102、写真図版 96) 宮ケ田III地区

1003はP 281から出土したものである。

1003は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜は丸味をもち、口縁端部の面は内傾している。

SPK011 (図版 102、写真図版 96) 宮ケ田Ⅲ地区

1004は須恵器杯蓋である。天井部外面のヘラケズリは粗雑で、口縁部内面に凹線状の面ををもっている。

SPK013 (図版 102、写真図版 96) 宮ケ田Ⅲ地区

1005は土師器甕Baである。

SPK014 (図版 102、写真図版 96) 宮ケ田Ⅲ地区

1006は土師器高杯の脚部である。脚柱部から脚裾部にかけて緩やかに開いている。

SPK015 (図版 102、写真図版 96) 宮ケ田Ⅲ地区

1007は土師器甕Baである。

SPK016 (図版 102、写真図版 96) 宮ケ田Ⅲ地区

1008は土師器高杯の脚部である。棒状の脚柱部に、円盤状の脚裾部が付いている。

SPK017 (図版 102、写真図版 96) 宮ケ田Ⅲ地区

1009は土師器高杯Bbである。杯部と脚部の接合は挿入である。

SKK012 (図版 102、写真図版 97) 宮ケ田Ⅲ地区

1010は土師器高杯Baである。口縁部外面はタテハケ後ョコナデが施され、その後に左斜め上方向にハケが施されている。

SKK013 (図版 102、写真図版 97) 宮ケ田Ⅲ地区

1011は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜はやや丸味をもち、口縁端部の面は内傾している。 1012は土師器甕Bbである。

SKK014 (図版 102) 宮ケ田 III 地区

1013は土師器甕Bbである。口縁部の端面はやや外傾している。

SKK015 (図版 102、写真図版 97) 宮ケ田Ⅲ地区

1014は土師器甕Aaである。口縁部は外反しながら開いている。

1015は土師器甕Baである。肩部にヨコハケが施されている。

SKK016 (図版 102、写真図版 97) 宮ケ田Ⅲ地区

1016は土師器甕Aaである。体部はやや寸胴で、口縁部は大きく外反して開いている。口縁部はヨコナデ、体部外面はタテハケで肩部にのみョコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面下半ににはススが付着している。

1017は土師器椀Bである。やや器形が大きい椀である。口縁端部はヨコナデ、内面は口縁部内面はヨコハケ、口縁部~体部中位はナデ、底部内面~体部内面と底部外面~体部下端はヘラケズリが施されている。

SSK001 (図版 103、写真図版 97) 宮ケ田III地区

1019はSSK001上から、 $1018\sim1025$ はSSK001周辺から出土したものである。

1018は須恵器杯蓋である。天井部は平坦で、天井部と口縁部の境の稜は鋭く突出している。口縁端部の面はわずかに内傾し、凹線状である。

1019は須恵器高杯である。土師器高杯Bcの形態をもち、土師器の製作手法で造られている。内底面は平坦で、口縁端部に面をもっている。杯部は底部内面にナデ、口縁部内面にヨコナデ、外面にタテハケ後口縁部にヨコナデが施されている。脚部は脚柱部外面にヘラミガキ、脚柱部内面にヘラナデ、裾部外

面にナデ、裾部内面にヨコハケが施されている。脚柱部内中央には刺突がなされている。杯部と脚柱部 の接合は挿入である。

1020は土師器甕Aaである。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味である。

1021は土師器甕Bbである。口縁端部の面は不明瞭である。

1022は土師器壺Acである。口縁部はやや短く、直線的に開いている。

1023・1024は土師器高杯の脚部である。脚柱部は緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。脚裾部端部に面をもっている。脚柱部外面はヘラミガキもしくはヘラナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部外面はナデが施されている。脚裾部内面に1023はヨコハケ、1024はヨコナデが施されている。

1025は器種不明の製品である。肩の張った低い壺形の器形で、細い頸部もしくは口縁が付くようである。底部は円盤状に脱落している。側面はヘラミガキ、底部と上面はナデが施されている。

SFR001 (図版 103、写真図版 98) 宮ケ田Ⅲ地区

1026は東側溝から出土したものである。切れ合いのある竪穴住居に属するものであろう。

1026は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりは高いが、端部に面をもっていない。

SDC002 (図版 103、写真図版 97) 宮ケ田Ⅲ地区

1027は土師器高杯である。脚部は筒状で裾部に向かって緩やかに開いている。円形の3方透かしをもっている。

宮ケ田|||地区包含層(水田部) (図版 103、写真図版 98)

水田部では古墳時代後期・律令期・中世の畦畔などを検出したが、層位による区分はほとんどできなかった。出土した土器のほとんどは古墳時代に属するものである。

1028は須恵器杯蓋である。口径は12.9㎝と小さい。天井部外面のヘラケズリの範囲は狭い。天井部内面には漆が付着している。

 $1029 \cdot 1030$ は須恵器杯蓋である。口縁部の立ち上がりはやや低く、底部外面のヘラケズリも1/2程度である。

1031・1032は須恵器杯である。底部はヘラ切り未調整である。

1033は須恵器高杯である。短脚の高杯である。

1034は須恵器有蓋高杯である。脚部は短脚で、裾端部付近で屈曲している。小さい円形 4 方透かしが入れられている。

1035・1036は土師器甕Baである。1035は口縁端部の面が水平で、内縁が内側にやや突出している。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、口縁部外面~体部上端はタテハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケが施されている。1036は口縁端部の面が水平で、外縁が内側にやや突出している。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、口縁部外面~体部上端はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコハケが施されている。

1037は土師器甕Aaである。口縁部は長く、外反して開いている。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、口縁部外面はタテハケ後ヨコナデである。

1038は土師器甕Bbである。口縁部の内傾する面は広く、体部外面はヨコハケが施されている。

宮ケ田川地区包含層 (図版 103、写真図版 98)

水田部以外の包含層から出土したものである。 1040・1042・1044・1045はB4区付近のやや谷状に窪んだ部分から出土している。

1039は須恵器無蓋高杯である。口縁部と底部の境に2条の稜線が廻り、その下に波状文が入れられている。上の稜線はややはっきりしない。稜線の下に小さい把手が付いている。

1040は須恵器腺である。肩部に凹線をもち、その下にカキ目の後列点文を密に施している。

1041は土師器高杯Baである。口縁端部は丸味をもっている。杯部と脚部の接合は挿入である。

1042は土師器高杯Daである。内面には放射状暗文が入れられている。

1043は土師器甕Bの口縁である

1044は土師器壺Bbである。 2 字口縁は外傾し、端部に面をもっている。体部外面はタテハケ後ヨコハケが施されている。

1045は土師器手づくね土器である。内外面ともナデが施されている。

宮ケ田III地区確認調査 (図版 103、写真図版 98)

1046はトレンチ 51-Aから出土したものである。

1046は土師器高杯Daである。内面には放射状暗文とナデの時に付いたヘラ状工具の痕跡が残っている。

SHK2001 (図版 104、写真図版 99) 新水北地区

1047は埋土から出土したものである。

1047は土師器甕Baである。口縁端部を内側に巻き込み、内傾する面を作っている。

SDK2013 (図版 104、写真図版 99) 新水北地区

1048は須恵器杯である。底部はヘラ切り未調整で、窯壁が付着している。内面には「も」の字状のヘラ記号が入れられている。

1049は土師器壺Abである。頸部がくびれ、口縁部が外側に厚みを増して立ち上がる。口縁端部のみ外 反している。口縁部外面~体部外面の上位はヨコナデ、体部外面中位はタテハケが施されている。

SRK2001 (図版 104·105、写真図版 99~101) 新水北地区

1050~1052は1ヶ所でまとまって出土したものである。

1050は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜は鋭く突出し、口縁端部に内傾する凹線状の面をもっている。

1051~1053は須恵器有蓋高杯蓋である。天井部外面に重ね焼きの痕跡が付いている。1051は天井部と口縁部の境の稜が鋭く突出し、口縁端部に内傾する凹線状の面をもっている。1052は天井部と口縁部の境の稜が丸味をもち、口縁端部に内傾する面をもっている。1052は天井部と口縁部の境は凹線状で、口縁端部に内傾する面をもっている。

1054は須恵器有蓋高杯である。口縁端部に、内傾する凹線状の面をもっている。脚部には3方透かしをもっている。底部外面に自然釉が付着している。

1055は土師器壺Abである。口縁部内面~体部外面上位はヨコナデ、体部外面中位~下位はナデ、体部

内面下半はヘラケズリが施されている。体部内面上位には粘土紐の接合痕が明瞭に残存している。

 $1056\sim1059$ は土師器壺Acである。1056は頸部がなだらかに屈曲、口縁部が外方に開いている。1057は頸部がなだらかに屈曲し、口縁部はあまり開かない。1058は頸部は鋭く屈曲し、口縁部はあまり開かない。

1060は土師器壺Bbである。小型の器形で、口縁端部は不明瞭ではあるが面をもつようである。体部内面はヘラナデ及びナデ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、口縁部外面は斜め方向のハケ後ヨコナデ、頸部外面~体部外面上位はタテハケ後ヨコナデ、体部外面中位~下位はナデが施されている。

 $1061\sim1064$ は甕Aaである。体部は下ぶくれである。体部外面はナデ、口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリ、底部内面はナデが施されている。 $1062\cdot1063$ は体部外面にタテハケ後ヨコハケが施されている。

1065は土師器甕Baである。口縁部はやや外反し、端面はわずかに外傾している。端部の内縁は内側に 突出している。体部内面はナデが施されている。体部外面にはススが付着している。

1066・1068・1069・1071は土師器甕Bcである。1066は口縁部にヨコナデ体部外面上位~中位はヨコハケ、体部外面下位はタテハケ、体部内面上半はヘラケズリ、体部内面下半はユビオサエが施されている。

1067・1070は土師器甕Bbである。1067は口縁端部に水平な面をもっている。1070は口縁端部にやや 内傾する面を持ち、体部外面にヨコハケが施されている。

1072は土師器高杯Dbである。杯部は底部内面にナデ、口縁部にヨコナデ、底部外面にユビオサエが施されている。内面には放射状暗文が入れられている。脚部は脚柱部外面にナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部にヨコナデが施されている。

1073は土師器高杯の脚部である。脚柱部外面はヘラナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部外面はヨコナデ、脚裾部内面はヨコハケ後ヨコナデが施されている。

1074は製塩土器である。外面はユビナデ、内面はヨコナデが施されている。焼成は硬質である。

SZK2001-SRK2001 (図版 105、写真図版 101) 新水北地区

1075は土師器壺Acである。頸部は比較的明瞭に屈曲し、口縁部は内湾気味に立ち上がっている。脚をもつ小型丸底壺である。壺本体は口縁部内面にヨコナデ、口縁部外面にタテハケ後ヨコナデ、体部外面にタテハケ後ナデ、体部内面にヘラケズリが施されている。脚部は脚柱部外面にナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、裾部外面にヨコナデ、裾部内面にナデが施されている。体部と脚部の接合は挿入である。

SRK2002 (図版 105、写真図版 101) 新水北地区

1076は土師器高杯Baである。口縁端部は丸味をもっている。外面はヨコハケ後ヨコナデ、内面はヨコナデが施され、放射状暗文が入れられている。体部と脚部の接合は挿入である。

SRK2006 (図版 105、写真図版 101) 新水北地区

1077は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境は凹線状で、口縁端部に内傾する面をもっている。

SSK1003 (図版 105、写真図版 101) 新水北地区

1078は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜はやや甘く、口縁端部に内傾する面をもっている。 1079は土師器高杯である。脚柱部外面はヘラミガキ、脚柱部内面は、脚裾部はヨコナデが施されている。 杯部と脚部の接合は接続である。

1080は土師器甕Aaである。

SXK1003 (図版 105、写真図版 101) 新水北地区

1081は土師器椀である。口縁部は大きく内湾し、端部のみ外反する。端面に内傾する面をもっている。 口縁部外面はタテハケ後ョコナデ、底部外面はヘラケズリ、内面はナデが施され、放射状暗文が入れられている。

1082は土師器甕Bbである。口縁部内面にやや内傾する面をもっている。体部外面はヨコハケが施されている。

新水北地区 II a層 (図版 106、写真図版 102·103)

1083は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜はやや甘く、口縁端部に内傾する面をもっている。 1084は須恵器壺である。口縁部はやや内湾しながら上方に延び、口縁部の端面は水平である。口縁部 の外面には2条の鋭い稜線があり、その上下には波状文が施されている。体部外面には平行タタキが施 され、体部内面には同心円当て具痕が残存している。

1085は土師器壺Abである。口縁部は直線的で、端部は尖り気味である。口縁部外面はタテハケ後ョコナデ、口縁部内面はョコハケ後ョコナデ、体部外面はョコハケ、体部内面上位はナデ、体部内面中位はヘラケズリである。

1086は土師器壺Acである。口縁部は直線的に広く開き、端部は尖り気味である。口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面上位はタテハケ後ヨコナデ、体部外面中位~下位はタテハケ、体部内面上位はナデ、体部内面中位~下位はヘラケズリが施されている。

1087は土師器甕Aaである。口縁部は直線的に開いている。口縁部はヨコナデ、体部外面上位はタテハケ、体部外面中位はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面にはヘラ描きで2ヶ所に絵が描かれている。1ヶ所は上部に1本線があり、両脇にその線を支えるような屈曲した線が配され、その間はハケ目状の線が入れられている。竪穴住居を表しているのだろうか。ほぼ反対側の位置にある絵は上端部をわずかに残すのみで、山形の先端が横に3つ並んでいる。反対側の絵が竪穴住居とすれば、屋根飾りをもつ建物のようなものが描かれている可能性がある。

1088・1089は土師器高杯である。1088は脚柱部が筒状で緩やかに開き、裾部で大きく開いている。脚柱部外面上半には杯部との接合時のタテハケが残り、脚柱部外面下半〜脚裾部外面はナデが施されている。脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内面はナデが施されている。1089は脚柱部が筒状で、裾部はあまり開かない。裾部端部には下向きに面をもっている。脚柱部外面はヘラミガキ、裾部はナデが施されている。杯部と脚部の接合は接続である。

新水北地区II層(図版 106、写真図版 102·103)

1090は須恵器広口壺である。内外面とも回転ナデが施されている。

1091は須恵器提瓶である。鉤状の耳をもっている。体部外面には全面にカキ目が施されている。口縁

部は打ち欠かれているようである。

1092は土師器壺Abである。口縁部はわずかに内湾しながら上方に延びている。口縁部外面~体部外面上位はヨコナデ、体部外面中位~下位はハケ後ナデ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

新水北地区 I a層下半~ II 層(図版106、写真図版103)

1093は須恵器甕である。口縁部外面に1条の沈線が入れられ、その上下に波状文が施されている。体部外面は平行タタキ後回転ナデが施されている。

1094は須恵器直口壺である。口縁部外面に 2 条の稜線が入れられ、その下に波状文が施されている。 底部外面には「 \times 」のヘラ記号が入れられている。

1095は土師器高杯Dbである。杯部の底面は平坦である。杯部は底部内面にハケ、口縁部内面にヨコナデが施された後斜め方向にヘラミガキがなされている。口縁部外面はヨコナデが施されている。底部外面はナデが施されているが、ヒビ割れが顕著である。脚部は脚柱部外面にナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、裾部にヨコナデがほどこされ、脚柱部内上端に棒状の刺突がなされている。

1096は土師器甕Bbである。口縁端部は丸味をもっている。

1097は須恵器杯身である。口縁端部に内傾する面をもっている。

新水北地区 I a層下半 (図版 107、写真図版 104·105)

1098は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜は明瞭に突出するがやや甘く、口縁端部に内傾する凹線状の面をもっている。

1099は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりはやや低く、端部に内傾する面をもっている。底部の ヘラケズリの範囲はかなり狭い。

1100は須恵器広口壺である。頸部には1条の凹線が廻らされ、その上に波状文が施されている。頸部下半外面はカキ目、体部は平行タタキ後カキ目が施されている。

1101は須恵器短頸壺である。内面~口縁部外面は回転ナデ、体部外面上半はカキ目、体部外面下半~ 底部外面は回転ヘラケズリが施されている。肩部には重ね焼きの痕跡が残存している。

1102は土師器甕Baである。口縁端部内面にやや内傾する面をもっている。外面にはススが非常に多く付着している。

新水北地区 I a層 (図版 107、写真図版 104·105)

- 1103は須恵器杯蓋である。天井部外面はヘラ切り未調整で、内面には同心円当て具痕が残存している。
- 1104は須恵器杯身である。口縁端部に内傾する面をもっている。
- 1105は須恵器有蓋高杯である。口縁部の立ち上がりは低く、脚部は2方透かしである。
- 1106は須恵器壺である。口縁部外面は平行タタキ後回転ナデ、体部外面は平行タタキ後カキ目が施されている。
 - 1107は須恵器甕である。体部外面には1辺3㎜の正格子タタキが施されている。
 - 1108は土師器壺Acである。外面はほとんど摩滅している。
 - 1109は土師器甕Aaである。口縁部は大きく外反して開いている。口縁部外面はタテハケ後ョコナデ、

体部外面上端はヨコハケ後ヨコナデ、体部外面はヨコハケ、口縁部内面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

新水北地区包含層(図版 107、写真図版 104・105)

1110~1112は須恵器杯蓋である。1110は天井部と口縁部の境の稜は鋭く、口縁端部に内傾する凹線 状の面をもっている。1111は天井部と口縁部の境に稜をもたず、口縁端部に面をもっていない。1112 は天井部外面がヘラ切り未調整である。

1113は土師器甕Aaである。口縁部は直線的に外方へ開き、端部は丸味をもち、やや内側へふくらんでいる。口縁部はヨコナデ、体部外面は平行タタキ後タテハケが施されている。体部内面はヘラケズリが施されているが、上端のみョコハケが残存している。

新水北地区確認調査(図版 107、写真図版 105)

1114~1116はトレンチ63-Bから出土したものである。

1114は土師器甕Bbである。口縁端部は丸味をもつが、端面はわずかに水平な面を呈している。口縁部 外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、体部外面はヨコハケ及び斜め方向のハケが施され ている。体部内面はヘラケズリが施されているが、上端のみヨコハケが残存している

1115は土師器甕Bcである。口縁端部は丸味をもっている。

1116は須恵器甕である。口縁部外面に突帯を1条廻らし、その下はカキ目が施されている。体部外面は平行タタキが施されている。

(4)律令期

量的には少なく、図示し得たのは11点である。器種の内訳は須恵器 8 点、土師器 3 点となっている。遺構からは $宮_{7}$ 田 \blacksquare 地区の道路遺構SFR001と畦畔上から出土した 2 点であり、その他は包含層から出土したものである。

SFR001 (図版 108、写真図版 106) 宮ケ田Ⅲ地区

1117は脚部をほとんど欠くが圏足円面硯で、陸と海の間に堤を設けない無堤式である。陸から海へはゆるやかに移行する。外堤は上端面が内傾した凹面となり、下端には1条の突帯を貼り付けている。脚には長方形の透かしが12ヶ所に空けられている。陸の上面は摩耗して平滑になっている。墨は器壁に染み込んだような状態で僅かに残っている程度である。宮ケ田Ⅲ地区の礫敷き路面上で出土し、『加都遺跡Ⅰ』で報告した宮ヶ田Ⅰ地区SFR001東1次側溝から出土した破片と接合した。

SSR001 (図版 108、写真図版 106) 宮ケ田Ⅲ地区

1118は須恵器杯Aである。底部外面はヘラ切りのままで、底部内面は回転ナデのみである。

宮ヶ田||地区包含層(図版108、写真図版106)

須恵器杯A・杯B・皿Aが出土している。1119・1120は須恵器杯Bである。1119は底部片で、底部外面はヘラ切り後ナデ、内面は回転ナデで、仕上げナデは施されていない。1120は底部と口縁部の境が屈曲

し、高台は低い。底部外面はヘラ切りのままで、内面は仕上げナデが施されている。1121は皿Aで、底部内面に「部」と墨書されている。底部は平らで、口縁部は直線的である。底部と口縁部の境はナデにより器厚が薄くなっている。底部外面はヘラ切り後ナデ、内面に仕上げナデはみられない。1122は杯Aの底部と思われる破片である。内面に漆が膜状に付着している。

新水北地区包含層(図版108、写真図版106)

須恵器杯B、土師器杯Aが出土している。1123は須恵器の杯Bである。器高が高く、底部径が縮小した 椀形の器形で、口縁部は下半が内湾、上半が外反する。底部外面は転用硯として使用され、平滑な面に なって墨が付着している。1124~1126は土師器杯Aで、1124・1126は赤色塗彩土器である。1124は底部外面から口縁部外面までへラ磨き、1126は底部外面から口縁部下端までへラ磨きしている。1124の 底部内面には指押さえの痕跡が残る。1125は底部が突出したような形状となり、口縁部は薄く作られる。底部外面はヘラ切りである。

(5)中世

中世の土器には須恵器、土師器、黒色土器、国産陶器、輸入陶磁器などがある。このうち須恵器、土師器については加都遺跡 I で行った分類に一部追加をおこなって使用し、国産陶器、輸入陶磁器については巻末に記した文献を参考に記述を行った(横田・森田 1978)。

須恵器の型式分類

須恵器は碗・小碗・小皿・鉢・壺・甕などが出土しているが、比較的出土量の多い碗、鉢のみ細分を行う。

碗 体部に丸みをもつもの。底部は糸切りである。

碗A 高台が明瞭に突出するもの。

碗A1 底部内面が平坦なもの。

碗A2 底部内面に凹みをもつもの。

碗B 高台がわずかに突出するもの。底部内面に凹みをもつ。

碗C 高台が突出しないもの。底部内面は平坦である。

碗D 輪高台をもつもの。

小碗 口径11cm未満の小型の碗である。

小皿 口径11cm未満の小形の皿である。

鉢 片口をもつ捏鉢と考えられるものである。

鉢A 口縁部が外反するもの。

鉢B 口縁部の断面が方形になるもの。

鉢C 口縁部の端面が外傾し、断面が三角形になるもの。

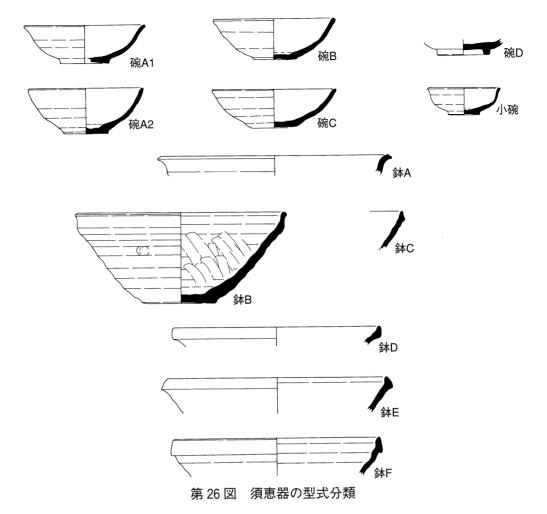
鉢D 口縁部が丸みをもつもの。

鉢E 口縁部が丸みをもち、端面の外縁が拡張するもの。

鉢F 端面の外縁が垂下するもの。

土師器の型式分類

土師器は碗・小碗・杯・皿・小皿・鍋・羽釜・壺などが出土している。



碗 平高台が突出するもの。底部は糸切りである。

小碗 口径11cm未満の小形の碗である。

杯 底部は突出せず、底部内面も平坦である。

杯A 底部は糸切りである。

杯B 底部はヘラ切りである。

□ 口径11cm以上の皿である。

ⅢA 突出した平高台をもつもの。底部は糸切りである。

ⅢB 高い輪高台をもつもの。托底部は糸切りである。

ⅢC 手づくね成形のもの。

小皿 口径11cm未満の皿である。

小皿A 底部が糸切りのもの。

小皿B 底部がヘラ切りのもの

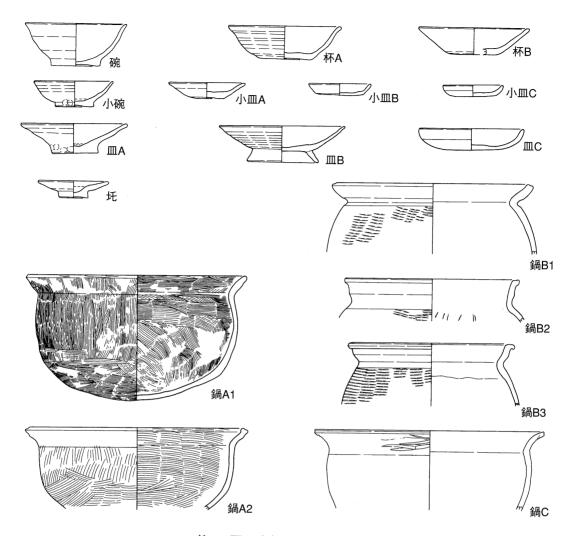
小皿C 手づくね成形のもの。

圫 底部内面が大きく凹み、口縁部が大きく開くもの

鍋

鍋A ハケ目調整を行うもの。

鍋A1 口縁部が外反するもの。



第27図 土師器の型式分類

鍋A2 口縁部が内湾するもの。

鍋B 体部外面に平行タタキ痕を残すもの。

鍋B1 口縁端部を拡張しないもの。

鍋B2 口縁端部を外側につまみ出すもの。

鍋B3 口縁端部を外側に折り曲げるもの。

鍋C 体部外面にナデ調整を行うもの。

SBC056 (図版 108、写真図版 107) 宮ケ田Ⅲ地区

1128・1130はP393から、1127・1129はP394から出土したものである。

1127は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

1128は黒色土器碗である。内面と口縁端部外面に炭素が吸着している。内面~口縁部外面はヨコナデが施され、体部外面はナデ後粗いヨコナデが施されている。

1129は土師器底部である。開き気味の輪高台をもっている。内面は回転ナデが施され、底部は糸切りである。

1130は土師器鍋Cである。口縁部はヨコナデ、体部はナデが施されている。口縁部外面にはナデの時

の工具痕が残っている。体部外面にはススが付着している。

SBC057 (図版 108、写真図版 107) 宮ケ田Ⅲ地区

1131はP83から出土したものである。

1131は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC058 (図版 108、写真図版 107) 宮ケ田Ⅲ地区

1132はP63から、1136はP64から、1133・1134はP113、1135・1137はP1017から出土したものである。

1132は須恵器碗A2である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

1133は土師器杯Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

1134は土師器底部である。底径は大きく、器壁が非常に厚い。内面は回転ナデが施され、底部は糸切りである。

1135・1136は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

1137は土師器底部である。高く突出した高台をもっている。内面は回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC059 (図版 108、写真図版 107) 宮ケ田III地区

1138はP1131から出土したものである。

1138は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SAC004 (図版 108、写真図版 107) 宮ケ田III地区

1139はP019から出土したものである。

1139は土師器底部である。高く突出した平高台をもち、皿Aの可能性が高い。内面は回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SPC030 (図版 108、写真図版 107) 宮ケ田Ⅲ地区

1140は土師器皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SPC031 (図版 108、写真図版 107) 宮ケ田Ⅲ地区

1141は土師器杯Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC017 (図版 109、写真図版 108) 宮ケ田III地区

1142・1143は土師器杯Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

1144・1145は土師器圫である。大小の器形が存在する。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

1146·1147は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC018 (図版 109、写真図版 108) 宮ケ田Ⅲ地区

1148は土師器椀である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

1149は土師器杯Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC020 (図版 109、写真図版 108・109) 宮ケ田III地区

- 1150・1151・1153は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。
- 1152は須恵器碗A2である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。
- $1154 \cdot 1155$ は須恵器小碗である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。
- 1156は土師器碗である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。
- $1157 \cdot 1158$ は土師器 $\blacksquare A$ である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。
- 1159は土師器底部である。 圫の可能性が高い。内面は回転ナデが施され、底部は糸切りである。
- 1160~1167は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

1168は土師器鍋A1である。体部はあまり膨らまない。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケ、底部外面はヨコハケ、口縁部内面はヨコハケ後ョコナデ、体部内面はヨコハケ、底部内面はナデが施されている。体部外面にはススが付着している。

1169は黒色土器碗である。内面にのみ炭素が吸着している。内面と口縁部外面にヘラミガキが施されている。

宮ケ田Ⅲ地区包含層(水田部)(図版 110、写真図版 109)

- 1170は土師器皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。
- 1171は丹波焼擂鉢である。外面~口縁部内面は回転ナデである。擂り目は櫛引きで、1単位8本である。
- 1172は白磁碗である。口縁端部を外反させ、内外面とも施釉されている。

新水北地区 0 a層 (図版 110、写真図版 109)

1173は土師器皿Cである。口縁部がやや長く上方に立ち上がっている。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。

2. 土製品 (第110図、写真図版110)

C11は土師質の管状土錘である。手づくねで成形後、ナデ調整を施す。長さ6~cm、最大幅3~cmである。半分の残存であるが重さは22gである。SHK042の埋土から出土したものである。

C 12は紡錘車である。直径 6.7 cm、最大厚さ 1.3 cm、孔の直径 1.1 cm を測る。重さは 56g である。SHK 071の埋土から出土したものである。

C13~18は鞴の羽口である。SHK083の埋土上層から出土したものである。C13~15はいずれも羽口の先端部分であり、被熱のため部分的に青灰色~黒色に変色する。C13は外面に工具の調整痕があり、先端に鉄滓が融着する。C14は先端から5.5cmの範囲が被熱のため変色している。先端部に鉄滓が融着する。C15は「ラッパ」状に装着部が開き、残存する最大径9cmを測る。先端から4.5cmの範囲で剥離が激しい。出土した羽口のなかでも大型のものである。C16は「ハ」の字状に拡がり、鞴の装着部にあたる。破片であるが、最大径7.2cmを測る。C17は中間部分の破片である。割れ口が黒色に変色している。C18は外面にナデ調整を施す。それぞれの先端部の孔径は、C13が1.6cm、C14が1cm、C15が2.2cm、C16が

1.7 cm、C17が1.5 cm、C18が1.2 cmを測る。

C19は鳥形の土製品である。全長7.6cm、幅4cm。嘴先端、正面向かって左翼の先端、尾の部分を欠く。全体の成形は手づくねで行い、翼は貼り付けた粘土を指でつまみだす。背から腹にかけて直径2mmの孔を開ける。SHK044の埋土から出土したものである。

C 20は丸玉である。直径3.2 cm、重さ32gを量る。中心に直径 4 mmの孔を開ける。SRK2001から出土したものである。

3. 木製品

ここで扱う木製品は中世水田面の下層や中世以前の畦畔から出土したものであり、時期的には古墳時代中期以降中世以前という極めて巾広いものである。それは水田・畦畔が継続的に使用されていたことに起因する。木製品個々では時期の決定が困難であることから、一括して取り扱った。

木製品には、木簡・農具・運搬具・容器・服飾具・食事具・工具・雑具・部材・不明品・祭祀具・建築部材がある。選択的な図化を行っているため、必ずしも木製品全体の傾向を表しているとは言えないであろうが、参考に木製品の構成を記しておくと木簡1.1%・農具32.3%・運搬具0.6%・容器6.7%・服飾具0.6%・食事具1.4%・工具0.6%・雑具4.5%・祭祀具2.5%・文房具0.3%・建築部材37.9%・部材6.2%・不明品4.8%となっている。農具・建築部材が圧倒的な比率を占め、容器・服飾具・食事具・雑具といった日常生活品が占める割合は低い。建築部材・部材・不明品が多くを占めるのは畦畔の芯材や畦半構築の際の杭材等として再利用されていたことに起因する。

使用された樹種はスギ・ヒノキ・アカガシ・モミ・イヌガヤ・ヤブツバキ・ガマズミ・クリである。 樹種の判明している310点の内の実に250点84%近くがスギ材であり、木簡・農具の内の田下駄・容器類の一部・雑具・部材・建築部材・祭祀具・文房具にと広汎に使用されている。特に建築部材はクリ材が1点の他は全てスギ材である。ヒノキ材は9.4%に使用され、主には容器類の曲物・挽物に用いられている。容器類の他には指物等の木針、農具・工具・服飾具・雑具・部材等の一部に使用されている。アカガシの使用は農具に限定され、特に鍬類はほとんどがアカガシである。その他のモミは農具の田下駄、イヌガヤは食事具、ヤブツバキは農具の木槌、クリは建築部材に用いられている。

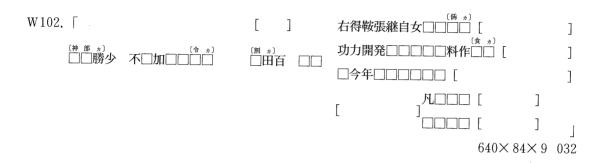
(1) 木簡/工具/農具/服飾具/食事具/容器/雑具/部材

木簡 (図版 111、写真図版 111)

4点が出土おり、4点ともスギ材である。『加都遺跡Ⅰ』で報告した宮ヶ田Ⅰ地区でも1点出土しており、加都遺跡全体では5点の出土となる。W101・W102は宮ヶ田Ⅲ地区、W103・W104は新水北地区からの出土である。ただ、W103・W104は新水北地区でも西壁際で、宮ヶ田Ⅲ地区と隣接する地点からの出土であり、宮ヶ田ⅠからⅢ地区にかけての谷口にあたる地区からの出土である。したがって、木簡はすべて宮ヶ田ⅠからⅢ地区にかけての谷口にあたる地区からの出土である。したがって、木簡はすべて宮ヶ田ⅠからⅢ地区にかけての谷に廃棄されたものとみられる。なお以下の木簡の釈読にあたっては奈良国立文化財研究所の渡辺晃宏・山下信一郎氏のご教示をえた(岸本・甲斐1999)。

 $(1226) \times 33 \times 24 \quad 065$

棒状の木製品の表裏に平坦面を削りだし、そこに習書している。上端は欠損しているが、下端は原形をとどめており、杭状に尖らせている。片面には「[] 臣女」、「大家マ酒刀自女」、「阿刀マ嶋公」という人名を横線で区画した中に書き、それより下には同一の筆になると思われる「鷹」、「藤」、「家」、「勝」、「郡」、「長」の字を、それぞれ3字から6字習書している。裏面も人名が書かれ、それより下部に「歳」、「置」、「諷」、「風」、「真」という字を習書している。人名からみて古代の木簡と考えられる。スギ材。



両側面の上寄りに切り込みがあり、右側面を上端から切り込み部まで欠く以外はほぼ完存している。 文字は表面だけにあり、上半は一行、下半は五行に書かれている。墨書はほとんど剥落しており、判読 は極めて困難な状態である。そのため、記載の詳細は不明であるが、耕地に関する内容とみられ、立札 的な性格が考えられる。人名から、古代の木簡と考えられる。冒頭の2文字を「神部」として正しけれ ば、豊岡市宮内黒田遺跡出土の木簡、朝来市栗鹿遺跡出土の墨書土器に見え、また山東町栗鹿神社が所 蔵する「栗鹿神社大明神元記」に縦系図が存在するなど、古代の但馬においては有力な氏族名である。 スギ材。

W103. □長□首床万呂之可承示日

 $(352) \times 39 \times 4 \quad 081$

上下を欠損する。「首」より上の3文字は墨痕が薄く判読が困難である。「日」の下にはスペースがあるが文字はみられない。スギ材。

W104. [$(359) \times 26 \times 8 \ 051$

上半を欠損するが、下端はほぼ原形をとどめており、尖らせている。片面の中程に線状の墨痕が僅かに残るが、判読はできない。スギ材。

以上の4点であるが、W104を除く3点は人名が書かれており、人名からみて古代の木簡と判断できる。昨年度報告の宮ヶ田 I 地区から出土した木簡も「山口里」という地名表記から里制施工時の古代の木簡と判断され、木簡は全て古代の木簡と判断される。

古代の土器は極めて少なく、宮ヶ田 I 地区で報告済みのものを合わせても21点である。器種構成等が把握できず、詳細な時期の特定は困難であり、8 世紀前半から9 世紀後半までの長期に渡るものが少量ずつ存在しているものとみている。したがって、木簡の年代もこの間に位置づけられ、律令体制が整備され終焉する間のものと思われる。

木簡の記載内容には耕田に関するものがあること、記載地名に他里の地名がみられることから、宮ヶ田地区の近隣には郡衙のような官衙が存在する可能性も考えられる。

農具

木製品の中では最も出土量が多いのが農具であり、109点を図化している。鍬・横槌・杵・田下駄・田舟があり、それぞれが農具の中で占める割合は、鍬が11点10%、横槌が2点1.8%、杵1点1%、田下駄92点84%、田舟3点3%である。

鍬 (図版112·113、写真図版112·113)

直柄横鍬 4 点、泥除 2 点、曲柄又鍬 2 点、曲柄平鍬 1 点、他に曲柄鍬で又鍬になるのか平鍬になるのか不明のものが 2 点ある。使用された樹種は 5 の横鍬 1 点がヒノキ材で、他は全てアカガシ亜属である。直柄横鍬 W105~W108の 4 点があり、上端面から左右の側面にかけて円弧状をなし、刃縁が鋸歯状となる横鍬 II 形式(W106~W108)がある(以下分類は奈良国立文化財研究所1993による)。横鍬 II 形式にはW107のように刃縁の長さに対して巾の広いものが存在している。枘孔周囲の隆起には、明瞭なA形隆起のW106~W108と、B形のW105がみられる。A形隆起の形状は基本的には方形を呈し、W106・W107のように上端から刃縁まで長方形に伸びたものと、W108のように枘孔の周囲だけを方形に作り出したものがみられる。枘孔はA形・B形とも中位より上に68°~85°の角度で穿たれている。W105~W107は板目、W108は柾目であり、横鍬でも使用方法が異なることも考えられる。

泥除 $W109 \cdot W1100 2$ 点がある。横鍬に加えることも考えたが、枘孔の位置、着柄角度が異なることから泥除とした。木目はともに横方向で、W109は54cmを越える大形で、W110は20cmと小形である。W109の断面は板状であるが枘孔に向かって厚くなっている。W110の断面は枘孔周囲が膨らんだ笠形である。着柄角度はともに45°である。

曲柄鍬 W111・W112の2点は曲柄又鍬である。ともに欠損しており全容を知り得ないが、W111は 刃部の一部が残っていること、W112は下端中央に下方からの抉りが遺存していることから、又鍬と判断 した。2点ともに笠部を有する又鍬D類で、笠部の下が内彎するDⅢ類である。柄頭は欠損している。

W115は曲柄平鍬の刃部である。刃部の最大幅が中央付近にあり、刃部先端は弧状を呈する。

W113・W114は曲柄鍬の笠部であるが、刃部を欠損しているため、又鍬になるのか平鍬になるのか判 断できないものである。

横槌 (図版113、写真図版113)

W116・W117の2点が出土している。ともに身部に対してほぼ直角に柄部を作り出している。W116 は柄部を基部だけ残して欠く。身部の断面は円形で、中央付近に使用によると思われる傷みがみられる。W117の柄部の一部を欠くが先端は残っている。身部は片面の傷みが激しい。樹種はW116がヤブツバキ、W117がコナラ属アカガシ亜属である。

杵(図版113、写真図版113)

W118の1点が出土している。搗き部先端から握部の中程まで遺存し、片方の搗き部は欠損している。 搗き部は先端に最大径があり、握部に向かって径が徐々に細くなって、握部との境が不明瞭となるCⅡ類である(奈良国立文化財研究所 1993)。搗き部の先端は平坦である。 田下駄 (図版114~135、写真図版114~125)

出土した木製品では最も多く、農具全体の約81%を占め、木製品全体でも約26%を占める。出土した田下駄は枠及びその部材と足板とがある。使用された材はスギ・ヒノキ・モミ属であるが、スギ材が大部分を占める。ヒノキ材は容器が転用されたものを含めても 5 点(W122・W155・W156・W182・W206)、モミ属の材の使用は 3 点(W186・W207・W208)に過ぎない。

田下駄枠 枠を有するものは前後2枚の歯を縦桟で連結し上部に縦長足板を乗せた枠組と、縦枠材に 多くの枘孔を穿った枠組の2種があり、前者を歯板縦桟型、後者を縦枠横桟型と呼称する。

歯板縦桟型は、民俗例では足駄型とされるものである。前後の歯板を結合する縦桟の数で、縦桟1本結合式(W119·W120·W124)と、縦桟2本結合式(W121~W123)に分類できる。1本結合式では枘孔は歯の中央下端近くに穿たれ、2本結合式では歯の両端の下端近くに穿たれる。歯板は上端の両隅を切り落として台形としたW119・W121・W123と、上端から両側片が弧状となるW120・W122・W124がみられる。足板と歯板の結合は、単純な釘止め式のもの(W119・W120)と、歯板の上面に内に広くなる切り込みを入れて足板を嵌め込んだ嵌め込み式のもの(W121)がある。

足板の組み合わさったまま出土したW119は、縦桟1本結合式で、歯は台形、足板の結合は釘止めである。前後の歯の間隔は26.5 cmで、縦桟を差し込む枘孔は歯の中央下端よりに穿たれ、縦桟は角棒状である。足板は縦長で、歯より少し外に出し、前後をそれぞれ3ヶ所で釘止めしている。緒孔は穿孔式3孔であり、後壺は足板の中央やや後ろ寄りに、前壺は前歯に近い位置に穿たれている。したがって、体重は中央より前寄りにかかることになる。後壺の間隔は6.5 cm、前壺と後壺の間隔は10.6 cmとなっている。W120は縦桟1本結合式で、歯は弧状であり、足板は釘止め式である。縦桟は板材で、両端を枘孔に合わせて削って差し込んでいる。W121は縦桟2本結合式であり、差し込んだ縦桟の小口には外側から楔が打ち込まれている。足板は嵌め込み式である。

W122~W124は歯板であるが、W122・W123が縦桟 2 本結合式、W124が縦桟 1 本結合式である。W122は上端に 2 個の小孔が13㎝間隔で穿たれており、縦桟あるいは枘結合式の足板が差し込まれていた可能性がある。W124は縦桟の枘孔が中央に穿たれており、歯板ではない可能性もある。

縦枠横桟型には組あわさったまま出土したものはなく、すべて部材の状態で出土している。 $W125\sim W133$ は縦枠材としたものである。角棒状の材を使用したもの($W125\sim W129$)、棒状材を使用したもの($W130\cdot W132\cdot W133$)、板材を使用したもの(W131)がある。

横桟を差し込む枘孔は4孔以上のものと2孔のものがある。4孔以上のものでは両端が遺存しているのはW126だけであり、全長は47.4cmである。それ以外は一端あるいは両端を欠いており、全長は知り得ないが、39.9~54.5cmとなっている。枘孔では、全ての枘孔が貫通しているもの(W126・W127・W129)と、貫通させない枘孔と貫通させた枘孔が組み合わされたもの(W125・W128)があり、W125では貫通した枘孔と貫通させない枘孔が交互に配置され、W127では下から六孔目が貫通していない。またW126~W128では一端あるいは両端に上下方向から枘孔が穿たれている。その内のW126・W127では側面に目釘孔があり、釘止めされていたものと思われる。これらの釘止めがみられる枠材は田下駄の枠材とするよりは建築部材等の別の部材とした方がよいものかもしれない。枘孔の大きさは縦2.0~2.9cm、横2.3~3.1cmである。枘孔は正方形に近いか図示した方向では縦長となっているが、W130の下側の枘孔だけは横長となっている。枘孔の間隔は全体としては芯々間で7.2~12.2cmの間となっているが、大きくは7.5cm前後になっているもの(W125・W128)、10cm前後から11cm前後となるもの(W126・W

第3表 枠材の枘孔間隔と足板横桟痕跡間隔 (単位㎝図下側から順)

遺物No.	1	2	3	4	5	6	備考
25	7.5	7.5	7.5	7.5			枠材
26	10.4	11.0	10.5				枠材
27	10.4	10.0	11.0	10.4			枠材
28	7.7	7.2	7.5	7.2	7.5	7.2	枠材
29	8.5	9.7	8.7	10.5	10.5		枠材
30	12.2						枠材
31	11.5						枠材
32	10.5						枠材
33	12.5						枠材
46	7.5	7.5					柄結合足板
51	12.0	12.0	12.0	13.2	11.0		紐結合足板

127・W129)、12cmを超すもの (W130・W133) がある。間隔が狭いW125・W128はW125が7.5cm、W128が7.2~7.5cmで似通った間隔で、間隔のバラツキは少ない。足板W146の裏にみられる横桟痕跡の間隔と数字的にはあっている。10~11cmとしたものではW126・W127が全て10~11cmの間の間隔となっているが、W129では8.8~10.5cmと間隔の差が大きくなっている。出土した足板ではこの間隔の横桟痕跡がみられるものはない。12cmを超す間隔のものはW130・W133であり、全容を知り得ないが、足板W

151では横桟痕跡の間隔が11~13.2cmであり、合う数字になっている。足板W151は全長が65cmを超大形の足板である。

2孔のものは確実に枠型田下駄とできるかどうか疑問であるが、枠材がほぼ完形であること、紐結合の痕跡がみられるものがあること、柄孔の大きさや間隔が4孔以上の枠材の10cm~11cm前後のグループに含まれることなどから田下駄に含めた。W131は全長35.2cmで、幅9.2cmの板材を使用し、中央に柄孔が2孔穿たれている。柄孔の間隔は10.5cmとなっている。右側辺付近にも2ヶ所に枘孔が穿たれており、4孔型式の単独田下駄とみられなくもないが、端に寄り過ぎていることから、側辺近くの枘孔は転用以前のものと判断している。W132は全長28.8cmで、棒材を使用しているが、棒材の内面は平らに仕上げ、先端は円頭としている。枘孔は中央前寄りの2ヶ所に穿たれており、前の枘孔には桟材の柄が遺存している。柄孔2.1~2.9cm、間隔は10.5cmである。枘孔間の中央、下側枘孔と下端との中央付近に紐結合の痕跡がみられ、特に右辺側の痕跡は大きく窪んでいる。

その他、W133は棒材に2孔以上の柄孔を穿ち、一端を切り込んで紐かけようの溝を作り出したものである。柄孔は柄材が差し込まれた状態で中央に遺存し、上端にも柄孔端が遺存している。柄材には楔が打ち込まれている。柄孔間隔は12.5cmであり、他の枠材の間隔より広くなっているが、足板W151の裏にみられる横桟の間隔と近い数字になっている。

横桟 W134~W142は扁平な棒材の両端を切り込んで枘を作り出したもので、枠形田下駄の横桟とみている。使用材はすべてスギである。一側辺の中央が窪んだW134~W137と、両側辺が直線となるW138~W142がある。両端が遺存しているものが少ないが、全長はW138が47.2cm、W139が51.1cm、W142が55.2cmであり、一端の枘を欠くW134・W136は復元すれば45cm前後となる。枘の出は1.8~3.7cm、W140の枘には楔が打ち込みによる割れがみられる。

足板 65点が出土している。これらをまず、他の部材に組み合わせた結合痕跡の有無によって、枠付き 足板と単独型足板に大別し、足の乗る方向と木目の関係から、木目が足と並行する縦長型、直交する横 長型に分類する。次に緒孔の製作手法によって穿孔式、切り込み式、無孔式に細分し、さらに緒孔の数 によって2孔式・3孔式・4孔式に細々分する。

枠付き足板は、足板と枠の結合方式によって釘結合型 (W143~W145)・紐結合型 (W147~W150)・枘結合型 (W146・W151) に分類でき、釘結合型の緒孔は穿孔式による3孔 (W143~W144)、紐結合型の緒孔は無孔式 (W150)・穿孔式2孔 (W148)・穿孔式3孔 (W149) が存在し、枘結合型は無孔式 (W151) である。2孔式・3孔式は緒孔の配置で縦長型であることが確認でき、枘結合型無孔式は横桟痕跡で縦長型であることが確認できる。紐結合型無孔式のみは縦横が判断できないが、他の枠付き田下駄の全てが縦長型であることから、これも縦長型とみている。

釘結合型足板 W143~W145は、緒孔は穿孔式3孔である。足板の全長は31.5~34.2㎝、幅は10.3~11.2㎝と揃っている。前後の歯の間隔を示す釘結合間はW143・W144が26~26.8㎝と揃っているが、W145は22㎝と短くなっている。W145の足板の側面には摩滅による窪みが認められ、枘孔結合と組み合わされていたことが考えられるが、もう一方の側面にはそうした痕跡がみられないことから釘結合型に含めた。緒孔はW143・W144では3孔ともが釘結合の内側に穿たれているが、W145の前壺は釘結合痕のさらに前側に穿たれ、歯の外側となっている。緒孔の位置からみて、W143・W145では重心がかなり前となり、W144は中心近くとなるように見えるが、前壺の位置はW143と変わりないことから、W144も重心は前掛りになるのであろう。緒孔の間隔は後壺間隔が7.0~7.5㎝と揃い、前壺と後壺の間隔は43・45が11.0~11.5㎝、44は16㎝と長い。釘結合型の足板には釘結合部分以外では他の部材と組あわさっていた痕跡はなく、W119や豊岡市袴狭遺跡出土例からみて、歯板縦桟型の足板になるものである。

紐結合型足板 W147~W150の4点があり、両端近くに左右から抉りを入れている。全長が短く幅広い型式と、長く幅狭な型式が存在している。前者の型式はW147の1点である。全長38.7㎝、幅11.7㎝で、抉りの間隔は30.5㎝となっている。緒孔は穿孔式の3孔で後壺間隔は6.6㎝、前壺と後壺の間隔は11.7㎝であり、重心はほぼ中央にくるものと思われる。全長の長い後者の型式にはW148~W150の3点があり、全長は54.3~60.7㎝と少し差があるが、両端の抉りの芯々間ではW136~W137㎝と揃った状態であり、全長ほどの差は認められない。足板幅は7.0~9.5㎝であり、W148の両端は平らに割落とし、W149は前端を平らにし、後端を圭頭状にしている。W150は両端を圭頭状に加工している。緒孔は穿孔式2孔(W148)と穿孔式3孔(W149)、無孔式(W150)があり、2孔のW148は壺間20㎝で、中央から前方の偏った位置に緒孔が穿たれている。2孔式は前後が判断しにくいが、緒孔が左右に偏った位置に穿たれることは少なく、前後の偏った位置に穿たれることが多いことから、この足板も縦長型と判断している。中央よりの緒壺に近接して孔が穿たれているが、間隔が狭く3孔としての機能はないものと判断している。3孔式のW149は後壺間6.0㎝、前壺と後壺間隔13㎝で、重心は中央よりやや後ろ寄りとなる。

これら紐結合型とした足板には横桟等の痕跡は確認できず枠形田下駄の足板とは考えにくく、木を弧状に撓め、抉り部分で結合して、輪かんじき型の田下駄としていたことが想定される。豊岡市深田遺跡では紐結合型の足板とともに枝状の木を半円形状に撓め、紐掛け用の抉りの入った枠材が出土している。こうした枠材2本を紐で連結して枠とし、枠と足板を紐結合で固定して、輪かんじき型の田下駄としたものと思われる。深田遺跡・袴狭遺跡出土例の内、紐結合型穿孔式3孔の足板は縦長型であり、但馬では輪かんじき型は縦長型になるようである。

枘結合型足板 W146とW151の2点であり、ともに縦長型である。横桟によると思われる摩滅が一定間隔で認められることから枠形田下駄の足板と想定される。W146は幅10.4cmと足駄型の足板に近い幅で

あるが、一端が幅9cmと細く削られ、その両面に幅約2cmの溝状に木のあたりによるとみられる摩滅が認められ、摩滅の外側に目釘が打たれている。これは厚さ2cmの枠板に貫通した枘孔を穿って足板を差し込み、枠から外に出た足板の枘孔際に目釘を打って足板が枘孔から脱落するのを防止したものであろう。おそらく枠に穿った枘孔から枠端までは厚さがあり、目釘を打つことが不可能か有効でなかったため、足板に木釘を打って脱落防止を図ったのであろう。また枘部分の溝状に摩滅した部分は両側面も摩滅している。これは足板の横方向に動きによって生じたものであろう。足板の裏には他に横桟によるとみられる最小幅1.6cmの溝状の摩滅が7.5cm間隔で認められ、その部分では足板の両側面も摩滅している。これは横桟と足板が足板の撓みを防止するため紐結合されていた痕跡であろう。W151は無孔式の全長65.6cmの足板で、裏面には両端に枠材のあたり、その内側には横桟のあたりよるとみられる窪みが4ヶ所観取できる。この窪みを下から順に1~4とすると、1と枠材の痕跡間が12cm、1・2間が12cm、2・3間も12cm、3・4間が13.2cm、4と枠材間が11cmとなっている。中央の2・3横桟があたる部分の長さ約17cmを幅8.7cmと広く作り、そこから両端に向けて幅を減じているが、1・4横桟までは急激に幅を減じ、そこから枘までの幅の減は緩やかとなっている。足板と横桟を紐結合したとみられ、4横桟上の表面には抉りが入れている。1横桟上の表面には抉りはみられないが、表面に傷みが観取できる。こられは横桟と足板を紐結合で固定し、足板の撓みを防止したものであろう。

単独型縦長足板 枠を伴わない単独型足板の内、足板の木目が足と並行するものを単独縦長足板とした。緒孔は全て穿孔式であり、3孔式と4孔式がある。3孔式のものは重心が前寄りにくるものと中央にくるものが存在している。また前壺の位置からみて、足がはみ出すものはなく、足裏全体が足板に乗る型式のものである。後壺の間隔は、縦長型としては特異なW159を除けば、5.5~8.7 cmとなって、服飾具の下駄の緒孔の間隔と合致している。

4 孔式については縦長か横長かの判断は難しいが、横長とすると狭い側の緒孔の間隔が 4.5 cmとなって、後壺とするにしても狭すぎるように思え、縦長とすると7.0 cm・10.0 cmとなって、他の縦長田下駄の緒孔の間隔と合致することから、縦長型と判断している。

縦長型足板は幅から、 $9.5 \sim 14.8 \, \mathrm{cm}$ と細く足が乗るだけの最小幅とした幅狭タイプ(W152 \sim W158)と、足幅とは関係なく幅を広くした幅広タイプ(W159 \cdot W160)に分類される。幅狭タイプとした中で、W152 \sim W157の幅は $7.0 \sim 11.5 \, \mathrm{cm}$ で収まり、W158のみがやや広い。W158は歯の無い下駄型に分類されるものであり、この中には含めない方がよいのかもしれない。

長さでは全長が70cmを超す大形のもの、全長が50cmをやや超えるもの、31.5~40cmのもの、全長がそれ以下の小形のものが存在する。幅狭タイプは全て31cmを越し、幅広タイプは小形のものばかりで構成される。このように幅狭タイプと幅広タイプとでは長さの点でも、明らかに異なっており、用途の違いが考えられる。幅狭タイプは稲が植わった状態の中での作業等が想定され、幅広タイプでは後述する横長型と同様の使用形態が考えられる。

 $70 \, \mathrm{cm}$ を超す大形はW152・W153の $2 \, \mathrm{点}$ があり幅狭タイプである。全長はW152が $76.3 \, \mathrm{cm}$ 、W153が $78.1 \, \mathrm{cm}$ 、幅はW152が $10.4 \, \mathrm{cm}$ 、W153が $10.3 \, \mathrm{cm}$ で、全長・幅ともほとんど差がない。後端面をW152は 右角を、W153では左角をとるように加工しており、この $2 \, \mathrm{点}$ は左右一対になる可能性がある。緒孔は $3 \, \mathrm{L}$ ともが足板の中央より前に穿たれており、重心はかなり前によった位置となる。足より後ろに板が長く出た形状となって、足板全体を上げて移動するには不向きと思われ、後ろを引きずるような形で使用した田下駄であろう。W152は緒孔以外にも枘孔がみられ、部材が再利用されたものであろう。

50cmを超えるものはW156・W157の 2点であり、これも幅狭タイプである。ともに曲物あるいは桶の底板を再利用したものである。後端はほんど手を加えず、W156は前端を材とほぼ直角に折り、W157は円頭状に仕上げている。緒孔は穿孔による 3孔で、W157は後壺間隔が8.5cm、前壺と後壺の間隔は11.7cm、W156は後壺の右側を欠いているが、前壺と後壺間隔は10.8cm、重心はほぼ中央になる。ともに緒孔以外に制作時の穿孔や修繕時の穿孔や刃物傷がみられる。

 $35\sim40$ cmの小形にはW154·W155が該当し幅狭タイプに分類される。W154は板材を、W155は曲物ないしは桶の底板を再利用したものである。緒孔の位置からみて重心はW154が前寄りに、W155は中央となる。

30cm以下のものには幅狭タイプと幅広タイプの両方が存在している。W158は緒孔以外の柄孔がみられ、部材を転用したものであるが、足板の縁辺を草履状に加工しており、無菌の下駄型田下駄にあたるものである。W159は縦長型3孔式足板の中では唯一の幅広タイプであり、特殊例として、横長型とみた方がいいのかもしれないが、横長型は横幅が長さを上回るのに対し、W159は長さが横幅を上回っており、縦長型の一種として分類した。緒孔は3孔であり、前壺の位置からつま先が足板からはみ出すことはなく、ほぼ足全体が足板に乗った状態で使用されたものであろう。表面を平滑に仕上げた板材を使用しており、前面の両隅を隅取りしたような形状であるが、後端は割折ったままにしていることからみて、表面や隅取りの加工は田下駄として使用する以前の加工とみられる。

4 孔式はW 160の 1 点である。 4 孔式の前後の区別は困難であり、緒孔の間隔から縦長型とし、前後を決定した。ただ、前端は直線的に、後端は円頭状になることから、前後逆の可能性もある。

単独型横長足板 足が木目と直交する形で乗る足板を横長足板とした。横長足板には緒孔が穿孔式と切り込み式の両方が存在し、例外的なものとして穿孔式3孔と切り込み式3孔の両方が設けられたものが1点(W182)ある。前後関係があるものと考えられるが、切り合い関係がなく不明である。また、豊岡市袴狭遺跡や砂入遺跡にみられるような足板を枘孔結合型としたり、足板を支えるような枘孔がある足板横桟型田下駄が存在しており、穿孔式3孔で後壺間隔の広いものは、これらの歯板と区別しにくいものも存在する。しかし、歯板縦桟型田下駄の歯板は足板の枘孔が歯板の上端から2㎝前後と短く、下端の縦桟の枘孔が大きいという特徴がある。これらの点に注目して3孔式と歯板とを区別した。

穿孔式では3孔のみであり、4孔式は存在しない。切り込み式においても3孔式が大半を占め、横長型足板51点の内、4孔式は僅かに2点が存在するにすぎない。豊岡市袴狭遺跡においても多種・多量に田下駄が出土しているが、穿孔式では3孔と4孔ではほぼ1:2の割合で4孔式が多くなっている。切り込み式においても4孔式が多くなっているが、袴狭遺跡では切り込み4孔式は縦長型が多くなっている。したがって本遺跡のW206・W207も縦長型とみられなくもないが、縦長型とするには幅が広く、前縁を隅取りしていることなどから横長型と判断している。このように本遺跡から出土した田下駄に、緒孔の穿孔方式にかかわらず3孔式が多いのは地域的な特色なのか、時期的な差によるものかを判断できる材料は少ない。

穿孔式 3 孔はW161~W183の23点が存在する。 3 孔式の前壺の位置は足板の前端から 2.5~6.0 cmとなっており、5 cm以上のW161・W164・W165・W169・W171では指ははみださないであろうが、2.5~4.5 cmのW162・W163・W166・W167・W168・W170・W172・W173では指先がはみ出してしまうであろう。後壺の間隔は 9.3~14.0 cmの範囲に 18点が集中し、 15.0 cm以上のものも 6 点がある。最も広いものでは 20.5 cmを測る。縦長型では後壺間隔は服飾具の下駄の緒孔間隔にほぼ合致しているのに対し、横長

型穿孔式では後壺間が広くなり、単純に緒孔に下駄形に鼻緒を通して履くには不向きである。後壺の間隔が切り込み式に近い散布になっていることからみて、足裏と足板を固定するための紐がけは緒孔以外に、足首に巻くといったような紐がけされたものと思われる。

また、穿孔式 3 孔の足板は縦方向の長さでは23cm以上のものと23cm以下の 2 種が存在し、前者に歯にはW163~W169が、後者にはW170~W183が該当する。前者は基本的には足より大きいもので、足裏全体が足板に乗るものである。W161・W164・W165・W169は前壺と前縁の間隔が 5 cm以上あり、確実に足裏全体が足板に乗っていたものと思われ、W162・W163・W166・W167・W168・W170・W172・W173のように、前壺と前縁の間隔が狭いものは爪先が出ていたと思われる。後者は基本的には足の長さより短いもので、足がはみ出した状態で使用されたものであろう。細かくみれば長さが18cm以上とそれ以下に分けられる可能性がある。前壺の位置からW171・W174・W179の 3 点は爪先がはみ出さず踵がはみ出して、それ以外は爪先と踵の両方がはみ出た状態で使用されたものとみられる。横幅の点では26cm以下(W170・W171)、28~38cm(W161~W163・W165・W168・W169・W172・W174~W178・W180・W181)、40cm以上(W164・W166・W167・W173・W179・W182・W183)となり、26cm以下のW170・W171は長さも短く、小形の製品である。

形状の上からは

A類 前縁を弧状とし側縁や後縁を直線に加工したもの

B類 前縁の両隅を切って足板全体が台形状としたもの

C類 板材を切ったままの状態のもの

が存在し、A類にはW161~W163・W170~W173が、B類にはW164~W167・W174~W177・W180~W182が、C類にはW168・W169・W178・W183が該当する。A類は足板の田下駄として制作時に縁辺が加工され形も整っており、泥田に入るためだけのものではないものであろう。類似した形態は袴狭遺跡でも出土しており、但馬では全域で用いられた田下駄の形状である可能性がある。A類には長さが1類と2類が存在し、横幅では26cm以下、28~38cm、40cm以上の3種が存在する。長さの比率が示すように、長さに対して横幅が1.5以下の62~64・71・72と、1.5以上となって横長になるW172・W173がある。

B類は縁辺を整形したもの(W164・W166・W174~W176)と、側縁の整形がなされず折ったままとされるもの(W165・W167・W180~W182)があり、長さが 1 類で横幅も40cmを超す大型、長さは 2 類で横幅が28~38cmの中型が存在する。

C類は長さが1類で横幅が28~38cmとなるW168・W169、長さが2類で横幅がやはり28~38cmのグループに入るW178・W183がある。

切り込み式は27点あり、3 孔式と4 孔式とがある。内訳は3 孔式が22点(W184~W204 · 208)、4 孔式が2点(W206 · W207)、判断できないものが3点(W205 · W209 · W210)となっており、穿孔式同様、3 孔式がほとんどで4 孔式は少ない。4 孔式については縦長か横長かの判断は難しいが、縦長型では足板幅が狭く、幅広タイプは特殊な形で存在するのみであることから、ここでは横長型として扱った。ただW207は前縁の切り込みの深さが異なっており、3 孔式とすべきものかもしれない。

3 孔式の緒孔の間隔では後壺の間隔は $7.2 \sim 28.8$ cmの間となってかなりの差が認められるが、全体に散漫な分布となって企画性を抽出することは困難である。その中であえて抽出するならば10 cm未満で縦長型の間隔を採っているもの(W191)、 $10 \sim 15$ cmで穿孔式の内の緒孔間隔の狭いグループに匹敵するもの(W186・W189・W195・W198 \sim W202・W204 \sim W206)、 $17 \sim 21$ cmの間隔(W184・W187・W188・

W190・W196・W203)、24cm以上(W185・W192・W194・W197・W207)の4種が存在しているのかもしれない。ただ後壺の間隔は後述する足板の長さ・幅・形状と有機的な関係を持たないようであり、これらに関係なく決定されたようである。

切り込み式の足板の大きさの点では、縦方向の長さが①24cm以上、②16.7~21.8cm、③9.4~14.9 cmの3種に分類することが可能であり、①・②類は穿孔式と同様であるが、①類は3点(W184~W186)と穿孔式に比べて少なく、また穿孔式ではみられなかった長さが短い③類が存在している。③類では足の1/3以上が、最も短いものでは足の半分がはみ出した形であり、体重が足の前側にしかかけられない状態でも行える作業、例えば田植え・稲刈り等の作業に使用されたことが考えられる。ただし、横幅は最も狭いものでも35cm以上あり、稲が植わった状態での作業には不向きと思われる。

横幅は①類では $36\sim48.5$ cmの間であるが、 3 点であり企画性は問えない。②類は $31\sim61.3$ cmの間となっており、 $31\sim37$ cmとしたものが 7 点、 $43\sim46$ cmとしたものが 4 点、 60 cmを超えるものが 1 点ある。③類では $35\sim41$ cmとしたものが 6 点、 50 cmを超えるものが 3 点あり、全体としては横幅が長くなる傾向がある。

形状では

A類 側縁を弧状としたもの

B類 前縁を隅取りして台形を呈するもの

C類 前縁が弧状を呈するもの

D類 板材を切ったままの状態のもの

があり、A類にはW188の1点、B類にはW184・W187・W207の3点が、C類にはW197~W199が、D類にはW185・W186・W189~W196・W201~W206が、該当する。A類は側縁を弧状に加工するのに対し、B類は隅取りだけで側縁は調整をしない。B類は台形状の板材を利用したものか、あるいは使用の都合上で隅取りをする必要があったものと思われる。C類もB類と同様と思われる。A類は長さでは2類となり、B類は長さの1・2類に、C類は長さの3類であり、C類は長さの1~3類すべてにみられる。横幅はA・B類は31~37㎝の範囲に、C類は36~40㎝にまとまるのに対し、D類は35.9~61.3㎝となってバラツキが大きい。製作が簡易であることから、使用に応じて適宜、製作された結果であろう。

田船(図版 136·137、写真図版 125·126)

田船に分離したものはW211~W213の3点であるが、W212は側から底部にかけての破片であり、W213は側の破片であるため、田船であると確証しているものではなく、容器としての漕の可能性もある。ただ粗い作りであることから田船としたものである。3点ともスギ材で、W211は芯を外しているが、底部側が芯に近い木取りになっている。

W211は刳り抜き式の田船で、底部から側辺にかけて緩く彎曲する。底部の内面は平らで、底部内面と側辺の境は明瞭である。木口部は底部との境が薄く、端部にむけて厚く作られ、端面は平らな面を有する。ハツリ痕が明瞭に残る。他方の木口を欠いているが底部端に刃物痕が残っており、これが底部と木口の境になる。W212は下側の木口は直線であるが、上側は側辺が彎曲して木口に続くようであり、境は不明瞭である。底部外面は平らで側辺との境は屈曲する。W213は木口部から側辺部にかけての破片であり、木口側が厚く作られている。

運搬具

天秤棒 (図版 137、写真図版 126)

W214・W215の 2 点がある。W214は片側だけに幅 $1.8\,\mathrm{cm}$ ・深さ $0.8\,\mathrm{cm}$ の溝状に紐かけを作り、残る側にはやや尖り気味にしている。W215は両端の内側を $0.8\,\mathrm{cm}$ の深さに抉って先端側に凸部を作り出している。W214・W215とも紐かけは上面のみで、側面・下面には設けられていない。W215は中央が太く両端が細くなっており、中央の楕円形は断面を呈する。

容器類

蓋板・曲物・挽物・刳物がある。

蓋板 (図版 138、写真図版 126・127)

楕円形板の中央に孔が穿たれたものと円形板の中央に孔が穿たれたものがあり、また曲物底板を再利用したもの(W218~W222)と、挽物を再利用したもの(W223~W225)がある。楕円形のW216は縁辺を薄く加工し、紐通し孔が2孔穿たれている。また割れ目を挟んで小孔が下方側に2孔、紐通し孔の傍に1孔が穿たれており、修繕されたものとみられる。表面には刃物傷が多く確認できる。W217は円形板の中央に孔が穿たれたもので、縁に小孔が2孔穿たれている。また縁側面には釘止穴が6ヶ所認められ、曲げ物容器の底板が転用されたものである。W218~W222の縁は直角となり、W218・W220・W221・W222には底板面に側板を結合するための小孔が2孔一対で穿たれ、W220・W221の小孔には樺皮材が遺存している。W219は破損しているが孔が遺存しており、本来は2孔一対であろう。またW218~W222には縁と並行して針書刻線が認められ、W220・W221では側板結合の外側小孔の内側に接するように刻まれている。W219・W222は針書刻線と縁の間が広く、底板大きく底側に張り出した形状となる。W221は中央の孔と縁の間に小孔が穿たれており、蒸し器のサナになる可能性が考えられる。W222を除くW218~W221の推定復元径は18~20cmで比較的揃っている。

W223~W225は挽物の皿の中央に孔を穿ったもので、W224・W225には中央孔以外にも小孔が穿たれ、修繕された可能性がある。W225は底部外周まで轆轤削りされ、中央は削り残されて低い高台状となり、 $$2 $2

曲物 (図版 139、写真図版 127·128)

楕円形曲物・円形曲物がある。W226・W227は楕円形曲物で、W227の上端は切り取られている。 3 点ともに底板の上に側板がのり、縁が直角となる型式のものである。底板上に 2 孔一対を基本とする紐結合孔が穿たれるが、W227の木口部の結合孔は内側に 2 孔が穿たれて 3 孔となっている。 3 孔を穿った目的は不明である。W227の結合孔には樺皮が遺存している。W226は針書刻線が引かれている。W226は上端と下端が並行しない。またW226の右縁沿いには結合孔とみられる小孔が穿たれており、修繕された可能性が高い。

W228~W230は円形曲物であり、3 点とも縁は直角になり、底板上に側板を乗せる型式である。縁に並行して針書刻線が引かれ、側板の結合孔が刻線を跨ぐように2 孔一対で穿たれている。外側の結合孔の内側が刻線に接するように穿たれている。推定復元径は $19\sim20\,\mathrm{cm}$ である。W228・W229はヒノキ、W230はスギ材である。

挽物 (図版 139、写真図版 127·128)

皿と椀があり、W231~W233は挽物の皿である。口縁部の立ち上がりは1.5~2.3㎝と短く、口縁端部は面をもたない。轆轤ケズリは内面から口縁部外面下端に及び、底部外面は鑿ハツリである。口縁部の遺存状態が悪く正確ではないが、推定復元径は18.7~22.0㎝である。W231には紐通し状の小孔が穿たれており、蓋に再利用された可能性が考えられる。W233の内外面に刃物傷が認められる。W231・W232はヒノキ、W233はスギ材である。

W234は椀であり、内外面とも黒漆が塗布され、外面には赤漆によって文様が描かれている。

刳物(図版 140、写真図版 128)

W235~W239は刳物の容器であり、方形容器と槽がある。すべてスギ材を使用し、W235~W237・W239は芯を外した材、W238は芯持ち材を刳り抜いている。

W235~W239は方形容器で、W235は浅い容器で、木口・側辺は底部から斜めに開く。木口部は厚く作られる。W236は底部から斜めに立ち上がる側辺か木口部の破片であるが、木取りや端部が薄いことからすれば側辺部の可能性が高い。ただし、この破片は下端が加工されており、容器が割れた後に再加工されて使用されたものと思われる。W237は小形の容器である。木口が直線的であることから、全体の形状は方形を呈するものと思われる。底部は緩い曲面となっており、木口部も底部から緩くカーブして立ち上がる。木口は底面より厚く作られている。W238は芯持ち材の芯から一方の外側を刳り抜き容器としたもので、全体の形状は不整形な方形を呈す。側辺の外側は弧を描いており、丸太材を刳り抜いて製作されたものであろう。全体のつくりは粗く、底部は粗く割って平らにしている。

W239は槽である。木口から左側辺は旧来の姿を止めているが、右側辺は割れ口を再加工されており、槽として使用されていたものが割れたため、何らかに再利用された可能性がある。木口部と側辺は直線的でほぼ直角となっており、本来は方形を呈する槽であったものと思われる。木口部は底部や側辺より厚く作られ、内面の底部と側辺や木口の境、木口と側辺の境は明瞭である。

服飾具

縦櫛と下駄が出土している。

縦櫛(図版141、写真図版129)

W240は彎曲結菌式縦櫛である。ムネ部のみが遺存し、歯はすべて欠損する。ムネ部分は歯を樺皮で結合させ、全体に黒漆を塗っている。

下駄 (図版 141、写真図版 129)

W241は連歯式の下駄である。台は、前壺から先端側を欠いているが、小判型を呈する。後壺は後歯の前に穿たれる。歯は台からはみ出さず、後歯は幅広く太く、前歯は細く作り出されている。前歯の断面形は逆台形を呈する。ヒノキ材が使用されている。

食事具

匙・杓子形木製品・箸が出土している。

匙(図版 141、写真図版 129)

W242の匙は身の上縁と柄の上面には段差がなく、柄は身から鈍角で立ち上がった後、彎曲して端部となる。端部は単純に丸く納められている。身は楕円形を呈する。イヌガヤ材が使用されている。

杓子形木製品(図版141、写真図版129)

W243・W244を杓文字型木製品とした。W243は身部の長さは12.5㎝で、幅3.8㎝と細く、身の基部から柄へは緩く彎曲して移行する。身部は中央が厚く、縁辺は薄く削られる。W244は身幅が比較的広く、身と柄の境は屈曲する。身部は先端を欠くが、中央から縁まで同じ厚さであり、縁は面を持つ。W243はスギ材、W244もスギ材と思われる。

箸 (図版 141、写真図版 129)

W245・W246は下端を尖らし、上端を丸く納めた棒状の箸である。W245はイヌガヤ、W246はスギ材。

工具

木針 (図版 141、写真図版 129)

W247・W248は扁平な板材の先端を尖らしたもので、W247は上端近くに紐通しの小孔を穿っている。 W248は紐通しの孔はみられないが、一応この類に含めた。ともにヒノキ材である。

雑具

火鑚臼・机・腰掛・箱部材が出土している。

火鑽臼 (図版 141、写真図版 129)

W249・W250は角棒の火鑚臼である。ともに厚さ1.6㎝の棒状であるが、W249は短い角棒で、片方の辺側に7ヶ所の火鑚穴がある。W250は45㎝を超す断面が楕円形の棒であり、先端が欠いており、本来の長さはさらに長くなる。片側の側辺に6ヶ所の火鑚穴がみられ、火鑚穴の下側には3ヶ所の切り込みが確認できる。火鑚臼では火種となる木粉を1ヶ所に集めるために、側面から切り込みを入れておくと言われており、この3ヶ所の切り込みもそうしたものであろう。

机 (図版 142·145、写真図版 130·131)

W251の机天板が出土している。天板は一枚板で、幅43.9cm、長さは一端から78.7cmまで遺存する。一端の右隅には径約4cmの不整円形の枘孔が穿たれている。左隅は枘孔部分が欠けており確認できないが、そこにも枘孔が穿たれており、全体とした4隅に枘孔が穿たれ、そこに脚が差し込まれていたものと思われる。天板は裏面が脚挿入部から縁に向かって薄く削られる。また天板裏面の枘孔沿いには板と直交する方向に溝状の枘が穿たれ、角材が嵌め込まれている。この技法は吸付桟接と呼ばれ、ここでは天板の補強することが目的で行われたものであろう。

W259・W260は机の脚板と考えているが、ともに上端近くに出枘が出されていることから、断定はできないものである。W259は下端中央を刳り込んだ型式の脚板で、上端で幅約40cm、下端が僅かに狭くなり、左側の脚部は欠く。出枘は上端から約4.2cm下がった位置に作り出され、先端は丸く仕上げられている。これは出枘を枘孔から外側に突出させていたために行われた加工であろう。左側出枘のほぼ中央には木釘が残り、右側出枘中央にも木釘の打ち込まれた痕跡と思われる小孔が確認できる。これらの木釘

は出枘基部から1.7~2.0㎝の位置であり、板材を釘結合した木釘とすると、組み合わさる側の板材が最低でも3㎝近くの厚さが必要となって、釘結合とは考えにくいことから、この木釘は枘結合の抜け止めの栓の役割をもったものと考えられる。おそらく、机の天板を支える形で横桟状の板材を脚板と枘結合していたものと考えられる。また中央付近と左側脚部の上付近の2ヶ所に枘孔が穿たれており、転用板材が使用されたとも考えられるが、穿たれた位置から、そこに補強のための横桟が通されていたものと考えておきたい。W260は左側辺部を欠いているが、下端が広くなる型式の脚板で、上端の幅は37㎝以上である。高さが14.3㎝と低く腰掛けの可能性もあるが、幅が腰掛けにしては広いことから、下端が欠損しているものとみて机脚板にした。出枘は上端から一段下がった位置に作り出され、先端の一部を欠くが、角取りが施されている。出枘の基部に柄孔が穿たれており、他の部材と枘結合されていたものと思われる。おそらく、W259と同様の構造を採る机になるものと思われる。

腰掛 (図版 143・144、写真図版 130・131)

W252~W258は指物の腰掛とその座板及び脚板である。W252~W254の座板は端部寄りの2ヶ所に枘孔を穿ち、脚板を枘差しで嵌め込む型式のものである。座板は両端近くに貫通した枘孔が穿たれ、W252・W254では厚く、上面の中央が膨れる。W252の座板は両端に段がつけられている。W253の平面形態はW252・W254と同様であるが、座板が薄く、別の部材になる可能性がある。脚板には平面形が長方形を呈するW256、長方形の中央がくびれたW257、台形となるW252、裾広がりとなって下端が長方形になるW258などがある。W258は出枘と脚部との間を外側に突出させており、座板の安定を意図したものと思われる。W256は下端寄りの中央に枘孔が穿たれており、補強のための桟が通されていたもの思われる。W255は基本的には長方形の脚板であり、上端左隅は切り取られたものとして脚板に含めているが、出枘が細く、片側に寄っており、脚板とすれば出枘は2本必要になるであろう。

座板に片方の脚板が差し込まれたまま出土したW252は、脚板は座板の長軸に直交して差し込まれている。脚板は台形を呈し、座板に対してほぼ直角に差し込まれ、出枘は座板上面よりも突出させている。

箱 (図版 145、写真図版 131)

W261~W263の3点がある。W261は両側辺が遺存しているが、上端と下端は欠いている。左側辺の下端に木釘孔がみられる。W262は指物の箱部材で、下端に蟻組接の枘孔が穿たれている。箱の底板と木口板を蟻組接で組み、蟻組枘の中間を木釘で補強している。W263は平組接の2枚組接の箱部材である。左右では切り込みが反対にされており、右端は上端から1/3 (2.4cm)を残して、残りの2/3 (3.6cm)を切り込み、左端は上端から2/3 (4.2cm)を残して、残りの1/3 (2.2cm)を切り込んでいる。

部材・用途不明品

紐結合部材(図版 146、写真図版 132)

W264~W272は棒材を抉って紐掛けを作り出した部材であり、W264~W268は扁平な棒材を、W269~W272は角材を使用している。紐掛けの切り込みが両端に作り出されたW265・W267・W268と、一端だけとしたW269・W271・W272がある。W264・W266・W270は一端に作り出しているが、片方の端を欠いており一端か両端かは不明である。またW271の下端は刃物で切られ焼け焦げていることから、本来の姿を留めているのか判然としない。紐掛けの切り込みは全周するW266・W272、両側面のW264・

W265・W267~W269・W271、一面のみのW270がある。W270の紐掛けは天秤棒状であるが、棒の太さが最大3.7 cmと細く、また角棒であることから天秤棒には含めていない。W272は太さ1.7 cmと細く、紐掛けは浅く小さい。棒の中央には紐を巻いていた思われる痕跡がみられる。

W273~W281は枘孔あるいは出枘を作り出した枘結合の部材である。W273・W274は角棒材の端寄りに出枘あるいは枘孔を穿ったもので、W273は端部を削って出枘とし、そこに小孔を穿って木栓留めしている。W274は端近くに枘孔を穿つ。枘孔から端部側は細く削り端部を尖らし気味にしている。W275・W276は角棒に貫通した枘孔を2ヶ所に穿ったものである。W275は両端近くに、W276は下側の枘孔から下端側を欠くが、上端は尖らせ、枘孔は貫通している。

W277は板材の中央付近に貫通しない枘孔が穿たれている。二段枘接のように、浅い方形枘孔を穿ち、 その内部の中心付近と端よりを浅い円形に窪ませている。

W278は板材の中央から端に寄った位置に長方形の枘孔を穿ち、その周囲に小さな枘孔を3ヶ所穿っている。中央の枘孔には出枘が遺存している。一部隅を欠くが、その他の四周は旧状を保っている。

W279は方形の棒材の一端を細く削って出柄を作り、出柄の先端を丸めていることから、出柄は柄孔から外に出ていたと思われる。出柄の先端近くには小孔を穿たれており、位置からみて小孔は木栓を通すための孔と思われる。

W280は扁平な棒材の中央に、上面で2.7×2.4cmの枘孔を穿ち、枘孔周囲を残して端部側を抉り、端部を長方形に突出させたものである。端部の一部を欠くが、その他は旧状を保つ。

W281は角材の中央よりに2ヶ所の枘孔が穿たれ、上側の枘孔は側面からも枘孔が穿たれ、内部で連結している。下側の枘孔は貫通しない。下端は出枘状となっている。

不明部材 (図版 148、写真図版 133)

結合された痕跡はあるが結合方法の判然としないものを不明部材とした。W282は板材の端近くに枘孔を穿ち、枘孔横の側辺には切り込みがみられる。紐結合されていた可能性が考えられる。W283も板材と斜行する溝状の窪みが2ヶ所にみられ、そこに他の部材が組み合わされていたものと思われる。

用途不明品(図版 148~150、写真図版 134·135)

W284・W285は両端を抉り込んで紐掛け状としたものである。W286は笠部を作り出した栓状の製品であるが、軸部は方形である。W287は杓子形木製品の身部を切り取ったような形状であり、杓子形木製品を転用した可能性がある。W288は算盤玉状の製品で、紡錘車ともとれるが、中央の孔が大きい。W289は側面に6ヶ所の切り込みがあり、田下駄の可能性がある。W290・W291はアカガシ材であり、農具になる可能性あるが、特定できない。ともに長方形の身部に隆起部を作り出しており、W290の隆起部の端部は斜めにカットされている。W292は側面から大きく抉っている板材である。W293・W294は槽の一部とみられるが、W293は両端を欠損しており、W294は木口部と側辺部の高さが異なる上に、木口部に穿孔がみられる。W295・W296は棒状製品で、W295は中央を扁平にしている。W296は一端を尖らせている。W297は復元径約32cmの円形製品であったと思われるもので、中央には径約3cmの孔が穿たれ、孔は裏面に向けてやや細くなる。孔の側面には磨耗が認められ、棒状のものが差し込まれて回転が加え

られた可能性がある。孔の周囲は表裏とも厚く作られ、その上面は変色が認められ。何かに組み合わされていたことが考えられる。縁も厚く作られ、縁側面は裏面に向かって斜めに削られている。縁と孔周囲まではノミ削りされ、裏面もノミ削りのままである。W298は上端から左側辺の上半にかけて、小孔が縁と並行して約1cm間隔で穿たれている。下端は欠けているが、そこにも小孔の痕跡が確認できる。今のところこの小孔を紐結合のための小孔と捉え、小孔列は隅部で曲線を描くことから方形容器と考え、容器類に含めたが、類例はあまりみられないものである。右側辺に孔の痕跡が確認でき、蓋板になる可能性も考えられる。

W299は上面から抉りを入れたもので、平面は台形となり、左側辺側に2個一対の小孔が穿たれている。 W300は丸太材の中央を刳り抜いて円筒にしたもので、樋の可能性が考えられるが、一端に枘状の孔が 穿たれており、用途は特定できない。

(2) 文房具/祭祀具

文房具

計量具(物差し)(図版151、写真図版136)

W301は形状から農具あるいは工具の柄を転用し、物差しとして使用されたと考えられる製品である。 残存長 $36.0\,\mathrm{cm}$ 、長径 $3.1\,\mathrm{cm}$ ・短径 $2.6\,\mathrm{cm}$ の楕円形の棒状の材の側面に『 \times 』と全体を10に区画する目盛りを刻んだものである。

本製品は、下端は折損あるいは折り取り未処理のままとなっているが、上端は丸く加工されており、 もともとは、鍬・鋤簾などの農具あるいは工具の柄であったことを伺わせる。樹種はスギ材である。

物差しとして捉えた場合、全体を10に区画する目盛りは、寸を刻む大目盛であり、『 \times 』即は尺の中央の大目盛に刻む『**』即が略化されたものである。但し、寸間に刻まれる中目盛は刻まれていない。大目盛(寸)は3.52cm・3.53cm・3.57cm・3.65cm・3.73cm・3.75cmの間隔で刻まれており、1目盛りの間隔は平均して3.60cmである。残存長を勘案するならば、剥離・折損している下端部分の1区画分もほぼ1寸分に当たる。加えて、『 \times 』が10区画の大目盛の中央にあることから、本製品が1尺の物差しもしくは1尺分で折損した製品であることがわかる。

本製品は、SRK2003の検出時に丸頭の端部を上に直立して出土したもので、周囲の状況から、畦畔の杭として再利用されていたものと推測できる。対応する畦畔は中世後期と重複し先行するもので、打ち込まれた物差しの上端が、古代の水田土壌中に収まることから、木製品が杭として使用された。時期は古代の範疇に納まるものと考えられる。

祭祀具

祭祀具と認識できるものは9点図示した。

杓子形 (図版 151、写真図版 136)

 $m W\,302$ は柄が全長の 1/2 を占めている。羽子板(形代)ではなく、小型の杓子もしくは杓子形と考えられる。樹種はスギ材である。

人形(図版 151、写真図版 136)

W 303は人形である。小型、頭部は扁平、肩は『く』の字の切り込みによってなで肩に表現されている。

手は表現されていたが、欠失している。脚部は斎串様に1本脚である。脚部に折れがあることから地面 に突き立てられていた可能性も考えられよう。樹種はスギ材である。

斎串 (図版 151、写真図版 136)

W304は先端が尖った細長い製品である。頭部は欠失しているが、斎串と考えられる。樹種はスギ材である。

舟形 (図版 151、写真図版 136)

W305は舟形である。舳・艫側ともに欠損しているが、上面に構造物の表現はなく丸木舟を模したものである。樹種はスギ材である。

刀形 (図版 151、写真図版 136)

以下 4 点は刀形である。形状は剣把の形を中心に差異があるが、何れにも切り掛けはない。W309が針葉樹と判断されるに留まる以外はいずれもスギ材である。

W306は刀身と剣把の境が省略されており、柄頭が表現されている。切っ先は部分は両刃に削られている。 W307は切刃の刀身に湾曲する剣把を表現している。刀身と剣把の境は峰・刃側ともに段を切り出し表 現している。柄頭は小さく丸みを帯びて表現している。

W308は切っ先を欠いた刀身に真直ぐな剣把を表現している。刀身と剣把の境は、峰側では明瞭でなく、 刃側は段を切り出し表現している。柄頭は凸部を表現している。

W309は切刃の刀身に真直ぐな剣把を表現している。刀身と剣把の境は峰・刃側ともに段を切り出し表現しているが、峰側は斜めに、刃側は段をつけて表現している。柄頭は欠損している。

W310は柳葉形の刃身に細身の柄(なかご)を表現している。刀身と柄の境は、峰側では明瞭でなく、 刃部側は斜めに削り出し表現している。柄は面取りを若干行っているが、柄頭に可飾はない。全体の印 象として、中世の庖丁を模したもの、もしくは切匙に近い形状の製品であるが、本製品は全長が長いた め、その可能性は排除される。

(3) 建築部材

加都遺跡で出土した建築部材はすべて水田畦畔およびその補強材として、また、矢板・杭に転用されていたものばかりである。したがって、元の形を失うまでに加工されたものも多く、建築部材と確定できないものや不確定なものが多いことを断っておく。

(a)扉口装置

扉口装置のうち、扉板・蹴放しのほか、辺付や楣と思われる部材も存在する。

扉板等(図版 152~155、写真図版137·138)

すべて一木で作成され、軸も削り出されたものである。W311は残存長1.35m、幅53cm、厚さ3.6cmを測る。指かけあるいは門穴を備えた栓を差し込んだと思われる約10cm $\times 3.5$ cmの矩形孔が穿たれているが、内側に偏るだけではなく、上下方向にも偏っている。偏った側を上方と考えて図示した。上方の軸は長さ約7cm、断面円形で、直径3.2cmを測る。扉本体の下端と思われる側は欠失している。W312は78cm $\times 24$ cm、厚さ2.6cmの長方形の板であるが、隅付近に2cm角の穿孔があるとともに、一方に軸の痕跡があ

るため、扉に含めた。ただし、穿孔と軸痕跡が同じ側に存在しており、扉でない可能性も多く含んでいる。しかし、この孔は方立に結びつけるための紐通し孔とすれば、扉とすることができるものと思われる。この板には1 cm×1.5 cm程度の矩形孔が2個一対で2ヶ所に穿たれている。一対の2個の間には溝を彫っていることから、紐等を通していた可能性があり、開閉のための装置であった可能性も考えられる。W313をW312と同様の形態を示す。52cm×24.6 cm×2 cmを測り、方形孔は一辺3 cm程度である。図の下方には断面楕円形の軸が削り出されている。方形孔を紐通し孔と考えて、W312同様に扉と判断した。ただし、52cmの高さでは扉としての機能を果たせたかどうかやや疑問が残るが、奈良県和爾・森本遺跡に把手付の約54cm高を測る扉が存在している(奈良国立文化財研究所1993)ことから、扉と判断した。W314・W315はともに扉の把手部分の残欠である。平面的にはともに基部が幅広で、中央部で狭く湾曲した形状を呈し、方形の門穴を穿っている。W314の把手側面は台形状、W315は把手上部が弧状を呈する。W314の把手は扉と一体で削り出したものであり、把手長52cm、最大幅23.6 cmを測る。門孔は5 cm×4 cmの矩形を呈する。扉も含めた残存長は約109cm、扉部分の厚みは痩せており2.2 cmである。なお、図の把手下方には6 cm×5 cmの楕円形孔が1 個存在する。W315は残存長42cmで、門孔の長辺は10cmを測る。

W316・317は扉の可能性のある板材である。W316は図の縦方向の残存長が軸を除いて約35cm、幅26 cm、厚さ3.2cmを測る。図の上部には孔があるようで、孔であれば幅3cmである。軸は断面円形であるが、 根元が細く先が膨らんだ形状である。主として図の右側を削り込んでいる。軸長は7㎝弱で、先端での 直径は4cmとなっている。この軸の形状から、扉と判断するには躊躇するものであるが、図の左側を上 にして窓板と考えれば、軸の形状や軸受けに当たると思われる部分が削り込んであることも首肯できよ う。W317は軸を除いた残存長38.5 cm、幅24.5 cm、厚さ2.4 cmを測るが、軸の断面形が円形をなさず矩 形に近く角張る点と、軸と扉との角度が鈍角となる点で扉とは断定していない。ただし、後者について は扉とされているものの中に類例が多く存在するため、扉から除外する理由とはならないようである。 W318は残存長 $40.5\,\mathrm{cm}$ 、幅 $12\,\mathrm{cm}$ 、厚さ $2\,\mathrm{cm}$ を測る扉状の板である。幅が狭いのが難点であるが、本来の ものであるかどうかは不明である。ただし、 $4 \, \mathrm{cm}$ 長で断面 $2.3 \, \mathrm{cm} imes 1.9 \, \mathrm{cm}$ の楕円形を呈する軸が作り出さ れている。W319は長さ84cm、幅32.5cm、最大厚4.2cmを測るほぼ完形の扉板であるが、軸は確認できな い。図の右上隅に2.5㎝×3.5㎝の楕円形に近い穿孔が認められる。W320の右端にも楕円形 (3.4㎝×2.2 cm) の穿孔が存在するが、端よりもかなり内側の位置に穿たれている。W320は長さ77cm、幅26.4cm、厚 さ $2.4\,\mathrm{cm}$ を測る。 $\mathrm{W}321$ は長さ $73\,\mathrm{cm}$ 、幅 $24.4\,\mathrm{cm}$ 、最大厚 $4.2\,\mathrm{cm}$ を測る扉状板材である。図の上部には軸が 一本造り出されているが、下部には2本認められ、しかもどちらも端ではなく内側に入った位置に造り 出されている。下方の2本の軸はたまたま残存したものではなく、明らかに造出されたものであること から、この板を扉とすることに躊躇を覚える。板の長さ73cm、幅24.4cm、最大厚3cmという数値は扉の 形状を示しているが、断定できない。あるいは他に転用されたものかもしれない。なお、図の上部左寄 りに $2 \text{ cm} \times 1.5 \text{ cm}$ の矩形の孔が 2 個一対で穿たれているが、この 2 個はW 312と違ってややずれた位置に ある。W322は長さ135cm、幅33.6cm、厚さ3.5cmを測る扉状の板であるが、両長側が斜めに切り落とされ、 横断面は台形を呈している。板の中央少し上で右に少し偏った位置に、長辺7.4cm、短辺2.6cmの長方形 の穿孔がある。この孔はW311とは違って断面の中央部分が狭くなっている。形状からは扉の可能性が高 いと思われるが、上下の軸は確認できない。なお、扉板等と判断した板材はすべてスギ材である。

蹴放し (図版 155・156、写真図版 139)

W323は蹴放しの可能性がある材である。残存長116cm、残存幅16cmである。図の上端はもとの端が残 存しているものと思われ、幅もほぼ現状に近いものと思われる。上端より6cmのところから台形状に削 り出しており、高さ3cm、上端での幅8cmを測る。横断面は「凸」形に近い。下部の厚さは1.5cmである。 一般的な蹴放し材と比べると、凸部の幅が広いが、凸部が片側に寄っていることから、蹴放しと判断し た。穿孔等は認められない。W324は幅10cm、残存長114cmを測り、図の下部を楔形に削って杭もしくは 矢板に転用している。横断面は「凸」に近い形を呈し、凸上部は幅約3cm、高さ2.8cmで、下部は厚さ3.2 cmを測る。表面には削り痕が明瞭に認められる。穿孔等は存在しない。W325は蹴放しの可能性がある材 であるが、梁の可能性も考えられる。残存長155.6cm、幅22cmを測り、横断面の形は図の下端付近では 台形状、その上部では高さ10cmの三角形に近い。下端での厚みは8cmであるが、図の右上では幅4cm、 深さ4㎝で削り取られたような形になっている。図上端には短辺8㎝、長辺16㎝以上になると思われる 長方形の穿孔が中央に認められる。下部左右両長側では後光もしくは上端幅5~6cmの切り込みが7~ 8 cm間隔で 2 個一対認められる。両長側ではその位置が相対する位置ではなく、ずらしている。垂木を 結びつけるための仕口と思われることから、梁とするほうがよいかもしれない。ほかにも加工痕として 判断できそうなる部分も認められるが、残存状況が良好でないため不明とせざるをえない。W326も蹴放 しの可能性があるものと判断した。横断面が横「L」字形を呈し、上方に延びた部分の幅は4cm弱、高さ 2 cm強を測る。横断面全体では高さ 5 cmとなり、下部の厚さは約 2 cmである。全体の残存長は175.6 cm、 幅14.4cmである。

辺付? (図版 156、写真図版 139)

W327は残存長140.2cm、幅8cm、厚さ5cmの角材状を呈するスギ材である。幅広の面に幅2.5cm、深さ2cm程度の直線的な溝を削り込んでいる。この溝は幅広面の中央ではなく、偏った位置にあり、図の左側の幅は3.5cm、右側では2cm残している。溝状の切込みを入れた角材であることから、壁板をはめ込むための仕口と判断し、扉口装置のうち、壁板を受け、壁板と扉板外側にある方立との間に存在する辺付の可能性があるものと判断した。溝底には削り痕が残る。スギ材である。

楣? (図版 157、写真図版 139)

W328は図上端から約35㎝下がった位置に直径15㎝の円形の大きな孔を穿っていることから、楣の可能性か高いと判断したものである。楣であれば両端付近に円形孔が対で存在し、両端は「コ」字形の切込みとなっているのを典型例とするが、本例は片側のみの破片となっており、端の切り込みも認められないようである。図の下端は転用時に切られた可能性を考えている。残存長130㎝、幅33㎝であるが、横断面上面は弧状を呈し、スギ丸太材の表面をそのまま利用している。横断面図の下面は凹凸が激しいものの、平面を志向していることから、横断面形は幅が狭い半月形を呈する。なお、大きな円孔の右下約24㎝の所には直径1.5㎝の小さな円孔が1個穿たれているが、その機能は不明である。W329は残存長51.4㎝、幅13.5㎝、厚さ4㎝前後の角材であるが、横断面ではW326と同様、横「L」字形を呈する。上方に飛び出た部分は幅4㎝、高さ2㎝を測り、上端は斜めになり、水平とはなっていない。残存部両端には短辺6㎝、長辺7㎝以上の矩形孔あるいはどちらか一方が端に近い部分とすると、片側は「コ」字形切込みとなるかもしれない。なお、方形孔の間隔は34㎝を測る。楣の可能性は低いと思われるが、段差を

もつ面があることから、扉口装置の中に含めた。W330も楣の可能性は低いと思われるが、端から $8\,cm$ のところに $7\,cm \times 4.8\,cm$ の楕円形孔が存在する。残存長は $77\,cm$ 、幅 $12.6\,cm$ 、厚さ $2.8\,cm$ のスギ角材である。

(b) 壁材

屋根妻壁板(図版157、写真図版140)

W331~W334は板材の一辺のみが斜めに切断されており、屋根勾配に合わせて梁より上で使用された 妻壁板と考えられる。W331は長さ88.4 cm、幅13cm、厚さ1 cmの板で、一方が斜めに切り落とされ、その角度は約30度である。なお、斜辺は弧状を呈している。W332は残存長81cm、幅13cm、厚さ1.4 cm、約28度の角度で切り落とされた斜辺は若干弧状を示す。W333は先端が欠損あるいは切り落とされている。残存長約79cm、幅は16.5 cmと広く、厚さは2 cm弱である。W334は残存長70cm、幅14.5 cm、厚さ約2.5 cmを測り、約33度の角度で一端を斜めに切り落としている。斜辺は微妙に弧状となっている。W331・W332・W334には方形孔が一箇所穿たれているが、位置は一定せず、機能も不明である。ところで、斜めに切り落とされた角度は30度前後でほぼ一定している。板の使用方向としては縦・横方向の二通りが考えられるが、仮に縦方向とすると、妻側の棟での屋根角度は60度にしか開かないこととなり、かなり急である。いっぽう、横方向に使用した場合、二等辺三角形の底辺側の角度の和が60度であることから、頂角は120度となり、妻側棟での屋根角度となる。60度は極めて急角度であると思われることから、ここでは横方向に使用したものと考えておきたい。なお、三重県六大A遺跡では縦板壁同士の接合面仕口として、隣接する壁板長側端面をそれぞれ凸形と凹形に加工して合わせる方法をとっている(三重県埋蔵文化財センター2000)。本遺跡例ではそこまで明確ではないが、断面形は楔形に近い四角形で、厚みのある側の端面はW333やW334のように凹面に近い形状となっている。

壁板 (図版 158~161、写真図版140~142)

W335~W353に示した板材は壁板と思われるが、W345のみ床板の可能性が高い。板の長辺に沿って穿孔があるW335・W336・W339・W340・W350については、縦方向に使用したものと思われる。ただし、W335以外には両方の長側辺に穿孔されている例が確認できないことから、縦・横いずれの方向であるのかについては断定できない。しかし、W353のように片辺に沿った部分のほぼ中央に円孔を1個のみ穿っていることと、短辺近くに1ヶ所の穿孔があるものについては、横方向に使用した板である可能性が高い。短辺付近に穿孔のあるものは、ほかにW337・W347・W352がある。また、短辺近くの穿孔はW335・W340にも認められることから、縦方向と考えたものについても、横方向で使用されていた可能性がある。ただし、これらのいずれについても床板の可能性も残している。

壁板のうち、もっとも長く残存しているのはW335で、217cmを測る。最も幅広く残存しているのは横板としたW353で、幅33.6cmを測り、縦板としたものでは幅25cm残存しているW342が最も広い。板の厚みは大半が $1\,\text{cm}\sim2\,\text{cm}$ であるが、W335・W347・Wのように $2.5\,\text{cm}$ のものやW349の $3.3\,\text{cm}$ のものまで認められる。なお、横板としたW353の最大厚は $5\,\text{cm}$ 易を測る。

長辺に沿った穿孔はW336のように、その間隔が50cmと広いものや、W350の32cmのほか、W340のように29cmと39cmといった不揃いのものや、W339のように20cmで等間隔のものもある。一方、W338・W341~W343・W349のように長・短辺付近以外の場所に穿孔されているものもある。W342は2cm×3cmの矩形孔が短辺方向に3個並んで穿孔され、W349では一辺2cm程度の矩形孔が2個一対となっ

ており、枘が残っている。なお、W351の穴は植物の根によるものと判断している。

W345は短辺側を削って楔状にしていることから床板の可能性が高いと判断したが、これについても、W335やW350といった壁板と考えられるものについても楔状に加工しているものも存在することから、楔状加工が床板であるとは確定できない。しかし、このように複合した要素を持つものについては、床板のみならず、縦・横方向の壁板も含めて転用している可能性を考えておきたい。

なお、壁板で樹種が判明しているものはすべてスギ材である。

(c) 屋根構造材

棟木? (図版 161・162、写真図版 142)

 $W354\sim W357$ は棟木の可能性があると判断したものである。特に、W354は最大幅21cm、横断面が山 形になるように加工され、最大厚9cm、残存長107cmを測る大型のスギ材である。図の上端がもとの端部 であるかどうかは不明であるが、図の右端では幅21cm、高さ 6 cmの隅丸長方形に近い横断面を呈し、図 の右端から約20cmのところで両側から幅を19cmに狭め、横断面が三角形状を呈するように加工している。 ただし、高さ3cmの垂直面があるようにしている。横断面三角形の部分には2cm×2cm~2.5cmの矩形の 桟孔を2個一対で穿孔している。この垂木をとめるための桟孔は長辺の両側に同じ位置になるようにし ている。2個の桟孔の間隔は5cm~8cm、セット間は20cm~23cmとほぼ等間隔になっている。なお、桟 孔の上端部が欠損しているものが大半である。図の左端には一辺8㎝弱の枘孔が中央に穿けられている。 W355は残存長65.6cm、幅18.5cm、厚さ8.5cmのスギ材で、横断面は上端が7cm程度の截頭三角形状を呈 する。一端の中央には8cm×8cm以上の矩形の枘孔が穿けられ、その両側には一辺1.5cmの方形孔が垂直 に貫通している。小孔が貫通する部分の下部は隙間ができるように加工されている。W356も横断面が截 頭三角形状を呈する、残存長58cm、幅17.2cm、厚さ4cmのスギ材である。図の左端は短部が残っている ようであり、未貫通の矩形孔が2個穿けられている。この孔は斜辺に及んでいるため、もとは桟孔であ った可能性が高い。図の右端には、幅9cmの上部平坦面の中央に6cm×5cm以上の矩形枘孔が穿けられ ている。W357は残存長が330.5cmもある断面三角形の材で、樹種は未鑑定である。厚さは現状では8cm である。図の両端には枘孔が穿けられているようであるが、確定できない。枘孔であれば、その間隔は 3mとなる。図の中央左寄りには下端幅24.5cmの切り欠きが認められ、その深さは4cmを測る。長側辺 両側には対になる位置に幅10cm~25cmの弧状の抉りのような部分が認められ、5対残存している。この 抉り状部分の中央は突起状になっているものが多いことから、もとは2個セットの桟孔であったものが 風化欠損してこのような形になったものと判断できよう。したがって、現在約17cm残存している本体の 幅はもう少し広かったものと思われる。また、抉り状部分の間隔は現状では24cm~50cmを測る。以上の ように、W357は風化等により痩せてしまったものと思われる。

梁木? (図版 162、写真図版 142)

W358は残存長83cm、幅18cm、厚さ5cmの厚手のスギ板材で、図の左端は切り落とされているが、本来のものであったかどうか不明である。図の右端近くの中央に8cm×7cmくらいの枘孔が穿けられているが、垂直ではなく斜め方向に穿けられている。斜めに穿けられているところから、屋根に関係した部材であることは間違いないであろう。前述の棟木と判断した材とは断面形状が異なっていることから、梁材と推定した。ただし、枘孔の左側には2個一対の桟孔が長側の相対する位置に穿たれており、くだ

り棟といった部分の棟木などであった可能性も残している。

桁材(母屋桁?)(図版163・164、写真図版143・144)

桟孔が穿けられた棒状の角材を桁材とした。しかし、桁とするには細く、強度的に無理があるため、 母屋桁と推定した。母屋桁は屋根を構成する小屋組みのうち、棟木と桁との間に補助的に入れた細い桁 材であるが、この組み方が古墳時代にもあったかどうかは確認していない。したがって、まったくの推 測である。あるいは、小規模な建物の桁材であったのかもしれない。

W359~W369に示したもののうち、多くが片側にのみ桟孔を有しているが、W359~W361のように両側に穿けられているものもある。また、桟孔の部分が窪み状になったものも多く見受けられるが、当初からのものか、風化等により欠失してこのような形になったのかどうかは不明である。あるいは、両側に桟孔が穿けられているものについては、穿けられている箇所数が少ないことから、桟孔が欠損したため、垂木がずれるのを防ぐ目的でしっかりと固定するために、補助的に反対側に穿けられた可能性も考えられる。桟孔はその多くが2個一対でその間隔は3㎝くらいから9㎝まであるが、大半は4㎝~5㎝におさまる。このことは、垂木の太さがそれくらいであったことを示すものであろう。また、桟孔2個一対セット同士の間隔は30㎝~50㎝程度のものが多く、垂木の間隔を示している。ただし、W361のように、42ءと52ءが交互になっているものや、W363の27㎝・30ءとほぼ等間隔のもの、W365のように、32㎝・36㎝・44ء・56㎝と不揃いながらも徐々に間隔が広く(狭く)なっているもの、W366のように28ء・42ءとまったく不揃いなものなど垂木の間隔はさまざまである。なお、W367は19㎝・17ء・23mと間隔が狭いながらもほぼ等間隔になっている。

桁材のなかには、枘や枘孔が確認できるものも存在する。枘はW361・W362で認められ、桁木(母屋桁)端は束木(小屋束)に挿入したものと思われ、枘孔があるW359・W360・W365~W367・W369は束木(小屋束)を挿入したものと思われるが、W366・W367のように枘孔の間隔が狭いものや、W366・W369のように小さな枘孔があるものは別の機能を考えるか、あるいは転用品と考えるべきであろう。W365・W367の枘孔やW366の大きいほうの枘孔は $10\text{cm} \sim 16\text{cm} \times 6\text{ cm} \sim 10\text{cm}$ の大きさである。

図示した桁材のうち、大半は幅 $10\text{cm} \sim 15\text{cm}$ 、厚さ $4\text{cm} \sim 5\text{cm}$ のものであり、W365は長さ233cmと最も長く残存している。次いでW361の174.5cmがあり、W359の156cmと続くが、W $365 \cdot$ W361では欠損のため東木(小屋東)間隔が不明である。W359の両端が柄孔であるとすれば、その間隔は約1.4mになり、W360の柄孔から欠損部分までの長さとほぼ同じであるが、W361の柄から欠損までの長さ1.64mを下回る。ただし、W359とW360は同一個体の可能性がある。なお、W366は水田畦畔の矢板に転用されていたものであるが、桁材の前にも何かに使用されていた可能性がある。また、桁材のうち樹種が判明しているものはすべてスギ材である。

貫材? (小屋貫?) (図版165、写真図版144)

W370は長さ178cm、幅8.5cm、厚さ5cmのスギ角材である。両端が本来のものか不明であるが、上端から63cmの所とさらに78cm下側の2箇所に切り込みの仕口が認められる。切り込みは $8 \text{ cm} \times 5 \text{ cm}$ 程度である。形状から貫材(小屋貫)と想定したが、確証はない。貫材(小屋貫)であれば、母屋桁の間隔は78cm程度となるであろう。なお、図の右側側面に深さ2 cmの柄孔状のものが認められるが、小屋束に差し込んだ際のずれを防止するための仕口とも考えられる。

束柱(小屋束?)(図版165、写真図版144)

直径14.5 cmのスギ?丸太材を使用したW371は、10cm×6 cmくらいの貫通する水平枘孔を縦横90度になるよう交互に穿っている。図の中央やや下では枘孔が接している。枘孔は先述の貫材が入る大きさである。同じ方向の枘孔同士の間隔は、図上部のもので40cm、下部では31cmとなっており、異なっている。細い材であることから、床束ではなく小屋束を考えているが、先述のように確証はない。なお、風化等により内部が空洞になっている。

垂木等 (図版 166·167、写真図版 144·145)

W372~W381は垂木とその可能性がある棒状の部材である。樹種が判明しているものはすべてスギ材 である。いずれも先端とその付近にのみ加工を施し、その他の部分に切り込み・枘孔等の加工は認めら れない。W372・W373は同じ形態を示し、先端から6cm~8cmのところの両長側辺で、斜めに対になる 位置に切り込みを入れ、先端は楔形に加工している。楔形に削るのは図の上方に抉りのある側に限られ ている。W372の残存長は154.5cm、幅8cm、厚さ2cmを測る。W373は残存長150cmでW372と似ている。 幅は6.5cmとやや狭いが、厚さは3cmである。先端に近いほうの抉りは軒先の桁に乗せるため、先端から 遠いほうの抉りは結わえるためのものであろう。したがって、両側面の抉りの最も深い部分が垂直にな る角度が垂木として使用されていた角度に近いと思われる。ただし、正確な計測はできない。W374~W 376は、抉りが先端から11cm内側のW374と、先端に抉りがあり、丸太材を使用したW375・W376に分 けられるが、使用時の先端上側を浅く抉ったり、反るように加工したり、頭を作り出したりしている。 いずれも結わえる際のずれ防止のための仕口と判断できよう。W375は残存長167cmと最も長いが、W 374と同様、杭に転用されていた。W379は先端の片側にのみ抉りが認められるが、先端の形状がW372・ W373と似ている。W377はほぼ方形の角材で、先端の抉りの形がW374~W376と似ている。W380・W 381も先端の抉りの形は似ているが、ほかにも加工が施されているため確定できない。何度も加工を施 しながら垂木として利用し続けたものかもしれない。W378の抉りは深さ5m強と非常に浅く、垂木とし ての機能も疑わしいが、幅7cm、厚さ3cm、長さ121cmという形状から、垂木の可能性があるものに含め た。

(d) 梯子(図版 167·168、写真図版 145)

W382~W384は梯子であるが、W385は足掛部の間隔が20cmと狭く、やや疑問であるが、足掛けの形状から梯子の可能性があるものとした。W382は直径17cm弱の丸太材を使用し、足掛部を削り出している。3段が確認できる。足掛け部の深さは最大で6cm弱、ピッチは38cmと40cmである。上下を欠失し、残存長は132cmである。W383は両長側および上下を欠失し、残存長126.5cmを測る。足掛部は3段残存し、そのピッチは34cmと37cmで、最も残りのよい部分でも高さ3.5cmしか残っていない。W384も上下と両長側を欠失し、足掛部も1段しか残っていない。その高さは4cm、ピッチは36.5cm以上である。W382のみクリ丸太材、他はスギ材を使用している。

(e) その他

留具または把手 (図版 168、写真図版 145)

W386はいわゆる「凸字形品」と呼ばれるもので、一端をひとまわり大きく釘頭状に造りだしている。

一方の長側辺を欠失しているが、細いほうの先端は尖り気味に加工され、中央には直径3cmほどの円形 孔が穿たれている。建築部材以外の可能性が高いが、先述の扉門装置の可能性も捨てきれない。スギ材。

枘孔のある板(狭幅)(図版 168~170、写真図版 146~148)

W387~W409は厚さ2cm以上で幅20cm程度以内、やや大きめの矩形枘孔を連続的に穿たれた板材を一括した。これらは、宮本長二郎先生によれば簡単な柵の支柱とのご判断であった。ここでは、小屋梁や小屋貫といった屋根内部の構造材であることも視野に入れて一括した。もちろん、古墳時代にこのような材を使用した屋根内部の組み方が存在したかどうかですら未確認であるし、想像の域を出ないものである。しかし、本遺跡からはこのような枘孔を多く穿った小規模な板材が非常に多く出土しており、その理解の一助とするため、項目を設けた。樹種が判明しているものはすべてスギ材である。

板材の幅はW405の8.5cmからW390の21cmまであるが、大半は11cm~16cmにおさまる。枘孔は矩形で、長辺12cm~16cm、短辺6cm前後のものがほとんどである。枘孔はすべて板材の中央に間隔をおいて複数穿たれている。枘孔の間隔のうち、等間隔のものはW387の22cm、W393の40cm、W397の36cm、W403の37cmがあるが、W388~W392・W405の6例は不揃いで、その他は枘孔の間隔がひとつしか判明しないため不明である。

なかには、W388・W402・W408のように桟孔を有するものがあり、W402は桁材の可能性もある。また、W390についても幅広く厚い材であることから、桁に分類すべきかもしれない。一方、W400・W406 には枘が造出されている。W396のように枘孔のある付近の側面に小さな枘孔を穿っているものも認められる。

(f) 不明材

枘のある材(図版 171、写真図版 148)

 $W410 \cdot W411$ は枘のある板材で、幅はともに12cm。枘はどちらも中央には造出せず、偏っている。スギ材。W411とW413は枘のある棒である。建築部材ではない可能性があるが、W413は幅3.7cmながら残存長112cmもある。樹種未鑑定。

枘孔のある厚板(図版 171 · 172、写真図版 148 · 149)

W414は残存最大幅26cm、残存長166.5cm、最大厚4.5cmを測る大型の板材で、図の左側には4箇所にわたって長さ10~12cmの抉り状部分が存在している。これは、穿孔が風化して欠損したものである可能性も考えられ、図左側長側辺に近い部分に穿けられた孔を加味すれば、縦壁板であった可能性が生じる。なお、中央上部には未貫通の矩形孔が認められる。スギ材である。W415~W419は小孔を穿つ厚めの板材である。W415の下方の孔は見貫通で、矢板に転用されていた。W416では一端にのみ穿孔が認められることから、床や壁板の可能性もあるが、約4cmと厚い。W415・W416はスギ材である。W420の板材は残存長63.5cm、残存幅19cmを測る。図の下方右端に断面皿形の孔が無造作に穿けられている。

枘孔のある棒状材 (図版 172・173、写真図版 149)

W421は表面を多角形に削った部材を割って転用したものであり、何に転用したのかは不明であるが、 表面加工の手法と図下端の枘孔も含め、柱材であった可能性が考えられる。W422は断面長方形のスギ材 であるが、下方が幅狭く上方が広い。W423も図の下方が幅広く上方が狭い。柄孔は幅 $5~\mathrm{cm}$ の広いほうに穿たれており、断面が楕円形に近い形状であることから、道具の柄である可能性も捨てきれない。スギ材である。W424の柄孔は $2~\mathrm{tm}$ 個ともに未貫通であるが、深さ $4~\mathrm{tm}$ もある。杭に転用されていたスギ材である。W425・W426は桟孔のある角材で、W425は杭に転用されていたスギ材である。桟孔の存在から、もとは桁材であった可能性がある。現状は一辺 $5.5~\mathrm{tm}$ 前後の細い角材である。

切り欠きのある棒状材(図版 173、写真図版 150)

抉りが認められるものの、垂木とは判断できなかったものである。W427~W430の4点のうち、全体の形状からW428とW430が垂木の可能性を残している。W427はスギ丸太の半割材で、長側辺に切り欠きが認められる。W429は先端を丸く楔状に加工しているが、抉りは認められず、幅3cmの細い棒状材である。W430はスギ材である。

転用矢板 (図版 173、写真図版 150)

m W431の転用前は壁板等であった可能性もある、厚さ $1.3\,
m cm$ 、幅 $15\,
m cm$ のスギ板材である。表面には加工痕が明瞭に残る。m W432も幅が狭い以外は同様である。m W433はスギ材。

転用杭(図版174、写真図版150)

明確な枘孔などの加工が認められない転用杭である。表面に加工痕が残るが、どの時点のものか判断できない。W436のみ1.5 cm $\times 1$ cm0 1 個穿たれている。

その他 (図版 174・175、写真図版 150・151)

 $W437 \cdot W438$ は同一形状を示し、長さも74.7cmと全く同じである。一方の長側辺のみ4 mほど彫り窪 め、断面は三角に近い形状を示す。両端は斜めに切り落とされ、山形になっている表面のみ平滑になっ ている。道具の部材である可能性がある。W439は断面正三角形に近いスギ角材で、幅8.7cmである。一 方は欠失しているが、端部に長さ4.5cmの枘を造出している。連子窓のようなものを考えてみたが、判断 できなかった。W440の表面は平滑になっていることから、建築部材ではなく道具類である可能性を考え ておきたい。W441は残存長93cm、幅22cmのスギ板材である。中央には長側方向に約2cmの段差があり、 図の下半側の断面は三角形状を示す。図の上半部の厚さは2㎝でほぼ一定している。段差の直下には7 cm×3.5 cmの未貫通の矩形孔が27cmの間隔で2個確認できる。図の右端近くには5 cm×2.5 cmのほぼ同 大の矩形孔が2個、6.5cm間隔で穿たれている。また、孔の右端から左側へ4cmの間は一段低くなってい る。この部分には厚さ 4 cmの別の材が組み合わさるようである。段差の存在から蹴放し材や楣材の可能 性を考慮してみたが、未貫通の枘孔の意味が不明であることから、どの部材であるのか判断できていな い。建築材であることは間違いないと思われる。W442は平面形によれば残存長126.6㎝、幅30㎝の板材 であり、壁板や床板のようにもみえるが、断面形は楔形を呈し、厚い側が6cmもあるため、疑問が残る。 スギ材。W443は長さ17㎝の枘あるいは把手を有するスギ角材である。残存長は85.5㎝を測る。本体基 部の横断面は8.5cm×4.5cmの矩形をなし、先端にゆくにつれて幅・厚みを減じ、先端は尖っているよう であるが欠失している。基部付近に一辺2cm弱の方形孔が1個穿たれている。W444もスギ角材である。 本体部分は幅6.5cm、厚さ3cm弱で、図のほぼ中央部の対面する位置に両側から切り込みを入れている。

切り込みの深さは $1 \, \mathrm{cm}$ である。図下部は徐々に細くなるように両側面から削っているが、上下面はそのままである。W445も平面的にはW444と同様の形態を示すが、本体部分の横断面は山形を呈し、先端部分の横断面は円形であり、横断面の形が異なる。W444・W445ともに用途不明品であり、道具類か建築部材かどうかの判断すらつかないものである。

以上、建築部材のうち、柱材や東木、梁木・桁木といった主要構造材が少ないことが特徴としてあげられるが、それらは再び同じ用途に利用されたためであると思われる。ただ、扉材や蹴放しといった扉口装置が多く認められたことから、水田畦畔に転用される古墳時代中期末以前に遡る時期に、大型の扉口を持つ板壁建物が付近に存在していたことを物語っている。また、屋根に小屋組み構造を持つ建物も存在していた可能性も指摘できる。

4. 石製品 (図版 176~179、写真図版 152~154)

 $S21 \cdot S22$ はサヌカイト製の石鏃である。新水北地区の包含層から出土したものである。S21は凹基式の石鏃で、S22は尖基式の石鏃である。

S23は安山岩製の打製石斧である。新水北地区の包含層から出土したものである。

S24は頁岩製のスクレイパーである。新水北地区の包含層から出土したものである。

S25はサヌカイト製のスクレイパーである。宮ケ田Ⅲ地区の包含層(水田部)から出土したものである。

S26は敲石である。上下に敲打痕が残っている。SHK057から出土したものである。

S27~S32は砥石である。S27·S29·S31·S32は凝灰岩製、S28·S30は砂岩製である。S27は断面方形のやや撥形で、片側の先端が反り上がっている。側面4面が使用されている。S28は断面長方形の撥形で、片側の先端が反り上がっている。側面4面が使用されている。S29は断面方形の棒状で側面4面が使われている。S30は断面長方形の撥形で、両端が反り上がっている。側面4面と反り上がった部分の下面が使用されている。S31は断面長方形の板状である。表面のみ使用が確認され、裏面は剥離している。S32は砥石として再利用されたものである。半分に割れた原品の一面を砥石として利用している。本来は復元径20.8㎝の円形で、底面には方形の抉りが入れられ、上部は円形に突出していたと考えられる。椯の台のような形態である。S27は新水北地区 I a層、S28はSRK2001、S29はSHK083、S30はSHK066、S31はSHK031、S32はSHK046より出土したものである。

S33は滑石製紡錘車である。高さが8mと低く、古式の形態である。SHK049より出土したものである。S34は礫岩製石臼である。大型の石臼と考えられるが、表面が残存しているは擂り目のある下面のみである。側面に挽き木を差し込む枘穴を空けている。SPC029より出土したものである。

S35は礫岩製石材である。上面に半球形のくぼみがある。SKC020より出土したものである。

5. 金属製品

本書所収地区から出土した金属製品は、13点(うち、1点は宮ヶ田I地区)を数える。このうち、鉄製品は工具、武具、農具など8点を図化し、銅製品は古銭、煙管など6点を掲載している。鉄製品および銅製品はいずれも錆に覆われた状態で出土したため、錆取り作業を実施し、その後に実測、写真撮影を行った。

鉄製品 (図版 180、写真図版 155)

M 51~M 53・M 58は宮ヶ田皿地区、M 54~M 56は新水北地区でそれぞれ出土したもので、出土遺構名は巻末の遺物観察表に記載している。なお、M 57は確認調査時のトレンチ47より出土した刀子と考えられ、宮ヶ田 I 地区(『加都遺跡 I 』所収地区)に含まれるべきものである。

M 51はSFR001東側溝より出土した鉄鏃である。鏃身部先端および茎部が欠損するが、残存長8.0 cmを 測り、平面の形状は鋒長の三角形状を呈している。

M 52およびM 55・M 57は刀子である。M 52・M 57は残存する部分は小さいが、平面あるいは断面の形状から刀子と考えられる。M 55は刀身の先端部を欠損しているが、全長約21㎝を測る大型のもので、茎部には目釘穴が穿たれている。

M 53は上下の端部が欠損しており、詳細は不明であるが、断面の形状が方形を呈しており、建築に使用された和釘と考えられる。

M 54は新水北地区の水田土壌内(0 a層)より出土したL字状を呈する鎌である。先端部および刃部には、欠損あるいは摩滅がみられるが、茎部には目釘穴ふたつが穿たれている。

M 56は先端部の一部が欠損しているが、残存長21.5cm、幅1.3~2.5cmを測る楔と考えられる。

M 58は一部に木質が残存する鉄滓である。宮ヶ田Ⅲ地区の竪穴住居跡(SHK079)より出土しており、 住居内に小鍛冶を行う施設が存在した可能性が考えられる。

銅製品 (図版 181、写真図版 155)

M 59~M 62は古銭である。M 59は約半部が欠損しており、「元 \square 質」と判読できるが、詳細は不明である。M 60は水田土壌内 (0 層) より出土した皇宋通寳で、初鋳年代は1038年の北宋銭である。M 61・M 62はいずれも包含層から出土した永楽通寳(M 11)と寛永通寳(M 12)である。

M 63は雁首・羅宇・吸口から構成される煙管の吸口部である。吸口の先端部は欠損しているが、残存長5.4cmを測る。

M 64は長さ5.0 cm、幅2.2 cmを測る円柱形を呈する銅製品である。その形状などから、馬具の鞍に付属する管金物と考えられ、また、一部に漆と思われる有機物が付着している。

第3章 自然科学的手法による調査・分析

第1節 木製品の樹種

1. 加都遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試料

試料は、加都遺跡より出土した木簡、刀形、木皿、箸、漆椀、蓋、物差、机、腰掛、下駄などの木製品と、田下駄、鍬などの農具、転用杭や扉、梯子を含む建築部材の合計184点である。

(3) 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

結果は表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

イヌガヤ Cephalotaxus harringtonia K. Koch イヌガヤ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面:早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は非常に狭く、樹脂細胞が散在する。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は、トウヒ型で1分野に1~2個存在する。仮道管の内壁にらせん 肥厚が存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型で、 $1\sim10$ 細胞高ぐらいである。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ10~15m、径20~30cmである。材は、やや堅硬で木理は緻密であるが不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

モミ属 Abies マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面:早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1~4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型で、1~30細胞高ぐらいである。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

スギ Cryptomeria japonica D.Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面:早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。尚、スギの特徴を示す試料の内、放射断面において、放射柔細胞の分野壁孔の型が不明瞭な試料はスギ?とした。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

ヒノキ Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面:早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。

以上の形質よりヒノキに同定される。なお、ヒノキの特徴を示す試料の内、放射断面において、放射 柔細胞の分野壁孔の型が不明瞭な試料はヒノキ?とした。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋 久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で 強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科

横断面:年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に 配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面:道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科

横断面:中型から大型の道管が、1~数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。 道管は単独で複合しない。

放射断面:道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面:放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ケヤキ Zelkova serrata Makino ニレ科

横断面:年輪のはじめに大型の道管が1~2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合 して円形、接線状ないし斜線状に配列する。 放射断面:道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが 平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらんでいる。

接線断面:放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は $1\sim7$ 細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ $20\sim25$ m、径 $60\sim70$ cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靭で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

ヤブツバキ Camellia japonica Linn. ツバキ科

横断面:小型でやや角張った道管が、単独ないし $2 \sim 3$ 個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面:道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8~30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性である。

接線断面:放射組織は、異性放射組織型で、 $1\sim3$ 細胞幅である。直立細胞には膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ $5\sim10$ m、径 $20\sim30$ cmである。材は強靭で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

(5) 所見

同定の結果、加都遺跡の木材は、イヌガヤ1点、モミ属2点、スギ141点、スギ?8点、ヒノキ19点、ヒノキ?1点、クリ1点、コナラ属アカガシ亜属9点、ケヤキ1点、ヤブツバキ1点であった。スギが最も多く、木簡、刀形、蓋、物差、腰掛などの木製品と、田下駄などの農具や建築部材に至るまで幅広く使用されている。つづいて多いヒノキは、木皿、箸、蓋、机、下駄などの木製品と、田下駄などの農具に使用され、コナラ属アカガシ亜属は木槌と鍬、泥除などの農具に使用されている。ケヤキは漆椀に、クリは梯子に使用されている。イヌガヤは箸に、モミ属は田下駄に、ヤブツバキは横槌に使用されている。

スギは温帯に広く分布し、湿潤で多雨や積雪を好む。ヒノキも温帯に広く分布し、コナラ属アカガシ 亜属とヤブツバキは温帯下部の暖温帯の照葉樹林を構成する主要高木である。他も温帯を中心に分布す る樹木ばかりである。本遺跡出土の木材の樹種は、スギが極めて多く、ヒノキ、コナラ属アカガシ亜属 と続くという特徴を有する。当時周辺地域にスギ林が主要な森林として分布し、多雨ないし積雪の多い 気候が示唆される。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 20 - 48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 49-100.

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧,雄山閣,p. 296

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成,植生史研究特別第1号,植生史研究会,

p. 242

中川重年(1994)検索入門 針葉樹,保育社

表1 加都遺跡(その2)における樹種同定結果

ナンプル 番号	遺物 番号	地区	種別	器種	サンプル箇所	結果(学名/和名	3)
1	W119	新水北	農具	田下駄枠	台形枠	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
2					横桟	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
3					台形枠	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
4					台形枠木釘	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
. 5					足板	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
6	W297	新水北	部材	用途不明品	用途不明品	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
7	W120	新水北	農具	田下駄枠	台形枠	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
8	11120	35173 10	12.7		台形枠	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
9					台形枠木釘	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
10					横桟	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
11	W188	新水北	農具	田下駄足板	NIA .	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
	W262	新水北	雑具	箱		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
12				田下駄足板		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
13	W155	新水北	農具		台形枠	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
14	W166	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
15		der I. II.	uu	_L m	台形枠		ヒノキ
16	W232	新水北	容器	木皿		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
17	W241	新水北	服飾具	下駄		Chamaecyparis obtusa Endl.	
18	W231	新水北	容器	木皿		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
19	W114	新水北	農具	曲柄鍬		Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜原
20	W115	新水北	農具	曲柄鍬		Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
21	W106	新水北	農具	直柄横鍬		Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
22	W206	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
23	W168	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
24	W196	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
25	W109	新水北	農具	泥除		Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜原
26	W215	新水北	運搬具	天秤棒		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
27	W301	新水北	文房具	物差		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
28	W 392	新水北	建築部材	柄孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
29	W 175	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
30		新水北	不明			Cryptomeria japonica D.Don	スギ
31	W200	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
32	W160	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
33	W318	新水北	建築部材	扉板等		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
34	W198	新水北	農具	田下駄足板		Abies	モミ属
35	W150	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
36	W284	新水北	部材	用途不明品		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
37	W235	新水北	容器	方形容器		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
38	W164	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
39	W111	新水北	農具	曲柄鍬		Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
40	W274	新水北	部材	枘結合部材		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
41	W274 W270	新水北	部材	枘結合部材		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
		新水北	建築部材	転用杭		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
42	W424			扉板等		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
43	W319	新水北	建築部材			Cryptomeria japonica D.Don	スギ
44	W312	新水北	建築部材	扉板等 四丁町 ロゼ			モミ属
45	W 202	新水北	農具	田下駄足板		Abies	ヤブツバキ
46	W116	新水北	農具	横槌		Camellia japonica Linn.	
47	W117	新水北	農具	横槌		Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜原
48	W153	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
49	W152	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
50	W161	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
51	W258	新水北	雑具	腰掛		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
52	W254	新水北	雑具	腰掛		Cryptomeria japonica D.Don?	スギ?
53	W110	新水北	農具	泥除		Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜原
54	W189	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ

サンプル 番号	遺物 番号	地区	種別	器種	サンプル箇所		名)
55	W321	新水北	建築部材	扉板等		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
56	W 157	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
57	W 256	新水北	雑具	腰掛		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
58	W382	新水北	建築部材	梯子		Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ
59	W277	新水北	部材	枘結合部材		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
60	W148	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
61	W 126	新水北	農具	田下駄枠	方形枠支柱	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
62					方形枠支柱	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
63					横桟	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
64					楔	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
65		新水北	農具	田下駄		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
66	W 137	新水北	農具	田下駄横桟		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
67	W226	新水北	容器	曲物		Chamaecyparis obtusa Endl.?	ヒノキ?
68		新水北	食事具	折敷		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
69	W 229	新水北	容器	曲物		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
70	W197	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
71	W245	新水北	食事具	箸		Cephalotaxus harringtonia K. Koch	イヌガヤ
72	W210	新水北	農具	田下駄足板			
73	W187	新水北	農具	田下駄足板		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
74	W129	新水北	農具	田下駄枠		Cryptomeria japonica D.Don Cryptomeria japonica D.Don	スギ
75	W151	新水北	農具	田下駄足板		· · ·	スギ
76	W395	新水北	建築部材	枘孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don?	スギ?
77	W192	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
78	W184	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
79		新水北	AL SQ	杭		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
80	W441	新水北	建築部材	その他		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
81	W342	新水北	建築部材	壁板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
82	W380	新水北	建築部材	垂木等		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
83	W236	新水北	容器	^{亜小寺} 方形容器		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
84	W431	新水北	建築部材	転用矢板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
85	W341	新水北	建築部材	壁板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
86	W387	新水北	建築部材			Cryptomeria japonica D.Don	スギ
87	W285	新水北	部材	柄孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
88	W410	新水北		用途不明品		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
89	W174	新水北	建築部材	枘のある材		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
90	W278		農具 2011	田下駄足板	dette la la	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
91	W 410	新水北	部材	枘結合部材	部材	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
92	TX 71.0 F	ᅓᄄᆒᆈ	## =		楔	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
	W105	新水北	農具	直柄横鍬		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
93	W176	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
94	W444	新水北	建築部材	その他		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
95 06	W433	新水北	建築部材	転用矢板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
96	W250	新水北	雑具	火鑚臼	r	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
97	W423	新水北	建築部材	柄孔のある棒状 ^れ	1	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
98	W338	新水北	建築部材	壁板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
99	W370	新水北	建築部材	貫材?		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
100	W414	新水北	建築部材	枘孔のある厚板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
221	W314	新水北	建築部材	扉板等		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
222	W411	新水北	建築部材	枘のある材		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
223	W327	新水北	建築部材	辺付?		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
224		新水北	不明	矢板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
225	W388	新水北	建築部材	枘孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
226	W 325	新水北	建築部材	蹴放し		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
227	W 340	新水北	建築部材	壁板		Cryptomeria japonica D.Don?	スギ?
228	W361	新水北	建築部材	桁材		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
229	W 259	新水北	雑具	机		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
230	W400	新水北	建築部材	枘孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ

サンプル 番号	遺物番号	地区	種別	器種	サンプル箇所	結果(学名/和名	3)
231	W169	新水北	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
232	W306	新水北	祭祀具	刀形		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
233	W 339	新水北	建築部材	壁板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
234	W251	新水北	雑具	机	本体	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
235					脚	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
236	W425	新水北	建築部材	枘孔のある棒状	け	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
237	W316	新水北	建築部材	扉板等		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
238	W443	新水北	建築部材	その他		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
239	W107	新水北	農具	直柄横鍬		Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
240	W234	新水北	容器	漆椀		Zelkova serrata Makino	ケヤキ
241	W 303	新水北	祭祀具	人形		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
242	W 103	新水北	木簡	木簡		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
243	W104	新水北	木簡	木簡		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
244	W307	新水北	祭祀具	刀形		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
245	W244	宮ヶ田Ⅲ	食事具	杓子形木製品		Cryptomeria japonica D.Don?	スギ?
246	W216	宮ヶ田Ⅲ	容器	蓋板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
247	W246	宮ヶ田Ⅲ	食事具	箸		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
248	W222	宮ヶ田皿	容器	蓋板		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
249	W249	宮ヶ田Ⅲ	雑具	火鑽臼		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
250	W217	宮ヶ田Ⅲ	容器	蓋板		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
251		宮ヶ田Ⅲ	農具	田下駄		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
252	W228	宮ヶ田Ⅲ	容器	曲物		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
253	W383	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	梯子		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
254	W283	宮ヶ田Ⅲ	部材	不明部材		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
255	11 200	宮ヶ田Ⅲ	不明	1 /4141/14		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
256	W286	宮ヶ田Ⅲ	部材	用途不明品		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
257	W279	宮ヶ田Ⅲ	部材	枘結合部材		Cryptomeria japonica D.Don?	スギ?
258	W265	宮ヶ田Ⅲ	部材	紐結合部材		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
259	W288	宮ヶ田Ⅲ	部材	用途不明品		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
260	W132	宮ヶ田Ⅲ	農具	田下駄枠		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
261	**102	Д/ДШ	22		楔	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
262	W233	宮ヶ田Ⅲ	容器	木皿		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
263	W130	宮ヶ田Ⅲ	農具	田下駄枠	方形枠支柱	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
264	11100	пушш			横桟	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
265					楔	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
266					楔	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
267	W 396	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	枘孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
268	W330	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	楣?		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
269	W394	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	枘孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
270	W397	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	柄孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
271	W393	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	枘孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don?	スギ?
272	W358	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	梁木?		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
273	W371	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	束柱		Cryptomeria japonica D.Don?	スギ?
274	W359	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	桁材		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
275	W365	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	桁材		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
276	W391	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	枘孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
277	W405	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	枘孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
278	W367	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	桁材		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
279	W292	宮ヶ田Ⅲ	部材	用途不明品		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
280	W252 W252	宮ヶ田Ⅲ	雑具	腰掛		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
	VV 434	宮ヶ田Ⅲ	雑具	腰掛		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
281		宮ヶ田Ⅲ	部材	1195,121		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
282	7X7204	宮ヶ田Ⅲ	部材	用途不明品		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
283	W294	宮ヶ田Ⅲ	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
284 285	W195 W298	宮ヶ田Ⅲ	容器	用途不明品		Cryptomeria japonica D.Don?	スギ?
7,85	W 490	西ク田里	च मा	1.1767-1,431HB		, r Jap 2 12	スギ

サンプル 番号	遺物 番号	地区	種別	器種	サンプル箇所	結果(学名/和	 名)
287	W123	宮ヶ田Ⅲ	農具	田下駄枠		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
288	W 219	宮ヶ田Ⅲ	容器	蓋板		Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
289	W 377	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	垂木等		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
290	W 320	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	扉板等		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
291	W401	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	枘孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
292	W 363	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	桁材		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
293	W101	宮ヶ田Ⅲ	木簡	木簡		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
294	W181	宮ヶ田Ⅲ	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
295	W171	宮ヶ田Ⅲ	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
296	W 160	宮ヶ田Ⅲ	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
297	W 170	宮ヶ田Ⅲ	農具	田下駄足板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
298	W 381	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	垂木等		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
299	W 315	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	扉板等		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
300	W 399	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	枘孔のある板		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
301	W430	宮ヶ田Ⅲ	建築部材	切り欠きのある棒料	犬材	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
302	W212	宮ヶ田Ⅲ	農具	田船		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
303	W108	宮ヶ田Ⅲ	農具	直柄横鍬		Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
304	W293	宮ヶ田Ⅲ	部材	用途不明品		Cryptomeria japonica D.Don	スギ

2. 加都遺跡出土木製品の樹種

三村 昌史 (パレオ・ラボ)

加都遺跡新水北B地区より出土した木製品のうち、計120点の樹種同定結果を報告する。対象とする器種は、田下駄部材・代かき・曲柄又鍬・刀形・舟形・曲物・匙・挽物・扉・梯子・杭などで、農耕具・食膳具・祭祀具・土木/建築材など様々なものに及ぶ。ここでは、これら出土材の樹種構成の特徴を明らかにし、製作・使用の双方に係る用材選択の背景について調査を行った。

1. 方法

試料となるプレパラートはすでに兵庫県埋蔵文化財調査事務所により作成済みのもので、横断面・放射断面・接線断面の3断面について剃刀を用いて切り取り、ガムクロラール(アラビアゴム・抱水クロラール・グリセリン・蒸留水を混合したもの)で封入されたものである。これらのプレパラートは光学顕微鏡にて40~400倍で検鏡し、現生標本との対照により同定を行った。同定したプレパラートは兵庫県埋蔵文化財調査事務所に保管されている。

Ⅱ. 見出された樹種

樹種同定結果の一覧を表1に示す。出土材120点の樹種同定の結果、6分類群が認められ、内訳は針葉樹でモミ属・スギ・ヒノキ・イヌガヤの4分類群、広葉樹でコナラ属アカガシ亜属・ガマズミ属の2分類群であった。なお、表中で針葉樹とあるものはある程度材組織は保存されていたが、切片が小さく、特に放射断面の切片が晩材部の部分しか採取されていなかった為、針葉樹であることまでしか同定し得なかったものである。

以下では、見出された樹種について材組織の特徴について記載を行うと共に写真図版を付して同定の 根拠とし、また日本国内における生態・分布等についても簡潔に述べる。

1. モミ属 *Abies* (マツ科) 写真図版 1 a~ 1 c

仮道管と放射柔組織からなる針葉樹材。晩材部は明瞭で量多い。放射組織の末端壁はじゅず状末端壁を有する。分野壁孔はスギ型で小さく、1分野にふつう2-4個。

モミ属には数種が含まれるが、母植物はモミの可能性が高い。モミは高木になる常緑針葉樹で土壌の 肥沃な緩傾斜地にみられる。材質はやや軽軟で、割裂・加工容易、保存性は高くない。

2. スギ Crytomeria japonica (L.f.) D.Don (スギ科) 写真図版 2 a~ 2 c

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部は量多く明瞭。分野壁孔はスギ型で 大きく、1分野にふつう2個。

スギは高木になる常緑針葉樹で、天然分布は降水量の多い地域に限られて点在し、特に東日本の日本 海側に多く、尾根沿いや谷沿い、湿地周辺などに生育する。材質は軽軟で割裂・加工容易、適度に強度 もある。

3.ヒノキ Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Endl. (ヒノキ科) 写真図版 3 a~ 3 c

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部は量少ない。分野壁孔は大型のトウヒ型からヒノキ型でやや大きく、1分野にふつう2個。

ヒノキは主に暖温帯(福島県以南)に分布し山地の尾根沿いなどに生育する、高木になる常緑針葉樹である。材質はやや軽軟で加工し易く、強度に優れる上、保存性が著しく高い。

表 1. 樹種同定結果一覧

表 1 ——	- 四年	同定結果	一覧 								
試料N	[o. 番号	種別	器種	部位	樹種	試料No	. 番号	種別	器種	部位	樹種
101	W347	建築部材	壁板		スギ	161	W257	雑具	腰掛		スギ
102	W272	部材	紐結合部材		スギ	162	W243	食事具	杓子形木製品		スギ
103	W409	建築部材	枘孔のある板		スギ	163	W191	農具	田下駄足板		スギ
104	W280	部材	枘結合部材		スギ	164		不明			スギ
105	W406	建築部材	柄孔のある板		スギ	165	W230	容器	曲物		スギ
106	W269	部材	紐結合部材		スギ	166	W207	農具	田下駄足板		スギ
107	W 378	建築部材	垂木等		スギ	167	W 199	農具	田下駄足板		スギ
108	W158	農具	田下駄足板		スギ	168	W162	農具	田下駄足板		スギ
109	W185	農具	田下駄足板		スギ	169	W165	農具	田下駄足板		スギ
110	W128	農具	田下駄枠	方形枠支柱	スギ	170	W144	農具	田下駄足板	足板	スギ
111				楔	スギ	171	.,	1200	H 1000 / L-100	木釘	ヒノキ
112	W419	建築部材	枘孔のある厚板		スギ	172				木釘	ヒノキ
113	W398	建築部材	枘孔のある板		スギ	173	W183	農具	田下駄足板	小判	
114	W145	農具	田下駄足板		スギ	174	W172	農具			スギ
115	W415	建築部材	枘孔のある厚板		スギ				田下駄足板		スギ
116	W329	建築部材	楣?			175	W224	容器	蓋板		ヒノキ
117	W139	農具	田下駄横桟		スギ	176	W225	容器	蓋板		ヒノキ
118					スギ	177	W271	部材	紐結合部材		スギ
	W308	祭祀具	刀形		スギ	178	W163	農具	田下駄足板		スギ
119	W366	建築部材	桁材		スギ	179	W208	農具	田下駄足板		スギ
120	W439	建築部材	その他		スギ	180	W261	雑具	箱		スギ
121	W291	部材	用途不明品		アカガシ亜属	181	W131	農具	田下駄枠		スギ
122	W355	建築部材	棟木?		スギ	182	W296	部材	用途不明品		スギ
123	W 385	建築部材	梯子		ヒノキ	183	W227	容器	曲物		ヒノキ
124	W354	建築部材	棟木?		スギ	184	W 205	農具	田下駄足板		スギ
125	W 300	部材	用途不明品		ガマズミ属	185	W 295	部材	用途不明品		スギ
126	W313	建築部材	扉板等?		スギ	186	W384	建築部材	梯子		スギ
127	W204	農具	田下駄足板		スギ	187	W140	農具	田下駄横桟		スギ
128	W124	農具	田下駄枠		スギ	188	W386	建築部材	留具または把手		スギ
129	W260	雑具	机		スギ	189	W193	農具	田下駄足板		スギ
130	W113	農具	曲柄鍬		アカガシ亜属	190	W154	農具	田下駄足板		スギ
131	W218	容器	蓋板		ヒノキ	191	W156	農具	田下駄足板		
132	W305	祭祀具	舟形		スギ	192	W190	農具			ヒノキ
133	W287	部材	用途不明品		スギ		W 190		田下駄足板		スギ
134	W364	建築部材	桁材		スギ	193	****	不明	棒?		スギ
135	W402	建築部材	枘のある板				W179	農具	田下駄足板		ヒノキ
136	W376	建築部材	垂木等		スギ		W125	農具	田下駄枠	方形枠支柱	スギ
137	W299				スギ	196			•	横桟	スギ
		部材	用途不明品	144.15	スギ	197				楔	スギ
138	W121	農具	田下駄枠	横桟	スギ	198				横桟	スギ
139				楔	スギ	199				楔	スギ
140				台	スギ	200	W127	農具	田下駄枠		スギ
41				台	スギ	201	W182	農具	田下駄足板		スギ
142				破片	スギ	202	W311	建築部材	扉板等		スギ
143	W 276	部材	枘結合部材		スギ	203	W242	食事具	匙		イヌガヤ
.44	W289	部材	用途不明品		スギ	204	W147	農具	田下駄足板		スギ
45	W 309	祭祀具	刀形		針葉樹		W357	建築部材	棟木?		スギ
.46	W281	部材	枘結合部材		スギ		W 353	建築部材	壁板		スギ
47	W 323	建築部材	蹴放し		スギ		W 389	建築部材	乗!!! 枘孔のある板		スギ
48	W267	部材	紐結合部材		スギ		W134	農具	田下駄横桟		ヘヤ スギ
49	W 203	農具	田下駄足板		モミ属		W136	農具	田下駄横栈		スギ
50	W112	農具	曲柄鍬		アカガシ亜属		W135	農具			
51	W220	容器	蓋板		ヒノキ			農具	田下駄横桟		スギ
52	W223	容器	蓋板				W141		田下駄横桟		スギ
53	W416	建築部材	無似 枘穴のある厚板		ヒノキ		W328	建築部材	楣?		スギ
					スギ		W211	農具	田船		スギ
54	W432	建築部材	転用矢板	m.te	スギ		W264	部材	紐結合部材		スギ
55 56	W143	農具		足板	スギ		W266	部材	紐結合部材		スギ
56	****	to the		木釘	スギ	216	W442	建築部材	その他		スギ
57	W268	部材	紐結合部材		スギ	217 Y	W167	農具	田下駄足板		スギ
58	W237	容器	方形容器		スギ	218 V	W 317	建築部材	扉板等		スギ
59	W238	容器	方形容器		スギ	219 V	W273	部材	枘結合部材	本体	スギ

4. イヌガヤ Cephalotaxus harringtonia (Knight) K.Koch (イヌガヤ科) 写真図版 4 a~ 4 c 仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。仮道管壁は全体にやや厚く、丸みを帯びる。 樹脂細胞は早材・晩材の区別なく散在する傾向にある。仮道管の内壁にはらせん肥厚がみられ、しばしば

イヌガヤは小高木程度になる常緑針葉樹で、主に温帯下部~暖温帯に分布する。耐陰性の高い樹種で、 山地や渓畔・河畔の林内でみられる。材質は重さ・堅さが中庸~やや重硬で、年輪幅が密であることが 多く緻密である。

5.コナラ属アカガシ亜属

Quercus subgen.Cyclobalanopsis (ブナ科) 写真図版 5 a~ 5 c

対になる傾向がある。分野壁孔はヒノキ型で、1分野にふつう2個程度。

中型で丸い厚壁の道管が単独でやや斜めに連なって放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。 放射組織は同性で、単列のものに複合放射組織が混じる。

いわゆるカシ類の材であり、アカガシ、アラカシ、イチイガシなどの他数種が含まれる。種によって 分布は異なるが、いずれも高木になる常緑広葉樹で暖温帯の主要な樹種である。材質は重硬で強靱であ る。

6. ガマズミ属 Viburnum (スイカズラ科) 写真図版 6 a~6 c

小型でやや角張った道管が単独あるいは接線方向に1-2個複合してややまばらに分布する散孔材。道 管の穿孔は階段状で幅はごく密、数多く40本に達する。木部柔細胞は散在状~短接線状。放射組織は異 性で1-3列、単列部は直立細胞のみからなり、多列部は上下端の直立細胞がしばしば数個連なる。単列 部の占める割合が大きい。

ガマズミ属には温帯〜暖温帯に分布し林縁や林内にみられる落葉低木のガマズミや、関東南部以西の 暖温帯に分布し山地にみられる常緑高木のサンゴジュなど様々な種が含まれる。材質は緻密で重硬であ る。

Ⅲ. 考察

樹種同定結果(表1)を種別・器種別に 表2.器種別にみた樹種の傾向 まとめたのが表2である。これをみると、 まず目に付くのは針葉樹が広葉樹に比べて 圧倒的に多く見出されている点である。な かでもスギは曲物・杓子形・刀形・田下 駄・扉・梯子・屋根構造材など、実に幅広 く様々な器種に用いられている。その他の 針葉樹では、ヒノキが蓋板・田下駄・梯子 などに用いられ、モミ属とイヌガヤはそれ ぞれ田下駄と匙に1点ずつ用いられている。 これらの針葉樹は共に割裂容易な部類の材

				針葉植	t		広葉	樹	āt
器相	i /樹種	モミ属	スギ	ヒノキ	イヌガヤ	×	アカガシ亜属	ガマズミ属	
	蓋板			5					5_
容器	曲物		1	1					2
	方形容器		2						2
A 84 E	匙				1				1
食膳具	杓子形木製品		1						1
	斎串		1						1
祭祀具	舟形		1						1
	刀形		1			1			2
	曲柄又鍬	T					2		2
農耕具	田下駄	1	44	4					49
	田船		1						1
	腰掛		1						1_
雑具	机		1						1_
	箱		1						1
	扉口装置		6						6_
	屋根構造材		7						7_
土木・	壁材		2						2
建築材	梯子		1	1					2
	その他		2						2
	不明材		10						10
その他	部材		_17				11	1	19
ていれ	不明		2						2
	計	1	102	11	1	1	3	1	120

である為、割り出して板材・角材を製材するのに適し、また切り削り加工が容易な為、その後細部の加 工を行うのにも適しており、加えて適度な強度もある。様々な製品に幅広く針葉樹材が用いられている 背景にはこうした材特性を挙げることができよう。また、スギが他の針葉樹に比べ多く見出されている のは、木材資源量がそれだけ多かったためであると想定される。現在までに蓄積された近畿地方におけ る花粉分析結果からは、縄文時代の終わりまでに多くの分析地点でスギの優勢がみられ、古くからスギが多かったことが知られている(Tsukada 1982;高原 1998)。このようなスギ材の多用は出石郡出石町の入佐川遺跡(伊東 2002)や砂入遺跡(伊東 1997)などでも得られており、この地域の一般的な傾向であると考えられる。ヒノキはスギと比較して少なかったとみられるが、スギと比較してヒノキは晩材部の量が少なく、より均質な材で加工容易であり、ヒノキが挽物や田下駄の木釘に用いられていることとの関連性が伺える。

一方、広葉樹はアカガシ亜属が3点、ガマズミ属が1点見出されているに過ぎない。アカガシ亜属の 材は鍬などに用いられており、強靱な材質への着目から選択され使用されたと考えられる。

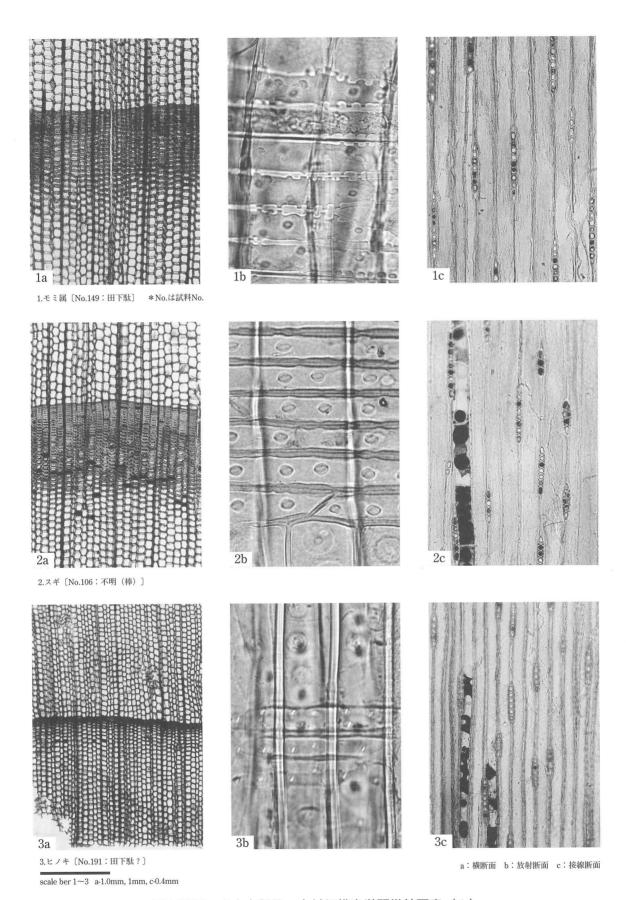
以上のように、木材利用の特徴としてスギを中心とする針葉樹材の幅広い製品への利用がみられた。 広葉樹の点数が少なかったことは遺物の偏在性によるところが大きいと考えられるが、針葉樹に比べ用 材に選択される器種は決まっているのではないかと推測される。

引用文献

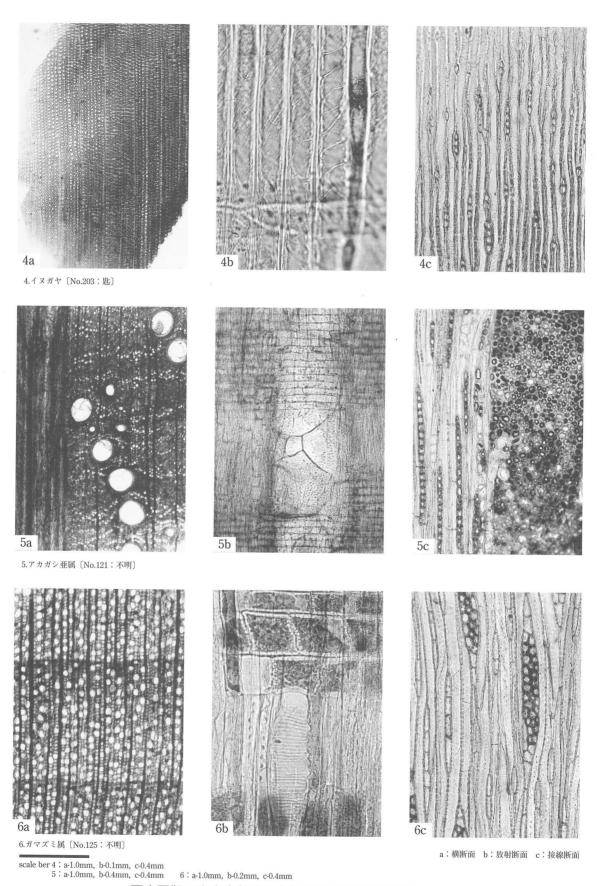
伊東隆夫(1997)砂入遺跡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告 第161冊 砂入遺跡〔本文編〕 小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(I)」兵庫県教育委員会、141-152

伊東隆夫 (2002) 入佐川遺跡出土木製品の樹種. 「兵庫県文化財調査報告 第229冊 出石郡出石町入佐川遺跡 小野川放水路事業に 伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (Ⅲ)」兵庫県教育委員会、109-125

Tsukada, M(1982) Cryptomeria japonica(L.f.) D.Don ; glacial refugia and late-glacial and postglacial migration. Ecology 63, 1091-1105 高原 光(1998)近畿地方の植生史、安田喜憲・三好教夫編「図説日本列島植生史」 114-137、朝倉書店



写真図版:出土木製品・木材組織光学顕微鏡写真(1)



6: a-1.0mm, b-0.2mm, c-0.4mm

写真図版:出土木製品・木材組織光学顕微鏡写真 (2)

3. 加都遺跡出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査は、加都遺跡宮ヶ田Ⅲ地区および新水北地区・宮ヶ田Ⅲ地区の確認調査時に出土した 木製品について樹種同定を実施し、木材の利用状況に関する検討を行う。

1 資料

資料は、新水北・宮ヶ田Ⅲ地区の確認調査および宮ヶ田Ⅲ地区の調査時に出土した木製品40点について実施する。各木製品の詳細については結果と合わせて表1に示す。

2 分析方法

木製品の木口・板目・柾目の3断面の切片プレパラートは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の担当者により作成された。このプレパラートについて、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴を現生標本から作成したプレパラートおよび木材組織記載(島地・伊東,1982;林,1991)と比較して種類

表 1 樹種同定結果

716157	登録番	号	試料	報告遺構名・土層	時代	種別	器種	樹種
地区	調査番号	番号	番号	報古退佛石・工眉	H417	作生力リ	101年	
宮ヶ田川	980153	109	305	SSK001	5世紀後半~律令期	部材	用途不明品	コナラ属アカガシ亜属
宮ヶ田Ⅲ	980153	112	306	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	農具	田船	スギ
宮ヶ田Ⅲ	980153	113	307	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	建築部材	枘孔のある棒状材	スギ
宮ヶ田III	980153	114	308	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	建築部材	屋根妻壁板	スギ
宮ヶ田Ⅲ	980153	115	309	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	建築部材	桁材(母屋桁?)	スギ
宮ヶ田Ⅲ	980153	118	310	SSK001	5世紀後半~律令期	建築部材	垂木等	スギ
宮ヶ田III	980153	121	311	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	部材	不明部材	スギ
宮ヶ田Ⅲ	980153	122	312	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	建築部材	棟木?	スギ
宮ヶ田川	980153	127	313	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	農具	田下駄足板	スギ
宮ヶ田III	980153	129	314	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	雑具	腰掛	スギ
宮ヶ田川	980153	131	315	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	農具	田下駄足板	スギ
宮ヶ田川	980153	132	316	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	工具	木針	ヒノキ
宮ヶ田川	980153	133	317	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	工具	木針	ヒノキ
宮ヶ田川	980153	134	318	SSK001	5世紀後半~律令期	容器	槽	スギ
宮ヶ田Ⅲ	980153	136	319	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	部材	枘結合部材	スギ
宮ヶ田川	980153	138	320	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	農具	田下駄足板	スギ
宮ヶ田川	980153	139	321	SSR002	律令期	容器	蓋板	ヒノキ
宮ヶ田川	980153	140	322	SSR001	律令期	農具	田下駄枠	スギ
宮ヶ田川	980153	141	325	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	農具	田下駄横桟	スギ
宮ヶ田川	980153	145	326	SSK001	5世紀後半~律令期	建築部材	垂木等	スギ
宮ヶ田川	980153	146	327	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	建築部材	枘孔のある板(狭幅)	スギ
宮ヶ田川	980153	147	328	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	不明	不明	スギ
宮ヶ田Ⅲ	980153	148	329	SSR001	律令期	農具	田下駄足板	スギ
宮ヶ田川	980153	149	330	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	雑具	腰掛	スギ
宮ヶ田川	980153	151	331	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	木簡	木簡	スギ
宮ヶ田川	980153	153	332	SSK001	5世紀後半~律令期	建築部材	切り欠きのある棒状材	スギ
宮ヶ田川	980153	154	333	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	建築部材	桁材(母屋桁?)	スギ
宮ヶ田川	980153	156	334	包含層(水田部)	5世紀後半~律令期	建築部材	壁板	スギ
宮ヶ田川	980153	159	335	SSK003	古墳時代後期	建築部材	壁板	スギ
宮ヶ田川	980153	162	336	SSK003	古墳時代後期	建築部材	扉板等	スギ
新水北	960318	2	337	確認調査		祭祀具	杓子形	スギ
新水北	960318	81	338	確認調査		農具	田下駄足板	スギ
新水北	960318	82	339	確認調査		農具	田下駄足板	スギ
宮ヶ田Ⅲ	960318	166	340	確認調査		農具	田下駄足板	スギ
宮ヶ田Ⅲ	960318	167	341	確認調査		農具	田下駄枠	ヒノキ
宮ヶ田川	960318	168	342	確認調査		農具	田下駄足板	スギ
宮ヶ田川	960318	209	343	確認調査		農具	田下駄足板	スギ
宮ヶ田Ⅲ	960231	1	344	確認調査		祭祀具	刀形	スギ

(分類群:Taxa)を同定する。

3 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品の樹種は、針葉樹2種類(スギ・ヒノキ)と広葉樹1種類(コナラ属アカガシ亜属)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・スギ Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は早材部の終わりから晩材部にかけて認められ、接線方向に配列する傾向がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に1-4個。分野壁孔の孔口の長軸方向は水平方向に近い。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ヒノキ Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Endlcher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は早材部の終わりから晩材部にかけて認められるが、あまり顕著ではない。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属(Quercus subgen. Cyclobalanopsis)ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

4 考察

(1) 時代別・製品別の樹種傾向

今回樹種同定を行った古墳時代後期・5世紀~律令期の宮ヶ田Ⅲ地区の木製品は、建築部材・農具・工具などの種別を通じて、スギが多用されていることが確認された。スギ以外の樹種では、工具・容器の一部にヒノキ、農具の可能性がある木製品1点にコナラ属アカガシ亜属が確認された。以上のことから、少なくとも5世紀~律令期には針葉樹のスギを中心とした木材利用が行われていた可能性が高く、その背景には、後述するように遺跡周辺の植生が大きく関係していたことが推定される。

ところで、本遺跡では、今回の結果以外にも出土木製品の樹種同定結果が存在する(第1節1・2参照)。これらの結果と今回の結果と合わせた木製品の時代別・器種別の樹種一覧を表2に示す。木製品の樹種構成は、各時代を通じて、針葉樹4種類(モミ属・スギ・ヒノキ・イヌガヤ)、広葉樹5種類(アカガシ亜属・クリ・ケヤキ・ヤブツバキ属・ガマズミ属)である。全体の傾向は、樹種同定を行った木製品294点中243点と約83%がスギ(スギ近似種含む)である。器種別に見ても、一部の器種を除いてスギが多用されており、様々な器種にスギが利用されていることが確認される。スギの利用が少ない器種は、農具の鍬と容器の曲物である。鍬の多くはアカガシ亜属、曲物はヒノキが多く利用されている傾向がある。次に時代別の傾向について検討する。

弥生時代と弥生時代~5世紀後半は資料数が少ないため、傾向を把握するには至らないが、用途不明の部材と柄結合部材にスギ、曲柄鍬にアカガシ亜属が利用されている。

5世紀後半、5世紀後半~6世紀前半、6世紀、古墳時代後期は、資料数が多く器種も多岐に渡る。

表 2 時代別・器種別木製品の樹種一覧

## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ##		13世 以	世紀 降	律令	謝	İ	6~9	9世紀	2	5世紀 後半〜 9世紀		±紀? 律?	後半	~		t紀i	段: 前半 :する	ŧ	5世 6世	紀紀	樹種 後半が が半にする	~ を		5世	:紀後	後半を	中/	ひと	する		古墳 後期	弥生 5世 後 ⁻	紀	弥生	時不	
	器種	スギ	ヒノキ	スギ	ヒノキ	スギ	ヒノキ	イヌガヤ	ケヤキ	スギ	スギ	スギ?	ヒノキ	アカガシ亜属	スギ	スギ?	1	アカガシ亜属	スギ	ヒノ		クリ	スギ	スギ?	モミ属	ノ	針葉樹	アカガシ亜属	ヤブツバキ	ガマズミ属	スギ		アカガシ亜属	スギ	スギ	
											1				1				1			1														1
							-							_	1		\Box	_		_			2	_			_					H	_		\vdash	+
ŀ				⊢	-		\vdash					_			1	-						_	1	\vdash	\vdash		_						_	\dashv		1
1	枘孔のある厚板	-		\vdash	-							_			2								2							\vdash				\neg		Ī
ŀ	枘孔のある板(狭幅)		-		\vdash						8	1			5								5													
Ī	枘孔のある棒状材										1												2													
[切り欠きのある棒状材										2				1								_									Ш		\sqcup	<u> </u>	
	束柱(小屋束?)						_				1							_			_		_							_				ш	H	-
					<u> </u>		<u> </u>	-			1				1	_		_					2											\vdash	1	-
1 1		_				1	\vdash	\vdash			2				7			_			-		1	-	H					 	1	H		\vdash	Ė	
ŀ	留具または把手		-		-	1	\vdash	-			_				Ė	_							Ė											П	Г	
ŀ						Ė		\Box			1				2																					
İ		_									1																							\Box		
- [貫材?(小屋貫?)						L						L	L			Ш		\sqcup				1		-			<u> </u>		_		\vdash		\vdash	\vdash	
ļ			_			<u> </u>	\vdash	\vdash	<u> </u>		1_		_	<u> </u>	2	1	\vdash		Щ		\vdash		4		\vdash	<u> </u>			-		1	-	H	\vdash	-	
- 1			<u> </u>			-	-				1				2								-		-	+-				1		-		Н	-	
					-	\vdash		H			7	_	-		1								1		1		H					\vdash			1	
ł			1			+					ŕ				3	\vdash							1											Г	1	
	紐結合部材		\vdash			1					1				2								5													
Ì	柄結合部材										1	1			2				1				2													
材	用途不明品					1					4	1	1	1			_		1				1			<u></u>			<u> </u>	1		1	_	\vdash	L	
				_		_	⊢	_	<u></u>		1	_			-	1					_			_	_	-	_			<u> </u>		H		\vdash	3	
		3	2	1	-	14	+		-		8	\vdash			9	1	1						16		3	1			H	⊢		-		\vdash	8	
	田下駄足板木針	3	2	H		14	1	1	-		0	1		-	1	H.	1			_			10		1	ť	_		_	\vdash	<u> </u>				۳	
	田下駄横桟						Ť	1	\vdash		1	Ė		\vdash	5		Ė		1				1		1									Г	1	
l				1	T	1	Т				2	1			4				2				4													
具				L.							2	_			_						<u> </u>		1	ļ			<u> </u>	_	_	<u> </u>			_	⊢	┡	
			-	L	<u> </u>		<u> </u>			-	1	1			1		1	_			-			<u> </u>	-		<u> </u>	2	-	-		-	1		⊢	
			-	-	1		-		-	-	<u> </u>			-	⊢			2					-	-	-	-		2	┝	╆			1	\vdash	-	
				+	\vdash	-	+		-		-			-	\vdash		-		-							+-		1	1			\vdash		\vdash	H	
. 具		_		\vdash	+		\vdash					\vdash	2		\vdash															T					T	
																							1													
	腰掛							L			3				1			_					2	1		_				ļ		ļ.,	_	<u> </u>		
			_		_	-	ļ_	<u> </u>	-	1		-	-		1	-	<u> </u>	_					2			1					-	-	-	-	\vdash	
				-			+	-	├-		1	\vdash	┢	\vdash	\vdash	-							1	H	+-	H	_			+	-				⊢	
	杓子形木製品		\vdash	t	H		+	+	+-		Ė	1	\vdash			H	H						1		1										T	
事具		-	\vdash	\vdash			1	1																												
								1					1																					L	Ĺ	
			1		1	L	1	\perp	Ļ		1		<u> </u>		1		_				_		<u> </u>	_	-	-	_		<u> </u>	\vdash	ļ	-		-	\vdash	
			H	+	1	-	10		1		1	-	3	\vdash	-	-	1		-			1	-	+	-	2	-	-	-	+-		+-		\vdash	\vdash	
器			-	+	1	1	1	+-	-		1	\vdash	1		+-	-	+	-		-	1	+	+-		+	1			+-	+		+		\vdash	+	
				\vdash	╁╴	+	Η,	+	\vdash	\vdash	1	+	Ė		+		\vdash			-	Ė		†	t		Ť		T	T	1						
	方形容器	1	T	1		T	1		1		L	L	L		L								3													
	物差																				L		1	L		\perp			L	_		_	L	L	1	
飾具			Ĺ		L		1	1	1		<u> </u>		1	_	-	L	1		-		-	_	1	_	\vdash	1	-	-	-	-	_	-	-	\vdash	+	
		_	1	-	-		+	+	-		\vdash		-	-	-	\vdash	-		\vdash	-	-	-	3	-	\vdash	\vdash	1	-	\vdash	\vdash		\vdash	\vdash	\vdash	1	
和日	人形	-	+	\vdash	\vdash	1	+	+-	-	-	-	+-	-	-	-	-	-		\vdash	-	\vdash	\vdash	1	-	+	+-		\vdash	+	+	<u> </u>	+		+-	+	
心畏			╁	+	\vdash	+	+	+-	\vdash	+	\vdash	+	\vdash	1	+	+	1	-	\vdash		+-		+	+-	+	+	\vdash	\vdash	+	+		+-		\vdash	1	
		+	+	+	H	+	+	+	\vdash		+		\vdash		T	+	\vdash		 		t	-	1	1	+-		T		t					İ	Ė	
簡		T	t	T	T	İ			İ		2		L	Γ					1		L														1	
											5				2				1	1			3		Γ		Г		L	F	0			L	Ĺ	
	スギ・スギ?の合計		4		2			20		1			72	:			60				8	1	1				72		1		2		1	1		
																																		-	+-	•

スギが圧倒的に多く、ほとんどの器種でスギが利用されている。ただし、鍬類や横槌ではアカガシ亜属やヤブツバキといった重硬な材質を有する木材が利用されており、曲物類は同じ針葉樹でもヒノキが多く利用されている。同様の傾向は、資料数が多く、器種も多岐に渡る、5世紀後半~律令期、 $6\sim9$ 世紀、律令期の木製品でも確認されている。

以上のことから、本遺跡では古代を中心に、強度を要する農具や特殊な加工を要する曲物など以外の

木製品にスギが多用されていることが特徴として認識される。また、但馬地域における既往の樹種同定結果でも古代を中心にスギが多く利用されている傾向が確認されており(中村,2001)、今回の結果も同調的な結果といえる。なお、6世紀および $6\sim9$ 世紀の田下駄をみると、枠や足板等にスギが多い中で木針のみヒノキが利用されている。資料数が少なく時期もやや異なるが、田下駄の部位による樹種選択の可能性を示唆する結果として注目される。

一方、13世紀の木製品では、田下駄にスギとヒノキ、木皿にヒノキ、方形容器にスギが利用されており、律令期までの資料に比較して、ヒノキの割合が高い傾向にある。ただし、資料数が少なく、その普遍性については今後の資料の蓄積を待って再評価する必要がある。

(2) 古植生と木製品の樹種との比較

上記したように加都遺跡から出土した木製品は、古代を中心にスギが多用されていることが確認された。これは本遺跡周辺で温帯性針葉樹であるスギの木材が入手しやすい状況にあったことが一要因として考えられる。

本遺跡周辺の律令期の古植生については、溝埋土中の花粉分析結果において、スギ属花粉が多産したことかから、スギを主体とするものであったことが推定されている(パリノ・サーヴェイ,2005)。このような但馬地域におけるスギの分布拡大については、但馬地域中・南部の山間部(標高300~800m)に位置する湿原の花粉分析結果(三好・波田,1975 三好ほか,1976 MIYOSHI and YANO,1986)や、但馬地域北部の沿岸低地の花粉分析結果(前田ほか,1989 木村・三浦,2001)から、低地部から山間部にかけて時間漸移的に分布を拡げていったことが推定されている(パリノ・サーヴェイ,2005)。山間部でのスギの分布拡大時期は4000~4500年前頃であり、それ以降の時期には本遺跡を含む但馬地域中・南部でスギが植生において重要な位置を占めていたことが推定されている。このようなスギの分布拡大の背景には、気候要因、特に降水量の増加が直接・間接的に関係している可能性が高いが、低地から山間部への分布拡大様式については未だ不明な点が多い。このスギの分布拡大様式については今後の課題であるが、但馬地域中・南部地域では縄文時代以降にスギが人間にとって入手しやすい樹木であったことはほぼ間違いないと思われる。この点は、但馬地域に位置する入佐川遺跡(伊東,2002)、深田遺跡(島地・林,1991)、五反田遺跡(パリノ・サーヴェ,2002c)における弥生時代以降の木製品にスギを中心とする針葉樹材が多用されていることからも示唆される。

以上、今回の結果は中村(2001)が既に指摘している、古代を中心とする木製品のスギの多用がスギ 材の入手が容易であったことに起因するとする見解を指示している。

引用文献

青木 哲哉, 2004, 弥生時代以降の集落立地と地形環境 - 中国山地東縁における平野の場合-. 日下 雅義編「地形環境と歴史景観 自然と人間の地理学」,古今書院, 109-120.

林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫, 2002, 第2節入佐川遺跡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第229 冊 出石郡出石町入佐川遺跡 小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (III)」兵庫県教育委員会, p. 109 - 121.

木谷幹一・三浦洋一, 2001, 兵庫県北部、香住・浜坂低地における完新世の植生変遷. 立命館大学, 13, p. 31 - 41.

前田保夫・中井信之・松本英二・中村俊夫・楠聡・松島義章・佐藤祐司・松原彰子・熊野茂・黒見充

宏・額田雅裕・青木哲哉・古田昇・小橋拓司・松井順太郎・河原典史・山下博樹, 1989, 完新世における山陰海岸東部気比低地(兵庫県豊岡市)の古環境.立命館地理学, 1, p. 1-20.

三好教夫・波田善夫,1975,中国地方の湿原堆積物の花粉分析学的研究 2. 古生沼(兵庫県).日本花粉学会誌 第16号、37-42、

三好教夫・矢野悟道・波田善夫,1976,中国地方の湿原堆積物の花粉分析学的研究 3. 加保坂湿原 (兵庫県). 岡山理科大学蒜山研究所研究報告,2,p.1-10.

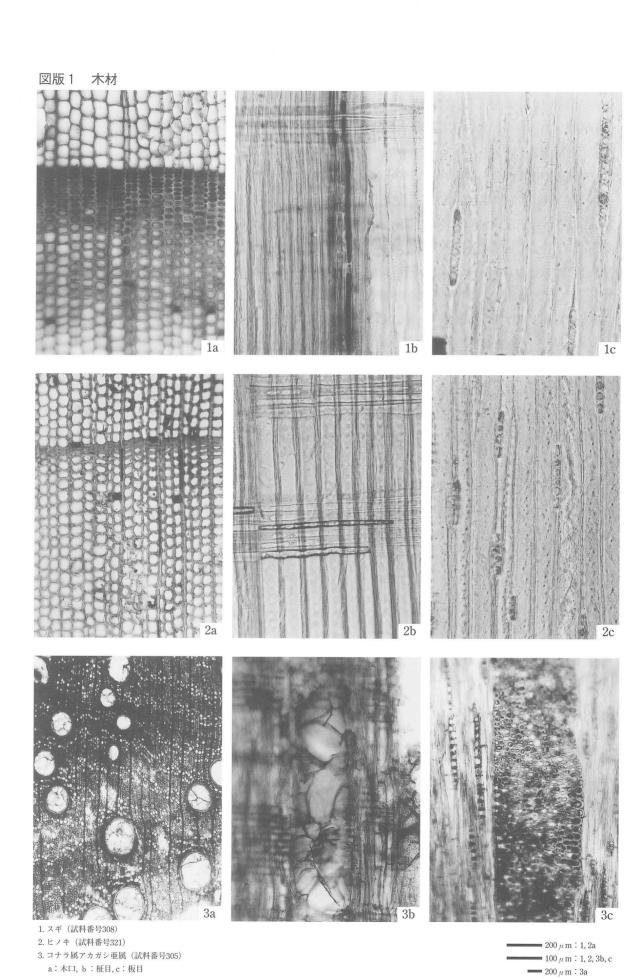
NORIO MIYOSHI and NORIMICHI YANO, 1986, LATE PLEISTOCENE AND HOLOCENE VEGETATIONAL HISTORY OF THE OHNUMA MOOR IN THE CHUGOKU MOUNTAINS, WESTTERN JAPAN, Rebiew of Paleobotany and Palynology, 46, p. 355-376.

中村 弘, 2001, 兵庫県における樹種同定資料について.兵庫県埋蔵文化財研究紀要, 創刊号, 兵庫県教育 委員会埋蔵文化財調査事務所, 103-121.

パリノ・サーヴェイ株式会社2002,第3節 五反田遺跡出土木材の樹種.「兵庫県文化財調査報告書,第 227冊 豊岡市五反田遺跡 ―県立コウノトリの郷公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―」, 兵庫県教育委員会,p.36-43.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2005,第3節 律令期の道路遺構側溝における花粉化石 「加都遺跡 I ―播 但連絡有料道路5期合併施工事業に伴う埋蔵文化財調査報告書―」,兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査 事務所、118-123、

島地 謙・林 昭三,1991,深田遺跡出土木製品の樹種.「但馬国府推定地内 深田遺跡・カナゲ田遺跡 ―日高バイパス建設工事に伴う但馬国府推定地内発掘調査報告書―」,兵庫県教育委員会,p.85-90. 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説 木材組織.地球社,176 p.



-144-

第2節 加都遺跡の地形環境

立命館大学非常勤講師 青木 哲哉

1. はじめに

地表は人間の活動舞台であり、そこに現出する地形環境は人間生活に大きな影響をおよぼす。こうした地形環境は過去を通じて変化してきた。人間は時代の流れとともに進展する自らの生活を地形環境に 巧みに対応させて活動し、時には地形環境を改変することがあった。地形環境と人間活動とは密接に関わってきたと考えられ、地形環境は人間生活や遺跡の立地を理解する上での重要な要素となる。

人間活動に対応する地形環境は細かいオーダーで考察する必要がある。そのためには、地形環境を考古遺跡の発掘調査に伴って考察することが有効な手段となる。考古遺跡の発掘調査区では、微地形や堆積物が直接かつ詳細に観察できる。そのため、細かいオーダーでの地形環境を復原することが可能である。復原された地形環境の時期については、発掘調査で検出された考古遺物から知られる。その上、考古学的な調査成果を加味することによって、地形環境と人間活動との関係をも解明できるのである。

本稿では、円山川中流部に位置する加都遺跡の地形環境について明らかにしたい。調査では、2万分の1および1万分の1空中写真の判読と現地踏査によって遺跡調査地区周辺の地形を分類し、調査地区では微地形と堆積物の詳細な観察を行った。堆積物に関しては、各調査地区における遺構検出面以浅の地質断面とその面から掘削したトレンチ断面の観察を通じて確認した。

2. 調査地区周辺の地形分布

本遺跡の調査地区は円山川中流部の平野に位置する。周辺には、標高300~500m程度の山地が分布し、丘陵は認められない。山地の間には、円山川とその支流によってつくられた狭長な平野が存在する。調査地区付近の平野は、円山川が形成したものであり、1km前後の幅で円山川の流下方向である南南西から北北東へ延びる。他方、支流沿いの平野は、それに対して概ね直交する方向にみられ、幅が200~500mである。これらの平野は、大きくみて更新世段丘、完新世段丘、現氾濫原、および支流性扇状地に分けられる(図1)。各地形の特徴は次のとおりである。

[更新世段丘] この地形は主に円山川の支流沿いに分布する。これらは、加都の西方や此治に局所的に認められ、2面に区分される。本稿では、高位のものを更新世段丘Ⅰ、低位のそれを更新世段丘Ⅱと呼ぶ。更新世段丘Ⅰは比高10m前後の崖をもち、更新世段丘Ⅱは完新世段丘面より約5m高い。これらの段丘面は支流が流下する方向へ傾斜しており、いずれも支流によって形成されたものである。

[完新世段丘] 調査地区の周辺には、この段丘が最も広範に発達する。これは、扇状地が段丘化したもので、円山川の平野だけでなく支流に沿う平野でも認められる。比高1m前後の段丘崖で現氾濫原と接し、段丘面には条里型土地割が広く認められた。昭和40年以降の圃場整備によって、段丘崖は不明瞭になり、条里型土地割は姿を消している。

[現氾濫原] これは、最も低平な地形で、現在河川の氾濫がおよぶ。主に円山川に沿って細長く延び、幅が最大でも約500mである。調査地区周辺の現氾濫原には、円山川によって形成された扇状地が発達している。

〔支流性扇状地〕 この扇状地は、山地斜面から山麓にかけて分布するもので、円山川や比較的大規模な 支流沿いの平野に対して側方から発達している。調査地区の周辺では、これが3つに分けられ、本稿で

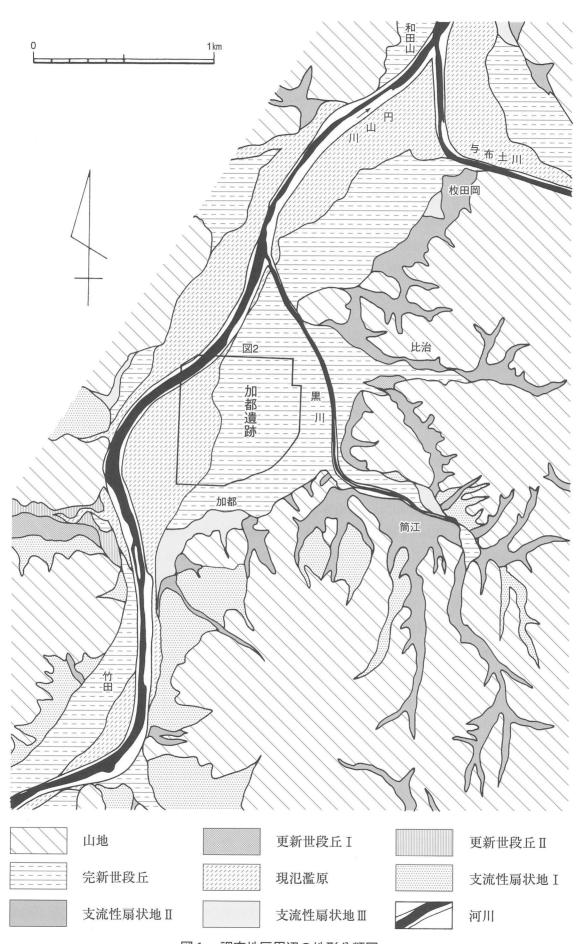


図1 調査地区周辺の地形分類図



図2 調査地区付近における微地形の分布

はそれらを形成の古いものから順に支流性扇状地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと呼ぶ。

支流性扇状地 I は、地表傾斜が約20.7%で、山地の斜面より緩やかであるものの他の支流性扇状地より急傾斜である。支流性扇状地 I は、山地や支流性扇状地 I を下刻してできた谷中から発達しており、地表傾斜はおよそ9.8%である。支流性扇状地 I は、約2.0%の地表傾斜で、最も緩やかである。調査地区周辺では、加都、筒江ならびに枚田岡付近などに分布するだけで、あまり多く認められない。

3. 各調査地区における微地形と堆積物

本遺跡の調査地区はほとんどが完新世段丘面に位置する。これは扇状地が段丘化したものであり、そこには円山川によって形成された旧中州(扇状地の微高地)と旧河道が認められる(図 2)。また、調査地区の西側には、現氾濫原がみられ、ここにも円山川本流がつくった扇状地が広がる。各調査地区における微地形と堆積物は次のとおりである。

(1) 宮ケ田 「~Ⅲ地区

ここでは、旧河道が I 地区の中央付近から II 地区の南部にかけて延び、その他の範囲は埋没した旧中州上に位置する(図 2)。旧中州は暗灰色の砂礫からなる。これは径 3 ~ 9 cmの亜角・亜円礫を主体とし、中には巨礫もみられる。この砂礫の上位には黒褐色のシルトが堆積する。宮ケ田 I 地区と III 地区の埋没旧中州上では、その上面から 4 世紀中葉 ~ 6 世紀後半の竪穴住居跡や 6 世紀後半の掘立柱建物跡、奈良時代前半~平安時代前半の道路遺構(但馬道)などがみられ、宮ケ田 II 地区と III 地区では、11世紀後半~12世紀前半の掘立柱建物跡などが検出されている。

他方、旧河道には細粒堆積物が認められる。宮ケ田 I 地区の遺構検出面から掘削したトレンチ断面(図4)では、最下位に位置する暗灰色砂礫(堆積物15・17)の上に旧河道堆積物(堆積物2~14)が観察される。最下位の砂礫は扇状地堆積物に該当する。その上面高度は北へ増し、旧河道の北側に分布する旧中州堆積物に連続する。砂礫を覆う旧河道堆積物は砂質シルトとシルトを中心とし、その間にシルト質砂礫や砂、シルト質砂(堆積物5・9・14)が局部的に挟まれる。これらの堆積物には、中部と下部で黒褐色と黒灰色のシルト(堆積物6・12)がみられる。2つのシルトは、洪水による堆積後に低

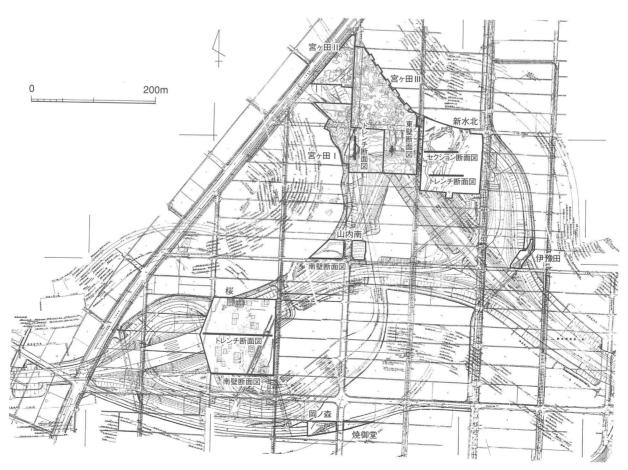
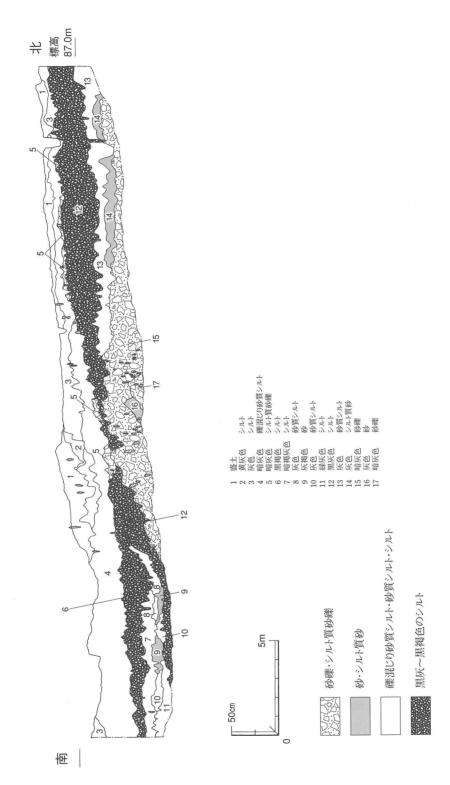


図3 調査地区と地質断面図の位置



湿な環境下で生成されたものであり、この時期に旧河道内が湿地的環境であったことを物語る。

宮ヶ田皿地区の東壁断面(図 5)では、I地区から延びる旧河道堆積物の上半部が観察される。ここでも、遺構検出面より下位と同様で、主に暗褐灰〜暗灰色のシルトや砂質シルト、および黒灰〜黒褐色のシルト(堆積物 8 · 10 · 11 · 15 · 21 · 25)が認められ、それに砂とシルト質砂(堆積物 3 · 4 · 7 · 16 · 24)が挟まれる。これらの堆積物のうち、下部にみられる暗褐灰色シルト(堆積物18)上面の層準からは 6 世紀の畦畔が、また黒灰色シルト(堆積物11)上面の層準では、 8 ~ 9 世紀の畦畔が確認されている。

なお、宮ケ田 I 地区では、奈良時代前半~平安時代前半の直線的な道路遺構が、ある程度まで埋積された旧河道を横断する。そこでの道路遺構は、盛土を施し、礫を敷いてつくられている。

(2) 新水北地区

本地区は、東半部が埋没した旧中州上に、また西半部が旧河道に位置する(図 2)。最も下位の遺構検出面から掘削したトレンチ断面(図 6)では、旧中州堆積物の上部と旧河道堆積物の最下部が認められる。旧中州堆積物は主に褐灰~緑灰色の砂礫(堆積物16・18・21・23・26)である。礫は径 3~33cmの亜円礫を主体とし、最大で径49cmの巨礫が認められる。砂礫には、緑灰色の砂やシルト質砂など(堆積物17・19・20・22・24・25)が断続的に挟まれる。こうした堆積物の上面は、調査地区の東半部で高まっており、旧河道が存在する西半部と約1.5mの比高をもつ。

調査地区の東半部では、旧中州堆積物の上を黄褐色や褐灰色などの細粒堆積物(堆積物11・13・14・15)が約1mの厚さで覆う。最上位には、宮ケ田 I ~II 地区でみられる黒褐色シルトの下部が局地的にみられる。これは細粒堆積物の上部が圃場整備によって削り取られたためで、ここでは古墳時代中期の竪穴住居跡が1棟だけ検出されている。

一方、この地区の西半部にみられる旧河道は、旧中州上を覆う堆積物を切って認められる。旧河道を直交する東西セクション断面(図7)によると、旧河道には主に砂質シルトとシルトが堆積し、所々で砂やシルト質砂が挟まれる。これは宮ケ田 I・III地区の旧河道堆積物と類似しており、旧河道内は低湿な環境であったと考えられる。旧河道堆積物の中部には、黒灰~暗褐灰色のシルト(堆積物7・8・9・33・34)が厚さ20~50cmで5つ認められ、それぞれに植物遺体が混入する。これらは、洪水に伴って堆積した後、低湿な環境下での土壌化によって生成されたものである。

こうした旧河道堆積物のうち灰色シルト(堆積物35)、黒灰色シルト(堆積物33)、暗緑灰色シルト(堆積物30)、および褐灰色シルト質砂(堆積物27)上面の層準では、遺構が検出されている。灰色シルトと黒灰色シルトの上面には、旧河道の埋積過程で形成された小規模な流路跡がみられ、それぞれ弥生時代前期~後期ならびに4世紀のものである。暗緑灰色シルトと褐灰色シルト質砂は5世紀末と6世紀前半の水田土壌であり、上面の層準からは畦畔が検出されている。また、これらより上位の黒灰色シルト(堆積物8・9)には、6~9世紀の遺物が含まれ、さらにその上にのる暗褐灰色のシルト(堆積物7)は13世紀の水田土壌にあたる。旧河道堆積物の最上部には、その後16世紀末までに堆積した砂質シルトやシルトがみられ、江戸時代の遺物を含む砂が確認されるところもある。

(3) 山内南地区

この地区では、大部分の範囲に旧河道が認められる(図 2)。これは南西から東へ延びるものである。 本地区の南壁断面(図 8)では、旧中州堆積物の末端と旧河道堆積物とが観察される。旧中州堆積物は、 最下位に位置する黒灰色のシルト質砂礫(堆積物23)で、これにはシルト質砂が挟まれる。その上面は

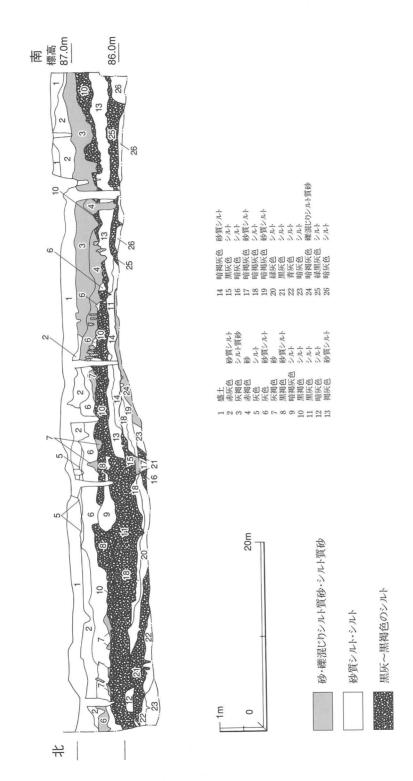
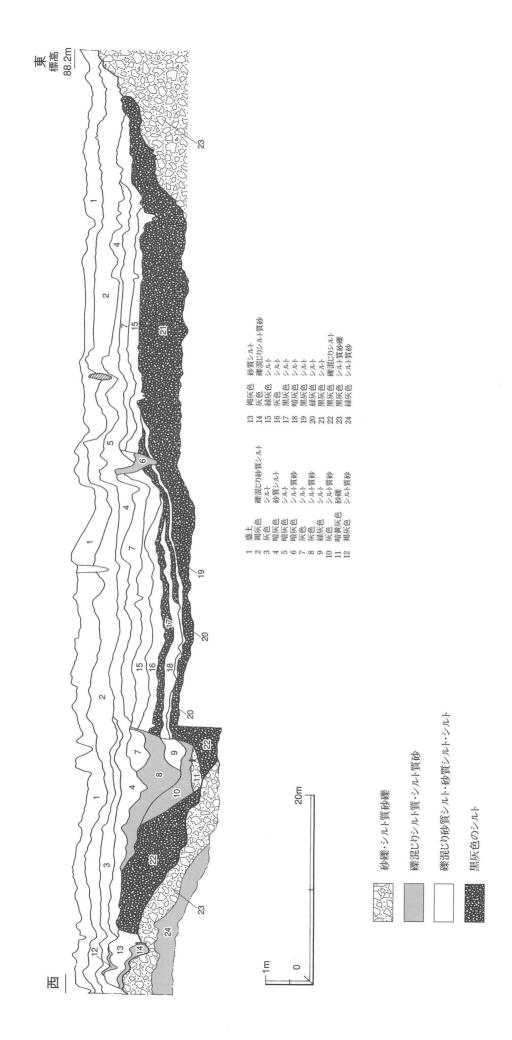




図7 新水北地区のセクション断面図



南壁断面の東端および西端から中央に向かって高度を下げ、そこに旧河道が認められる。

旧河道堆積物は、宮ケ田 I・皿地区や新水北地区と同様で、灰色や褐灰色、緑灰色などの砂質シルトとシルトを中心とする。これらは低湿な環境下で堆積したと考えられ、下半部には黒灰色のシルト(堆積物17・19・21・22)が4つみられる。上部に位置する暗灰色の砂質シルト(堆積物4)と灰色のシルト(堆積物3)には、中世の遺物が混入している。

(4) 伊豫田地区

この地区は埋没した旧中州の末端に存在する(図 2)。堆積物は下位から順に灰色の砂質シルト、黒褐色の砂質シルトならびに盛土であり、これらは旧中州を覆う堆積物と考えられる。それらのうち黒褐色の砂質シルトには、古墳時代や中世などの遺物が含まれ、その下面からは弥生時代後期末ごろの小規模な流路が 2 つ検出されている。

(5) 桜地区

本地区は、大部分が完新世段丘の埋没旧中州に、また西端のみ現氾濫原の旧河道に位置する(図 2)。 遺構検出面から掘削したトレンチ断面(図 9)では、完新世段丘の旧中州堆積物とそれを覆う堆積物、ならびに現氾濫原を構成する堆積物の下部が認められる。完新世段丘の旧中州堆積物は下位にみられる 灰褐色の砂礫(堆積物 9)である。礫は径 3~23㎝の亜角・亜円礫を主体とし、最大で径52㎝のものが 含まれる。それを被覆する堆積物は、暗褐色や灰褐色などの礫混じり砂(堆積物 5・7)、砂(堆積物 8) およびシルト質砂(堆積物 4・6)と、その上位に位置する黒褐色のシルト(堆積物 3)である。これら の堆積によって、旧中州は浅く埋没している。

他方、現氾濫原の堆積物として確認できるのは、灰褐色の砂礫(堆積物 1)である。これは扇状地堆積物に相当する。この上位には、現氾濫原に分布する旧河道の堆積物が存在し、それは砂質シルトやシルトを中心とした細粒堆積物である。

一方、この地区の南壁断面(図10)では、遺構検出面より上位の完新世段丘堆積物が観察される。最下位にみられる砂礫(堆積物 6)とその上位の黒褐色シルト(堆積物 5)はトレンチ断面でも観察される旧中州堆積物(図 9 の堆積物 9)とそれを覆う堆積物(図 9 の堆積物 3)で、遺構は黒褐色シルトの上面から検出される。その上位には、褐灰色のシルト(堆積物 4)、黄灰色の砂質シルト(堆積物 3)、灰色のシルト(堆積物 2・圃場整備直前の耕土)および盛土(堆積物 1)が認められる。埋没旧中州上で検出されている遺構は、奈良時代後半~平安時代前半に機能した直線的な道路遺構と11~14世紀の掘立柱建物跡などである。

(6) 焼御堂・岡ノ森地区

これらの地区は埋没した旧中州の南西斜面に位置する(図 2)。堆積物は下位から砂礫、黒褐色の砂質シルト、灰黄褐色の砂質シルト(旧耕土)、および耕土である。これらのうち、砂礫は旧中州を構成するもので、旧中州は黒褐色の砂質シルトに被覆され浅く埋没している。岡ノ森地区では、黒褐色砂質シルトの上面から弥生時代中期初頭と中期後半の溝や中世前半の掘立柱建物跡などが検出されている。

4. 調査地区における地形環境の変遷

ここでは、これまでの事柄から考察される地形環境について述べる。

①縄文時代 調査地区付近では、砂礫が古円山川によって堆積した。これによって、扇状地が発達するとともに、比高約1.5mの中州が10前後形成された。砂礫の堆積後、中州の上には古円山川の氾濫に伴

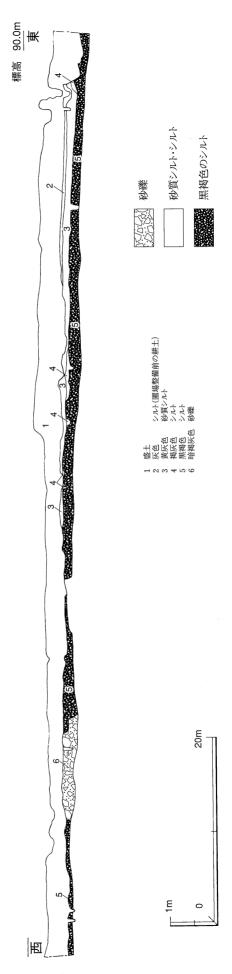


って砂質シルトやシルトが堆積し、中州は埋没した。 埋没旧中州上は当時流路の底より約2.5m高く、その 後そこでは洪水の発生しない安定した環境が比較的 長期間みられた。この時期に旧中州を覆う細粒堆積 物の上部が土壌化され、黒褐色のシルトが生成され た。他方、流路の下部には、砂や砂質シルト、シル トなどが堆積し、局所的にできた湿地では、黒灰~ 黒褐色のシルトが生成された。

②弥生時代前期~古墳時代前期ごろ 旧河道では、低湿な環境が続き、新水北地区の旧河道では小規模な流路が2つ形成された。最初にみられた流路では、湿地化や砂の堆積がみられ、それは弥生時代末までに埋積された。続いて形成された小規模な流路は、洪水に伴う砂と砂質シルトなどによって古墳時代中期までに埋積された。

③古墳時代前期末~6世紀ごろ 古墳時代中期に入ると、新水北地区の旧河道で洪水が1度発生し、シルトが堆積した。5世紀末には、旧河道の低湿な環境下でこのシルトを水田土壌にした稲作が行われた。ついで、新水北地区の旧河道で洪水が1~2度起こり、砂質シルトや砂の堆積がみられた。新水北地区と宮ケ田II地区では、中程まで埋積された旧河道で6世紀に水田が営まれた。他方、宮ケ田II・II地区や新水北地区の埋没旧中州上では、4世紀から6世紀にかけて高燥で安定した環境が続いており、そこには竪穴住居や掘立柱建物がつくられた。特に宮ケ田I・II地区では、主に竪穴住居からなる大規模な集落が形成された。

④6世紀ごろ~10世紀 6世紀中ごろ以降、宮ケ田Ⅲ地区と新水北地区の旧河道では、1~3度発生した洪水によって砂質シルトやシルトが堆積し、旧河道はある程度まで埋積された。そこでは、まだ続く低湿な環境下で堆積物の土壌化が進み、黒灰~黒褐色のシルトが生成された。奈良時代前半~平安時代前半には、埋没旧中州と旧河道を横断する直線道路が宮ケ田Ⅰ・Ⅲ地区から桜地区へ延びていた。当時、埋没旧中州と旧河道との比高は1m前後あり、旧河道は低湿で、そこには軟弱な堆積物がみられた。



そのため、旧河道での道路は、盛土を施し、礫が敷かれていた。

- ⑤11世紀~14世紀 平安時代後半には、新水北地区の旧河道で砂とシルトの堆積がみられ、13世紀にはその上面で水田稲作が営まれた。一方、高燥で安定した環境下の埋没旧中州上では、この時期に集落の形成がみられた。桜地区では11世紀から14世紀にかけて、宮ケ田 II ・III 地区では11世紀後半~12世紀前半に、さらに岡ノ森地区では中世前半のある時期に掘立柱建物が建てられた。特に11~12世紀の桜地区と11世紀後半~12世紀前半の宮ケ田 II ・III 地区では、比較的大きい集落が存在していた。
- ⑥14世紀以降 新水北地区の旧河道では、13世紀の水田経営後16世紀末までに2~3度の洪水が発生し、砂質シルトやシルトが堆積した。その結果、旧河道はほぼ埋積された。こうした堆積の終了後16世紀末までの間に、調査地区のほとんどが位置する扇状地は円山川の下刻によって段丘化した。段丘崖下の現氾濫原には、その後新たな扇状地が形成された。完新世段丘となった新水北地区の旧河道では、江戸時代に入って水路がつくられ、水田が営まれた。

5. おわりに

本遺跡の各調査地区はほとんどが完新世段丘面に位置し、桜地区の西端のみに現氾濫原がみられる。 完新世段丘は14世紀以降16世紀末までのある時期に扇状地が段丘化したもので、それ以前は円山川の洪 水がおよぶ氾濫原であった。そこには、埋没した旧中州と網状を呈する旧河道が分布する。旧中州は、 縄文時代のある時期に砂礫の堆積によって形成され、その後縄文時代末までに細粒堆積物によって覆わ れた。旧河道は、中州の形成期にみられた流路跡で、16世紀末までに徐々に埋積された。

本遺跡で検出される遺構の多くは、旧中州の埋没が終わり、旧河道が埋積されていく過程でつくられた。このころ、埋没旧中州上では高燥で安定した環境が続き、旧河道での環境は洪水のおよぶ低湿なものであった。このような地形環境の下で、人間の居住は埋没旧中州上でなされた。宮ケ田 I・II 地区の埋没旧中州上では、古墳時代前期末~後期に竪穴住居からなる大規模な集落が、また桜地区では11~14世紀、宮ケ田 II・II 地区では11世紀後半~12世紀前半に掘立柱建物の集落が立地した。

一方、旧河道では水田稲作が営まれた。宮ケ田 I・Ⅲ地区と新水北地区の旧河道では、水田が5世紀末や6世紀、8~9世紀、13世紀などにつくられた。これらは洪水堆積物に繰り返し覆われ、それとともに旧河道の埋積は進展した。また、奈良時代後半~平安時代前半の直線的な道路遺構には、人間の工夫が凝らされていた。それは、この道路を旧河道とほぼ直交するようにつくり、旧河道の横断距離を短くしたことと、旧河道での道路に盛土と貼石を施したことである。以上のように、本遺跡での人間活動は地形環境と密接に関連していたのである。

第4章 まとめ

第1節 縄文·弥生時代

ここでは加都遺跡において本格的に遺跡が展開する古墳時代より前の時期について取り上げる。

1. 縄文時代

宮ケ田 I 地区のSPK007から前期の北白川下層 1 式の深鉢が出土している。旧和田山町域では最古の土器である。

後期については桜地区・焼御堂地区・宮ケ田II地区の包含層から後期の中津式の土器が出土している。 平成16年度調査では後期の埋甕が出土していることから確実にこの周辺で生活が行われていたことが伺 われる。円山川の近くに位置する扇状地付近がその活動域と考えられる。

晩期については新水北地区の包含層から船橋式の突帯文土器が出土している。近隣でも片引遺跡やムクノ木遺跡で晩期の土器が出土し(田畑2004)、山裾付近にその生活の場が移動していることが見て取れる。

その他、石器についても新水北地区で黒曜石製石鏃・サヌカイト製石鏃・スクレイパー・打製石斧、 宮ケ田Ⅲ地区でスクレイパーなどが出土している。

このように、出土した資料はわずかではあるが低地部における縄文人の広範な活動の一端を示しているということができる。

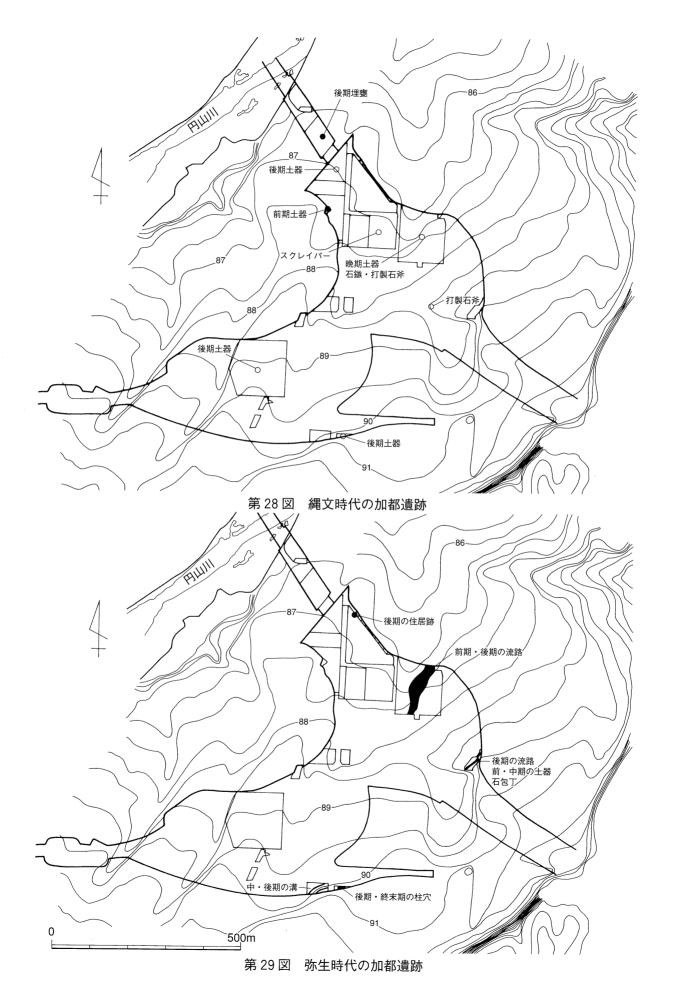
2. 弥生時代

前期の土器が出土しているのは伊豫田地区の流路SDY001(後期)と新水北地区の流路SRY4001である。 筒江の谷から流れ出る黒川は地形図からみると現河道より西側を流れ、新水北地区の流路SRY4001へ続く可能性が考えられる。さらに筒江中山の丘陵裾の片引遺跡(兵庫県教育委員会社会教育・文化財課1985) での出土例を考えると、前期の遺跡は黒川の旧流路の東側の微高地から筒江中山の丘陵裾にかけての部分に広がっていることが推定される。

中期には岡ノ森地区で中期の土坑・溝が検出されているのみで、各地区の包含層でも土器の出土量は 少ない。

後期には焼御堂地区で後期前半・終末期の柱穴が検出され、岡ノ森地区では弥生時代後期の土坑・溝が検出されている。集落本体は南側に広がるものと思われる。宮ケ田Ⅲ地区では弥生時代後期の竪穴住居跡が1棟のみ検出され、伊豫田地区では灌漑水路と推定される流路SDY001が検出されている。この流路は黒川旧流路から分水したと考えられる。その他、各地区の包含層や新水北地区の流路SDY4001からも土器が比較的多量に出土している。

この時期には東側の丘陵部の筒江中山古墳群(兵庫県教育委員会社会教育・文化財課1985)で木棺墓や土器棺墓、円山川を挟んだ対岸では梅田東墳墓群(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2002)で木棺墓群が検出され、周辺部での墓域の存在も確認できる。このように後期には遺跡の範囲が大きく拡大しているものと思われる。



第2節 古墳時代

加都遺跡内で本格的に遺跡が展開するのは宮ケ田地区・新水北地区で集落が展開する古墳時代中期以 降である。

1. 土器の変遷

ここでは数多く検出された竪穴住居跡から出土した資料から古墳時代中期から後期にかけての土器の変遷を跡づけてみることとする。かならずしもすべての時期に十分な資料が揃っているわけではないことから、各土器の器種について十分な型式化をするには至らなかったが、一応の変遷を追うことはできるであろう。

以下に古墳時代中期から後期にかけてを古墳1期から8期に分けて述べることとする。

古墳1期 SHK075・SHK051・SHK068の資料などの資料を挙げることができる。土師器甕は肩部に ョコナデを施したものが多くみられる、土師器高杯は有稜高杯を含まない、土師器小型丸底壺は頸部が しっかり屈曲していることなどがこの時期の特徴である。

土師器高杯は無稜の高杯が用いられる。杯部と脚部の接合は充填方式で行われている。甕にはAaやBbがみられ、肩部にヨコハケが施されるものが目立っている。小型丸底壺がみられる。鼓形器台もみられる。

なお、SHK070・SHK055では土師器小型丸底鉢が出土していることからやや古墳1期なかでも古い可能性があるだろう。

小型丸底鉢の消失、無稜高杯の盛行、鼓形器台の粗製化などから丹後地域の大田南式(布留3式併行) に併行するものと思われる(高野2003)。

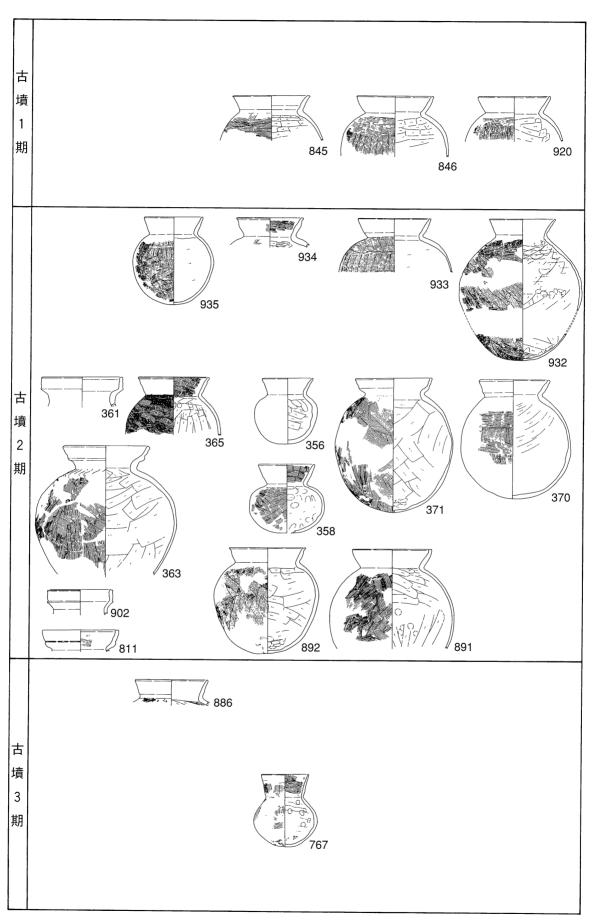
古墳2期 $SHK072 \cdot SHK026 \cdot SHK061 \cdot SHK061$ の資料などの資料を挙げることができる。この時期の資料は $SHK072 \cdot SHK026$ などのように他の時期に比べて一括資料に恵まれている。

壺には二重口縁壺のBa、直口壺のAa、長頸壺のAbなどが見られる。甕には口縁が内湾し、端面が上方を向いているBaの存在が目立ち、その他に、Aa・Bbなどがある。肩部にヨコハケが施されているものはかなり減少している。高杯には無稜の高杯に加えて有稜の高杯の存在が顕著である。無稜の高杯は口縁部が外反したものが多く見られる。有稜の高杯には大型の器形のものが存在している。稜の部分にナデを加えて明瞭に有段化させている(812)ものはほとんど見られない。杯部と脚部の接合は充填方式で行われているものが大半である。ただし、372は接合方式で、脚内上端に刺突をもっている。小型丸底壺の存在も顕著である。古墳1期に比べると頸部がなだらかに屈曲するものが見られる。

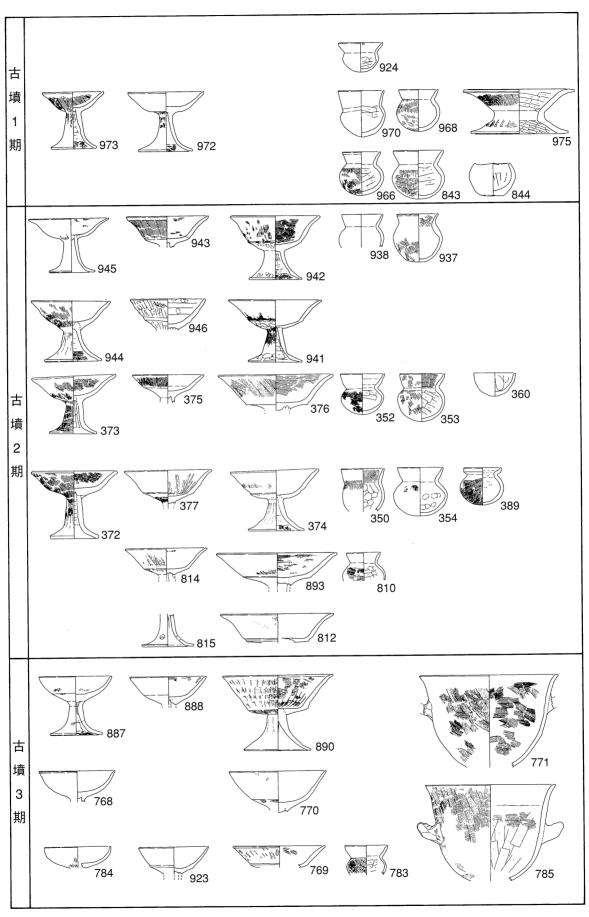
有稜外反高杯の出現からするとTG232型式に併行するものと思われる(辻1999)。

古墳 3 期 SHK060・SHK033・SHK036・SHK069の資料などの資料を挙げることができる。

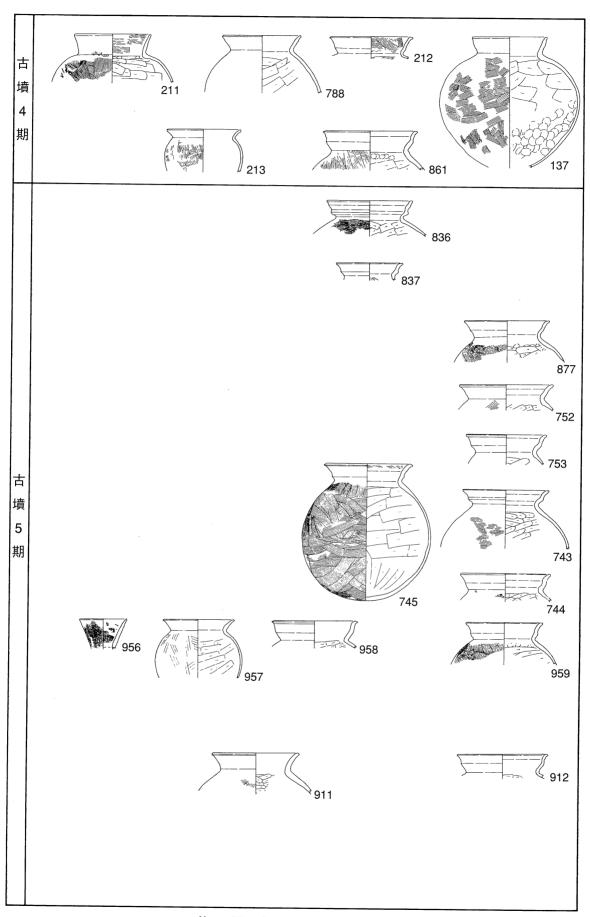
壺には直口壺のAa、長頸壺のAbなどが見られる。甕については残念ながら良好な個体は存在しない。 高杯には無稜の高杯は口縁部が内湾し、碗型高杯に変化している。有稜の高杯には古墳に2期と同様に 大・小の器形のものが存在している。小型の器形には923のように口縁部がやや内湾気味のものが存在し ている。大型の器形は杯部の深さがやや深くなっているものと思われる。杯部と脚部の接合は充填方式 で行われているものに加えて、接合方式(887)や挿入方式(890)のものが存在している。脚内上端に 刺突をもつもの(372)が現れている。小型丸底壺は確実に減少していると思われる。甑が新たに出現し



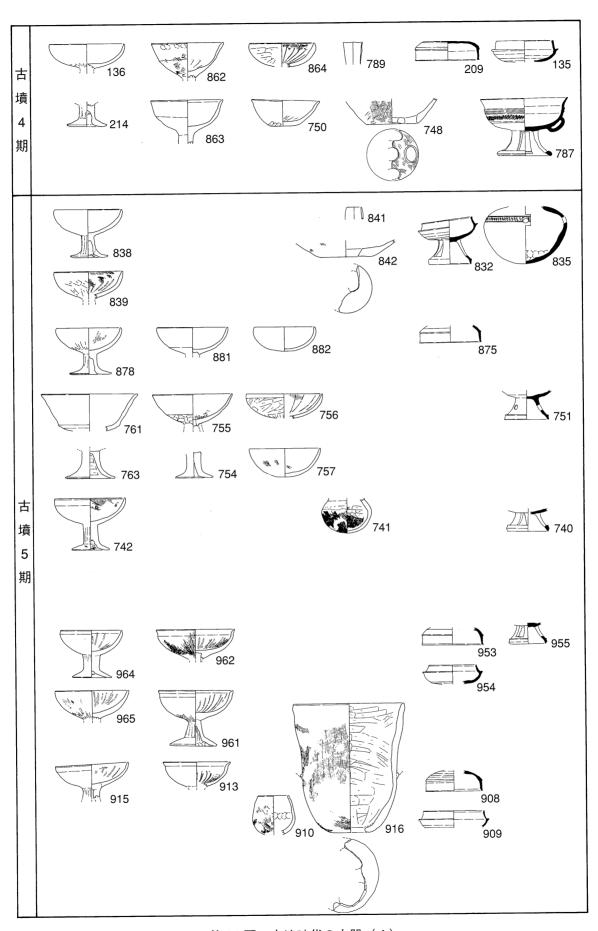
第30図 古墳時代の土器(1)



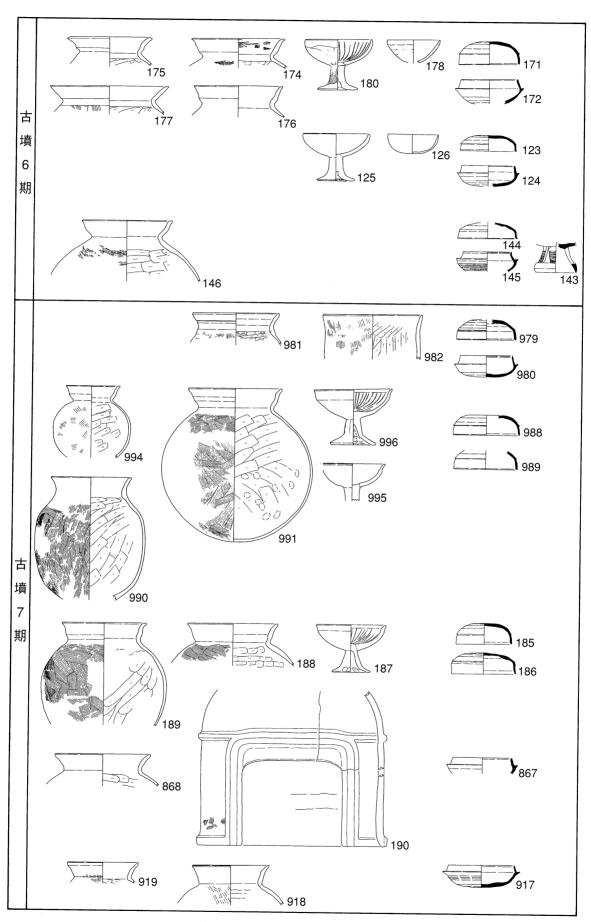
第31図 古墳時代の土器(2)



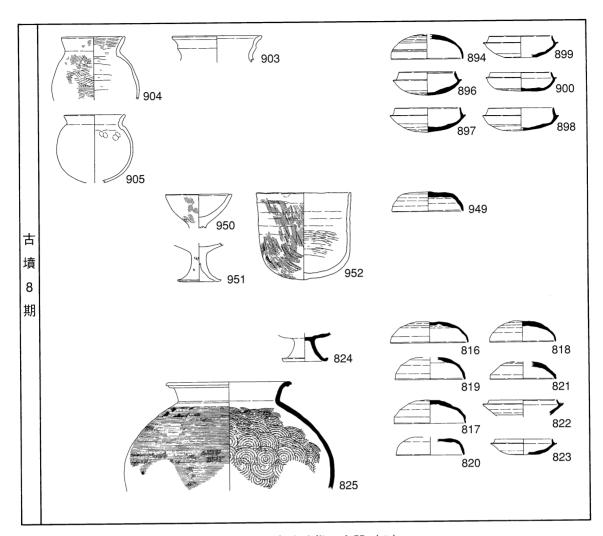
第32図 古墳時代の土器(3)



第33図 古墳時代の土器(4)



第34図 古墳時代の土器(5)



第35図 古墳時代の土器(6)

ている。器高が低く、やや鉢形に開く器形で、底部は丸底である。

椀形高杯の出現からするとTK73型式~TK216型式に併行するものと考えられる(辻1999)。

古墳 4 期 SHK004・SHK019・SHK030・SHK031A・SHK038・SHK054の資料などを挙げることができるが、良好な資料はあまりなく、断片的である。

壺には直口壺のAaが見られる。甕には口縁部が内湾するものがほとんど見られなくなっており、古墳3期の状況は良く分からないが、古墳2期の様相とはかなり変化している。若干内湾気味のもの(212)や口縁部がやや外反気味のもの(788)に加えて口縁部が屈曲するもの(861)が出現している。また口縁部が短く外反する小型甕(213)も出現している。高杯には椀型のものともに無稜外反高杯の系譜を引く(862・863)ものが残存している。杯部と脚部の接合は挿入方式のものが大半を占めているものと思われる。椀が出現している。丸底のものと平底のものがある。甑は平底で、蒸気孔は多孔式である。製塩土器がある。

須恵器が出現し、TK208型式の蓋杯、無蓋高杯が見られる。

 している。高杯は椀型のものがほとんどで、有稜の大型品がわずかに存在している。集落内での有稜高杯の使用はほとんど見られなくなっているようである。椀型高杯についてはこの時期の後半に口縁端部が外反するものが出現している。杯部と脚部の接合はほとんどが挿入方式で、充填方式をとるもの (755) や接合方式 (964・915) がわずかに存在している。椀は丸底のもののみが存在している。甑は平底のものと丸底のものが存在し、蒸気孔は平底のものが 2 孔式、丸底のものが多孔式である。その他、小型丸底壺、無頸壺、製塩土器などが存在する。

須恵器にはTK23型式~TK47型式の蓋杯・有蓋高杯・腺などが存在する。須恵器は各住居から $1\sim 2$ 点程度しか出土していない。

古墳6期 SHK001・SHK006・SHK012の資料を挙げることができる。

甕は口縁部が屈曲するものが多いと思われるが、屈曲が緩くなっている。その他に口縁部が直線的に開くもの(177)や口縁部が内湾するもの(146)がある。高杯は椀型のもののみで、杯部と脚部の接合は挿入方式である。口縁端部が外反するものを挙げることはできないが、実際には存在するものと思われる。その他に、椀、製塩土器などが存在している。

須恵器にはMT15型式の蓋杯・有蓋高杯などが存在する。須恵器は各住居から $1\sim2$ 点程度しか出土していない。

古墳7期 SHK014·SHK056·SHK067·SHK079·SHK084の資料を挙げることができる。

甕は口縁部が屈曲するものが多いと思われるが、6期と同様に屈曲が緩くなっている。口縁部が外反するものがやや多くなっているものと思われる。高杯は椀形のもののみで、杯部と脚部の接合は挿入方式である。口縁端部が外反するもののみ確認することができるが、実際には口縁端部が外反しないものも存在するものと思われる。その他に、甑、移動式竈などが存在している。

須恵器にはTK10型式の蓋杯が存在する。須恵器は各住居から1~2点程度しか出土していない。

古墳8期 SHK046・SHK062・SHK073の資料を挙げることができる。

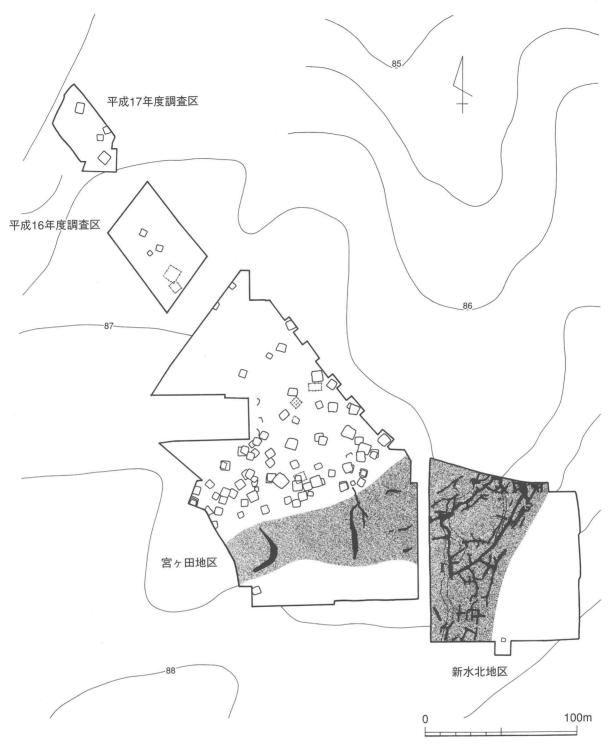
古墳7期以前に比べて土師器の出土量が非常に少ない。甕は口縁部が屈曲するものと口縁部が短く外反する小型のものが見られる程度である。高杯は椀形の系統を引くものと考えられるが、厚手でやや異色のものである。その他、桶形の不明製品(952)がある。上半は内外面とも粘土紐の接合痕が見られる粗製の製品である。

須恵器には蓋杯・高杯・甕などがある。MT85型式~TK43型式を中心として、若干TK209型式のものを含んでいる。古墳7期までと比べて蓋杯の出土量が増えていることは確実である。

2. 遺跡の変遷

古墳時代の遺構は宮ケ田地区・新水北地区と平成16・17年度調査区で検出されている。集落域は主に 円山川東岸に南北に長く延びる微高地上に広く展開しているようで、その他は宮ケ田地区・新水北地区 の湿地帯の南側及び東側でそれぞれ1棟ずつ住居が確認されているにとどまっている。宮ケ田地区・新 水北地区の湿地帯では畦畔や溝・井堰などが確認され、集落と同時期に水田として開発されていること がわかる。

宮ケ田地区の集落域では古墳時代中期~後期にかけての95棟(建て替えを含めて)に及ぶ竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されて、長期間にわたる集落の変遷を追うことができる。宮ケ田地区の西側の南北に長く延びる微高地の高所部での状態が不明である点は残念であるが、集落のかなりの部分が明らか



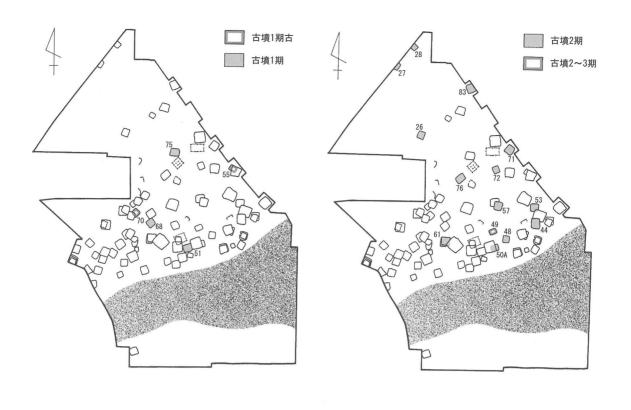
第36図 古墳時代の加都遺跡

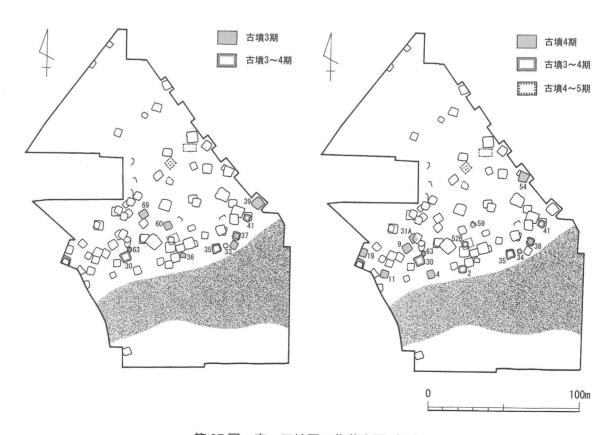
になったものと思われる。

古墳1期 SHK051・SHK055・SHK068・SHK070・SHK075・SHK2001がこの時期にあたる。

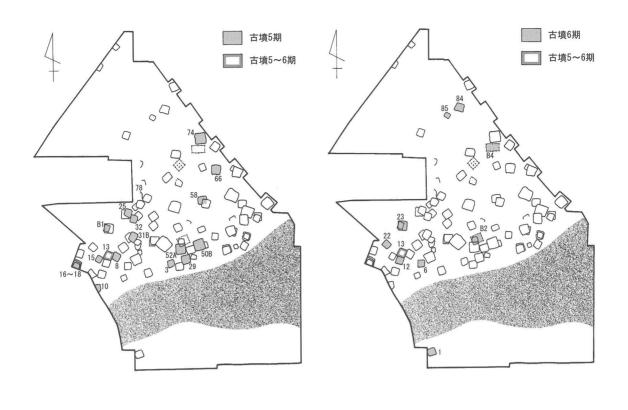
竪穴住居跡は宮ケ田地区では湿地帯に近い南東部に分布し、新水北地区では湿地帯の東側でわずかに 1棟のみ存在している。なかでもSHK070・SHK055では土師器小型丸底鉢が出土していることからやや 古墳1期なかでも古い可能性があり、集落開始期のものと考えられる。

古墳2期 SHK026·SHK027·SHK028·SHK044·SHK048·SHK050A·SHK053·SHK057·SHK061·





第37図 宮ヶ田地区の集落変遷(1)





第38図 宮ヶ田地区の集落変遷(2)

SHK071・SHK072・SHK076・SHK083がこの時期に当たり、SHK049は $2 \sim 3$ 期に属するものと考えられる。

この時期には集落は宮ケ田地区南東部を中心にして北方へひろがっており、平成16・17年度調査区を含めて最も集落域が拡大した時期と考えられる。住居跡は近接した時期の切れ合いを確認できるものはわずかである。そのなかで南西隅に位置するSHK061は短期間に4回建て替えられており、特殊な用途であった可能性が考えられる。SHK044も住居の拡張が行われており、住居廃絶時に顕著な焼土が存在していたことと、鳥形土製品(C19)や縦櫛(W240)が存在していたことから特殊な用途を想定することができる。北部に位置するSHK083は住居内に段をもつ特異な構造で、埋土からは焼土や羽口が出土している。埋土中から鍛造剥片を確認していないことから確定的ではないが、この集落内で鍛冶を行っていることを示すものと考えられる。

古墳3期 SHK033・SHK036・SHK037・SHK039・SHK060・SHK069がこの時期に当たり、SHK035・SHK063・SHK065・SHK030・SHK041は3~4期に属するものと考えられる。

古墳2期に大きく広がった集落域は湿地帯北辺のみに縮小している。集落内は大きく東西に分かれているように見える。

またこの時期には造り付け竈をもつ住居(SHK033)が出現している。

古墳4期 SHK004・SHK009・SHK011・SHK019・SHK020・SHK034・SHK038・SHK054がこの時期に当たり、SHK035・SHK063・SHK065・SHK030・SHK041は3~4期に、SHK002・SHK031A・SHK045・SHK052B・SHK059・SHK082は4~5期に属するものと考えられる。

古墳3期に比べると湿地帯に沿って西へ拡大している。集落内は西へ拡大したことにより、東西の2 群の距離が離れ、その間にできた空閑地にやや小規模な竪穴住居が新たに造られている。

また、この時期には造り付け竈をもつ住居がかなり多くなっている。

古墳5期 SHK003・SHK005・SHK008・SHK010・SHK015・SHK016・SHK017・SHK024・SHK025・SHK029・SHK031B・SHK032・SHK050B・SHK052A・SHK058・SHK066・SHK074・SHK078がこの時期に当たり、SHK002・SHK031A・SHK045・SHK052B・SHK059・SHK082は4~5期に、SHK013・SHK018は5~6期に属するものと考えられる。

東端の群はなくなり、やや東北に新たな群が現れている。中央の群では住居の規模が大きくなり、大・小の住居がセットとなっているように見える。西側の群は住居数が多くなり、さらに3~4の群に分かれる可能性がある。西端のSHK016・SHK017・SHK018では頻繁に建て替えが行われている。また、この時期に初めて掘立柱建物(SBK001)が出現している。床面積は14㎡程度と小さく主屋として利用されたとは考えがたい。調査区東部のSPK006と谷部では剣形石製品が出土しており、東部の縁辺部では祭祀が行われた可能性が高い。

古墳6期 SHK001・SHK006・SHK007・SHK012・SHK022・SHK023・SHK084・SHK085がこの時期に当たり、SHK013・SHK018は5~6期に属するものと考えられる。

北部の群は掘立柱建物と中小規模の竪穴住居からなる。掘立柱建物跡(SBK004)は5期の建物と比べて床面積が37㎡と大きくSHK074に後継する主屋と考えられる。中部の群は掘立柱建物(SBK003)のみになり、北部と同様に床面積37㎡の掘立柱建物を主屋としている。東部の群は竪穴住居のみで構成されている。5期に比べるとやや数を減じている。低地帯の南側では新たに竪穴住居が1棟出現している。

古墳7期 SHK014·SHK021·SHK040·SHK056·SHK067·SHK079·SHK080がこの時期に当たる。

集落は西部、中部、東部の3群に分かれ、竪穴住居のみで構成されている。西部の群はほとんど調査 区外であるため判然としないが、中部と東部の群は大型と中型の住居がセットになっているようである。 なおSHK079からは鉄滓が出土している。

古墳8期 SHK042・SHK043・SHK046・SHK047・SHK062・SHK073がこの時期に当たる。

集落は中部と東部の2群に分かれ、竪穴住居と掘立柱建物で構成されている。7期と同様に大型と中型の住居がセットになっているようである。大型の竪穴住居SHK062は床面積65㎡で、加都遺跡中最大の住居である。掘立柱建物は3間×3間の加都遺跡中唯一の総柱建物で、倉庫と考えられる。床面積27㎡の規模は倉庫の中でも法円坂遺跡や鳴滝遺跡のような超大型のものを別にすれば大規模の部類に属している(都出1989)。

古墳時代中期より続いてきた集落はTK209型式の須恵器を含む住居跡SHK046の廃絶をもって消滅している。

3. 竪穴住居の変遷

宮ケ田地区で95棟、新水北地区で1棟と多数の竪穴住居跡を検出した。集落の存続期間である古墳時代中期から後期にかけての住居構造の変遷をほぼ追うことができるものと思われる。ただし、主柱穴については十分に検出・確認できなかった住居も多い。

古墳1期 平面が長方形のもの(A類)、平面が正方形のもの(B類)、小規模のもの(C類)に分かれる。

A類には主柱穴が4本である可能性が高いA1類(SHK075・SHK051など)がある。面積は27~30㎡程度で、床面中央に炉をもち、長辺側の中軸線上の壁際と住居の隅に土坑をもっている。SHK051は中軸線上の土坑がV字状の平面で、反対側の長辺側から内側に間仕切り状の溝が延びている。

B類は主柱穴が4本である可能性が高い。面積は26㎡で、A1類よりやや面積が小さい。中軸線上の壁際に土坑をもっている。

C類のSHK2001は面積 7 ㎡と小規模である。床面に主柱穴をもたない可能性が高く、土坑や炉なども 検出されていない。

古墳2期 1期に見られたA1類・B類・C類に加えて、主柱穴が2本のA2類と長辺が非常に長いA3類が見られる。

A1類は古墳1期とほぼ同様と考えられる。面積29~34㎡で、長辺側の中軸線上の壁際と住居の隅に土坑をもっている。SHK044は当初は2本柱の竪穴住居であるが、拡張後は古墳1期のSHK051と同様に中軸線上の土坑がV字状の平面で、反対側の長辺側から内側に間仕切り状の溝が延びている。

A2類は主柱穴が2本で、SHK072は中軸線よりややずれた位置に主柱穴をもっている。床面積は18~22㎡とやや小さい。床面中央に炉をもち、長辺側の中軸線上壁際と住居の隅に土坑をもっている。

A3類は平面が非常に横長い長方形である。中央に炉をもつ可能性がある。主柱穴についてはよく分からない。古墳2期にのみ存在している。

B類は主柱穴が4本で、対面する2辺の中軸線上の壁際に土坑をもっている。床面中央付近に炉をもっている。床面積は $27\,\mathrm{m}$ である。

古墳3期 A1類は消失し、より大型のA4類や竃付き住居のD類が現れている。

A2類のSHK041は主柱穴が当初2本柱であったが、若干拡張して4本柱に建て替えられている。中央

第4表 古墳時代の竪穴住居跡一覧

遺構名	地区	短辺 (m)	長辺 (m)	面積 (m²)	主柱穴	周壁溝	雏	竈支脚	炉	時期
SHK001	宮ヶ田I	5.4	5.6	30.2	4		0		0	6
SHK002	宮ヶ田!	4.8	4.9	23.5	4	0			0	4.5
SHK003-1	宮ヶ田I	3.1	3.3	10.1	-	0			0	5
SHK003-2	宮ヶ田!	3.5	4.0	14.0	-		0	礫	0	5
SHK004	宮ヶ田1	5.2	5.2	27.0	4		.0	礫	0	4
SHK005	宮ヶ田I	3.6	3.9	13.7	4		0	高杯	Ö	5
SHK006	宮ヶ田I	4.4	4.4	19.4	4		0	礫	0	6
SHK007	宮ヶ田I	4.4	-	-	-					6
SHK008	宮ヶ田(5.0	5.0	25.0	4?		0?	高杯?	0	5
SHK009	宮ヶ田I	5.7	5.8	33.1	4?	0			0	4
SHK010	宮ヶ田!	5.0	-		4?					5
SHK011	宮ヶ田I	4.7	5.0	23.7	4		0	礫	0	4
SHK012	宮ヶ田	4.5	4.7	21.2	4		0	礫	0	6
SHK013	宮ヶ田(5.2	5.7	29.4	4	0			0	5.6
SHK014	宮ヶ田(5.1	-	-	4?		0	高杯		7
SHK015	宮ヶ田I	3.7	4.2	15.1	?				0	5
SHK016	宮ヶ田	4.0	-	-	4	0			0	5
SHK017	宮ヶ田!	-	-	-	4?					5
SHK018	宮ヶ田I	-	-	-	4	0				5.6
SHK019	宮ヶ田I	5.6	-	-	4				0	4
SHK020	宮ヶ田I	-	-	-	4?					4
SHK021	宮ヶ田I	- 1	-	-	-					7
SHK022	宮ヶ田Ⅰ	4.4	4.5	19.8	0	. 0			0	6
SHK023	宮ヶ田(6.0	6.0	36.0	4?				Ô	6
SHK024	宮ヶ田I	5.2	5.4	27.8	4?	0				5
SHK025	宮ヶ田!	4.4	4.6	19.8	4?	0	_		0	5
SHK026	宮ヶ田川	4.4	5.1	22.4	2?	0			0	2
SHK027	宮ヶ田川	4.7	-	-	4?					2
SHK028	宮ヶ田川	3.7			4?					2
SHK029	宮ヶ田!・川	5.3	5.7	30.2	?		0		0	5
SHK030	宮ヶ田(・川	6.2	6.4	39.7	4		0	礫?		3.4
SHK031A	宮ヶ田 ・川	4.7	4.9	23.0	4?					4.5
SHK031B	宮ヶ田 ・川	4.9	5.8	28.4	?		Ó	礫		5
SHK032	宮ヶ田 ・	4.3	5.0	21.5	4?		0			5
SHK033	宮ヶ田Ⅲ	4.6	5.1	23.5	-		0		0	3
SHK034	宮ヶ田川	2.6	2.7	7.0	0					4
SHK035A	宮ヶ田Ⅲ	4.9	5.2	25.5						3.4
SHK035B	宮ヶ田川	4.8	4.8	23.0	-	0			0	3.4
SHK036	宮ヶ田川	4.1]	-	0				0	3
SHK037	宮ヶ田III	3.4	3.5	11.9	4	0			0	3
SHK038	宮ヶ田川	4.6	5.1	23.5	4		0		0	4
SHK039	宮ヶ田III	6.5	7.0	45.5	4?	0				3
SHK040	宮ヶ田川	5.1	5.1	26.0	4?		0		0	7
SHK041	宮ヶ田川	4.1	4.8	19.7	2.4	0			0	3•4
SHK042	宮ヶ田川	6.9	7.2	49.7	4?		0			8
SHK043	宮ヶ田III	6.4	-		4?		0			8
SHK044A	宮ヶ田!!!	4.8	5.6	26.9	2	0			0	2
SHK044B	宮ヶ田Ⅲ	5.6	6.1	34.2	4	0			0.	2

		1,2,2								
遺構名	地区	短辺 (m)	長辺 (m)	面積 (m²)	主柱穴	周壁溝	竉	竈支脚	炉	時期
SHK045	宮ヶ田III	4.2	-	-	-		0		0	4.5
SHK046	宮ヶ田Ⅲ	5.9	6.3	37.2	4		0		0	8
SHK047	宮ヶ田川	5.6	-	-	4					8
SHK048	宮ヶ田川	4.2	4.4	18.5	?				0	2
SHK049	宮ヶ田Ⅲ	5.0	-	-	-					2.3
SHK050A	宮ヶ田III	4.6	-	-	2					2
SHK050B	宮ヶ田川	6.8	6.9	46.9	4		0	高杯	0	5
SHK051	宮ヶ田川	4.9	5.6	27.4	4?	0	_	1	C	1
SHK052A	宮ヶ田III	6.3	6.8	42.8	-		0	高杯		5
SHK052B	宮ヶ田川	4.0	-	-	4		Č	礫		4.5
SHK053	宮ヶ田川	5.1	5.2	26.5	4	0		197	0	2
SHK054	宮ヶ田川	5.8	6.0	34.8	4?		0	高杯		4
SHK055	宮ヶ田川	3.4	-	-	-	0		lehti.	_	1
SHK056	宮ヶ田川	7.2	8.5	61.2	-		0	_		7
SHK057	宮ヶ田川	5.3	5.6	29.7	-	0		-		2
SHK058	宮ヶ田川	5.1	5.4	27.5			0	高杯	0	5
SHK059	宮ヶ田川	-	-	-			- ö-	礫		4.5
SHK060	宮ヶ田川	5.0	5.1	25.5	-	0		味		
SHK061A	宮ヶ田川	3.2	3.6	11.5		 	-	-		3
SHK061B	宮ヶ田川	5.2	5.6	29.1	-	8			0	_ 2
SHK061C	宮ヶ田川	6.0	6.2	37.2		~			<u> </u>	2
SHK061D	宮ヶ田川	3.6	3.9	14.0		~		-		2
SHK061E	宮ヶ田川				-					2
SHK062	宮ヶ田川	4.5	4.9	22.1	-	0	_		0	2
SHK063	宮ヶ田川	7.6	8.6	65.4	4		_0_		0	8
		2.4	2.7	6.5	0					3.4
SHK064	宮ヶ田川	3.1	3.5	10.9	-					4.5
SHK065	宮ヶ田川	3.8	4.7	17.9		_				3.4
SHK066	宮ヶ田川	5.9	6.0	35.4	-	0		高杯	0	5
SHK067	宮ヶ田川	7.0	7.5	52.5	-		O		0.	7
SHK068	宮ヶ田川	5.0	5.2	26.0		0				1
SHK069	宮ヶ田川	5.3	5.4	28.6	-	0				3
SHK070	宮ヶ田川	4.3	4.4	18.9	-					1
SHK071	宮ヶ田川	4.9	5.5	27.0	-				0_	2 .
SHK072	宮ヶ田Ⅲ	3.9	4.7	18.3	-	0			0	2
SHK073	宮ヶ田川		4.6	-	-					8
SHK074	宮ヶ田川	7.0	7.3	51.1	4	0	0	高杯	0	5
SHK075	宮ヶ田川	5.1	5.9	30.1	4			LT		1
SHK076	宮ヶ田Ⅲ	4.5	6.1	27.5	- T	0				2
SHK077	宮ヶ田川	4.7	5.0	23.5	-	T				
SHK078	宮ヶ田Ⅲ	-	-	-	- 1					5
SHK079	宮ヶ田川	4.9	4.9	24.0	-		0			7
SHK080	宮ヶ田III	3.4	3.6	12.2	-					7
SHK081	宮ヶ田Ⅲ		-	-	T		0			
SHK082	宮ヶ田III		-	-	-					4.5
SHK083	宮ヶ田III	6.0	-	-	-		-			2
SHK084	宮ヶ田Ⅲ	5.2	5.4	28.1	4		0		0	6
SHK085	宮ヶ田III	3.0	3.4	10.2	0	$\neg \neg$	0			6
SHK2001	新水北	2.4	2.9	7.0	0	0				1

に炉をもっている。

A4類はSHK039のように床面積46㎡と規模が大きくなっている。短辺側の中軸線上壁際に土坑をもっている。

B類のSHK060は古墳 2 期のSHK053と同様に対面する 2 辺の中軸線上の壁際に土坑をもっている。床面中央付近に炉をもっている。床面積は $26\,\mathrm{m}^2$ である。

C類のSHK036は短辺側の中軸線上壁際に土坑をもっている。床面中央付近に炉をもっている。主柱穴をもたない可能性が高い。床面積は12㎡程度と推測される。

D類のSHK033は造り付け竃をもつ竪穴住居跡である。平面はやや長方形で、床面積は24㎡である。やや中央からはずれた位置に炉をもっている。

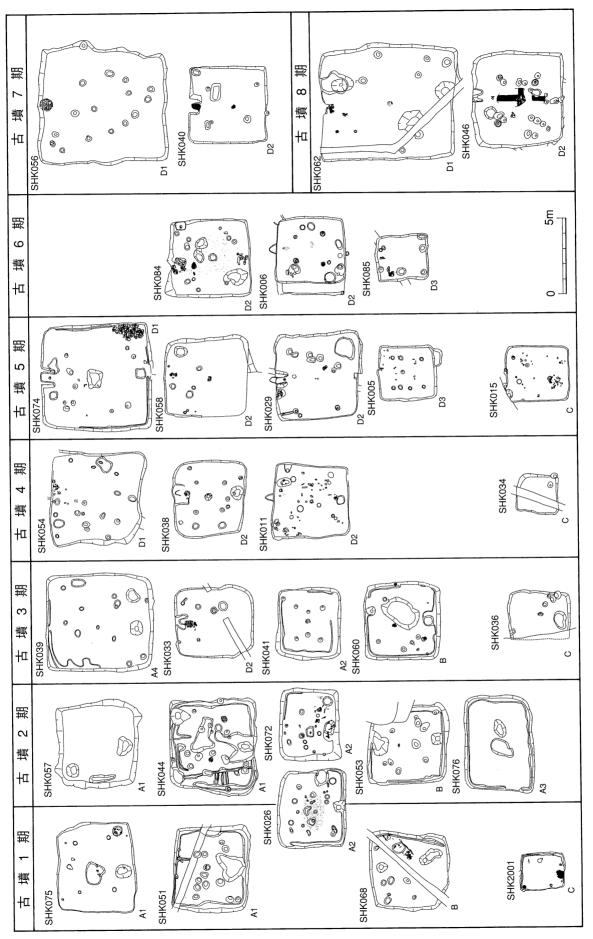
古墳4期 造り付け竃をもたないA・B類から造り付け竃をもつD類に転換し、わずかにC類が残存している。

D類は正方形からやや長方形気味のものがある。主柱穴は基本的に4本柱と考えられる。造り付け竈は1辺の中央(平面が長方形の場合は短辺側の中央)に設けられ、床面中央にも炉が設けられている場合が多い。土坑は中軸線上壁際、住居の隅、竈の横などに設けられている。床面積35㎡とやや大型のD1類と床面積20㎡代のD2類に分かれる。

C類のSHK034は屋内施設をもたず、床面積は $7\,\mathrm{m}^2$ と小規模である。

古墳5期 古墳4期に引き続き、D類とC類が存在する。

D類の住居の特徴はほぼ古墳4期と同様である。D1類の規模が最大51㎡ (SHK074) とやや大型のも



のが見られるとともに、床面積10㎡代のD3類も現れる。

古墳6期 C類が消失し、D類のみとなる。

D類の住居の特徴はほぼ古墳 $4 \cdot 5$ 期と同様である。大規模なD1類の存在は確認されていない。主屋に掘立柱建物が採用されたことによるものであろう。

古墳7・8期 古墳6期に引き続きD類のみである。

D1類の規模が最大65㎡(SHK062)と加都遺跡中最大のものが見られるように巨大化が進んでいる。小型のD3類は見られなくなっている。

古墳時代中期においては主柱穴2本柱の住居がある程度みられることは、山陰・北陸地方と共通しているようである(宮本1996)。造り付け竃については古墳3期に導入が始まり、古墳4期にはほぼ完全に竃付き住居に転換している。山陰・北陸地方では造り付け竃はあまり採用されず、隣接する京都府の丹後地域では5世紀中葉に導入が始まり、完全に転換するのは6世紀中葉であること(橋本2002)からすれば、非常に素早く転換している。竃付き住居に転換しても住居中央の炉はそのまま存続している点は他の地域にはあまり見られず但馬地域に特徴的なものと考えられる。

4. 小結

古墳時代中期初頭の古墳1期に湿地帯北辺付近に集落が成立し、古墳2期には北方に向けて開発域を広げている。古墳3期になると再び湿地帯北辺付近に集落が限られるようになり、以後、古墳5期に最盛期を迎えている。これと対応するように水田域では新水北地区では5世紀中頃の洪水を前後する時期に井堰を設け、杭や板材などで補強した畦畔などをもって低地部の開発に力を注いでいる状況を伺うことができる。また古墳3期から4期にかけては、竪穴住居における造り付け竃の導入と普及がなされ、土器についても椀型高杯・甑・須恵器の出現などの大きな変化を見ることができる。これらの変化をもたらした新しい生活文化や技術のもとで、古墳2期までの分散的な開発から古墳3期以降の集中的な開発へと転換しているものと考えられる。

古墳6期以降は徐々に住居数が減少し、6世紀のうちにはほぼ集落は消滅するに至っている。ただし、最終時期の古墳8期にはこれまで集落内には見られなかった比較的大規模な総柱建物が現れることが注目される。次節でも述べるようにこの坪の字名である「宮ケ田(みやけだ)」からすると屯倉として施入されたことも想起できるのではないだろうか。

第3節 律令期

宮ケ田 I ~Ⅲ地区に広がっていた古墳時代中・後期の集落は7世紀に入ると消滅する。しかしながら 新水北地区と宮ケ田Ⅲ地区の谷部では継続して水田が営まれていたようである。

そして、集落の消失した宮ケ田 I・II地区とこれまで明瞭な土地利用が確認されなかった桜地区とに一連になる古代の直線道路(SFR001)が現れる。

1. 道路遺構

検出位置と延長 古代の道路遺構(SFR001)は桜地区と宮ケ田 I・Ⅲ地区で検出された。桜地区では側溝で画された直線道路が調査区の東部で検出され、一部未調査部があるものの、総延長は260mである。宮ケ田地区では側溝で画された部分と盛土で構築された直線道路が確認され、一部削平のよる断続部があるものの総延長は150mである。方位は桜地区でN23°33′E、宮ケ田地区でN22°~23°EとおおむねN23°E前後である。両者は同一直線上に位置し、両端間の総延長は588mに及んでいる。南側の延長上は加都集落の南側に位置する金梨山の西裾を目指し、集落内の道路とも一致するようである。北側は市御堂に位置する独立丘陵の城山の西側を目指している。

桜地区南部では東の旧山東町方面へ向かう枝路が存在し、宮ケ田 I 地区の南端部東側では井戸 (SER001) が検出されている。

規模 道路遺構は基本的には側溝に画されていたと考えられる。桜地区では東西両側で2条ずつ、宮ケ田地区では東側でのみ2条検出された部分が存在し、第1次道路と第2次道路に分かれる。

第1次道路では路面幅 $6 \, \mathrm{m}$ 台(側溝心々間 $7 \, \mathrm{m}$ 台)が多いが、北端部のみ $5 \, \mathrm{m}$ 台まで狭くなっている。第 $2 \, \mathrm{x}$ 道路では路面幅 $4 \sim 6 \, \mathrm{m}$ 前後(側溝心々間 $5 \sim 7 \, \mathrm{m}$)であるが、北端部では路幅の縮小は行われているい。盛土部分では基底部を側溝心に沿わしているため盛土が高い部分ほど路面は狭くなっている。

七道駅路が当初12m前後の幅で設定されているのに対して明らかに小規模で、岡山県の中町B遺跡で 検出された路面幅約6mの「因幡道」と考えられる遺構が類似している(近江2006、岡山県古代吉備文 化センター・大原町教育委員会2004)。

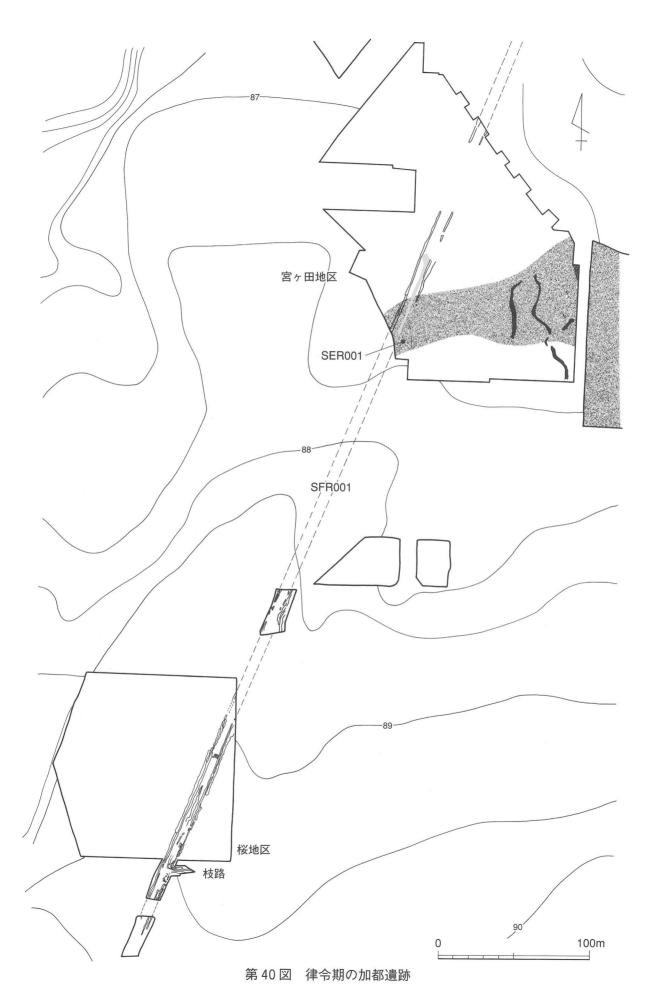
路面 桜地区では路面は削平されているためよくわからないが、畝状溝や中央溝が存在している。宮ケ田Ⅲ地区では路面に敷かれた径2~10㎝の礫がよく残存している。宮ケ田Ⅰ地区では轍と考えられる溝や路面上に据えられた可能性のある板材が存在する。

盛土 宮ヶ田地区の谷部分でのみ確認されている。シルト質の土を最高50cm盛り上げるのみで、版築 状の堆積は認められない。東側法面には径40cm以下の川原石を貼り付けている。

枝路 第 1 次道路施行時に本道と一体的に整備され、本道から東側に向けての枝路が設置され、第 2 次道路の造り替え時にもそのまま踏襲されている。南側側溝の残存状態が良くないため、路面幅は不明 である。この枝道の位置が条里のラインと重なっていることは注目される。

井戸 道路遺構に近接して設けられた井戸である。井戸枠上半の裏込めや井戸枠上端に川原石が用いられている点が特徴的である。同様の例は山陽道の小犬丸遺跡(兵庫県教育委員会1989)や西海道の志波屋四ノ坪遺跡(佐賀県教育委員会1994)などの例がある。『加都遺跡 I 』で述べられているように『延喜式』雑式の「若無水処。量便掘井」に関連するものと考えられる。

時期 側溝および路面から出土した土器は少ない。桜地区の第1次側溝より杯A(400)、第2次側溝



より杯B蓋(399・402)、杯A(401)、宮ケ田 I 地区の第 2 次側溝より杯B(407)、杯B蓋(406)、宮ケ田 II 地区の路面および宮ケ田 I 地区の第 1 次側溝より出土した円面硯(1117)が出土している。杯B蓋の縁部は屈曲するものがなく、 401のような杯が存在していることからすれば 8 世紀前半の比較的早い時期までには存在していたと考えられる。

道路遺構から直接出土しているわけではないが宮ケ田 I 地区・宮ケ田 II 地区・新水北地区の低地部では9世紀台の須恵器が出土している。この頃までは道路が存続していた可能性は考えることができ、11世紀前半には桜地区に集落が展開していることからそれまでには廃絶していることは確実である。『日本後紀』大同3 (808) 年5月癸未条の但馬3駅の廃止は同年5月の因幡道莫男・道俣駅の縮小と考え合わせれば「但馬道」の廃止を含んでいるとも考えることができるのではないだろうか。

2. 水田

谷部の湿地帯では古墳時代後期より引き続いて水田と利用されたと考えられる。ただし、畦畔が確認されたのは宮ケ田Ⅲ地区のみで、新水北地区では検出されていない。宮ケ田Ⅲ地区ではSSK001・SSR001・SSR002が検出されている。SSK001は古墳時代から引き続いて使用されていたようで、畦上からは木簡(W101)が出土している。SSR001は南北に長く、比較的高所部にまで蛇行して検出されている。当時の水田区画は基本的に自然地形に左右されている部分が多いことが伺われ、条里に沿った水田区画の存在をほとんど認めることはできない。

3. 出土遺物

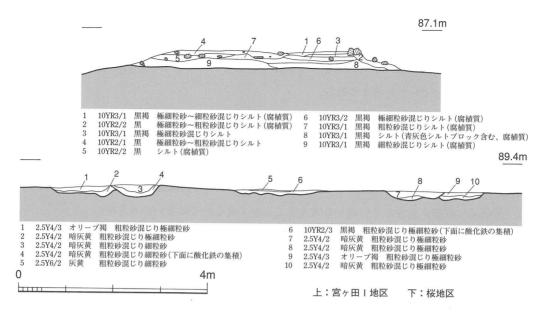
律令期に属する遺物は非常に少ないが、木簡・墨書土器・硯など文字関連の遺物の存在が注目される。 W1 は付札木簡で、朝来郡南端の里である「山口里」の名が記されている。W102・W103は断片的で意味内容が取りにくいものであるが、W102は越前国坂井郡符(『平安遺文』13号文書)のような田地に関する命令書、W103は召喚状のようなもので、郡符木簡の可能性が考えられる(平川2003a)。

W101は習書木簡で、「大家部」や「阿刀部」などの人名が記され、墨書土器にも「部」と記されており、部姓の人名が目立っている。「大家部」については丹波市市辺遺跡出土の1号木簡における石前郷野家里の住民の「大家」を挙げることができる。野家里は「宅里」に通じ、同里推定地に字名「宮家(ミヤケ)」が存在していることも、加都遺跡と共通している(平川2001)。

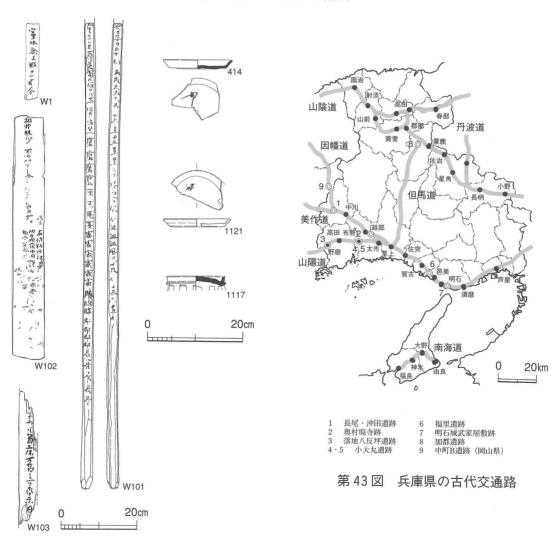
4. 小結

加都遺跡で検出された古代道路は、『延喜式』所載の七道駅路以外の古代の官道の存在を明らかにする ものである。山陽道と山陰道を結ぶ枝道としてこれまでに知られている「因幡道」にならい、「但馬道」 と称すべきものである(高橋1994、吉識・甲斐1998)。

木簡の出土から宮ケ田地区の近辺には郡衙関連の施設の存在が考えられる。朝来郡衙の所在については明瞭ではなく、郡名郷の所在する旧山東町内に想定されている。朝来郡は地理的に山陰道沿いの部分と「但馬道」沿いの部分に分かれており、両者を結ぶ枝路の存在も明らかである。隣接する丹波国氷上郡では郡内が地理的に東西に二分され、郡家と郡家別院が置かれたことが想定されている(平川2003a)。朝来郡でも同様の形態が取られた可能性があるのではないだろうか。



第41図 SFR001の断面



第42図 文字関連の遺物

第4節 中世

律令期には調査範囲内において集落は認められなかったが、11世紀前半頃より集落の存在が認められるようになってきた。ここでは主として集落が検出された桜地区と宮ケ田地区について検討をおこなう。

1. 土器

11世紀前半から15世紀にかけての土器が遺構から出土している。ただし建物跡の柱穴出土の土器が多いことから、各時期の様相をとらえるには若干資料が乏しい点は否めない。ここではこれらの土器を中世1期~中世7期に分けて検討する。なお、土器の器形分類は第24・25図を参照されたい。

中世1期 SBC007・SBC010・SBC024・SBC036・SBC037・SBC036・SKC013・SKC014の資料を挙げることができるが建物の柱穴から出土した遺物が多い。須恵器には碗A1・碗D・鉢Aなどがある。碗の底部は糸切りである。土師器には碗・杯A・皿B・小皿A・鍋B1などがある。土師器の供膳具はいずれも回転台土師器で、底部は糸切りである。碗は口縁部に対して底部が大きく、体部の丸味が乏しい。灰釉陶器は碗が出土している。東濃産の丸石2号窯式のもので、11世紀前半の時期と考えられる(尾野1995)。

中世 2-1 期 SBC048・SBC052・SPC004・SPC018の資料を挙げることができるが建物などの柱穴から出土した遺物が多い。須恵器には碗A 2・碗Bがある。碗は体部に丸味をもち、器高が 6 cm前後と最も高くなる。土師器には碗・小碗・杯A・小皿A・鍋A 1 などがある。土師器の供膳具はいずれも回転台土師器で、底部は糸切りである。碗は体部に丸味をもち、須恵器碗の形態と類似している。鍋A 1 は口径に対して器高が高く、甕形である。前後との関係から11世紀後半頃と考えたい。

中世 2-2期 SKC015・SKC017・SKC020の資料を挙げることができる。SKC015・SKC020など他の時期に比べ土坑一括資料に恵まれている。須恵器には碗A2・碗B・小碗がある。碗は器高が5.5 cm前後と2-1期より器高が低くなる。土師器には小碗・杯A・皿A・小皿A・水・鍋A1などがある。土師器の供膳具はいずれも回転台土師器で、底部は糸切りである。鍋A1は2-1期のものに比べると、頸部のしまりがなくなり、口径に対して器高が低くなっている。黒色土器碗は内面にのみ炭素が吸着されている。東播系須恵器の編年を援用すると森田編年のI-2期のなかでも前半の様相を示すと思われ、11世紀末~12世紀初頭頃と考えられる(森田1995)。

中世 3 期 SBC026・SKC003の資料を挙げることができる。須恵器には碗B・碗C・小皿・鉢Bなどがある。碗は器高が 5 cm程度になる。小皿は小碗の器高が減じたものである。土師器については遺構出土の資料に恵まれないが、回転台土師器の杯A・小皿などが伴うと考えられる。須恵器の形態から見ると森田編年の I-2 期に含まれるが、その後半の様相を示す垣内 1 号窯に近く、 12世紀前半と考えられる(森田1995・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1998)。

中世 4 期 SBC032の資料を挙げることができる。須恵器には碗C・小皿がある。碗は器高が 5 cm前後である。小皿は器高が低くなっている。土師器には杯B・小皿B・小皿Cがある。回転台土師器の杯B・小皿Bは、底部がヘラ切りのものがあり、小皿Cのような手づくね成形のものが含まれている。須恵器の形態から森田編年のII-1期に相当し、I2世紀後半と考えられる。

中世 5 期 SBC018 · SBC031の資料を挙げることができる。須恵器には碗B、鉢Dなどがある。須恵器の出土量(特に供膳具)がかなり減るようである。鉢Dの端部はわずかに丸味をもつ程度である。土師器

には皿C、小皿C、鍋A2などがある。土師器の供膳具は手づくね成形のものに変わっている。鍋A2の口縁部はやや内湾する程度である。その他、瓦質土器の羽釜がある。口縁部が上方に延びる京都型の瓦質土器である(鋤柄1995)。時期は須恵器鉢Dの形態から13世紀前半頃と考えられる(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2004)。

中世 6 期 SBC017・SBC033の資料を挙げることができる。須恵器には鉢Dがある。鉢Dは中世 5 期のものに比べると丸味をまし、端部外縁がやや拡張気味になっているものも存在する。土師器には皿C・小皿C・鍋B 1・鍋B 2 などがある。鍋B 1・B 2 は兵庫津播但型甕形タイプ I 類で13世紀後半と考えられ、須恵器鉢の年代は13世紀後半~14世紀前半頃と考えられる。(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2004)

中世7期 SBC019・SKC008・SKC011の資料を挙げることができる。SKC008は竪穴住居状の遺構の埋土から出土したもので、一括性にはやや乏しい資料である。須恵器には鉢E・鉢Fがある。土師器には皿C・小皿C・鍋A2・鍋B3がある。鍋A2は中世5期のものより口縁部をしっかり屈曲させている。鍋B3は兵庫津播但型甕形タイプであるが、B2より後出的な形態である。その他、瓦質土器の羽釜がある。須恵器鉢の形態から14世紀後半頃と考えられる。

小結 土師器の供膳具は12世紀後半までは回転台成形のものが用いられていたが、12世紀後半に手づくね成形の供膳具が出現し、13世紀前半には手づくね成形もののみに転換しているようである。須恵器についても碗・小皿などの供膳具は13世紀前半にはほぼ消失する。このように13世紀を境に大きく変化する状況は豊岡盆地を中心とした北但馬の状況と回転台土師器の継続的な利用は別にして基本的には一致しているようである(潮崎2001)。

2. 遺跡の変遷

集落が検出されたのは桜地区と宮ケ田地区の2地区である。宮ケ田Ⅲ地区の水田部と新水北地区では 畦畔が検出されている。桜地区は字「サクラ」のほぼ全体と字「杉ノ木」の南端部、宮ケ田地区は字 「マセバ」の東側坪の東部、字「宮ケ田」の南西半、字「弓田」の北端部に相当する。

掘立柱建物跡については以下ののように分類して記述をおこなう。

A型:梁行4間で床面積125㎡以上のもの。おおむね梁行5間以上のものが相当する。

B型:梁行4間で床面積125㎡未満のもの。おおむね梁行4間以下のものが相当する。

C型:梁行3間のもの。

D型:梁行2間のもの。

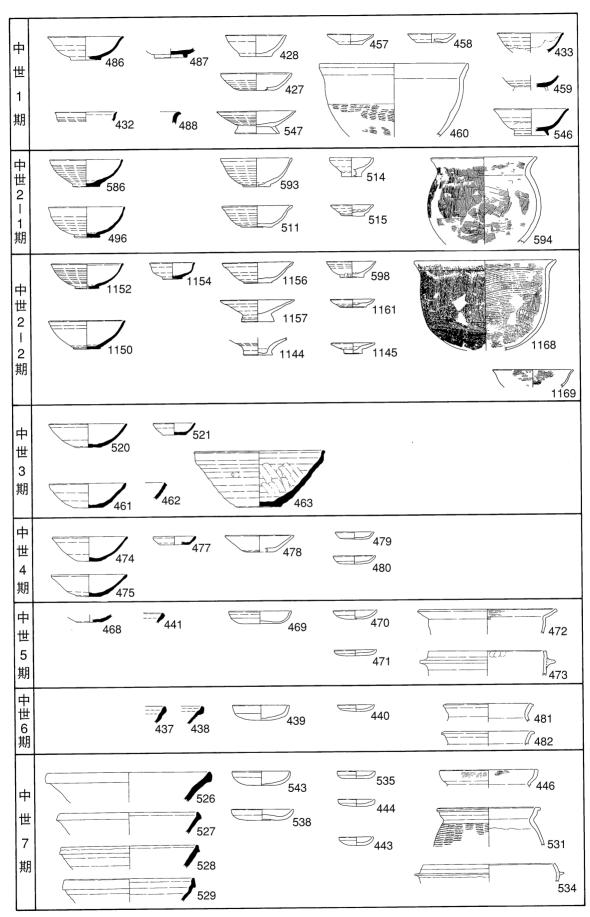
E型:梁行1間のもの。

F型:梁行1間で長屋状のもの。

中世1期 桜地区のみで集落遺構が検出されている。

A型にはSBC024・SBC007がある。SBC024は桁行 6 間、面積162.61㎡で加都遺跡中最大で、SBC007 も面積132.54㎡とそれに次ぐ規模である。B型にはSBC028・SBC010がある。面積100㎡前後である。C型にはSBC011・SBC037・SBC038がある。D型にはSBC003・SBC036がある。E型にはSBC005・SBC008・SBC009・SBC021がある。その他、SKC005・SKC006・SKC012・SKC013・SKC014などの遺構がこの時期に属している。

南西部ではA型・B型・C型・D型・E型と各種の建物がまとまって検出されている。A型の建物が2棟



第44図 中世の土器

存在することから2時期に区別されるべきかもしれない。中部に位置するB型のSB028は南西部のSBC010とほぼ同大であることから、南西部の群から派生したものと考えることができる。北部ではC型・D型・E型で構成されており、南東部よりは小規模の建物で構成されている。

なおこの時期には、灰釉陶器が破片ながらも33点出土していることも注目される。

中世2期 この時期には桜地区に加えて宮ケ田地区にも集落が出現する。

桜地区ではB型のSBC022・SBC039、D型のSBC006・SBC023・SBC027・SBC029・SBC030、E型のSBC012が検出されている。

中世 1 期にA型建物を中心とした南西隅の建物群は消滅し、小規模の建物が散在するようになっている。 北部ではB型のSBC039(床面積 $103\,\mathrm{m}^i$)がみられ、南東隅には $2-2\,\mathrm{期}$ にB型のSBC022($114\,\mathrm{m}^i$)が現れる。主要建物の規模が縮小している。

宮ヶ田地区ではB型のSBC058、C型のSBC051・SBC057、D型のSBC052・SBC059、F型のSBC048・SBC056が検出されている。その他の建物は遺物の出土がなく時期は判然としないが、基本的には中世 2 期に属するものと考えられる。

中世 2-1 期にはC型のSBC051やD型のSBC052などの中小規模の建物とともに長屋状のF型のSBC048・SBC056が現れる。SBC056には北側にSKC016が附属しており、家畜小屋と考えられる。SBC055は変則的な庇付き構造の建物と考えられるが、遺物が出土していないことから時期が判明しない。やや古式な構造から見るとこの時期に属するかややそれに遡る時期に属するものと考えられる。

中世 2-2 期はB型のSBC058(床面積113㎡)とC型のSBC057・D型(側柱)のSBC059・L字形柵列のSAC004の 2 群に分かれるが、前後関係は判然としない。D型(側柱)のSBC049・SBC050、L字形柵列のSAC003もこの時期に属する可能性が高い。

中世3期 桜地区では集落が継続するが、宮ケ田地区では集落は消失する。

B型建物のSBC022・SBC026、C型建物のSBC013・SBC035、D型建物のSBC002・SBC004・SBC023・SBC027のほか、SXC001、SKC003がこの時期に属している。

主要建物であるB型には南東部で前期より引き続く可能性のあるSBC022と新たに現れるSBC026がある。その他は中小規模の建物跡が散在する程度である。SXC001はSBC026附属する屋敷墓と考えられる。中世4期 桜地区のみで集落遺構が検出されている。

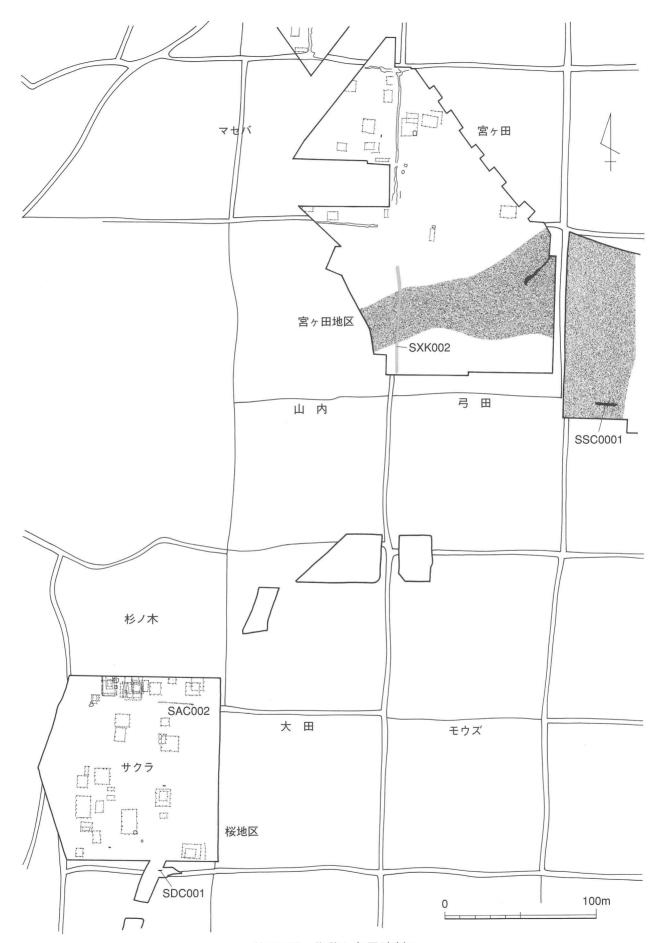
B型建物のSBC032、C型建物のSBC013・SBC014・SBC035、D型建物のSBC002のほか、SKC002がこの時期に属している。

北端部では前期より引き続く可能性のあるC型のSBC035に加え、B型のSBC032(床面積118㎡)が現れる。SBC032のやや南側では、前期から引き続く可能性のあるC型のSBC013やSBC014が見られる。それに対して南半部にはほとんど建物は見られなくなる。

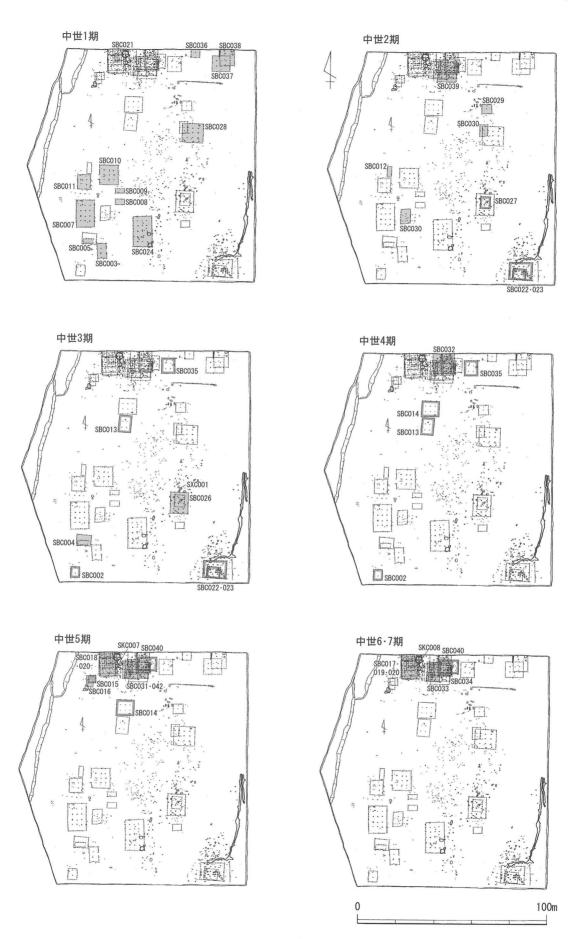
中世5期 桜地区でのみ集落遺構が検出されている。

A型建物のSBC031 (床面積125㎡) ・SBC018 (床面積101㎡以上)、C型建物のSBC014・SBC040、D型建物のSBC016・SBC020、E型建物のSBC015、F型建物のSBC042の他、SKC002・SKC007・SKC009がこの時期に属している。

調査区北部に位置するSBC014のほかは、全て北端部に位置している。北端部ではSBC020・SBC018とSBC031・SBC042・SBC040の隣り合う 2 ヶ所で建て替えが繰り返され、建物の位置が固定されてきているようである。SKC007は床面の 4 隅に掘立柱建物跡を建てる方形竪穴状遺構で、穴蔵的な施設と考えら



第45図 集落と条里地割り



第46図 中世の桜地区

れる。SBC031かSBC040に附属するものと考えられる。

中世6期 桜地区でのみ集落遺構が検 出されている。

A型建物のSBC017 (床面積92㎡以上)、 C型建物のSBC033・SBC034・SBC040、 D型建物のSBC020がこの時期に属して いる。

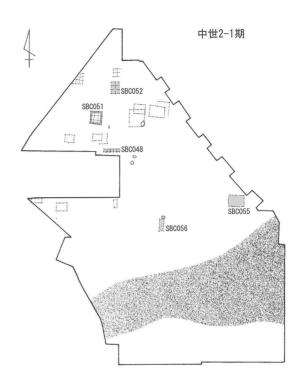
建物が検出されたのは北端部のみに限 られている。 建物は5期と同様にSBC 020・SBC017とSBC040・SBC033・SBC 044の隣り合う2箇所に限られている。 中世7期 桜地区でのみ集落遺構が検 出されている。

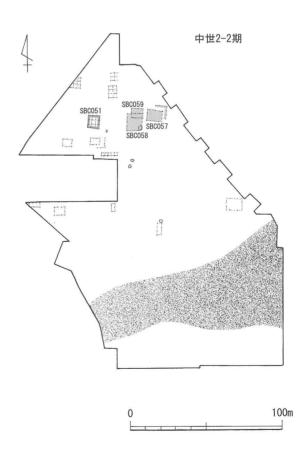
B型建物のSBC019のほか、SKC008、SKC011がこの時期に属している。SBC 017の位置を引き継いでいる。方形竪穴 状遺構のSKC008はSBC019を切っていることから、この遺構に対応する建物は調査区外の北側に存在するものと推定される。

水田と条里 古墳時代以降水田として利用されてきた宮ケ田地区と新水北地区の湿地部は中世に至るとかなり埋積したようである。検出された畦畔は宮ケ田Ⅲ地区のSDC001と新水北地区のSDC0001(室町時代)のみである。

加都盆地一帯には圃場整備以前には条 里地割りが見られ、この地割りと一致す る遺構が幾つか存在している。

桜地区では坪「サクラ」の南端に一致する溝SDC001 (11世紀後半)、坪「サクラ」の北端に一致するSAC002 (15世紀以降)、宮ケ田 I 地区では坪「山内」東端に一致するSXK002 (9世紀以降)、新水北地区では坪「下新水」北端に一致するSSC0001 (室町時代) などが検出されている。





第47図 中世の宮ヶ田地区

集落建物の方位は11世紀前半よりほぼ条里地割りと一致している。古代道路の枝路が坪「サクラ」の南端と一致することから条里地割りの施行が8世紀前半に遡る可能性があるものの、広範囲に影響を及ぼすのは11世紀以降である。

3. 小結

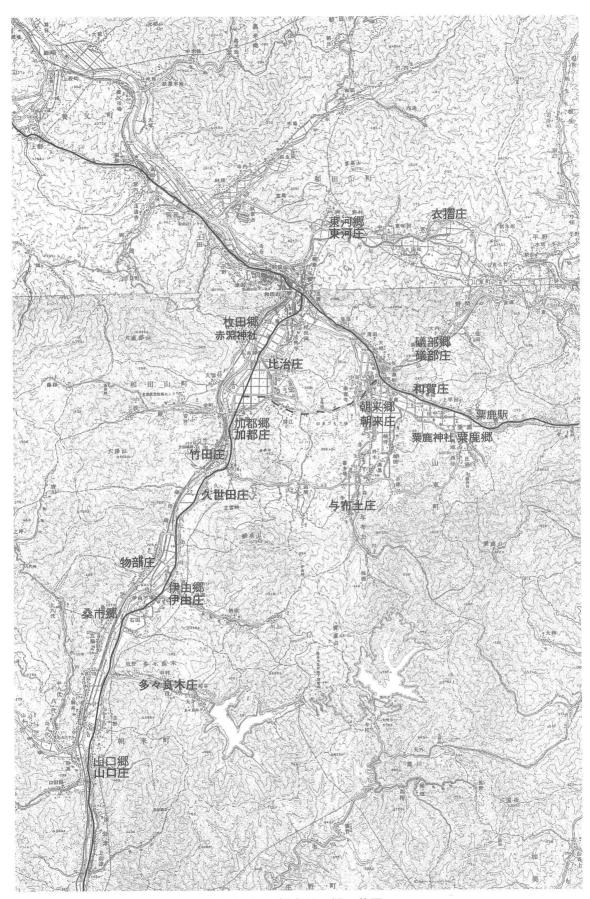
中世1期(11世紀前半)の集落は加都遺跡中最大のSBC007(床面積163㎡)を含めて大小様々な規模の建物が建てられている。SBC007はこの時期の建物跡のなかでは特出する規模であり、灰釉陶器を多数保有していることも注目される。このような様相は「富豪層」と呼ばれるような上級階層により新たな開発拠点が設けられ開発が進められたことを示している。このような開発者の姿として但馬国朝来郡朝来郷に居住する蔭孫賀茂貞行のような存在(彼は天慶の乱において山陽道方面より敗走してきた藤原文元、文用兄弟を兵数百により殺害している。)が参考になるように思われる。(『本朝世紀』天慶4年(941)9月22日)

中世2期(11世紀後半~12世紀前半)には宮ケ田地区にも集落がみられ、広範囲に開発が進んでいる。 1期において開発を進めた西南部の建物群は2期には継続せず、桜地区・宮ケ田地区ともに小さいB型建物を主要建物とするようになっている。

中世3期(12世紀後半)には宮ケ田地区の集落は廃絶し、桜地区では2期と同様な状態が続いている。中世5~7期(13世紀以降)には桜地区の北端部の坪「杉ノ木」の部分に限られ、建物の位置も限定されるようになっている。主要建物には再びA型建物が用いられているとともに、方形竪穴状遺構の存在が特徴的である。

中世においてこの周辺は「賀都庄」あるいは「池寺庄」と呼ばれていた。中世3期にあたる安元2年 (1176) に八条院領のうち歓喜光院領「但馬国池寺」として初出している(『八条院領目録』)。その後、承久の変の結果、後高倉院守貞親王(『後鳥羽院領没収目録』)の手に渡り、以後、安嘉門院(守貞親王二女)・亀山上皇へと伝領され、正安2年 (1300) に南禅寺へ施入されている。亀山上皇領当時の弘安8年 (1285) の年記をもつ『但馬国大田文』では「賀都庄」とみえ、面積141町に及ぶ郡内最大の荘園であったことが分かる。この荘園はこの時期までに下地中分が行われており、上庄68町(領家)、下庄73町(地頭安坂薩摩左衛門尉祐広)に分割されている。「池寺庄」の名称は荘園領主側の文書で一貫して使われた名称で、「池寺」の字名は宮ケ田地区の北東約1kmの法興寺村内の田地に残っている。『但馬国大田文』に見える「賀都庄」は古代の賀都郷の名称を継承するものである。荘園としては当初「池寺庄」として成立し、荘域が大きく拡大することにより旧賀都郷のかなりの部分をも包摂するに至ったことから、在地では「賀都庄」と呼称されることとなったと考えられる。法興寺村の字「池寺」付近が荘園領主側の本拠(上庄)であったとするならば、今回の調査地は地頭側の「下庄」側に位置していると考えたい。

ここで地頭としてみえる安坂薩摩左衛門尉祐広とは工藤祐経の孫で、福島県郡山市付近を本拠とした安積祐長の子と考えられる人物で、『吾妻鏡』には建長4年(1252)~弘長元年(1261)にその存在を見ることができる。また祐広の兄弟と考えられる人物が宝珠峠を挟んで東側に位置する朝来庄の地頭として安坂薩摩八郎左衛門尉祐氏、同余田の地頭として安坂薩摩六郎入道専生が見られる。朝来庄は64町、同余田10町であり、賀都庄と合わせて安積薩摩氏が南但馬において非常に大きな領地を保有していたことが分かる。ただし『工藤二階堂系図』によると祐広と祐氏は信濃国埴科郡の坂木(長野県埴科郡坂城町)に本拠を置いた可能性が高く、建武2年(1335)にまで薩摩氏のその地での活動を知ることができ



第48図 朝来郡の郷と荘園

る(市河文書)ことから、本人が直接下向したわけではなく代官などが派遣されたものと考えられる。ここで注目されるのが方形竪穴状遺構の存在で、関東・奥州での検出事例が多くみられることである(飯村 1994)。安積氏が関東の御家人で、父祐長の所領は福島県福島市付近に所在し、方形竪穴状遺構が東国に由来するものとすれば、 $5\sim7$ 期の集落が賀都下庄の地頭の支配拠点のひとつであったと考えることができる。

その後、領家方については文亀元年(1501)の『南禅寺寺領目録』において守護押領が記される頃までは一応維持されていたようであるが、地頭方の状況については記すものが存在しないためよくわからない。桜地区で集落が消滅する14世紀後半頃には退転したものと思われる。

参考文献 (各章共通)

赤羽一郎・中野晴久 1995「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』

足立 裕・生田 隆 2002「古代但馬国朝来郡衙跡と古代山陰道―通過地の地名についての歴史地理的考察(下)―」『歴史と神戸』 第41巻第4号 神戸史学会

荒木幸治 2001 「古墳時代初頭における粘土採掘坑とそれに伴う具体的活動―兵庫県朝来郡和田山町筒江浦石遺跡の調査―」『兵庫県 埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

飯田充晴 1992「道路築造方法について」『古代交通研究』第2号 古代交通研究会

飯村 均 1994「中世の「宿」「市」「津」ー陸奥南部における中世前期の方形竪穴建物ー」『中世都市研究』第3号 中世都市研究同 人会

池邊 彌 1981『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館

近江俊秀 2006『古代国家と道路』青木書店

岡山県古代吉備文化センター・大原町教育委員会 2004『中町B遺跡・今岡中山遺跡現地説明会資料』

尾野善裕 1995「東濃窯灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』 96号

岸本一宏 2003「茶すり山古墳とその周辺」『但馬の王墓 茶すり山古墳 調査概報』兵庫県教育委員会

岸本一宏·甲斐昭光 1999`「兵庫·加都遺跡」『木簡研究』第21号 木簡学会

木下 良 1989「山陰道旧駅路について―但馬国を中心に―」『但馬史研究』第12号 但馬史研究会

黒板勝美編 1985『改訂増補国史大系 延喜式 後篇』吉川弘文館

佐賀県教育委員会 1994『吉野ヶ里』

潮崎 誠 2001「経塚・古墓からみた手づくね系土師器皿の出現様相」『北近畿の考古学』 両丹考古学研究会・但馬考古学研究会

鋤柄俊夫 1995「瓦質土器 (各地の瓦質土器)|『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会

高橋美久二 1993「古代の山陰道」『歴史の道調査報告第3集 山陰道』兵庫県教育委員会

高橋美久二 1994 「古代の美作道」 『歴史の道調査報告第3集 美作道』 兵庫県教育委員会

高橋美久二 2000 「古代道路研究の現状と課題」 『歴史地理学』 第42巻第3号

高野陽子 2003「北近畿における弥生後期から古墳時代前期の土器様式」『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』(財) 大阪文化財センター

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群 I 』平安学園考古学クラブ

田辺昭三 1981『須恵器大成』平凡社

谷本 進 1992「但馬地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年―山陰・山陽編―』木耳社

谷本 進 2000「但馬における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』 22-庄内式併行期の土器生産とその動き-「丹波・丹後・但馬を中心とした庄内式併行期の土器の移動」 庄内式土器研究会

田畑 基 1998『法興寺跡』和田山町教育委員会

田畑 基 2004「考古学から見た和田山」『和田山町史』上巻

都出比呂志 1989「古墳時代集落と階層分解」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店

奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録 近畿古代篇』

奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始篇』

橋本勝行 2002「京都府北部地域の住まいと煮炊具」『第10回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集』京都府埋蔵文化財研究会

早川 泉 1991「古代道路遺構に残された圧痕」『東京考古』第9号 東京考古談話会

櫃本誠一・瀬戸谷晧 1982『日本の古代遺跡2 兵庫北部』

平川 南 2001「兵庫県氷上町市辺遺跡出土木簡」『平成11年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

平川 南 2003a「郡符木簡」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館

平川 南 2003b「郡家関連施設と木簡ー兵庫県氷上町市辺遺跡」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館

広瀬和雄 1988「近畿地方における土器製塩 一大阪湾周辺を中心として一」『考古学ジャーナル』 $N\!\!_{\Omega}$ 298 ニュー・サイエンス社

兵庫県教育委員会 1982『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』

兵庫県教育委員会 1989『小犬丸遺跡Ⅱ』

兵庫県教育委員会社会教育·文化財課 1985『筒江遺跡群I』

兵庫県教育委員会 2002『シンポジウム古代但馬の王墓をめぐって 発表要旨』

兵庫県教育委員会 2004『兵庫県遺跡地図』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998『神出窯跡群』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000『平成11年度 年報』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002『梅田東古墳群』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2004『兵庫津遺跡Ⅱ』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2005『加都遺跡 I』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2006『平成16年度 年報』

別府洋二 1998「兵庫·加都遺跡」『木簡研究』第20号 木簡学会

三重県埋蔵文化財センター 2000『六大A遺跡発掘調査報告 (木製品編)』

宮本長二郎 1996「古墳時代の竪穴住居」『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版

森田勉・横田賢二郎 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』第4集 九州歴史資料館

森田稔 1995「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会

吉識雅仁・甲斐昭光 1998「兵庫県和田山町加都遺跡の道路遺構」『古代交通研究』第8号 古代交通研究会

吉本昌弘 2000「古代駅伝路における道代の幅員について」『古代交通研究』第9号 古代交通研究会

和田山土地改良区 1974『土にいどむ』

付表 1 遺構名対照表

地	区名	遺	4 名
報告書	調査時	報告書	調査時
宮ヶ田Ⅲ	宮ヶ田D	SHY001	SH154
дγшш	宮ヶ田D	SBK002	SB441
	宮ヶ田D	SBK002	SB247
		SBK003	SB248
	宮ヶ田D	3BN004	
	宮ヶ田C	SHK029	SH01
	= . = 0	01.114000	SH1050
	宮ヶ田C	SHK030	SH1151
	宮ヶ田B	SHK031	SH06
	宮ヶ田C		SH1177
	宮ヶ田B	SHK032	SH5
	宮ヶ田C		SH1179
	宮ヶ田C.D	SHK033	SH845
	宮ヶ田D	SHK034	SH840
	宮ヶ田C.D	SHK035	SH640
	宮ヶ田C	SHK036	SH1051
	宮ヶ田D	SHK037	SH830(古)
	宮ヶ田D	SHK038	SH830
	宮ヶ田D.D2	SHK039	SH895
	宮ヶ田D	SHK040	SH860
	宮ヶ田D	SHK041	SH894
	宮ヶ田D	SHK042	SH851
	宮ヶ田D	SHK042.44	SH851,852
	宮ヶ田D	SHK043	SH907
	宮ヶ田D	SHK044	SH852
	宮ヶ田D	SHK045	SH727
		SHK045	SH720
	宮ヶ田D		
	宮ヶ田D	SHK047	SH721
	宮ヶ田D	SHK048	SH620
	宮ヶ田D	SHK049	SH530
	宮ヶ田C.D	SHK050	SH517
	宮ヶ田C.D	SHK051	SH442
	<u>宮ヶ田C.D</u>	SHK052	SH443
	宮ヶ田D	SHK053	SH850
	宮ヶ田D.D2	SHK054	SH716
	宮ヶ田D.D2	SHK055	SH715
	宮ヶ田D	SHK056	SH777
	宮ヶ田D	SHK057	SH561
	宮ヶ田D	SHK057.58	SH560,561
	宮ヶ田D	SHK058	SH560
	宮ヶ田D	SHK059	SH535
	宮ヶ田D	SHK060	SH410
	宮ヶ田C.D	SHK061	SH353
	宮ヶ田C.D	SHK061.62	SH353,354
	宮ヶ田C.D	SHK062	SH354
	宮ヶ田C	SHK063	SH1150
	宮ヶ田C	SHK064	SH1176
	宮ヶ田C	SHK065	SH1175
	宮ヶ田D	SHK066	SH714
	宮ヶ田D	SHK067	SH374
		SHK067 SHK068	SH350
	宮ヶ田C.D		
	宮ヶ田C.D	SHK069	SH320
	宮ヶ田C	SHK070	SH1178
	宮ヶ田D.D2	SHK071	SH112
	宮ヶ田D	SHK072	SH238
		SHK073	SH240
	宮ヶ田D		
	宮ヶ田D 宮ヶ田D	SHK074	SH051
			SH051 SH181
	宮ヶ田D	SHK074	
	宮ヶ田D 宮ヶ田D	SHK074 SHK075	SH181
	宮ヶ田D 宮ヶ田D 宮ヶ田D	SHK074 SHK075 SHK076	SH181 SH200
	宮ヶ田D 宮ヶ田D 宮ヶ田D 宮ヶ田C	SHK074 SHK075 SHK076 SHK077	SH181 SH200 SH1045

地	区名	遺	- 名
報告書	調査時	報告書	調査時
宮ヶ田川	宮ヶ田C	SHK081	SH1049
	宮ヶ田C	SHK082	SH1040
,	宮ヶ田D.D2	SHK083	SH178
	宮ヶ田D	SHK084	SH153
	宮ヶ田C.D	SHK085	SH151
	宮ヶ田D	SKK012	SK848
	宮ヶ田D	SKK013	SK616
	宮ヶ田D	SKK014	SK300
	宮ヶ田C	SKK015	SK1181
	宮ヶ田D	SKK016	SK289
	宮ヶ田D	SPK011	SP642
	宮ヶ田C	SPK012	SP1147
	宮ヶ田D	SPK013	SP418
	宮ヶ田D	SPK014	SP692
	宮ヶ田D	SPK015	SP272
	宮ヶ田D	SPK016	SP256
	宮ヶ田D	SPK017	SP236
	宮ヶ田C.D	055004	SF292
	宮ヶ田D.D2	SFR001	SF452
	□ . □ 0 D	SFR001	CDaga
	宮ヶ田C.D	西側溝	SD290
	□ . □ o p	SFR001	CD004
	宮ヶ田C.D	東側溝	SD291
	□ . □□ D0	SFR001	CDago
	宮ヶ田D.D2	西側溝	SD020
	₩ MD DO	SFR001	SD027
	宮ヶ田D.D2	東側溝	SD027
	宮ヶ田D	SBC055	SB849
	宮ヶ田D	SBC056	SB351
	宮ヶ田D	SBC057	SB451.450
	宮ヶ田D	SBC058	SB1010
	宮ヶ田C	SBC059	
	宮ヶ田D	SAC004	
	宮ヶ田D	SDC002	SD015
	宮ヶ田D	SKC016	SK383
	宮ヶ田C	SKC017	SK1036
	宮ヶ田C	SKC018	SK1035
	宮ヶ田D	SKC019	SK109
	宮ヶ田D	SKC020	SK009
	宮ヶ田D	SPC029	SP500
	宮ヶ田D	SPC030	SP418
	宮ヶ田C	SPC031	SP1038
	宮ヶ田C	SSK001	大畦畔
	宮ヶ田C	SSK002	
	宮ヶ田C	SSK003	
	宮ヶ田C	SSK004	
	宮ヶ田C	SSR001	
	宮ヶ田C	SSR002	
	宮ヶ田C	SSC001	

地	区名	遺	構 名
報告書	調査時	報告書	調査時
新水北	新水北B	SRY4001	SR4001
	新水北B	SRK3001	SR3001
	新水北B	SHK2001	SX2001
	新水北B	SDK2013	SD2013
	新水北B	SRK2001	SR2001
	\$r_1,1,5	SZK2001-	11.19
	新水北B	SRK2001	井堰
	新水北B	SRK2002	SR2002
	新水北B	SRK2003	SR2003
	新水北B	SRK2006	SR2006
			II-C-a.b.c.
			II-D-d、
	新水北B	SSK1001	III-C-d.c.
			IV-B-c畦畔、
			第1面杭列
	新水北B	SSK1001-	II-C-a畦畔
,	材が入れる	SWK1009	II-U-a哐畔
	新水北B	SS1001-	II-C-a畦畔
	材が入れし	SWK1010	II-U-arer
	新水北B	SSK1001-	II-C-c畦畔
	利が入れし	SWK1011	II -O-CHEM+
i	新水北B	SSK1001-	IV-B-c畦畔
		SWK1012	IV -D-CHEHT
	新水北B	SSK1002	II-B-d.c畦畔
	新水北B	SSK1002-	II-B-d.c畦畔
	**************************************	SWK1001	IT -D-G.CHEHT
	新水北B	SSK1002-	IV-A-b畦畔
		SWK1006	
	新水北B	SSK1003	II-C-b.d、
	#F-14-11-D	00111	II-D-c.d畦畔
	新水北B	SSK1004	V-B-b畦畔
	新水北B	SSK1006	II-D-d畦畔
	新水北B	SSK1007	II-D-d畦畔
	新水北B	SSK1008	II-D-c畦畔
	新水北B	SSK1010-	II-C-a.b
		SWK1009	II-D-d.c畦畔
	新水北B	SSK1010-	III-B-c畦畔
	女につたって	SWK1014	N/ D m±m/r
	新水北B	SSK1012	IV-B-b畦畔
	新水北B	SSK1012-	IV-B-b畦畔
		SWK1013 SSK1014-	
	新水北B	SWK1014-	IV-B-b畦畔
		SWK1017 SSK1016-	
	新水北B	SWK1016-	II -A-a.b畦畔
	新水北B	SSK1019	III-B-c~ IV-B-D畦畔
	新水北B	SXK1003	SX1003

付表 2

縪	₩	峙	4	σ	+	哭

遺物	W E	山十海構	種 類	器 種	ì	去 量	ì	色	調	残る		—— 况	参	照先	è
番号	地 区	出土遺構	種類	一番 俚	口径	器高	底径	内 面	外 面	12.	1 1/1 /		本文頁	挿図	写真
701	新水北	I a層下半~Ⅱ層	縄文土器	NTT A I		3.1		10YR6/3	10YR7/3	破片			67	第21図	79

弥生時代の土器

遺物	時代の土器				ž	去 量		色	調	# * 4 12	参	照先	Ē
番号	地 区	出土遺構	種類	器種	口径	器高	底径	内 面	外 面	残存状況	本文頁	図版	写真
702	宮ヶ田川	SHY001	弥生土器	甕	17.8	8.8		10YR8/2	10YR8/3	口縁1/4	67	87	79
703	宮ヶ田川	SHY001	弥生土器	甕	27.3	3.9		2.5YR7/8	2.5YR7/6	口縁1/6	67	87	79
704	宮ヶ田川	SHY001	弥生土器	壺		6.0		10YR8/2	10YR8/2	破片	67	87	79
705	宮ヶ田川	SHK050	弥生土器	壺		3.6		10YR8/4	10YR3/1	破片	67	87	79
706	宮ヶ田川	包含層(水田部)	弥生土器	長頸壺	12.0	17.0		7.5YR6/4	7.5YR6/4	口縁約1/2	67	87	79
707	宮ヶ田川	包含層 (水田部)	弥生土器	壺		6.9		7.5YR6/4	7.5YR6/4	体部約 1/2	67	87	79
708	宮ヶ田川	包含層(水田部)	弥生土器	有孔壺	9.2	12.7	2.7	10Y4/1	10Y5/3	底部完形	67	87	79
709	宮ヶ田III	包含層 (水田部)	弥生土器	広口壺	15.8	11.2	_	10YR6/2	10YR6/3	口縁~体部1/3	67	87	79
710	宮ヶ田川	包含層(水田部)	弥生土器	壺		7.2		10YR7/4	10YR8/4	破片	68	87	79
711	宮ヶ田川	包含層 (水田部)	弥生土器	甕	17.6	5.9		10YR6/2	10YR4/2	口縁1/3	68	87	79
712	宮ヶ田Ⅲ	包含層 (水田部)	弥生土器	甕	17.8	7.3		7.5YR7/4	5YR7/4	口縁 1 /4	68	87	79
713	宮ヶ田Ⅲ	包含層 (水田部)	弥生土器	器台	22.2	3.7		10YR7/3	10YR8/3	口縁近く1/7	68	87	79
714	宮ヶ田III	包含層 (水田部)	弥生土器	蓋	11.3	5.1		10YR7/2	10YR7/3	口縁 1 /7強	68	87	79
715	宮ヶ田Ⅲ	包含層(水田部)	弥生土器	把手	10.8	2.8	1.6	10YR6/3	10YR6/3	わずかに欠損	68	87	79
716	宮ヶ田III	包含層(水田部)	弥生土器	脚台		6.8	12.7	7.5YR6/3	10YR7/3	口縁わずか	68	87	80
717	宮ヶ田川	包含層(水田部)	弥生土器	脚部		7.3	5.3	5YR7/8	5YR7/6	底部完形	68	87	80
718	宮ヶ田III	包含層(水田部)	弥生土器	甕		7.7	4.1	10YR7/4	10YR6/3	底部完形体部 1/	68	87	80
719	宮ヶ田川	包含層(水田部)	弥生土器	有孔底部		3.0	4.3	10YR5/2	10YR6/3/2	底部完形	68	87	80
720	宮ヶ田川	包含層	弥生土器	長頸壺	17.1	10.7		7.5YR8/2	7.5YR8/3	口縁1/3	68	87	80
721	宮ヶ田川	包含層	弥生土器	器台	17.9	2.2		7.5YR8/6	7.5YR8/8	口縁1/8	68	87	80
722	宮ヶ田III	包含層	弥生土器	脚部		11.0	20.5	10YR8/3	7.5YR8/3	底部1/2	68	87	80
723	新水北	SRY4001	弥生土器	甕		13.9		10YR7/3	10YR6/2	小片	69	88	81
724	新水北	SRY4001	弥生土器	壺		6.0		10YR8/2	10YR8/2	小片	69	88	81
725	新水北	SRY4001	弥生土器	甕	18.4	20.9	6.6	10YR6/2	10YR7/3	口縁1/9 底部1/3	69	88	81
726	新水北	SRY4001	弥生土器	壺	26.7	11.7		10YR8/3	10YR7/2	口縁1/2	69	88	80
727	新水北	SRY4001	弥生土器	甕	15.7	13.1		2.5YR6/6	2.5YR7/6	口縁1/5弱	69	88	81
728	新水北	SRY4001	弥生土器	甕		9.4	10.9	10YR7/2	10YR7/3	底部ほぼ完形	69	88	81
729	新水北	SRY4001	弥生土器	柄	10.0	4.6	2.6	5YR6/4	5YR6/4	?	69	88	81
730	新水北	SRK3001	弥生土器	無頸壺	7.8	4.1		10YR6/2	10YR6/2	口縁1/3強	69	88	81
731	新水北	SRK3001	弥生土器	壺		5.0		10YR6/3	10YR6/3	小片	69	88	81
732	新水北	SRK2003	弥生土器	鉢	14.0	7.5	5.7	10YR7/3	10YR7/3	口縁1/2	69	88	80
733	新水北	SRK2003	弥生土器	直口壺	10.8	7.6		2.5Y7/2	2.5Y7/2	口縁約1/2	70	88	81
734	新水北	SRK2003	弥生土器	甕or壺		13.1	5.0	2.5Y7/2	2.5Y6/2	底部約1/6	70	88	81
735	新水北	IVa相当層か	弥生土器	甕		6.0	9.7	10YR7/3	10YR7/3	底部3/4	70	88	81
736	新水北	li a層以下	弥生土器	無頸壺	8.0	5.6		10YR7/2	10YR7/4	口縁1/6	70	88	81
737	新水北	lla層	弥生土器	甕		2.9		10YR8/3	2.5Y8/2		70	88	81
738	新水北	II a層	弥生土器	甕	14.0	7.0		10YR7/3	5YR5/3	口縁1/3弱	70	88	81
739	新水北	I a層	弥生土器	無頸壺	11.2	10.5		2.5Y6/3	10YR7/2	口縁1/6強	70	88	81

弥生時代の土器

遺物			77. WT	00 725	ž	去 量	ł	色	調	残 存 状 況	参	照先	Ē
番号	地 区	出土遺構	種類	器種	口径	器高	底径	内 面	外 面	72 17 17 70	本文頁	図版	写真
740	宮ヶ田川	SHK029	須恵器	高杯		4.9	8.6	10Y4/1	10Y4/1	底部1/6強	73	89	82
741	宮ヶ田川	SHK029	土師器	壺Ac		7.6		7.5YR8/4	10YR8/4	体~底部完存	73	89	82
742	宮ヶ田川	SHK029	土師器	高杯Db	14.6	11.0	6.9	5YR6/6	5YR6/6	口縁5/6 脚ほぼ完存 裾端部ほぼ欠損	73	89	82
743	宮ヶ田III	SHK029	土師器	甕Ab	17.9	12.4		10YR7/3	7.5YR7/4	口縁~体部1/3	73	89	
744	宮ヶ田III	SHK029	土師器	甕Bb	18.5	5.9		10YR8/4	10YR7/4	口縁8/9	73	89	82
745	宮ヶ田Ⅲ	SHK029	土師器	甕Ab	17.4	29.0	27.0	10YR4/1	7.5YR7/4	口縁5/8体部3/5	73	89	82
746	宮ヶ田Ⅲ	SHK030	土師器	高杯Db	14.1	5.8		7.5YR8/3	7.5YR8/4	口縁1/3欠損	73	89	82
747	宮ヶ田川	SHK030	土師器	高杯		6.4	9.4	7.5YR8/4	7.5YR8/6	底部ほぽ完形	73	89	82
748	宮ヶ田川	SHK030	土師器	篦		5.0	10.7	7.5YR8/6	5YR7/6	底部1/2	73	89	82
749	宮ヶ田川	SHK031A	須恵器	高杯Db	15.4	10.2	9.2	2.5Y6/8	2.5Y5/1/8	口縁1/2残 底部1/4欠損	73	89	83
750	宮ヶ田川	SHK031A	土師器	椀B	13.9	5.8	6.3	7.5YR7/6	7.5YR7/6	口縁1/3欠損	73	89	83
751	宮ヶ田川	SHK031B	須恵器	高杯		6.2	8.2	2.5GY8/1	N7/0	底部1/4欠損	73	89	82
752	宮ヶ田川	SHK031B	土師器	甕Ab	19.3	5.5		2.5YR7/6	2.5YR7/8	口縁1/3強	73	89	82
753	宮ヶ田Ⅲ	SHK031B	土師器	甕Ab	16.5	6.4		7.5YR8/6	5YR7/6	口縁1/5	73	89	
754	宮ヶ田Ⅲ	SHK031B	土師器	高杯		5.5	7.8	5YR7/8	5YR6/8	底部1/3	73	89	82
755	宮ヶ田川	SHK031B	土師器	高杯C	16.8	6.8		5YR6/6	5YR7/6	口縁3/4弱	73	89	
756	宮ヶ田川	SHK031B	土師器	高杯Db	15.9	5.3		5YR5/6	5YR5/6	杯身のみほぼ完形	73	89	<u> </u>
757	宮ヶ田Ⅲ	SHK031B	土師器	椀A	14.7	6.0		5YR7/6	5YR7/6	口縁1/10 体部1/5	73	89	
758	宮ヶ田III	SHK031	須恵器	杯蓋		4.9	12.6	10YR6/1	N6/0	口縁1/4	74	89	82
759	宮ヶ田川	SHK031	須恵器	杯身	11.0	4.9		N5/0	N6/0	口縁1/5、体部1/2	74	89	82
760	宮ヶ田III	SHK031	須恵器	無蓋高杯	13.7	3.6		N7/0	N6/0	口縁1/8	74	89	82

遺物	Uh 57	11. 1 20. 140	T	T		法 :	 量	色	調	T	参	. 照	先
番号	地区	出土遺構	種類	器種	口径	器高	底径	内面	外面	一 残 存 状 況	本文頁	図版	
761	宮ヶ田川	SHK031	土師器	高杯Ab	12.2	7.8		7.5YR8/4	7.5YR8/6	口縁1/6	74	89	82
762		SHK031	土師器	高杯Db	14.9	4.6		7.5YR5/3	7.5YR5/4	口縁1/9弱	74	89	82
763		SHK031	土師器	高杯		5.8	10.4	7.5YR8/6	7.5YR8/6	底部1/2	74	89	82
764		SHK031	土師器	高杯		5.0	8.9	10YR8/3	7.5YR8/4	口縁1/6欠損	74	89	83
765		SHK032	土師器	甕Bb	17.7	5.5		10YR7/3	10YR7/4	口縁1/7	74	90	83
766		SHK032	土師器	高杯Db	14.2	7.3		5YR7/8	5YR7/8	口縁1/3欠損	74	90	83
767		SHK033	土師器	壺Ab	9.8	15.2		10YR7/3	10YR7/3	口縁1/5、体部1/2欠損	74	90	83
768		SHK033	土師器	高杯Da	15.7	6.5		10YR7/3	10YR8/3	口縁1/2	74	90	83
769		SHK033	土師器	高杯Ac	18.6	4.6		7.5YR7/4	7.5YR6/3	口縁1/5強	74	90	83
770		SHK033	土師器	高杯Ab	19.9	8.8		10YR8/3	2.5Y7/3	口縁一部欠 ほぼ完存	74	90	83
771	宮ヶ田川	SHK033	土師器	甑	27.8	19.5	ļ	10YR6/3	2.5YR8/4	口縁1/2	74	90	83
772		SHK034	土師器	壺Ab		12.2	13.6	7.5YR7/6	5YR6/4	体部約1/4欠損	74	90	84
773		SHK034	上師器	甕Aa	14.7	19.2		10YR/7/4	10YR6/6	口縁~体部 1/6	74	90	83
775		SHK034	土師器	高杯Db	15.2	4.7		7.5YR7/4	7.5YR7/6	口縁1/3	74	90	83
776		SHK034 SHK035	土師器	不明	<u> </u>	5.4		5YR7/1	5YR7/4	破片	74	90	
777	宮ヶ田川	SHK035	土師器	壺Ab	9.1	13.9	丸底	7.5YR7/4	7.5YR7/4	口縁1/6欠損	75	90	84
778		SHK035	土師器	甕Bb	45.0	4.7		10YR7/4	10YR7/3	破片	75	90	
779	宮ヶ田川	SHK035	土師器	甕Aa	15.6	7.9		2.5Y8/2	10YR8/3	口縁ほぼ完形	75	90	84
780	宮ヶ田川	SHK035	土師器	甕Bb 高杯Ac	17.1	4.8		2.5Y7/3	2.5Y7/3		75	90	84
781	宮ヶ田III	SHK035	土師器	高杯Db	20.1	10.0	-	10YR8/3	7.5YR8/6	口縁約1/2	75	90	84
782	宮ヶ田川	SHK035	土師器	高杯	14.5	5.4	0.0	10YR7/4	5YR7/6	口縁約1/2	75	90	-
783	宮ヶ田川	SHK036	土師器	壺Ac	8.8	6.3	9.3	5YR7/4	2.5YR8/2	底部2/3	75	90	84
784	宮ヶ田川	SHK036	土師器	高杯Db	13.6	4.5		2.5Y7/3	2.5Y6/2		75	91	84
785	宮ヶ田川	SHK036	土師器	甑	26.7	20.4		5YR7/6	7.5YR7/6	口縁1/2	75	91	84
786	宮ヶ田川	SHK037	土師器	高杯Db	15.2	5.5		7.5YR7/6 7.5YR8/4	10YR7/3 7.5YR8/4	口縁約1/2	75	91	84
					10.2	0.0		7.31110/4	7.3100/4	口縁1/4体部1/3	75	91	84
787	宮ヶ田川	SHK038	須恵器	無蓋高杯	18.1	12.0	10.8	N6/0	N6/0	丘線1/4 本部1/3 底部1/9	75	91	84
788	宮ヶ田III	SHK038	土師器	甕Aa	15.8	14.0		2.5YR4/1	2.5YR8/3	口縁1/3体部2/3	75	91	84
789	宮ヶ田川	SHK038	土師器	製塩土器	3.9	4.9		10YR8/3	2.5Y8/3	口縁1/6強	75	91	84
790	宮ヶ田III	SHK039	土師器	壺Aa	15.5	17.3		10YR7/3	10YR7/4	口縁1/6	75	91	85
791	宮ヶ田III	CLIKOOO	LATER							底部わずか	-70	-	100
791	西ヶ田川	SHK039	土師器	高杯		8.2	12.6	7.5YR6/4	10YR6/4	体部ほぼ完形	75	91	
792	宮ヶ田Ⅲ	SHK039	土師器	高杯		4.4	13.4	5YR7/6	5YR7/6	底部 (脚) 約1/6	75	91	\vdash
793	宮ヶ田Ⅲ	SHK040	須恵器	杯蓋	17.7	3.0		N7/0	7.5Y6/1	口縁1/12	75	91	85
794	宮ヶ田III	SHK040	土師器	甕Ba	17.8	4.3		2.5Y8/3	10YR7/2		75	91	85
795	宮ヶ田III	SHK041	土師器	高杯Db	13.9	11.3	7.3	5YR7/6	5YR7/6	口縁約3/4	76	91	85
796	宮ヶ田川	SHK041	土師器	高杯		5.4	8.0	7.5YR7/4	7.5YR7/4	脚部完存	76	91	85
797	宮ヶ田Ⅲ	SHK041	土師器	椀B	12.6	5.6	4.5	2.5Y8/3	5Y4/1	□縁1/4	76	91	85
798	宮ヶ田川	SHK041	土師器	製塩土器	3.1	3.5		5Y7/1	5Y7/1	口縁約1/4	76	91	85
799	宮ヶ田川	SHK042	須恵器	杯蓋	12.9	3.6		N6/0	N6/0	口縁1/19	76	92	85
800	宮ヶ田Ⅲ	SHK042.044	須恵器	杯蓋	13.9	3.8		N6/0	N6/0	口縁1/7	76	92	85
801	宮ヶ田川	SHK042.044	須恵器	杯蓋	12.8	3.5		N7/0	N6/0	口縁1/8	76	92	85
802	宮ヶ田Ⅲ	SHK042	須恵器	杯身	13.0	4.4	7.2	N8/0	5Y7/1	口縁1/6 底部1/2	76	92	85
803 804	宮ヶ田川	SHK042.044	須恵器	杯身	11.9	4.8	5.3	N7/0	5Y7/1	口縁わずか 体部1/8	76	92	85
	宮ヶ田川	SHK042	須恵器	杯身	13.0	3.0		N6/0	N6/0	口縁1/14	76	92	85
805 806	宮ヶ田川	SHK042	須恵器	壺蓋	11.0	3.3		N6/0	N6/0	口縁1/3 体部1/2	76	92	85
807	宮ヶ田川	SHK042	土師器	壺Ba	16.5	5.1		2.5Y6/2	2.5Y6/2	口縁1/13	76	92	85
808	宮ヶ田川	SHK044 SHK044	須恵器	杯身	11.5	4.1		N7/0	N6/0	口縁約1/32	76	92	85
809	宮ヶ田川	SHK044	須恵器	壺	6.8	9.1		N7/0		口縁~底部ほぼ完形	76	92	85
810	宮ヶ田川	SHK044	土師器	甕Bb 壺Ac	14.9	15.7	-	2.5YR8/2	2.5YR8/3	口縁~体部1/3	76	92	85
811	宮ヶ田川	SHK044	土師器	壺Ba	7.0 15.6	6.0		10YR6/3	7.5YR6/4	口縁わずか	76	92	$\overline{}$
812		SHK044	土師器	亞Ba 高杯Ab		4.7		10YR7/3		口縁約1/12	76	92	
813		SHK044	上師器	高杯Ab	23.1 16.5	6.1		5YR7/4	5YR7/4	口縁1/15	76	92	85
814		SHK044	土師器	高杯Ab	16.8	5.8		10YR7/3	7.5YR7/4	口縁1/6強	76	92	85
815		SHK044	土師器	高杯	10.0	6.9	10.4	10YR7/3		口縁1/6	76	92	85
816		SHK046	須恵器	杯蓋	16.0	4.5	10.4	10YR7/3 N7/0		裾部3/8	76	92	85
817		SHK046	須恵器	杯蓋	14.9	5.0		5Y7/1		口縁約1/3	76	92	86
818		SHK046	須恵器	杯蓋	13.7	4.4	-	7.5Y6/1		口縁1/5	76 76	92	86
819		SHK046	須恵器	杯蓋	14.5	4.6		N8/0		口縁約1/2	76	92	86
820		SHK046	須恵器	杯蓋	14.2	3.9		N7/0		口縁1/2欠損	76 76	92	86
821		SHK046	須恵器	杯蓋	13.8	3.6		N5/0		口縁1/2尺損	76	92	86
822		SHK046	須恵器	杯身	14.2	3.3		N6/0		口縁約1/2	76	92	86
823		SHK046	須恵器	杯身		3.3	3.5	N6/0		体部1/10	76	92	86
824		SHK046	須恵器	高杯		6.0	8.7	N7/0		底部1/6脚部ほぼ完形	76	92	86
825		SHK046	須恵器	甕	25.4	22.9		N6/0		口縁1/4	77	92	86
826	宮ヶ田III	SHK048	土師器	甕Aa	18.3	22.7	25.5	2.5Y7/2		口縁約1/3	77	93	86
827	宮ヶ田III	SHK048	土師器	甕Aa	13.8	9.9		5Y5/1		口縁1/4	77	93	86
828	宮ヶ田III	SHK049	土師器	高杯Ac	15.7	12.5	10.0	7.5YR8/3		口縁1/2 底部完形	77	93	86
829	宮ヶ田Ⅲ	SHK050A	土師器	壺Ac	7.1	7.9		10YR7/3 2	+	口縁~底部1/3欠損	77	93	87
										/5./ ДР 1/ 0 人 1貝	.,	20	0/

-Are						. 量	· T	色	調用	□ + √ ′□	参	, 照 先	
遺物番号	地 区	出土遺構	種類	器種	口径	器高	底径	内 面	外面	残存状况:	本文頁	図版	写真
830	宮ヶ田Ⅲ	SHK050A	土師器	高杯Ba	16.3	5.4		10YR7/3	7.5YR6/4	口縁1/2強	77	93	87
831	宮ヶ田川	SHK050A	土師器	高杯Db	10.8	5.3		2.5YR8/2	2.5YR8/3	口縁1/3欠損	77	93	87
832	宮ヶ田Ⅲ	SHK050B	須恵器	有蓋高坏	10.6	10.0	8.7	2.5GY6/1	2.5GY6/1	口縁と脚1/6弱欠損	77	93	87
833	宮ヶ田Ⅲ	SHK050B	須恵器	有蓋高坏	11.8	5.4		N6/0	N6/0	口縁 1 /2 欠損		93	87
834	宮ヶ田III	SHK050B	須恵器	高杯		7.0	10.1	N6/0	N6/0 7.5Y6/1	底部〜脚部1/2弱 底〜体部ほぼ完形		93	87 87
835	宮ヶ田川	SHK050B	須恵器	はそう	177	12.1 7.5	17.5	7.5Y7/1 2.5YR8/3	2.5YR8/2	口縁1/5	77	93	87
836	宮ヶ田川	SHK050B	土師器	甕Bc 甕Bb	17.7 13.6	3.7		10YR8/3	10YR7/4/3	口縁1/3	77	93	87
837 838	宮ヶ田Ⅲ	SHK050B SHK050B	土師器	高杯Db	14.0	10.1	7.9	5YR6/6	5YR7/6	口縁1/9、底部1/2欠損	77	93	87
839	宮ヶ田川	SHK050B	土師器	高杯Db	14.2	5.8		5YR7/6	5YR6/6	口縁1/3	77	93	87
840	宮ヶ田川	SHK050B	土師器	高杯		3.7	8.1	5YR7/6	5YR6/8	底ほぼ完形	77	93	87
841	宮ヶ田川	SHK050B	土師器	製塩土器	2.9	2.6		7.5Y7/1	10YR7/4	口縁1/3	77	93	87
842	宮ヶ田III	SHK050B	土師器	甑		3.5	10.6	2.5YR8/3	2.5YR8/3	底部1/3	77	93	87
843	宮ヶ田川	SHK051	土師器	壺Ac	10.1	10.4	丸底	10YR7/4	10YR7/3	口縁1/4弱	78	94	88
844	宮ヶ田Ⅲ	SHK051	土師器	壺C		7.0	2.4	2.5Y7/2	10YR7/3	底部完存	78	94	88
845	宮ヶ田川	SHK051	土師器	甕Aa	15.1	9.7	-	10YR7/3	10YR8/4	口縁1/4	78	94	88
846	宮ヶ田川	SHK051	土師器	甕Ba	15.9	12.8		10YR7/2	10YR7/3	口縁1/6	78 78	94	88
847	宮ヶ田川	SHK051	土師器	高杯Bb	16.4	5.1		7.5YR6/4 7.5YR7/6	7.5YR7/6 10YR8/4	口縁約3/5	78	94	88
848	宮ヶ田川	SHK051	土師器	高杯Bb 高杯	16.7	4.8 5.1	11.4	2.5Y5/2	2.5Y5/1	底部約1/4	78	94	88
849	宮ヶ田川	SHK051 SHK052A	須恵器	杯身	12.3	3.3	11.4	N7/0	N7/0	口縁1/6	78	94	88
850 851	宮ヶ田Ⅲ	SHK052A SHK052A	土師器	高杯Db	13.9	8.2		5YR6/3	2.5YR6/8	底部ほぼ完形	78	94	88
852	宮ヶ田川	SHK052A	土師器	高杯		5.7	8.2	10YR8/2	10YR8/3	底部1/3	78	94	88
853	宮ヶ田Ⅲ	SHK052A	土師器	高杯		6.0	9.6	7.5YR8/6	5YR7/8	底部ほぽ完形	78	94	88
854	宮ヶ田III	SHK052B	土師器	甕Ba	13.7	7.8		7.5YR5/3	5YR5/4	口縁わずか 体部1/5	78	94	88
855	宮ヶ田川	SHK052B	土師器	高杯		5.6		5YR6/6	5YR6/7	脚部ほぽ完形	78	94	
856	宮ヶ田Ⅲ	SHK052B	土師器	高杯		2.2	7.4	5YR6/6	5YR6/6	底部ほぼ完形	78	94	88
857	宮ヶ田Ⅲ	SHK053	土師器	甕Ba	15.8	16.8		7.5YR8/3	7.5YR8/4	口縁1/5体部1/3	78 78	94	88
858	宮ヶ田Ⅲ	SHK053	土師器	甕Ab	18.7	11.9		10YR8/2 10YR7/3	10YR8/4 5YR7/8	口縁~体部1/2 体部1/3	78	94	00
859	宮ヶ田川	SHK053	土師器 須恵器	壺Ac 杯蓋	12.0	5.3 3.1		N6/1	5Y6/1	口縁1/18	78	94	88
860	宮ヶ田Ⅲ	SHK054 SHK054	土師器	甕Bb	19.7	8.2		2.5Y6/3	2.5Y6/3	口縁ほば完存	78	94	88
862	宮ヶ田川	SHK054	土師器	高杯Ba	15.1	7.4	-	5YR6/6	10YR8/2	杯身ほぼ完形	78	94	88
863	宮ヶ田川	SHK054	土師器	高杯Bb	15.1	9.2		5YR7/8	5YR6/8	杯身ほぽ完形	78	94	88
864	宮ヶ田川	SHK054	土師器	高杯Db	13.3	5.0		5YR5/6	5YR5/6	口縁1/3	78	94	88
865	宮ヶ田川	SHK055	土師器	壺Ac	9.0	5.7		5Y6/6	7.5YR6/4	口縁1/9	79	95	89
866	宮ヶ田Ⅲ	SHK055	土師器	高杯		9.6	10.8	7.5YR6/6	7.5YR6/6	底部3/4弱	79	95	89
867	宮ヶ田III	SHK056	須恵器	杯身	12.2	3.4		N8/0	N7/0	口縁1/13	79	95	89
868	宮ヶ田III	SHK056	土師器	甕Aa	19.9	6.8		7.5YR7/6	5YR7/6	口縁1/5	79 79	95 95	89 89
869	宮ヶ田川	SHK057	土師器	甕Ba	15.6	7.1		2.5Y8/2 2.5Y6/2	2.5Y8/2 10YR7/3	口縁1/9 口縁1/6弱	79	95	- 09
871	宮ヶ田川	SHK057	土師器 土師器	壺Ba 甕Ab	15.1	8.9 5.4		10YR7/3	5YR7/4	口縁約1/6	79	95	89
870	宮ヶ田Ⅲ	SHK057 SHK057	土師器	高杯Aa	19.7	4.4		10YR8/3	10YR8/3	口縁1/9	79	95	89
872	宮ヶ田川	SHK057	土師器	高杯	10.7	6.2	8.8	7.5Y7/6	7.5Y7/6	口縁1/6欠損	79	95	89
874	-	SHK057	土師器	高杯		5.3	7.9	10YR7/4	7.5YR6/6	底部約1/2	79	95	89
875		SHK057.058	須恵器	杯蓋	12.9	3.6		N5/0	N5/0	口縁1/6	79	95	89
876	宮ヶ田Ⅲ	SHK057.058	土師器	甕Ba	10.8	8.9		10YR7/3	10YR6/3	口縁1/4	79	95	89
877	宮ヶ田Ⅲ	SHK058	土師器	甕Ab	17.5	8.9		10YR7/3	10YR6/3		79	95	89
878		SHK058	土師器	高杯Db	13.4	9.8	8.9	5YR6/6	5YR6/8		79 7#8 70	95	89
879		SHK058	土師器	高杯Db	13.9	10.0	8.4	7.5YR7/6			79 79	95	89
880	+	SHK058	土師器	高杯Db	15.1	5.3	-	5YR6/8 5YR7/6			79	95	89
881		SHK058	土師器	高杯C	14.7	5.7	-	5YR7/6 5YR7/8			79	95	89
882		SHK058	土師器	- 椀A 甕Ba	12.5 17.5	6.2	-	10YR7/3			80	95	89
883		SHK059 SHK059	土師器	高杯	17.5	5.3	8.9	5YR6/6			80	95	89
884		SHK060	須恵器	杯蓋	11.9	3.5		2.5Y6/1	-		80	96	90
886	+	SHK060	土師器	壺Aa	15.0	5.5		2.5Y6/2			80	96	90
887		SHK060	土師器	高杯Bc	15.2	12.5		10YR8/3	10YR8/3	口縁1/9 脚一部欠 裾部1/2	80	96	90
888	宮ヶ田Ⅲ	SHK060	土師器	高杯Bb	15.8	6.1		10YR7/3	2.5YR6/6	体部はは完存	80	96	90
889	宮ヶ田Ⅲ	SHK060	土師器	高杯Bb	15.4	5.6		7.5YR6/4			80	96	90
	宮ヶ田III	SHK060	土師器	高杯Ac	22.7	15.9	13.8	10YR7/4			80	96	90
890	1	SHK061	土師器	甕Ba	16.3	20.9	1	7.5YR8/6			80	96	90
890 891	宮ヶ田Ⅲ		I LATER	甕Bb	15.6	22.2	+-	10YR8/3			80	96	90
891 892	宮ヶ田川	SHK061	土師器									1 00	
891 892 893	宮ヶ田川宮ヶ田川	SHK061	土師器	高杯Ab	24.3	7.2	-	2.5Y7/3	+		80	96	_
891 892 893 894	宮ヶ田 宮ヶ田 宮ヶ田	SHK061 SHK062	土師器 須恵器	高杯Ab 杯蓋	14.8	5.2		2.5Y8/2	5Y8/1	口縁1/8弱	80	96	90
891 892 893 894 895	宮ヶ田 宮ヶ田 宮ヶ田 宮ヶ田	SHK061 SHK062 SHK062	土師器 須恵器 須恵器	高杯Ab 杯蓋 杯身	14.8 10.7	5.2 4.9		2.5Y8/2 N6/0	9 5Y8/1 N5/0	口縁1/8弱 口縁~体部約1/2	+		_
891 892 893 894	宮ヶ田 宮ヶ田 宮ヶ田 宮ヶ田 宮ヶ田	SHK061 SHK062	土師器 須恵器	高杯Ab 杯蓋	14.8	5.2		2.5Y8/2	5Y8/1 N5/0 N6/0	口縁1/8弱 口縁~体部約1/2 口縁1/7 体部 1/3	80 80 80	96 96	90 90

遺物			T	1		法	量	色	調		1 4		
番号	地区	出土遺構	種類	器種	口径	器高	底径	内面	外面	残 存 状 況	本文頁	照	先 写真
899	宮ヶ田川	SHK062	須恵器	杯身	13.1	4.5	6.5	N7/0		口縁1/6	80	96	90
900	宮ヶ田川	SHK062	須恵器	杯身	12.7	4.0	6.4	N7/0			80	96	90
901	宮ヶ田川	SHK062	須恵器	杯身	11.7	3.1	7.9	N7/0	5Y6/1/		80	96	90
902		SHK062	土師器	壺Ba	12.6	5.3		10YR5/2	2.5YR8/3	3 口縁1/16	81	96	+
903		SHK062	土師器	甕Bb	18.5	5.6		7.5YR6/4	7.5YR6/3	3 口縁1/6弱	81	96	
904	宮ヶ田Ⅲ	SHK062	土師器	甕Aa	13.1	12.6		10YR5/2	10YR7/3	3 口縁5/8	81	96	90
905	宮ヶ田Ⅲ	SHK062	土師器	甕Aa	12.2	14.3		7.5YR7/3	7.5YR8/4	口縁わずかに欠損	81	96	90
906	宮ヶ田川	OLUKOO 4	/E-+-00	ļ.·				-		体部1/2	01	96	90
907	宮ヶ田川	SHK064 SHK064	須恵器	壺	13.8	4.8		10Y5/1			81	97	91
908	宮ヶ田川	SHK066	土師器 須恵器	甕Aa	18.0	9.2	ļ	10YR7/3			81	97	91
909	宮ヶ田川	SHK066	須恵器	杯蓋杯身	11.7	4.4		N6/0			81	97	91
910	宮ヶ田川	SHK066	土師器	壺C	12.6	3.6		N5/0	+		81	97	91
911	宮ヶ田川	SHK066	土師器	甕Aa	6.2 17.4	8.3	-	7.5YR6/4			81	97	91
912	宮ヶ田川	SHK066	土師器	甕Bb	18.7	5.2		7.5YR8/4	+		81	97	91
913	宮ヶ田川	SHK066	土師器	高杯Da	14.0	5.4	-	10YR7/3 5YR6/4			81	97	91
914	宮ヶ田川	SHK066	土師器	高杯Da	14.5	4.5		5YR6/6			81	97	91
915	宮ヶ田川	SHK066	土師器	高杯Db	15.3	7.3		5YR6/6	7.5YR7/4		81	97	91
916	宮ヶ田川	SHK066	土師器	甑	22.8	27.2	-	2.5Y5/1	2.5Y7/2		81	97	91
917	宮ヶ田川	SHK067	須恵器	杯身	13.8	4.7	_	N6/1/0	2.5GY6/1		81	97	91
918	宮ヶ田川	SHK067	土師器	甕Aa	15.9	8.4		10YR7/3	7.5YR6/4		81 81	97	91
919	宮ヶ田III	SHK067	土師器	甕Aa	14.7	4.4		7.5YR8/3	7.5YR7/4		81	97	91
920	宮ヶ田III	SHK068	土師器	甕Ba	14.8	9.5		7.5YR6/6	7.5YR6/6		81	97	91
921	宮ヶ田Ⅲ	SHK068	土師器	高杯Ba	15.6	5.5	-	2.5Y8/2	2.5Y8/3		82	97	91
922	宮ヶ田Ⅲ	SHK068	土師器	高杯Ba	17.6	5.8		10YR5/2	10YR7/4		82	97	91
923	宮ヶ田Ⅲ	SHK069	土師器	高杯C	14.5	5.7		7.5YR7/6	7.5YR7/6		82	98	-
924	宮ヶ田Ⅲ	SHK070	土師器	壺Ac	9.1	6.2		10YR8/3	10YR8/3		82	98	<u> </u>
925	宮ヶ田川	SHK071	土師器	甕Aa	17.3	14.6		10YR/7/4	10YR/7/4	口縁1/4弱	82	98	91
926	宮ヶ田Ⅲ	SHK071	土師器	甕Aa	15.8	11.6		10YR7/3	10YR7/3	口縁1/6	82	98	
927	宮ヶ田川	SHK071	土師器	壺Ac	7.5	6.1		2.5Y6/2	10YR6/3	口縁1/3	82	98	91
928	宮ヶ田川	SHK071	土師器	壺Ac	7.1	8.4		10YR7/3	10YR6/4	口縁わずか 体部 1/3	82	98	91
929	宮ヶ田川	SHK071	土師器	高杯Ac	19.5	5.4		2.5Y4/1	10YR7/3	口縁1/5弱	82	98	91
930	宮ヶ田川	SHK071	土師器	高杯Aa	ļ	13.3	10.7	10YR6/4	10YR6/4	底部(脚)約1/2	82	98	91
931	宮ヶ田川	SHK071	土師器	高杯	L	6.9	11.1	7.5YR6/6	7.5YR6/6	底部1/4体部ほぼ完形	82	98	
933	宮ヶ田川	SHK072 SHK072	上師器	甕Aa	13.7	29.7		2.5Y7/2	2.5Y7/2	口縁1/2 底部2/3	82	98	92
934	宮ヶ田川	SHK072	土師器	甕Ba	15.2	11.3		2.5Y5/1	10YR6/2		82	98	92
935	宮ヶ田川	SHK072	土師器	甕Bb	13.7	6.2		7.5YR6/4	7.5YR8/6		83	98	
936	宮ヶ田川	SHK072	土師器	壺Aa	12.0	18.4	丸底	10YR6/2	7.5YR6/4		83	98	92
937	宮ヶ田川	SHK072	土師器	壺Aa 壺Ac	11.3	14.4		10YR8/2	2.5Y8/3		83	98	92
938	宮ヶ田川	SHK072	土師器	壺Ac	8.3 8.5	10.2		10YR7/3	10YR8/3	口縁~体部2/3	83	98	92
939	宮ヶ田III	SHK072	土師器	壺Ac	0.5	6.9 8.9	9.4	5YR6/6/8 10YR7/4	2.5YR5/8	口縁わずか	83	98	92
940	宮ヶ田川	SHK072	土師器	高杯Ab	18.5	15.4	11.6		7.5YR8/4 5YR7/4	底~体部1/3欠損	83	98	
941	宮ヶ田川	SHK072	土師器	高杯Ac	18.7	13.1	10.7	5YR6/3 2.5YR6/8		口縁1/5欠 底部1/2残	83	99	92
942	宮ヶ田Ⅲ	SHK072	土師器	高杯Ab	17.9	13.4	10.7	7.5YR7/4	2.5YR5/6 7.5YR7/4	ほぼ完形 杯部ほぼ完形	83	99	92
943	宮ヶ田Ⅲ	SHK072	土師器	高杯Ab	16.9	6.7	10.7	7.5YR5/2		口縁1/2	83	99	92
944	宮ヶ田川	SHK072	土師器	高杯Ba	16.5	12.9	11.6	10YR7/3		ほぼ完形	83	99	
945	宮ヶ田川	SHK072	土師器	高杯Ba	16.9	11.5	8.6	10YR7/4	7.5YR7/4	口縁1/2	83	99	93
946	宮ヶ田川	SHK072	土師器	高杯C	15.4	6.6		5YR6/6	5YR6/6	口縁ほば完形	83	99	93
947	宮ヶ田川	SHK072	土師器	高杯		8.2	11.0	7.5YR8/3	7.5YR6/3	脚部1/3欠損	83	99	93
948	宮ヶ田III	SHK072	土師器	高杯		6.6	10.9	10YR8/4	10YR7/4	底部1/2	83	99	93
949	宮ヶ田川	SHK073	須恵器	杯蓋	14.8	4.2		N8/0	7.5Y7/1	口縁 1 /2	83	99	93
950	宮ヶ田川	SHK073	土師器	高杯Da	13.6	7.5		2.5YR5/8	2.5YR5/8	口縁わずかに欠損	83	99	93
951	宮ヶ田Ⅲ	SHK073	土師器	高杯		8.1	9.1	10YR8/3	10YR7/4	底部1/2	83	99	93
952	宮ヶ田Ⅲ	SHK073	土師器	甕	19.6	18.4		5YR7/6	5YR6/6	口縁 1 /3	83	99	93
953	宮ヶ田Ⅲ	SHK074	須恵器	杯蓋	12.8	3.7		N6/0	N6/0	口縁1/8弱	84	99	93
954	宮ヶ田川	SHK074	須恵器	有蓋高杯	9.9	4.0		N6/0	N5/0	口縁わずか 体部1/4	84	99	93
955	宮ヶ田川	SHK074	須恵器	高杯		4.4	7.3	10Y6/1	10Y6/1	底部1/4欠損	84	99	93
	-	SHK074	土師器	壺Ac	9.8	6.3		2.5YR5/6	5YR5/6	口縁1/5	84	99	93
_		SHK074	土師器	甕Aa	14.8	12.3		5YR6/6	5YR6/6	口縁約1/3	84	99	93
-	-	SHK074 SHK074	土師器	甕Bb	17.9	5.5		7.5YR6/4	7.5YR6/4	口縁1/2	84	99	93
		SHK074	土師器	甕Bc 京打Da	15.8	8.9		2.5Y7/3	2.5Y7/3	口縁1/5	84	99	93
		SHK074	土師器	高杯Bc	14.9	6.5		5YR6/8	5YR7/6	口縁ほぼ完形	84	100	94
		SHK074	土師器	高杯Da	15.7	11.7	9.7	5YR6/4		杯部ほぼ完形	-	100	94
		SHK074	土師器	高杯Da 高杯Da	16.3	6.3		5YR6/6	5YR6/6	口縁~体部1/2		100	94
		SHK074	土師器	高杯Da 高杯Db	15.8 12.8	5.0	7.0	5YR7/6		口縁わずか 体部1/2		100	94
-		SHK074		高杯Db	15.3	6.1	7.9	5YR6/6		口縁1/6 底部わずか		100	94
		SHK075		壺Ac	7.8	9.2		5YR7/8	-	口縁1/5欠損		100	94
-		SHK075		壺Ac	7.4	8.7	\rightarrow	7.5YR7/6 5YR6/6		底~体部ほぼ完形		100	94
\rightarrow		SHK075		壺Ac	7.9	8.8	\rightarrow	7.5YR7/4		口縁~底部1/3		100	94
					7.0	5.0		7.01N//4	7.5YR7/6	口縁わずかに欠損	84	100	94

									===		参照 先		
遺物	地 区	出土遺構	種類	器種	漫			色	調	残 存 状 況	本文頁 図版		写真
番号			LATER	±.	口径	器高	底径	内 面 7.5YR8/4	外 面 7.5YR7/6	底~体部ほぼ完形	84	100	94
969	宮ヶ田Ⅲ	SHK075	土師器	壺Ac	7.6	7.7 9.8	-	10YR7/2	2.5Y8/2	口縁1/4 体部一部欠	84	100	94
970	宮ヶ田川	SHK075	土師器	壺Ac	9.5	8.8		10YR8/3	10YR8/3	口縁1/2強 体部3/5	84	100	94
971	宮ヶ田Ⅲ	SHK075	土師器	壺Ac	8.3		11.1	7.5YR7/6	5YR7/6	口縁~底部1/2	84	100	94
972	宮ヶ田川	SHK075	土師器	高杯Bb	15.6	12.5		7.5YR7/6	7.5YR7/6	口縁1/7欠損 脚1/4	84	100	94
973	宮ヶ田Ⅲ	SHK075	土師器	高杯Ba	12.5	12.0	9.3	5YR6/6	5YR5/6	口縁1/2	84	100	94
974	宮ヶ田Ⅲ	SHK075	土師器	高杯Ba	13.8	5.8		51 H0/0	3103/0	口縁1/3	0-7	100	
975	宮ヶ田川	SHK075	土師器	器台	17.3	9.4	21.2	7.5YR7/4	7.5YR7/4		84	100	94
								N. T.	0.50)/0/4	底部ほぼ完存	0.5	100	95
976	宮ヶ田Ⅲ	SHK076	土師器	杯蓋	14.1	3.3		N7/0	2.5GY6/1	口縁1/5	85	_	<u> </u>
977	宮ヶ田III	SHK076	土師器	高杯Ab	21.5	6.2		5YR7/6	5YR6/6	口縁1/4	85	100	95
978	宮ヶ田川	SHK078	土師器	高杯Db	13.8	10.4	7.2	7.5YR6/6	5YR6/6	口縁1/4 底部5/9	85	100	95
979	宮ヶ田川	SHK079	須恵器	杯蓋	12.3	4.2	7.1	N6/0	2.5GY6/1	口縁1/5	85	100	95
980	宮ヶ田Ⅲ	SHK079	須恵器	杯身	10.9	4.6	3.9	N5/0	N6/0	口縁1/12底部一部欠	85	100	95
981	宮ヶ田Ⅲ	SHK079	土師器	甕Aa	18.0	6.8		10YR7/3	7.5YR7/3	口縁1/4	85	100	95
982	宮ヶ田III	SHK079	土師器	魱	20.8	9.4		10YR6/4	7.5YR7/4	□縁1/4強	85	100	95
983	宮ヶ田Ⅲ	SHK083	土師器	壺Ac	8.9	8.8		7.5YR7/4	7.5YR7/6	口縁1/2 体部ほぼ完存	85	100	95
984	宮ヶ田Ⅲ	SHK083	土師器	壺Ac	9.1	7.2		10YR6/3	10YR6/3	口縁1/4	85	100	
985	宮ヶ田III	SHK083	土師器	手づくね	4.2	4.0	丸底	7.5YR6/4	10YR/7/4	口縁1/9	85	100	95
986	宮ヶ田Ⅲ	SHK083	土師器	高杯Aa	17.8	7.1		10YR7/4	7.5YR7/4	口縁わずか	85	100	95
987	宮ヶ田川	SHK083	土師器	甑	34.8	5.2		5YR6/6	7.5YR7/4	口縁1/9	85	100	95
988	宮ヶ田川	SHK084	須恵器	杯蓋	13.7	4.2		5Y6/1	2.5Y6/1	口縁1/4弱	85	101	95
989	宮ヶ田川	SHK084	須恵器	杯蓋	13.3	4.0		2.5Y7/1	2.5Y6/1	口縁3/8	85	101	95
990	宮ヶ田川	SHK084	土師器	甕Aa	16.4	26.0		5YR6/6	5YR7/6	口縁ほぼ完形	85	101	95
991	宮ヶ田川	SHK084	土師器	甕Ab	10.3	32.6		5YR7/4	5YR6/8	口縁ほぼ完形	86	101	95
992	宮ヶ田川	SHK084	土師器	甕Ab	19.7	7.8		7.5YR7/6	7.5YR7/6	口縁1/4	86	101	95
		SHK084	土師器	甕Ab	18.7	6.5		7.5YR5/4	7.5YR6/4	口縁2/9	86	101	95
993	宮ヶ田川	SHK084	土師器	甕Ab	11.1	15.3		10YR6/2	10YR6/3	口縁完形	86	101	95
994	宮ヶ田川				13.5	8.2	-	5YR7/8	5YR7/6	口縁ほぼ完形	86	101	95
995	宮ヶ田川	SHK084	土師器	高杯Da		12.0	9.3	5YR6/6	5YR6/6	口縁1/9欠損	86	101	+
996	宮ヶ田Ⅲ	SHK084	土師器	高杯Da	16.4		9.5	5YR7/4	5YR7/4	杯身ほぼ完形	86	101	+
997	宮ヶ田III	SHK084	土師器	高杯Da	15.1	9.6			5YR7/6	口縁わずかに欠損	86	101	96
998	宮ヶ田川	SHK085	土師器	甕Ab	18.7	27.8		5YR7/4			86	101	96
999	宮ヶ田III	SHK085	土師器	高杯Db	14.1	10.7		5YR6/6	10YR6/4	底部2/3欠損		102	96
1000	宮ヶ田III	SBK003	須恵器	杯蓋	12.0	3.3		N6/0	N4/0	口縁1/14	86	-	+
1001	宮ヶ田川	SBK003	須恵器	杯身	12.3	4.3		N5/0	N6/0	口縁1/5 体部1/2	86	102	96
1002	宮ヶ田Ⅲ	SBK003	土師器	甕Bb	17.5	3.4		7.5YR6/4	7.5YR4/3	口縁1/11	86	102	96
1003	宮ヶ田III	SBK004	須恵器	杯蓋	12.7	4.5		10Y6/1	10Y6/1	口縁1/4弱	86	102	96
1004	宮ヶ田III	SPK011	須恵器	杯蓋	14.2	3.5		N7/0	N6/0	底部1/4	86	102	96
1005	宮ヶ田Ⅲ	SPK013	土師器	甕Ba	17.4	8.3		2.5YR6/2	2.5YR7/2	口縁1/10	86	102	96
1006	宮ヶ田III	SPK014	土師器	高杯	6.6		9.8	10YR7/3	10YR6/3	底部1/3	86	102	96
1007	宮ヶ田III	SPK015	土師器	甕Ba	16.6	5.0		10YR7/4	10YR8/4	口縁1/6	87	102	96
1008	宮ヶ田Ⅲ	SPK016	土師器	高杯		4.8	8.1	5YR8/3	5YR6/8	底部1/2	87	102	96
1009	宮ヶ田III	SPK017	土師器	高杯Bb	15.7	5.5		7.5YR7/4	7.5YR8/4	口縁1/10 体部1/4	87	102	96
1010	宮ヶ田川	SKK012	土師器	高杯Ba	17.7	4.3		10YR7/2	7.5YR8/4	口縁1/6強	87	102	97
1011		SKK013	須恵器	杯蓋	12.5	3.4		7.5YR6/4	2.5Y6/1	口縁わずか	87	102	97
1012		SKK013	土師器	甕Bb	19.8	6.1		10YR7/2	10YR7/3	口縁わずか	87	102	97
1013		SKK014	土師器	甕Bb	17.6	4.4		10YR7/3	10YR7/3	口縁5/9	87	102	
1013		SKK015	土師器	甕Aa	16.0	11.7		2.5Y7/2	2.5Y6/2	口縁2/3	87	102	97
		SKK015	土師器	甕Ba	17.7	6.8		2.5Y7/2	10YR7/2	口縁1/2弱	87	102	97
1015	· ·	SKK016	土師器	甕Aa	12.8	18.3	19.8	10YR7/3		口縁1/5	87	102	97
1016			土師器	椀B	16.3	8.6	1	10YR7/2	10YR7/3		87	102	97
1017	T	SKK016		杯蓋	13.1	4.0		2.5Y6/1	7.5Y6/1		87	103	
1018		SSK001	須恵器			10.3	9.8	5Y6/1	7.5Y6/1		87	103	97
1019		SSK001	須恵器	高杯Db	13.4		9.0	10YR7/2	10YR7/2		88	103	_
1020	—	SSK001	土師器	甕Aa	14.2	5.8	+				88	103	
1021		SSK001	土師器	甕Bb	20.5	5.8	-	10YR5/3	10YR6/3		88	103	-
1022		SSK001	土師器	壺Ac	9.9	9.8	1	10YR6/3	10YR7/3			103	
1023		SSK001	土師器	高杯	-	6.1	10.3	7.5YR7/6	7.5YR7/6		88		_
1024	宮ヶ田III	SSK001	土師器	高杯		6.6	10.8	7.5YR7/4	10YR6/3		88	103	
1025	宮ヶ田Ⅲ	SSK001	土師器	不明		3.2		N5/0	2.5Y6/3		88	103	
1026	宮ヶ田III	SFR001東側溝	須恵器	杯身	12.1	4.5	5.8	N6/0	7.5YR5/1	+	88	103	_
1027	宮ヶ田川	SDC002	土師器	高杯		6.0	9.7	10YR8/3	10YR8/2		88	103	_
1028	宮ヶ田III	包含層(水田部)	須恵器	杯蓋	12.9	4.2		N6/0	N5/0		88	103	_
1029	宮ヶ田川	包含層(水田部)	須恵器	杯身	12.0	4.9		N6/0	10Y6/1		88	103	_
1030	+	包含層(水田部)	須恵器	杯身	13.4	4.5		10Y6/1	N6/0	口縁約1/6	88	103	98
1031		包含層(水田部)	須恵器	杯蓋	10.0	4.1		5Y7/1	7.5Y8/1	口縁1/3弱欠損	88	103	98
	 . 	包含層(水田部)	須恵器	壺蓋	10.4	3.5		5Y4/1	5Y6/1	口縁1/4弱欠損	88	103	98
	/ _ / _	包含層(水田部)	須恵器	高杯	1	3.9	8.2	N5/0	N6/0	底部1/2	88	103	98
1032	宮ヶ田川						+	1	1150	ric tiro (o PP		1	98
1032				有蓋高杯	:	7.8	9.1	N7/0	N5/0	底部2/3弱	88	103	
1032 1033 1034	宮ヶ田川	包含層(水田部)	須恵器	有蓋高杯		7.8 6.8	9.1				88	103	_
1032 1033 1034 1035	宮ヶ田川	包含層 (水田部)	須恵器 土師器	甕Ba	14.4	6.8	9.1	10YR6/3	7.5YR6/3	口縁約1/2	+	-	98
1032 1033 1034	宮ヶ田 宮ヶ田 宮ヶ田	包含層(水田部)	須恵器	+. $-$		_	9.1		7.5YR6/3 10YR6/2	口縁約1/2	88	103	98

遺物		出土遺構	種 類	器種			量	色	調	残存状况	耄	-	先
1039		包含層	須恵器	無蓋高杯	16.8	器高 6.3	底径	内 面 N7/0	外面 Ne//		本文頁	_	
					10.0	1	 	N//C	N6/0) 口縁~体部1/5強 口縁わずか	89	103	98
1040	○ 宮ヶ田Ⅲ	包含層	須恵器	碌		8.7	11.4	N7/0	N6/0	底部ほぼ完形	89	103	98
1041		包含層	土師器	高杯Ba	15.9	5.5		7.5YR7/6	7.5YR7/6		89	103	98
1042		包含層	上師器	高杯Da	14.7	6.0		5YR7/6	5YR7/8	口縁~体部1/4	89	103	98
1043		包含層	土師器	甕B	ļ	2.0	-	5YR5/4			89	103	98
1045		包含層	土師器	壺Bb 手づくね	16.4	13.3	-	7.5YR6/6			89	103	
1046		確認調査	土師器	高杯Da	15.2	3.5 5.4	-	7.5YR7/6 5YR6/8	7.5YR7/8 5YR6/8		89	103	
1047	新水北	SHK2001	土師器	甕Ba	10.2	3.9	5.5	2.5Y7/3	2.5Y7/2		89	103	
1048	新水北	SDK2013	須恵器	杯	10.0	3.1		N7/0	N7/0		89	104	99
1049		SDK2013	土師器	壺Ab	10.8	12.1	3.6	7.5YR6/3	7.5YR6/4		89	104	99
1050		SRK2001	須恵器	杯蓋	12.2	4.6	3.4	N4/0	N5/0	口縁3/4	89	104	99
1051	新水北	SRK2001	須恵器	高杯蓋	11.5	5.0	2.6	N5/0	N6/0		89	104	99
1052	新水北	SRK2001	須恵器	高杯蓋	11.9	5.4		5Y6/1	N6/0	口縁一部欠	89	104	99
1053	新水北	SRK2001	須恵器	高杯蓋	14.8	5.1	+	N6/0	N6/0	つまみ完存	- 00		
1054	新水北	SRK2001	須恵器	有蓋高坏	10.9	5.4		N4/0	N5/0	口縁1/2弱欠損 口縁1/2 脚わずか	89	104	99
1055	新水北	SRK2001	土師器	壺Ab	9.5	14.6	1	2.5YR6/8	2.5YR6/8		89	104	99
1056	 	SRK2001	土師器	壺Ac	9.7	9.8		10YR6/3	10YR6/2	口縁1/4弱	90	104	99
1057	新水北	SRK2001	土師器	壺Ac	6.2	7.1		10YR5/2	10YR6/3	口縁1/3欠損	90	104	99
1058	新水北新水北	SRK2001 SRK2001	土師器	壺Ac	6.8	5.6		10YR6/3	10YR6/3	口縁2/5	90	104	99
1060	新水北	SRK2001	土師器	壺Ac	0.0	6.9		2.5Y5/2	2.5Y8/2	体~底完形	90	104	99
1061	新水北	SRK2001	土師器	壺Bb 甕Aa	9.2 15.5	10.6 28.9	-	10YR6/3 10YR8/3	10YR8/3 10YR8/3	口縁1/3強	90	104	99
1062	新水北	SRK2001	土師器	甕Aa	16.4	10.6		10YR6/2	10YR6/3	口縁1/4 体部一部欠 口縁1/3	90	104	99
1063	新水北	SRK2001	土師器	甕Aa	18.6	9.6		10YR6/3	10YR6/3	口縁1/2強	90	104	100
1064	新水北	SRK2001	土師器	甕Aa	14.9	4.9		2.5Y5/2	10YR6/3	口縁2/3	90	104	100
1065	新水北	SRK2001	土師器	甕Ba	17.2	25.5		10YR6/2	10YR6/3	口縁ほぼ完形	90	104	100
1066	新水北	SRK2001	土師器	甕Bc	17.8	29.5		10YR7/3	10YR5/2	口縁1/4、体部1/3欠損	90	105	100
1068	新水北	SRK2001 SRK2001	土師器	甕Bb	16.9	6.1	-	10YR6/3	7.5YR6/4	口縁2/3	90	105	100
1069	新水北	SRK2001	土師器	甕Bc 甕Bc	17.8 17.2	4.8		10YR6/3 5Y5/1	10YR6/3	口縁1/6	90	105	100
1070	新水北	SRK2001	土師器	甕Bb	19.9	10.7		10YR6/3	10YR7/3 10YR7/3	口縁1/2弱 口縁~体部1/2	90	105	100
1071	新水北	SRK2001	土師器	甕Bc	20.9	6.9	9.5	10YR6/3	2.5YR6/2	口縁1/3	90	105	100
1072	新水北	SRK2001	土師器	高杯Db	13.3	10.6	11.3	7.5YR7/3	7.5YR7/4	口~底部1/3欠損	90	105	101
1073	新水北	SRK2001	土師器	高杯		7.2		10YR6/3	10YR7/3	裾部1/9	90	105	101
1074	新水北	SRK2001	土師器	製塩土器	3.3	4.7	3.9	2.5YR2/1	2.5YR5/1	口縁~体部1/4	90	105	101
1075	新水北	SZK2001-SRK2001	土師器	□ 壺Ac □ (脚台付)	6.0	11.1		5Y2/1	5Y2/1	完形	90	105	101
1076	新水北	SRK2002	土師器	高杯Ba	16.5	5.5		10YR6/3	10YR7/2	口縁1/2	- 00	105	101
1077	新水北	SRK2006	須恵器	杯蓋	9.8	3.1		5Y5/1	N7/0	口縁1/9	90	105	101
1078	新水北	SSK1003	須恵器	杯蓋	11.9	4.4		N6/0	N6/0	口縁~体部約1/3強	91	105	101
1079	新水北	SSK1003	土師器	高杯		5.6	9.9	10YR8/3	10YR8/2	底部1/3欠損	91	105	101
1080	新水北	SSK1003	土師器	甕Aa	17.3	12.1		10YR7/3	10YR6/3	口縁1/3	91	105	101
1082	新水北	SXK1003 SXK1003	土師器	椀	11.9	5.5		10YR6/2	10YR5/2		91	105	101
1083	新水北	II a層	土師器 須恵器	甕Bb 杯蓋	17.8	7.3 4.1		10YR5/2		口縁1/6欠損	91	105	101
1084	新水北	ll a層	須恵器	壺	17.4	16.5		7.5Y5/1 N6/0	7.5Y6/1 7.5Y6/1	口縁~体部1/4	91	106	103
1085	新水北	ll a層	土師器	壺Ab	9.7	10.0		10YR6/3		口縁約1/4	91 91	106 106	102
1086	新水北	II a層	土師器	壺Ac	9.0	9.7		10YR6/3	10YR6/2	完形	91	106	102
1087	新水北	II a層	土師器	甕Aa	13.9	10.3		10YR5/6	10YR4/2	口縁1/5欠損	91	106	102
1088	新水北	ll a層	土師器	高杯		6.0	8.9	10YR6/2		脚部ほぼ完形	91	106	102
1099	新水北	11 倉層	土師器 須恵器	高杯 壺	11.7	9.5	7.3	10YR7/3	10YR7/2	底部1/4	91	106	103
1091	新水北	11層	須恵器	型 堤瓶	(1./	10.8		7.5Y6/1 N4/0	N6/0	口縁1/3 体部1/2	91	106	102
1092	新水北	11層	土師器	壺Ab	8.9	14.9		7.5YR7/4	N5/0 7.5YR7/4	口縁欠損 体部1/3 口縁ほぼ完形	91 92	106	102
1093	新水北	I a層下半~Ⅱ層	須恵器	甕	16.4	15.1		N4/0	N6/0	口縁1/5 体部1/3	92	106	103
1094	新水北	I a層下半~Ⅱ層	須恵器	壺	10.2	14.8		N4/0	N4/0	口縁1/2弱 体部1/6欠損	92	106	103
1095	新水北	I a層下半~II 層	土師器	高杯Db	13.6	10.9	8.4	7.5YR5/4	7.5YR7/4	1本部1/6欠損 口縁1/4 底部1/9	92	106	103
1096	新水北	I a層下半~Ⅱ層	土師器	甕Bb	18.4	11.4		10YR7/2		口縁約1/5	92	106	103
1097	新水北	I a層~II 層	須恵器	有蓋高杯	10.0	4.7		2.5GY5/1		口縁~体部 1 /5	92	106	103
1098	新水北	l a層下半	須恵器	杯蓋	14.0	4.4	2.2	N6/0		口縁3/8天井部1/2弱	92	107	105
1100	新水北 新水北	l a層下半	須恵器	杯身	11.9	5.2		5Y6/1		口縁1/3欠損	92	107	104
1101	新水北	I a層下半	須恵器 須恵器	壺	15.8 8.6	12.1	0.1	7.5Y6/1		口縁1/2	92	107	105
	新水北	l a層下半	土師器	甕Ba	19.4	13.4	8.1	N7/0 2.5Y6/2		口縁1/3欠損 口縁約1/6欠損	92	107	104
	新水北	Ia層	須恵器	杯蓋	13.4	4.5	+	N5/0		山稼約1/6火損 底部完形	92 92	107	104
-	新水北	I a層	須恵器	杯身	10.0	5.3	丸底	2.5Y6/2		底部完形	92	107	105
1105	新水北	I a層	須恵器	有蓋高坏	12.3	4.7		N7/0		口縁約1/2	92	107	105

遺物			erier. Most	00 72	ž	去 量	t	色	調	残 存 状 況	参	照先	;
番号	地 区	出 土 遺 構	種類	器種	口径	器高	底径	内 面	外 面	7% 1 1 4\	本文頁	図版	写真
1106	新水北	I a層	須恵器	壺	12.2	8.0		N7/0	N6/0	口縁1/2	92	107	105
1107	新水北	I a層	須恵器	壺	18.8	10.7		5Y6/1	5Y6/1	口縁約3/4	92	107	104
1108	新水北	I a層	土師器	壺Ac	6.8	8.2	丸底	7.5YR7/4	10YR7/4	底部完形	92	107	104
1109	新水北	I a層	土師器	甕Aa	18.1	7.9		10YR6/3	10YR6/2	口縁ほぼ完形	92	107	104
1110	新水北	包含層	須恵器	杯蓋	11.7	4.1		N6/0	N6/0	完形	93	107	104
1111	新水北	包含層	須恵器	杯蓋	13.5	4.6		2.5Y7/3	2.5Y8/1	口縁1/4	93	107	105
1112	新水北	包含層	須恵器	杯蓋	12.9	4.4	7.1	2.5Y6/1	2.5Y7/1	口縁1/8底部完存	93	107	104
1113	新水北	包含層	土師器	甕Aa	14.3	14.7		10YR6/2	2.5Y5/2	口縁1/2強	93	107	104
1114	新水北	確認調査	土師器	甕Bb	18.1	28.9	29.0	10YR5/3	7.5YR5/3	口縁ほぽ完形	93	107	105
1115	新水北	確認調査	土師器	甕Bc	19.7	6.0		7.5YR7/3	7.5YR6/3	口縁約1/3	93	107	
1116	新水北	確認調査	須恵器	壺	18.9	17.2		N6/0	N5/0	口縁わずかに欠損	93	107	105

律令期の土器

遺物			705 ME	80 75	ž	去量	ŧ	色	調	残存状況	参	照先	Ė
番号	地 区	出土遺構	種類	器種	口径	器高	底径	内 面	外 面)X 17 1/1 //L	本文頁	図版	写真
1117	宮ヶ田Ⅲ	SFR001	須恵器	円面硯	11.9	2.4		N6/0	N6/0	口縁~体部2/3	93	108	106
1118	宮ヶ田川	SSR001	須恵器	杯A	12.7	4.0		10Y6/1	N5/0	口縁 1 /4欠損	93	108	106
1119	宮ヶ田III	SBC057	須恵器	杯A		2.0	9.1	N6/0	N6/0	底部1/4	93	108	
1120	宮ヶ田Ⅲ	包含層(水田部)	須恵器	杯B	12.1	3.8	8.8	N6/0	N6/0	口縁 1/6 底部完形	93	108	106
1121	宮ヶ田川	包含層(水田部)	須恵器	ША	13.8	1.7	11.9	7.5Y6/1	7.5Y6/1	口縁~底部1/4	94	108	106
1122	宮ヶ田川	包含層(水田部)	須恵器	ШΑ		1.1		2.5Y6/2	2.5Y7/2	破片	94	108	106
1123	新水北	層	須恵器	杯B	15.3	5.8	6.9	N7/0	N6/0	口縁1/7 底部1/2	94	108	106
1124	新水北	l a層下半	土師器	杯A	13.2	3.2	10.9	10YR5/2	10YR5/3	口縁1/6欠損	94	108	106
1125	新水北	Ia層	土師器	杯A	14.5	3.2	9.6	2.5Y7/3	2.5Y8/3	口縁1/18	94	108	
1126	新水北	I a層	土師器	杯A	13.8	3.7	6.6	2.5Y6/2	10YR6/2	口縁約1/4	94	108	

中世の土器

	の土器				3	去		色	調		参	照先	
遺物	地 区	出土遺構	種類	器 種	口径	器高	底径	内面	外面	残 存 状 況	本文頁	図版	写真
1127	宮ヶ田川	SBC056	須恵器	碗B	13.4	5.7	5.1	N7/0	N7/0	口縁1/2底部完形	96	108	107
1127	宮ヶ田川	SBC056	土師器	碗	15.3	4.5		N3/0	10YR6/3	口縁 1 /3弱	96	108	107
1129	宮ヶ田川	SBC056	土師器	底部	10.0	3,0	9.2	10YR6/2	10YR7/3	底部1/2	96	108	107
1130	宮ヶ田川	SBC056	土師器	鍋C	20.0	10.8		10YR5/2	10YR6/3	口縁1/9	96	108	107
1131	宮ヶ田川	SBC057	須恵器	碗B	16.1	5.4	5.7	N5/0	N5/0	口縁1/4	97	108	107
1132	宮ヶ田川	SBC058	須恵器	碗A2	15.6	5.6	1.3	N6/0	N6/0	口縁1/9 底部1/3	97	108	107
1133	宮ヶ田川	SBC058	土師器	杯A	14.7	4.6	6.1	10YR7/3	2.5YR8/3	口縁1/6底部ほぼ完形	97	108	107
1134	宮ヶ田川	SBC058	土師器	底部		2.0	8.9	2.5YR8/3	2.5YR7/4	底部ほぽ完形	97	108	107
1135	宮ヶ田川	SBC058	土師器	小皿A	8.2	1.9	3.2	5YR6/6	5YR6/6	底部完形	97	108	107
1136	宮ヶ田川	SBC058	土師器	小皿A	8.7	1.8	5.2	10YR8/3	10YR8/4	口縁わずかに欠損	97	108	107
1137	宮ヶ田川	SBC058	土師器	底部		1.6	5.7	10YR8/3	10YR8/3	底部ほぼ完形	97	108	107
1138	宮ヶ田川	SBC059	土師器	小皿A	9.3	2.0	5.2	10YR7/3	10YR7/3	底部完形	97	108	107
1139	宮ヶ田川	SAC004	土師器	底部		2.2	4.2	10YR7/2	10YR7/2	底部完存	97	108	107
1140	宮ヶ田川	SPC030	土師器	ШA	13.6	3.8	5.2	7.5YR8/3	7.5YR8/4	口繰1/6	97	108	107
1141	宮ヶ田川	SPC031	土師器	杯A	14.4	3.8	6.4	7.5YR7/4	7.5YR7/4	底部完形	97	108	107
1142	宮ヶ田川	SKC017	土師器	杯A	15.6	4.8	6.4	7.5YR7/6	7.5YR7/6	口縁1/5、底部完形	97	109	108
1143	宮ヶ田川	SKC017	土師器	杯A	14.3	4.6		10YR8/3	10YR8/4	ほぼ完形	97	109	108
1144	宮ヶ田川	SKC017	土師器	圫		3.6	5.8	10YR6/3	10YR7/3	底部ほぼ完形	97	109	108
1145	宮ヶ田川	SKC017	土師器	圫	8.8	2.3	3.5	10YR6/3	10YR6/3	完形	97	109	108
1146	宮ヶ田川	SKC017	土師器	小皿A	9.5	2.1	5.4	10YR7/3	10YR7/3	口縁1/3	97	109	108
1147	宮ヶ田川	SKC017	土師器	小皿A	9.6	2.2	4.2	10YR7/4	7.5YR7/4	ほぼ完形	97	109	108
1148	宮ヶ田川	SKC018	土師器	碗A	14.1	5.1	6.4	7.5YR6/4	7.5YR6/6	口縁 1 /4欠損	98	109	108
1149	宮ヶ田川	SKC018	土師器	碗A	13.8	4.5	6.2	2.5Y6/1	7.5YR7/6	口縁1/4、底部ほぼ完形	98	109	108
1150	宮ヶ田川	SKC020	須恵器	碗B	16.0	6.1	4.9	2.5Y7/2	2.5Y7/1	口縁1/4 底部3/4	98	109	108
1151	宮ヶ田川	SKC020	須恵器	碗B	16.1	5.6	5.7	N7/0	5Y7/1	口縁5/8 底部完存	98	109	108
1152	宮ヶ田川	SKC020	須恵器	碗A2	15.0	5.3	5.2	5Y6/1	N6/0	口縁3/8弱 底部1/2弱	98	109	108
1153	宮ヶ田川	SKC020	須恵器	碗B	14.7	5.5	5.5	5Y7/1	5Y7/1	口縁7/8 底部完存	98	109	108
1154		SKC020	須恵器	小碗	9.3	3.6	3.6	5Y6/1	7.5Y6/1	口縁1/4 底部1/2	98	109	108
1155	宮ヶ田川	SKC020	須恵器	小碗	9.2	3.4	3.3	N6/0	7.5Y6/1	口縁3/4強 底部1/2	98	109	108
1156	宮ヶ田川	SKC020	土師器	碗	14.8	4.4	6.0	10YR7/3	10YR8/4	口縁3/10 底部5/9	98	109	108
1157	宮ヶ田川	SKC020	土師器	ША	15.6	4.2	6.2	10YR8/4	10YR8/4	口縁1/12 底部完存	98	109	108
1158	宮ヶ田川	SKC020	土師器	ША	14.3	4.6	5.4	10YR8/3	10YR8/3	口縁1/3 底部1/2	98	109	109
1159	宮ヶ田川	SKC020	土師器	底部		2.4	3.7	10YR7/3	10YR7/3	底部ほぼ完存	98	109	109
1160	宮ヶ田川	SKC020	土師器	小皿A	8.7	2.0	4.9	5YR7/4	5YR7/4	口縁3/8 底部5/8	98	109	109
1161	宮ヶ田川	SKC020	土師器	小皿A	9.2	1.8	5.3	7.5YR7/4	7.5YR7/4	口縁1/4弱 底部ほぼ完存	98	109	109
1162	宮ヶ田Ⅲ	SKC020	土師器	小皿A	9.0	2.1	4.1	7.5YR7/4	7.5YR7/4	完形	98	109	109
1163		SKC020	土師器	小皿A	9.4	1.9	4.7	7.5YR8/4	7.5YR8/4	口縁5/9 底部完存	98	109	109
1164		SKC020	土師器	小皿A	9.6	1.9	4.0	7.5YR7/4	7.5YR8/4	口縁7/9 底部ほぼ 完存	98	109	109
1165	宮ヶ田III	SKC020	土師器	小皿A	10.2	1.6	4.8	7.5YR7/4	7.5YR7/4	口縁3/8 底部完存	98	109	109
1166		SKC020	土師器	小皿A	8.2	1.7	4.0	7.5YR7/6	5YR7/6	ほぼ完形	98	109	109

遺物	地 区	出土遺構	種類	器種	ž	去 量	E.	色	調	残存状况	参	. 照 岁	
番号			1	111 11	口径	器高	底径	内 面	外面	残存状況	本文頁	図版	写真
1167	宮ヶ田川	SKC020	土師器	小皿A	8.1	1.5	4.7	10YR7/3	10YR7/3	口縁3/8底部完存	98	109	109
1168	宮ヶ田川	SKC020	土師器	鍋A1	29.6	19.0		10YR6/3	10YR6/3	口縁~体ほぼ完形	98	109	109
1169	宮ヶ田川	SKC020	黒色土器	碗	16.7	3.8		5Y2/1	10YR7/4	口縁1/12弱	98	109	109
1170	宮ヶ田Ⅲ	包含層 (水田部)	土師器	шс	12.8	2.7		10YR7/3	10YR7/2	口縁約1/6	98	110	109
1171	宮ヶ田Ⅲ	包含層 (水田部)	陶器	すり鉢	26.3	5.1		7.5YR5/3	7.5YR5/3	口縁約1/17弱	98	110	109
1172	宮ヶ田III	包含層 (水田部)	白磁	碗	15.6	5.1		7.5Y7/1	7.5Y7/1	口縁 1 /17	98	110	109
1173	新水北	0 a層	土師器	шс	11.9	2.9		7.5YR7/4	7.5YR6/4	口縁1/3欠損	98	110	109

土製品

遺物	地区	出土遺構	種類	器種	ž	去量	ŧ	色		残 存 状 況	参	照 绀	ŧ
番号			12 ///	HH THE	口径	器高	底径	内 面	外面	7% 1± 4A //L	本文頁	図版	写真
C11	宮ヶ田III	SHK042	土製品	土錘	6.0	3.0	1.1	5Y5/1	7.5YR7/4	1/2弱	98	110	110
C12	宮ヶ田III	SHK071	土製品	紡錘車	6.7	6.8	1.3	7.5YR6/6	2.5Y7/2	ほぼ完形	98	110	110
C13	宮ヶ田川	SHK083	土製品	羽口	11.7	6.5	1.9	7.5YR5/4	5YR6/6	1/2	98	110	110
C14	宮ヶ田川	SHK083	土製品	別口	13.1	6.0		10YR6/4	10YR7/3	2/3	98	110	110
C15	宮ヶ田川	SHK083	土製品		11.8	9.1	1.8	7.5YR6/3	2.5Y8/3	2/3	98	110	110
C16	宮ヶ田Ⅲ	SHK083	土製品	口账	7.6	7.2	1.5	10YR6/3	2.5Y8/2	1/4	98	110	110
C17	宮ヶ田III	SHK083	土製品	羽口	5.9	5.8		7.5YR6/6	10YR7/3	1/5	98	110	110
C18	宮ヶ田川	SHK083	土製品	羽口	3.9	4.7		7.5YR7/4	5Y5/1	1/5	98	110	110
C19	宮ヶ田Ⅲ	SHK044	土製品	鳥形	7.6	4.0	2.1	2.5Y8/2		2/3	99	110	110
C20	新水北	SRK2001	土製品	土玉	3.6	1.5	3.2	10YR6/2	10YR6/2	完形	99	110	110

木製品

小妥	E PP											
遺物番号	地 区	出土遺構	種類	器	種	樹種	法 量		残存值	参	照 :	先
母写 W101	宮ヶ田Ⅲ	0010004	1.00				長さ・直径	幅・器高	厚さ・底径	本文頁	図版	図版
W101		SSK001	木簡	木簡		スギ	122.7	3.1	2.5	99	111	111
W102		包含層(水田部)	木簡	木簡		スギ	64.2	8.5	1.2	100	111	111
W103		包含層	木簡	木簡		スギ	35.2	4.9	0.7	100	111	111
		I a層下半~Ⅱ層	木簡	木簡		スギ	35.9	2.6	0.8	100	111	111
W105		SSK1006	農具	直柄横鍬		ヒノキ	50.0	13.2	3.0	101	112	112
W106		SRK2001	農具	直柄横鍬		コナラ属アカガシ亜属	68.7	14.2	2.8	101	112	112
W107		SZK2001	農具	直柄横鍬		コナラ属アカガシ亜属	30.4	12.6	2.6	101	112	112
W108		包含層(水田部)	農具	直柄横鍬		コナラ属アカガシ亜属	14.7	10.9	3.3	101	112	112
W109 W110		SRK2001	農具	泥除		コナラ属アカガシ亜属	54.3	12.9	1.0	101	112	112
		SRK2001	農具	泥除		コナラ属アカガシ亜属	20.4	8.6	0.8	101	112	112
W111		川層	農具	曲柄鍬		コナラ属アカガシ亜属	57.2	10.6	1.5	101	113	113
W112		SSK1001	農具	曲柄鍬		コナラ属アカガシ亜属	33.2	7.6	1.2	101	113	113
W113		SZK2001-SRK2001	農具	曲柄鍬		コナラ属アカガシ亜属	20.9	7.9	1.2	101	113	113
W114		SSK1010-SWK1014	農具	曲柄鍬		コナラ属アカガシ亜属	12.0	9.8	1.3	101	113	113
W115		SRK2001	農具	曲柄鍬		コナラ属アカガシ亜属	23.6	12.5	0.8	101	113	113
W116		SRK2001	農具	横槌		ヤブツバキ	16.7	8.6	7.2	101	113	113
W117	新水北	SRK2001	農具	横槌		コナラ属アカガシ亜属	28.1	7.8	5.8	101	113	113
W118		SZK2001-SRK2001	農具	杵			43.5	10.5	9.3	101	113	113
W119	新水北	l a層下半	農具	田下駄枠		スギ	29.4	23.5	10.5	102	114	114
W120	新水北	1 a層下半	農具	田下駄枠		台形枠・横桟:スギ、 台形枠・木釘:ヒノキ	38.3	34.8	10.0	102	114	115
W121	新水北	I a層	農具	田下駄枠		スギ	28.2	27.1	8.3	102	115	115
W122	宮ヶ田Ⅲ	確認調査	農具	田下駄枠		ヒノキ	31.4	12.5	2.5	102	115	116
W123	宮ヶ田川	包含層(水田部)	農具	田下駄枠		スギ	33.8	13.1	3.3	102	115	116
W124	新水北	SZK2001-SRK2001	農具	田下駄枠		スギ	34.1	10.7	2.2	102	115	
W125	新水北	11層	農具	田下駄枠		スギ	39.9	4.7	2.5	102	116	116
W126	新水北	Ⅰa層下半~Ⅱ層	農具	田下駄枠		スギ	47.4	4.1	2.8	102	116	116
W127	新水北	11層	農具	田下駄枠		スギ	52.8	4.8	2.5	102	116	116
W128	新水北	日層	農具	田下駄枠		スギ	49.1	4.7	3.4	102	116	116
W129	新水北	Ia層	農具	田下駄枠		スギ	54.5	4.9	2.5	102	116	116
W130	宮ヶ田川	SSK001	農具	田下駄枠		スギ	36.4	6.2	3.2	102	116	116
W131	新水北	I a層下半~Ⅱ層	農具	田下駄枠		スギ	35.2	9.2	2.4	102	116	116
W132	宮ヶ田Ⅲ	包含層 (水田部)	農具	田下駄枠		スギ	28.8	6.0	3.7	102	116	116
W133	宮ヶ田Ⅲ	SSR001	農具	田下駄枠		スギ	23.8	6.0	5.0	102	116	116
W134	新水北	SSK1004	農具	田下駄横桟		スギ	42.9	3.9	2.0	103	117	117
W135	新水北	SSK1004	農具	田下駄横桟		スギ	43.7	4.0	2.0	103	117	117
W136	新水北	SSK1004	農具	田下駄横桟		スギ	43.2	4.1	2.2	103	117	117
W137	新水北	I a層下半~Ⅱ層	農具	田下駄横桟		スギ	42.1	4.2	1.9	103	117	117
W138	宮ヶ田Ⅲ	包含層(水田部)	農具	田下駄横桟		スギ	47.2	4.7	1.7	103	117	117
W139	新水北	SRK2001	農具	田下駄横桟		スギ	51.1	4.6	1.3	103	117	117
W140	新水北	包含層	農具	田下駄横桟		スギ	38.9	4.2	2.1	103	117	117
W141	新水北	SSK1004	農具	田下駄横桟		スギ	42.1	3.1	2.0	103	117	117
W142	新水北	SRK2001	農具	田下駄横桟	$\neg \neg$		55.2	5.6	1.5	103	117	117
W143	新水北	ll a層	農具	田下駄足板		スギ	31.5	11.2	1.9	104	118	118
W144	新水北	I a層	農具	田下駄足板		足板:スギ、木針:ヒノキ	32.2	3.3	1.8	104	118	118
W145	新水北	SSK1003	農具	田下駄足板		スギ	34.2	10.4	1.8	104	118	118
							04.2	10.4	1.0	104	110	118

\abanin						法 量	t () はタ	美存值	参	照先	ċ
遺物番号	地 区	出土遺構	種類	器 種	樹種	長さ・直径	幅・器高	厚さ・底径	本文頁	図版	図版
W146	新水北	I a層下半	農具	田下駄足板		17.4	10.4	1.2	104	118	118
W147	新水北	l a層	農具	田下駄足板	スギ	38.7	11.7	1.5	104	118	118
W148	新水北	I a層下半	農具	田下駄足板	スギ	54.3	7.0	2.4	104	118	118
W149	宮ヶ田川	包含層(水田部)	農具	田下駄足板	スギ	60.7	9.5	2.2	104	118	118
W150	新水北	川層	農具	田下駄足板	スギ	57.8	8.7	2.0	104	119	119
W151	新水北	Ia層	農具	田下駄足板	スギ?	65.6	8.7	2.3	104	119	119
W152	新水北	川層	農具	田下駄足板	スギ	76.3	10.4	1.5	105	119	119
W153	新水北	11層	農具	田下駄足板	スギ	78.1	10.3	1.5	105	120	119
W154	新水北	0 a層	農具	田下駄足板	スギ	38.0	9.6	1.4	105	120	119
W155	新水北	0 a層~ l a層	農具	田下駄足板	ヒノキ	39.8	10.4	1.5	105	120	119
W156	新水北	0 a層	農具	田下駄足板	ヒノキ	50.7	8.3	1.6	105	120	119
W157	新水北	包含層	農具	田下駄足板	スギ	51.2	11.5	1.1	105	120	119
W158	新水北	11層	農具	田下駄足板	スギ	27.1	14.8	3.4	105	121	120
W159	新水北	I a層	農具	田下駄足板	スギ	30.2	27.5	3.3	105	121	120
W160	宮ヶ田III	包含層(水田部)	農具	田下駄足板	スギ	27.1	20.7	2.2	105	121	120
W161	新水北	11層	農具	田下駄足板	スギ	30.5	28.4	2.6	105	122	120
W162	新水北	I a層	農具	田下駄足板	スギ	33.9	26.5	2.4	106	122	120
W163	新水北	I a層下半	農具	田下駄足板	スギ	34.0	23.6	3.6	106	122	120
W164	新水北	l a層	農具	田下駄足板	スギ	41.0	31.1	4.0	106	123	120
W165	新水北	I a層	農具	田下駄足板	スギ	36.2	29.6	4.6	106	123	120
W166	新水北	0 a層~ l a層	農具	田下駄足板	スギ	47.8	25.2	2.9	106	123	121
W167	新水北	IIa層	農具	田下駄足板	スギ	44.4	25.9	3.0	106	124	121
W168	新水北	II a層	農具	田下駄足板	スギ	35.4	26.7	3.0	106	124	121
W169	新水北	IIa層	農具	田下駄足板	スギ	28.1	27.8	3.2	106	124	121
W170	宮ヶ田Ⅲ	包含層(水田部)	農具	田下駄足板	スギ	18.5	18.5	3.0	106	125	121
W171	宮ヶ田Ⅲ	包含層(水田部)	農具	田下駄足板	スギ	26.4	20.3	2.7	106	125	121
W172	新水北	la層	農具	田下駄足板	スギ	45.4	17.0	2.5	106	125	121
W173	宮ヶ田Ⅲ	確認調査	農具	田下駄足板	スギ	37.3	19.8	2.3	106	125	121
W174		SSK1007	農具	田下駄足板	スギ	32.7	20.4	2.0	106	126	122
W175	新水北	SSK1010-SWK1009	農具	田下駄足板	スギ	35.0	20.0	3.0	106	126 126	122
W176	新水北	II a層	農具	田下駄足板	スギ	34.4	19.9	1.7	106	127	122
W177	宮ヶ田川	確認調査	農具	田下駄足板	スギ	35.8	21.5 21.4	2.3	106	127	122
W178	宮ヶ田川	SSR001	農具	田下駄足板	スギ	37.0 43.9	21.4	1.6	106	127	122
W179	新水北	11層	農具	田下駄足板	スギ	29.9	17.8	2.9	106	128	122
W180	宮ヶ田川	包含層(水田部)	農具	田下駄足板	スギ	34.6	16.6	3.0	106	128	122
W181	宮ヶ田川	包含層(水田部)	農具	田下駄足板	スギ	40.3	18.7	2.0	106	128	122
W182	新水北	11層	農具	田下駄足板田下駄足板	スギ	40.2	17.2	2.2	106	128	122
W183	新水北	l a層	農具農具	田下駄足板	スギ	36.0	30.2	2.0	107	129	123
W184	新水北	II a層	農具	田下駄足板	スギ	48.5	24.8	3.3	107	129	123
W185 W186	新水北	確認調査	農具	田下駄足板	スギ	44.9	26.3	2.5	107	129	123
W187	新水北	l a層下半	農具	田下駄足板	スギ	36.9	21.5	2.7	107	130	123
W188		II-1-a層	農具	田下駄足板	スギ	34.8	21.7	2.5	107	130	123
W189		SSK1010-SWK1014	農具	田下駄足板	スギ	44.2	21.8	1.7	107	130	123
W190		0 a層	農具	田下駄足板	スギ	35.9	20.0	2.7	107	131	123
W191		l a層下半	農具	田下駄足板	スギ	36.4	19.9	3.6	107	131	123
_	新水北	li a層	農具	田下駄足板	スギ	39.5	18.5	2.3	107	131	124
W193		Ia層	農具	田下駄足板	スギ	30.2	19.4	2.2	107	132	124
W194		包含層(水田部)	農具	田下駄足板	スギ	43.2	17.1	3.4	107	132	124
W195		包含層 (水田部)	農具	田下駄足板	スギ	45.5	17.1	1.7	107	132	124
W196		包含層	農具	田下駄足板	スギ	61.3	16.7	2.1	107	132	124
W197		Ia層	農具	田下駄足板	スギ	36.2	14.3	2.5	107	133	124
W198		SRK2003	農具	田下駄足板	モミ属	39.2	11.8	2.1	107	133	125
W199		Ia層	農具	田下駄足板	スギ	40.5	12.3	1.1	107	133	125
W200		la層	農具	田下駄足板	スギ	30.9	14.1	2.4	107	133	124
W201		確認調査	農具	田下駄足板	スギ	51.3	14.9	1.4	107	133	125
W202		lla層	農具	田下駄足板	モミ属	38.6	9.4	2.1	107	134	125
W203		IIa層	農具	田下駄足板	モミ属	40.1	11.2	2.3	107	134	125
W204		包含層	農具	田下駄足板	スギ	52.8	11.5	1.5	107	134	125
W205		I a層	農具	田下駄足板	スギ	52.9	12.2	1.7	107	134	1
W206		IIa層	農具	田下駄足板	スギ	31.1	18.2	2.2	107	135	125
W207	新水北	l a層	農具	田下駄足板	スギ	44.2	17.3	1.8	107	135	125
W208	新水北	I a層下半	農具	田下駄足板	スギ	39.1	6.4	2.4	107	135	
W209	新水北	確認調査	農具	田下駄足板	スギ	40.5	10.2	2.6	107	135	4—
W210	新水北	l a層下半	農具	田下駄足板	ヒノキ	48.1	10.3	1.8	107	135	125
W211	新水北	IIa層	農具	田船	スギ	67.0	17.6	12.5	108	136	126
W212	宮ヶ田III	SSK001	農具	田船	スギ	43.1	8.8	8.9	108	137	126
W213	宮ヶ田III	包含層(水田部)	農具	田船	スギ	48.4	9.3	3.1	108	137	125
W214	新水北	SSK1001-SWK1010	運搬具	天秤棒		170.3	4.7	3.3	109	137	126
		1 =	/宝 検り目	天秤棒	スギ	142.2	6.6	4.9	109	137	126
W215	新水北	lla層	運搬具 容器	\A1T1\P	スギ	24.4	21.2	1.0	109	138	127

遺物						7 4		-n. / /.	1		
番号	地 区	出土遺構	種 類	器種	樹種	長さ・直径		残存値 厚さ・底径	参		先
W217	宮ヶ田!!!	包含層 (水田部)	容器	蓋板	ヒノキ	22.6	22.2	0.8	本文頁 109	図版	図版
W218	新水北	SZK2001-SRK2001	容器	蓋板	ヒノキ	18.0	10.0	0.8	109	138	126
W219	宮ヶ田川	SSK001	容器	蓋板	ヒノキ	19.0	5.0	0.7	109	138	126
W220	新水北	II a層	容器	蓋板	ヒノキ	17.8	6.7	0.9	109	138	126
W221		SSR002	容器	蓋板	ヒノキ	18.1	7.1	0.6	109	138	126
W222		包含層(水田部)	容器	蓋板	ヒノキ	8.9	6.2	0.7	109	138	
W223		l a層下半	容器	蓋板	ヒノキ	9.5	4.1	0.8	109	138	
W224		I a層	容器	蓋板	ヒノキ	20.4	4.9	1.1	109	138	127
W226			容器	量板 曲物	ヒノキ	21.4	11.6	1.8	109	138	127
W227		I a層	容器	曲物	ヒノキ	38.6	11.6	1.1	109	139	128
W228		包含層(水田部)	容器	曲物	ヒノキ	16.6	9.0 5.2	0.9	109	139	128
W229	新水北	11層	容器	曲物	ヒノキ	17.0	(6.4)	0.6	109	139 139	127 127
W230	新水北	I a層	容器	曲物	スギ	17.8	6.1	0.7	109	139	127
W231	新水北	Ia層	容器	木皿	ヒノキ	18.7	7.3	1.0	110	139	127
W232		0 a層	容器	木皿	ヒノキ	16.9	5.7	1.6	110	139	127
W233		包含層(水田部)	容器	木皿	スギ	17.2	5.9	1.1	110	139	127
W234		Ia層	容器	漆椀	ケヤキ	(4.0)	(3.0)	(0.3)	110		128
W235		0 a層	容器	方形容器	スギ	32.0	12.6	4.2	110	140	128
W236		SRK2001	容器	方形容器	スギ	11.4	9.2	3.0	110	140	128
W237 W238	新水北	SRK2001 SRK2001	容器	方形容器	スギ	13.7	7.7	5.4	110	140	128
W238		SHK2001 SSK001	容器容器	方形容器 槽	スギ	29.4	14.9	10.5	110	140	128
W240		SHK044	服飾具	縦櫛	スギ	42.6	6.7	1.5	110	140	128
W241		I a層	服飾具	下駄	ヒノキ	(3.1)	3.5 10.7	0.4	110	141	129
W242		Ia層	食事具	匙	イヌガヤ	29.4	5.3	3.3 1.5	110	141 141	129
W243	新水北	日層	食事具	杓子形木製品	スギ	26.5	3.8	1.3	111	141	129
W244	宮ヶ田川	包含層(水田部)	食事具	杓子形木製品	スギ?	14.8	6.3	1.0	111	141	129
W245	新水北	l a層	食事具	箸	イヌガヤ	24.8	1.0	0.8	111	141	129
W246	宮ヶ田Ⅲ	包含層(水田部)	食事具	箸	ヒノキ	19.8	0.9	0.8	111	141	129
W247	宮ヶ田Ⅲ	包含層(水田部)	工具	木針	ヒノキ	13.4	1.2	0.3	111	141	129
W248	宮ヶ田Ⅲ	包含層(水田部)	工具	木針	ヒノキ	13.4	1.2	0.3	111	141	129
W249	宮ヶ田川	包含層(水田部)	雑具	火鑚臼	スギ	21.3	1.8	1.6	111	141	129
W250	新水北	SRK2001	雑具	火鑚臼	スギ	45.8	2.8	1.6	111	141	129
W251 W252	新水北	SZK2001-SRK2001	雑具	机	ヒノキ	78.7	43.9	1.8	111	142	130
W252	宮ヶ田Ⅲ	包含層(水田部)	雑具	腰掛	スギ	53.4	16.2	3.9	112	143	130
W254	新水北	包含層(水田部) SRK2001	雑具	腰掛	スギ	51.4	20.8	1.9	112	144	131
W255	宮ヶ田川	包含層(水田部)	雑具	腰掛	スギ?	33.2	13.1	4.8	112	144	131
W256	新水北	SRK2001	雑具	腰掛	スギ	21.3 25.6	10.5 13.7	1.7	112	144	131
W257	新水北	SSK1001周辺	雑具	腰掛	スギ	25.0	9.6	2.9	112	144	131
W258	新水北	SRK2001	雑具	腰掛	スギ	25.5	20.0	2.2	112	144	131
W259	新水北	SRK-2001	雑具	机	スギ	49.2	35.1	2.4	111	145	131
W260	新水北	SZK2001-SRK2001	雑具	机	スギ	44.2	14.9	1.8	111	145	131
W261	新水北	l a層下半	雑具	箱	スギ	15.7	7.2	0.6	112	145	131
W262	新水北	I a層~Ⅱ層	雑具	箱	スギ	16.5	5.2	0.7	112	145	131
_	新水北	1 a層下半~Ⅱ層	雑具	箱		53.5	6.2	1.5	112	145	131
W264		SRK2002	部材	紐結合部材	スギ	33.5	2.2	1.4	112	146	132
	宮ヶ田Ⅲ	包含層(水田部)	部材	紐結合部材	スギ	38.7	2.9	2.2	112	146	132
W266 W267	新水北	II a層 SSK1016-SWK1002	部材	紐結合部材	スギ	43.0	3.0	2.2	112	146	132
W268	新水北	SSK1016-SWK1002	部材部材	紐結合部材 紐結合部材	スギ	46.1	3.0	1.9	112	146	132
W269	新水北	11層	部材	紐結合部材 紐結合部材	スギ	67.8	4.9	3.0	112	146	132
W270	新水北	lla層	部材	紐結合部材	スギ	102.1 121.0	6.0 5.5	4.2	112	146	132
W271	新水北	la層	部材	紐結合部材	スギ	103.9	4.3	3.7 2.7	112	146	132
W272	新水北	SRK2001	部材	紐結合部材	スギ	101.6	1.8	1.4	112	146	132
W273	新水北	IIa層	部材	枘結合部材	スギ	98.1	4.6	2.2		147	133
W274	新水北	包含層	部材	枘結合部材	ヒノキ	103.2	3.5	2.8	113	147	133
-	宮ヶ田III	包含層 (水田部)	部材	枘結合部材	スギ	75.6	5.3	2.0	113	147	133
W276		SRK2001	部材	枘結合部材	スギ	67.5	5.7	3.2	113	147	133
	新水北	I a層下半~Ⅱ層	部材	枘結合部材	スギ	68.7	7.5	2.9	113	147	133
-		SSK1006	部材	枘結合部材	スギ	31.0	17.2	4.2	113	147	133
		包含層(水田部)	部材	柄結合部材	スギ?	34.5	4.6	2.9	113	148	134
		SRY4001	部材	枘結合部材 	スギ	32.8	5.7	3.3	113	148	133
		SSK1001 匀全屋 (水田部)	部材	枘結合部材 不明如++	スギ	38.7	3.2	3.0		148	133
-		包含層(水田部)	部材	不明部材	スギ	33.8	5.9	1.7		148	133
		Ⅲ層?	部材	不明部材 用途不明品	スギ	27.1	3.5	1.3		148	133
		包含層	部材部材	用途不明品	スギ	7.2	2.2	0.7		148	134
		包含層(水田部)	部材	用途不明品	スギ	18.1	3.3	1.1			134
-		SZK2001-SRK2001	部材	用途不明品	スギ	16.7	2.1	1.3			134
			AC 113	, Ada 1 · 7JHH	- • 1	32.8	9.2	2.5	113	148	134

\str.il/m			<u> </u>			法量	<u></u> () は 3	歩 存値	参	照先	Ē.
遺物	地 区	出土遺構	種類	器種	樹種	長さ・直径	幅・器高	厚さ・底径		図版	図版
W288	宮ヶ田III	包含層(水田部)	部材	用途不明品	ヒノキ	9.4	7.8	2.2	113	148	134
W289	新水北	包含層	部材	用途不明品	スギ	24.8	10.4	1.4	113	148	134
W290	宮ヶ田Ⅲ	SSK001	部材	用途不明品	コナラ属アカガシ亜属	37.7	5.3	4.3	113	149	135
W291	新水北	SSK1001-SWK1009	部材	用途不明品	コナラ属アカガシ亜属	30.7	3.2	4.7	113	149	135
W292	宮ヶ田III	包含層 (水田部)	部材	用途不明品	スギ	27.6	9.0	1.7	113	149	134
W293	宮ヶ田川	包含層(水田部)	部材	用途不明品	スギ	40.4	8.8	3.6	113	149	134
W294	宮ヶ田Ⅲ	SSK001	部材	用途不明品	スギ	81.6	9.4	8.9	113	149	134
W295	新水北	I a層	部材	用途不明品	スギ	35.5	2.7	1.8	113	149	135
W296	新水北	包含層	部材	用途不明品	スギ	69.1	2.5	2.0	113	149	135
W297	新水北	I a層下半~Ⅱ層	部材	用途不明品	スギ	32.0	19.0	2.0	113	150	135
W298	宮ヶ田Ⅲ	包含層(水田部)	部材	用途不明品	スギ?	27.7	14.9	1.4	114	150	134
W299	新水北	SSK1012	部材	用途不明品	スギ	53.4	12.8	1.7	114	150	405
W300	新水北	SRK2001	部材	用途不明品	ガマズミ属	61.1	13.8	11.0	114	150	135
W301	新水北	SRK2003	文房具	物差し	スギ	36.0	2.6	3.1	114	151 151	136
W302	新水北	確認調査	祭祀具	杓子形	スギ	9.1	2.6	0.2	114 114	151	136
W303	新水北	l a層	祭祀具	人形	スギ	54.0	2.5	0.6	115	151	136
W304	新水北	SRK2001	祭祀具	斎串 中形	スギ	35.0	6.2	1.0	115	151	136
W305	新水北	SZK2001-SRK2001	祭祀具	舟形 刀形	スギ	87.6	3.8	2.7	115	151	136
W306	新水北	SRK-2001	祭祀具		スギ	46.6	2.8	1.0	115	151	136
W307	新水北	II層 SRK2001	祭祀具祭祀具		スギ	38.1	3.0	0.8	115	151	136
W308 W309	新水北	SRK2001 SRK2001	祭祀具	刀形	針葉樹	34.6	2.9	0.6	115	151	136
W310	割が北	確認調査	祭祀具	刀形	スギ	46.2	5.4	1.0	115	151	136
W310	新水北	唯認調道: SSK1016-SWK1002	· 建築部材	扉板等	スギ	141.9	53.4	3.8	115	152	137
W311	新水北	SSK1016-SWK1002	建築部材	扉板等	スギ	78.4	24.9	2.9	115	152	137
W312	新水北	I a層	建築部材	扉板等	スギ	54.0	24.3	2.1	116	153	137
W314	新水北	SSK1001	建築部材	扉板等	スギ	108.3	28.0	2.3	116	153	138
W315	宮ヶ田川	SSK001	建築部材	扉板等	スギ	42.2	5.8	3.8	116	153	138
W316		SSK1002-SWK1006	建築部材	扉板等	スギ	46.2	25.9	3.4	116	153	137
W317	新水北	II a層	建築部材	扉板等	スギ	42.0	24.5	2.6	116	153	137
W318	新水北	I a層	建築部材	扉板等	スギ	44.2	11.9	2.2	116	154	138
W319	新水北	SSK1001-SWK1011	建築部材	扉板等	スギ	84.1	32.2	4.3	116	154	138
W320	宮ヶ田Ⅲ	SSK001	建築部材	扉板等	スギ	76.8	24.5	2.7	116	154	138
W321	新水北	SSK1010-SWK1014	建築部材	扉板等	スギ	79.0	24.1	3.1	116	154	138
W322	宮ヶ田Ⅲ	SSK003	建築部材	扉板等	スギ	135.0	34.5	3.5	116	155	138
W323	新水北	SSK1001	建築部材	蹴放し	スギ	115.8	16.1	5.1	117	155	139
W324	新水北	SSK1003	建築部材	蹴放し		113.8	9.7	6.1	117	155	139
W325	新水北	SSK1012-SWK1013	建築部材	蹴放し	スギ	158.8	22.7	11.1,8.7	117	156	139
W326	新水北	II a層	建築部材	蹴放し		175.4	14.5	5.2	117	156	139
W327	新水北	SSK1002	建築部材	辺付?	スギ	140.1	10.6	5.1	117	156	139
W328	新水北	包含層	建築部材	楣?	スギ	129.7	32.8	5.2	117	157	139
W329	新水北	SSK1001	建築部材	楣?	スギ	51.2	13.7	6.0	117	157	139
W330	宮ヶ田Ⅲ	SSK001	建築部材	楣?	スギ	76.5	12.8	2.8	118	157	139
W331	新水北	SRK2001	建築部材	屋根妻壁板		88.2	12.9	1.0	118	157	140
W332	新水北	lla層	建築部材	屋根妻壁板		80.8	12.5	1.4	118	157	140
W333	新水北	SRK2001	建築部材	屋根妻壁板		78.6	16.7	1.8	118	157	140
W334		包含層(水田部)	建築部材	屋根妻壁板	スギ	69.9	14.7	2.8	118	157	140
	宮ヶ田III	SSK003	建築部材	壁板	スギ	215.7	22.5	3.4	118	158	140
W336	_	SZK2001-SRK2001	建築部材	壁板		182.2	18.1	2.8	118	158	140
W337		包含層(水田部)	建築部材	壁板	スギ	197.3	14.0	2.4	118	158	140
W338		11層	建築部材	壁板	スギ	177.7	11.6	1.8	118	158	140
W339		SZK2001-SRK2001	建築部材	壁板	スギ	109.8	8.3	2.4	118	158	140
W340		SSK1001-SWK1009	建築部材	壁板	スギ?	138.3	8.7	1.3	118	159 159	141
W341		SRK2001	建築部材	壁板	スギ	149.0	14.9	_	118	159	141
W342		SSK1001	建築部材	壁板	スギ	121.3	24.6	1.7	118	159	141
W343		SSK1016-SWK1002	建築部材	壁板		131.4 127.1	19.7	2.1	118	159	141
W344		ll a層	建築部材	壁板	-	48.4	21.6	2.1	118	159	141
W345		II a層	建築部材建築部材	壁板壁板		53.4	13.8	1.1	118	159	141
W346		SRK2001		壁板	スギ	106.1	20.5	2.9	118	160	141
W347		SRK2001	建築部材建築部材	壁板	77	94.7	17.7	2.9	118	160	141
W348		SRK2001 SSK1001	建築部材	壁板		109.1	17.7	3.2	118	160	141
W349 W350		SZK2001	建築部材	壁板		89.4	18.8	2.1	118	160	141
_			建築部材	壁板		58.2	15.5	1.7	118	160	142
W351		SRK2001 SRK2001	建築部材建築部材	壁板		80.1	9.9	1.7	118	160	142
W352 W353		SSK1002-SWK1001	建築部材	壁板	スギ	172.0	31.4	2.9	118	161	142
W353		SSK1002-SWK1001	建築部材	棟木?	スギ	107.2	21.2	9.2	119	161	142
W354 W355		SSK1007 SSK1003	建築部材	棟木?	スギ	65.6	18.5	8.6	119	161	142
W355		包含層 (水田部)	建築部材	棟木?	スギ	58.0	17.2	4.4	119	162	142
W357		SSK1016-SWK1002	建築部材	棟木?		330.5	17.8	7.5	119	162	142
W357		SSK001	建築部材	梁木?		83.2	18.6	5.3	119	162	142
VV 358	白ヶ田川	JOOROUT	本木印例	本小 :	1 - 2 - 1	30.2	10.0	J.0	1.13	1.52	1 . 72

遺物	地区	出土遺構	種 類	器種	樹種	法量	<u>t (</u>) (t	残存值	参	照台	.
番号						長さ・直径	幅・器高	厚さ・底径	本文頁	図版	図版
W359		SSK001	建築部材	析材(母屋桁?)	スギ	155.8	11.2	5.1	120	163	143
W360 W361		包含層(水田部)	建築部材	桁材(母屋桁?)	スギ	151.5	11.3	4.8	120	163	143
W362		包含層(水田部)	建築部材建築部材	桁材(母屋桁?) 桁材(母屋桁?)	スギ	174.4	12.0	4.6	120	163	143
W363		包含層(水田部)	建築部材	桁材 (母屋桁?)	スギ	129.0 129.9	11.7 4.5	5.3	120	163	143
W364		SZK2001-SRK2001	建築部材	桁材 (母屋桁?)	スギ	72.9	14.2	4.3 3.8	120	163 163	143
W365	宮ヶ田Ⅲ	SSK001	建築部材	桁材 (母屋桁?)	スギ	232.6	15.1	4.7	120	164	143
W366	新水北	SSK1003	建築部材	桁材 (母屋桁?)	スギ	125.7	18.0	5.5	120	164	143
W367	宮ヶ田Ⅲ	SSK001	建築部材	桁材 (母屋桁?)	スギ	119.8	13.4	4.7	120	164	143
W368	宮ヶ田川	包含層(水田部)	建築部材	桁材(母屋桁?)	スギ	72.5	10.9	6.0	120	164	144
W369		SSK1001	建築部材	桁材 (母屋桁?)		80.9	11.2	4.8	120	164	143
W370		11層	建築部材	貫材? (小屋貫?)	スギ	178.2	9.1	4,9	120	165	144
W371 W372	割水北	SSK001	建築部材	東柱(小屋東?)	スギ?	95.4	14.6	13.7	121	165	144
W372		SRK2001 II a層	建築部材	垂木等		154.4	7.5	2.4	121	166	144
W374		SSK001	建築部材建築部材	垂木等 垂木等	スギ	149.7	6.8	3.5	121	166	144
W375		SSK001	建築部材	垂木等	スギ	107.6 166.9	5.7 6.1	3.5	121	166	144
W376	新水北	SRK2001	建築部材	垂木等	スギ	125.4	8.7	6.2 7.3	121	166 166	144
W377	宮ヶ田川	包含層 (水田部)	建築部材	垂木等	スギ	54.0	4.8	4.0	121	167	144
W378	新水北	11層	建築部材	垂木等	スギ	121.2	7.1	3.1	121	167	145
W379	新水北	SRK-2001	建築部材	垂木等		92.5	6.7	3.7	121	167	145
W380	新水北	SSK1001	建築部材	垂木等	スギ	53.6	4.8	4.3	121	167	145
W381	宮ヶ田III	包含層(水田部)	建築部材	垂木等	スギ	27.5	3.1	2.2	121	167	145
W382	新水北	I a層下半~Ⅱ層	建築部材	梯子	クリ	131.8	16.7	13.0	121	167	145
W383	宮ヶ田Ⅲ	包含層 (水田部)	建築部材	梯子	スギ	126.4	7.9	5.6	121	167	145
W384	新水北	I a層下半~Ⅱ層	建築部材	梯子	スギ	63.8	9.2	8.1	121	168	145
W385 W386	新水北 新水北	SSK1003	建築部材	梯子	スギ	69.2	17.7	15.2	121	168	145
W387	新水北	I a層 SRK2001	建築部材建築部材	留具または把手 枘孔のある板(狭幅)	スギ	11.2	5.2	1.2	121	168	145
W388	新水北	SSK1001-SWK1012	建築部材	柄孔のある板 (狭幅)	スギ	147.8	14.8	4.9	122	168	146
W389	新水北	SSK1004 ?	建築部材	柄孔のある板 (狭幅)	スギ	179.1 192.5	12.9	4.9	122	168	146
W390	新水北	IIa層	建築部材	柄孔のある板 (狭幅)	7.1	105.9	19.8	5.2 6.3	122 122	168 169	146 146
W391	宮ヶ田III	SSK001	建築部材	枘孔のある板 (狭幅)	スギ	149.3	20.5	4.9	122	169	146
W392	宮ヶ田川	SSK001	建築部材	枘孔のある板 (狭幅)	スギ	135.4	16.4	4.6	122	169	146
W393	宮ヶ田III	SSK001	建築部材	枘孔のある板 (狭幅)	スギ?	127.1	15.9	6.2	122	169	146
W394	宮ヶ田Ⅲ	SSK001	建築部材	枘孔のある板 (狭幅)	スギ	99.0	16.4	4.0	122	169	146
W395	新水北	SSK1001	建築部材	枘孔のある板 (狭幅)	スギ	72.4	15.5	3.1	122	169	147
W396	宮ヶ田Ⅲ	SSK001	建築部材	枘孔のある板(狭幅)	スギ	44.7	16.3	7.9	122	169	147
W397	宮ヶ田川	SSK001	建築部材	枘孔のある板(狭幅)	スギ	120.1	14.8	3.1	122	169	146
W398 W399	新水北宮ヶ田Ⅲ	SSK1003	建築部材	柄孔のある板(狭幅)	スギ	110.7	15.1	3.5	122	170	147
W400	新水北	包含層(水田部) SRK-2001	建築部材建築部材	枘孔のある板(狭幅) 枘孔のある板(狭幅)	スギ	61.0	9.7	1.8	122	170	147
W401	宮ヶ田川	SSK001	建築部材	村孔のある板 (狭幅)	スギ	115.2	11.5	3.8	122	170	147
W402	新水北	SZK2001-SRK2001	建築部材	村孔のある板(狭幅)	スギ	88.5 70.2	12.2 12.4	4.9	122	170 170	147
W403	宮ヶ田川	包含層(水田部)	建築部材	枘孔のある板 (狭幅)	スギ	116.8	10.7	4.3	122	170	147
W404	新水北	l a層	建築部材	枘孔のある板 (狭幅)		61.5	11.0	4.7	122	170	147
W405	新水北	SSK1010-SWK1009	建築部材	枘孔のある板(狭幅)	スギ	143.0	8.4	4.5	122	170	148
-	新水北	SRK2001	建築部材	枘孔のある板(狭幅)	スギ	51.4	10.0	2.8	122	170	148
W407	新水北	SSK1002-SWK1006	建築部材	枘孔のある板 (狭幅)		59.6	11.4	3.2	122	170	148
W408	新水北	SSK1002	建築部材	枘孔のある板 (狭幅)		107.8	9.4	4.2	122	170	148
W409	新水北	SRK2001	建築部材	枘孔のある板 (狭幅)	スギ	70.4	12.4	3.8	122	170	148
W410 W411	新水北 新水北	II層 SSK1001	建築部材	枘のある材	スギ	56.2	12.2	3.0	122	171	148
W412	新水北	SSK1001	建築部材 建築部材	枘のある材 枘のある材	スギ	91.9	12.0	2.6	122	171	148
W413	新水北	SZK2001-SRK2001	建築部材	枘のある材		73.3 112.1	4.4	1.9	122	171	148
W414	新水北	SRK2001	建築部材	枘孔のある厚板	スギ	166.1	23.7	1.8 4.6	122	171 171	148
_	新水北	SSK1001	建築部材	枘孔のある厚板	スギ	115.5	16.4	6.1	122	171	148
W416	新水北	SRK2001	建築部材	枘孔のある厚板	スギ	118.7	13.5	4.1	122	172	149
W417	新水北	I a層下半	建築部材	枘孔のある厚板	1 20	105.8	14.4	2.6		172	149
-		SSK1001	建築部材	枘孔のある厚板		65.2	10.0	3.5	122	172	149
		SSK1001	建築部材	枘孔のある厚板	スギ	89.5	10.2	3.7	122	172	149
		SSK1001	建築部材	枘孔のある厚板		63.5	18.9	3.6	122	172	149
	-	SSK1008	建築部材	枘孔のある棒状材	- P	81.2	6.6	6.0		172	149
		包含層(水田部)	建築部材	枘孔のある棒状材	スギ	75.7	7.3	2.8		172	149
	新水北	SRK2001 II a層	建築部材建築部材	枘孔のある棒状材	スギ	61.2	5.2	2.9		172	149
		SSK1002-SWK1006	建築部材	枘孔のある棒状材 枘孔のある棒状材	スギ	77.9	6.2	5.0		172	149
	新水北	II a層	建築部材	村孔のある棒状材	1	77.0 63.3	5.4 4.9	5.7		173	149
-		SSK001	建築部材	切り欠きのある棒状材	スギ	141.9	12.0	3.1 5.0		173 173	149
		SSK1002-SWK1006	建築部材	切り欠きのある棒状材		116.9	4.1	2.7		173	150
		SRK2001	建築部材	切り欠きのある棒状材		93.6	3.0	1.8		173	150
						50.0	5.0	1.0	120	.,,,	.00

遺物					1+1 75	法 量	1 () は?	残存值	参	照先	3
番号	地 区	出土遺構	種 類	器種	樹種	長さ・直径	幅・器高	厚さ・底径	本文頁	図版	図版
W430	宮ヶ田川	SSK001	建築部材	切り欠きのある棒状材	スギ	63.1	5.8	3.5	123	173	150
W431	新水北	SSK1008	建築部材	転用矢板	スギ	55.1	14.9	1.3	123	173	150
W432	新水北	II a層	建築部材	転用矢板	スギ	45.6	7.9	1.2	123	173	150
W433	新水北	SZK2001	建築部材	転用矢板	スギ	42.8	4.5	1.4	123	173	150
W434	新水北	SSK1001	建築部材	転用杭		140.4	5.7	3.6	123	174	150
W435	新水北	SSK1001	建築部材	転用杭		118.1	3.5	2.3	123	174	150
W436	新水北	SSK1001	建築部材	転用杭		119.0	7.4	3.7	123	174	150
W437	新水北	SRK2001	建築部材	その他		94.7	3.6	2.3	123	174	150
W438	新水北	SRK2001	建築部材	その他		94.7	4.5	2.0	123	174	150
W439	新水北	包含層	建築部材	その他	スギ	68.2	8.7	6.9	123	174	151
W440	新水北	SZK2001-SRK2001	建築部材	その他		61.9	3.1	1.7	123	174	151
W441	新水北	SRK2001	建築部材	その他	スギ	93.2	21.9	4.3	123	175	151
W442	新水北	SSK1002-SWK1006	建築部材	その他	スギ	126.6	30.2	6.2	123	175	151
W443	新水北	SSK1002-SWK1006	建築部材	その他	スギ	85.6	8.9	4.6	123	175	151
W444	新水北	SSK1001	建築部材	その他	スギ	61.3	6.8	2.9	123	175	151
W445	新水北	SSK1001	建築部材	その他		46.5	7.8	4.2	124	175	151

石製品

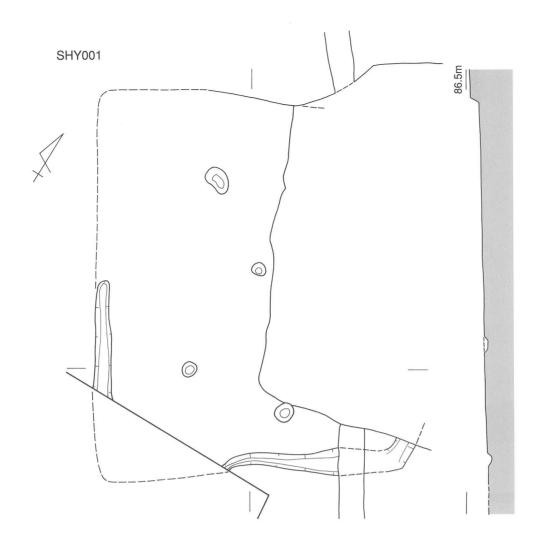
仙衣	нн											
遺物	=	.1. ()# 1#	RB 174	石材		法	量		残 存 状 況	参	照先	
番号	地 区	出土遺構	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量(g)	72 IT 10 70	本文頁	図版	写真
S21	新水北	包含層	石鏃	サヌカイト	1.90	1.50	0.40	0.8	わずかに欠損	124	176	152
S22	新水北	包含層	石鏃	サヌカイト	3.30	1.75	0.40	1.9		124	176	152
S23	新水北	包含層	打製石斧	安山岩	11.90	4.50	1.70	100.0		124	176	152
S24	新水北	包含層	スクレイパー	頁岩?	6.30	4.00	0.70	21.0		124	176	152
S25	宮ヶ田川	包含層 (水田部)	スクレイパー	サヌカイト	7.20	4.55	1.05	28.2		124	176	152
S26	宮ヶ田Ⅲ	SHK057	敲石		7.60	6.70	6.30	390.0		124	177	153
S27	新水北	Ia層	砥石	凝灰岩	14.40	5.80	4.10	560.0		124	177	153
S28	新水北	SRK2001	砥石	砂岩	15.20	11.40	6.70	1000.1	ほぼ半分	124	177	153
S29	宮ヶ田川	SHK083	砥石	凝灰岩	20.20	4.60	3.90	415.0		124	177	153
S30	宮ヶ田Ⅲ	SHK066	砥石	砂岩?	11.90	7.00	2.80	160.0	一部欠損	124	178	153
S31	宮ヶ田川	SHK031	砥石	凝灰岩	7.60	3.80	2.05	90.0	一部欠損	124	178	153
S32	宮ヶ田川	SHK046	砥石	凝灰岩	20.70	9.20	5.30	1000.1	再加工	124	178	154
S33	宮ヶ田川	SHK049	紡錘車	滑石	3.80	3.90	0.80	14.4		124	178	154
S34	宮ヶ田川	SPC029	石臼	礫岩	24.20	19.50	19.60	11170.0	一部分	124	179	154
S35		SKC020	石材	礫岩	24.00	19.00	7.40	4250.0		124	179	154

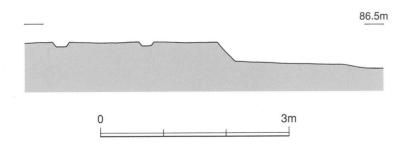
金属製品

遺物番号	地区	出土遺構	種 類	器 種	法		量	備考	参	参 照 先		
					長さ	幅	底 径	·)用	本文頁	図版	写真	
M51	宮ヶ田Ⅲ	SFR001東側溝	鉄鏃	鉄	8.0	0.5	0.5		125	180	155	
M52	宮ヶ田川	SPK012	刀子	鉄	5.2	0.6	0.5		125	180	155	
M53	宮ヶ田川	包含層	釘	鉄	5.6	0.7	0.7		125	180	155	
M54	新水北	0 a層	鎌	鉄	22.0	0.5	0.5		125	180	155	
M55	新水北	包含層	刀子	鉄	20.5	0.7	0.5		125	180	155	
M56	新水北	搅乱土	楔	鉄	21.5	0.8	0.5		125	180	155	
M57	宮ヶ田I	包含層	刀子	鉄	6.0	0.5	0.5	トレンチ47A出土	125	180	155	
M58	宮ヶ田川	SHK079	鉄滓	鉄	4.7	0.6	0.7		125	180	155	
M59	宮ヶ田川	包含層	銅銭	銅	2.1	0.7	0.7	元□□寶	125	181	155	
M60	新水北	0層	銅銭	銅	2.4	0.5	0.5	皇宋通寶	125	181	155	
M61	新水北	包含層	銅銭	銅	2.4	0.5	0.5	永楽通寶	125	181	155	
M62	新水北	包含層	銅銭	銅	2.4	1.5	0.6	寛永通寶	125	181	155	
M63	新水北	川層	煙管	銅	5.4	0.7	0.5	吸口部	125	181	155	
M64	新水北	包含層	馬具	銅	5.0	0.8	0.5	鞖(管金物)	125	181	155	

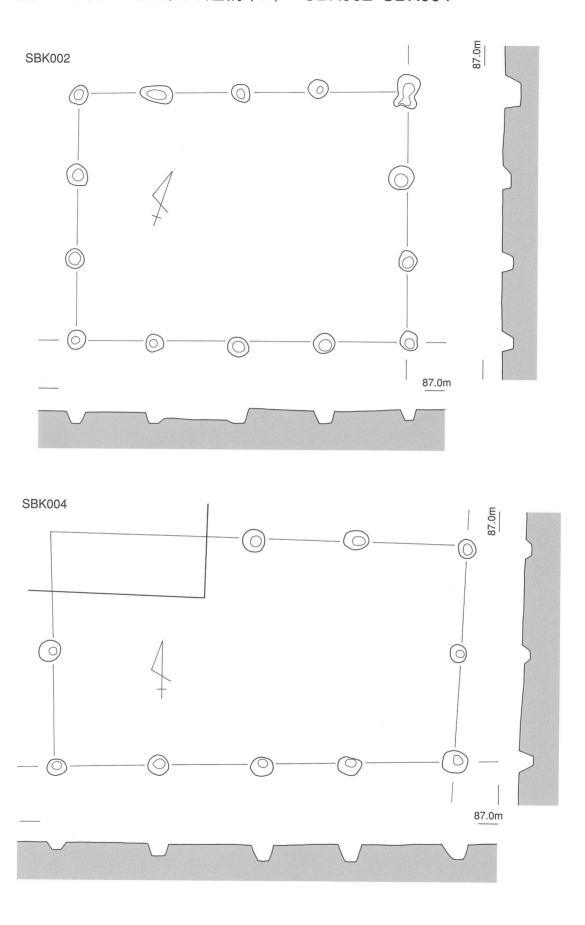
図 版

図版1 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(1) SHY001



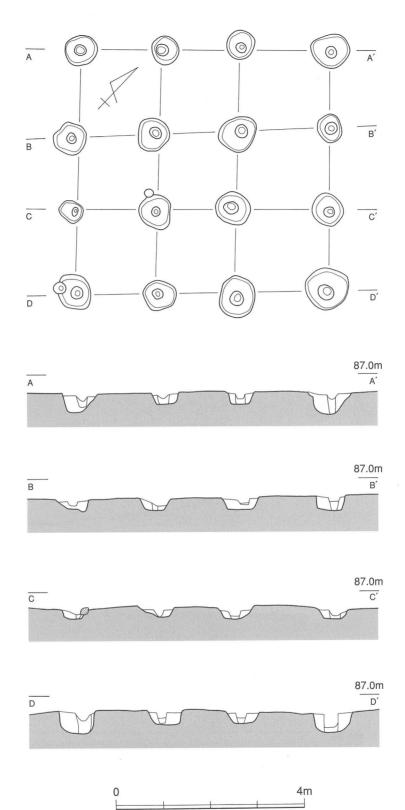


図版 2 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(2) SBK002·SBK004

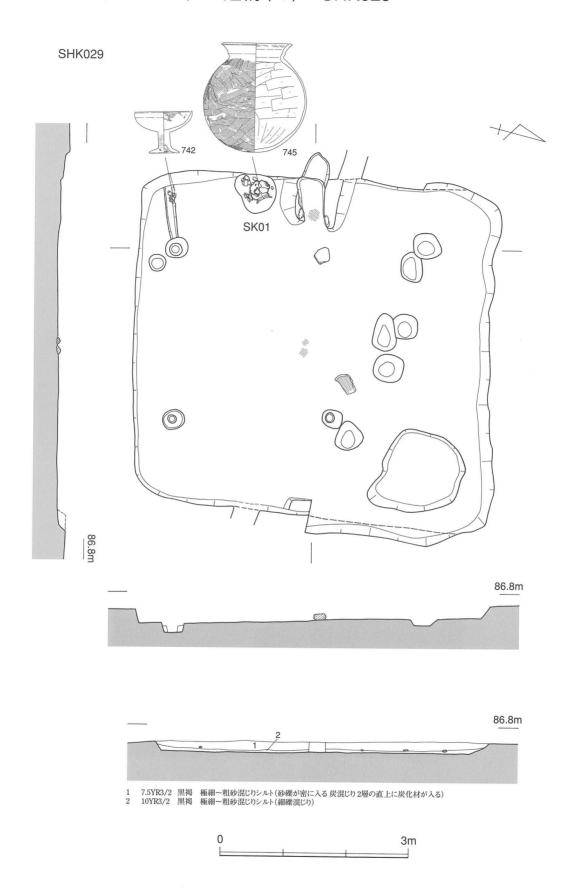


0 4m

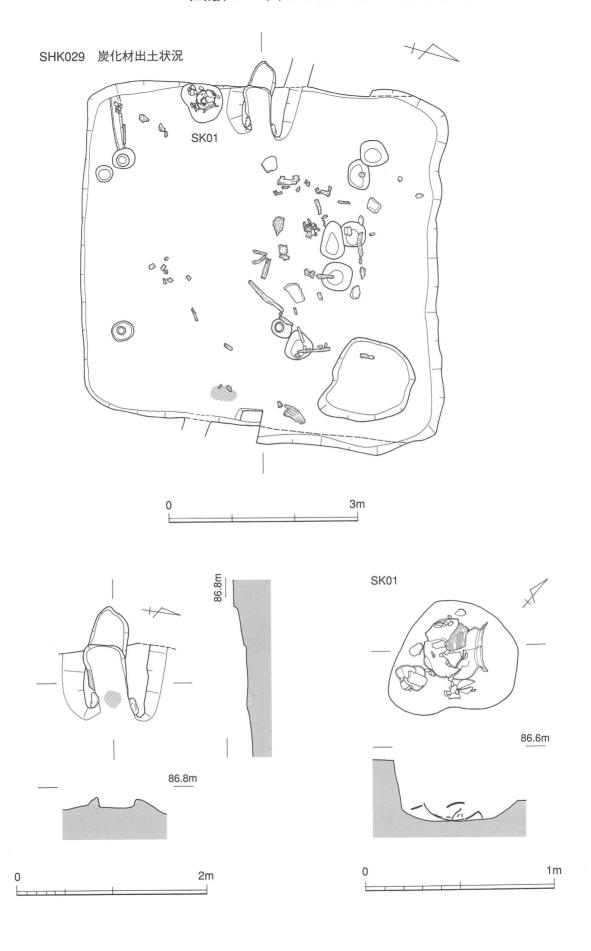




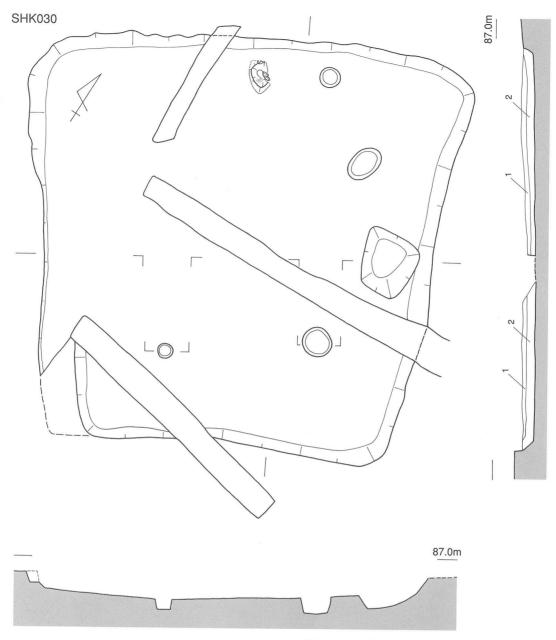
図版 4 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(4) SHK029



図版 5 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(5) SHK029



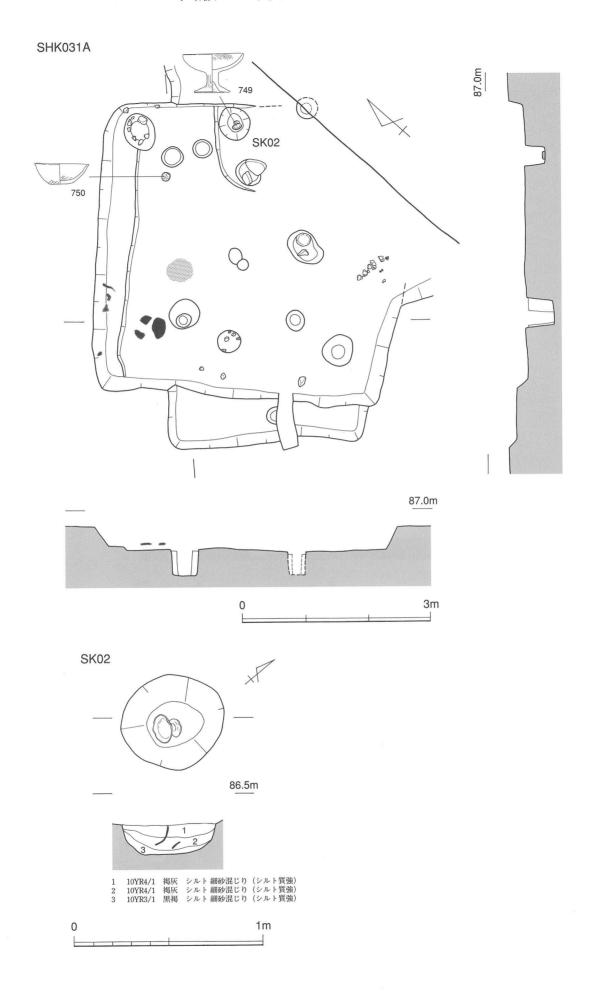
図版 6 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(6) SHK030



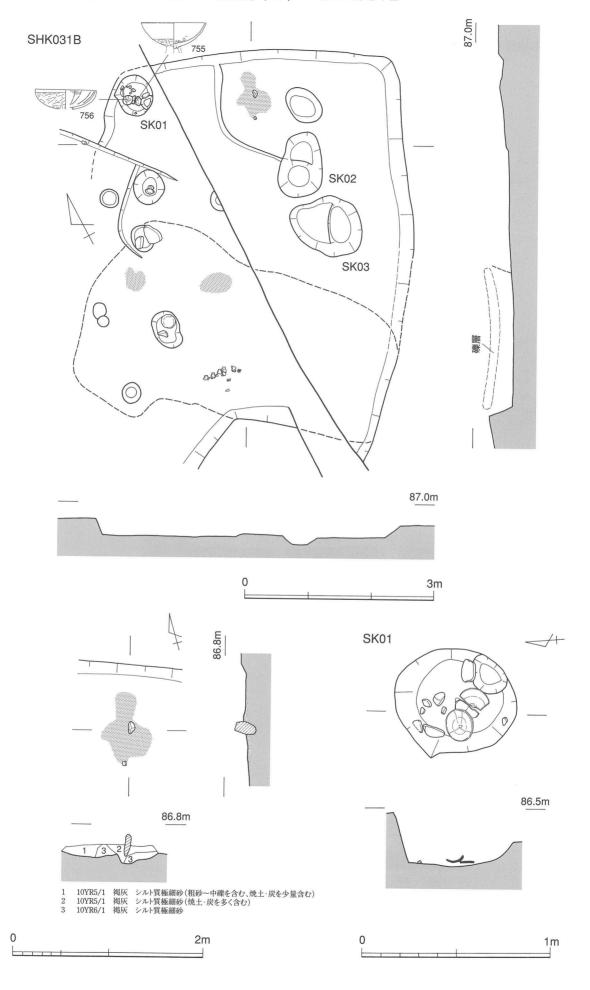
1 7.5Y4/1 灰 シルト混じり細砂~極細砂 (中砂、 $_{\phi}$ 1cm程度の礫を含む) 2 7.5Y4/1 灰 シルト質極細砂 (土器、 $_{\phi}$ 1cm程度の礫を含む)



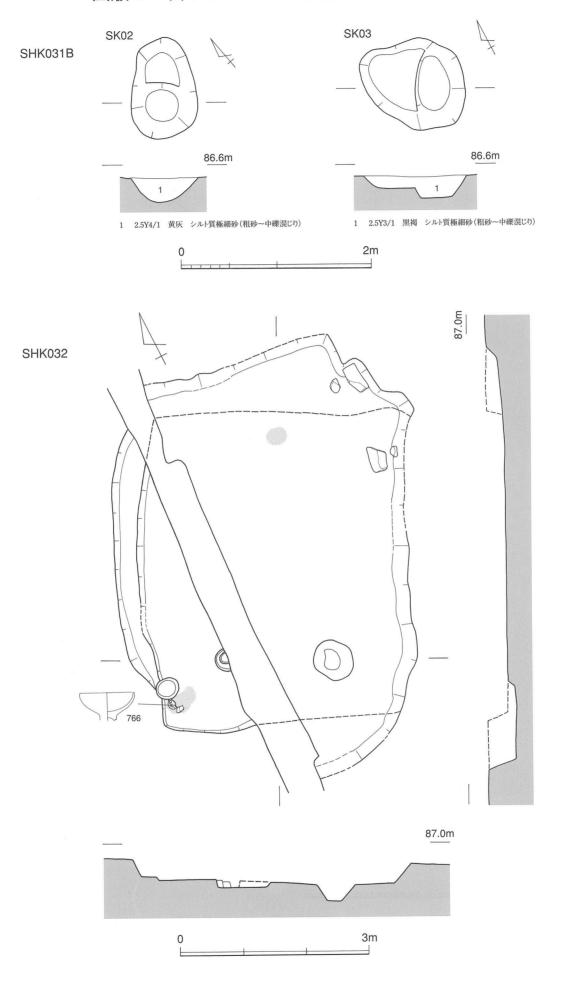
図版7 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(7) SHK031A



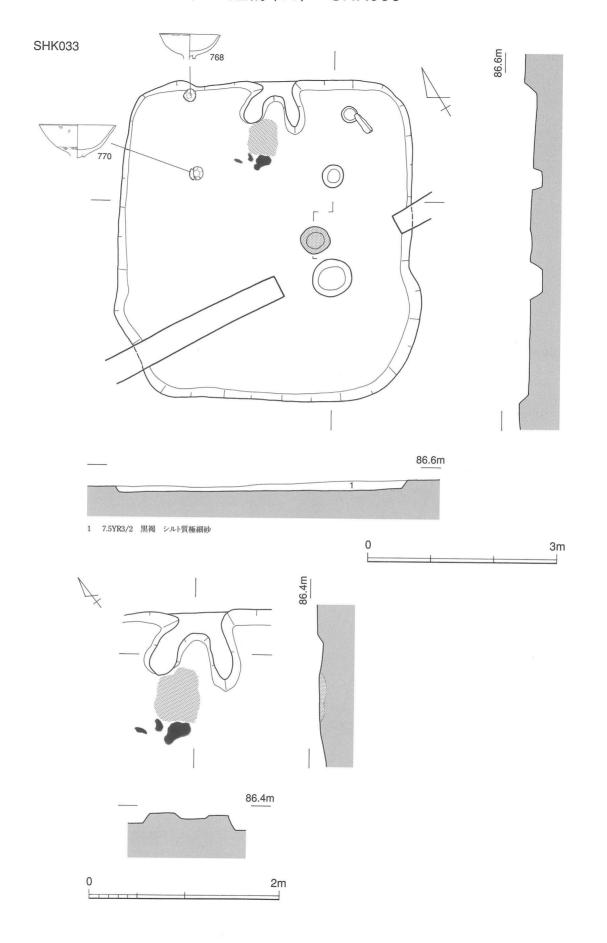
図版8 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(8) SHK031B



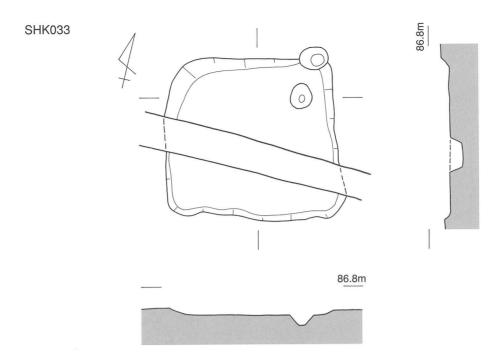
図版 9 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(9) SHK031B・SHK032

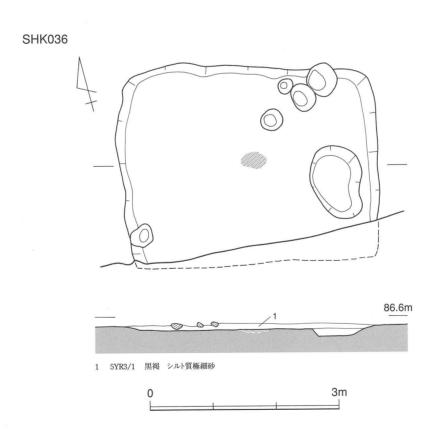


図版10 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(10) SHK033

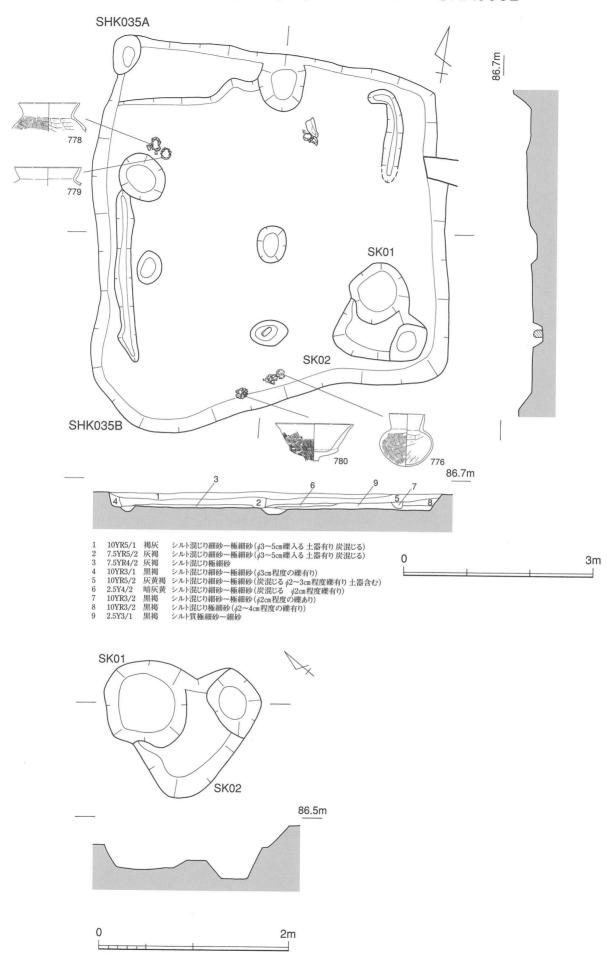


図版11 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(11) SHK034・SHK036

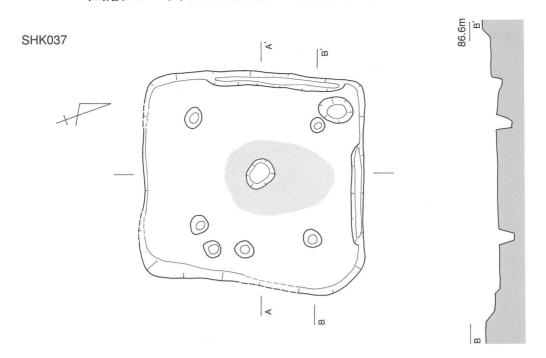




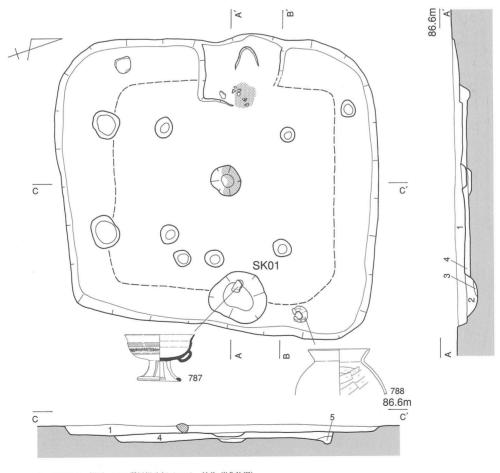
図版12 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(12) SHK035A・SHK035B



図版13 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(13) SHK037・SHK038



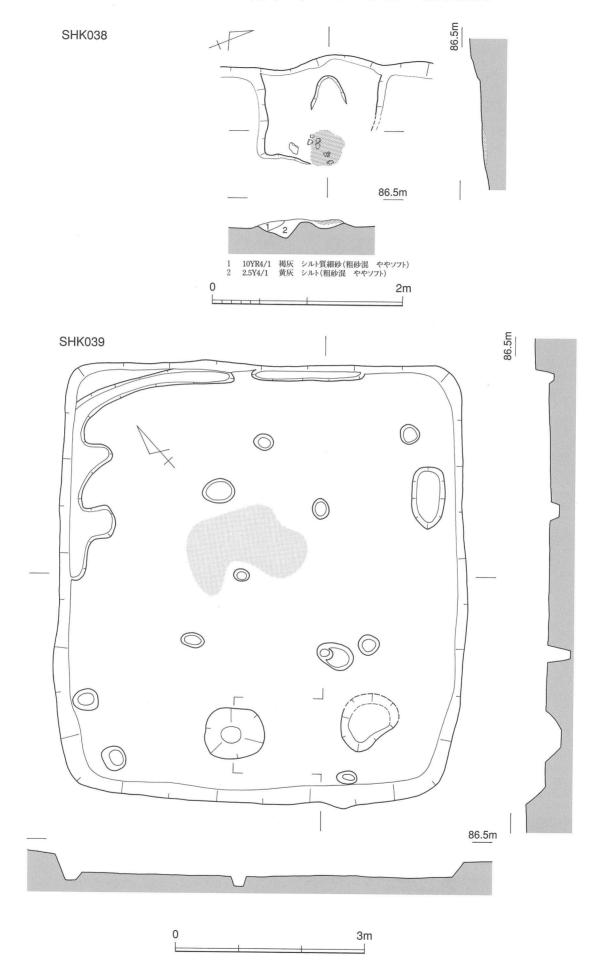


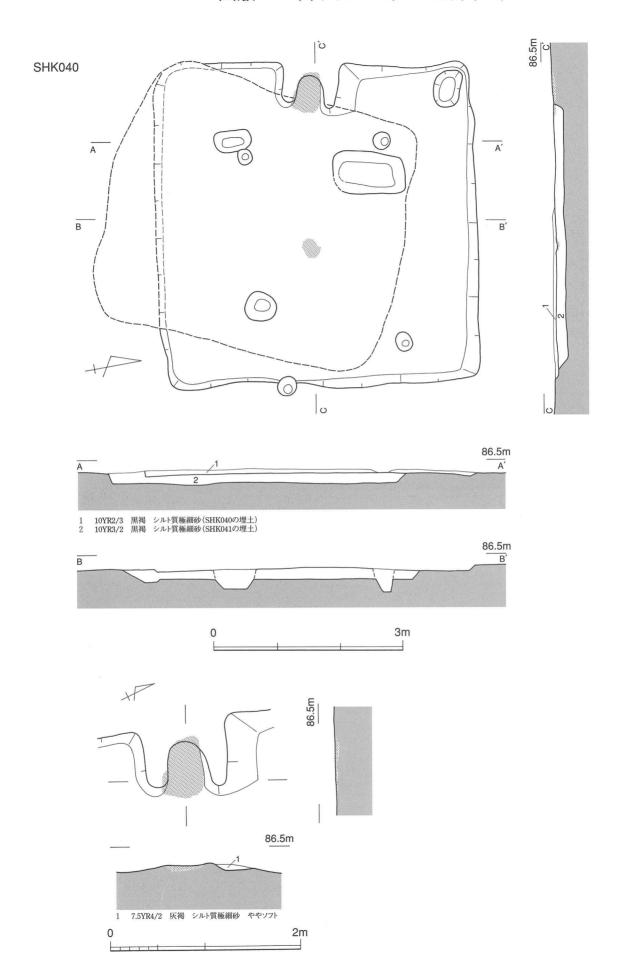


3m

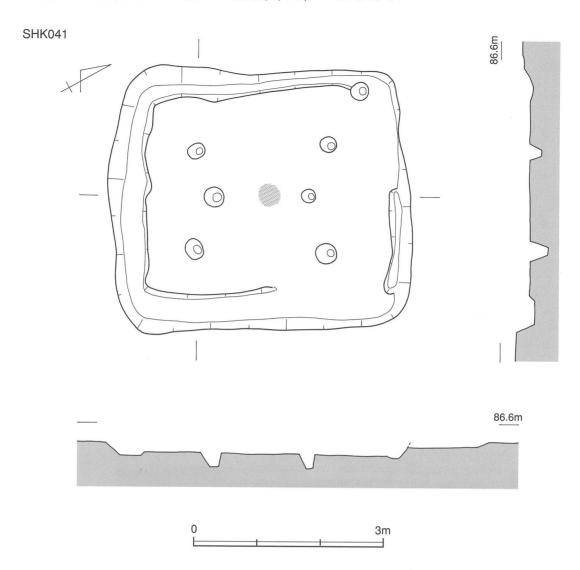
- 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂(ややソフト 鉄分・炭化物混) 10YR5/1 褐灰 極細砂質シルト 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂 5Y3/2 オリーブ黒 シルト質極細砂 2.5Y3/2 黒褐 シルト質極細砂

図版14 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(14) SHK038・SHK039

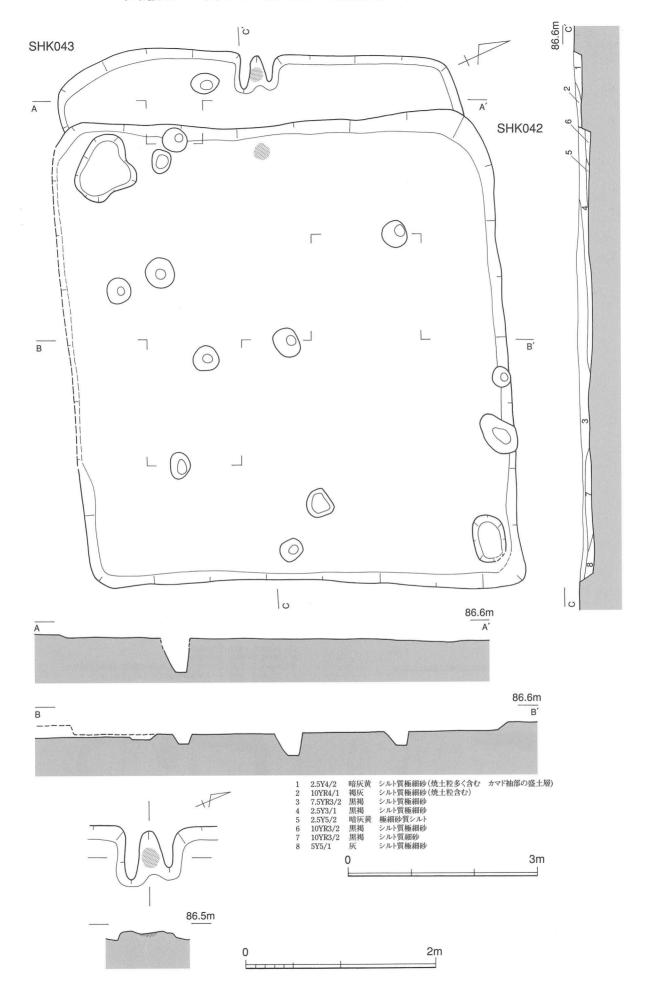




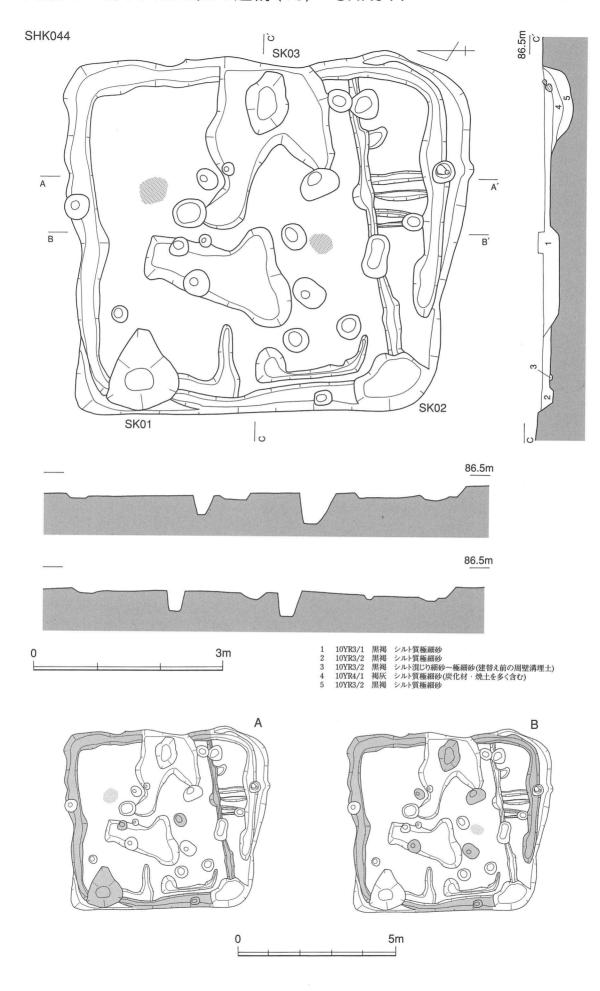
図版16 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(16) SHK041

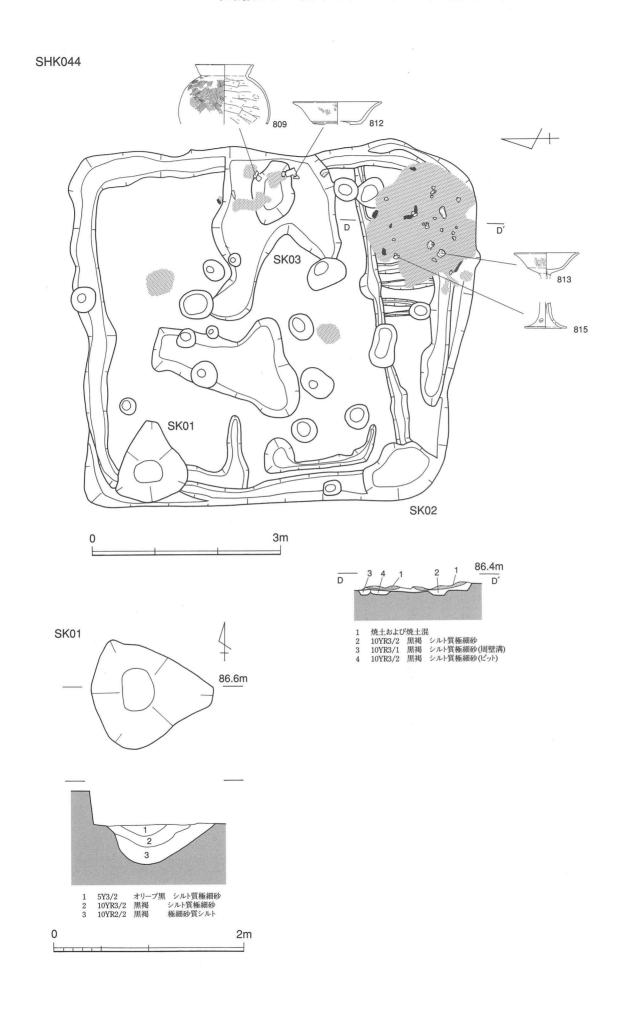


図版17 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(17) SHK042・SHK043

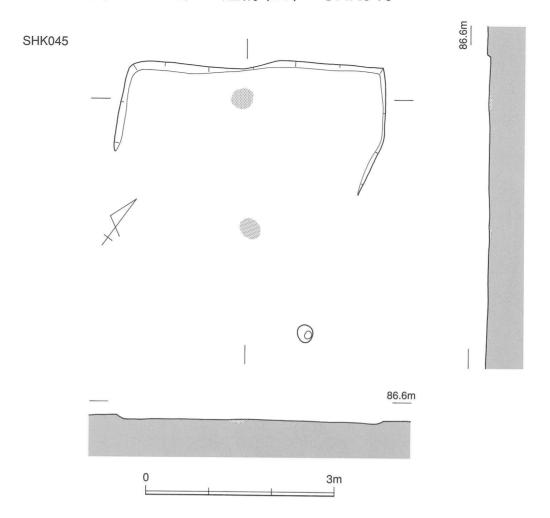


図版18 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(18) SHK044

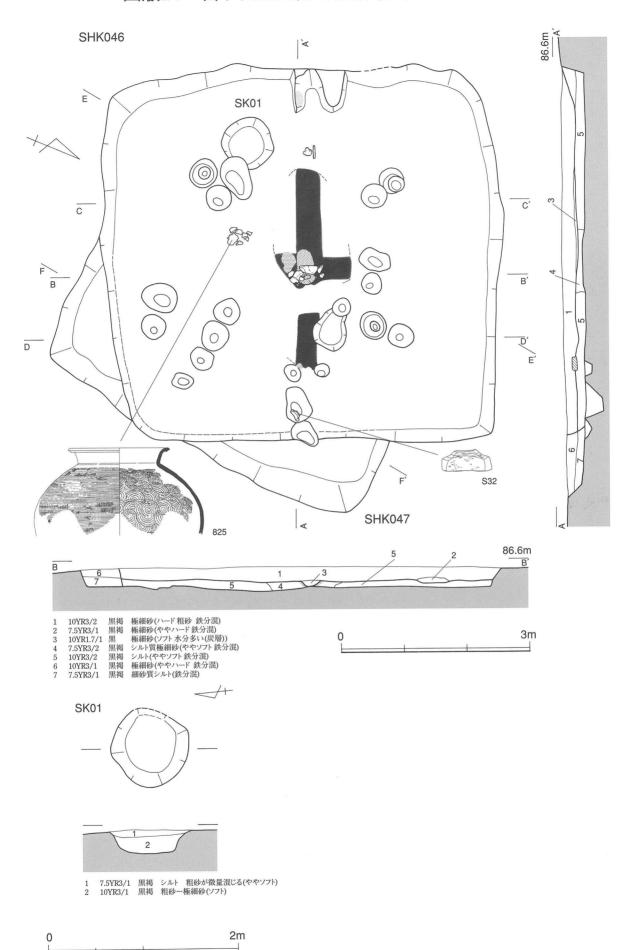




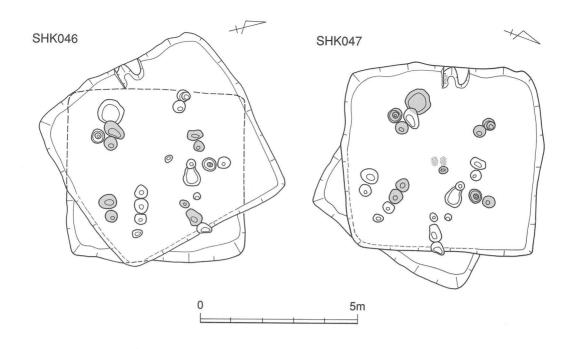
図版20 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(20) SHK045

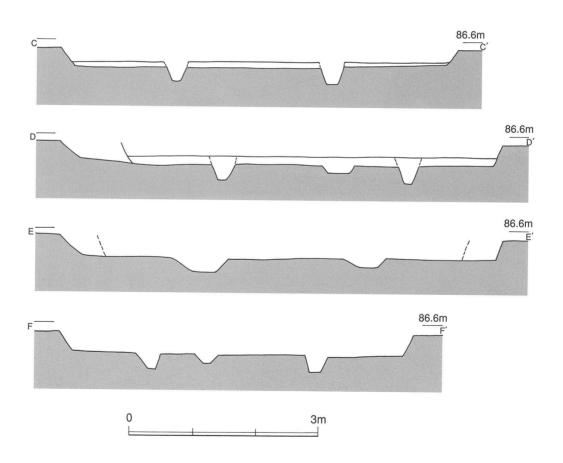


図版21 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(21) SHK046・SHK047

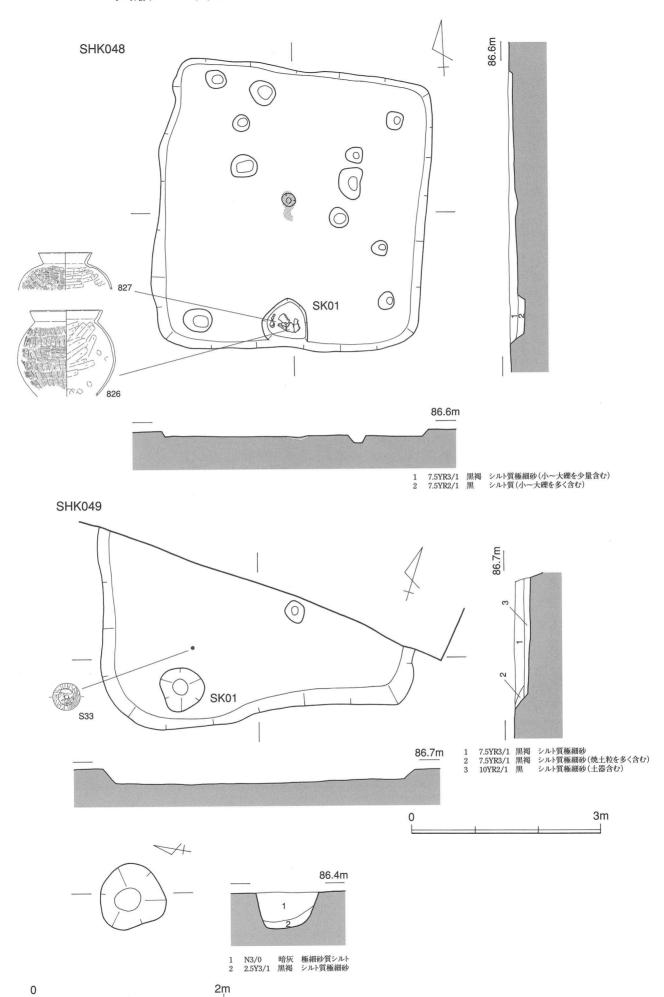


図版22 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(22) SHK046・SHK047

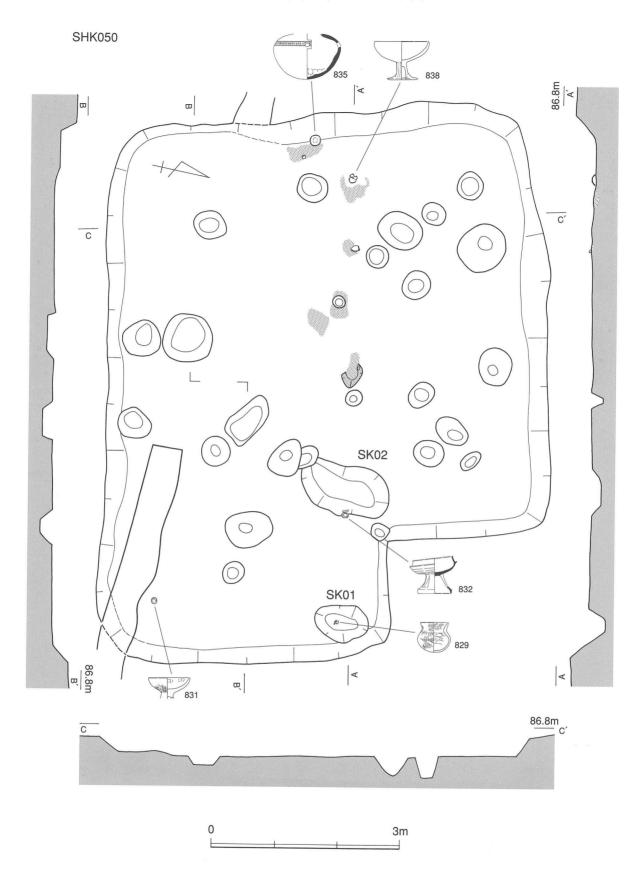




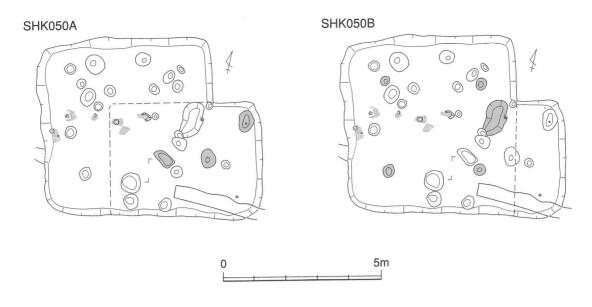
図版23 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(23) SHK048・SHK049

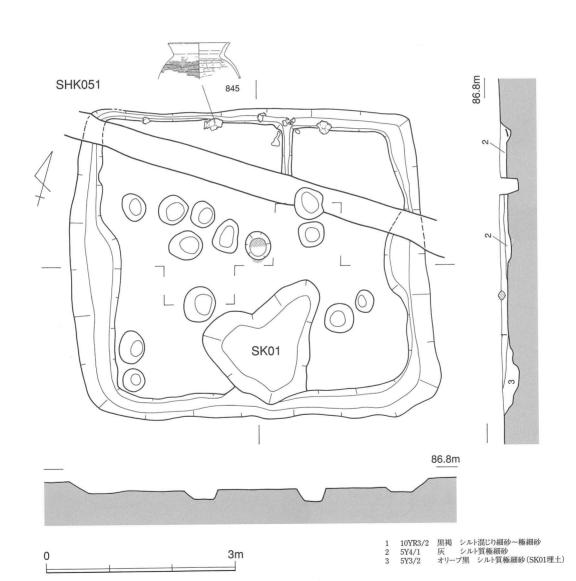


図版24 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(24) SHK050

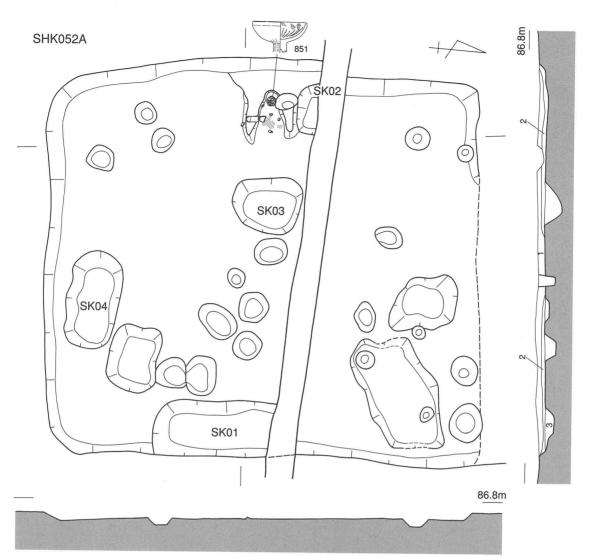


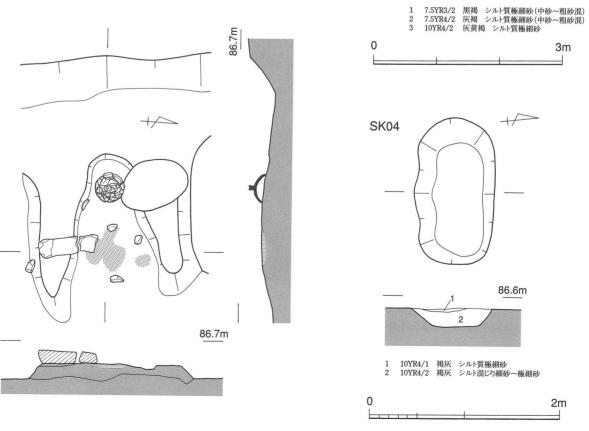
図版25 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(25) SHK050A・SHK050B・SHK051



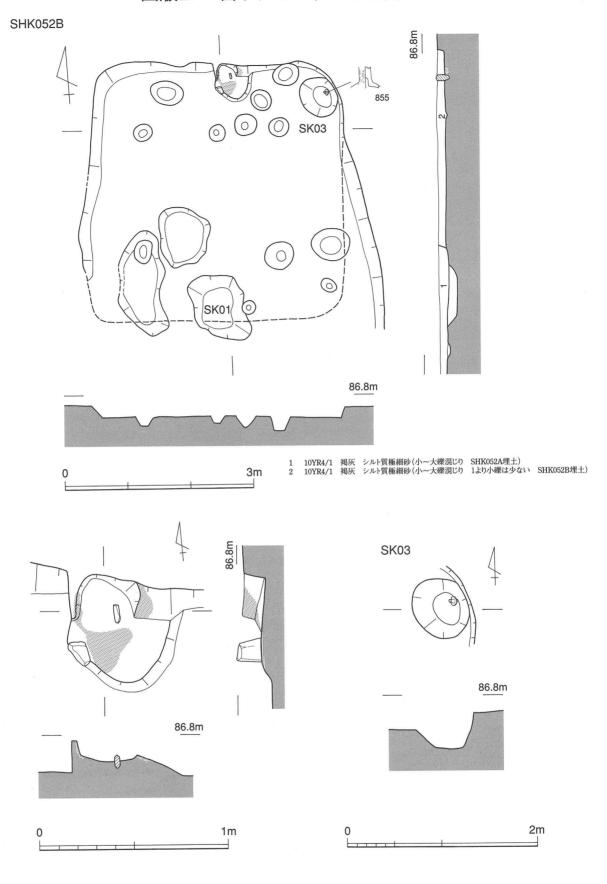


図版26 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(26) SHK052A

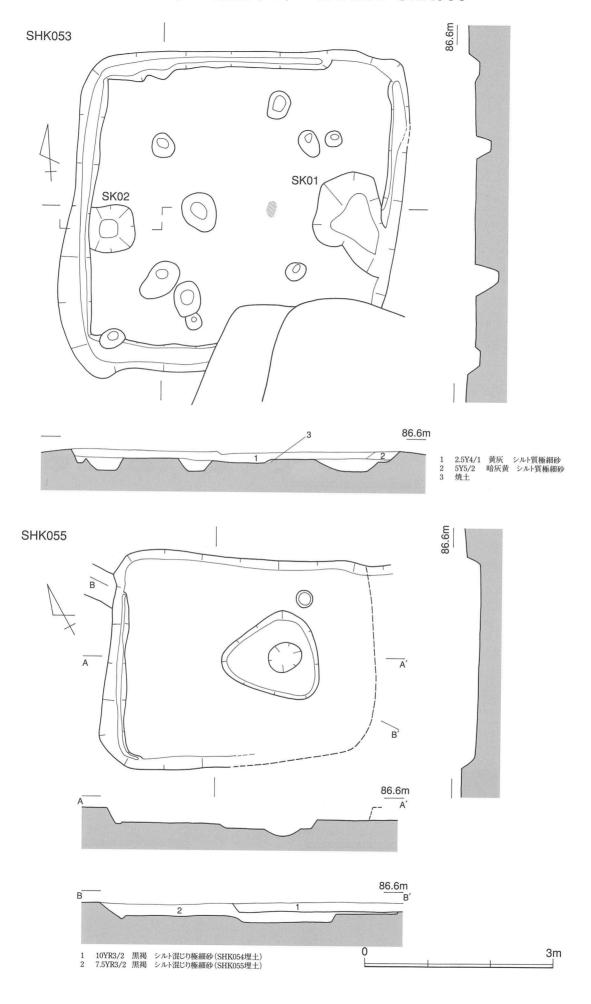


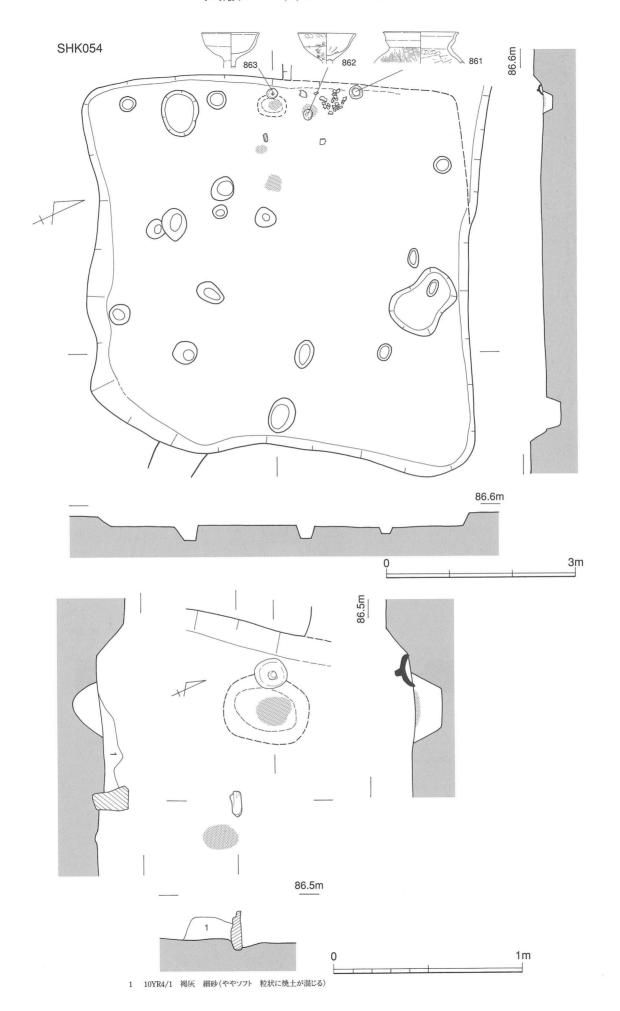


図版27 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(27) SHK052B

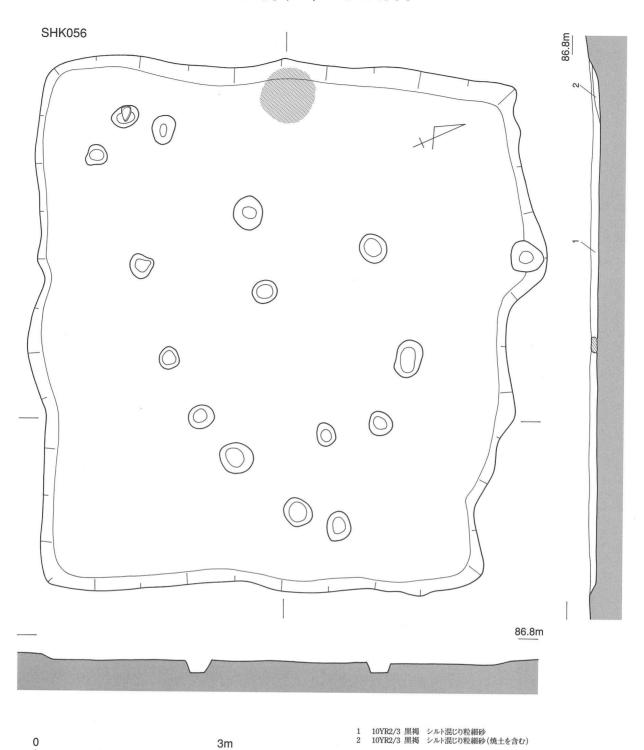


図版28 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(28) SHK053·SHK055

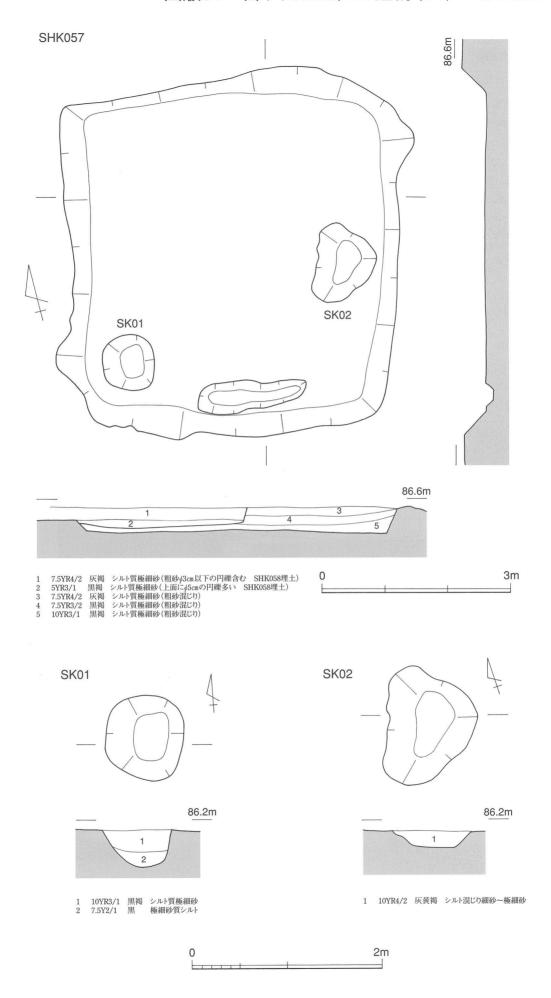




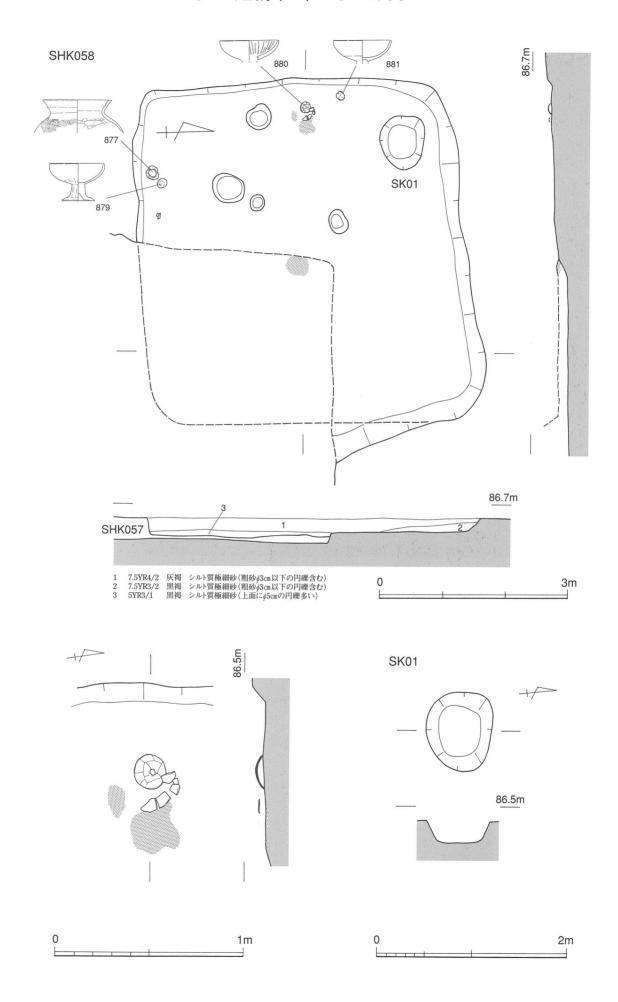
図版30 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(30) SHK056



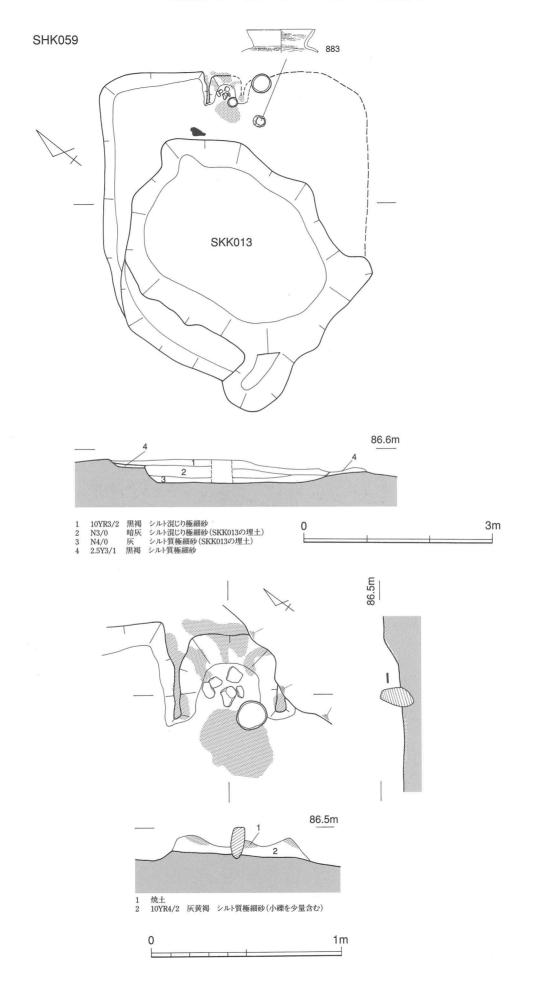
図版31 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(31) SHK057



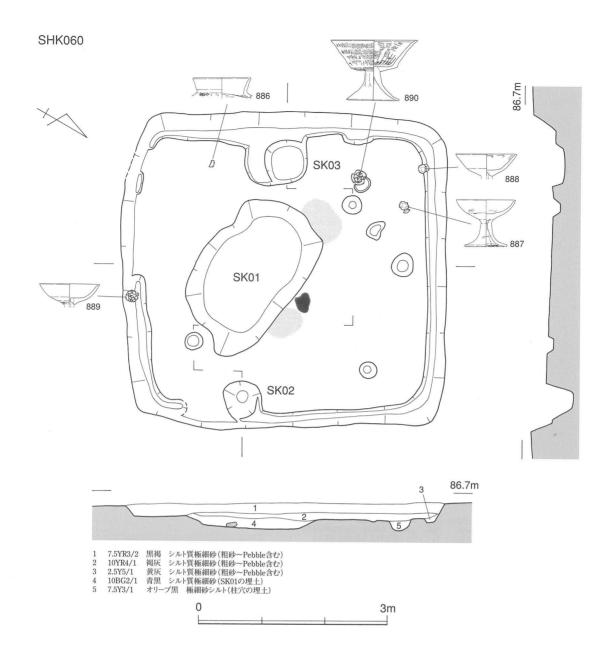
図版32 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(32) SHK058



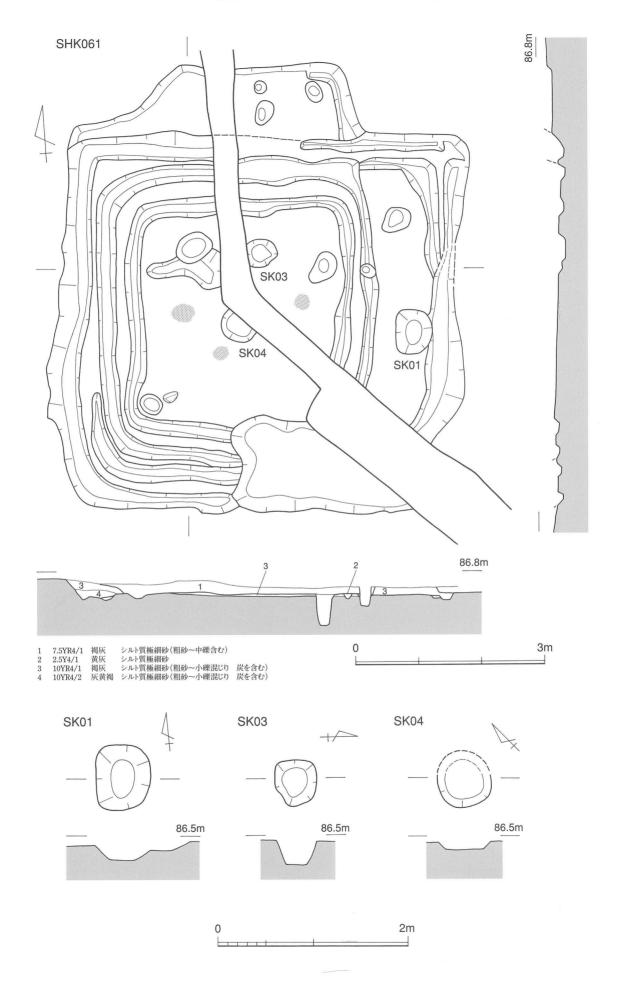
図版33 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(33) SHK059



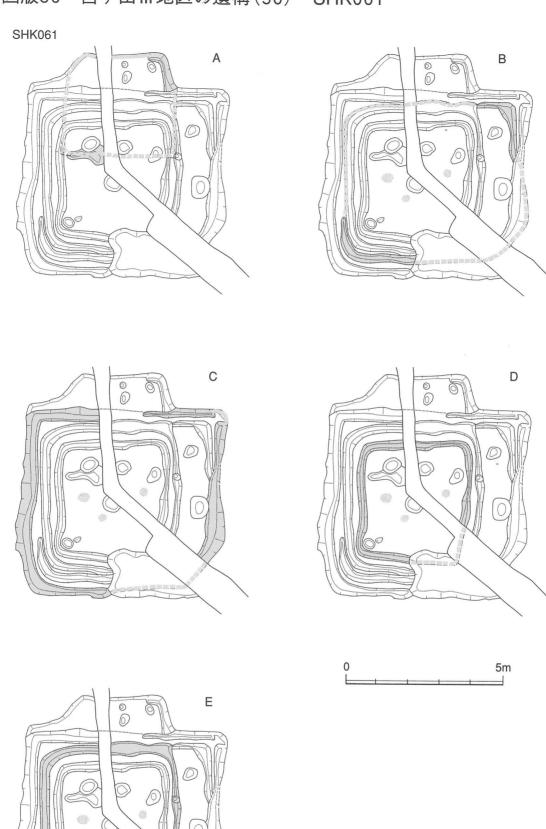
図版34 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(34) SHK060



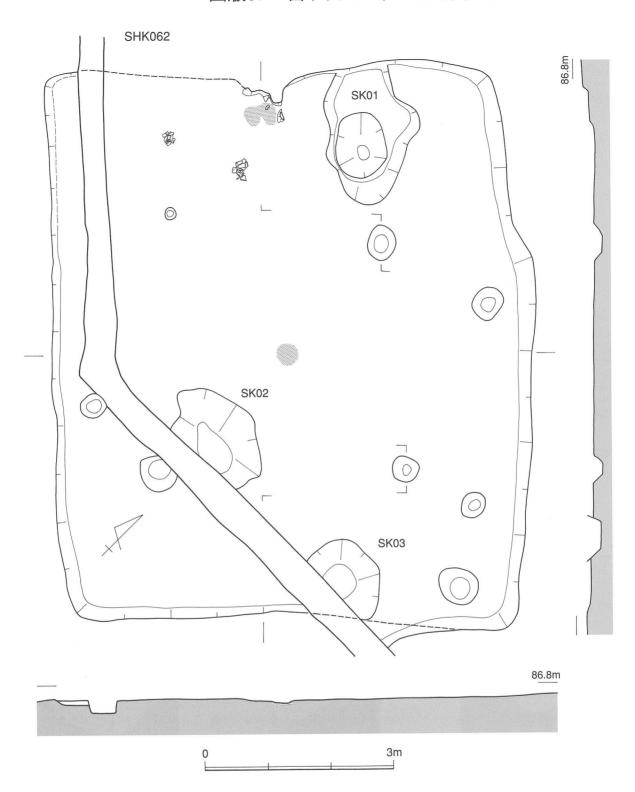
図版35 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(35) SHK061



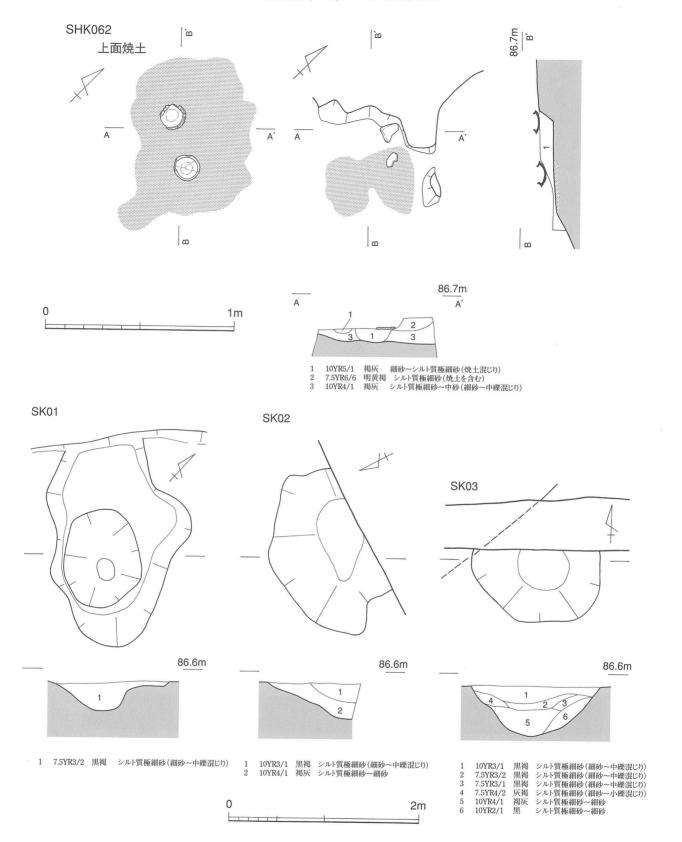
図版36 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(36) SHK061



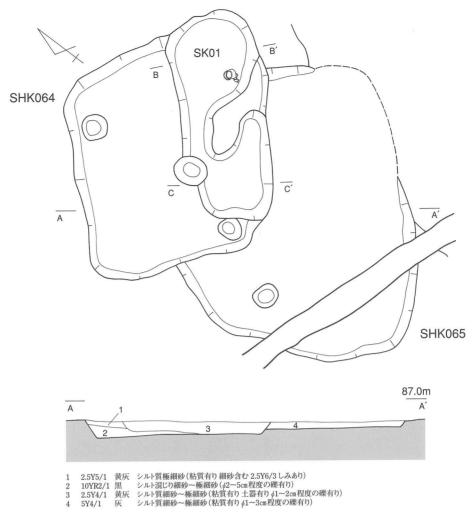
図版37 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(37) SHK062



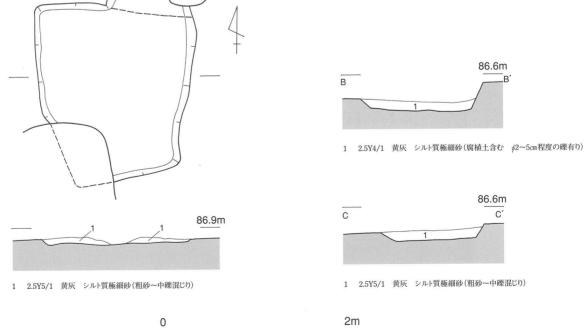
図版38 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(38) SHK062



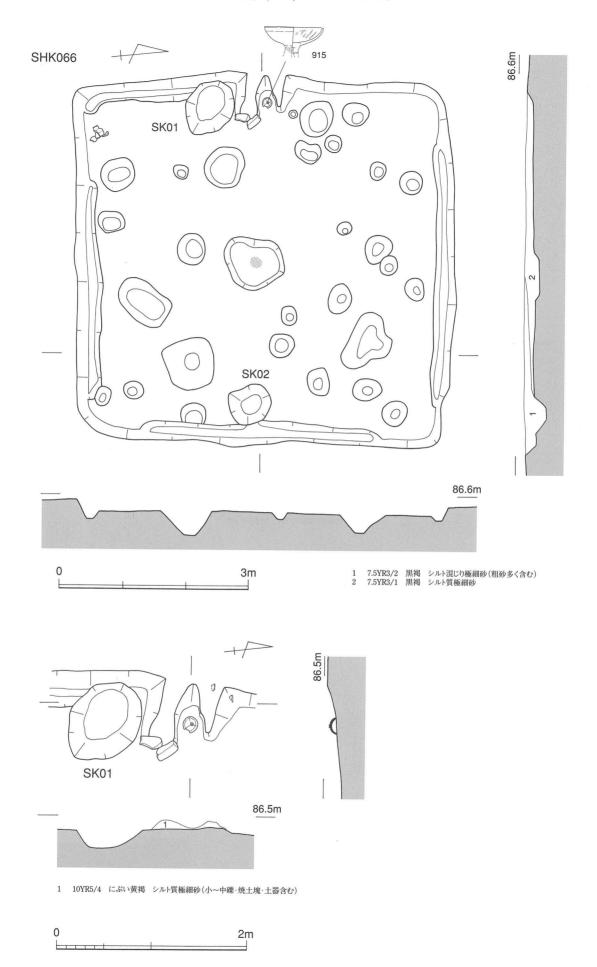
図版39 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(39) SHK063・SHK064・SHK065



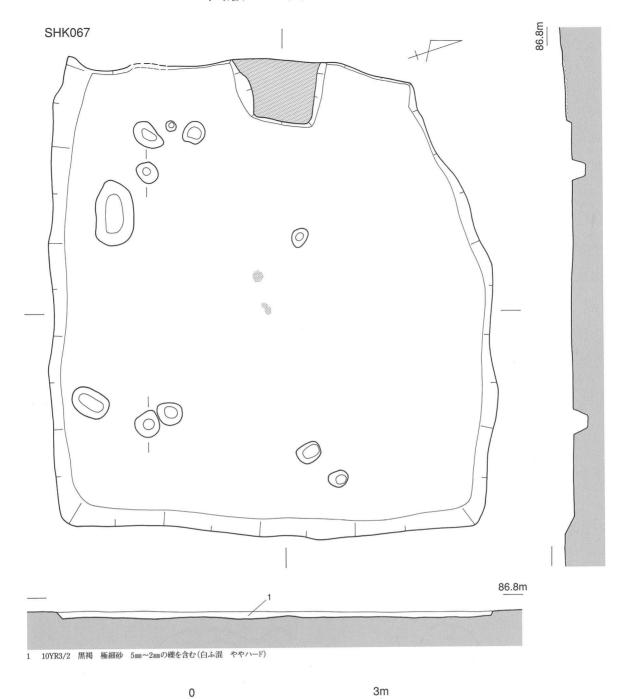
4 5Y4/1 戻 シルト質網砂~極網砂(粘質有り 41~3cm程度の礫有り)
SHK063



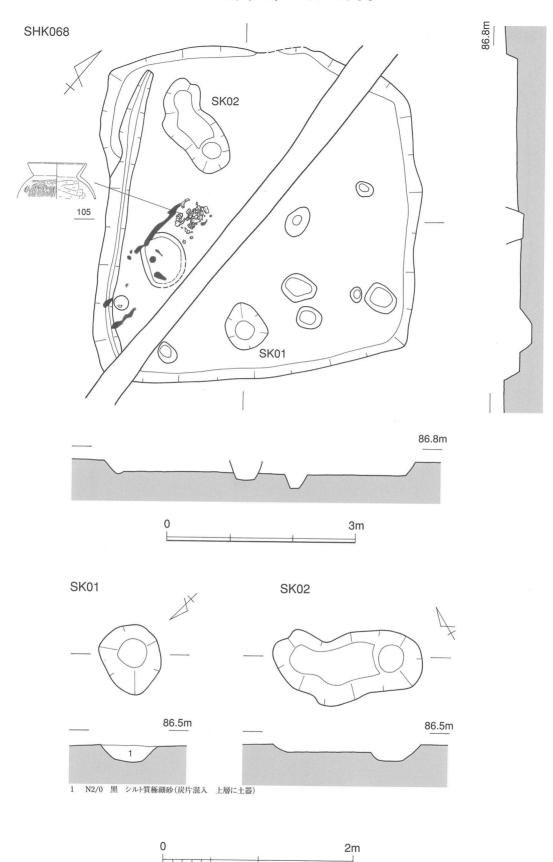
図版40 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(40) SHK066



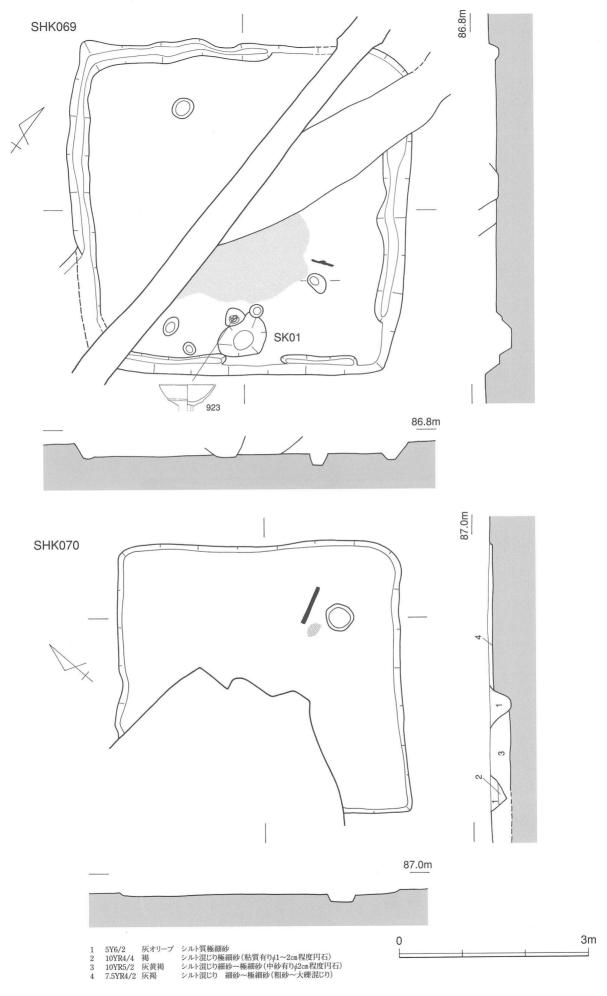
図版41 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(41) SHK067



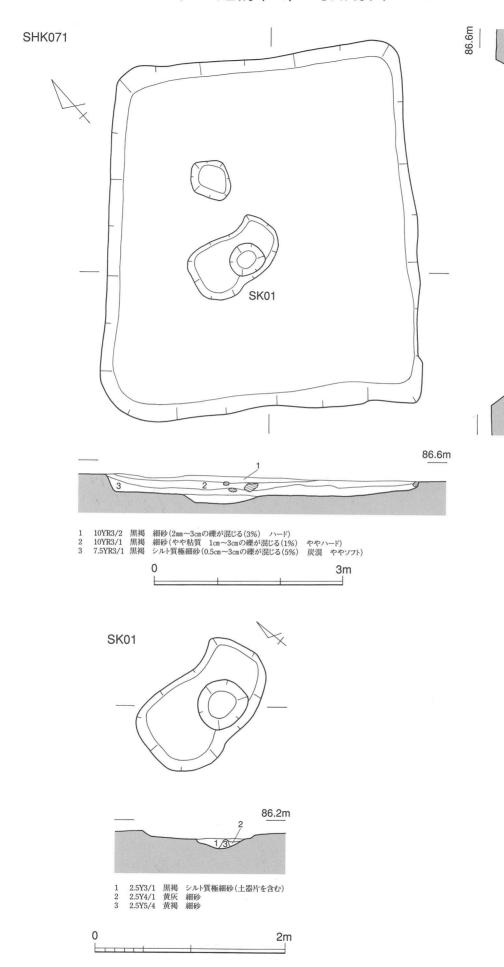
図版42 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(42) SHK068



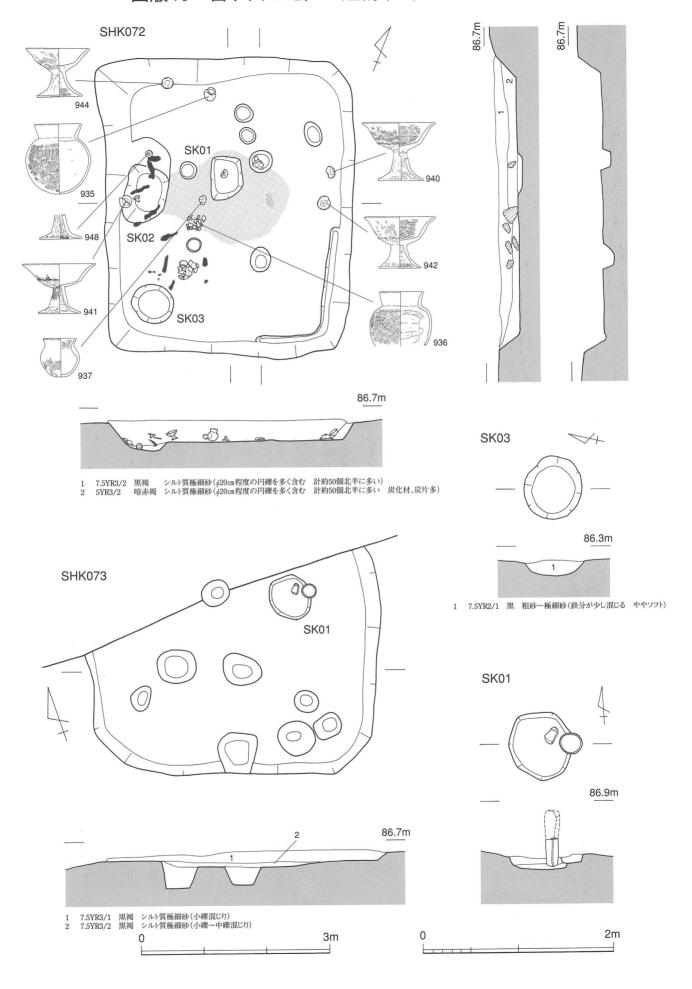
図版43 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(43) SHK069・SHK070



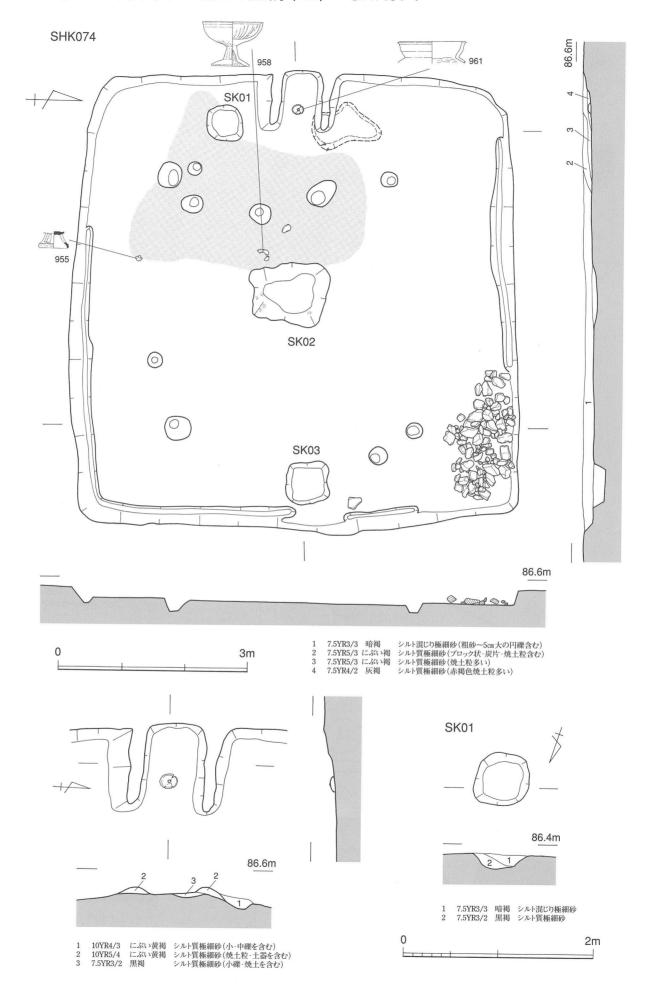
図版44 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(44) SHK071



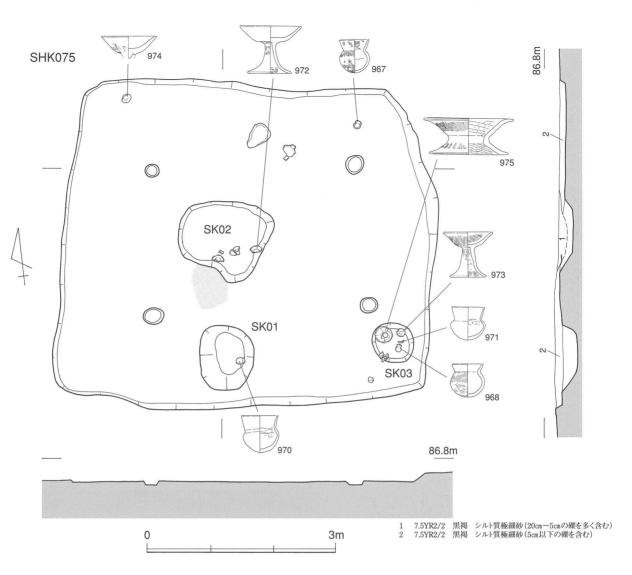
図版45 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(45) SHK072・SHK073

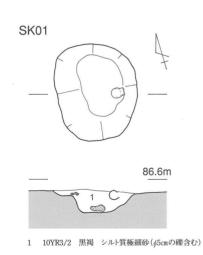


図版46 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(46) SHK074



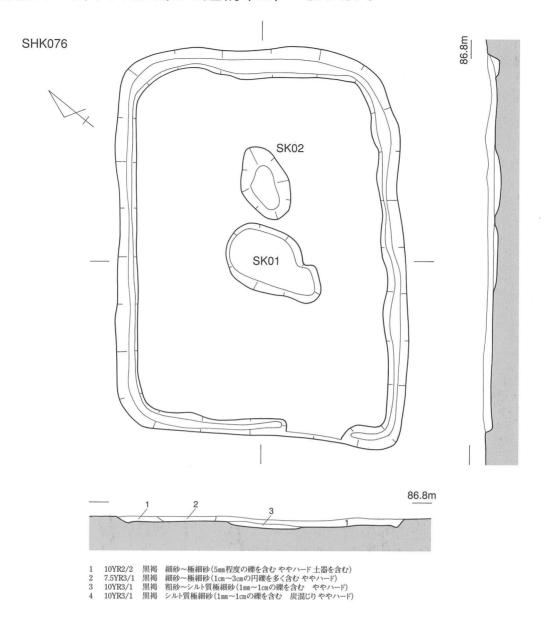
図版47 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(47) SHK075



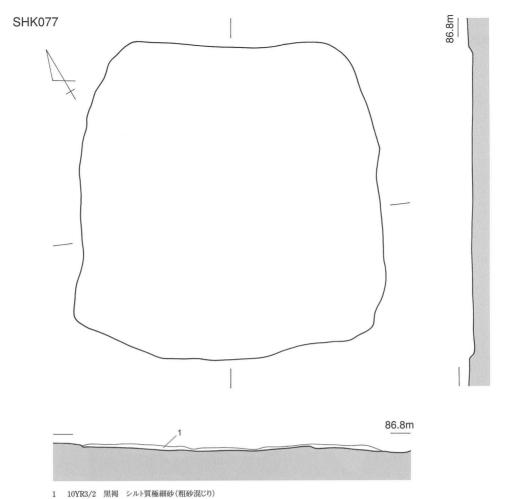


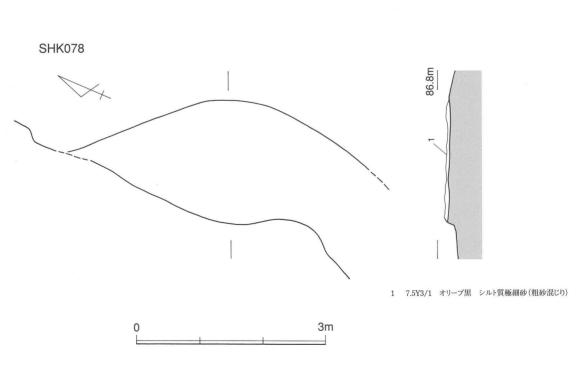
0 2m

図版48 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(48) SHK076

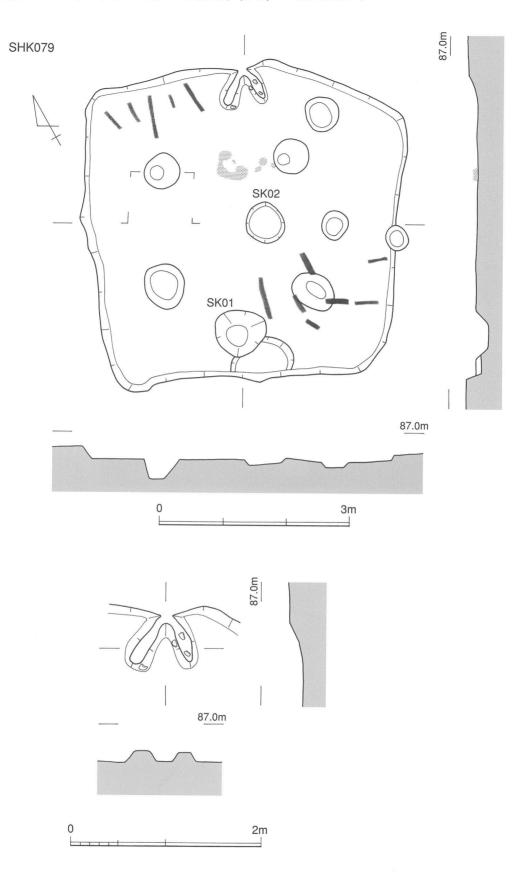


図版49 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(49) SHK077・SHK078

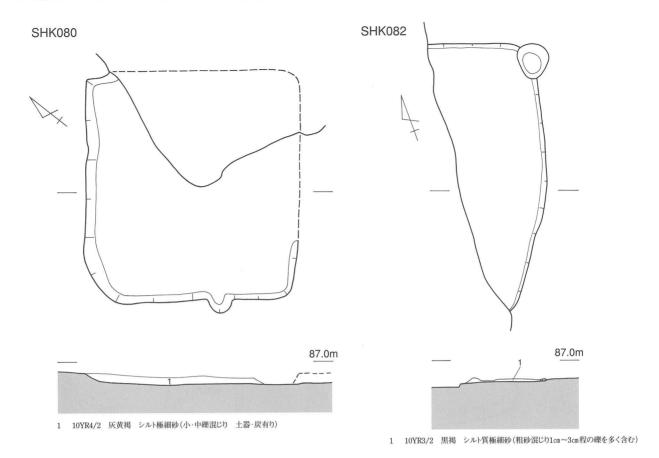


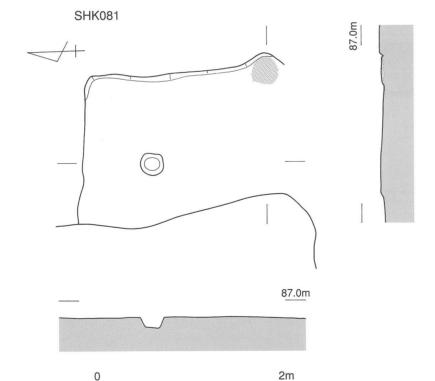


図版50 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(50) SHK079

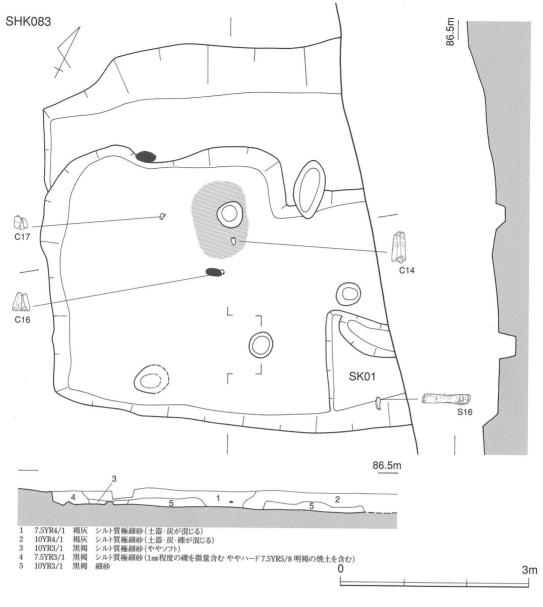


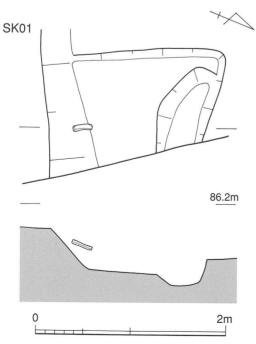
図版51 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(51) SHK080・SHK081・SHK082



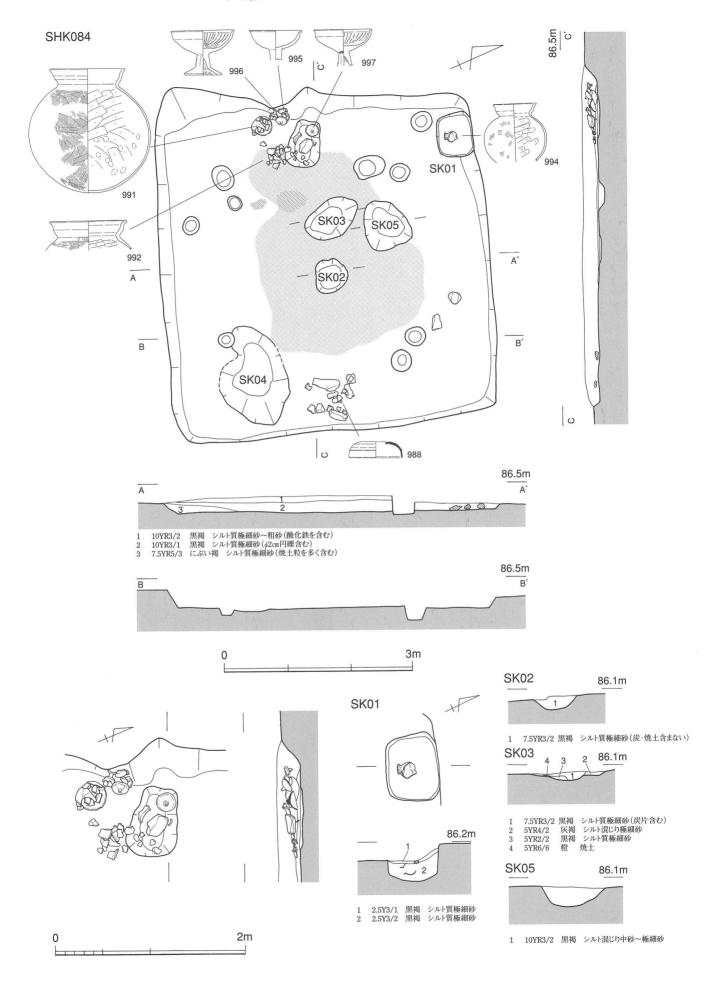


図版52 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(52) SHK083

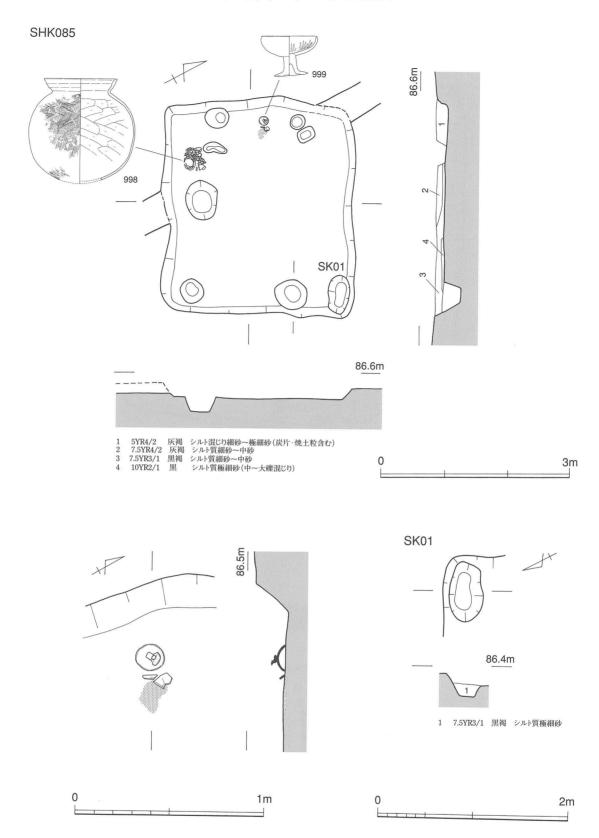




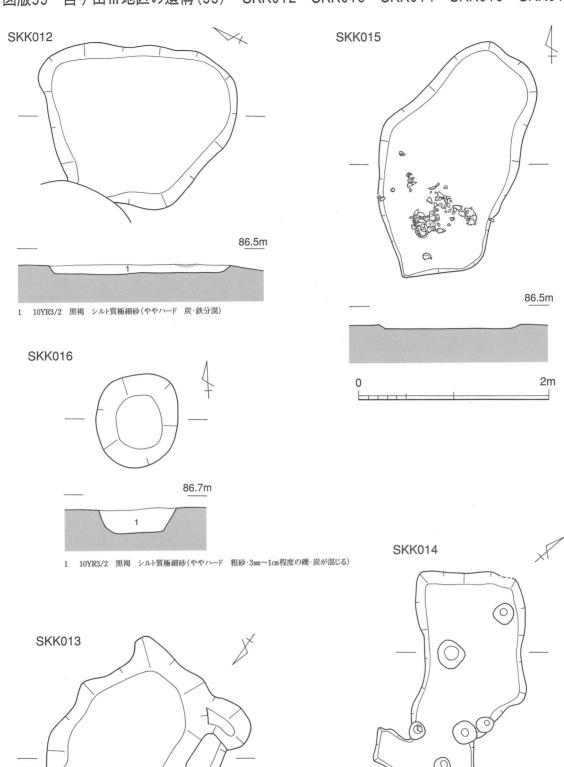
図版53 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(53) SHK084



図版54 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(54) SHK085



図版55 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(55) SKK012・SKK013・SKK014・SKK015・SKK016



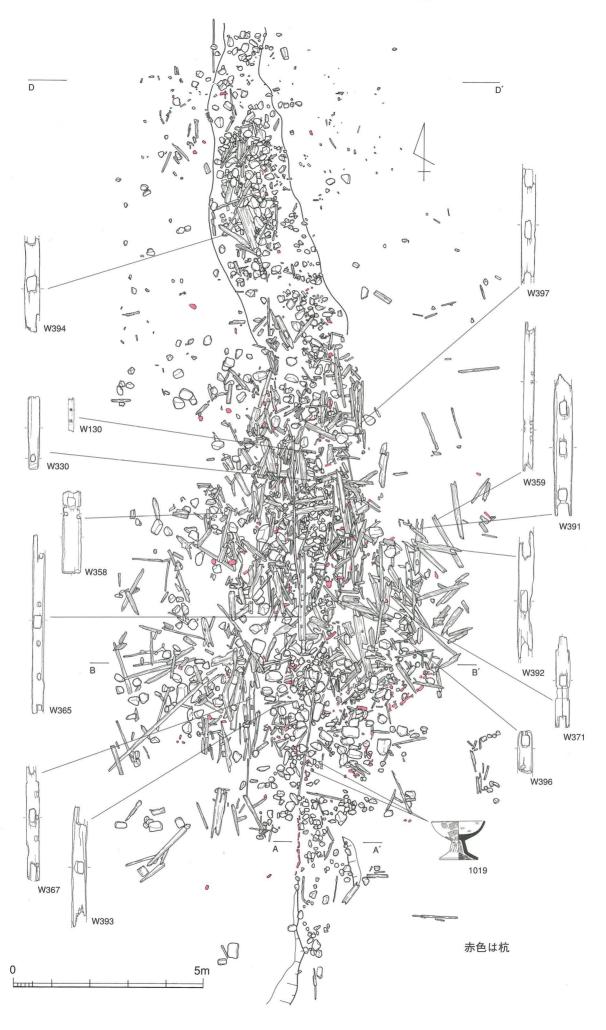
86.8m

86.8m

4m

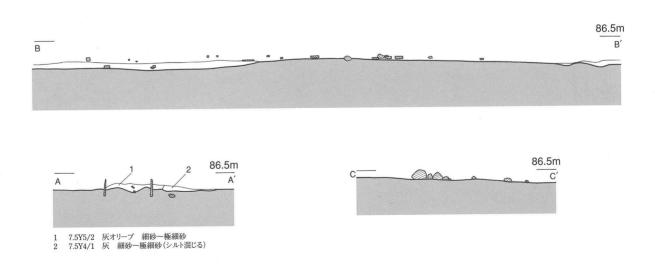


図版56 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(56) SSK001南部



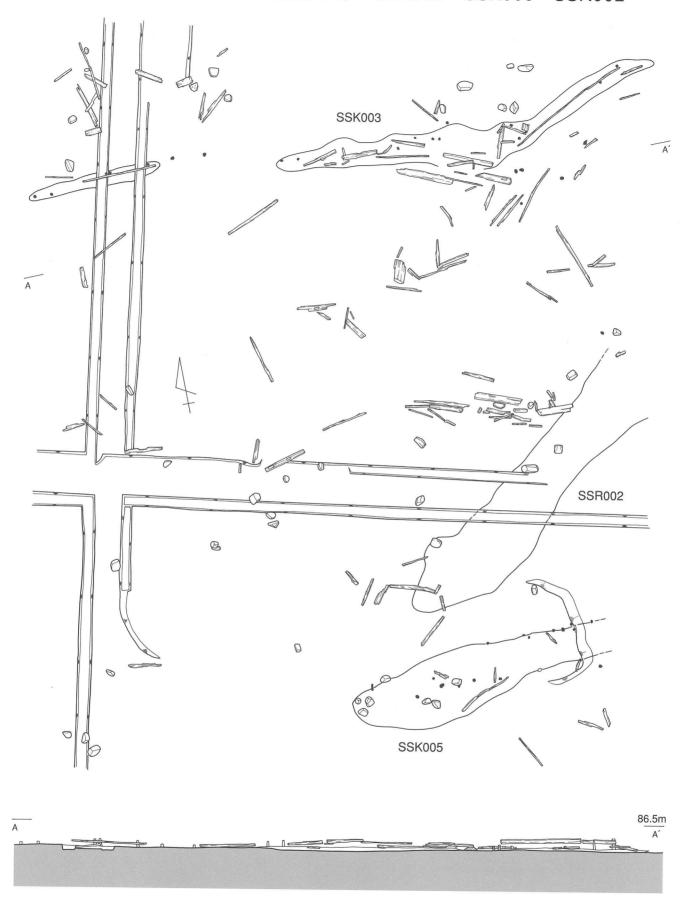
図版57 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(57) SSK001北部





5m

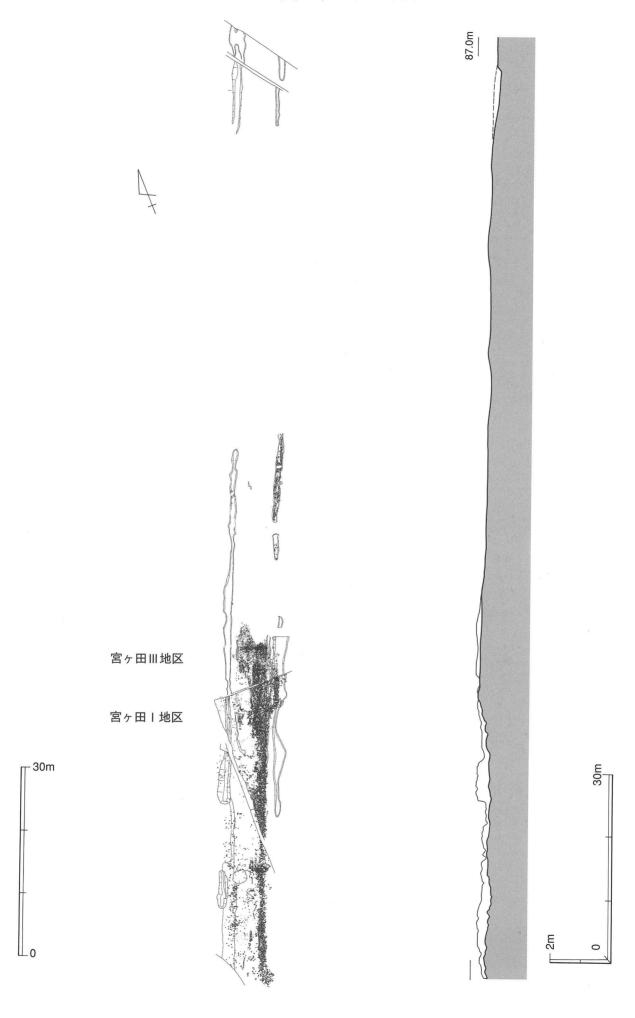
図版58 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(58) SSK003・SSK005・SSR002

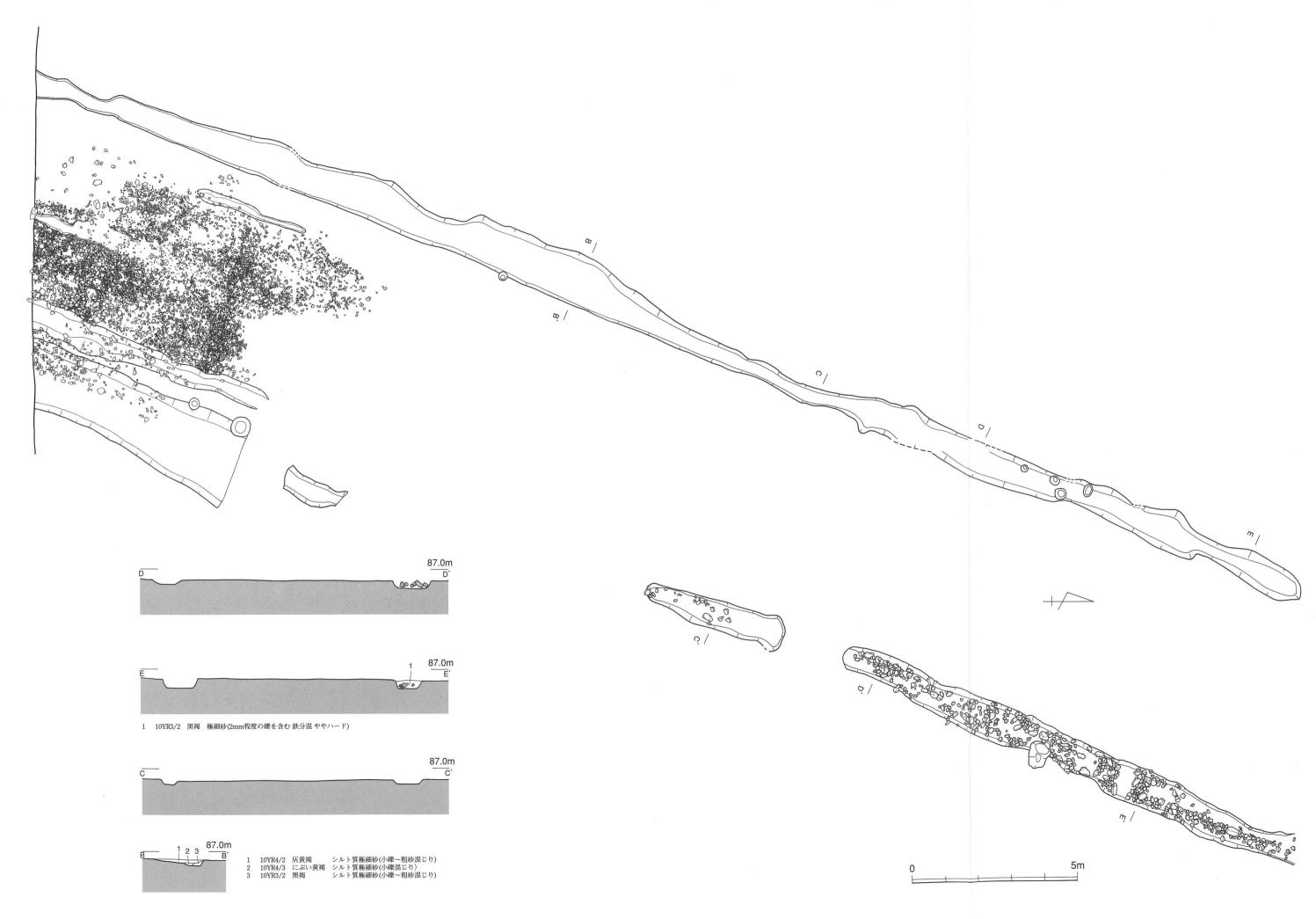


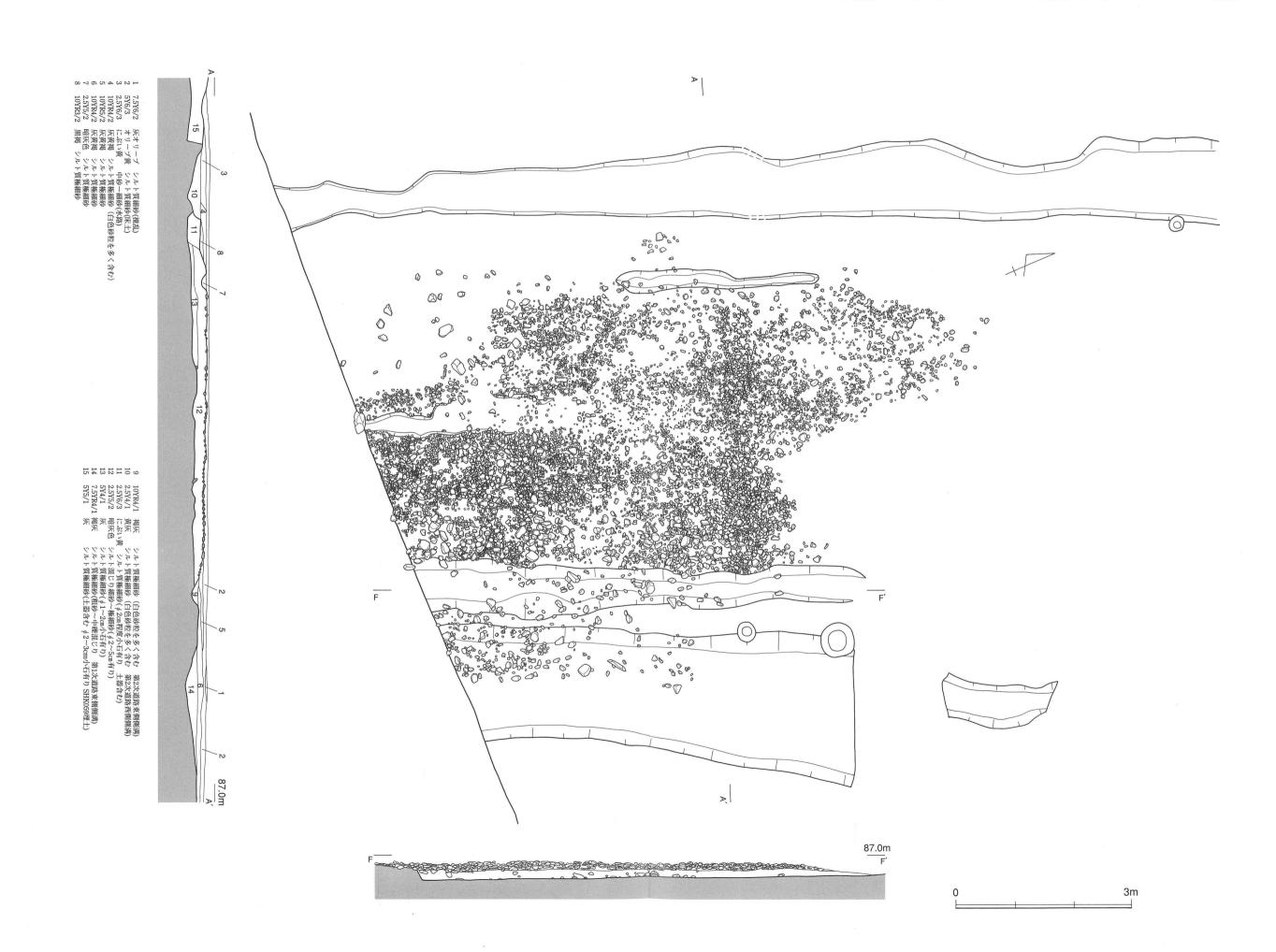


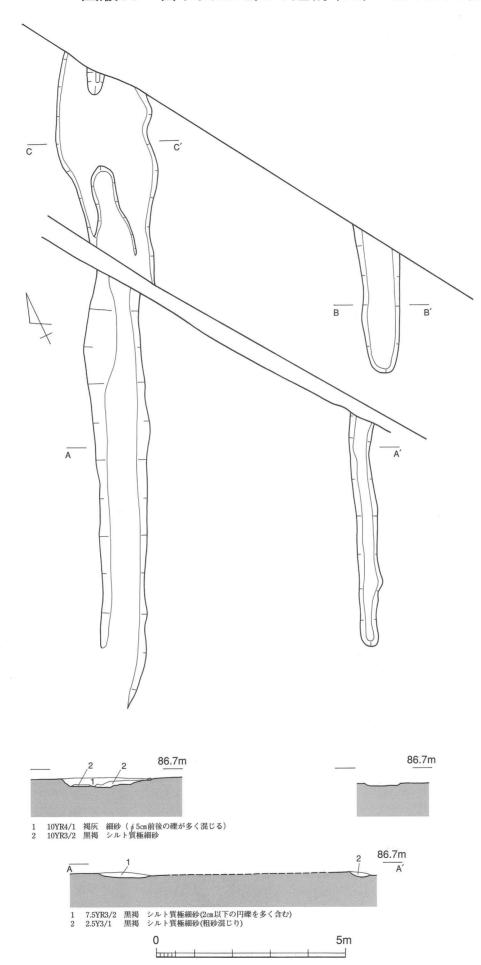


図版60 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(60) SFR001

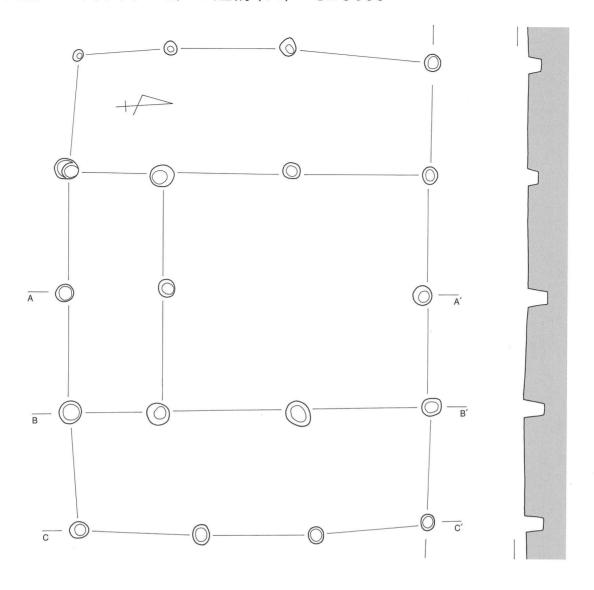


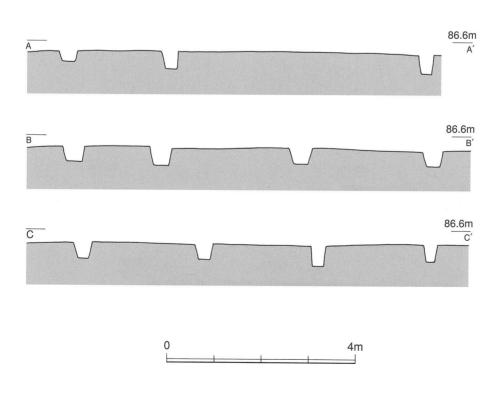


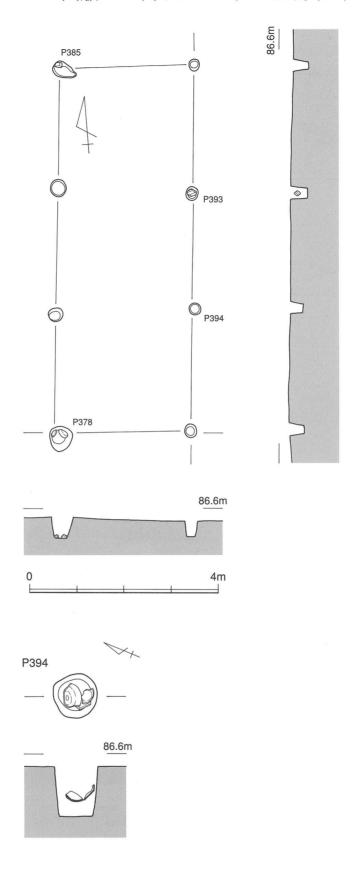




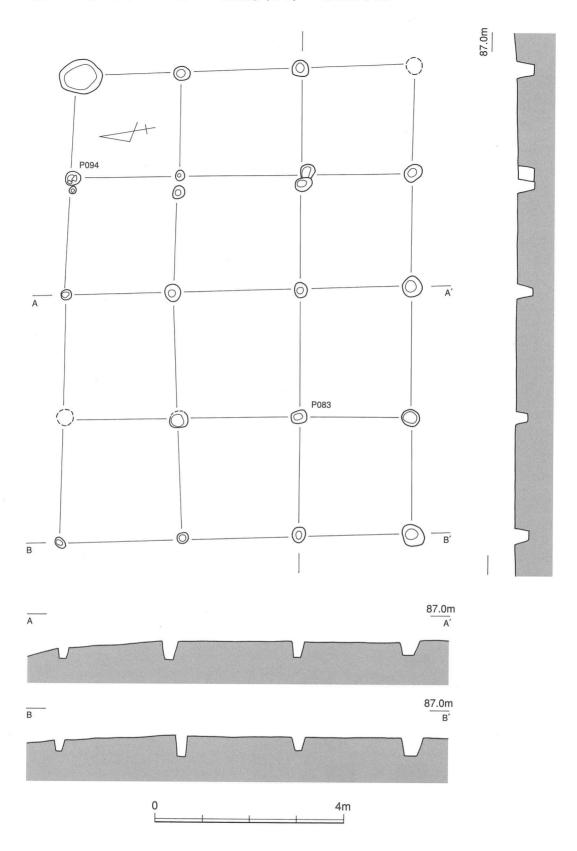
図版64 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(64) SBC055



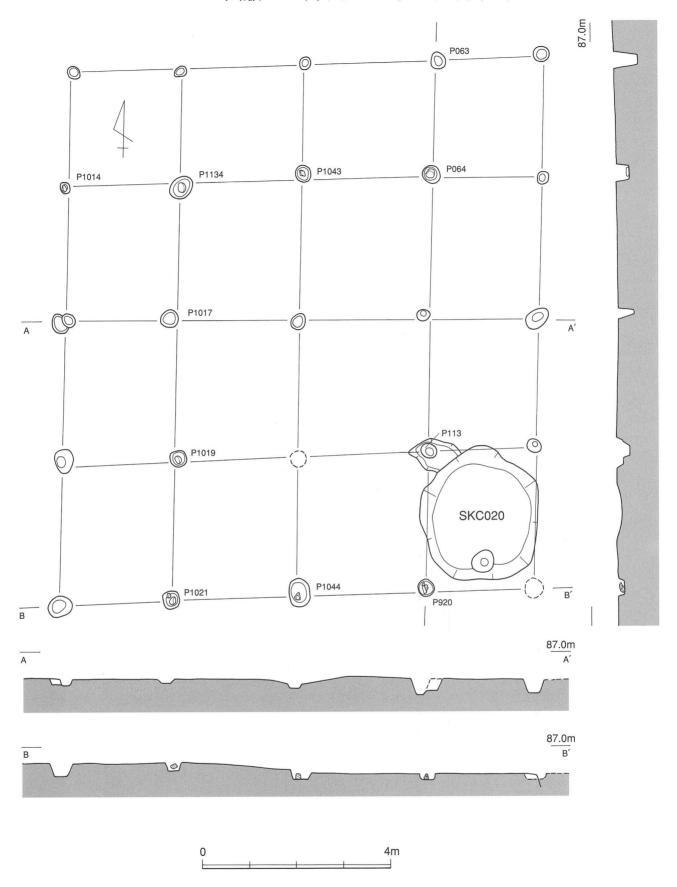


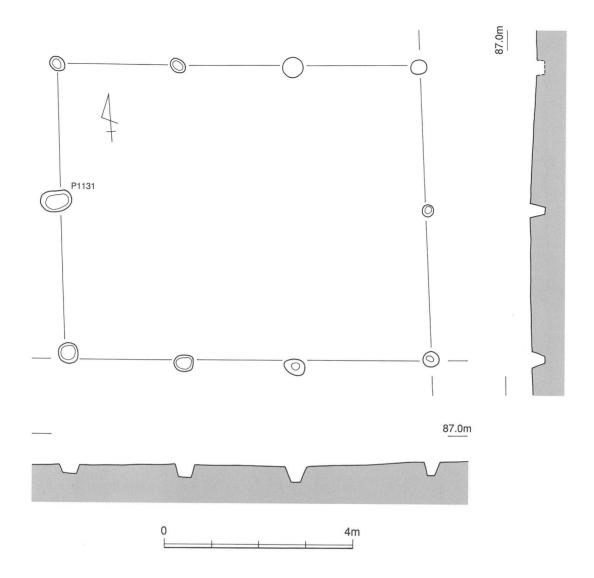


1m

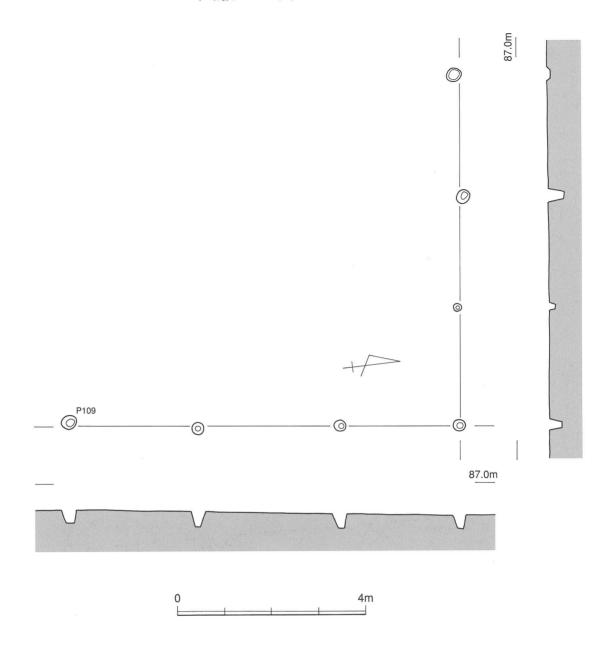


図版67 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(67) SBC058

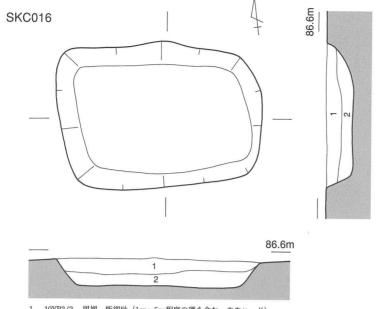


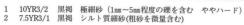


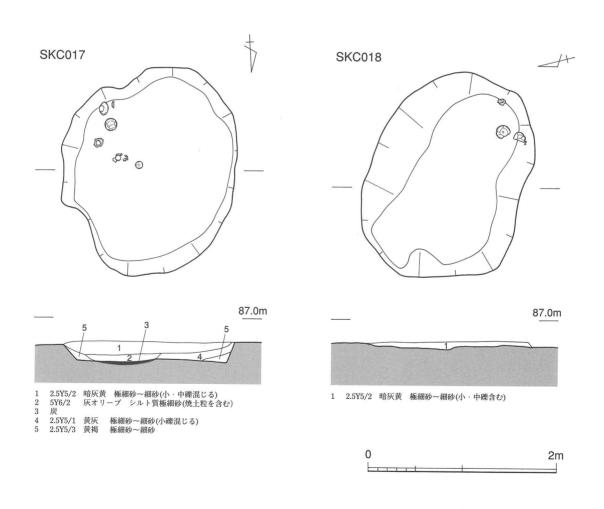
図版69 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(69) SAC004



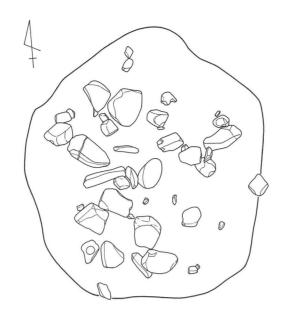
図版70 宮ヶ田Ⅲ地区の遺構(70) SKC016・SKC017・SKC018

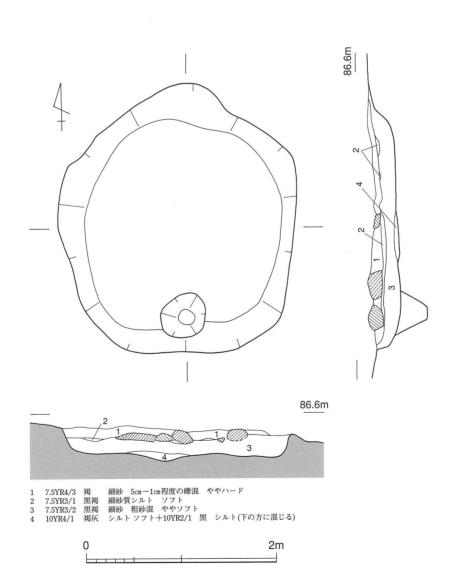




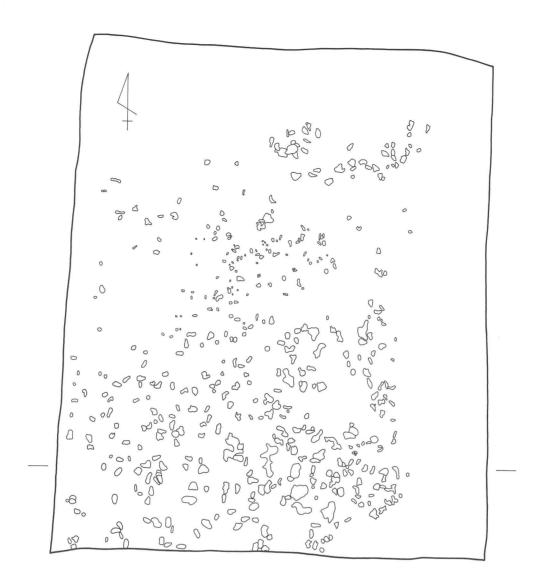


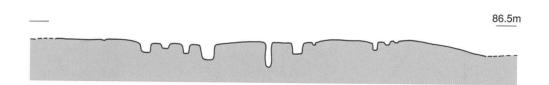
上面礫層

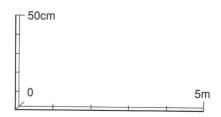


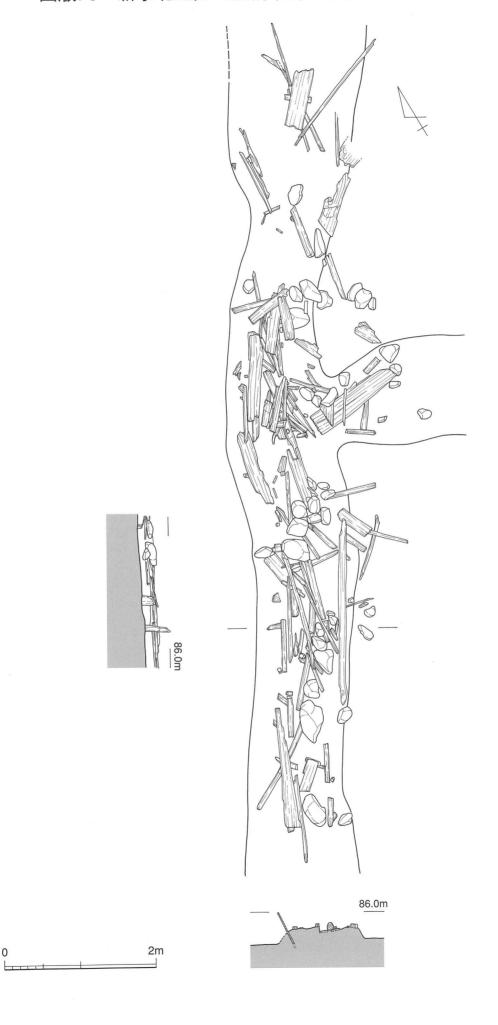


図版72 新水北地区の遺構(1) 中世水田面足跡



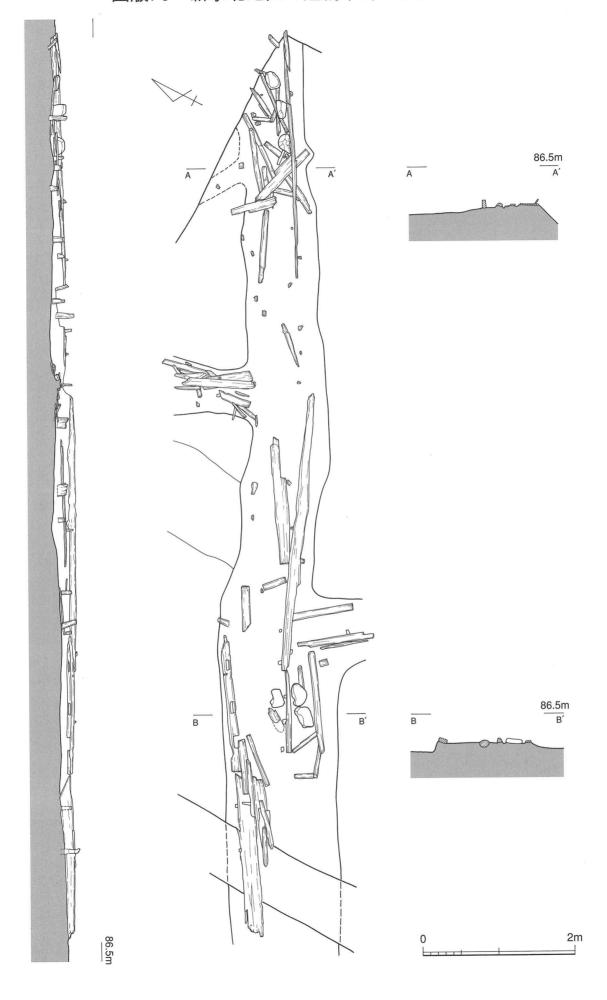




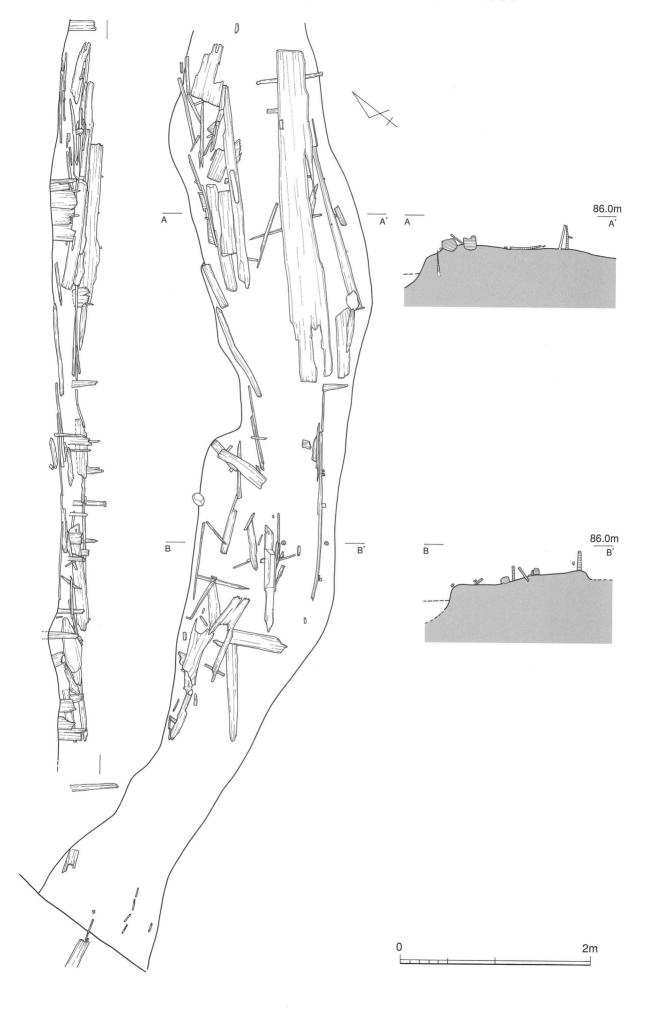


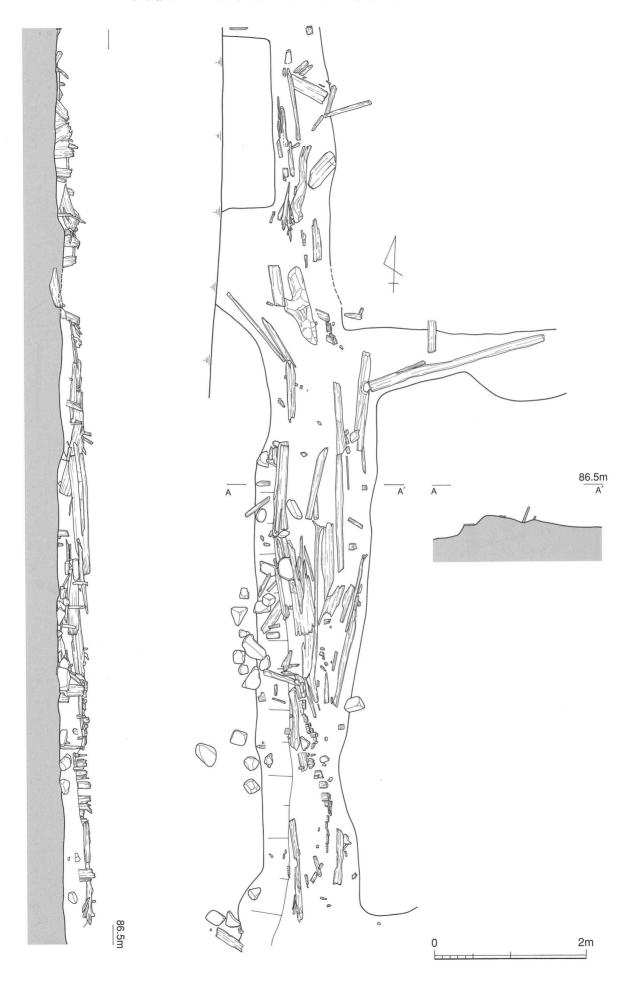
図版74 新水北地区の遺構(3) SSK1001-SWK1011



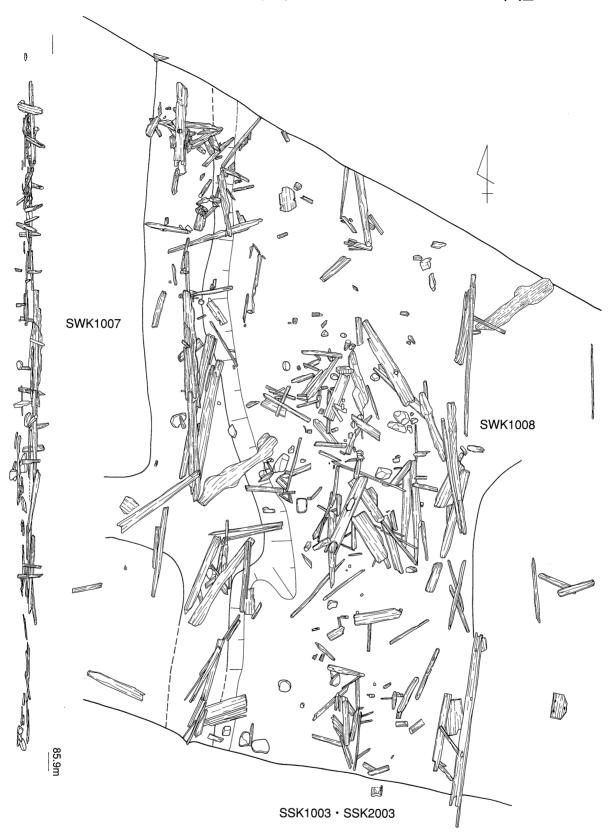


図版76 新水北地区の遺構(5) SSK1002-SWK1001



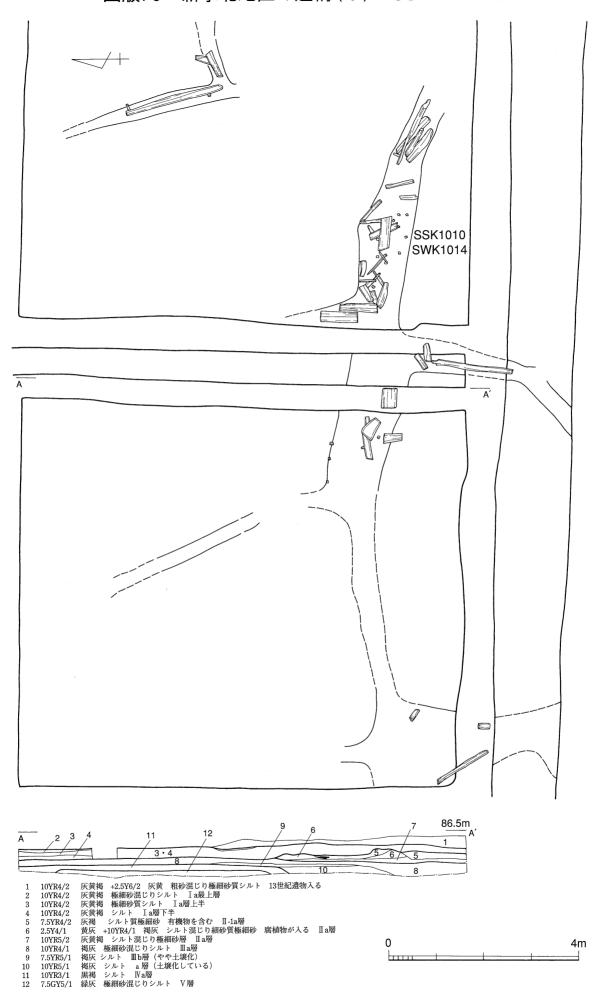


図版78 新水北地区の遺構(7) SSK1003・SSK2003木組

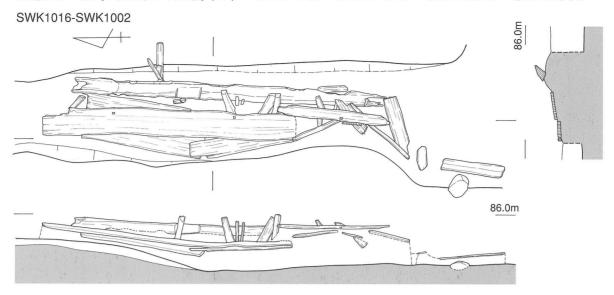


0 2m

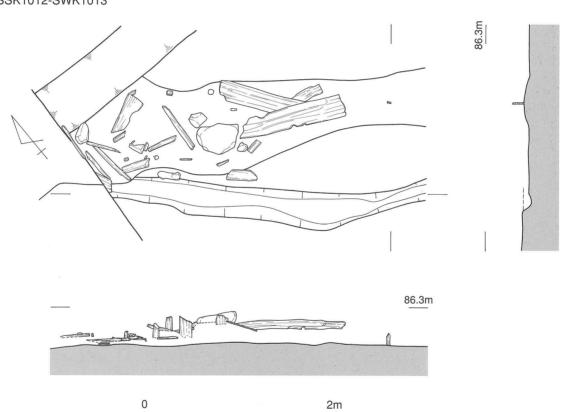
図版79 新水北地区の遺構(8) SSK1010-SWK1014



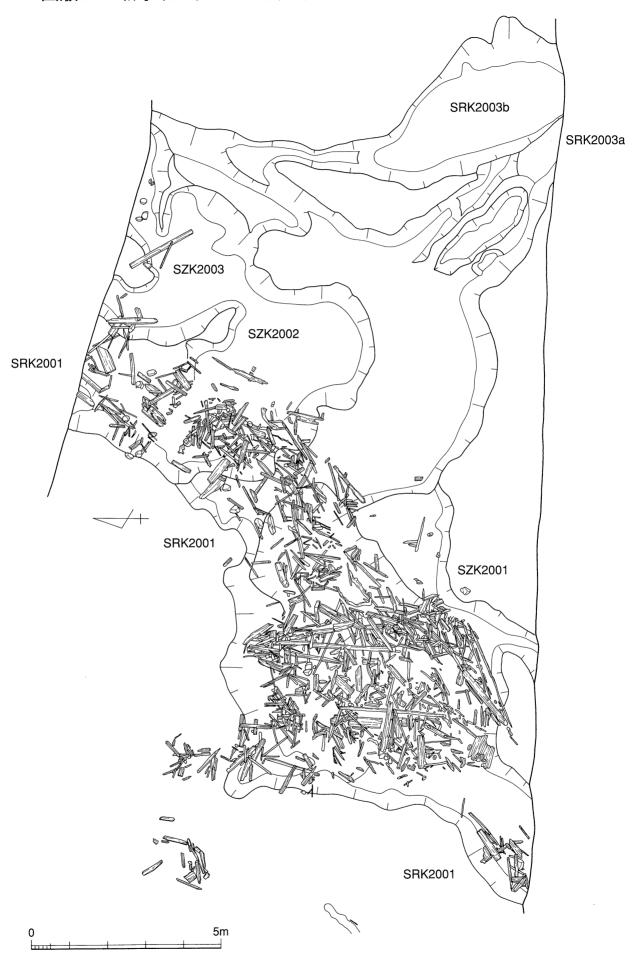
図版80 新水北地区の遺構(9) SSK1012-SWK1013・SWK1016-SWK1002



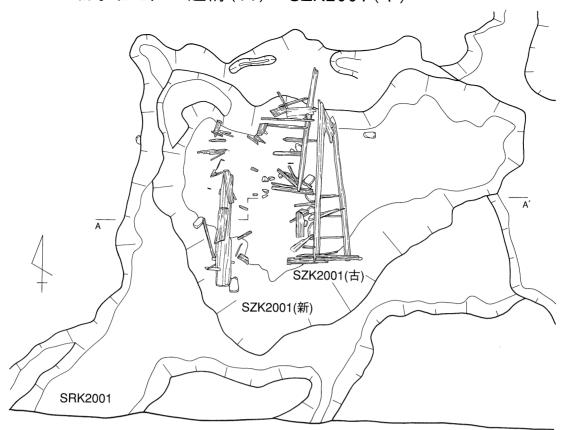
SSK1012-SWK1013



図版81 新水北地区の遺構(10) SRK2001-SZK2001埋没状況

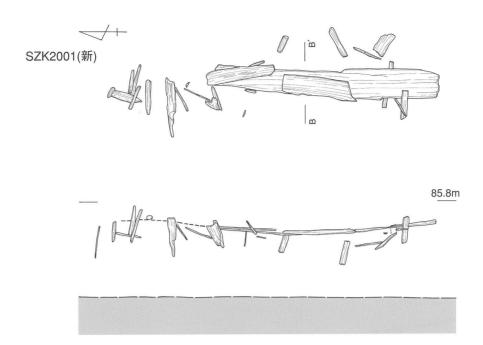


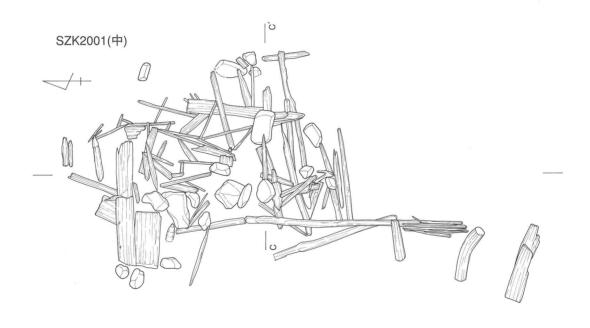
図版82 新水北地区の遺構(11) SZK2001(1)

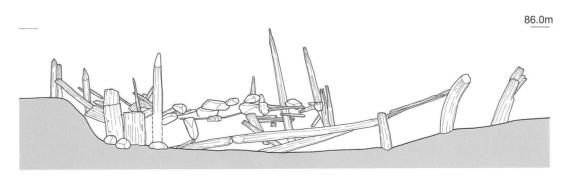




図版83 新水北地区の遺構(12) SZK2001(2)

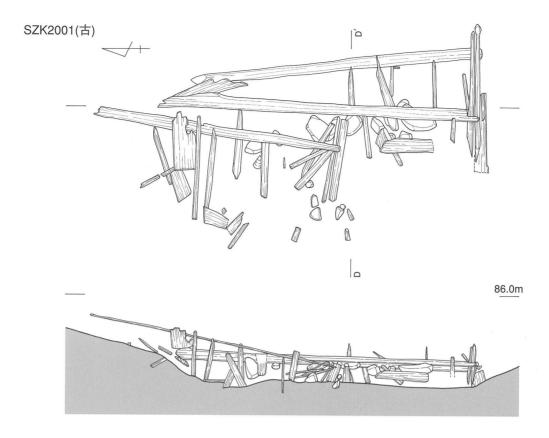


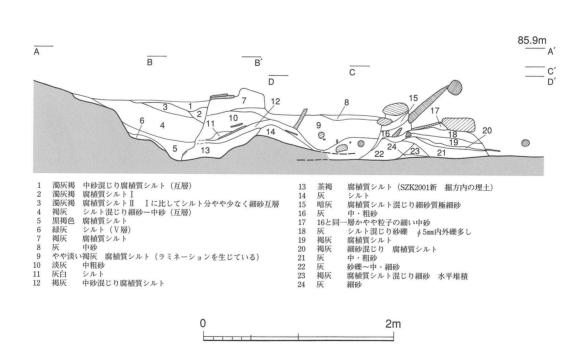




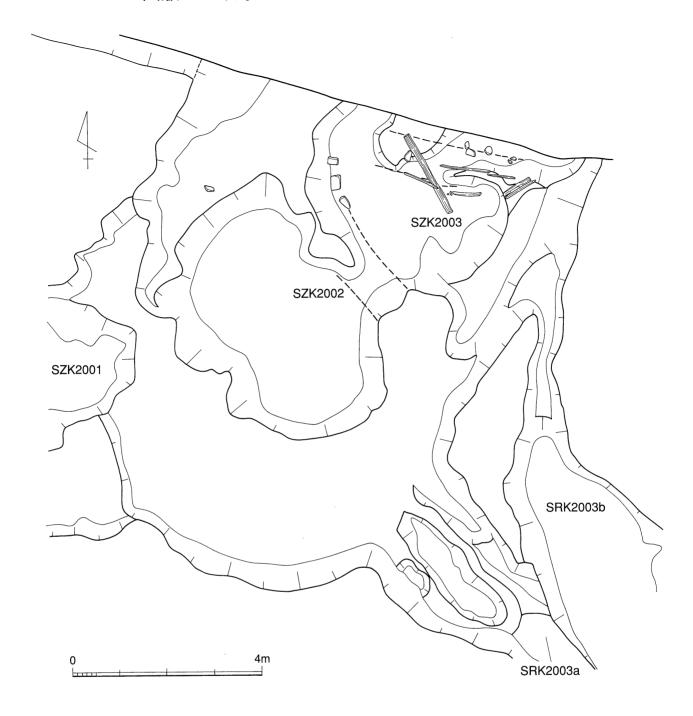
0 2m

図版84 新水北地区の遺構(13) SZK2001(3)

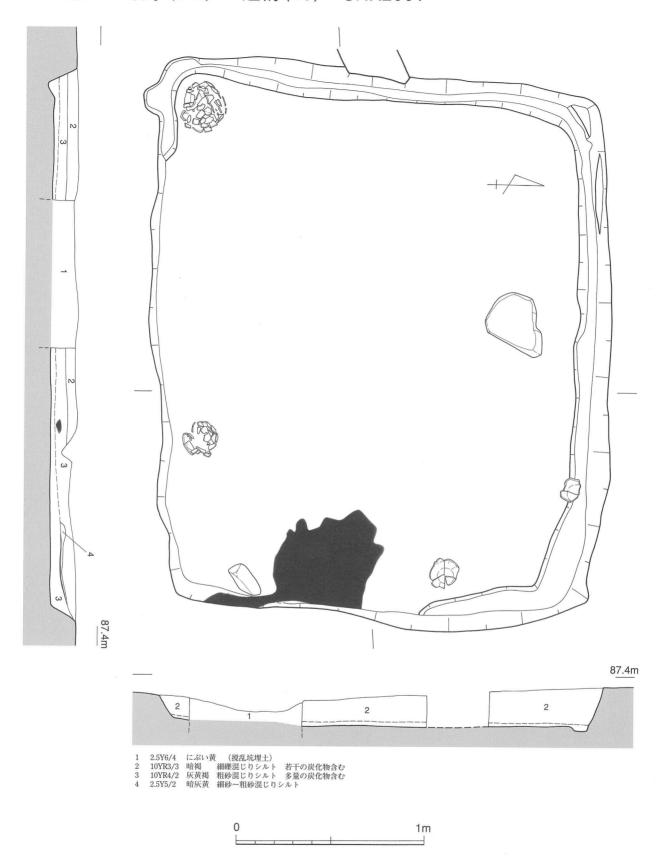




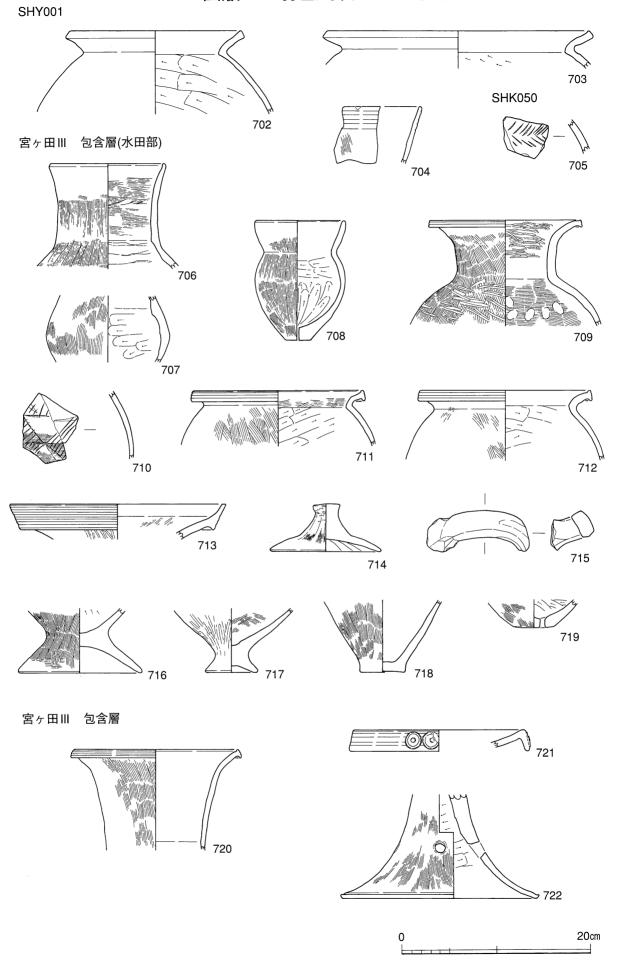
図版85 新水北地区の遺構(14) SXK2002・SXK2003



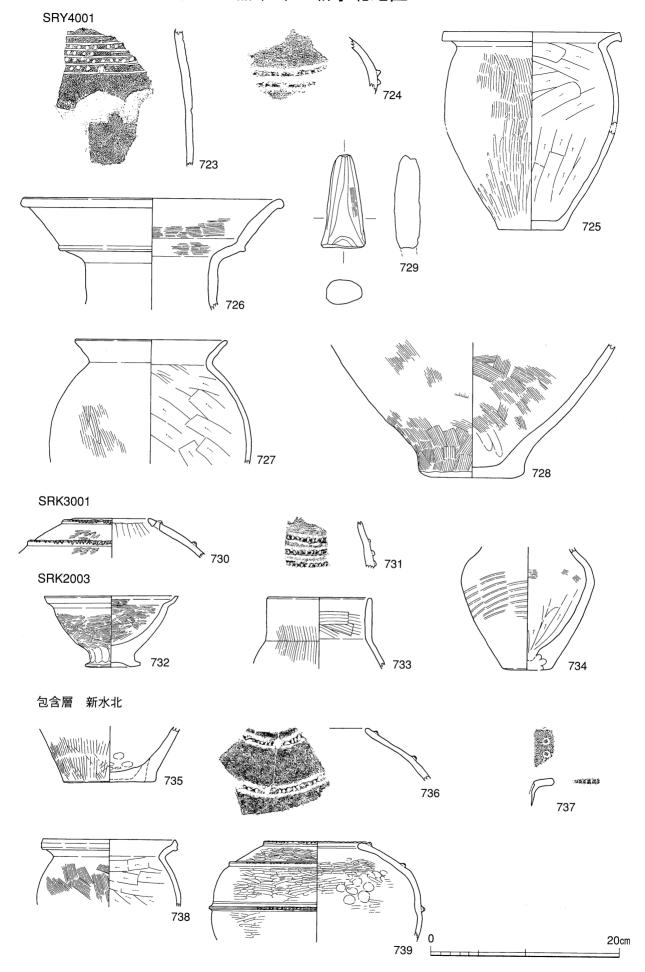
図版86 新水北地区の遺構(15) SHK2001



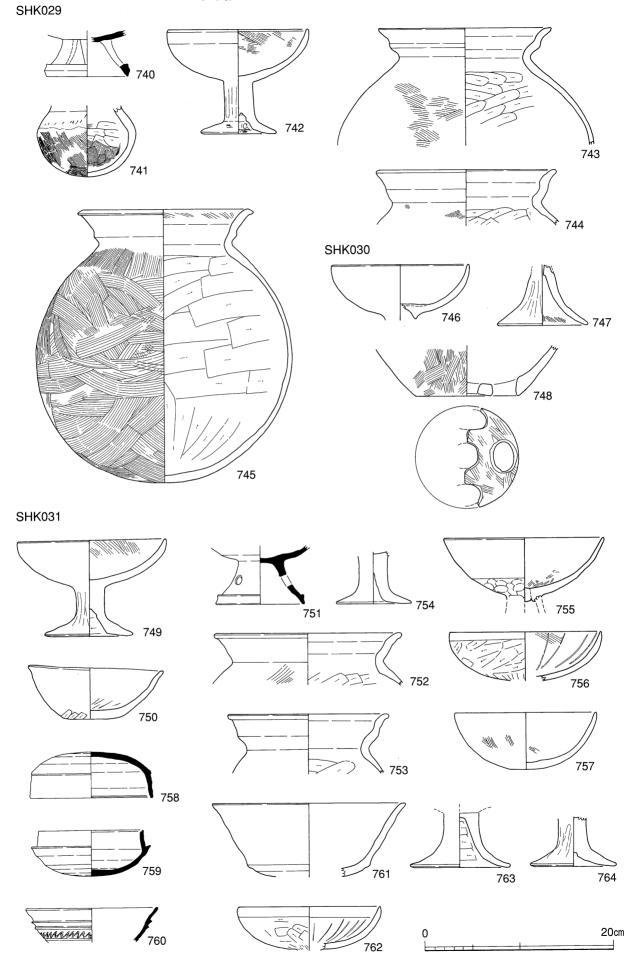
図版87 弥生時代の土器(1) 宮ヶ田Ⅲ地区



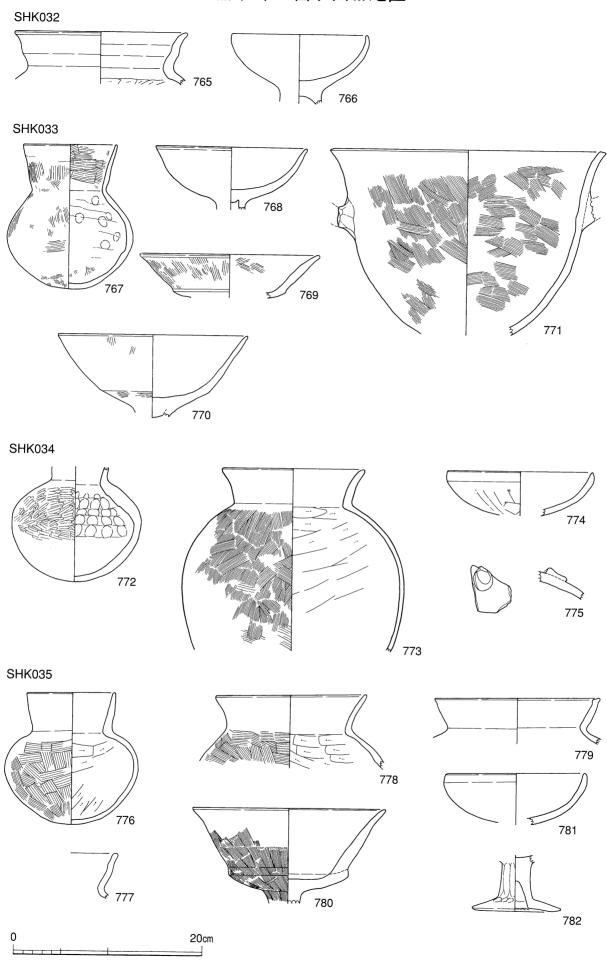
図版88 弥生時代の土器(2) 新水北地区



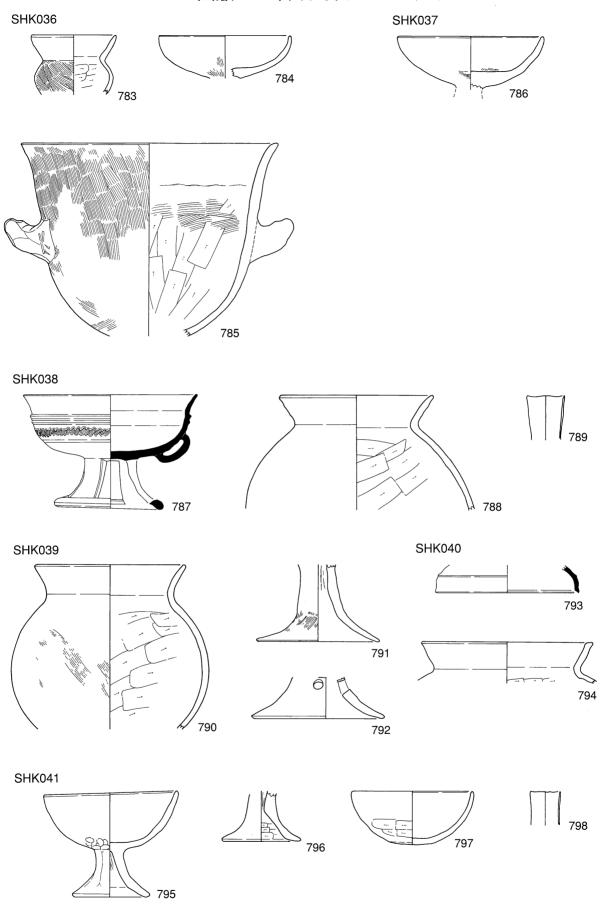
図版89 古墳時代の土器(1) 宮ヶ田Ⅲ地区



図版90 古墳時代の土器(2) 宮ヶ田Ⅲ地区

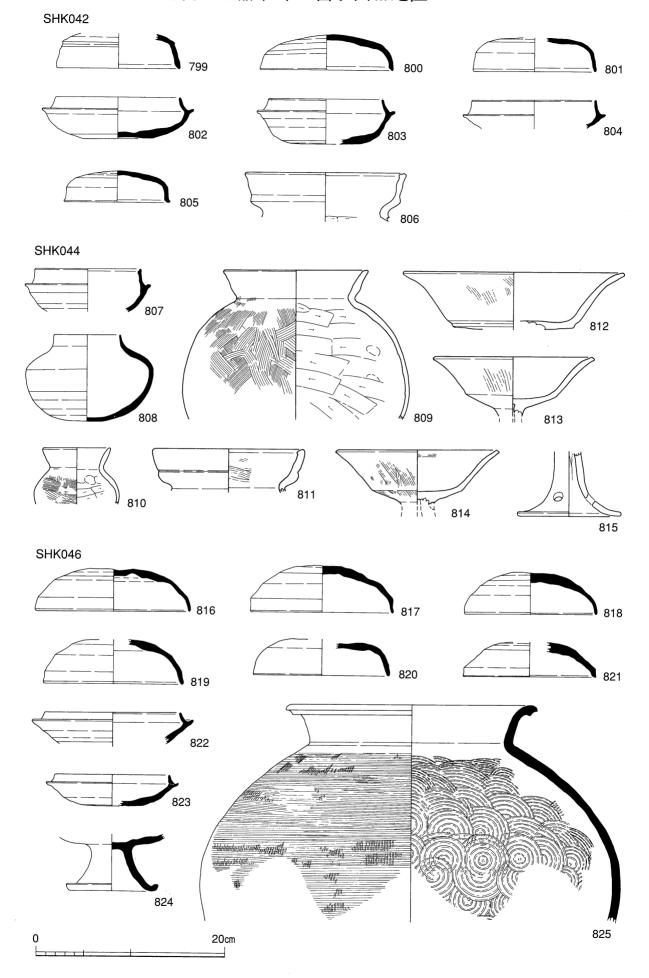


図版91 古墳時代の土器(3) 宮ヶ田Ⅲ地区

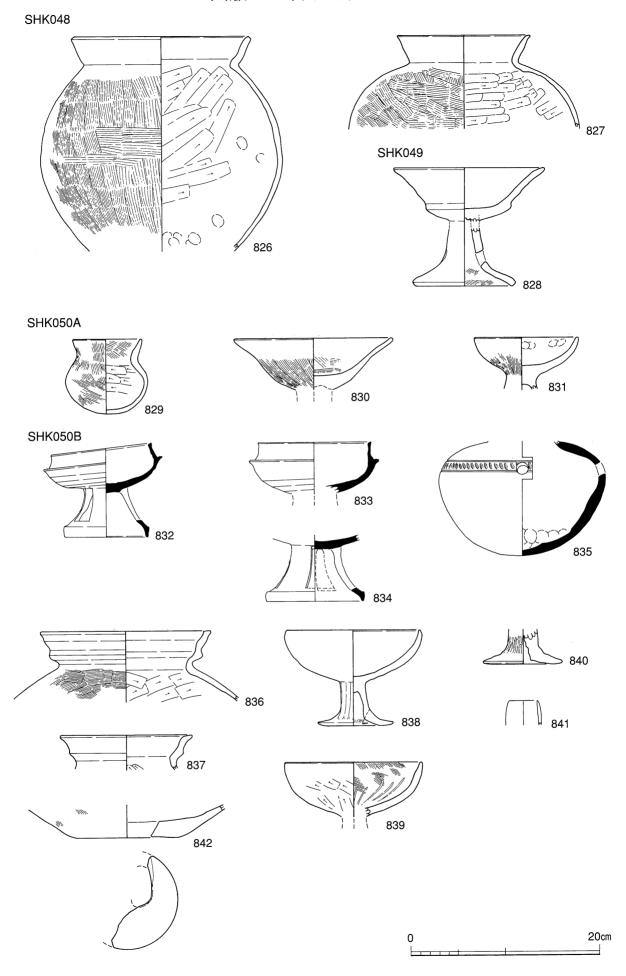


20cm

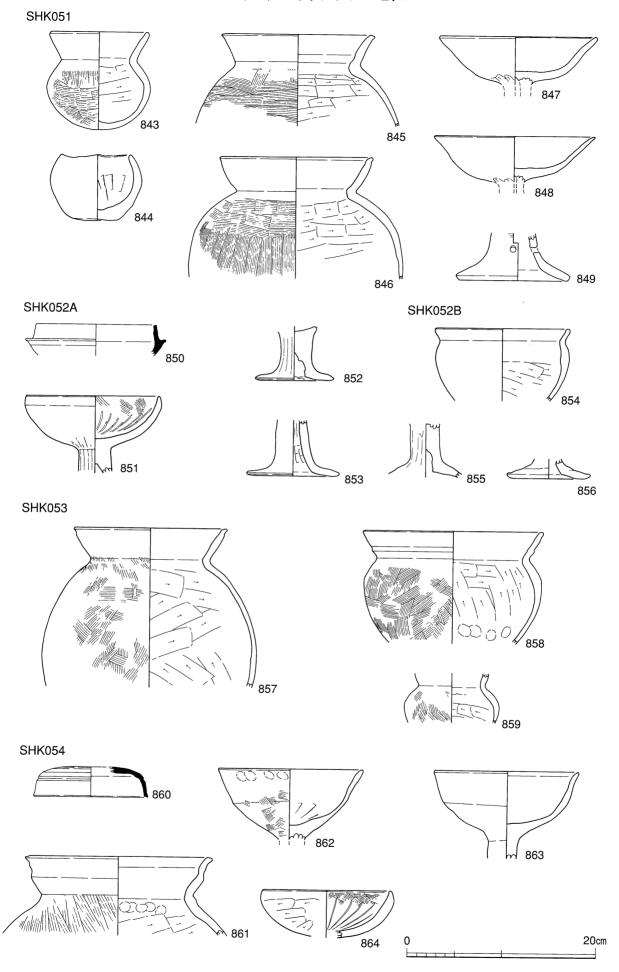
図版92 古墳時代の土器(4) 宮ヶ田Ⅲ地区



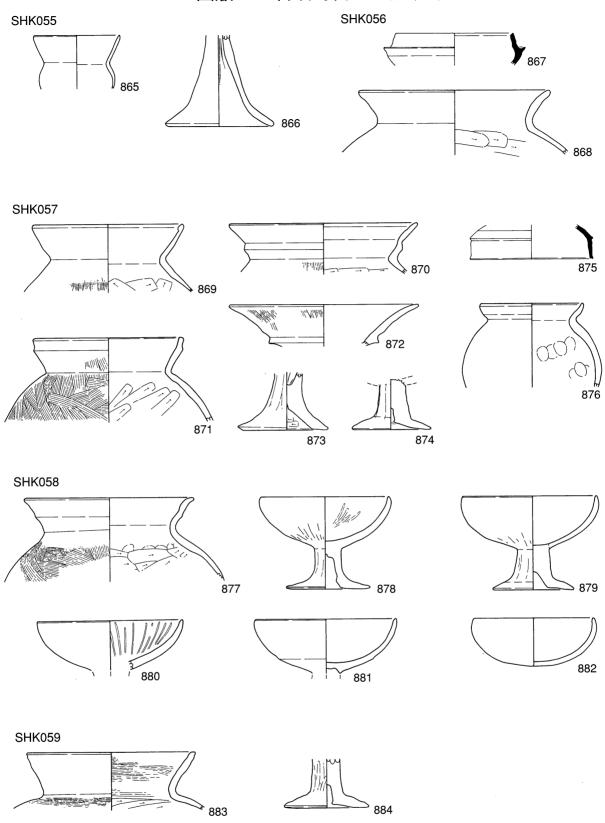
図版93 古墳時代の土器(5) 宮ヶ田Ⅲ地区



図版94 古墳時代の土器(6) 宮ヶ田Ⅲ地区

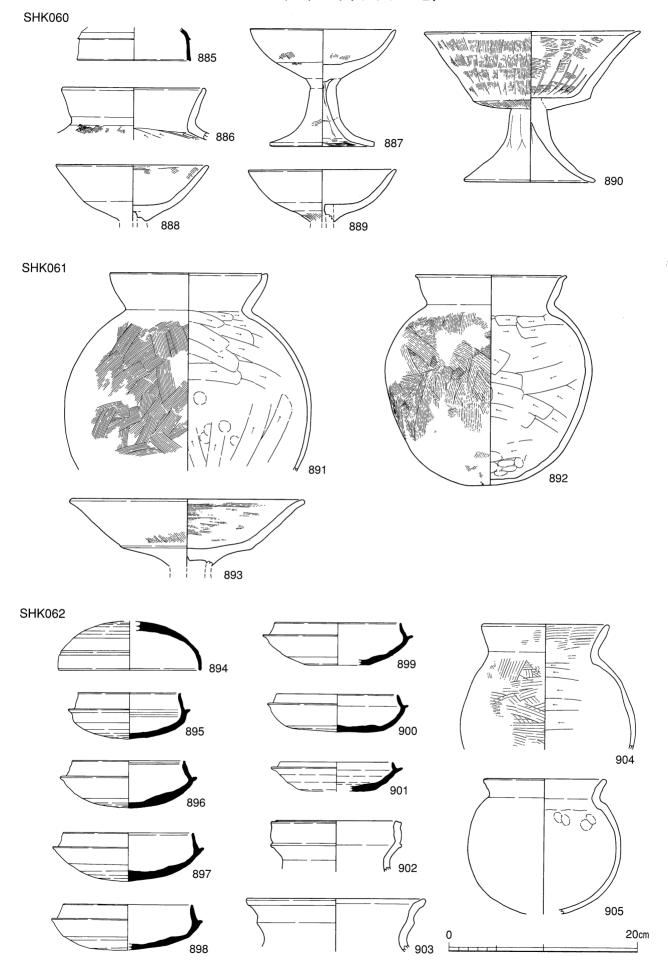


図版95 古墳時代の土器(7) 宮ヶ田Ⅲ地区

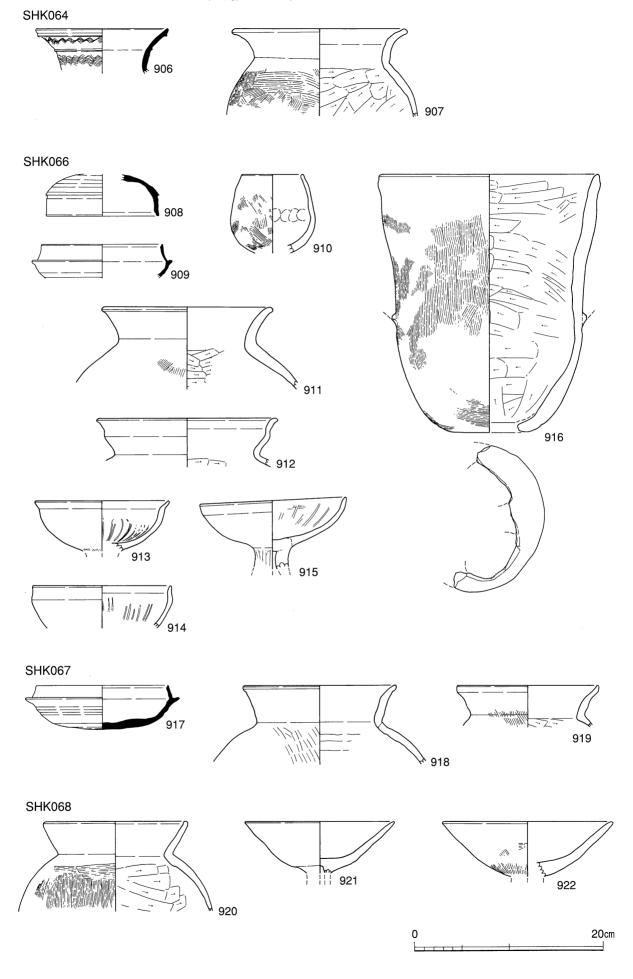




図版96 古墳時代の土器(8) 宮ヶ田Ⅲ地区



図版97 古墳時代の土器(9) 宮ヶ田Ⅲ地区



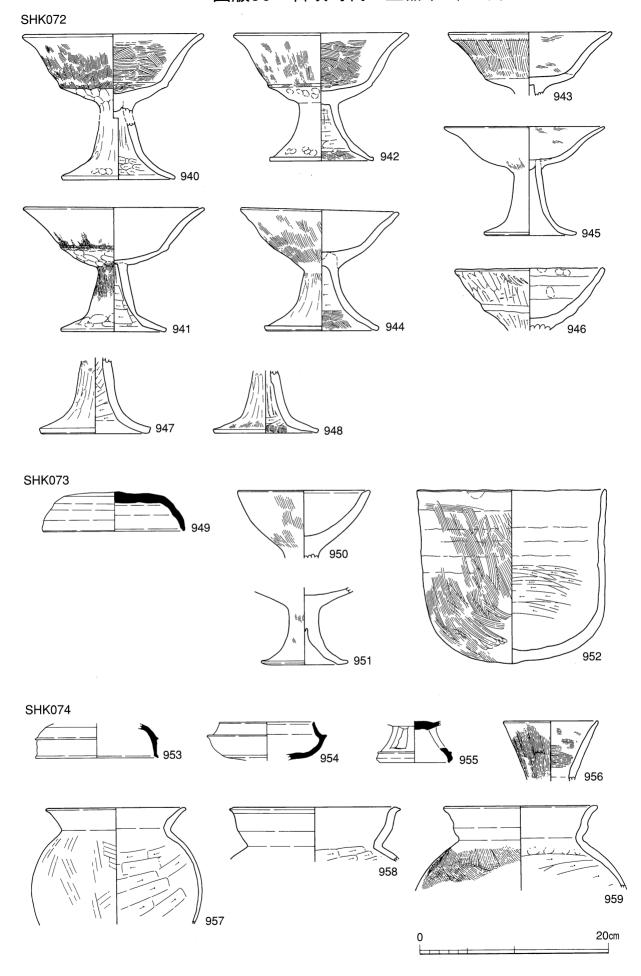
図版98 古墳時代の土器(10) 宮ヶ田Ⅲ地区 SHK069 SHK070 924 923 SHK071 925 929 931 926 > 930 SHK072 937 938 935 932 939

933

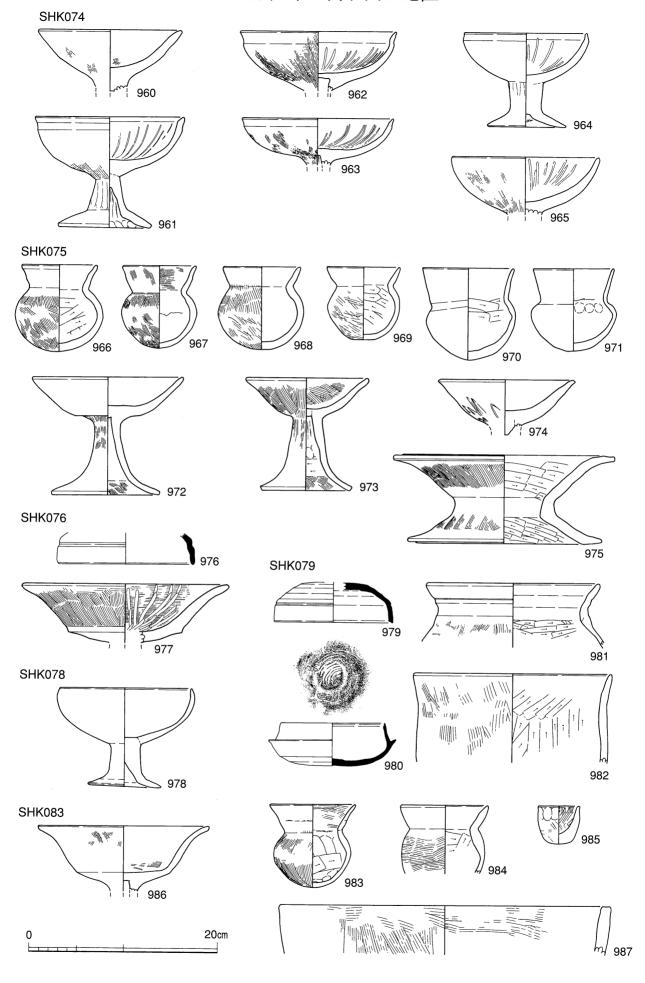
⁴/₉₃₆

20cm

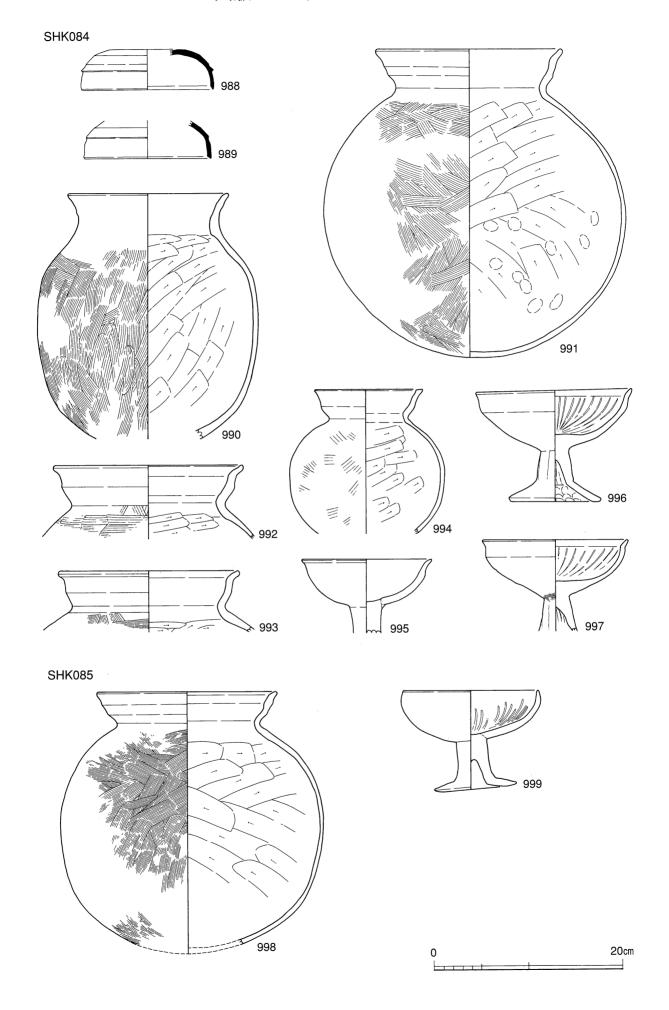
図版99 古墳時代の土器(11) 宮ヶ田Ⅲ地区



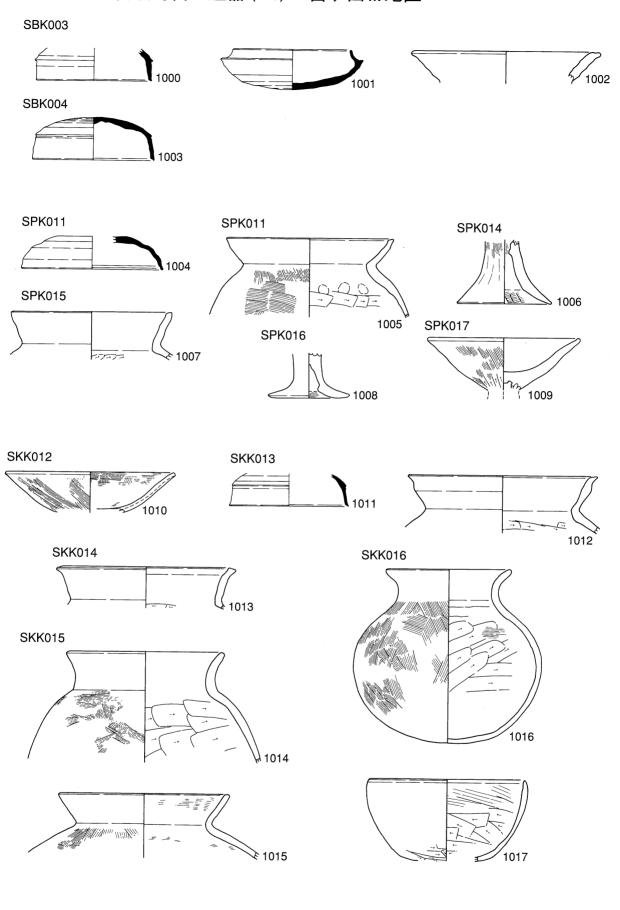
図版100 古墳時代の土器(12) 宮ヶ田Ⅲ地区



図版101 古墳時代の土器(13) 宮ヶ田Ⅲ地区

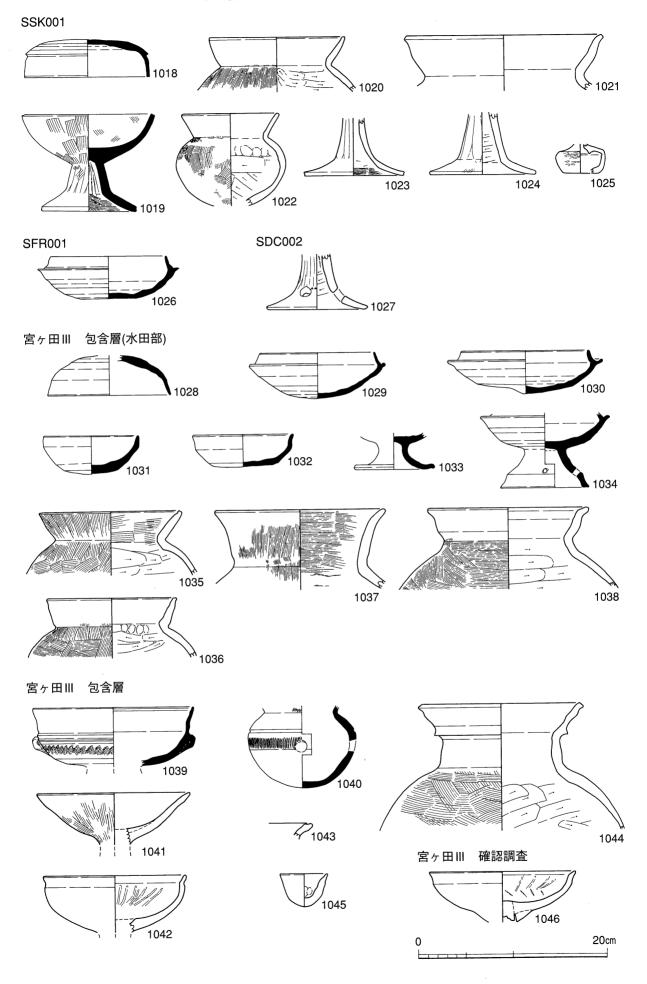


図版102 古墳時代の土器(14) 宮ヶ田Ⅲ地区

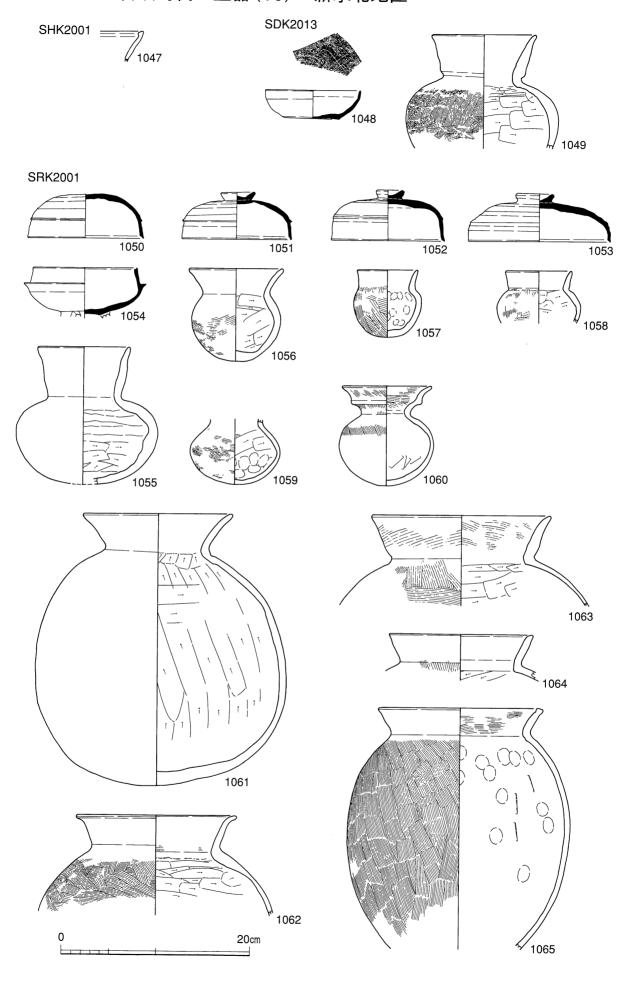


20cm

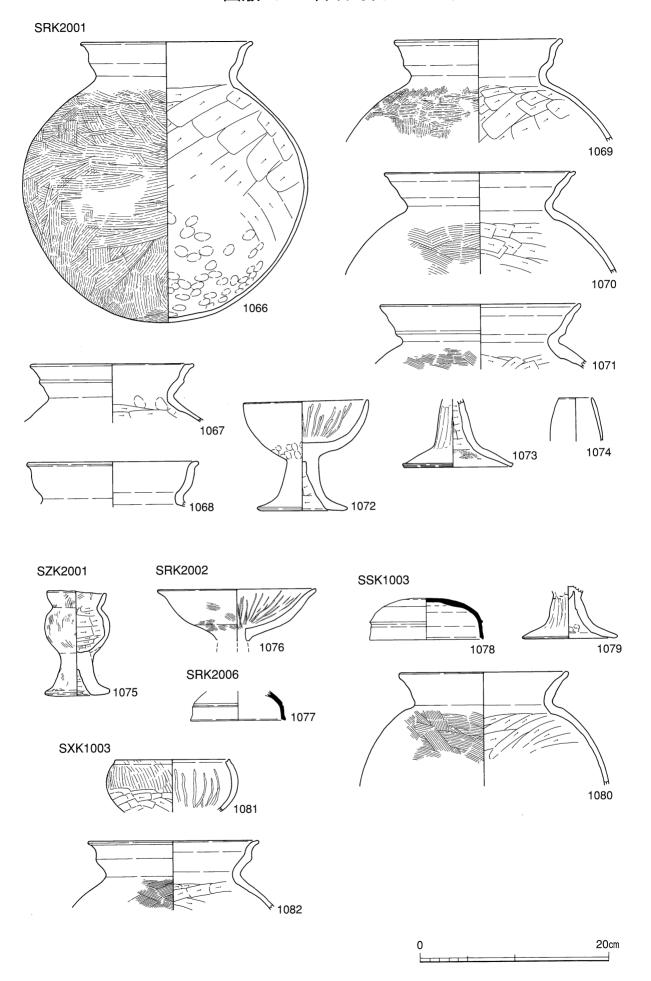
図版103 古墳時代の土器(15) 宮ヶ田Ⅲ地区



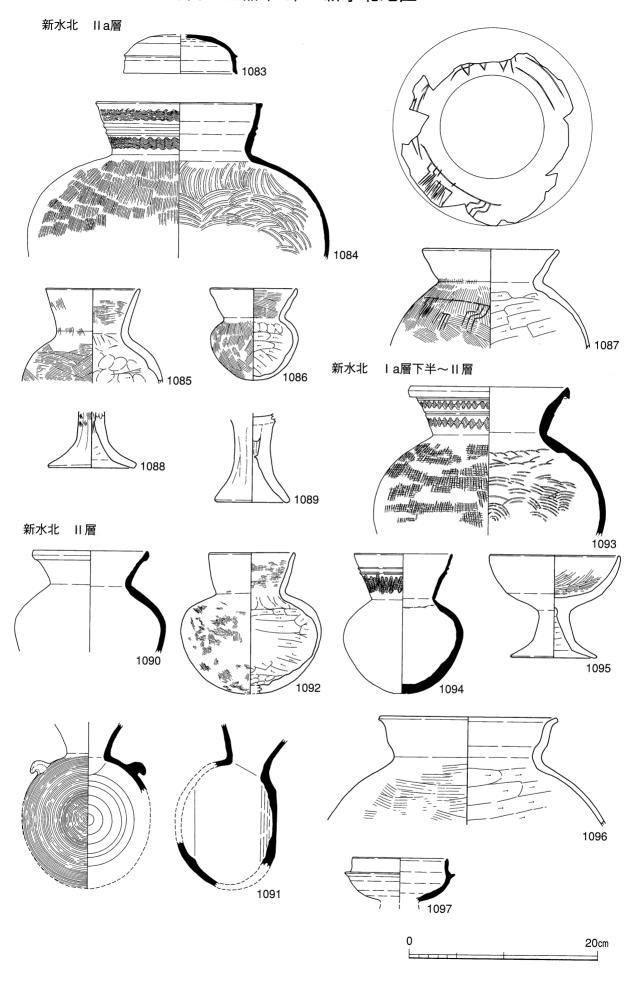
図版104 古墳時代の土器(16) 新水北地区



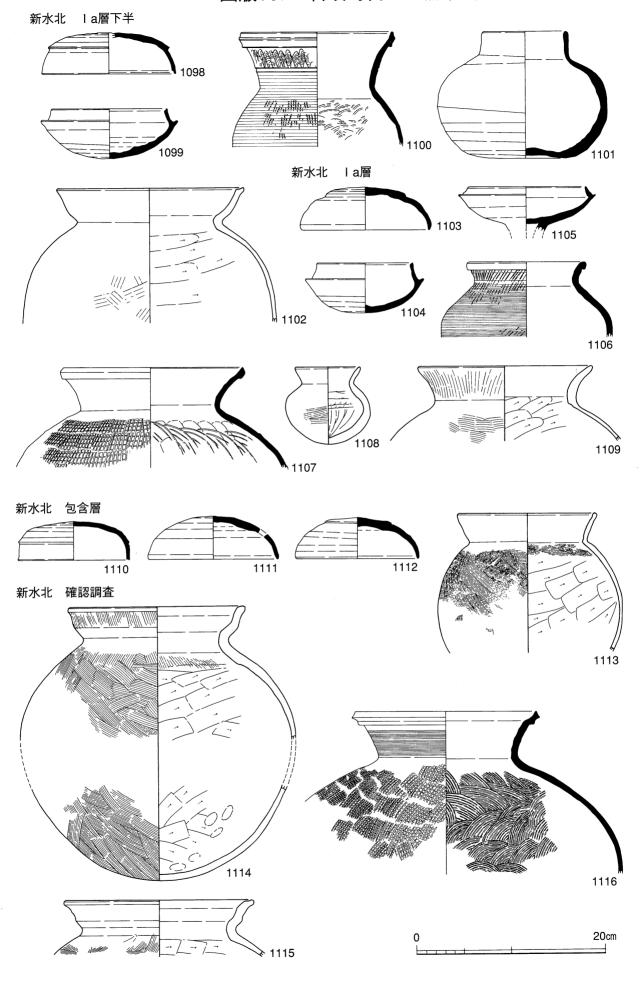
図版105 古墳時代の土器(17) 新水北地区



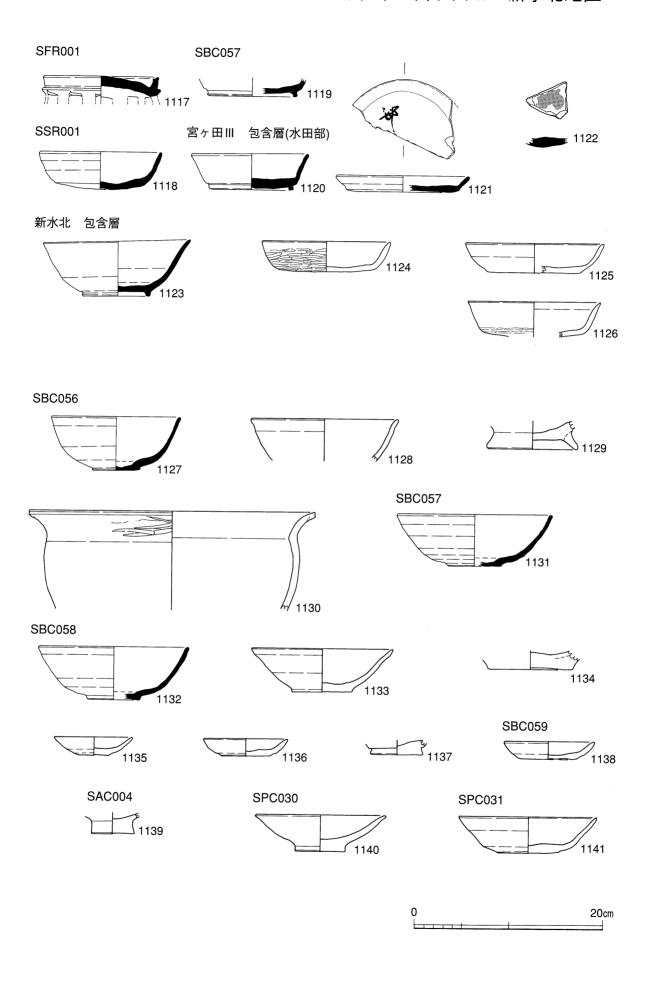
図版106 古墳時代の土器(18) 新水北地区



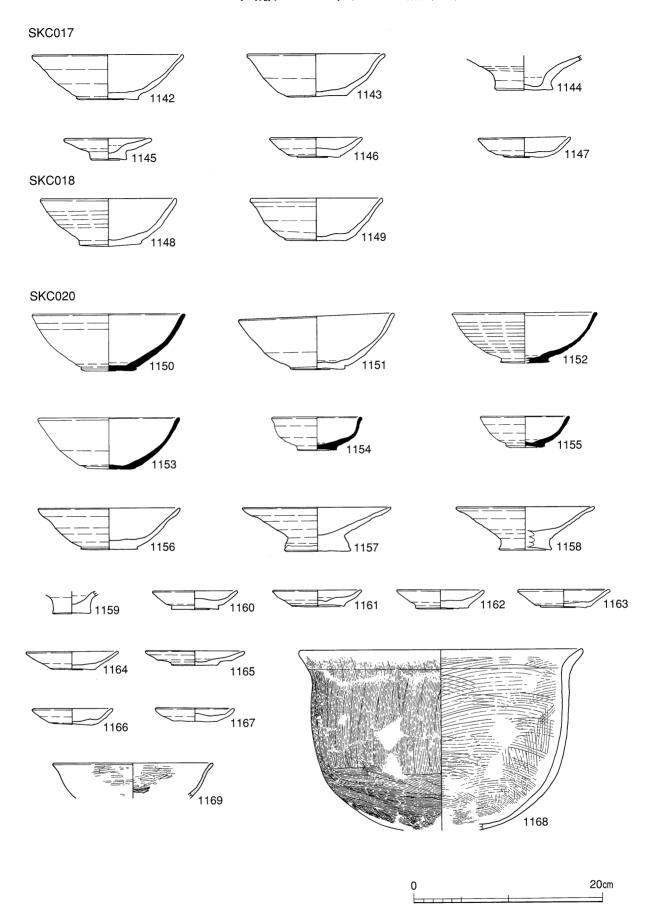
図版107 古墳時代の土器(19) 新水北地区



図版108 律令期の土器・中世の土器(1) 宮ヶ田Ⅲ・新水北地区

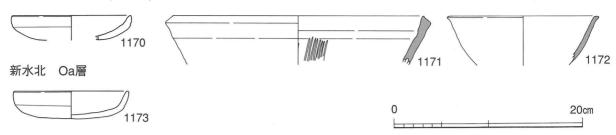


図版109 中世の土器(2) 宮ヶ田Ⅲ地区

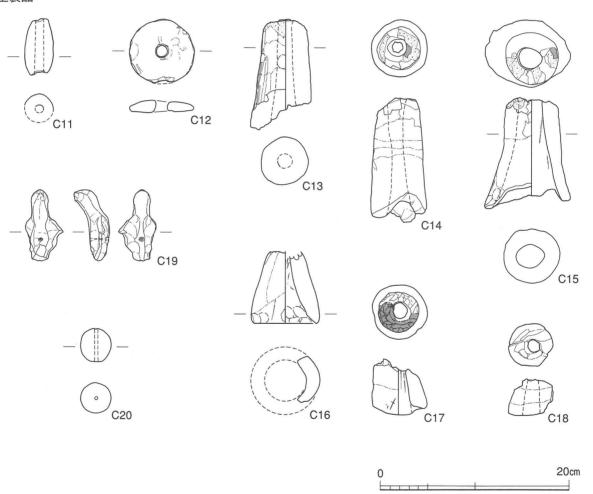


図版110 中世の土器(3) ・土製品 宮ヶ田Ⅲ・新水北地区

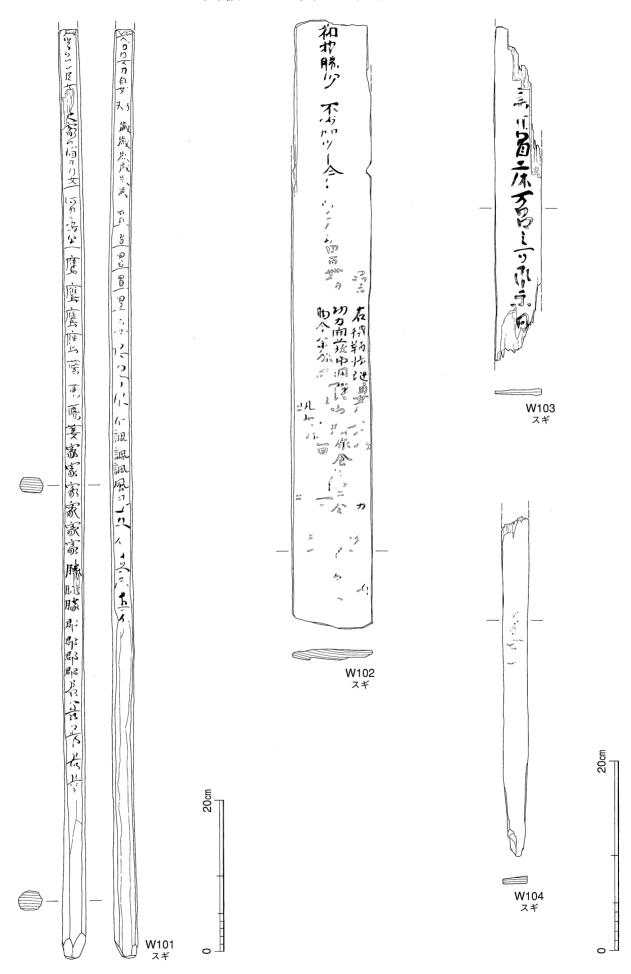
宮ヶ田 III 包含層(水田部)



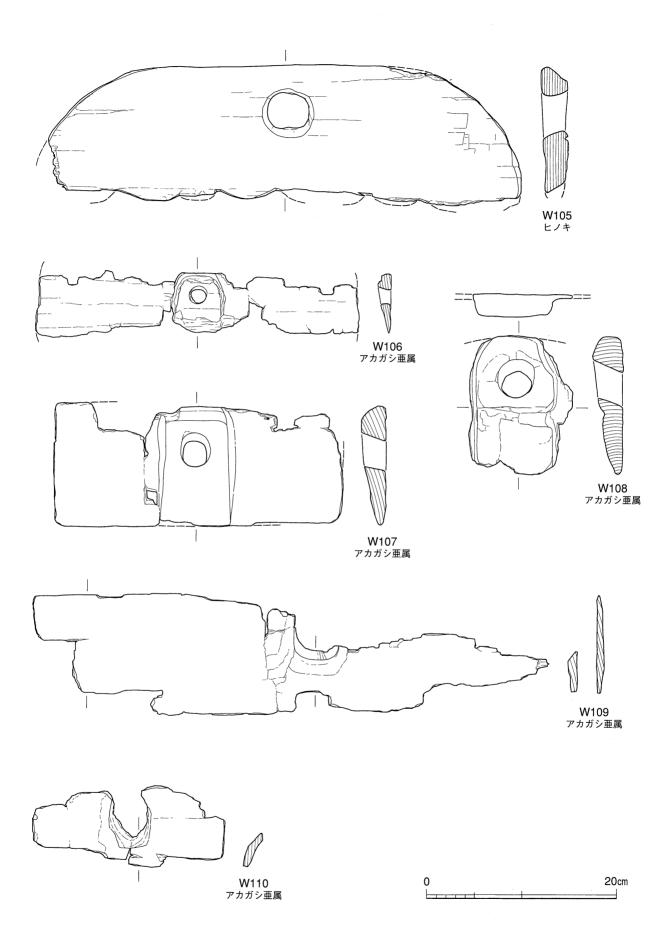




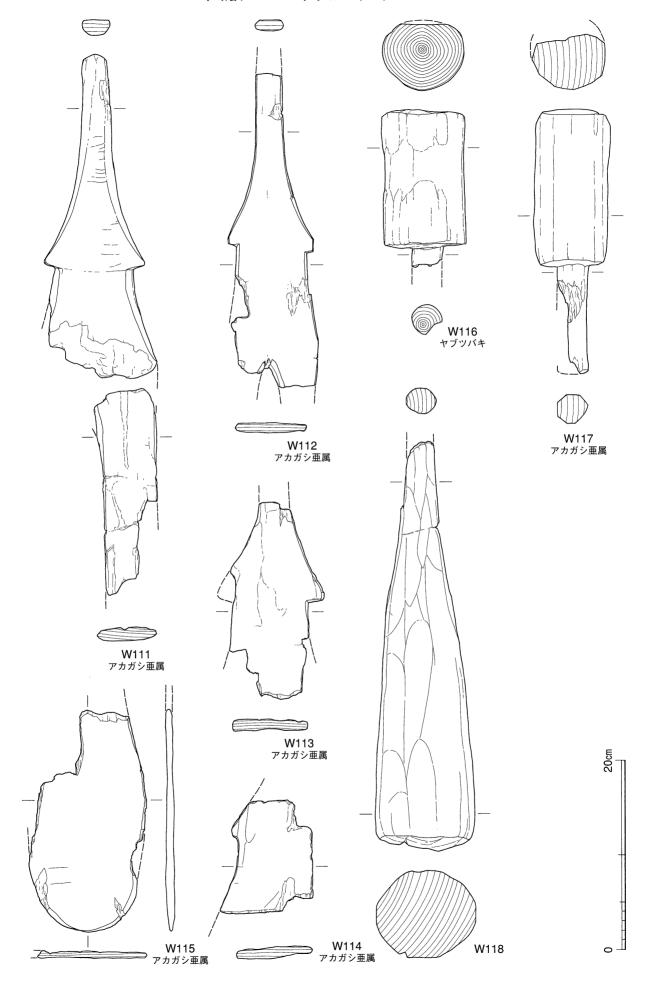
図版111 木製品(1) 宮ヶ田Ⅲ・新水北地区



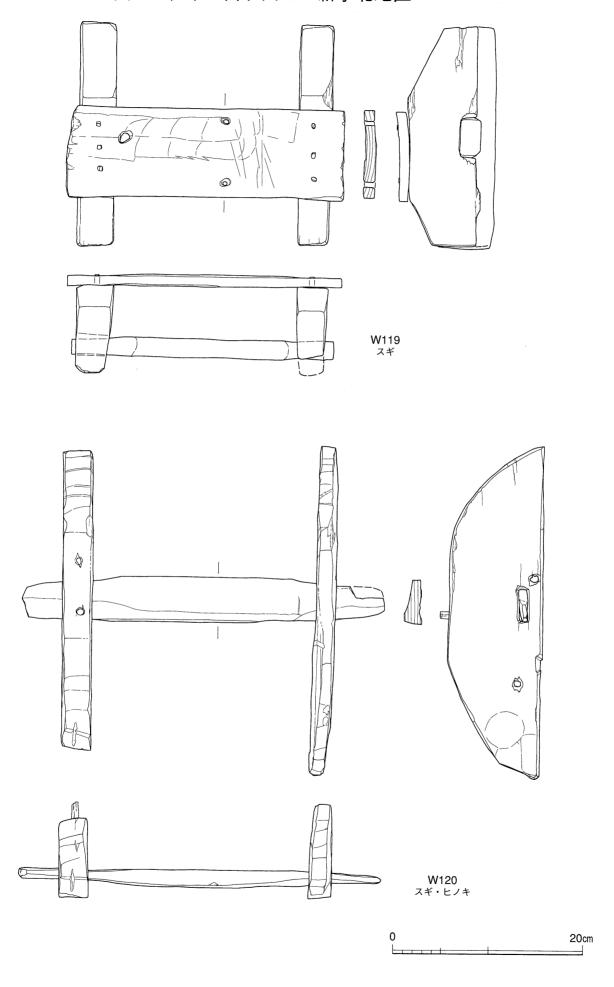
図版112 木製品(2) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



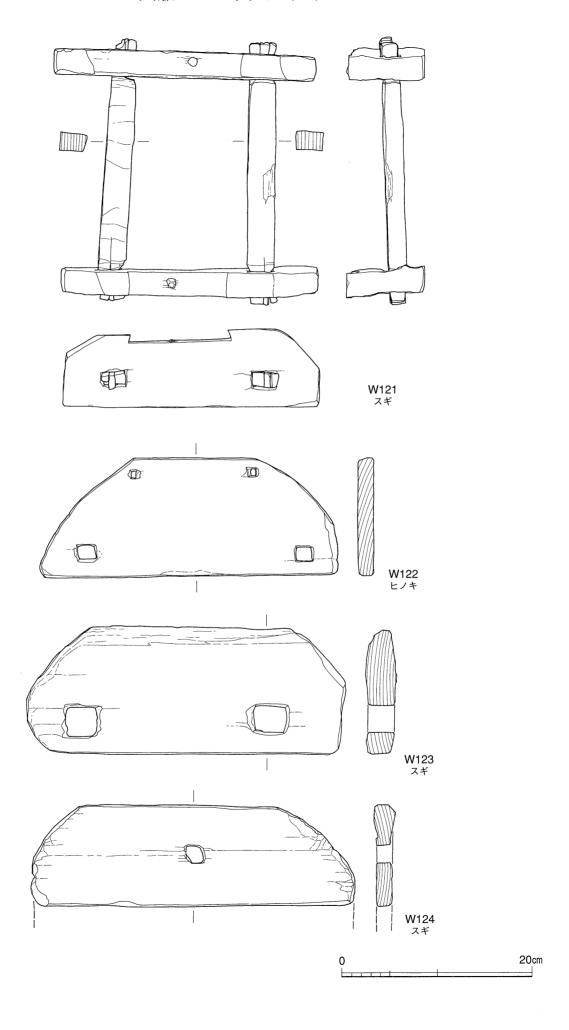
図版113 木製品(3) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



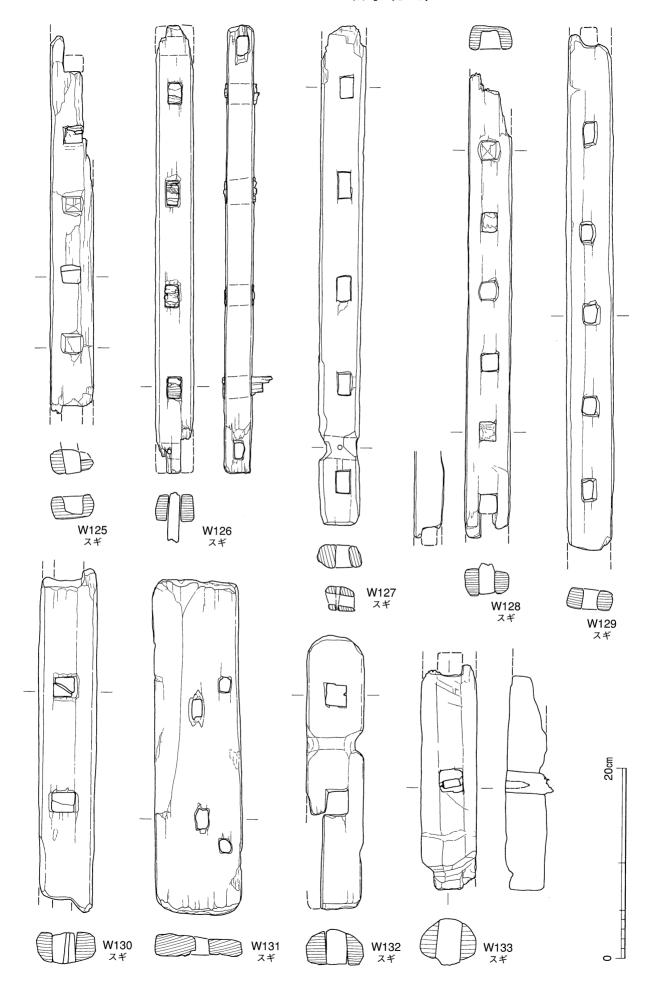
図版114 木製品(4) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



図版115 木製品(5) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



図版116 木製品(6) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



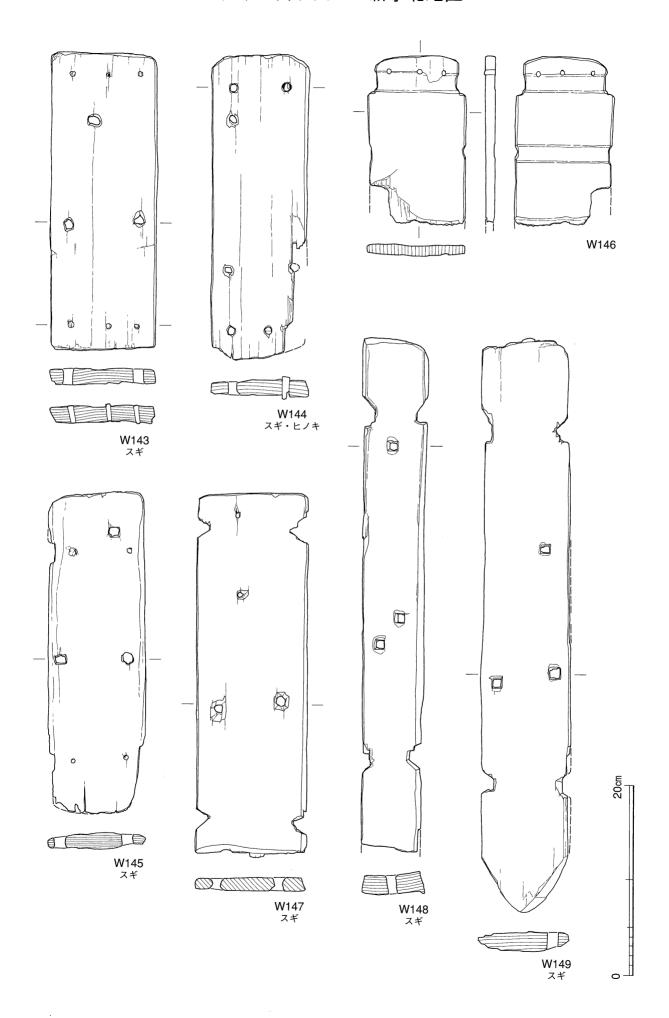
図版117 木製品(7) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区 W137 スギ W136 スギ W135 スギ W134 スギ W142 -

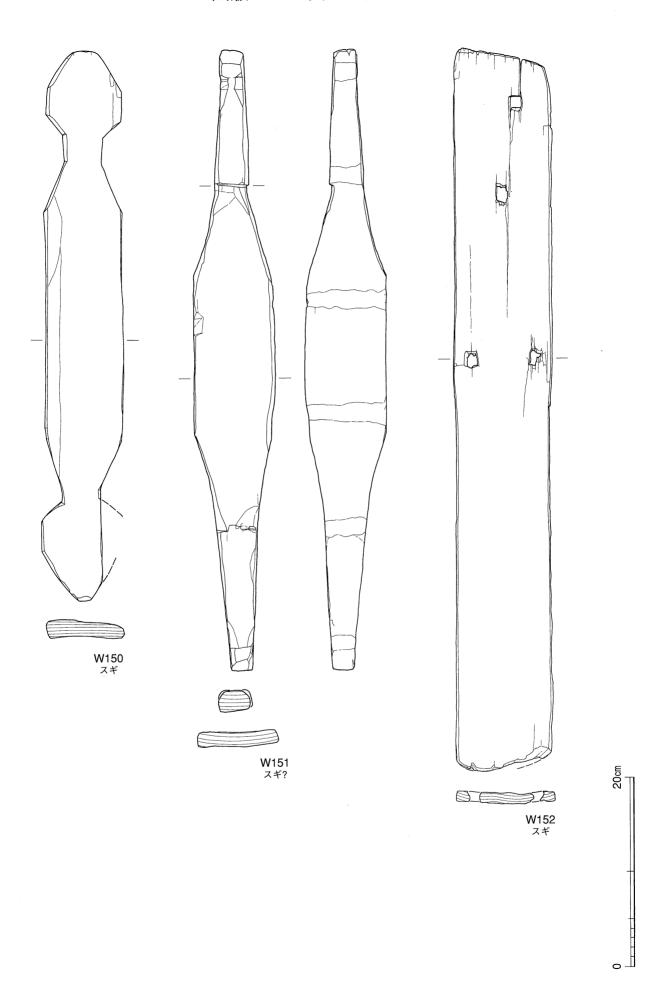
W140 スギ

W139 スギ

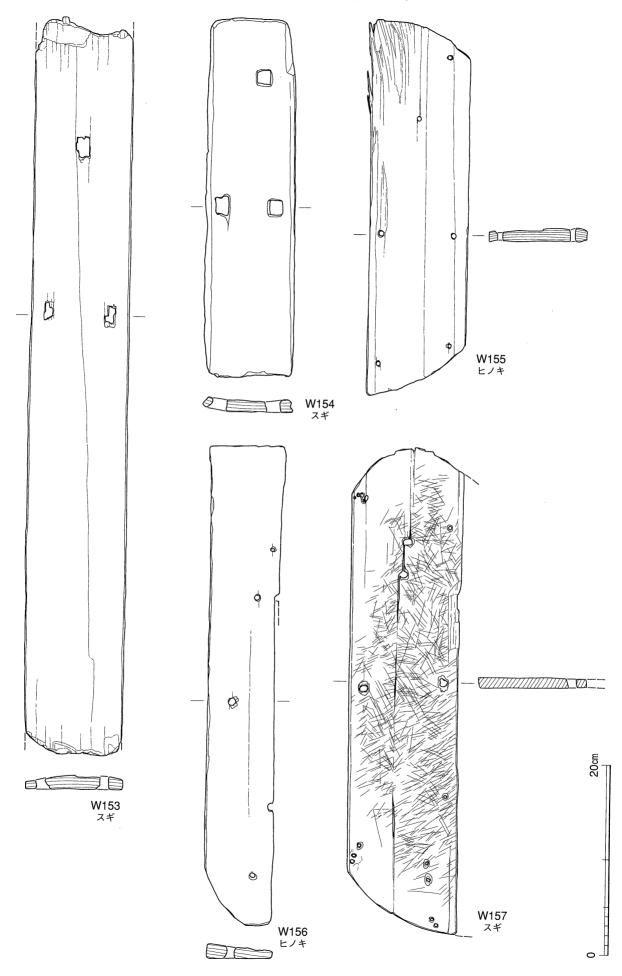
W138 スギ **W141** スギ

図版118 木製品(8) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区

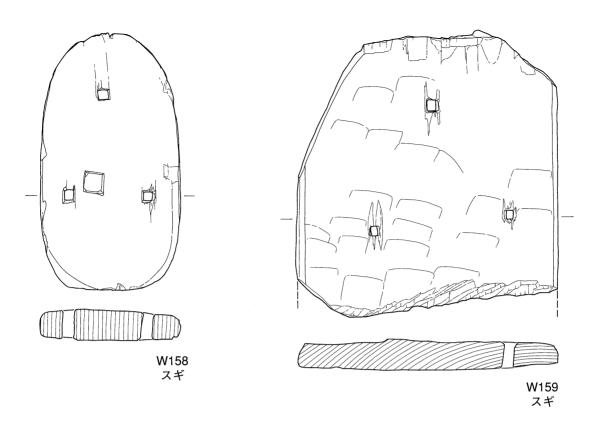


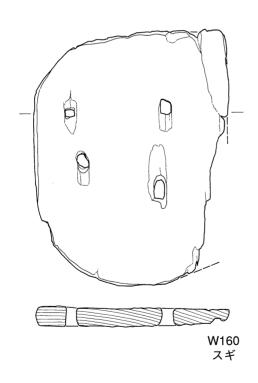


図版120 木製品(10) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



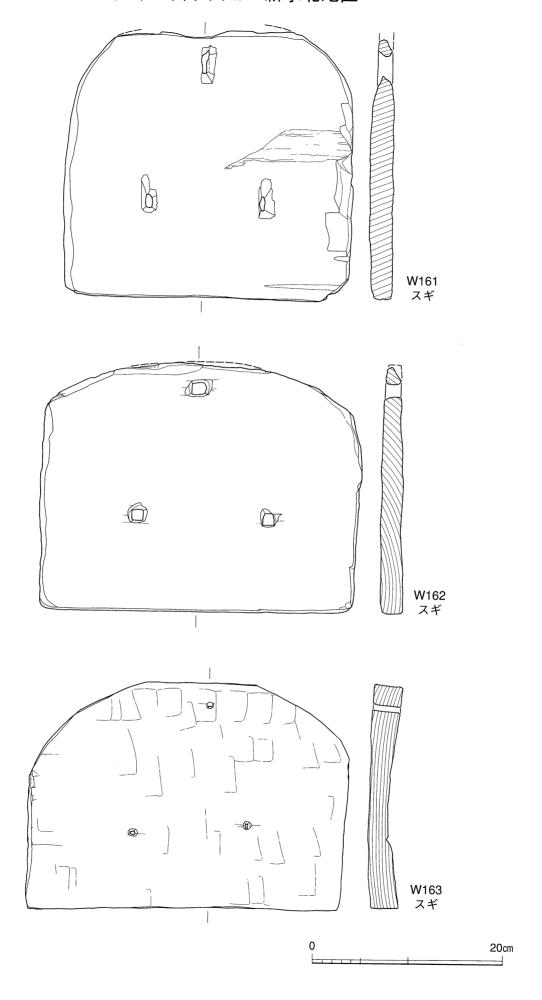
図版121 木製品(11) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



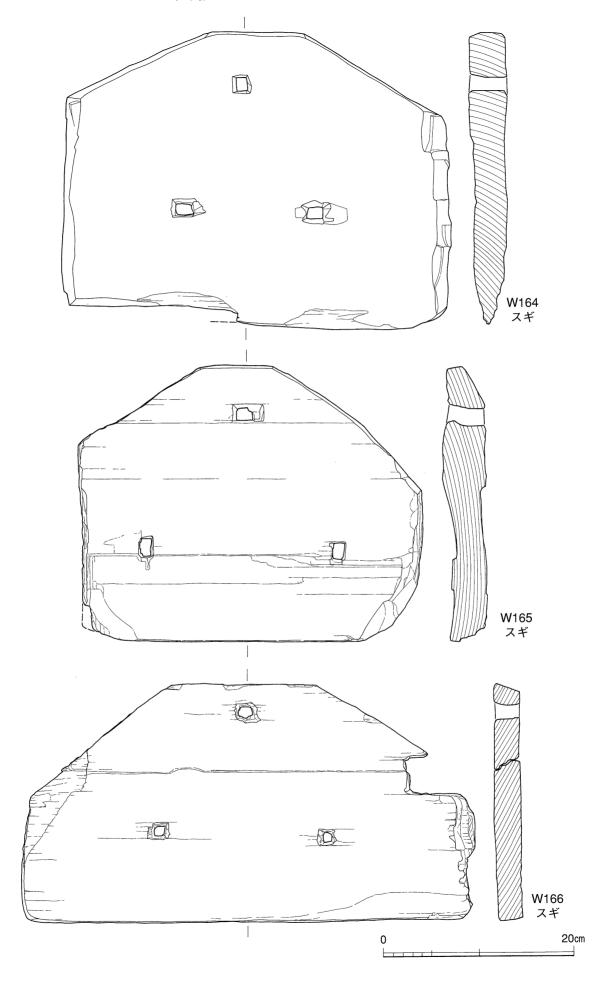




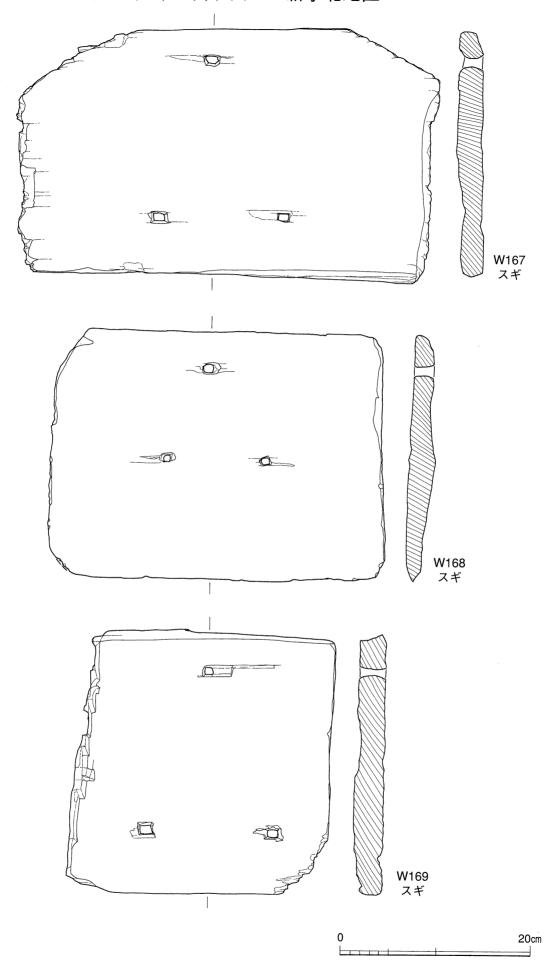
図版122 木製品(12) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



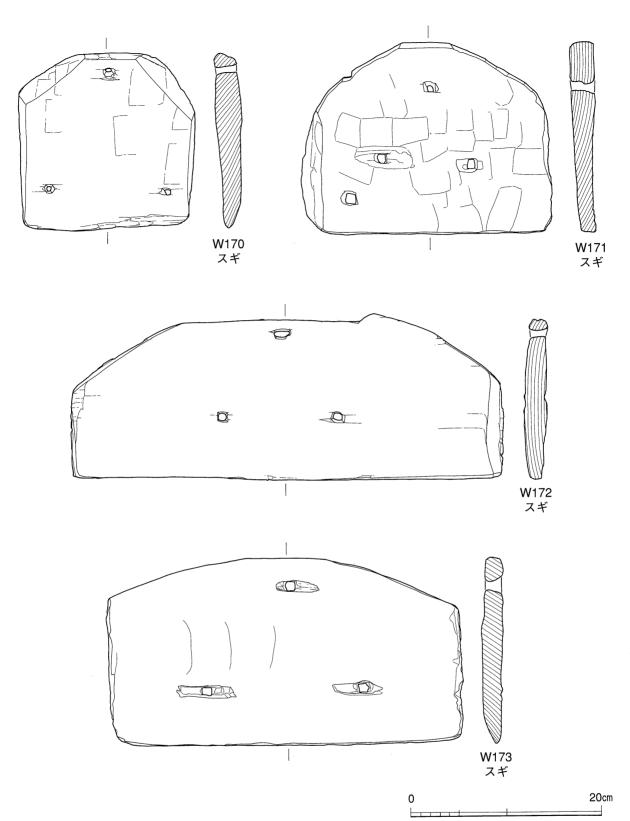
図版123 木製品(13) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



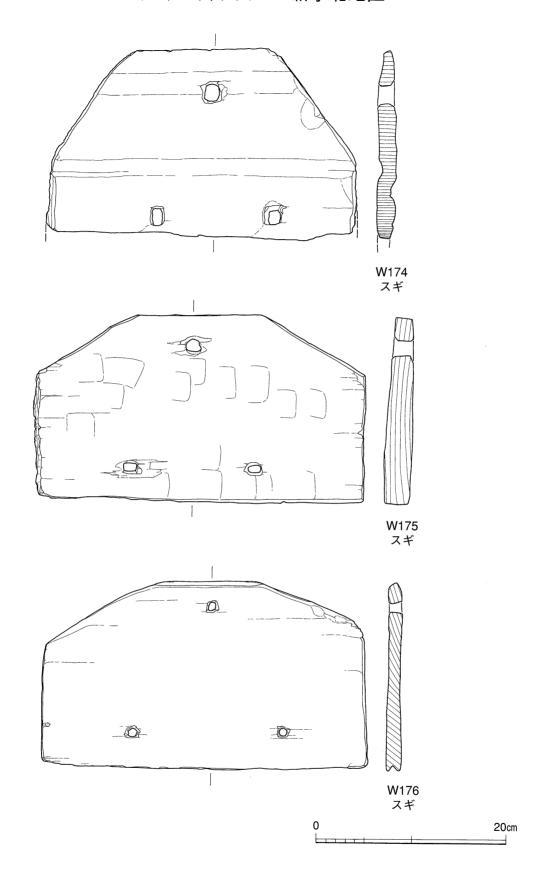
図版124 木製品(14) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



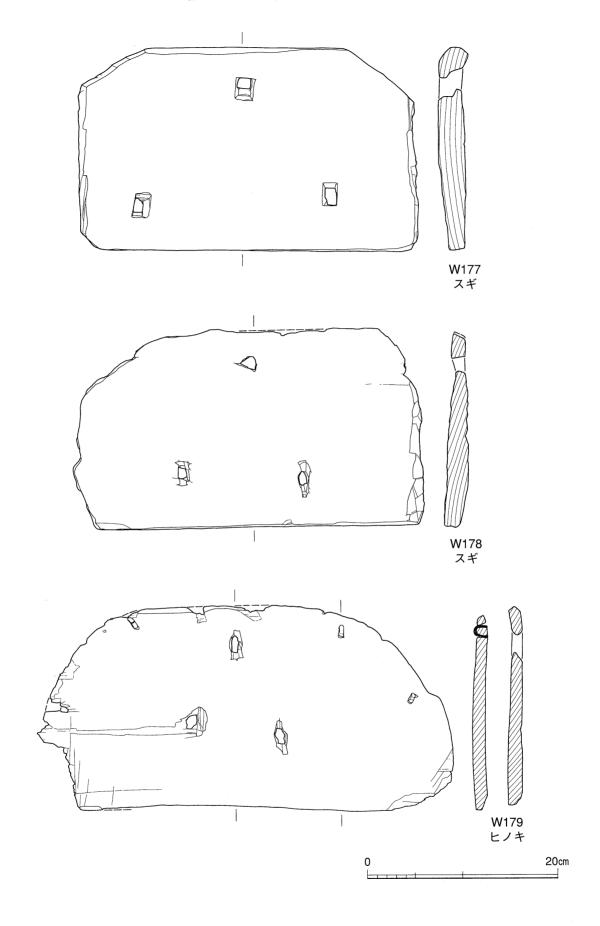
図版125 木製品(15) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



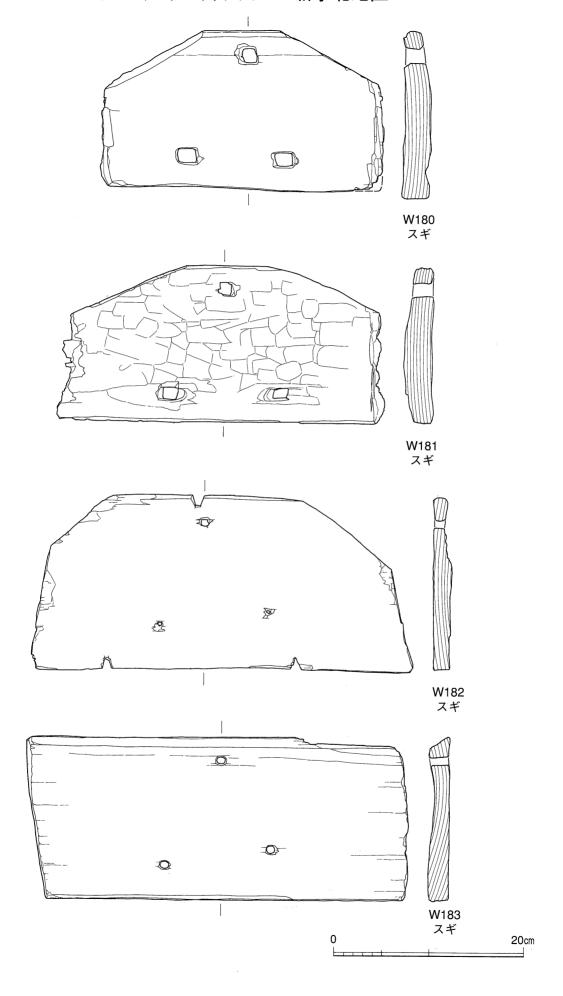
図版126 木製品(16) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



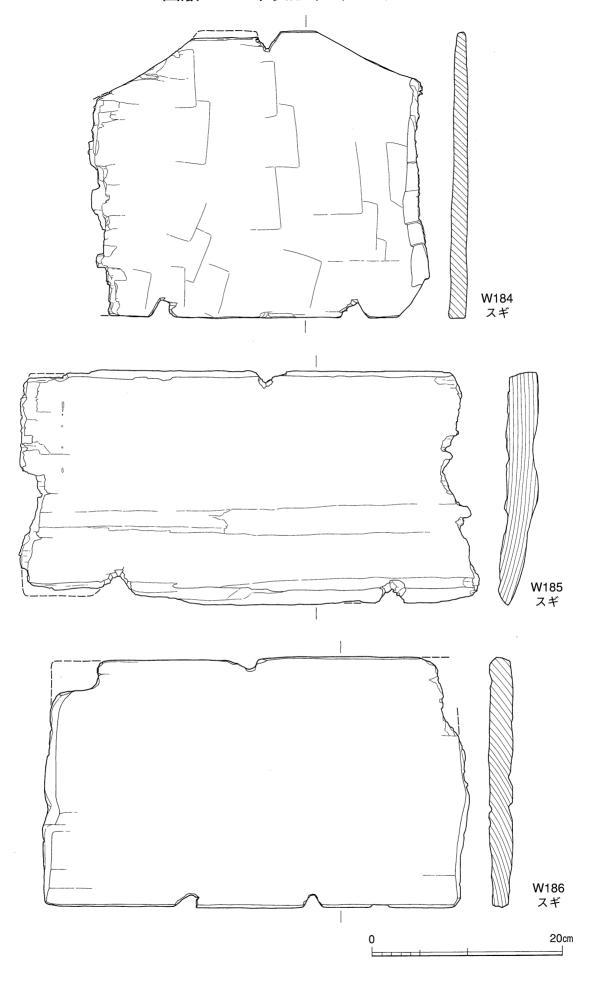
図版127 木製品(17) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



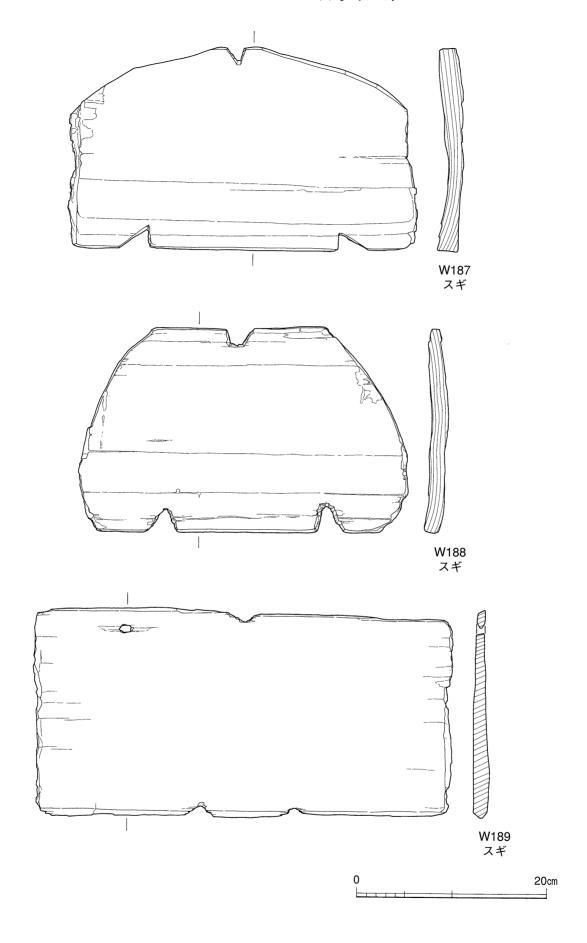
図版128 木製品(18) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



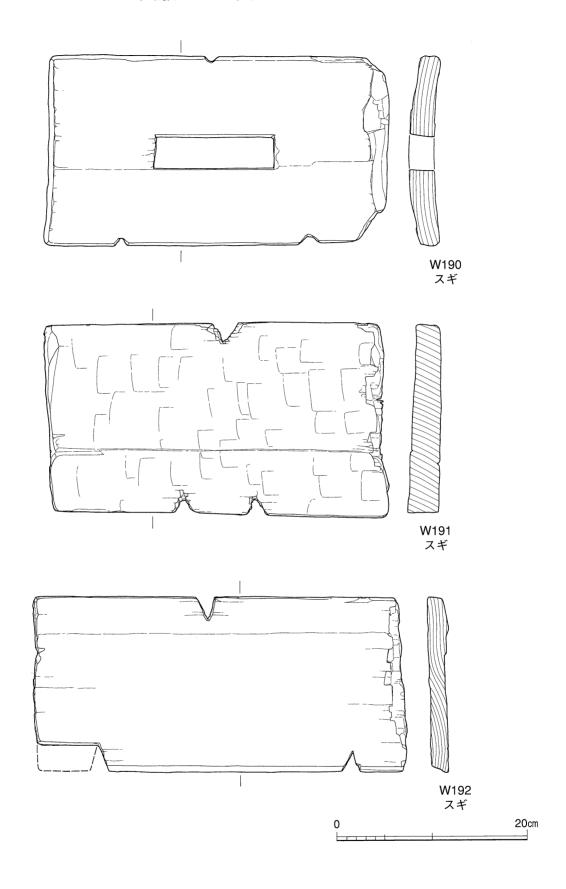
図版129 木製品(19) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



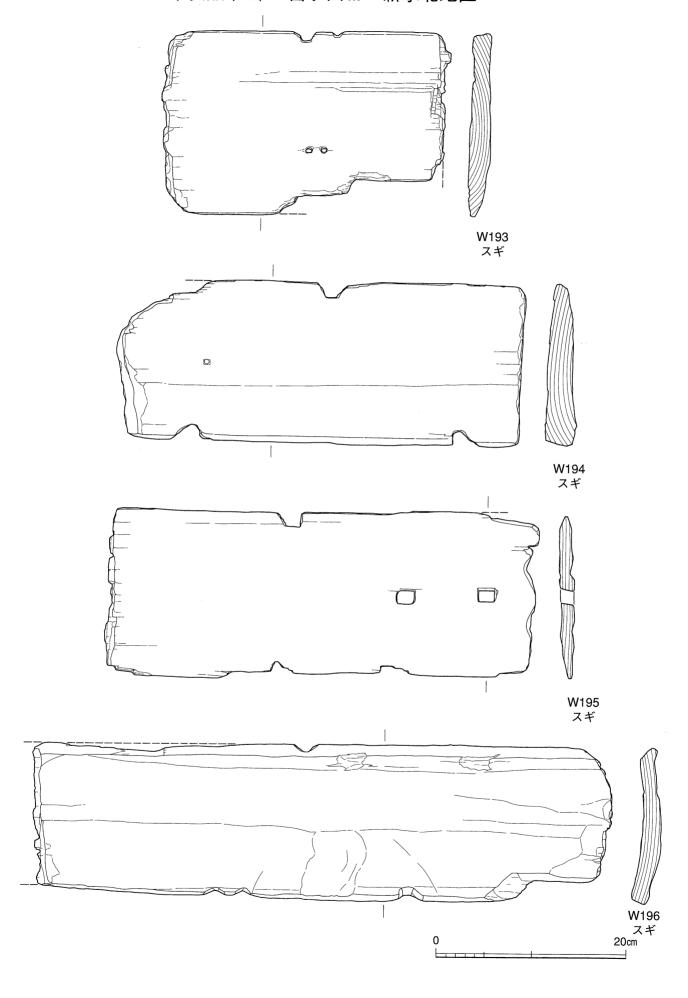
図版130 木製品(20) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



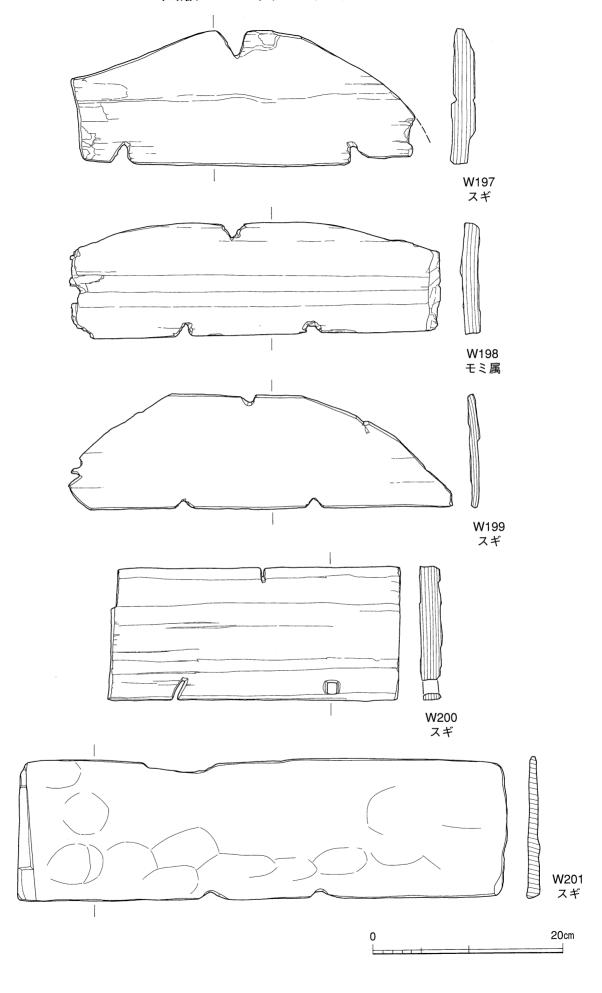
図版131 木製品(21) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



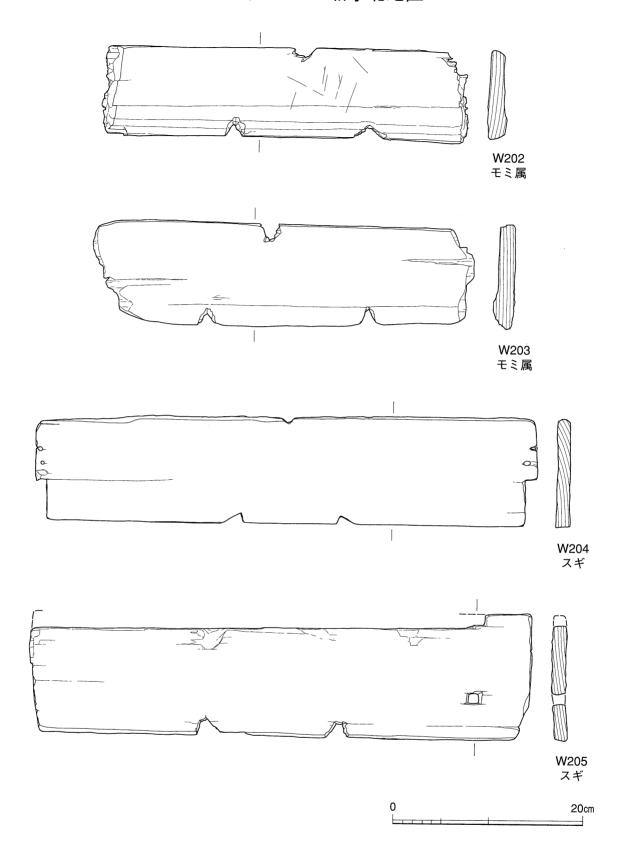
図版132 木製品(22) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



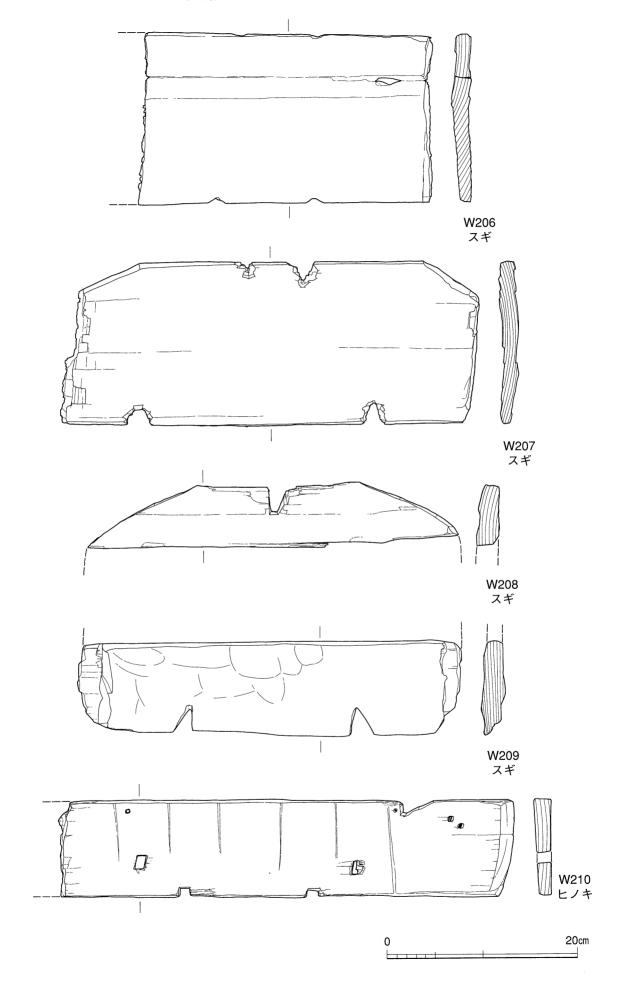
図版133 木製品(23) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



図版134 木製品(24) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



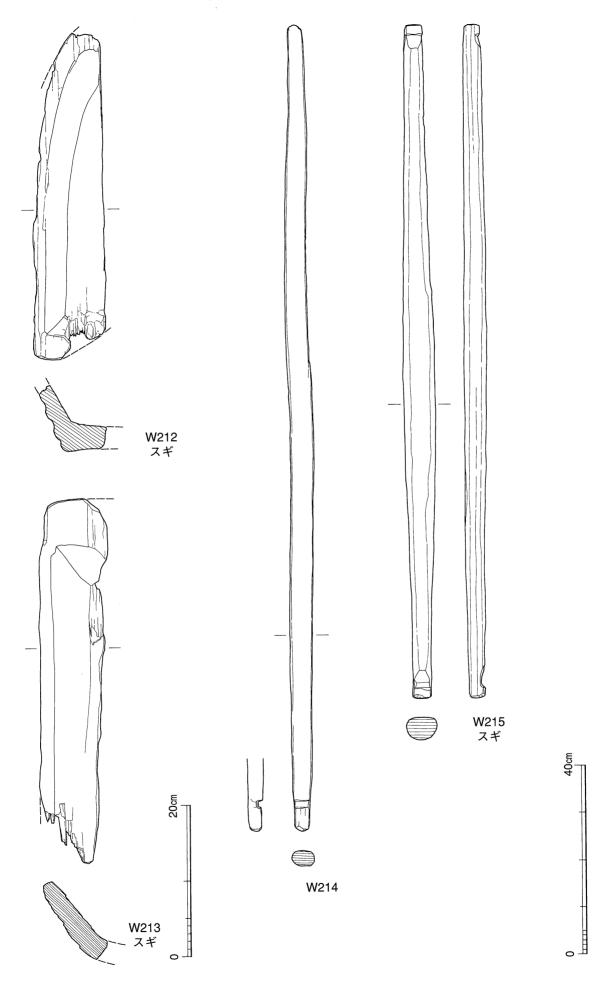
図版135 木製品(25) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



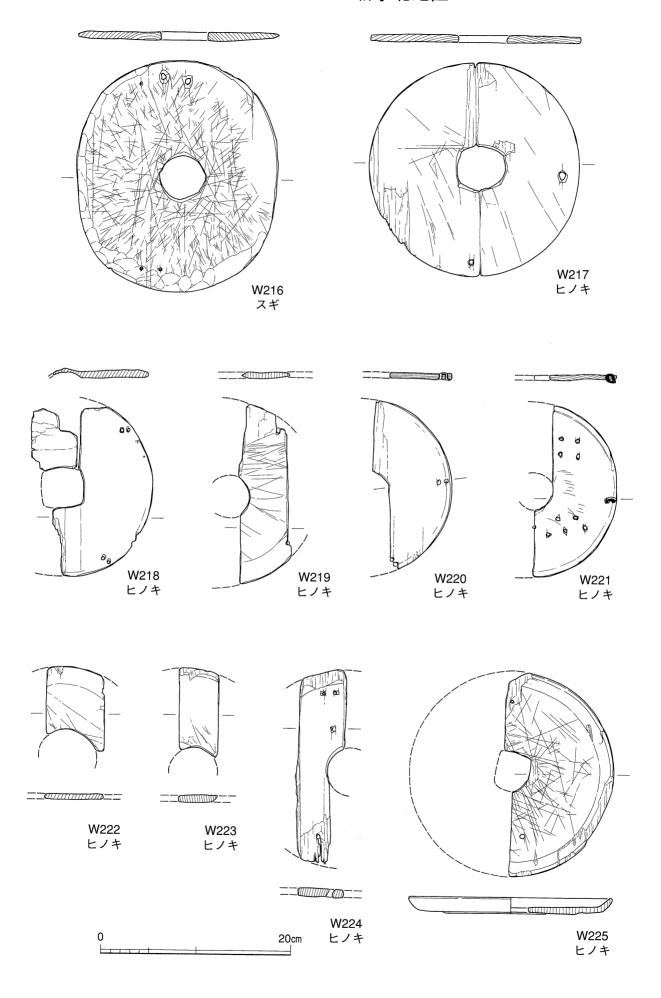
図版136 木製品(26) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



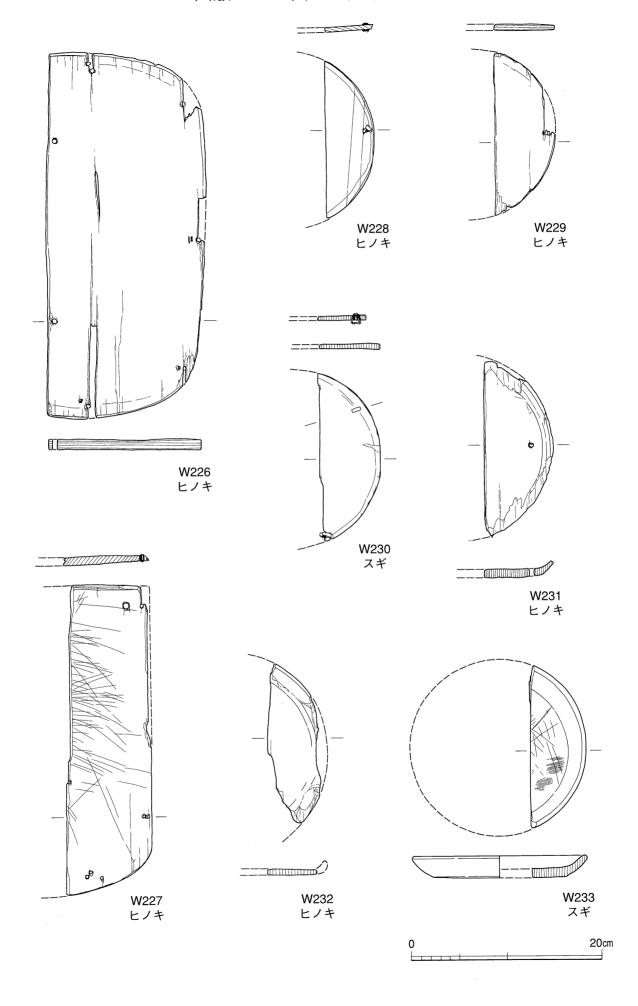
図版137 木製品(27) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



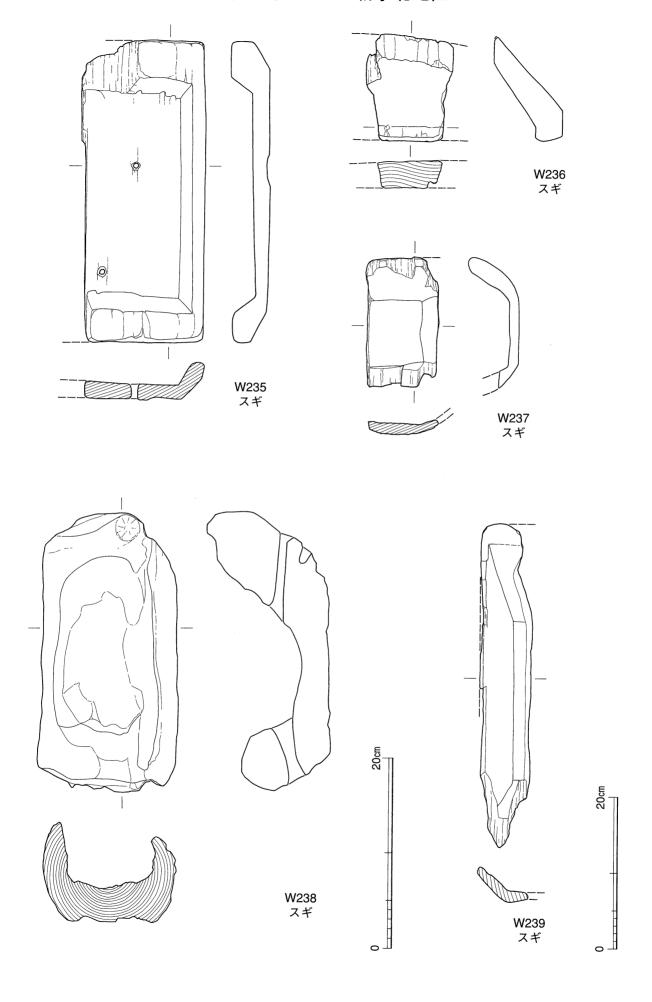
図版138 木製品(28) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区

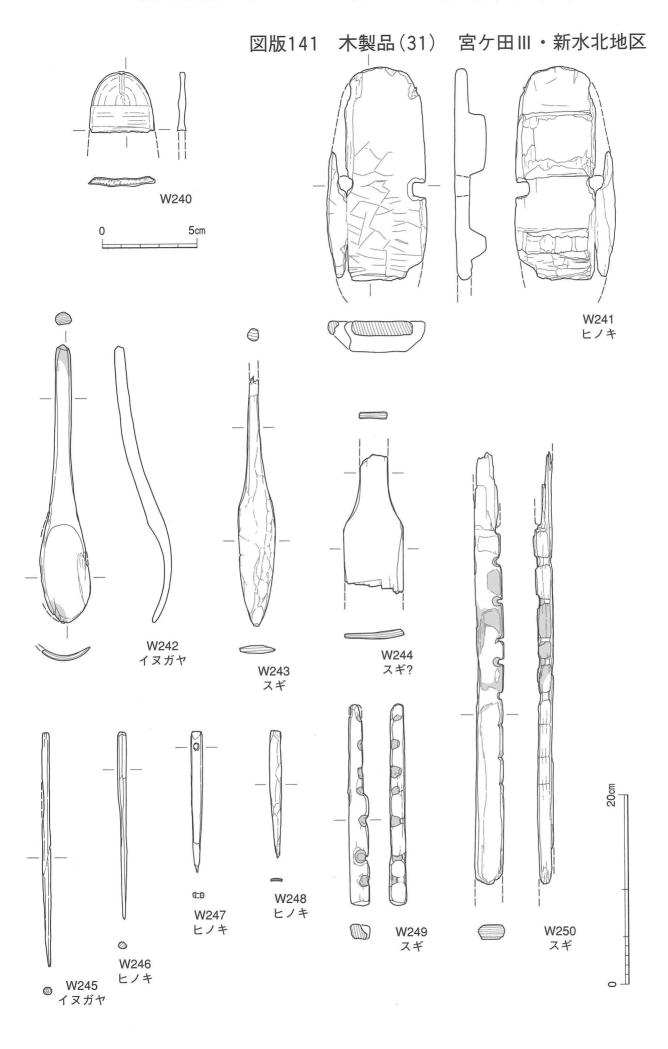


図版139 木製品(29) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区

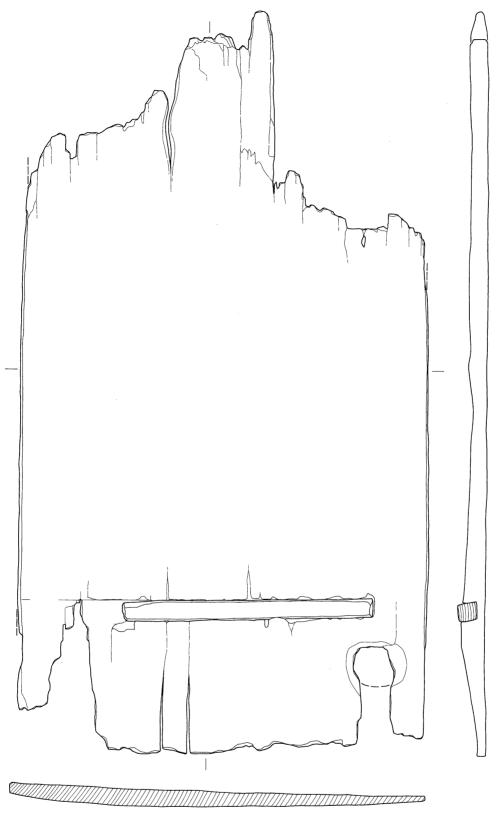


図版140 木製品(30) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区





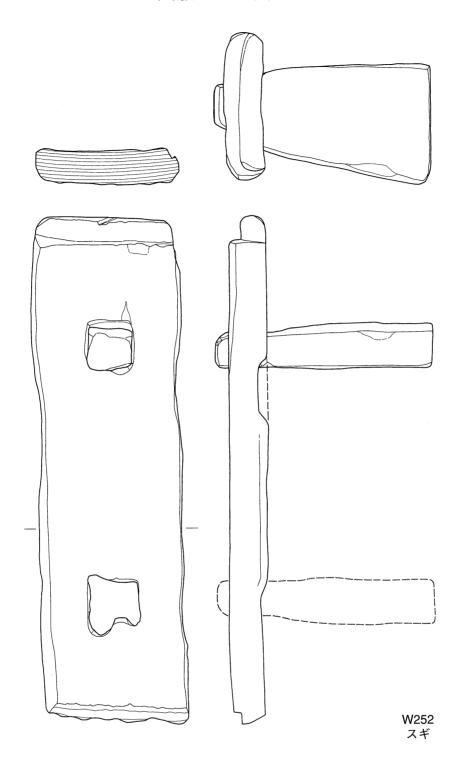
図版142 木製品(32) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



W251 ヒノキ

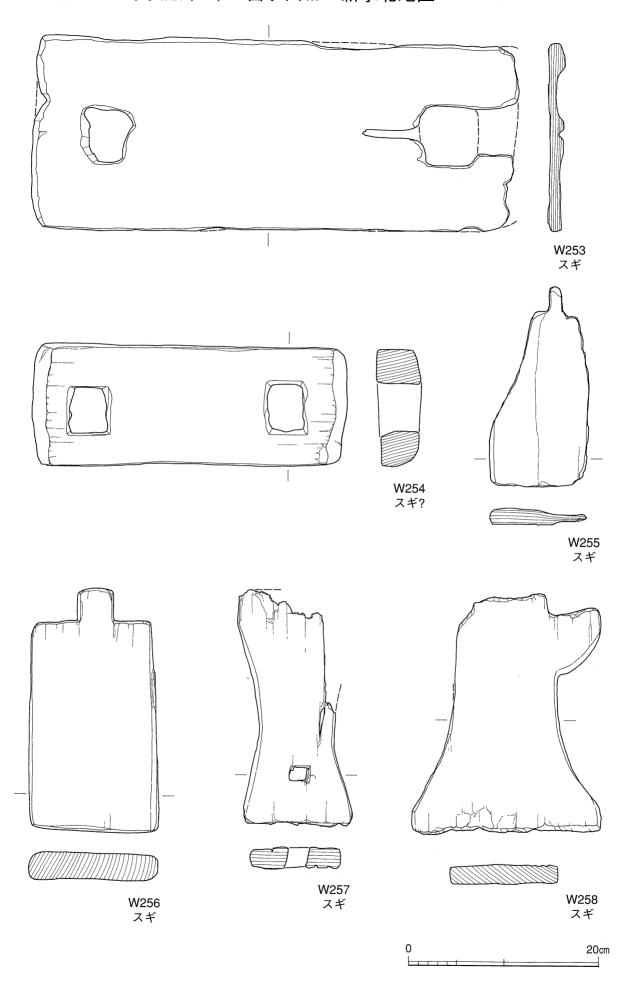
0 20cm

図版143 木製品(33) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区

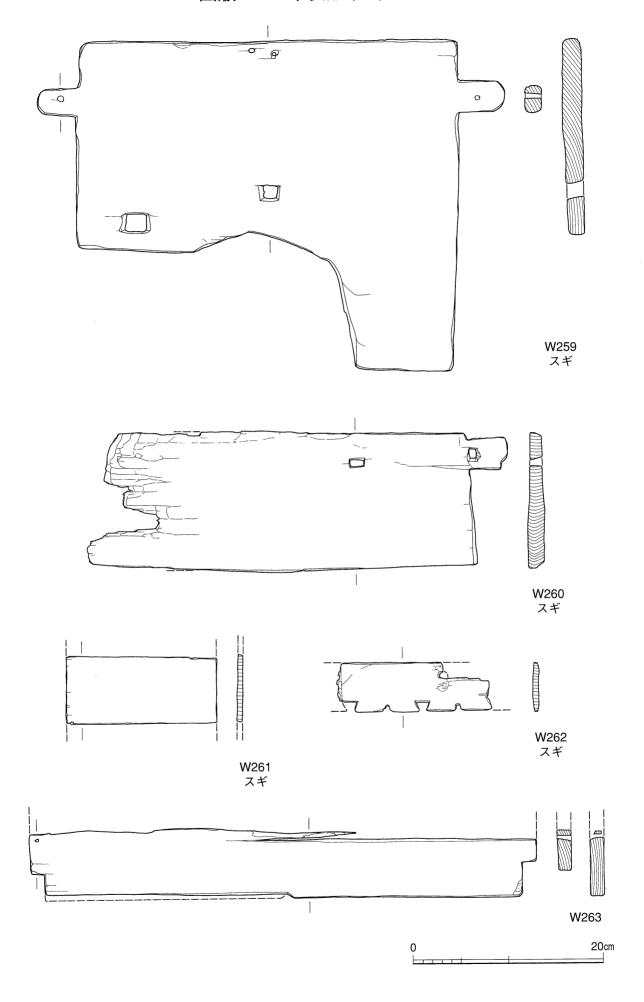


0 20cm

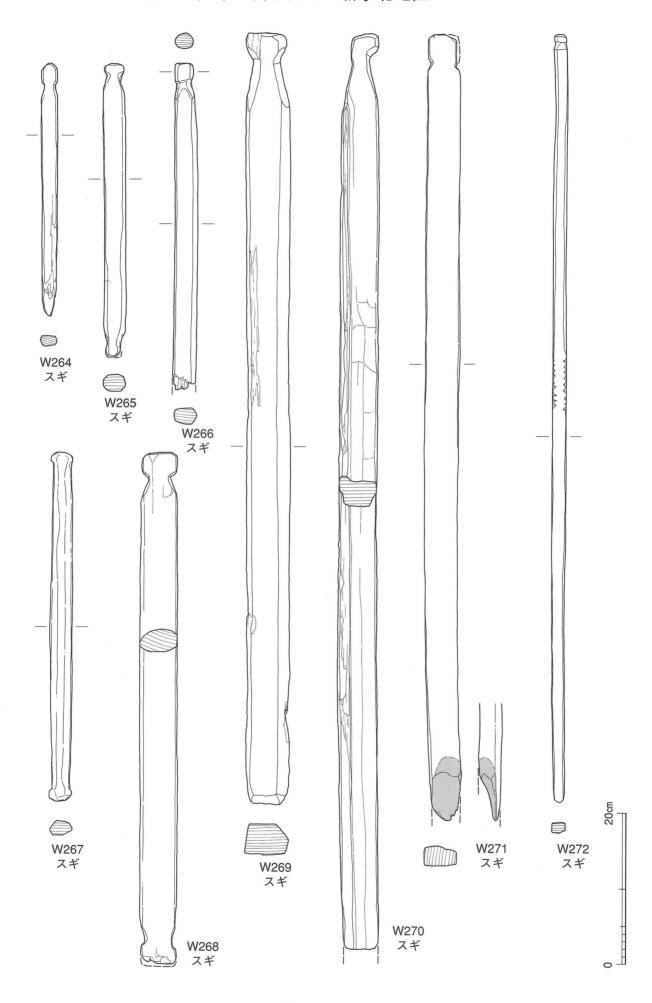
図版144 木製品(34) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区

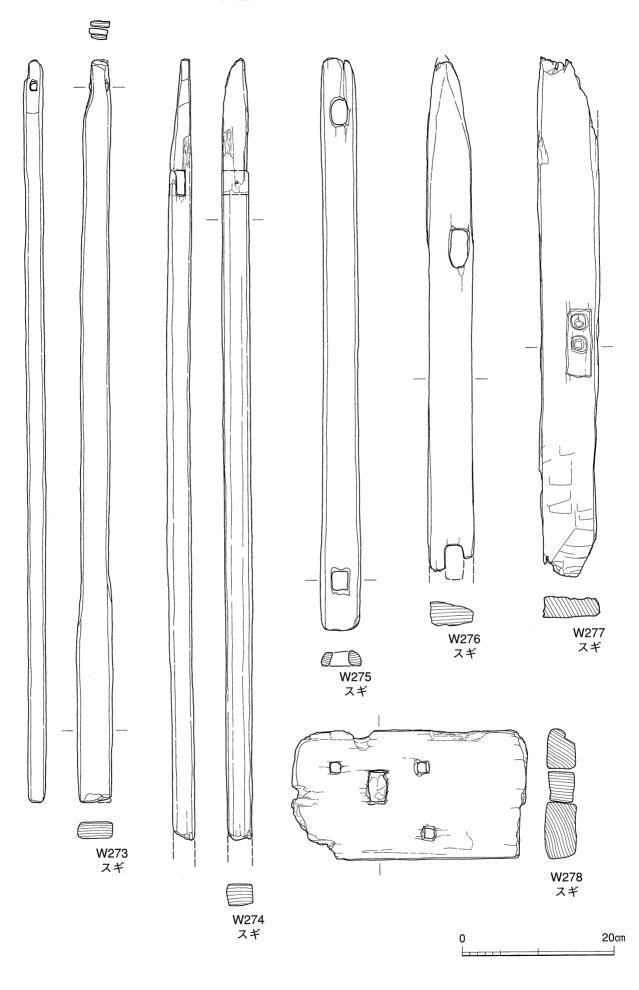


図版145 木製品(35) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区

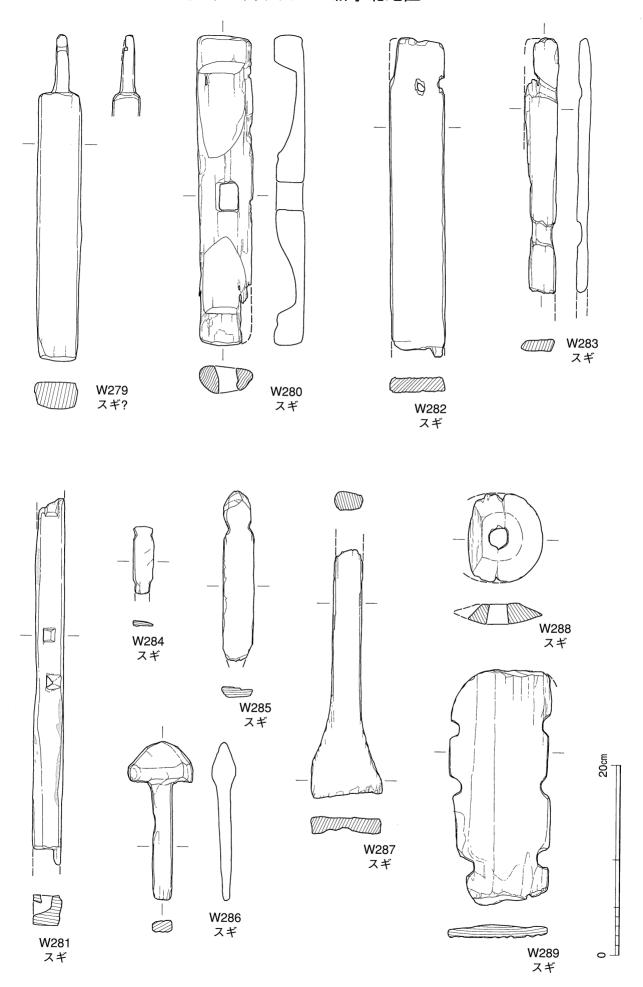


図版146 木製品(36) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区

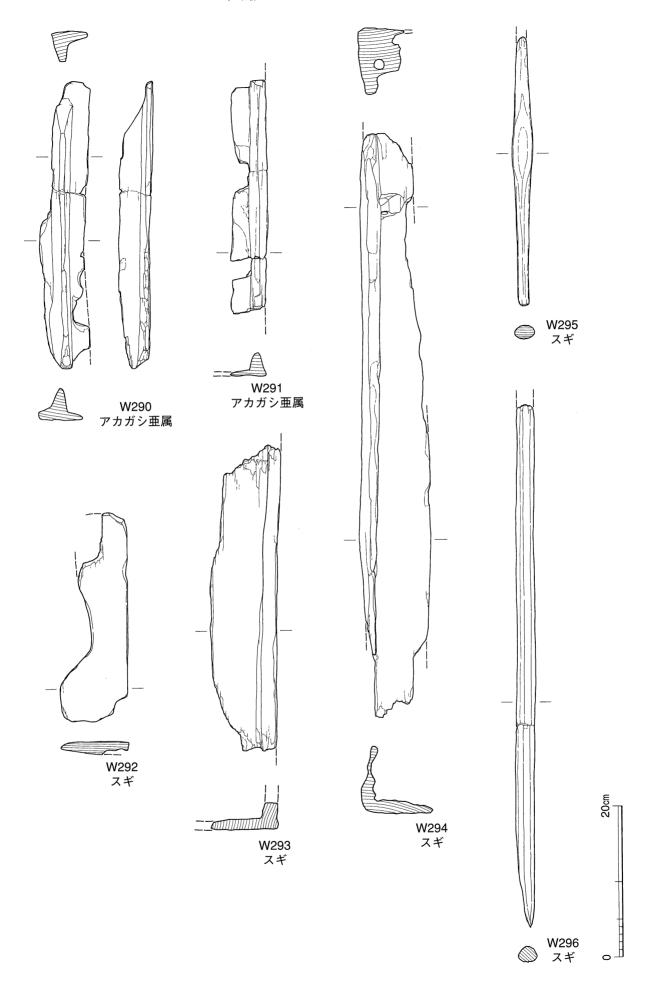




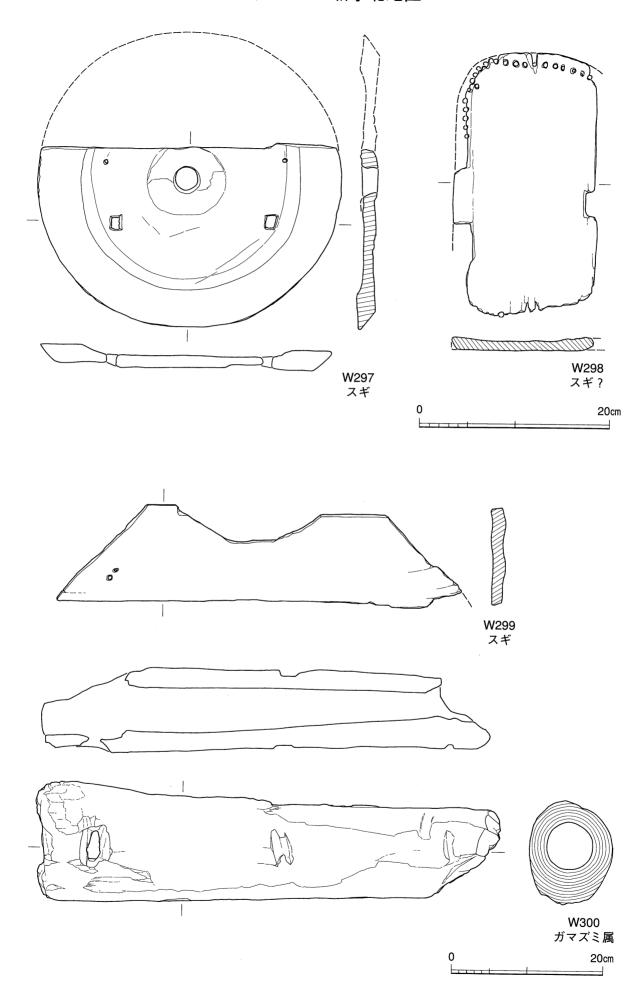
図版148 木製品(38) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



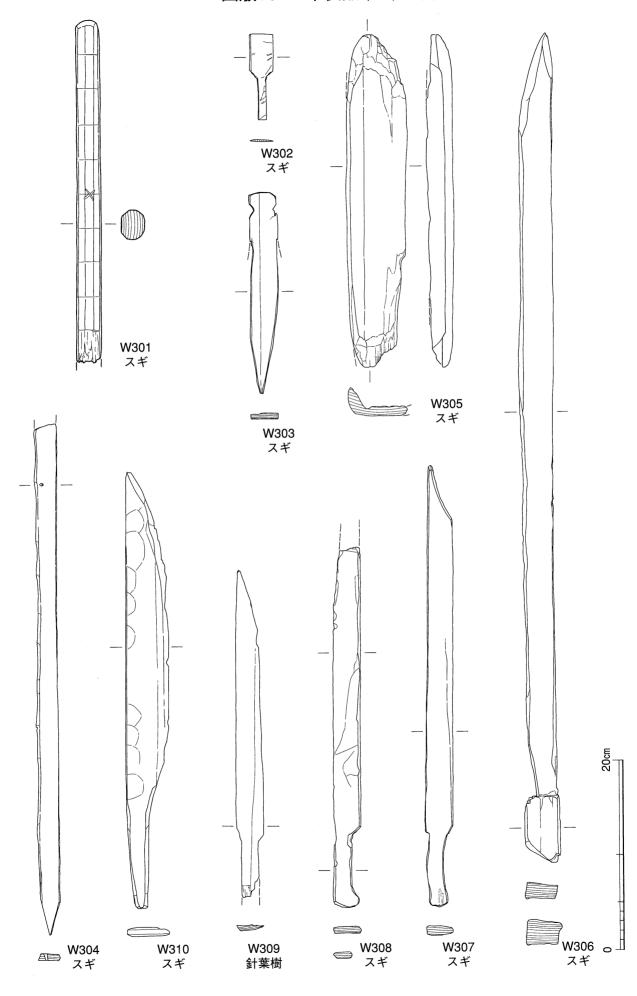
図版149 木製品(39) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区

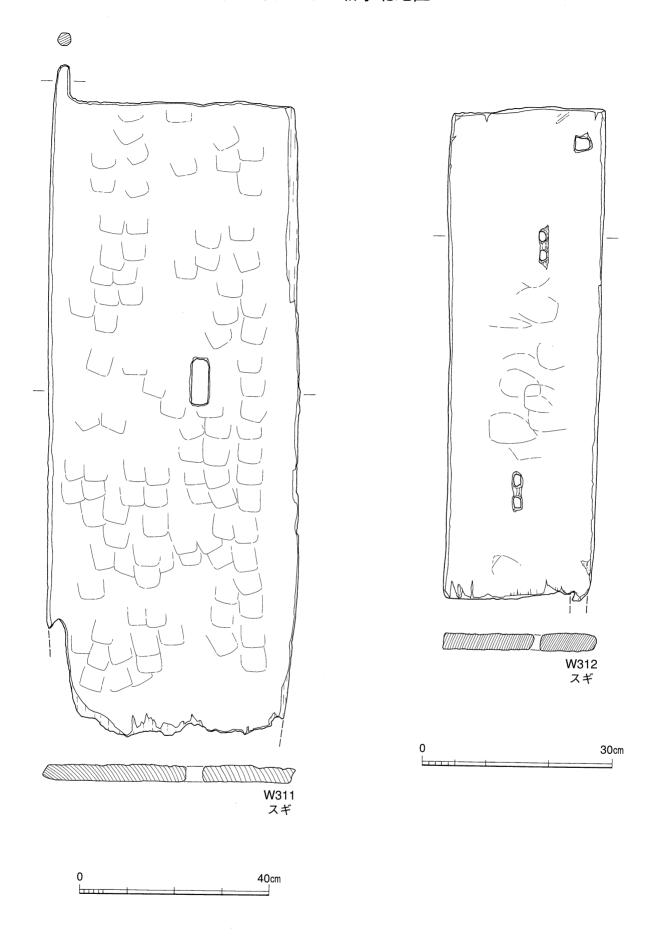


図版150 木製品(40) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区

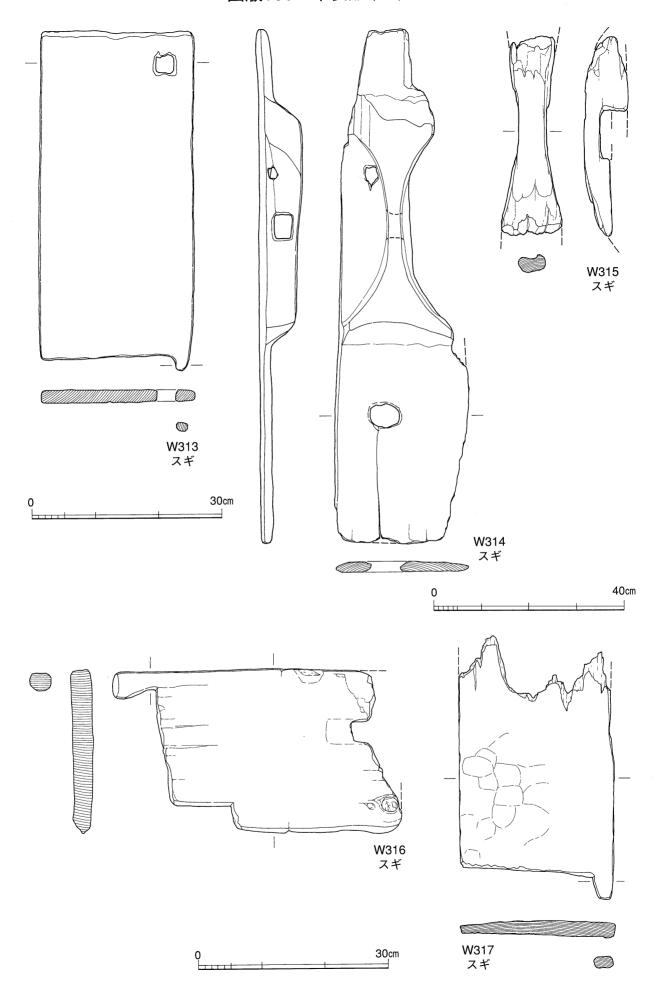


図版151 木製品(41) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区

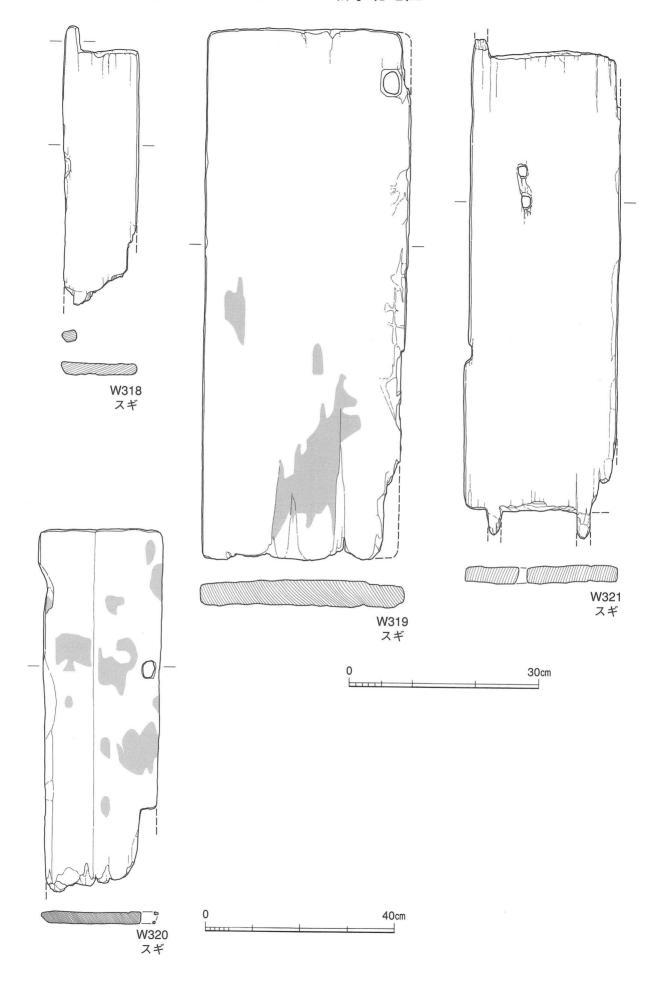




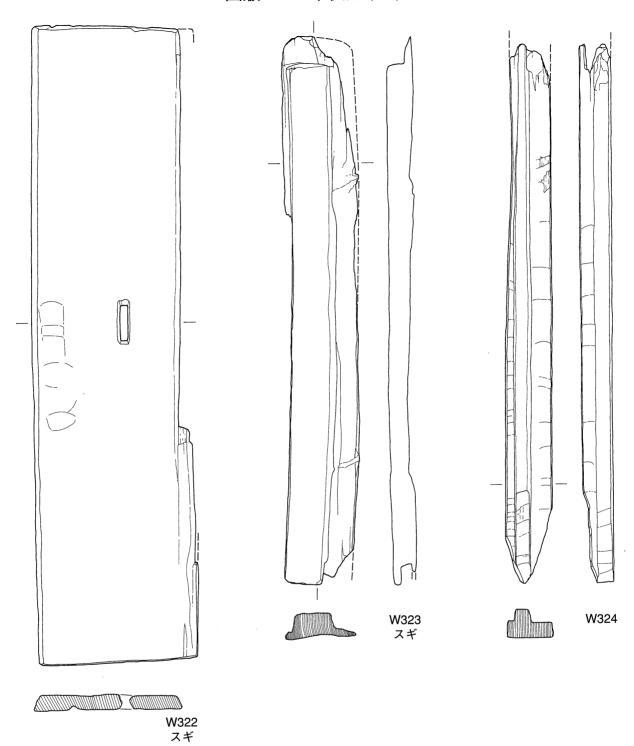
図版153 木製品(43) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



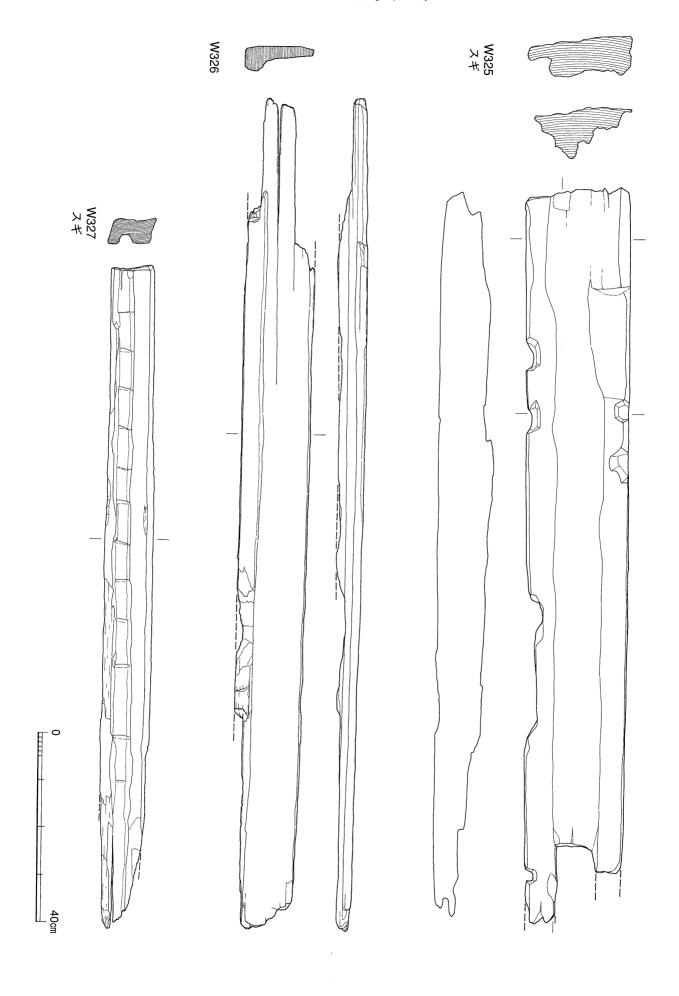
図版154 木製品(44) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



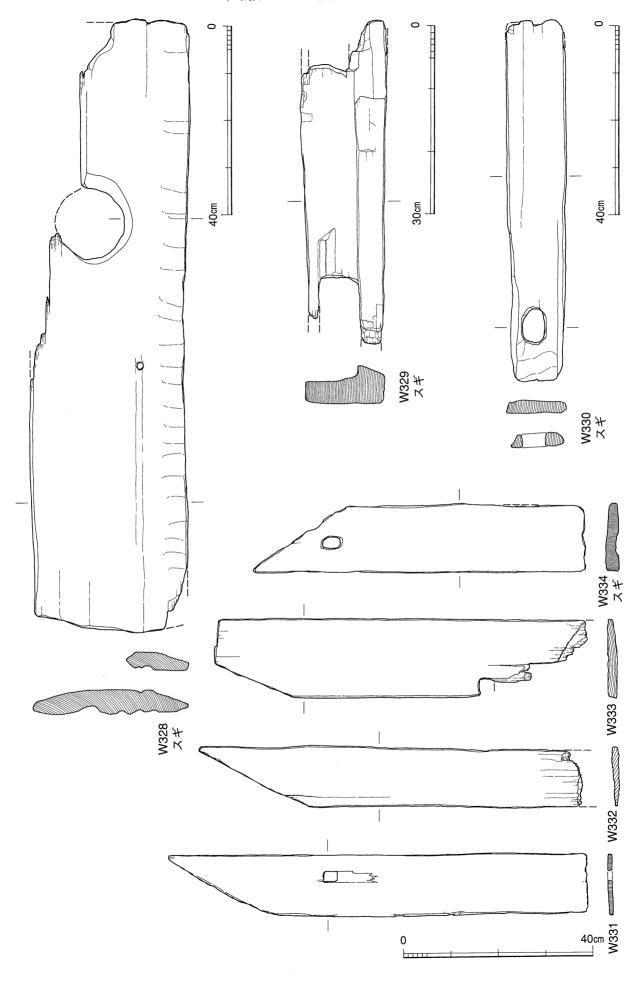
図版155 木製品(45) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



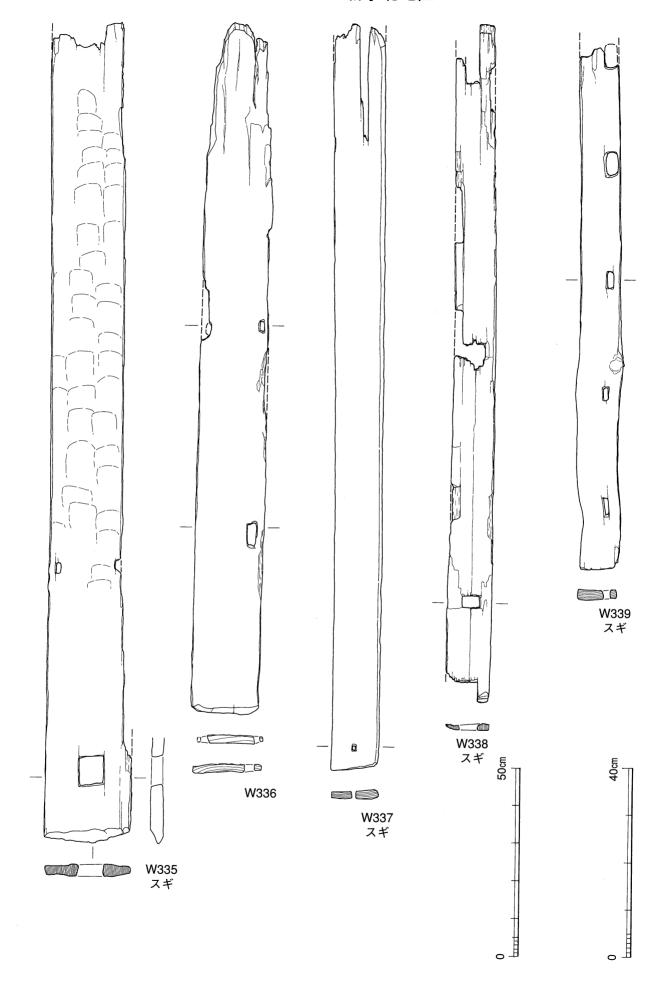
0 40cm



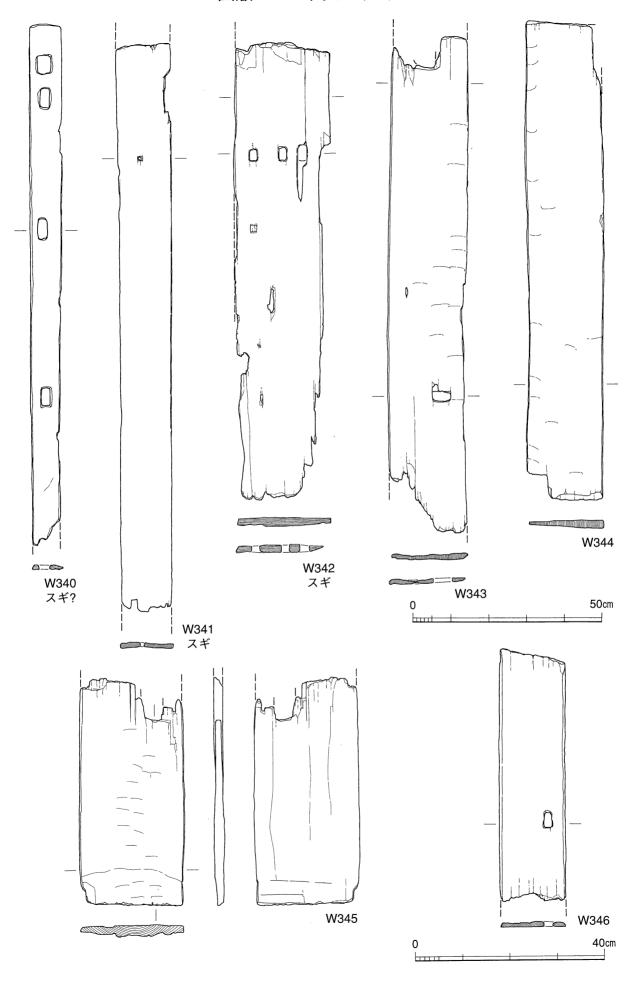
図版157 木製品(47) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



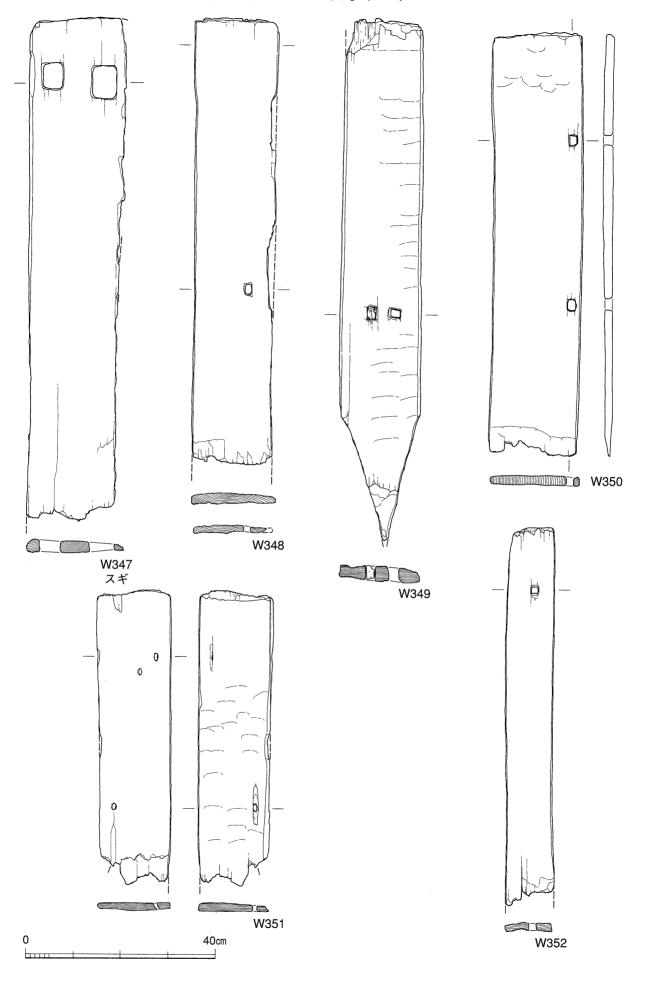
図版158 木製品(48) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



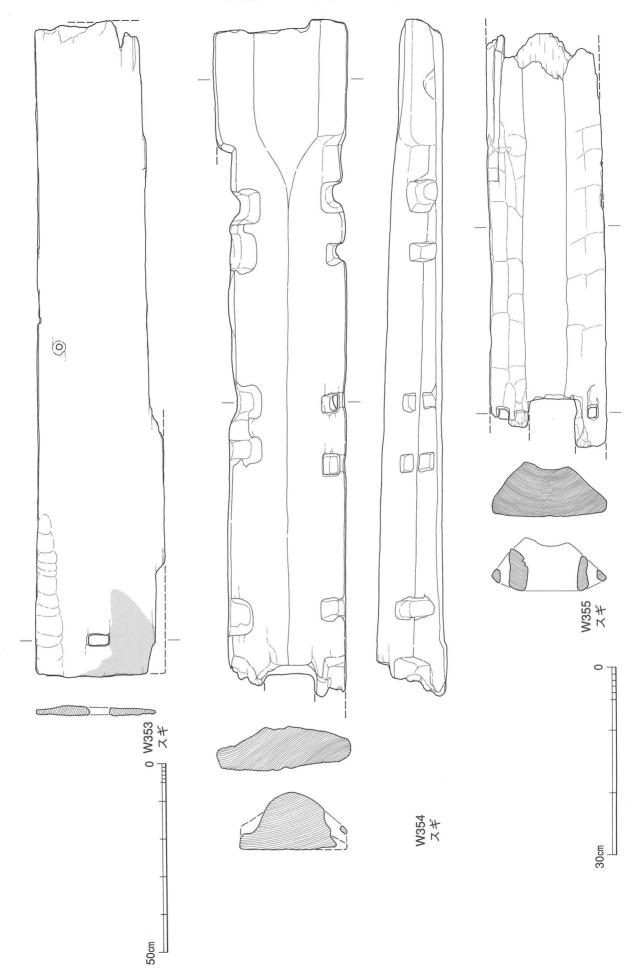
図版159 木製品(49) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



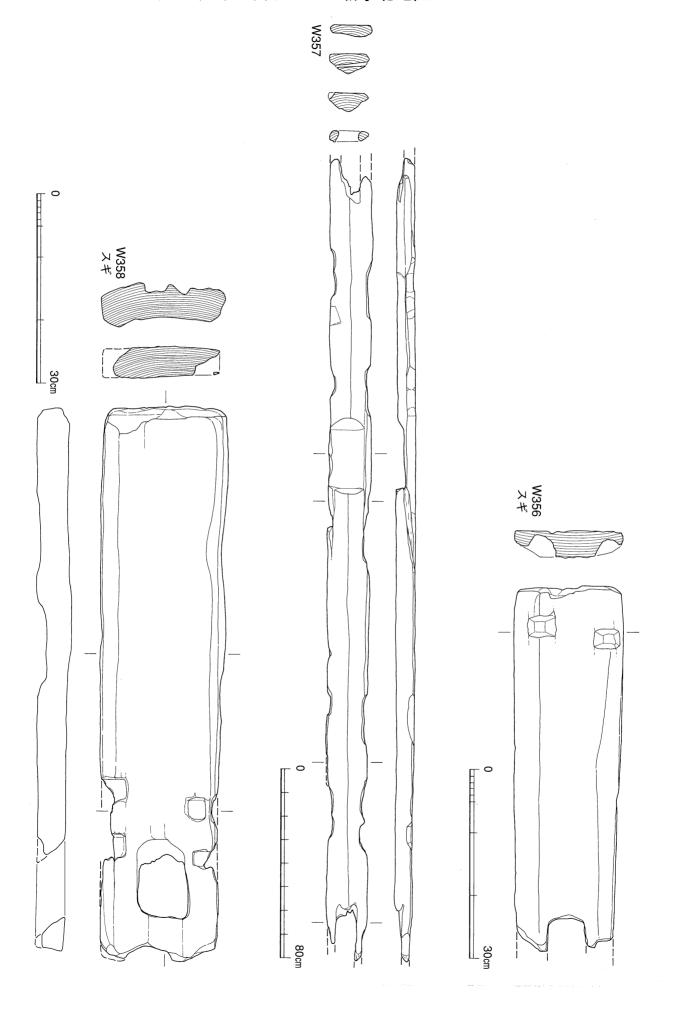
図版160 木製品(50) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



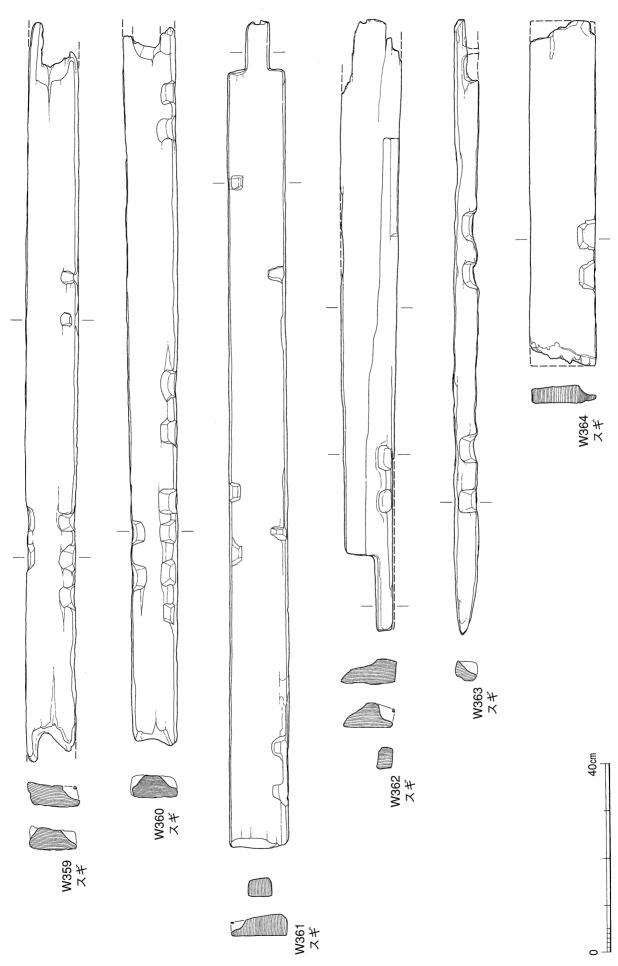
図版161 木製品(51) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



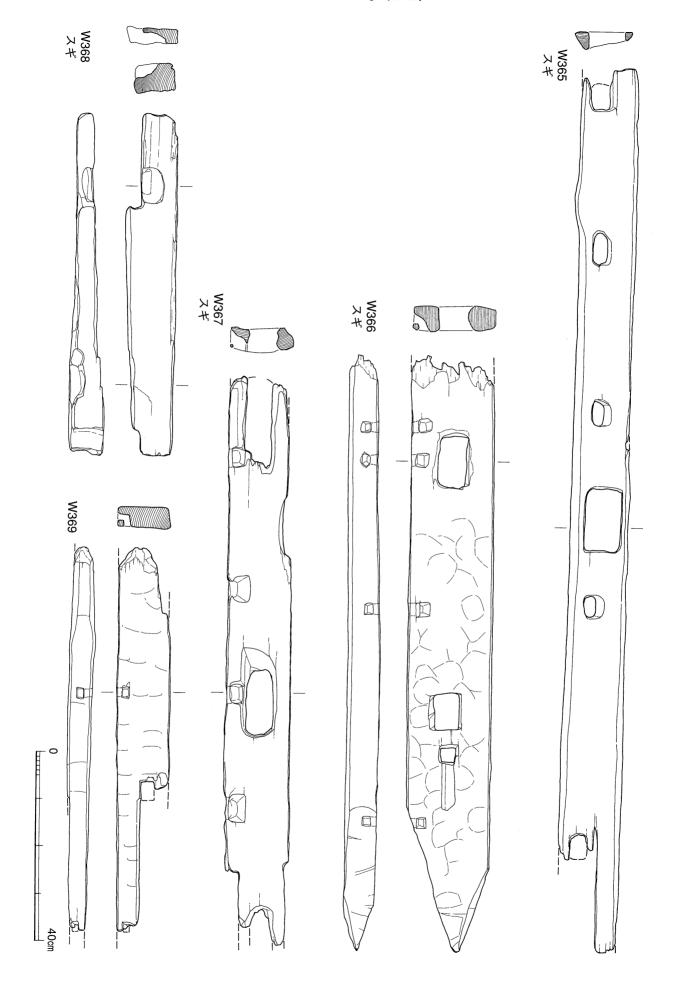
図版162 木製品(52) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



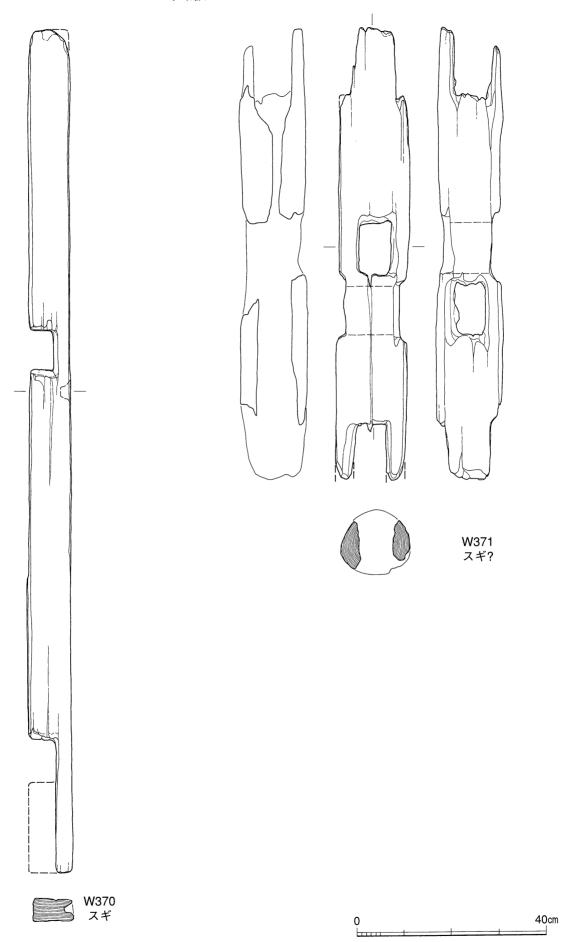
図版163 木製品(53) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



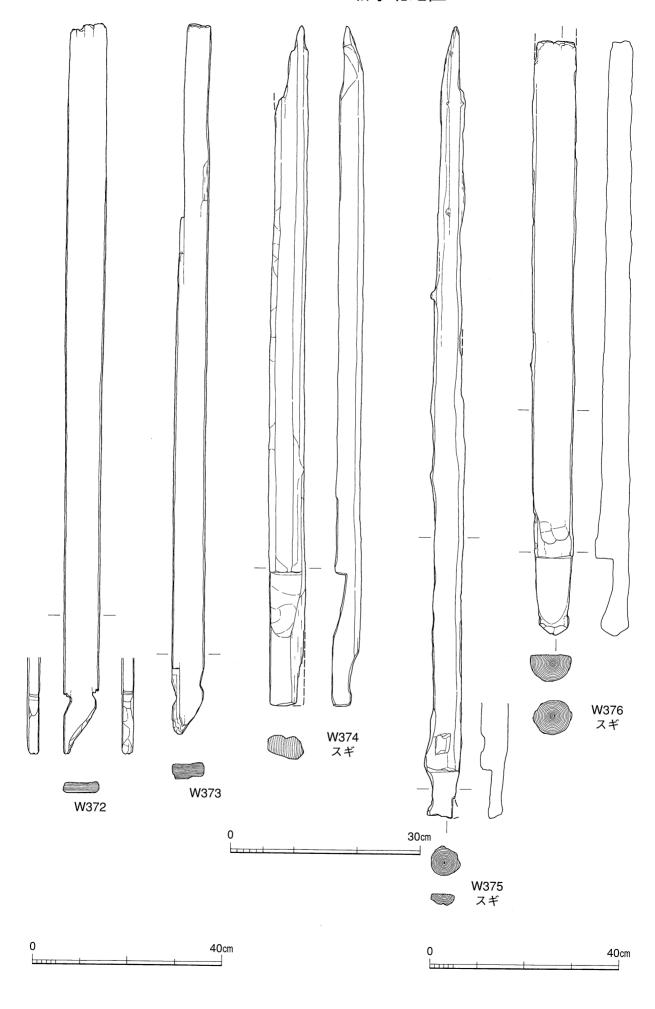
図版164 木製品(54) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



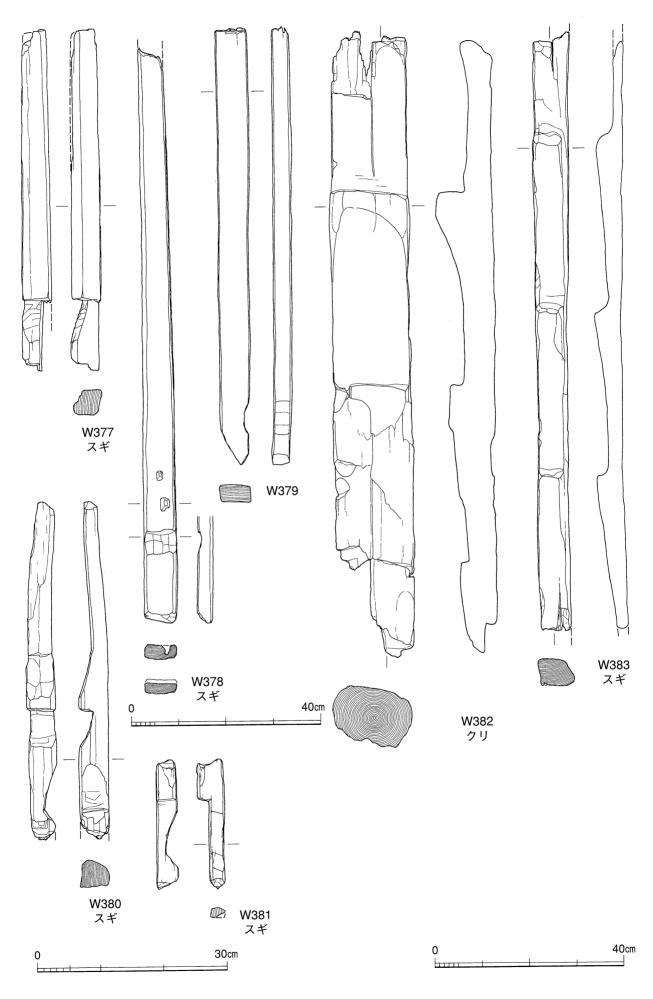
図版165 木製品(55) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



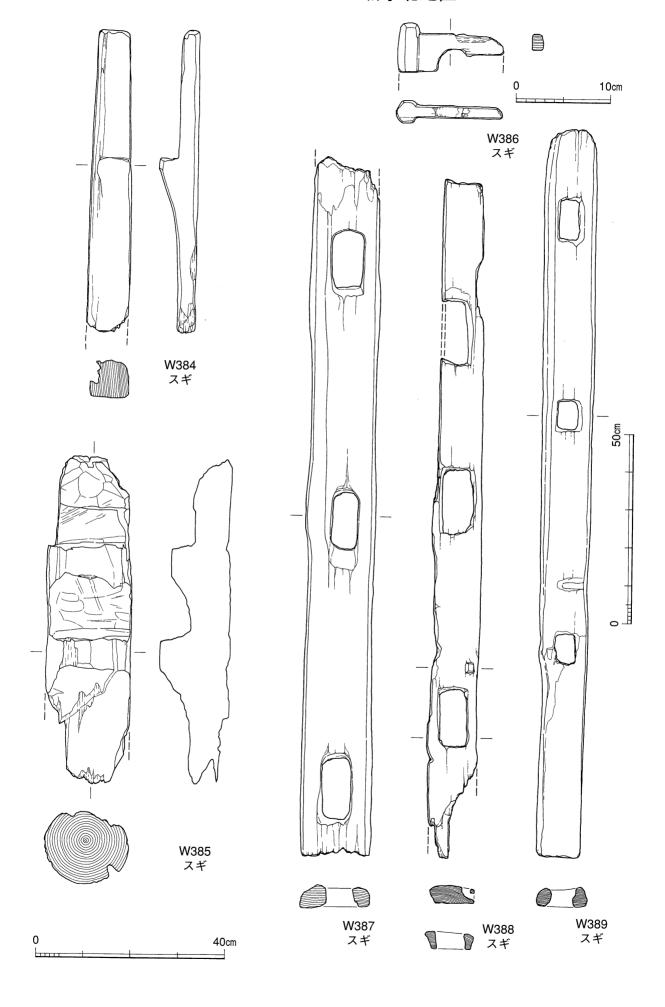
図版166 木製品(56) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



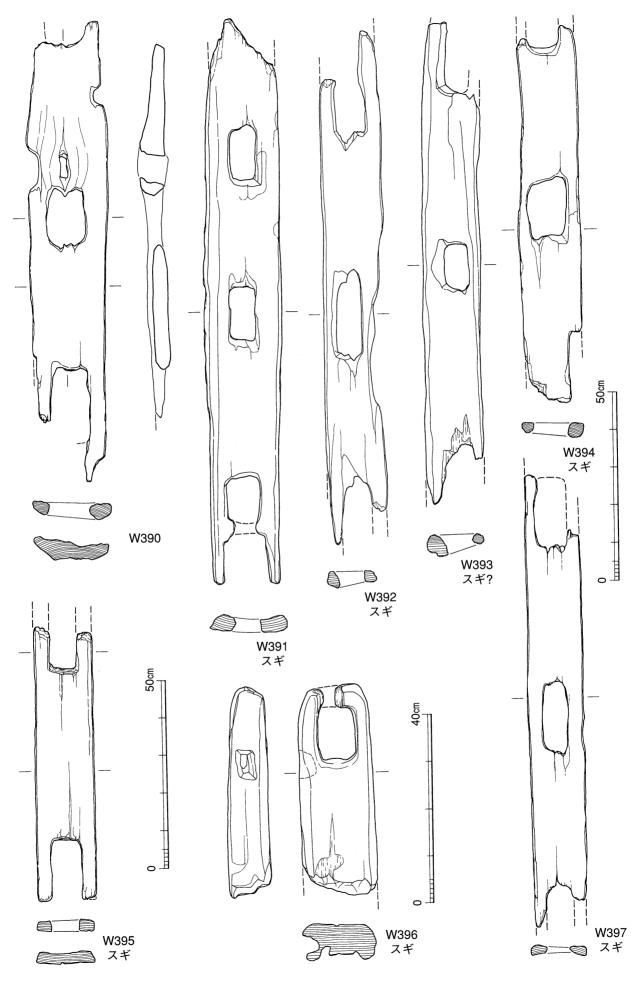
図版167 木製品(57) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



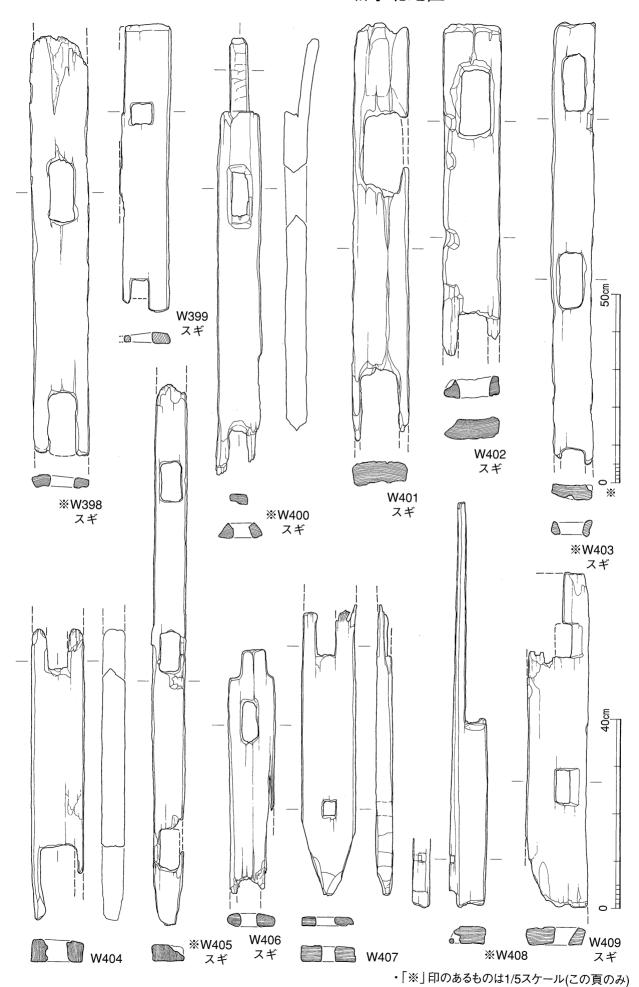
図版168 木製品(58) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



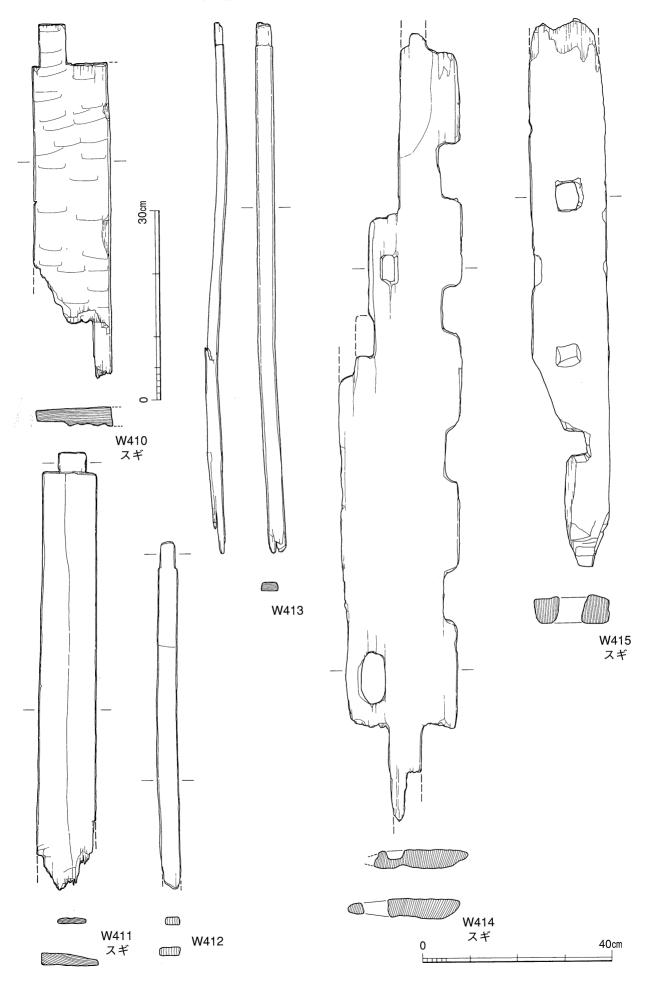
図版169 木製品(59) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



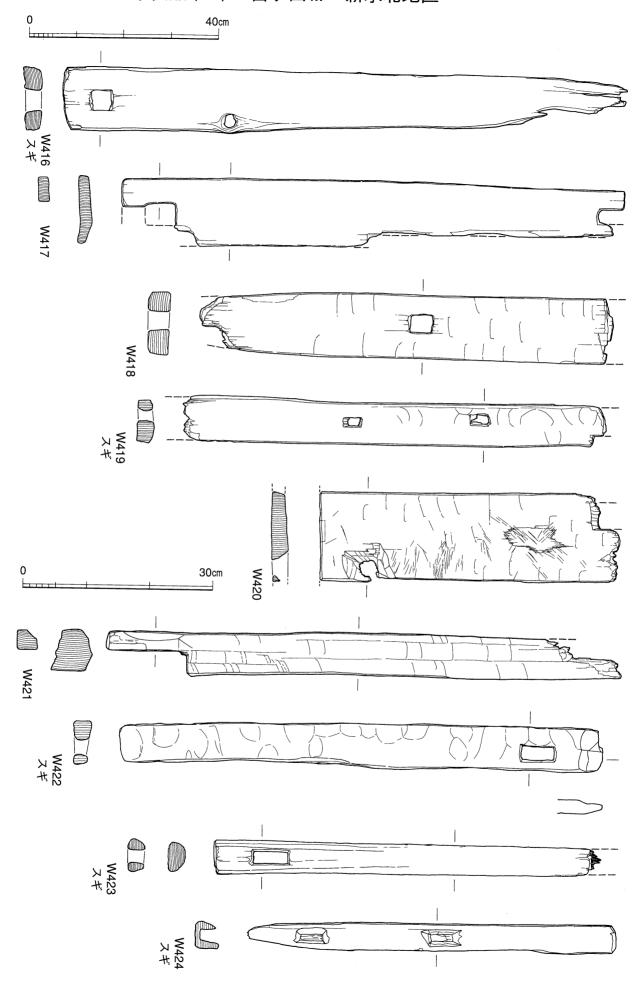
図版170 木製品(60) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



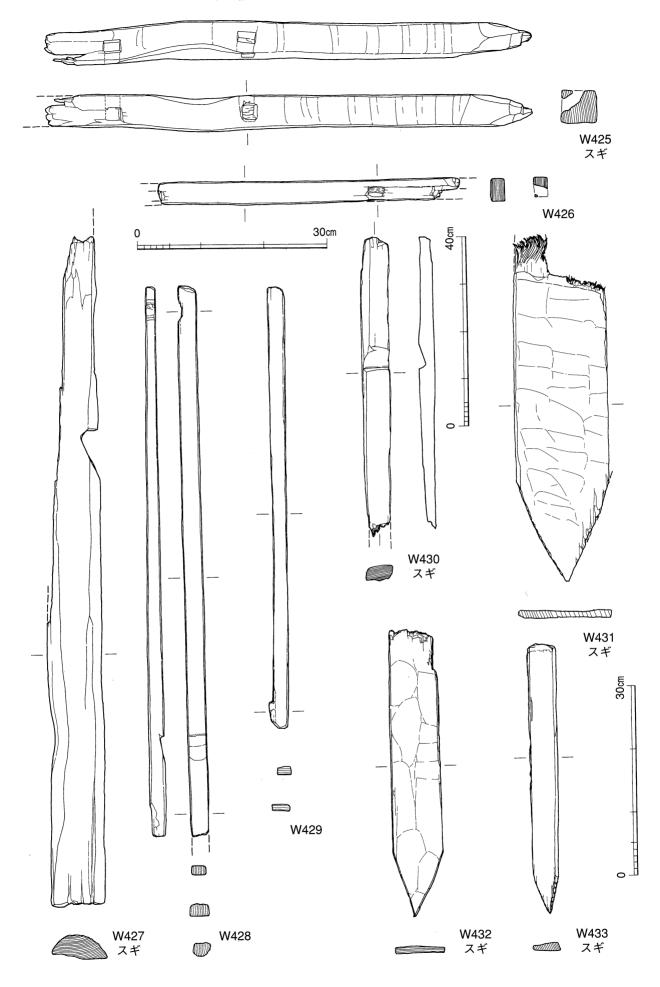
図版171 木製品(61) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



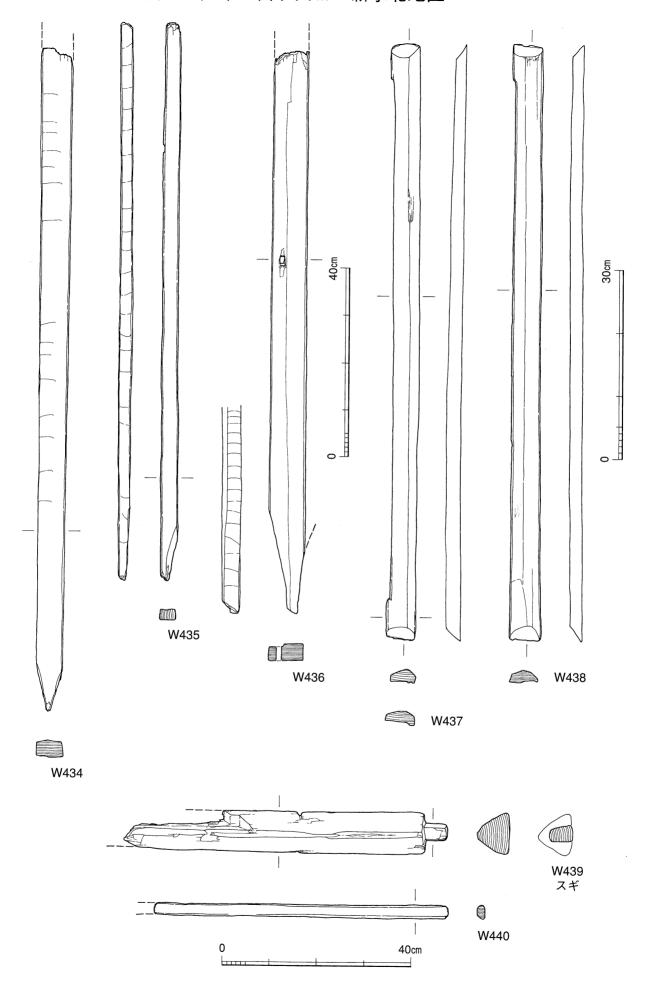
図版172 木製品(62) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



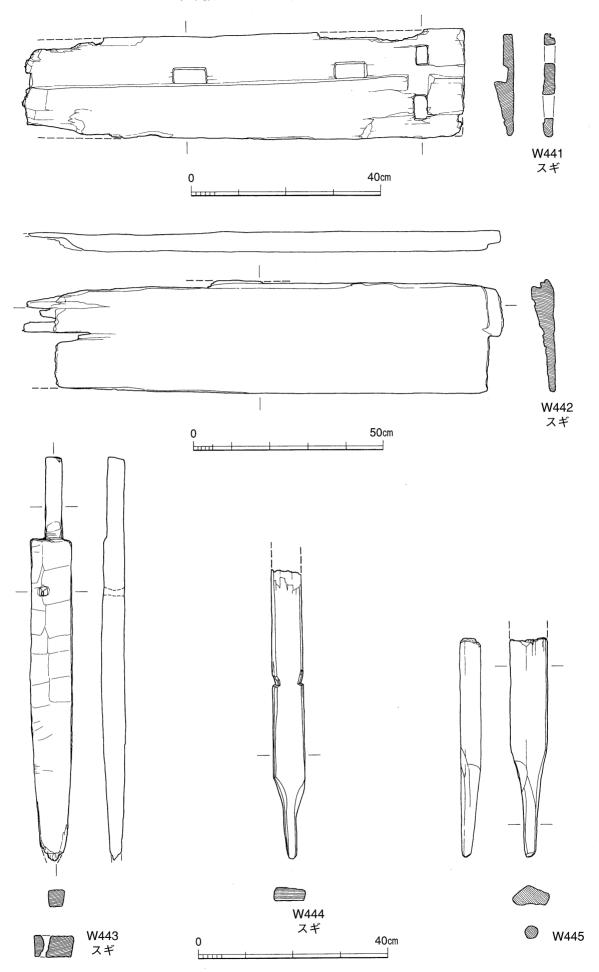
図版173 木製品(63) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



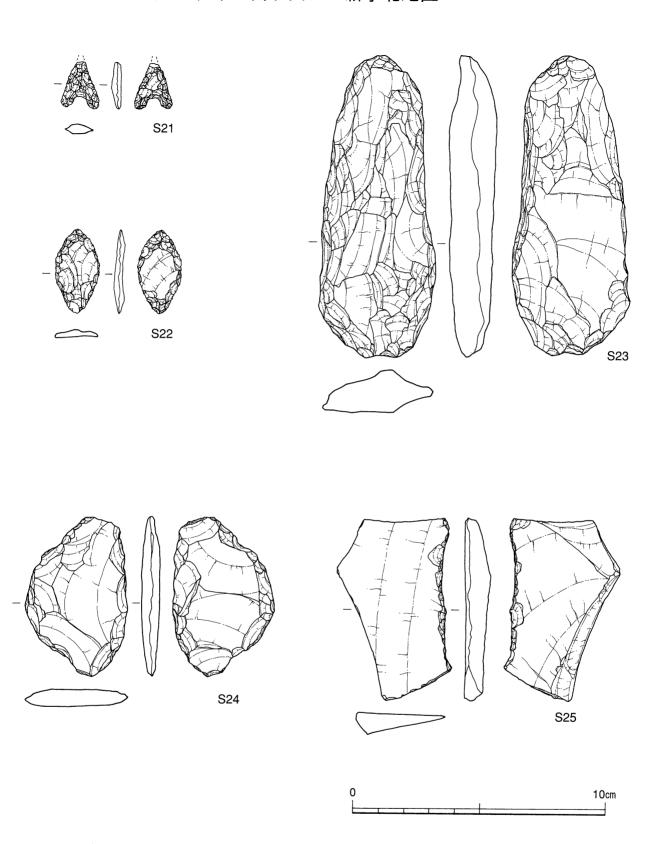
図版174 木製品(64) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



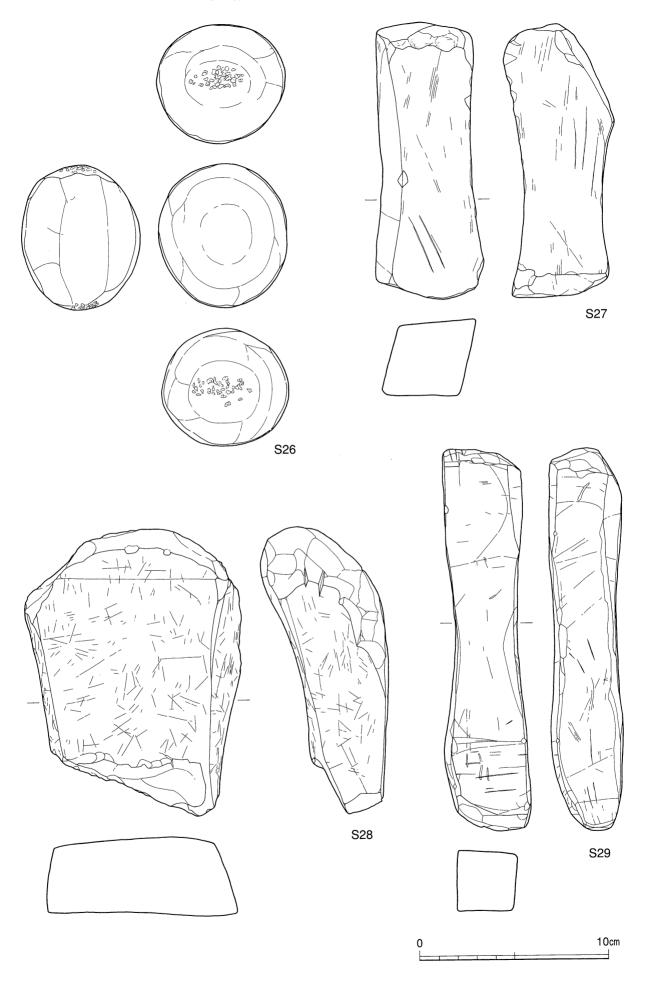
図版175 木製品(65) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



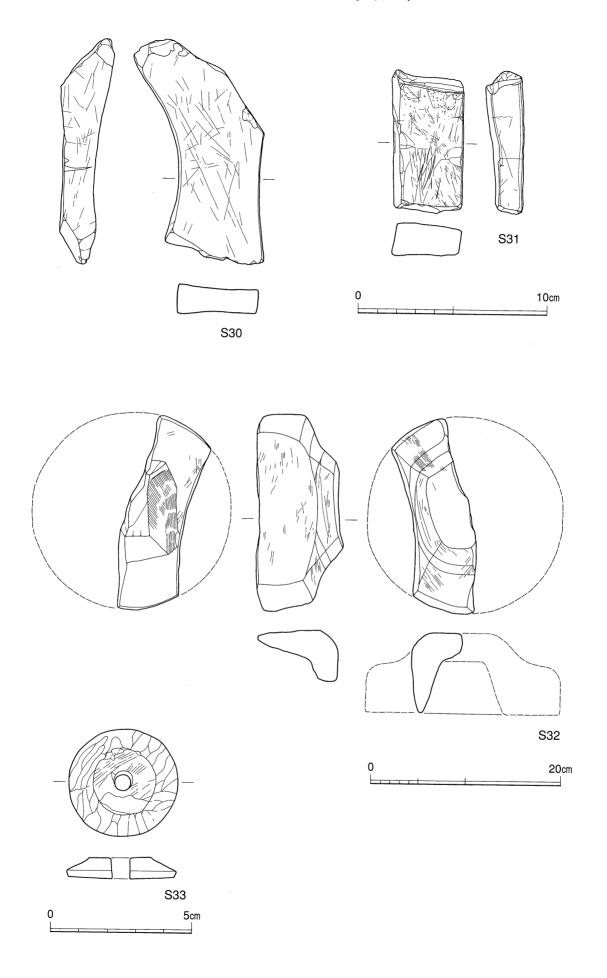
図版176 石製品(1) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



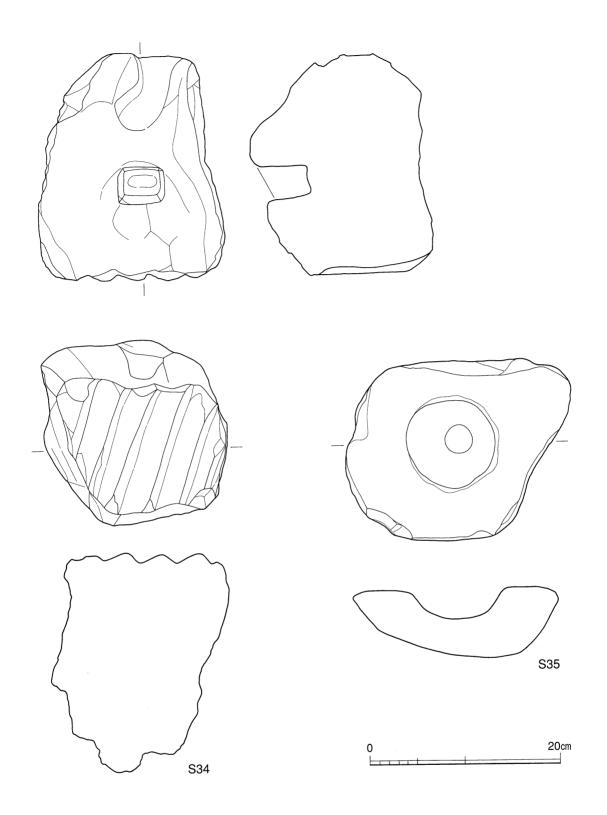
図版177 石製品(2) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



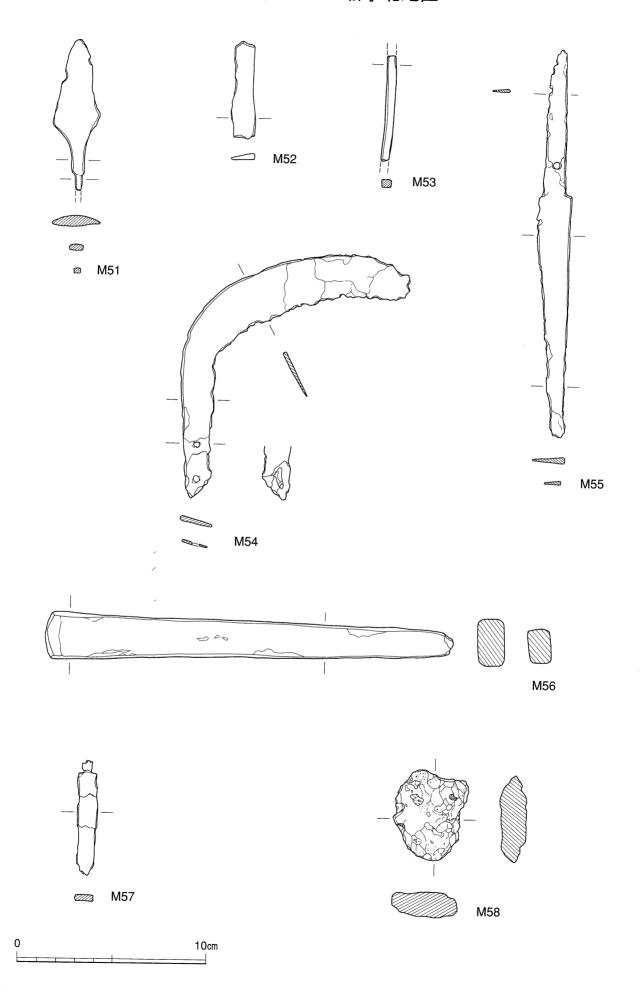
図版178 石製品(3) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



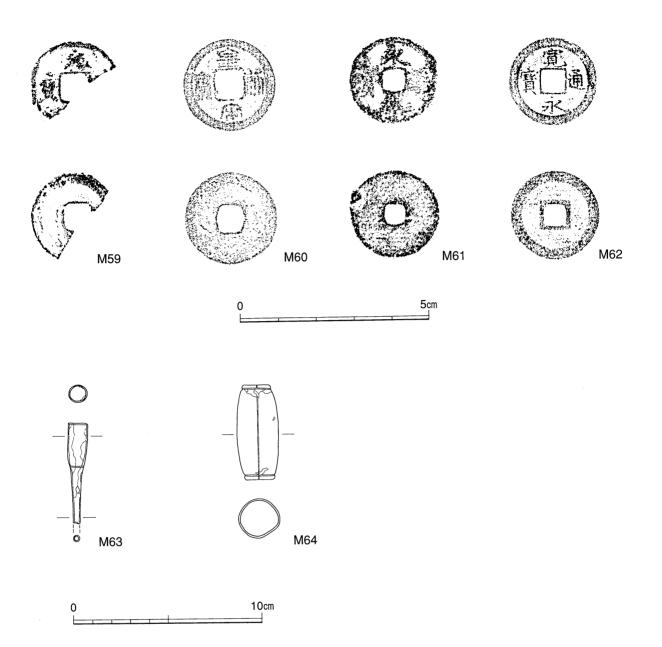
図版179 石製品(4) 宮ケ田Ⅲ地区



図版180 金属製品(1) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



図版181 金属製品(2) 宮ケ田Ⅲ・新水北地区



報告書抄録

	h	+);	+r	かつい	/카キⅡ							
131				かついせき Ⅱ								
書	書 名			加都遺跡Ⅱ								
	副書			一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ								
巻			次									
シ	/ リ ー ズ 名			兵庫県文化財調査報告								
シ	シリーズ番号			第324冊								
編	編 著 者 名			吉識雅仁 岸本一宏 西口圭介 甲斐昭光 池田征弘 仁尾一人 小川弦太 株式会社古環境研究所 パレオ・ラボ三村昌史 パリノ・サーヴェイ株式会社 青木哲哉								
編	集	機	関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所								
所	在		地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号								
発	行 年 月 日 西暦2007 (平成19) 年 3 月 9 日											
所収	所収遺跡名 (遺跡番号)		听在地		コード		北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因
(遺)					一町村	調査番号	コロル年	大师王				
(73 73 73 73	(730613・ 和日		山町	県朝来市 2 山町 、市御堂		980071 980085 980153 970236	34度 49分 34秒	134度 32分 58秒		98.6.10 999.2.25	222,38 m²	北近畿豊岡 自動車道 春日和田山 道路Ⅱ事業
月					別主な問		主な遺構			主な遺物		特記事項
	加都遺跡 散布: 富ヶ田 III 地区 新水北地区			地 縄文時		計代 なし		,		土器·石製品		
扂				散布地		弥生時代		流路		土器·石製品		
業				集落・水田		古墳時代		住居・ 柱建物・ 等		土器·土製品· 木製品·石製品·		
1	道			・水田	律令期		道路・水田			土器·木簡·木製品		官道(但馬道)
				集落・水田		平安~鎌倉時代		柱建物・ ・水田等	.	土器・木製品・ 石製品・金属製品		

兵庫県文化財調査報告 第324冊

朝来市

加 都 遺 跡 Ⅱ

〔本文・図版編〕

---般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ--

2007 (平成19) 年3月9日発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078(531)7011

発行兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

TEL 078(341)7711

印刷丸山印刷株式会社

〒676-8566 高砂市神爪1丁目11番33号

表紙裏:宮ケ田Ⅲ地区の道路遺構 (SFR001)